

闊歩するは天使

四ヶ谷波浪

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

誰もが天使だと認める姿の少年は本物の守護天使だった。清く、慈悲深く、人間のことをあいし、護る姿はまさしく理想の天使さま。その柔らかな物腰の少年の心は……ある人間の少女にべたぼれであった。

ラスボスをぶん殴る原作扱い。

※この勘違いモノは「偶然」で勘違いされる勘違いものではなく、「外見」と「内面」のギャップを勘違いの焦点と置いている話です。

ピクシブでも同じものを連載しています。あちらでは章ごとに投稿していますのでこちらが先行投稿です。

目次

天使編

1話 大胆不敵 1

2話 非理解 5

3話 喜劇 10

ウォル口編

4話 序 15

5話 崇拜 21

6話 急加速 29

7話 豪胆不敵 34

8話 急先鋒 39

9話 哀悼 44

10話 翼 50

11話 遺跡 57

12話 切迫感 61

13話 日進月歩 66

14話 懐古心 71

15話 決断 75

16話 始 80

閑話 幼気 85

セントシユタイン編

17話 再出発 90

18話 到着早速 95

19話 不嘔吐 100

20話 狂信 106

210	3 8話	擦違天使	210
205	3 7話	帰郷前	205
200	3 6話	帰還	200
195	3 5話	転	195
190	閑話	原点	190
185	3 4話	手遅病	185
180	3 3話	悲哀厄災	180
173	3 2話	天使違	173
168	3 1話	考察	168
163	3 0話	澱	163
158	2 9話	停止	158
154	閑話	呼込中	154
149	2 8話	貧血気味	149
144	2 7話	紫転機	144
141	2 6話	魔女	141
138	閑話	死	138
133	2 5話	対峙	133
129	2 4話	廃墟城	129
125	閑話	翼落天使	125
120	2 3話	黒騎士	120
116	2 2話	待機	116
111	2 1話	試	111

ルディアノ編

ベクセリア編

ドラマ編

39話 涙天使

40話 啓示

41話 白

42話 不願

43話 信仰心

44話 変貌

45話 叱

46話 鮮血

ツオ編

47話 墮落浜

48話 雛鳥親鳥

49話 浅知恵

50話 愚計

51話 奪

閑話 導業

閑話 子天使

閑話 天界日常

52話 魂父子

船着き場くカラコタ橋く石の町編

53話 船便

54話 霊

55話 誤解

56話 茶転機

57話 似非人間

58話 彫刻町

345 339 334 330 323 318 312 304 296 290 283 277 273 266 261 255 250 245 240 234 226 221 215

59話 脅威

60話 像

サンマロウ編

61話 不安

62話 偽友人

63話 山雨風楼

閑話 慕師弟

64話 訪問

65話 進

66話 相違

67話 宿霊魂

68話 順風満帆

閑話 祝福呪

閑話 休息

グビアナ編

69話 傷

閑話 汚濁

70話 聖騎士

71話 加虐趣味

閑話 幼天使

閑話 擦違

72話 騎

73話 捕獲

74話 無理解

75話 遠水近火

501 493 487 481 475 461 456 449 441 435 429 417 411 406 400 395 389 382 376 369 363 357 352

88話	87話	86話	85話	84話	83話	82話	81話	80話	カルバド編		79話	78話	77話	76話	閑話
作戦	鎮魂歌	疑惑確信	希望的	演技	奇	靴下	確率論	流星天使			過凶行	和解	恋	懇願	成天使
579	573	568	562	558	552	547	541	535			530	525	520	515	507

天使編

1話 大胆不敵

知る人ぞ知る、星空の守り人。そう謳われる存在はかつて……天使と呼ばれていた。姿は人には見え、影でこつそりと人々を助け、そして悲願を期して星空に帰っていった……それが天使。

しかし中にはその身を人間として現世に残り、今度は人間達と力を合わせて世界の安寧をもたらした天使……人物がいるという。噂にはイザヤールという名前がよく挙がるが。

イザヤール本人にもし問うことが出来ればそれは違うと言われることだろう。真の守り人とは……灰色の天使と呼ばれた存在だと。そして彼は今日も愛しき人を守り、世界を守り、人の身になつてもなお……自分と違って……最初から最期まで心を天使であり続ける。そういう存在なのだと言われてしまう。

そしてもしも貴方が幸運で、灰色の天使と出会うことが出来たら。貴方は間違いなく天使の存在を疑うことがなくなるだろう。灰色の天使の麗しき瞳にその身を映すことを恥じるかもしれない。

天使と紛う、ではなく本物の天使。黒い瞳には慈愛が、唇には愛が、その手には剣が。天使故に性別なんてわかりそうもないが、彼でもかつては人を愛したらしい。それでもなお今は平等に愛を与え、時折見せる悲愴すらも美しさのスパイスであり、彼の前ではかの墮天使すら我を忘れた、とまで言われている。

彼の手には女神の言葉を綴つたとされる古い時代の手記があり、敬虔なる下僕である彼はその言葉に従つて今日も剣を振るい、かつての師と秩序を守るのであった。

彼の名前はアーミアス。天使であると一度も公言したことのない、だが誰もが彼の正体を疑わなかったという……英雄であり、守り人である。

そして天使の身でありながらある人を愛した……そんな存在である。

……

「……」

仏頂面で空を飛ぶ、俺。我ながら背中に翼、頭に光輪がなかったら到底天使に見えないだろうと思ってる。髪の毛なんてホコリみたいな色だぜ、笑つちまう。いつそ師匠みたいにハゲにするのもテかもしれないが、それをやったら今度はこのブサイクが露見するのでやっつない。

なにしろ忙脳内リツカたんべろべろしてしくて睡眠不足だからな。隈もできれば目つきも最悪、唇もガサガサだぜ。この天使フェイスが台無し……って前から顔面蒼白って感じのブスマンだが。シショー！ 眉毛太い男前分けてくれ——っ！ ……天使だから性別なんて気にするなって言われそうだな。クソツタレ。

たしかにその通りだが。なにしろナニがあろうとナニができない生物として失格、遺伝子を残すという意味ではウイルスにも劣るのが天使だからな！ 人間大好きな俺は泣いた。俺も人間になりてえ！ 人間の中で人間と過ごしたい！ そしたらフラれるかもしれないがリツカたんは愛を叫べるし、何より存在を認めてもらえる！

人間になつたらあれだろ、天使としての嗜みとやらで清らかたれと微笑みを浮かべて手を広げる宗教から抜けられるんだろやっつてらんねえーッ！ 人助けは崇高なもんじゃねえよ、やりたくてやっつて感謝見返り求めんなっての！ ちなみに俺は星のオーラと友達だけど？ 人間好きだからな、気づいたら星のオーラが頭に刺さってんだぜ、それぐらいがプロだぜ。

あ——人間になつたら結婚しよ、天使の悲願って人間になることだから、少なくとも俺は！ 麗しのリツカたん……たぶん歳は百歳ぐらい下……みたいな可愛い天使っ子と結婚して子供三人の幼い頃の夢は、去年師匠が赤ん坊天使抱えてた時点で潰つぶえたからな。

おっ隠し子ですかっつて聞こうとしたら新たな天使が神より遣わされた、だど。木の下に置き去りつてまじかよ！

神様マジ適当だなおい！ 二人いたら双子とかほんと適当だな！ つまり師匠は俺の兄貴かよまじねえーわ！ ハゲが伝染るわ！

つうことは俺のブサイクは誰を恨めばいいんだチクショウ！ 同世代天使が皆顔逸らすレベル！ おんにやのこはみーんな俺と話したがないし野郎どもは色白ってだけで女扱い軟弱扱い。おいおいテメーのほうが天使らしい金髪蒼眼天パだろうがチクショ——
——ッ！ 性別不詳野郎め。あん？ 俺に言われたくない？ ハツ黙れ。モヤシは自覚してるからな！

あ——、憤りが止まらねえ。もうこのアーミアス様が全力でリツカたんペロリストになって星のオーラガンガン貢がせるしかねーわ。貢がせるけど俺が一生幸せに平穩にしてもらうしかねーわ。リツカたんまじ天使に敬虔、俺がそれでも馬鹿にはされないのは星のオーラ回収率の高さだろうな、頭が下がる！

おつと——？ リツカたんとジジイが魔物に襲われそうだけけしからん！ 俺がスライムときゆうりごとき滅してやらア、天罰食らえや！ リツカたんにタツチするとか絶対許さん！

「守護天使アーミアスよ、ひとりて挑もうとするなッ！」
「ですが師匠、村人が……ッ」

ええい邪魔するなハゲ！ リツカたんに何かあったら俺もう癒しがなくなつて死んじまう！ 青いおかつぱの天使ぞ？ 彼女こそ天使ぞ？ 天使界にはラフエツトさんみたいな母性の塊みたいないおっぱいな方はいらっしやるけど見た目同世代の健気系女子はいねえだろ師匠マジ見る目ねえな!!! へへ……母性のお零れとして頑張ったわねと抱きしめてもらった時のふにつは忘れない。

え、違う？ ふたりで倒せばいいって？ ヘッ、リツカたんを守るのは俺だけで十分！ ……じゃないですありがとうございます師匠。実はさつきも村人守つて魔物と戦つてたらきゆうりに脇腹刺されて割と血が止まらないっていう。天使なのに失血死とか笑えねえ——ッ！ リツカたん守つたら天使界で光あれエ！ してもらおつかな。あれ肩こりに効くんだよな。

いぎゆかん！

あつ今の俺の表情痛みをこらえて立ち向かうっていう男前じゃね？

スライムとヘチマをぶつ倒したらリツカたんから星のオーラを
ゲット。そんな気はなかったが棚ボタだよな、これ。あ——、綺麗だ。
リツカたんの清浄な心が伝わってきてもっと守らなきゃって思える
な。ふふん、俺はウォルロ村の住人はニートでも守る天使様だから
な、もつとキリキリ頑張るか！

……って師匠？ 俺ひつつかんでどこいくんですか師匠——ツ？
このハゲ触んなセクハラア——ツ！

光あれではなくハゲ師匠のホイミでがつつり治されて説教バリバ
リとかマジないわ……。俺そんな時間があったらウォルロでお婆
ちゃんのを荷物をそれとなく軽くしたいんだが！ あのお婆ちゃん子
供のとき可愛かったよな、リツカたんの次ぐらいに！

2話 非理解

ふふん、聞いてくれ。さつきもウォル口村に行つて人間たちの幸せな生活を少しばかり覗かせてもらいながらちよこちよこ手伝いしてたんだがな、とうとう俺は偉業を成し遂げたぜエ!

今までは出来るつてもだいたい生きてる人間に対しての地味な手伝いとか失せ物探しばっかりだったんだが、この度俺は一人成仏させました——ッ! フウ! 天使らしくね? いくら万年顔面蒼白ホコリ野郎でも天使じゃね? 純白の翼と儂げな雰囲気は……つてやかましいわ! 儂げじゃなくてこれは天使共と話すのがだるいから話しかけんなオラなオーラだ!

あいつら天使らしすぎな。もう少し欲望に生きてもいいと思うんだが。あ、でもこれ禁句だから言ったら天使界的に殺されっぞ? 二度と人間界に行けない可能性が高いぜ。何故かってまあ……俺いろいろやらかしてるからなあ。そのひとつ、俺の黒歴史を説明しよう!

俺の年齢なんてもう数えてないから分かりやしないんだが、あれは確か……初めて人間になりたいと思つた時だな。だから年齢一桁か二桁の天使生初っ端だな。

あの時……俺は初めてイザヤール師匠と出会つたんだ。俺は感動したね、天使もムキムキになれるつて初めて知つたしな。なによりハゲでも天使なんだなつていうのも感動モノだ。天使に姿の決まりはない、くすんだ色の俺でも天使でいいんだつて。しかも上級天使で弟子を取らないことで名高い癖に俺を一目見て弟子にすると決めただと。だがそんなことよりも感動したのは……。

『ここがウォル口村。私の守護する村だ。アーミアス、お前はこの者達のひ孫ぐらいを見守ることになる』

初めて見た人間たちだったね。ああ感動したね、天使界に目をキラキラさせている存在がない訳じゃないが、生き生きと心の純朴さを彼らは魅せてくれたからな。それから俺は天使と人間の違いを天使界で師匠を質問攻めにして知つたんだぜ? 勤勉だろ? 熱心だろ

？今は俺の方が詳しいかもな。なにしろ俺は天使界一の人間好きだからな！

師匠曰く、天使と人間の外見的な違いは翼と光輪があるかないか。心は生の営みを大切にするか、女神の〴〵意思を尊重するかの違いで何よりも違うのは寿命だと。人間に姿が見えないのは光輪による力かもしれないとか偉そうに言ってたが。

でもってそのジャマな光輪をブチ壊したくても手がスカスカ通り過ぎるから触れもしねえ。なら翼はどうだ？　って思ってた。ああ、若気の至りだよ。今では俺も馬鹿なことを考えたもんだよなって思うんだが。翼がなきや愛しの人間達に会うことも出来ないのに、俺はあの夜……師匠の部屋からナイフかなにかを拝借して思いつきり左翼をちぎろうとしたんだよな。

めちやくちや痛かったが、人間になれるんなら今でも安いと思うぜ？　だが血はぼたぼた垂れるわ、目の前は霞んでくるわで最悪だったな。なかなか根本からぶち切ることが出来ねえって足りない頭で理解した俺は今度はむしろうとした。そんでちよつとブチブチしたぐらいで貧血でぶつ倒れ、気づいたら師匠のおっそろしいハゲが目の前でピカピカしてたってわけだ。

『見習い天使アーミアス！　お前は一体何をしようとしたのかね？』
穏やかなんて言い難い師匠の低い声がすつげー怖かったのは覚えてる。近くに他の上級天使も控えてて暇なんだろうって思ったな、確か。だが人間になりたいとか言ってみろ、閉鎖的な天使界で監禁か軟禁されて二度と人間に会えなくなったらどうする。俺ならリツカたん不足で枯死だな。

ってことを当時リツカたんのひいひいひい婆さんじゃねえかって思ってる故ナツミたんにあわーい恋心を抱いていた俺は瞬時に考えた。天才じゃねえーかと思うんだが、師匠のでっかくてわさわさした翼が綺麗だったから自分のはどうなってるのか見てみたかったとかまた生えてくるものだと思ったりとか言ってた難を逃れたって訳だ。

ま、信じてもらえなかったがお咎めはナシって訳。チョロすぎ。天使使ってそういうところ天使だから騙されるんじゃね、簡単によ。

そのせいで左翼は未だにボロボロ。飛べるからいいんだがな。背中にもナイフの跡が残ってるが厨二病の名残だと思ってる。やるなら人間界で空の彼方から大岩に背中をぶつけてすり潰しとくんだったな。それじゃあ光輪が消えないからやらないが。飛べなくて見えないとか最悪じゃねえか。

光輪が消えるならなんだっていいよな。ほんと、握りつぶせるものなら潰してえ。潰して翼をもいだら旅人のふりしてリツカさんの宿屋に泊まりてえ。俺、今日もリツカさんに迫る仕事しないニードとかいうニートに天罰食らわせながらリツカたんをずっと見てるのに、リツカたんは俺に気づかないんだぜ。辛すぎ。

俺もニートみたいなのにリツカさんに名前呼ばれてえな！ でもな、守護天使でよかったぜ。リツカたんは俺の名前だけは知ってるんだからな。

ほら、リツカたんが手を組みながら「守護天使アーミアス様」って言うだろ？ 俺大興奮。リツカさんの唇と閉じられた目元ガン見しながら顔がにやけてるの抑えられねえんだが、仕方ないだろ？

さーて。このリツカさんの家の三軒隣の主人のひいじいさんからもらった星のオーラとリツカさんからの三つ、その他十ぐらいを捧げるとするか。あつ師匠チワーツス。今日も見習い天使のちつせえ翼じゃ帰れない天使界に風の補助してください！ あざっす！

「……ウォル口村の守護天使アーミアス」

「はい？」

「……ふむ、長いな。これからもアーミアスと呼ばせてもらおうとしよう」

「はい、師匠」

なんかこのハゲ別のこと言いたかったんじゃね？ なんで口籠もって別の事言ったんだ？ ってか師匠真面目だよな、ホント。そろそろ帰ること以外はひとりで出来るのにまーだ見守ってる。やっぱり守護天使だったから見守るのが癖になってんじゃね？ これが職業病かよ、クウ——ツ、師匠のくせにかっこいいじゃねえか！

……

「リツカ……」

風に揺れる髪をそのままに、今日も我が弟子アーミアスは精力的に守護天使の役割を果たしていた。なんと誰の力を借りずに成仏までさせてしまうとは、本格的な独り立ちや見習いでなくなる日も近いことだろう。

この、人間に恋慕を抱いていることさえなければ。

リツカというのは宿屋の娘、真面目かつ敬虔な良い娘だ。今日もそれは変わらない。だから普通の村人よりも私情を挟み、気になるぐらいはまだ許容できた。もちろんアーミアスが抱いていながら自覚していない感情はその程度ではないらしく、今日も村人を一通り見やつてから彼女の仕事場の近くでそわそわと落ち着きがない。

アーミアスは百二十七年前、自分の翼を切り落とそうとしたことで天使界では有名だ。今なおその傷跡は深く、ボロボロの翼は人目を引く。だがあの再来がないことからまあ大丈夫だろうとオムイ長老からの言葉を受け、見逃しているのだが。

普段表情を変えようもしないアーミアスはリツカの前だけでは笑う。どんな天使よりも天使らしい相貌に相まって絵画のような空間となっている。キューピットとしての役割を奇しくも果たすことならまだあるのが天使。だが本人がそうなるとは……そこまで考えて思い出されるのは我が師匠のことだろう。

アーミアスは聡明だ。天使として人間を見守り、助ける姿に打算はない。どうやったらそんなに星のオーラを集められるのかと訪ねた子供の天使に対しても、やりたいことをやっているだけだと答えていることから良く分かる。

だから、彼が天使として間違った道を歩まないように私も見守るだけだ。

……ほぼ毎回天使を馬鹿にする若者の頭を一発殴っていくことぐらしいしか見習いらしいところがないのは困ったものだが。

「リツカ、また会いましょう」

リツカが祖父に笑いかけた笑顔に向かってアーミアスは言う。勿

論私たちの姿を認識できない彼女は何事も無かったように生きていく。アーミアスはそれを全く気にせずには笑いかけ、彼女からの星のオーラをぎゅつと握るのを私だけは知っていた。

「師匠、帰りましょう」

「ああ」

翼をはためかせるアーミアスを見るのはそれで最後になるとは私は思いもしなかったのだ。そして翼も光輪も失って一人人間界に投げ出されたアーミアスのことをほかの天使は気の毒がった。だが、私は、私と長老とラフェットは……アーミアスが夢を叶えたことを、知っていたから……。

知っていたからこそ、天使でいるよりもさらに天使らしく人々の安寧を守る姿に安心して、私は一度死んだのだらうな。

3話 喜劇

……

ああ戻られた。今天使界に降り立った二人の天使は長老に次ぐ有名な人物であられる。一際目立つ大きな翼を持つのが上級天使イザヤール様。その実力は素晴らしいと姿しか見たことがない私でも、ひしひしと伝わってくる天使の力によつてはつきりとわかるのです。長老オムイ様以外はイザヤール様に理を使うことすらできないようなお方ですから。

もう一人はその弟子、ウォル口村の守護天使アーミアス様です。まだ私と同じく見習いの身ですが、実力は確かです。星のオーラを数百と集め、その美しい顔には天使から見ても天使らしく、神々しいとしか言えません。長い睫毛の一本一本を神がその手で吟味されお創りになられたに違いないのです。

時折憂いに満ちた表情をされますが、それはもう絵画よりも美しい世界ですよ、お見せしたいぐらいです。笑うことすらありませんが人間を見守っている時には微笑まれるとか。正しく天使、天使となるべく天より遣わされた存在と評判です。

今日も彼女、いえ彼でしたっけ……天使らしさは性別不詳という状況ですが、体の周りに星のオーラを纏わせ、翼を小さく折りたたんで歩かれる姿は見習い天使の希望の星ですね。アーミアス様のようになりたいと願う天使は多いのです。早く師匠の守護する場所の守護天使になりたい者が多い見習い天使ですが、見事信頼を勝ち取り、実力をつけたのは、最近ではアーミアス様しかいらっしゃいません。

それからこれは皆様思っていることですが、あの雪のような白い肌も桜色の唇も黒曜石のような瞳もすべて完成されきっているのにその左の翼だけは大きな傷跡が目立ち、ボロボロになっている……しかもそれをしたのがアーミアス様自身である、という噂がアーミアス様の神秘性を際立たせているのです。その傷は背中にも及んでいるとか。

その事件は私が生まれる前のことでしたから、噂でしか知らないの

です。諸説ありまして、勿論、私のような存在や噂好きの見習い天使ごとき、とてもとてもご本人に聞くことなんかできませんからどれが本当かわかりません。

けれど、噂はいっぱいありますよ。私の生まれた三日後に天より遣わされたミツチエルなんてアーミアス様が自分の翼がなくても飛べると確信なさったからだと強く主張していますし、私は実は彼の翼は彼によって痛めつけられたのではなく悪しき存在との戦いか誰かを守るために傷ついたものだと思っています。アーミアス様なら新たな翼が生えてくるだろうと言った姉妹弟子ルリの言葉には賛成しませぬ。

だいたいそういう意見と翼を捨てるという決断によって人間たちをもつと守ろうという決意の表れだったという話が多いですね。いずれにせよ、私たちには伺い知れないような深い理由があつたのでは、と。

だから、分からないなりにあの翼はまるで勲章のように見習い天使には思われています。もつともアーミアス様自身は翼自体を疎まれているとこのことで飛ぶ時以外は折りたたんでいらつしやいますが。

おそらく、天使は空を飛びますから天使界でなければ歩きもしません。そのことが人間を誰よりも慈しんでいらつしやるアーミアス様には人間の気持ちになつて親身ではないとお考えなのでしょう。例えばいくらその身を呈して人間たちを守っても存在すら信じられない時があるとしても。なんと素晴らしい方なのか。

ああ、アーミアス様が私の前を通り過ぎました。しかもふわりと羽根が一枚抜けて目の前に落ちました。天使の羽根が一枚抜けるなんて髪の毛が抜けるぐらい普通のことです。でも私たち見習い天使にとつては、上級天使様やアーミアス様の羽根に価値があるのです。

ふふ、私のものですよ、これ。ああやっぱり……今年三枚目のこの羽根もふわふわしてて私のものとは全然違います。アーミアス様の御髪はさらさらとしていらつしやいますが、羽根はふわふわなんですよ。この羽根に肖つて私も早く守護天使になりたいのでアーミアス様の羽根は大事にお守りにさせていただくことにしましょう。

あつ……イザヤール様の羽根も一枚落ちましたね。私はなんて幸運なんでしょう。これで羽飾りを作ってルリに自慢してやりましょう。

勿論、こういった事は公然のことですよ。髪の毛でこれをやったらちよつと気持ち悪いと思いますが……オムイ様の髪の毛でやったら特にお叱りを受けそうですが……羽飾りを作りたくて誰かの抜けた羽根を集めるなんて見習い天使はみんなやっています。自分の翼から羽根を塗り取るのが一番早いのは分かっていますが、痛いですね。それなら不要なもので有効活用したほうがいいだろうとの事で。

この前なんか女の上級天使様の羽根を拾っていたら首飾りにしていたアーミア様の羽飾りを褒められたんですよ。師匠以外の上級天使様とお話するのはとても緊張しましたが、そんなものなのです。

ああ、今日もアーミア様は女神像の如く……いえ、目の前で呼吸していらっしやるんですから石像より遥かに美しかった。私ももっと修行して人間界で善行を重ねればあんなふうになれるんじゃないでしょうか。

おふたりが去り、私は少し外の空気が吸いたくて外に出ました。間違っても師匠や翼の大きい上級天使様なしに人間界にこんななんて思いませんが、踏み外したら大変なことになりますね。強風が吹いたら注意することにしませう……。

キヤツ

そう思った瞬間、強く一陣の風が駆け抜けました。何が起こったのか分からず、近くの天使の力を借りて立ち上がり、さらに空の高みを見つめると……あれは、金の光の筋。

……ああ、もしかして、天使の悲願が叶うのですか？　なんて、神々しい。

アーミア様の星のオーラが奇跡を生む……ああなんてことでしょう。当たり前前のことですが、やはり選ばれし方だったのでしょうね。この羽根は神のところに行くんですからますますなくしちやいけません。大事に懐に入れておきましょう。不思議な音とともに金の光が天使界に近づき……そして。

衝撃。

突如紫の邪悪な光に天使界は貫かれ、私は、なんとか落ちずには済んだものの……ええ、忘れられないものを見ることになりました。

ええ、件の、アーミアス様です。

強風に巻き上げられたらしく、外に出ていた何人かの天使がなす術もなく落ちていくのを、外で必死に男の天使と岩に捕まっていた私は目撃することになるのですが……その中に、アーミアス様がいらっしやっただのを、私は見てしまったのです。

キラキラと天使の力を放出しながら輝き、しかし流石のアーミアス様でも邪悪な光の中では本来の力を発揮する事はできなかつたのでしよう。彼も落ちていきました。ですが、彼の表情は、いつでも動かない岩のように、不変の事実のように変わらなかつた表情は……微笑んでいたのです。

あの瞬間の時、アーミアス様の隣にいらっしやっただけで憔悴しきったイザヤール様が、後でこう仰られていました。

アーミアス様は人間を愛していたと。翼も光輪も彼には不要なものであつたのだと。だから、アーミアス様は助けようとしたイザヤール様の手を取ることもなく……落ちていったのかもしれないと。

ハツと思つてアーミアス様の抜け落ちた羽根を取り出してみればそれは彼の御髪と同じように灰色になつて……それをイザヤール様にお見せしますと、少し目を見開かれ、少しだけ希望を取り戻したように……アーミアス様は生きていると仰られました。

そして、その羽根の色を見るに恐らくは天使の力の大半を失つていると。

アーミアス様。どうかご無事で、アーミアス様。アーミアス様に翼がなくとも、光輪がなくとも、貴方は一番天使なのです。私たち見習い天使よりも、もしかしたら上級天使様よりも、天使として遣わされた天使なのです。

お慕い申し上げておりました。一度もお話することすら叶いませんでした。ですが、私は祈っております。アーミアス様のご無事と、貴方の幸せを。

ああ、あの日の微笑みを、アーミアス様は今も浮かべていらっしやるのでしょいか。

……

……

……

・

ウォル口編

4話 序

あの大地震の直後のこと。ウォル口の滝壺に「誰か」が落ちてきたのを私は目撃した。盛大な水しぶきのあと、荒れ狂った水が落ち着いてくる時、岸になんとか流れ着いてぐったりとした人影が私には見えただ。それを見て近づくな、なんて誰かが言う。関係ない、あの人、怪我してるみたいじゃない！

止めるニードを振り切り近寄れば、その顔は髪の毛に隠れて見えなかったけれど、かすかに肩が上下しているのを見て生きてるって確信した。

なんとかその腕をつかみ、水から引き上げて、その華奢な人の顔を、確認する……と。

「……天使様……？」

痛みで苦悶に満ちた表情。ずたずたに裂けた肌。それでもその人……ううん、その天使様の美しさは少しも損なわれていなくて。その呼吸が早く浅いと気づいた時にはもう、周りの人達は天使様に釘付けだった。誰も動けないくらい魅了されていた、みたいで。

「なにみんな突っ立ってるの！ 天使様、怪我してるんだよ！ 誰か手伝ってッ！」

・
・
・

あの大地震ではこの村も結構酷い被害を受けたんだよ。あちこちいろんなものが落ちてきて瓦礫が崩れ落ちたり、セントシユタウン城へ向かう道は瓦礫によって塞がれてしまったり。村の入口のアーチだって傾いていたらしいし。雷の音もすごかった。

でも私たちの村で起こった一番大きい事はそんな、なんとかなる事じゃないと思う。あの日、地震と同時に滝壺に落ちてきた、灰色の髪

の天使様。神父様によると見た目以上に酷い怪我を負っていて、背中
は傷がないところを探す方が難しかったし、全身くまなく傷だらけだ
し、手足も、骨が折れていないのが不思議だったほどのダメージだっ
たらしい。

何よりも私たちは、滝壺で倒れていた彼……だよね……を見た時、
本当に、本当にびっくりしたんだ。私たち、天使様だつてすぐ分かっ
たから。その顔は想像よりもさらに整っていて、性別なんて見ただけ
じゃ分からなくて……怪我を確かめる時に男の人だつてわかった
……肌は白くて、消えてしまいそうなくらい儂い。

天使様だと知らせるみたいキラキラと、彼の周りには光の粒子が
集まっていたけどそれはすぐに消えてしまったっけ。神父様は怪我
が酷いからだろうって仰つていたけれど。

ああ、彼はどんな方なんだろう。私は彼を家で介抱することにした
んだけど、村人がみんな彼を見ようと押し寄せるのを止めるのに大
変。あのニードですらあの時、彼を見て押し黙ってたぐらいなもの。
それから一度も守護天使アーミア様の存在を馬鹿にしたりなんて
しなくなった。

彼はあれから一週間も目覚めていないのだけど、いつも天使様が
いらっしやって頭を撫でてくれるって言つてた子が悲しそうに今日も
来ないって言っているし、村のおじいさんもおばあさんもなんとなく
幼い時から見守つて下さつて存在がいなくて寂しそう。

私だつて薄々分かるんだよ、ほとんど毎日感じていた懐かしい雰
囲気がないって。ニードは天使様を馬鹿にする度原因不明の痛みに襲
われてたらしいけど……ねえそれ天罰じゃない？今は馬鹿にしない
から分からないらしいけれど。

みんな分かつてる。目覚めない彼こそウオル口村の守護天使アー
ミア様だつてこと。アーミア様はあの地震できつと天の世界か
ら落ちてしまつて、こんな怪我を負つたからなんだつて。大地震のせ
いで天界にも影響があつた……つてことは相当酷かつたよね、本当
に。

いつもなら守護天使アーミア様にお祈りするのだけど、お祈りし

たいことがアーミアス様についてだから……神様にお祈りしようかな。

神様、アーミアス様の怪我が早く治って、お目覚めになるように、お力を貸してください。アーミアス様の怪我は深く、神父様のホイミもあんまり効かないんです。お願いします。

目の前で深い眠りにしているアーミアス様は、まだ目覚めそうになかった。包帯やガーゼをたくさんあてがわれた痛々しい姿で、静かに眠っていた。

……

目覚めたら目の前にリツカたんがいて口から心臓が飛び出すかと思つたし、うっかりお星様になるところだったぜ危ない危ない。知ってるか？ 天使って死んだらマジで星になるらしいぜ！ やつべえ。ていうか全身激痛！ つか痛いなんてもんじゃないわ！ でも俺ってば好きな子には一途だからリツカたんの前で無様に痛がってたら格好がつかないだろ？ ふっふっふ、普段無表情な俺はやれば出来る子、やってやった！ これで平気そうだろ！ 痛みに耐えてしぜーんに無造作に起き上がったぜ、誰か褒めてくれ！

……なんで人間界にいるんだ？ とは思つたけどな。そういや突風で天使界から落ちたんだった。やつべえ。不幸中の幸いは勝手知つたるウオルロ村に落ちたことだよな、師匠！ 弟子はここです！ タクシープリーズ！ ちょっと飛べそうにないから恥ずいけど抱っこで！ 当たり前だがおんぶは勘弁！

「気がついた？」

待つて。待て、まあ待て、俺。リツカたんの手前表情に痛みを出さず、黙って起き上がったのはいい。ダサイところを見せずに済んだ。リツカたんが目の前にいるのもいい。それはわかった。わかつたぜ、目覚めにリツカたん癖になりそうつてのもわかつたペロペロりん。

なんでリツカたん俺のこと見えてんの？ 起き上がっちゃダメじゃないって優しく俺のことベッドに寝かしてくれてんの？ やつぱりお星様になるしかないわ、俺の天使生最高だったぜ……。

「……ありがとうございます……」

でもな、でもなリツカたん！ めっちゃ全身痛いんだわ、どこ触られても幸せだけど激痛なんだわ！ くっそ痛い！ やばい！ リツカたんタツチの幸せの前にショック死しそう！ 痛みによるショック死で死ぬ天使って何だ、クツソダセエ！ 絶対死ぬか！

てか……天使なのになんで見えてんの？ これ俺の願い叶っちゃってるくない？ もしかして、悲願叶った？ ヒューツ！ 女神様サイコー！ 俺の願いを叶えてくれたのか、神様ありがとう！ もう少し穏便に叶えて欲しかったけど目の前にリツカたんがいるしこの際生きてるからいいぜ！ ヒューツ！ マイゴッドは天使かよ！

……天使は俺だった！

「今神父様を呼んでくるわ、待っててアーミアス様！」

リツカたんが俺に話しかけてるなんてサイコーツ！ って、……ん？ なんかおかしくね？ 体に違和感があるんだが。

「おお、アーミアス様が目覚められたとは本当なのかリツカ！」

「ええ、でもまだ……おじいちゃん！ 神父様以外通しちゃだめよ！」
「分かっておる」

……なーんで俺、リツカたんに姿見えてるんだろうって思ったら光輪なくなってるからなのか。どうやってもしないし握り潰せなかったブツだけでも、なるほどなー……あれだけの衝撃を受ければ光輪もパーンと壊れるよな、早く試せばよかったかもな。

ついでに人外認定の翼もパラシュートなし無抵抗落下で燃え尽きたみたいで背中が痛すぎるけど大成功だな！ 翼を巻るどころか、切り取るどころか、空気の摩擦で抉りつつたんだからな！ これで残ってたら切り落とすところだった！ 見られたら引かれてただろ、セーフセーフ。

これではない旅人として事故ったんです！ って主張して、からのチマチマとわかりやすいお手伝いやアピールして仲を深めて……告白ツ！ っるのが流れじゃないのか?! リツカたん今日も愛してる！ 一番好きだ！ 人間愛してるけどリツカたんペロペロして今を生きてるぐらい好き！ ペロペロする舌が足りない！ 俺はリツ

カたんのエプロンになりたい!

ていうのが今一瞬で考えた我ながら天才的なプランなのよ……俺、身バレしててくれないか! 起き抜けだぞ、アーミアスって名乗った覚えはないぞ、やばい! 計画台無し!

なのに、なんでリツカたんのおじいちゃん感極まって泣いてんの、今の俺天使には見えないよな、翼も光輪もなければ力もなさげ! つまりはただのホコリ男だし! なんだだ! スペックに顔面蒼白を足すぐらいしか出来んのによっ!

「おお、大丈夫ですかアーミアス様。今すぐリツカが回復魔法の使い手をお呼びしますからな」

「ありがとうございます。……どうして、俺がアーミアスだと分かったんですか……?」

これ。これが一番聞きたい。この二人は好意的でよかつたけどさつきリツカたんが神父様以外通すなって言ってたよな、それって俺……もしかして狩られる対象?! 天使は殺すって? 高く売れそうってか?! 翼ねえぞ! 証拠ねえぞ!

やばくね、オシメしてるときから、というか結構前の先祖から知ってる可愛く愛しい人間たちに殺されてしまうのか? それはやめて欲しいぞ。まだリツカたん成分が足りてない。死にきれないから! 「そのお顔を見ればすぐに分かりますじや。元氣になられたらぜひ村人たちにお姿を見せてください。皆、アーミアス様のことを心配して押しかけようとしているんですぞ」

……普通人間に天使ってバレたらやばいよな。異物は排除が人間の生体だしな。でもバレてるならもうどうしようもないよな。天使に見えないブサイクでもバレるって事は……俺がもつとイケメン天使なハゲ師匠髪の毛アリバージョンならリツカたんから熱烈な告白をもらえたかもしれないってことだよな。

くっそ! 俺がブサイクなばかりに! ホコリ男で天使バレつて、もつと天使天使してるやつならもつと! くそ! くそ! 俺の顔をアップグレードすることはどこでできるんだ! 教えろ! 教えろ下さい!

「……ええ、帰ることが出来るようになるまでは……そうですね、動けるようになればまた、この姿でも守護天使の役割を果たさないといいませんか」

「おお……ありがたいお言葉」

なにが?! 守護天使なら当たり前のことじゃね?! まじでなんなの? 天使同士じゃわからないけど天使ってオート天使ありがた公言機能でもついてんの? 天使の言葉って翻訳されて全部ありがたくなんの?! やばい、神の世界に行つて神様か女神様に会える日が来たらこれはやばいぞ! って苦言を申し立てる必要があるな! よし! 覚えておこう! すぐ忘れるかもだが!

まずは異変で村がどうなってるからパトロールと掃除だ! 俺愛用の掃除道具は教会の裏手に隠してあるからさっさと行きたい! フンツ! 痛みに負けずに起き上がるツ!

「う、動いてはなりません、そのお怪我では……ツ」

「この村……を、守る、のが、俺の……使命です……」

ええい! 俺はリツカたんとおしゃべりするためならこの世界を平和にするって決めてるんだ村の慈善活動は俺の仕事! あの木の下とかそろそろ枯葉まみれだろ俺に掃除をさせてくれ! じーさん、頼む!

「おじいちゃん、どうしたのっ!」

「アーミアス様が、」

「……リツカ」

あ、やばい。リツカさんのキュートすぎる顔とごしゃつと無様に床に伏してる姿勢だとスカートの中身が見えそうで見えなくて下からのアングルも可愛くてもう、やばい、昇天する。

やっぱりちよつと休憩してからでいいっすかね、へへ。ヘタレでごめんねリツカたん……俺やっぱ無理、四肢がもげそうぐらい痛いのはちよつと無理。

「アーミアス様ツ」

ありがとうリツカたん。いい夢見れそう。ぱんつは見えなかったけど、いいアングルだった。

5話 崇拜

太陽が出る少し前。つまりは人間たちにとってはどうかは知らないが俺にとつてはいつも起きる時間。で、今日は目覚めたら真っ先に家から出る。勿論リツカさんとジーさんを起こさないように静かに。それから傷が治りかけで痒いのを我慢しながらこそそそ歩いていき、滝壺で水をすくい、一口水を飲む。よし、チャージ完了。

天使っていうのはすごいんだぜ？ 人間は毎日食って飲んで温かくして寝なきや死ぬだろ？ 天使っていうのはメチャクチャ燃費が良くてな、大して飲み食いする必要は無い。

全くなしだの場合にもよるが半月ぐらいで繭まゆになっちゃうけどな。それは所謂省エネモードってやつだ。あとは少し眠ればもう何の問題もない。人間の生活スタイルに合わせてたら腕がもげかけても一日で治りそうだぜ。……実際に治るとは言っていないがな！

あー、でも汚い水、特に悪意に汚染されたものにはある意味人間より弱いから、ウォル口村の水が世界でも稀に見る名水でホント良かった。怪我してる時に瘡気に耐えろってのは勘弁して欲しいしな。髪の毛が真っ黒に染まっちゃう。

いろいろと悪意の溜まりやすい人間界で、人里で、天使界並みの清らかさ、天使に対する明らかな癒し効果ってすごくね？ さすがはウォル口村。俺の愛する土地。

で、昨日リツカさんに教会裏の掃除道具は没収されてしまったからなー……うーん、今はこつそり家宅侵入からの肩出して寝てる人間にババツと布団をかけるのかもできないし、何しようか。

俺の像の前に行ってみるかな。あそこ、たまにお供え物があるんだぜ？ 食い物とか花とか酒とか。まだ師匠が守護天使だった頃、まだ幼気いたいけな俺は師匠にお供え物の酒を見せられながら「墮落の根源」って教えられたっけなあ。懐かしいぜ。

前はよくまんじゅうとか菓子とか拝借して食べてたけど今はダメだろ。

つかお供え泥棒みたいじゃねえか、ビジュアル的に。供えられた本

人だが。直接渡してくれるなら今でも歓迎したいけどなあ。

つつてもリツカたんのご飯が彩り素晴らしく栄養バランスバツチリの上にほっぺたが天界にブツ飛びそうなほど美味しくて腹が減ることすらめつたにないが。悔しいが天使は小食だから、リツカたんのご飯もあまり食べられないのである。無念。

ちなみに天使的にはこっそり食べるのは食べるところを見られなきやセーフだがお裾分けとかのつもりで持ち帰りはNGらしいぜ。食べ物が空に上がっていくのは見られたら確かにヤベエもんな……。

食べてるのが見られるのは年間二人ぐらい目撃されててな、毎回長老にクソほど怒られてるの見るな。俺はその程度のことミスるわけねえのでリツカたんのお供えは皆勤で食ってた。

でもな、持ち帰りNGに反発してリツカたんのお供え物の花を前に一つぐらいは押し花にしても……って師匠にごねたら許されたけどな！これが日頃の態度の成果じゃね？そのために素で喋ったら不敬どころじゃねーから誰にでも敬語とか俺まじ頑張ってるぜ。

……あーっ！その押し花の葉、天使界に置きっぱなしじゃねーか！それだけ取りに帰らせて……。あとは……まあ他の天使もいるし俺ひとりぐらい抜けたっていいだろ、もう星のオーラ集めなくてよさそうだしよ。くっそ。本物のリツカたんがいなかったら脚力だけで天使界に帰還するところだったぜ。

……うおー……この像何度見ても似てねえー。萎えた。俺こんな顔じゃねえし。ついでに言うなら師匠も似てねえわ。すべての天使がこんな優しそうな慈愛に満ちた顔立ちな訳がないだろ！師匠を見ろよ、武道家だろあれは！俺はリツカたんの前なら優しそうな顔ぐらいいくらでもやるけどな！ほーらにつこりにつこり。うげ、滝壺に映った自分がキモすぎる。やめとこ。

「おっ、アーミアスじゃねえか」

「……ニード」

……こんな朝っぱらからニード参上か。今日も暇してんのか？

早起きは結構なことだが、相変わらずニードはニードだなあ、せめて魔物退治でもしたらどうだ。馬小屋を所持してるオツサンの手伝い

はどうだ？ 掃除でもいいぞ？ やってみると体を動かすのは楽しいし、誰かがこれで少しでもいい気分になると思ったらな、ますますやる気が出るぞ。

「ほんと、アーミアスってその守護天使像に似てねえよなあ？」

「そう、ですね。ほかの場所の天使像も天使に、恐らくは似てないんでしよう」

「お、おう」

マジで何しに来たニート？ 俺はお前と違って朝っぱらから勤勉意欲のある天使に絡むほど暇じゃないんだが。もしかして像に似てないって言うことだけ言いに来たのか？

馬鹿め、それは名前は守護天使に合わせられるが像の造形は初期から一緒だぜ？ 多分似てるとしたら最初のウオル口村の守護天使に似てるんだろ。ま、ニートなんかになんかわざわざ言ってるまでもない。せめて働け若者。労働力は大事だぞ。財産だぞ。

にしても……昨日掃除したし、流星に綺麗だし……うー、これはどうしようもないな。外に出て魔物を狩ってくるか？ でも村から離れることで心優しいリツカたんが心配するのは困るしな……。

実のところ大体の傷自体は結構治ってきてるんだが、背中のはちつとも治ってなくてな、あんまり激しい運動はしたくねえ。

元々あるべき器官が丸々ないのは、天使のちよつと強い回復力でも塞がりにくいから。筆りかけの傷が百年消えないぐらいだしな。あと足もなかなか治んねえな。毎日歩く度傷が開いて治りそうもねえから自力でホイミ覚えたら一気に直してやろうと思ってる。

つか聞いて驚け。俺、旅芸人扱いらしいぜ。人間には誰しも「職業」が設定されてるだろ？ リツカたんは魔法使いだろ？俺が人間ならこの衣装、ほかの街でなら旅芸人としてなら誤魔化せつかないとか考えてたら俺、職業「天使」から「旅芸人」になってたわ。

訳が分からん。天使やめたんじゃね、これ？ つーても他にいい服があるなら着替えたいんだが。守備力低いし、目立つ。

「……」

「……おい、アーミアス」

「なんででしょう?」

考え込んでいたのに邪魔すんな。つてかまだいたのかニート。取り巻きが後ろでまごまごしてんぞ気を使ってやれや。そいつ、実は構ってちゃん気質なの知ってたか?

だがわざわざでめえに話すことは無いぞ、このリツカたんを好きなくせに好きな女の子をいじめたくなって意地悪して反発した挙句ニートなニート野郎が。俺はテメーがカーチャンのおっぱい吸ってるときから知ってたんだぞ、やんのかコラ。

なんて言わないがな、話すのがめんどくさくなってきた。あー、太陽が出てきて眩しいな。目がしばしばする。天使界から見ると日のおいしいが、人間界からの日の出も良いもんだな。こっちの方が世界が始まる感じがして好きだ。

「……ッ、昼になったら俺の家の裏に來い、分かったな!」

「……はあ」

なんか言い捨てて去っていったんだが! なんだあいつ! しかしその尻拭いを取り巻きにさせんのかよ! クズか! 天罰しほくぞ!

「ど、どうもすみませんアーミアス様。ですが行ってやってく、くださいっス」

「わかりました。それから……俺に敬語なんていりませんよ」

「まさか、守護天使様に、そんな……」

「みんなリツカみたいにしてくれたらいいんです。様付けなんて、俺には合いませんから」

まじ、これ!

リツカたんとニード以外総敬語ってなんだよ。だいたい俺は守護天使ではあるが、敬われたって仕方ないだろ? こそこそプライバシーを覗き見してたんだしよ。あとこの人たち少しは疑え。見た目は天使じゃなくて人間と一緒にだろ? 服装が人間らしくないのは認めるが。しかも俺さ……。

「俺は、灰色ですからね」

「っ、いえ、アーミアス様は天使様ですよ」

「……………、もう、俺は翼も光輪もないので」

この色、ホコリみたいでコンプレックスなんだよ！俺も金髪とか栗毛が良かったー！　いつそ黒なら汚れないし、天使の力を隠しているみたいでかつこよかったのによ、覚醒した時にぶわわわって金髪になりそうじゃね？　ホント灰色ってなんだ、中途半端一番良くねえわ！

てかなんなのこれ、女神の力って何なの、それとも神の力なのか？　自分の下僕であろうと人間に見下されては……みたいなやつなのか？　そんなプライドよりも魔物をなんとかしてやれよ！　ずっと死傷者出るんだぞ！

やってらんねーからちよつと睨んでプイ、だ。あ、道具屋が開店してる。ちよつくら手伝ってくるか。

……だがその後、思いの外怪我で体力が落ちているのに気づかなかったマヌケな俺は足の怪我も相まってぶつ倒れてリツカたんの家に救急搬送お姫様抱っこされた。怪我に障らないようにだとしても屈辱の極み……ッ！

……

何故か、胸騒ぎがした。ガバツと起き上がり、時計を見れば……なんだ、まだ朝の四時だ。もう一度寝るには目が冴えすぎていて仕方なく俺は着替える。ついでにあいつも誘っておくか。村の入口の番もそろそろ交代のはずだから。

そして特に考えることなく……なんとなく滝壺の方へくだらねえ事喋りながら、歩いていった。朝っていうのは清々しいな、たまには早起きもいいかもなんて思いながら。

だが、日が出る前の薄暗い世界には既に光がさしていた。

自らと同じ名前の像の前で深刻そうな顔をして立っているのは……この前の地震でこの滝壺に落ちてきた男、アーミアスだ。うちの村の守護天使サマと同じ名前っていうのは如何にもお人好しなりツカを騙したんじゃないのかと密かに疑っている。

だが俺は何も言えない。というかそもそも彼をアーミアスだと言ったのはリツカだったからだ。寝ている間に勝手に天使扱いされ、あのキラキラした押し強い目で名前を問われてアーミアスだと答

えるしかなかったのかもしれない。そうだとしたら哀れすぎて何も言えるわけがない。

……それから、俺は……これは誰にも言っていないことだが、ヤツが本物の守護天使アーミアスだとしてもおかしくない、と密かに思っているからだ。

あの日、ヤツは死んでいてもおかしくないほどの大怪我をして滝壺に落ちてきた。

この村でいろいろやって生まれ育った俺にはわかる。あの滝の上から落ちたぐらいじゃできる怪我ではないってことぐらいはな。リツカを手伝ってあいつを運び、濡れた服を脱がせた時にもいろいろ考えさせられることがあった。

あいつの着ている変な服には、背中に最初から作られた裂け目がある。それもちょうど翼の位置に、だ。服を脱がせ始めたら男とわかり、そこから俺が着替えさせたんだが、……神父様すら顔を顰めた背中の傷は翼を無理やりそげ落とした傷だと言われれば納得の傷だったし、なによりも、……あの顔は人間のものじゃないだろう。それを疑う事は俺にもできなかった。

人間にも綺麗な人がいくらでもいるだろうが、正しくあいつの顔は人外の美。睨まれればどんな人でも竦み、ひれ伏すしかないようなものだ。心から無意識に畏怖しつつ、慕ってしまふ……魔性ではないが、どうも惹き付けられる、そんな美だ。リツカに笑いかける時の顔天使の笑みはこの村のうるさいババア共を一気に黙らせ、周りの目を奪うぐらいだ。

だからあいつが魔物だとしても、天使だとしても驚かない。とりあえず人間ではないだろうとは思ってる。だからこそ怪しいからいろいろ探りを入れているんだがな。

「おつ、アーミアスじゃねえか」

「……ニード」

とりあえず話しかけなきゃいけないな。声を聞いただけで振り返るまでもなく俺の名前がわかるっていうのは……客商売の旅芸人ならまあ出来ると思うが、普通の人間が出来るか、と言われれば相当記憶

力がないと無理、だな。って、わざわざ証拠見つけてどうするんだ。怪しいところを探さねえといけない。

アーミアスはこつちを向くと、訝しげに首をかしげた。人外の美をモロにくらって声が震えそうになるのを必死に抑えた。圧倒される雰囲気。なのに、母親のように安心して、どこか懐かしくて……幼い時に頭を優しく撫でた風のように、なんて思ってしまうのは、何故なんだ。

会ったこともない、見覚えもない、そんなアーミアスの真つ黒の目にいつも見守られていたように錯覚するのは、何故だ。俺がバカやつてる時に頭をぽかぽか殴っていったのはこいつじゃないのか。

「ほんと、アーミアスってその守護天使像に似てねえよなあ？」

「そう、ですね。ほかの場所の天使像も天使に、恐らくは似てないんでしよう」

「お、おう」

カマをかければ少し目を伏せられ、ようやく俺は息をつけるようになる。だが声色に変化はなく……だあああつ！ 認めるのは尺に触るが、とりあえずこいつは守護天使サマだとしてだ！ 仮定だ、仮定！

コツチを見たままぼんやりとしているように見えるアーミアスに、俺の計画を手伝って貰わなきゃならないんだ！ それが先決、コイツの正体はあとだ、とりあえず少し戦えればそれでいいからな。

「……」

「……おい、アーミアス」

「なんでしよう？」

考えを見透かされていたのか。アーミアスは目を細めた。キラキラとヤツの背の滝が朝日に照らされて煌めき、神々しいまでの雰囲気はさらに増していく。

——俺に何をさせるつもりですか？

そう、問われたように錯覚する。否、これは聞かれたんだろう。そしてヤツは拒否しない。俺のことをそんな目で見ながらも、親が子供を見るような目を、している。慈しんで、いとおしそうに。俺なんて

いっつも天使を否定することばかり言っていたし、当然聞いていたはずなのだ。

「……ッ、昼になったら俺の家の裏に來い、分かったな！」

「……はぁ」

ため息だ。ため息を吐かれた。……耐えきれずにその場から走り去り、家に駆け戻る。

……自室の扉を閉めれば頭の中には慈しみを込められたようなあの目が浮かんでくる。きつと、来るだろう。多分、来るだろう。

自信はない。だがなんとなく、来てくれる気がした。

・
・
・

6話 急加速

・・・

朝日に透き通るアーミアス様の髪は、……柔らかい灰色から銀色に変わり、神々しく輝いていて……息をするのを思わず、忘れていた。これが彼の真の姿かと、平素より一層美しい姿が目には焼き付く。こちらに視線を移したアーミアス様の漆黒の瞳も朝日を受ければ星のように無数の光を宿し、煌めいていた。

……そうだ、アーミアス様に失礼なことを言ったニードさんと、謝らないといけないっスね……。

「ど、どうもすみませんアーミアス様。ですが行ってやってく、くださいっス」

「わかりました。それから……俺に敬語なんていりませんよ」

そんな神々しい姿で言われても、誰がはい分かりましたなんて言えるんスか。彼の瞬きでその睫毛に視線が釘付けになるのが止まらないのに、そんなこと。

「まさか、守護天使様に、そんな……」

「みんなリツカみたいにしてくれたらいいんです。様付けなんて、俺には合いませんから」

本当にそう思っているようにアーミアス様はおっしゃられたっス。が、リツカみたい……って。あの子みたいに友達みたいに接せってことなんスか？あんなの、無理に決まってるっスよ！

返事が出来ないままでいると、ふっと、星を宿していた瞳が暗く、淀むように、色をなくされたっス。

「俺は、灰色ですからね」

そんな目をして欲しくないから必死に否定するしかなかったっス。今まさに銀色に輝いている姿を見て、誰が彼を貶めたんだろうと疑問に思うぐらいなのに！

「っ、いえ、アーミアス様は天使様ですよ」

「……………、もう、俺は翼も光輪もないので」

……それを言われれば、もうそれ以上言うことはなくなっし

まったつス……。確かにアーミアス様に翼も光輪も、ない。ニードさんはぼそつと削ぎ落とされたみたいだっておっしゃってたから、あの地震のせいで失ってしまったってこと、なんすかね。

空の彼方から落ちてきて生きているのはさすがとしか言いようがないつスけど、彼にとつて大事な大事な翼を失ったのは、慰めようもないことじゃないスか……。ことに人間からなんて、とてもじゃないつス。

それでもさらに話そうとすればアーミアス様は軽くこちらを見て、目を細められる。背筋が冷たくなって……。目にはキラキラしたあの光はまだなく、それどころか睨まれているような気がして……。

だから彼が表情には出さずに、でも辛そうに少し足を引きずりながら道具屋の方に歩いていってしまふのを止めることだつてできなかったんつスよ……。

……

「アーミアス様、無茶しないでよ……」

「リツカ……様付けは……やめてください……」

疎外感を感じるんです、なんて言いながら道具屋を手伝っている最中に倒れて外から運び込まれ、ベッドに寝かされたアーミアス様は、どことなく不服そう。みんなアーミアス様が表情を変えるなんて見たこともないなんて言い始めてるけどそんなことないのになあ。よく微笑むし、よく……。悲しそうにしてる。あ、でもね、嬉しそうなくとも多いよ。

私のご飯を初めて食べた時は本当に幸せそうに笑ってたんだもの。見とれたのは勿論だけど、あんまり美味しそうに食べるから私も嬉しくなっちゃった。あまりたくさんは食べられないんですつてすごく悲しそうにしてたぐらい。食べる量がそもそも違うみたいで、でも誰よりも美味しそうに食べるんだよ、アーミアス様つて。

天使様はご飯を食べないのつて聞いたたらそんな事はないつて言つてたけど、天界には想像も出来ないぐらい美味しいものがありそうだなつて思うんだけどそんなこともないのかな。それともなんだろう……。それは人間の食べ物とは違うのかもしいなあ。珍しいのか

もね。

アーミアス様の、ちよつと悲しそうな顔を見ていたら様付けされるのは本当に嫌なんだなって分かって私はどもりながら、聞いてみた。

「じゃ、じゃあアーミアスって呼べばいいの、アーミアス様」

「……言ってるそばからそれ、矛盾してますよね、リツカ」

「あははっ！ 確かにそうね！」

あ、ほらやっぱりアーミアス様、じゃなくてアーミアスはよく笑うじゃない。形のいいピンクの唇にふわって笑顔を乗せるの。あんまり顔を動かさないけど……顔にまだ大きなガーゼを当ててるからかもしれないけど……とろけるように、笑うんだ。見ているだけでこつちまで笑顔になるの、その表情。

それにさ、私、アーミアス様の笑顔って心がぽかぽかして好きだなあ。

………。なんか恥ずかしいこと考えちゃったな。

さて、と。アーミアスは足の怪我が開いちやったみたいだから薬草を買ってこよう。でも昼からは行くところがあるんだって言い張るから今だけでも安静にしてもらわないとね。

ゆるゆると瞼を閉じたアーミアスは、疲れてしまったのかあつという間に寝息を立てていて、それでも……眠る私たちの天使様のお顔に痛々しいガーゼが当てられていようと、首に包帯が巻かれていようと、目の前で息をつくのも無礼じゃないかって思ってしまうような雰囲気はあまり和らがない。

なのにな、人間をずっと見守っている遥かに年上のアーミアスが、安らかに眠っている時はちよつとあどけないの。子供っぽく見えちゃうの。幾ら大人の姿じゃないからってアーミアス様はおじいちゃんより年上なのにな。えへへ、これを知ってるのはおじいちゃんと私だけなんだよ。

「おやすみなさい、アーミアス」

アーミアスの眠る部屋を出れば、少し寂しくなる。

何故かって、いつもひとりになると誰かが見守っているような気配がしていたから。軽やかな翼の音、優しい声が聞こえたような気がし

ていたの。それはアーミアス様だつてことしかわからなかったから、いつも安心していたし、天使様は神様と同じように万能なんだろうって勝手に思ってた。

想像よりもずっと綺麗だったアーミアスは、怪我をしてもなお守護天使の役割を果たそうとまだ歩けもしない時から外に行こうとしていたよね。必死に止めても、アーミアスも必死だった。優しい優しい天使様を止めるのは大変だったなあ。

だから私、分かったの。天使様は万能じゃなくて、万能ってことよりも……とても優しい心を持った方々なんだつて。そして心が強い方々なんだつて。

アーミアス、アーミアス様。本当は天に帰りたいんだよね。私、聞いちやったの。アーミアス様が誰かを呼ぶ声を。何かを探してるみたいだし、置いてきてしまつてんでしよう、大切な何かを。天界にはアーミアス様と同じ天使様が沢山いるはず。その誰かがアーミアス様にとって大切なんだよね？

アーミアス様はウォル口村の守護天使だから、翼も光輪も失つてもここから離れられないって責任を感じてしまつて帰る手段を、他の天使様を探すことが出来なくなつてしまつてるんだよね。

アーミアス様に居てもらつたら私、とつても幸せだよ。でも私はアーミアス様が悲しそうな顔をしているのは嫌なの。

峠の道、崩れちゃつてるから今はどうにも出来ないけど、あそこが開通したらアーミアス様が旅立つても大丈夫なようにしておかないとね。

……本当は、本当はね、アーミアス様。アーミアス様が優しく笑つてここにいてくれるのが、一番嬉しいの。でも、それじゃあ、駄目なの。私たちをいつも守つてくれたアーミアス様に恩返しをしなくっちゃ。

道具屋に行く途中、犬がぐーんつて鳴きながら近づいてきた。しっぽが垂れ下がって元気がない。なんとなく、俯いてて……。そういえば、アーミアスはよく犬の頭を撫でていたっけ。この子、きつと心配しているんだ。

「大丈夫だよ、アーミアス様はちよつと疲れてるだけだから、ね」

そう言つて頭をぽふつと撫でた時、犬は納得したのか満足げに私の家の方に行つちやつた。あれは……アーミアス待ちなのかな。

犬にもアーミアス様は好かれてるんだね。あの犬、もしかしたら、翼のあるアーミアス様も見えていたのかも。ほら、動物には不思議な力があるつて言うじゃない。あの地震の前も妙にそわそわしてたし、もしかしたら。

まあ、これはただの想像なんだけど。

7話 豪胆不敵

見習い天使の優等生アーミアスだぜ！ 俺の自慢は遅刻や違反をしたことがないってことだ！ ま、翼切り刻み事件でかなり上級天使の頭かつたい奴らに目エ付けられたからな、大人しくすること早百数十年、だぜ！

まー、それがなくても大人しくしてたけどな。天使界屈指のイケメンと美女に逆らう勇氣はちよつとないわー。マジモンの天使だぜ、上級天使。まだ見習い天使はなりきり天使って感じるもんな。

見た目もだがマジで子供。全然オーラが違う。その点俺の師匠は親しみやすいハゲだからな、配慮に尊敬するわ。あの翼、すっげえモサモサしてるけどあれが力の象徴なんだぜ！ つまり今の俺は天使としてはカスに等しい！ だからなんだ！ リツカたんがいる方が大事に決まってる。

つてことで優等生でちよつと真面目な俺は熟睡してもぼつちりぱつちり昼前に起きたぜ！

たとえニートだろうと、リツカたん大好きな俺から見たら敵なニートでもウォル口村の人間、俺の大事な可愛い可愛い守護対象の人間には違いないからな。まあ鉄拳……もとい天罰は積極的に食らわせたところだが。俺がやったら天罰でいいよな、な！ ハゲ師匠もいねーし俺の勝手！

てか取りに行きたい物があるから師匠早く迎えに来てくれねえ？ パツと行ってパツとウォル口に帰りたいが。流石にパラシユートなし落下はもう勘弁だが。

「……リツカ」

「あら、もうアーミアス大丈夫なの？」

「ええ。ちよつと行ってきますね」

「気をつけてね、また倒れたり、怪我しないでよ？」

「大丈夫ですよ」

あー……、あああああつ！ リツカたんとお喋りいいいい
!!!!

思わず荒ぶるぜ、最高。やばい。それしかねえ。でもおくびにも出さずに喋り方とか俺クールじゃね？ 感情をあまり見せず、でも安心させるように微笑むかつこよくない？ 駄目か？

……駄目だな。そういうのは匂い立つようなイケメンじゃなきやダメなんだよなー。シショーツ！ 顔面だけ交換してくれツ！ この際師匠の男前があればホコリぐらいなんとかなるぜ！

あー、こんな俺にもリツカたん優しい。すげえ可愛い。可愛いけど普通に接してくれてる。ありがたいが普通だ。普通のリツカたんとか超可愛いけど普通だ。俺を意識してくれそうにない。やつぱ顔がダメだと何をやってもダメサイからな、クソツタレ。

リツカたんって俺より純真無垢な完璧天使だから、オムイ様が蒸発レベルの天使だから！ うつは笑顔が目にしみるうううううつ！ 眩しすぎてリツカたんの前ではやけたけどリツカたんは楽しそうね、なんて勘違いしてるうううう！！！！ リツカたんまじ……純粋……可愛い……。ニードなんてほつといてここにいたい……。

だがしかし、誠実な俺は来いと言われたらホイホイ行ってやるぐらいにはニートの更生に燃えている。

ついでにあいつの腐った根性叩き直してリツカたんが楽できるように馬車馬のように働かせてえ……。俺も働くけどな！ 今までと違って堂々と手伝えるからそれとなくやるような微妙な手伝いじゃねえ。最高。やつぱ光輪なんて無用の長物だったんだな。ケツ、早めに壊せば良かったのによ。

ま、そんなこたアどうでもいい。

村をてくてく歩いて村長の家に向かっただけでもたくさんの人間たちが話しかけてくれる。さっきは大丈夫だったかって聞いてくれる。クウーツ！ 天使より天使かよ、いい人ばかりか！ ほんと俺ウォル口村大好きだわ。

天使どもは俺が何しても、疲労困憊へ口へ口でも無関心だぜ？

野郎はそこそ絡んでくるけどな！ ……主に師匠。べ、別にぼっちゃやうわ！ 天使どもより俺は人間と居たかった、それだけだ！

俺の話せる知り合いなんて師匠を抜いたら……上級天使の何人か

と……無邪気な子どもの天使が何人か。うん、友だちはいないんだからなんだ！

ない愛想振り絞って対応しているといつも頭を撫でてから帰ることにしている子供がいた。……なんか期待の眼差しだな。俺天使だけど翼がないと飛べねえし、せいぜい幽霊や人ならざる存在……妖精とかしか見えねえよ？ いいのか？ しかもここに来てから見たのは幽霊ひとりになんかピンクの光だけだぞ？

つうことで出来ることといえば頭を撫でてやる事だけだ。ほら大きくなれよ、健康に育てよ、本物の天使からの加護だぞー。……効くかわからんけどな。多分意味は無い。

「やっぱり、アーミアス様はアーミアス様だ！」

「……？」

おう。ごめんな、おにーちゃんそれ理解出来ないんだわ。で、誰が誰だって？

「すみませんアーミアス様。この子はアーミアス様に頭を撫でてもらって本物が確かめるって言って聞かなくて……疑うなんて本当に失礼なことを」

「いえ、怪しいのは俺の方ですからね。……ぼうや、俺のことを覚えていてくれたんですか？」

子供特有の大きくてきらきらした瞳が俺に向いているのって新鮮だぜ。だが不純な俺は溶けそう。てか覚えてたのかよ。折角風にまぎれてぼんぼんって感じにやってたのに。しょうがないなー、高い高いしてやろうか？ って、今はダメだ。背中が開いちゃう。ごめんなー。

なんかリツカたんの家からついてくる犬っころを従えて村長宅に到着。

おつ、いたいた二ート。今日もリーゼントだつせエな！ よう元気？ 風邪ひいてない？ 怪我不いか？ ニートにも神のご加護がありますように！

「来たのか」

来たのかっておま。呼んだのはニートだろうが！ 何意外そうに

してからにやけてんだ……？怖っ。

「ええ、呼んだでしょう？」

ポーカーフェイスのレベルが高い俺でも声がやれやれって感じになるのは止められねえな。ニードのメンタルは強靱な合金らしいからその程度でビビらないからこそ出来ることだ。俺は人間に不快感を与えたくないからな！ ただしニードは天罰しほく！

「とりあえずここじゃ駄目だ。家に入って中で大人が話し合いをしてるんだが……それを盗み聞きするのを手伝って欲しいんだ」

「盗み聞き、ですか？」

言わないって事は聞かせらんねえ話ってことだろ？ ニードのくせに何イキってんだこいつ。……そういうの、嫌いじゃないけどな。いいぜ。聞いた結果やる事はロクでもないことではなさそうだしよ。「ああ。じゃ、入るぞ」

俺が止めねえって分かったからか最高に悪そうな顔して……おいニード。悪いことじゃなさそうだから加担してるだけだからな？ 調子に乗ったら分かつてるだろうな？

玄関先で息を殺して中で話してる大人の話盗み聞きする。ふむふむ……あー、あの道土砂崩れしてんのか。翼があったら余裕だがそういうわけにはいかんよな。だからリツカさんの宿屋にお客がいなかったんだな。人が来れねえならそりやな。リツカさんの宿屋世界一だもんな。

……何ニードお前こっち見てんだ？ あ？ なんとか出来ねえか見に行くだど？ 自然災害には人間も天使も勝てねえよ、大量に連れていかなきゃな。時間が解決するぞ？ セントシユタインが威信をかけてやってくれっだろ？

ハアーーッ！ 聞いてねえな！ 聞けよ！

こいつ俺の話聞く気がねえ。仕方ねえな……ホント仕方ないやつだ。俺がついて行ってやるよ。まだあまり動き回れねえがニード一人で村の外の魔物と戦うとなりや俺が休まらねえ。あの地震の後凶暴化してるみたいだから最悪死ぬだろ。守護天使が黙ってねえよ。

……。なんかそういうこともあろうかと銅の剣を装備してきてよ

かったぜ。さーてニード。お前から言ったからにはそれなりに腕に自信はあるんだろうな？ 怪我人より弱いなら話になんねえぞ？

ま、安心しろ。俺はこれでもウォル口村の守護天使だ。この身に代えても守ってやるから安心しろよ。まあ怪我の保証はしないがな。そこまでお人好しじゃねえーし、ゴーヤに腹を刺されてホイミ沙汰の俺が怪我がひどい状態でそこまで立ち回れるかつつたら無理だからな。ともかく薬草を買い込んでから行くか。

ちやーんと守ってやらねえとな、お前も可愛い神の子だ。

・

・

・

・

8話 急先鋒

・
・
・
・

先陣切って魔物に横薙ぎ一閃を加えるアーミアスの姿は俺のよう
なただの村人ではなく、戦い慣れた様子までもをひしひしと伝えてく
る。やつは村でも売ってるような何の変哲もない銅の剣を装備して
いたが、強者に得物は関係ないと言外に言われているみたいだった。

剣を振るう事に旅芸人が着いていそうなひらひらの服が揺れる。天
使の衣装だと思ってみてみればなるほど、重力を感じさせない鳥のよ
うな衣装だ。それがこいつの一挙一動でぴらぴら動く。

そういえば朝のあの後、アーミアスが倒れたとか誰かが言っていた
ような気がするが……。その割には足取りはしっかりしているし、あ
の大怪我から一週間と少ししか経っていないのにそんな様子は微塵
もない。天使といえども流石にあの酷い怪我は治っていないらしい
のにも関わらず、だ。

魔物を倒し、ひと段落つく事に膝をついて弔う姿やちらりとこちら
を見て怪我を確かめる姿を見ていけば、話そうと思っただけ……も
はや神々しさに圧倒されて何も言えなくなっている。

こいつは毎回ではないものの、なるべく倒すのを一太刀で終わらせ
るためか、銅の剣はたいがい魔物共の体を真つ二つにしている、その
度に飛び散る血が早くも灰色の髪を真つ赤に染めていた。甘んじて
受け止めているように俺には見えた。受け止めることで生から開放
してやるのだと言われているみたいだ。

血を浴びるなんていう行為。普通、狂氣的にも見えるはずなのに、
天使の相貌はそれすらも神聖なものに魅せるのは流石としか言いよ
うがないな。剣を振るう姿は断罪にも裁きにも見えるのに……アー
ミアスの表情は解き放つてやろうとばかりの慈愛にすら取れる。

天使の慈悲を受けた魔物共も死ぬ時はどうも安らかに見えて俺の

手で死んだ奴ら……声なき断絶魔の悲鳴をあげて死んだスライムが哀れに見えて仕方がない。あつちの手によつてトドメを刺されればせめて浮かばれただろうに、と。

つか……天使だろうが魔物には襲われるみたいだな。というよりも天使だからこそ魔物に襲われるのだろうな。そして浄化してやる、と。明らかに敵意をむきだしにして襲ってくる凄まじい形相のモーモンを切り捨てつつ、……そんなに真摯に吊えるものなのか……天使という奴らは。なんて奴らなんだ。

「そんな魔物共倒したらほっときやいだろ」

何回目か分からないが、アーミアスがまた死んだモーモンの前で膝をつくのを見かねて言えば、アーミアスはいっそ辛そうにこう、返したのだ。

「次の生では共に歩いていく者達ですよ。見送らなければなりません」

……天使サマはそもそもその考え方から違うらしいな。そうこうしている間にも魔物共はこつちの都合なんざ考えることなく襲つてきたり、逃げたりだ。ちよつと油断して一撃を食らいそうになればアーミアスが斬り捨てて難を逃れ、アーミアスが代わりにダメージを受け……。

………。自己犠牲が激しいのか？ 天使つてやつは。リツカも起き上がれもしないうちから外で使命を全うしようとしていたとか何とか言ってたしな……。酷い怪我ではないみたいだが元々怪我をしているせいで茶色の上着にじんわり血が滲んできている。目撃したのをバレないようにさり気なく隠されても、もう遅い。

「おいアーミアス。今何隠した」

「……」

「怪我したんだろ、俺のかわりに。……無茶したら俺がリツカに怒られるからそんな事しないでいい」

「……ニード、俺はやりたくてやっているんですよ？」

夜の闇より深く濃い目が俺を咎めるように射抜く。咎めているのは俺の方だというのに、居心地が悪い。ようやつと着いた峠の道内部

は魔物が出ないと知っているからか、魔物から逃れるように引つ張りこまれ、目に射止められて逸らすことも出来ない俺にアーミアスは事もなげに言うのだ。

そしてそれで俺が諦めないを見ると溜め息を吐いてシャツを捲りあげ、葉草をぺたりと傷口に貼る。ちらりと治りかけの傷が、なまっ白い腹にも無数にあるのを目の当たりにしながら……連れてきた人選、というか天使選間違えたなと思う。

これなら一人の方が良かったのでは、とも。だがそれはアーミアスが代わりに受けた怪我をすべて自分で負っているということだ。それに耐えられた自信が無い。本当にこいつは……ウォル口村の守護天使の名前は伊達じゃないな。

「……あれ」

俺の視線から逃れるようにふいと気まずそうに顔を逸らしたアーミアス。その視線は木が何かになぎ倒された場所に釘付けになっていた。……不自然な倒れ方をしているが、ただそれだけの場所。何も無い。妙な空間だけがそこにある。

「おい、どうしたアーミアス？」

「……あそこ、なにか見えませんか」

「木が倒れてるだけだろ」

「そう、ですか」

否定しようがなおもその「何もないところ」に近づいていこうとするアーミアス。その顔に表情は、全くない。それどころか目にも何の感情も浮かんでいない。……天使でも倒れている、わけでもなさそうだな。むしろ操られているみたいで不気味すぎる。

漆黒の中に穏やかな星を宿した目が、虚空を見つめて、釘付けになって。それが、俺たち人間を見ていないのが、どうも苛立って。

「何もねえから、それより土砂崩れはこっちだぜ？」

「……そうですね」

無理やりぐいと腕を引っ張ればやっとアーミアスはこっちを見た。少し不機嫌そうにも見えるが引いてはくれた、らしい。それでもなおもその場所を見ようとするのにさらに苛立って無理やり引つ張

れば、諦めたのか大人しくついてきた。

……天使にしか見えない何かがあるみたいだな。幽霊か？ 天使なら死者を見れそうだし。それなら幽霊がいると素直に言いそうだが。

結局真相はわからないが、ともかくアーミアスの興味は目の前の土砂崩れにちゃんと変わったらしい。……俺達で少しはなんとか出来るか、と思つてたんだが……これはどうにもなんねえな。二人じゃ下手に岩や砂を動かしただけで巻き込まれてもおかしくない。……無駄足だったか。

「ちつどうしようもねえな」

「難しいですね……」

天使サマとはいえどもどうにもならないらしく、腕を組んで土砂を見つめる。と、その時だ。

「……いーい！ おーい！ そっちに誰かいるのか！」

「お、おう！」

少し向こうから男の声。耳をすましてみれば何人かいるのかセントシユタイン側は騒がしい。

「こちらはセントシユタイン兵！ この土砂崩れはこちら側で何とかするから、ウオル口村は心配しないでいいぞ！」

「そうか！ 村長に伝えておく！」

「それから、ルイーダという女性がそちらに向かっているようだ！ よろしく頼むぞ！」

「おう！」

……。話、終わっちゃまったな。兵士が出たとなるとこつちができる事は本当になくなっちゃった。名乗ろうと思つたがアーミアスが余計な事は言うなとばかりにこつちを見てやがるから言えもしない。さつさと帰るかとはばかりに踵を返したアーミアス。何を思ったか肩を掴んできた。

ルイーダとは誰だ、と考える暇もなく。

「もう無為に戦う必要はありませんね。帰りはキメラの翼でいいでしょう。捕まってください」

……捕まってく下さい、じゃないだろ。言うが早いか翼を放り投げ、青い光に包まれていたんだから。

この後俺は親父にもリツカにもほかの大人にも怒られることになる。峠の道が開通すればわざわざ危険な目にあって聞きにいかなかったも分かっただろうとも、あの戦闘でアーミアスが背中傷が開いていたんだとも。あの時の視線は痛みをこらえていたのか、と少し合点もいった。

・
・
・
・
・

9話 哀悼

オラオラオラオラアツ！ 俺の邪魔をする魔物は死ぬエ！

そしてその魔物としての生はそれで全うしたことになるんだから来世で会おうぜてめえら！ 今はとつとと死ぬエ！ オラオラそのスキゆうり！ そっちのゴーヤ！ 縦切りは面倒臭いから横切りで安らかに死にやがれ！ オラオラアツ！ 痛みはねえぞ、即死だからな！

俺が使ってるのはなまくら同然の銅の剣だが、勢いよくぶった斬れば切れ味なぞ関係ない。その代わり返り血とかすごいがな。さつきから俺の髪の毛がべたべただ。ニードが引いていないのは純粹にありがたい。

斬られると分からないのか、それでも向かってくる無謀で愚かで哀れなスライムを一太刀でこの世から解放してやる。ズバツと下から切り上げれば体が二つに泣き別れて寸法だ。

哀れな魔物達は一応、天使界では死ぬば悪しき心を浄化されて平和に再び生きられるのだ、と教えられたからな。死んだこともないし、嘘か本当か分からない事はもう試すつきやないだろ？ それに心なしか死ぬ時こいつら解放された顔してるくね？ 安らかに見えるのは都合よく解釈しているだけなのか？

後は後ろから付いてくるニードが怪我しないことだけ気をつけてだな、怪我しそうなら俺が颯爽と割って入って守護してだな、その他もろもろの問題を全部無視して突撃だぜ！ 峠の道とやらはそこそこ、つか歩けば遠いからよお！ 二度と翼なんて要らないが、あった方が便利ではあったと思うレベルだ、クソ面倒い。微妙になんか遠い。

…俺が何でこんな脳筋戦法とってるかを説明しよう。俺は戦闘とか諍いに対しては、実に天使らしく好きじゃないから当然、戦闘が好きとかそういうことはない。やりたくてやってるんじゃないやねえ。ただ外に出たら当然のことだが、早く着くために走ってるわけだよな？ もうそれだけで既に背中傷が開いたっばいんだわ！ やつべえ

！ クソ痛い！ 包帯まいてたが血が滲んでないか心配だぜ！ 幸い初日程じゃないがな！ つうことで早く行つて帰りたい。ホント、それだけだぜ……このペースだと腹の傷も開きそうだが。せつかく治りかけてきたところだが、まあ村人を守るならその程度安いしな……。こいつ何回庇わせれば気が済むんだ……？

だが俺にとつての朗報もある。あと少しでホイミが覚えられそうなんだ。……これはここに来る前からな。前々からいけそうではあつた。俺が例え旅芸人扱いだとしてもあと少しには変わりねえし。とつと覚えて帰つたら寝て魔力を回復してこの煩わしい怪我ともオサラバ。さつきと癒したいもんだ。傷跡は残りそうだがなあ……歴戦の戦士っぽくてかつこいと思える年齢でもないから消せるもんなら消したいが。

だからモーモンよオ！ 俺の糧になりやがれ！ そんで幸せに生まれ変われ！ せめて一撃で葬つてやるからな。オラオラッ！ 痛くないだろ！ せめて苦痛はないように。

ッ………。……ごめんな。
……俺がこの手で切り裂いて死んだモーモン。どことなく穏やかな死に顔。師匠が倒したモンスターもみんなこんな顔をして死んでいった。

何故か周りに天使だとバレル補正があるというなら、倒した魔物が次は狂暴に人間や天使を見るなり襲いかかる存在ではなく穏やかに過ぐす何かになる補正があつて欲しいと祈るのは当然だよな。

膝をついて祈る。どうか、どうか、次の世では笑つていられますように。天使だから祈れば神に少しは届く、と信じてえ。人間よりは届きそうじゃね？ 数の少なさ的に優先して聞いてくれそうじゃね？

何度も何度も殺す事に膝をつく。祈る事に魔物の死体にそつと触れるとそれらは青い光になって空気に溶けていく。ふわふわと暫く俺の周りを漂つた光は空へ昇っていく。そして、青空に吸い込まれていくんだ。俺にとつては二度と帰りたくもない天使界の方へ、さらなる高みへ。

青いそれは綺麗なのに、見ているとどうにも悲しくて、しかも傷が

痛むものだから俺はすごい形相だろう。だから、どうした。ニードに見られて滅るもんでもない。悼む心を押さえつける必要はないんだぜ？正直に、想う時は想えばいい。

だが、心も体も痛い。

ああ、出来るものなら、命を奪いたくは……。

いや。これはリツカを、人間を守るためには必要なこと。そう心に決めて今までやってきたじゃないか。守護天使たる者、魔物を撃退して人間達の生活を平和で円滑にしなくてはいけない。そうしたい。だから師匠のエッグい剣のシゴキに耐えて、だが魔物を殺した感覚が消えなくて、吐きそうで泣きそうな時、ラフェットさんに抱きしめられた事もあった。

見習いで一番俺が頑張ったから、一番俺が最初に辛い目にあつた、らしいぜ。辛くなんかないって答えたが。辛いのは俺ではない。死んだ魔物だろ？手が震えて、眠れなくて、だが見習い共には弱音なんて吐けねえだろ？

俺はあの時な……一番守護天使に近い見習いだったからな。みんなの期待が重かった。投げ出せないし、何より今も人間が魔物に殺されていと思えば剣を捨てることも、守護天使を諦めることも出来やしない。

あの時は、たしか、ナツミの子供、お転婆なエンカが魔物に襲われそうだったんだよな。助けられて良かった。あの笑顔が曇らなくてよかった。

これだから天使は最高だ、人間を守ってナンボ、それって守ることだけ考えてりゃいいんだぜ？人間になりたい俺でも人間になつたら守ってばかりじゃなく自分も守らなきゃいけないようになって集中出来なくなる。それは困る。俺は人間が好きだからな。こんな時は天使でよかったって思うからマジ俺現金。

……ニードが俺が祈る理由を分からないとかいう顔をして質問してくる。センチメンタルな今は丁寧に答えてやるか。

別に人間のお前が分かってくれるなんて思っていないんだ。お前達は、人間達は……天使と違って生を営み、命を繋げていく。魔物もそ

うだ。だから、天から湧いてくる俺達には、気持ちが変わらないし……お前達も理解出来ないだろう。使命だけを胸に生きるのが真つ当な天使だからな。愛なんてダメらしいぜ？博愛じゃないとダメ、らしいぜ？

クソ食らえ。

ちなみにな、子を残せもしない天使にはそういう欲は欠片もないんだぜ？ いただけもしないし、多分リツカたんのぱんつみてもテンションが上がるだけで、本当に上がるだけで、俺の最高の思い出になるだけだ。……そのくせ神は俺達に「あいするところ」だけは与えていきやがった。

全くもって解せないが、だから俺は人間が大好きでいられるんだぜ？

ほら、ニード。また余所見してるから俺が庇ってやって怪我を拡大しているんだろうが前を見やがれ！ クソ痛いだろうが!!! 守るのもいいが早く帰らせて……。

おうおう、やつと着いた峠の道、さて入るか……。うわ、腹辺りに食らった傷が服に滲んで気持ち悪……。俺の精神衛生上良くないから見えないようにしてみたんだけど、またニードが突つかかる。いからお前は黙ってるよ。あん？ 傷？ 薬草貼りやあ満足か？ ……これでいいのか？

あー、自分のわがままに付き合ってもらってるっていう意識がねえなこいつ。ま、さつきでホイミ覚えたからウインウインではあるんだがな？ それとこれとは話が別。守護が使命の俺がパラディン真つ青なぐらい庇ってやったのも当然のこととして……。

あ？ なんだこりや。

さて問題の土砂崩れはどれだと思った途端目に飛び込んで来たのは……あの、例の大異変で天使界に顔を出したはいいものの雷に貫かれて俺と一緒に人間界に落ちこちたやつじゃないか。名前は知らん。

……乗り物、みたいだな？ こっち向きに開けてみると言わんばかりに扉みたいなものがある。ここから開けて入ればこいつが空へ飛んだりするのか？ ……気になるな。

またニードがなんか言ってるぞ。……おう、お前には見えないか。ならやっぱリツカさんの葉を取りに帰るために来てくれた迎えなんじゃね？これ。なんつー……何でもありかよ?!

あーあー、さいですか。土砂崩れが先つすか。分かってる、俺は守護天使だから自分のことより人間達のほうが大事なんだぜ？俺もそっちの方が重要事項だと思うしな？

さあて土砂崩れを……ってこりゃ何とかならねえわ。イオナズンを使える魔法使いでも連れてこい。吹っ飛ばして、んで被害を拡大してくれるだろうよ。魔法すら使えないただの人間と魔力のない手負いの天使にはどうにも何ねえぞ。帰ろうぜ？

からの、土砂の向こうからの伝言を聞いた俺達。それを胸に歩いて帰る気のアホを引っ搦んで俺はキメラの翼でウオル口に帰ったんだが……体中傷が開いたり新たに出来たりと治ってきたのも散々なことになっていた。おかげでリツカさんに怒られるわ、さっさとベッドにぶち込まれるわだ。

だがリツカさんのお粥が神がかったから問題なし。人間界って幸せの塊じゃねえの？

・

・

・

・

深夜。人も犬も寝静まったウオル口村。聞こえてくるのは滝の音、風がそよぎ木の揺れる音。揺れる木々も眠っているのだろうか、外の魔物達も眠っているのだろうか。月明かりすらぼんやりとしたそんな夜。

さくり、さくりと草を踏むゆつくりとした足音が聞こえてくる。

足音は滝の前で止まり、桶で清らかな水が汲み上げられた。すると今度はざばりざばりと水をなにかに……汲み上げる本人にかけ続ける音が留めなく続く。

月夜の下、水に濡れていればその本人が気にしている灰色はよく目立った。黒になりきれず、白にもなりきれない濁った色は少し濃く見

え、一層彼を「灰色の天使」だと知らしめるごとく、淡く、そこにあ
る。

「……なさい」

水を体にかけているのは清めのつもりなのだろうか、襖みそぎなのだろ
うか。彼は一度浴びる事に何かを呟つぶやいているようだった。

「ごめんなさい」

見開かれた目は罪悪感だけを宿し、その感情すら自分は抱いてはい
けないのだと洗い流す。その声は「哀」を堪えるように震えて。

月に雲がかかり、彼の姿もぼやけていく。

「ごめんなさい」

優しい天使は魔の生命をも悼む。

黒い眼まなこはふいと天を仰ぐ。人になりたかった天使は、空に答えを求
めたかった。自分が命を奪った者達は本当に幸せになれるのだら
うか。ただ苦しんだだけではいけないのかと。

「師匠……」

白い手が空を掻き、虚しく下ろされる。

「迎えに来てください……」

・
・
・
・

10話 翼

怪我がない、つまり歩く度にぴりぴりしないってのはいいねえ。これにより一層村の美化活動に励めるってもんだぜ。ついでに天使の服はびらびらしてて掃除の邪魔だから布の服を買ったぜ。スライムを倒して得た金で。シンプルな服は動きやすくもいいな。俺みたいな地味色野郎には良く似合うのもポイント高いぜ。

ついでにオート天使バレ機能がオフになっていることを願う。こつそり動きたいんだよ俺は。

うーん、いいねえ。煩わしくなくて動きやすい。守備力が心許ないから皮の鎧も買ったし、外に出る時はそちを着ればいいだろ。武器を買う金はなかったが、まあ……本職そちじゃねえし。怪我はもう勘弁して欲しいからな。本当に、痛いもんは痛いんだからな！

おつ、閃いたぞ。天使界に帰ったら大切な物を引き払って、どう止められてもまた地上へダイブして帰ってくるつもりなんだが。

俺でも多分、ダーマ神殿とやらに行けば職業変えられるんだよな？天使が旅芸人になるならいいけるよな？ もっと誰かを守りやすい職業がないかちよつと詳しい人に面談してみたいぜ。ダーマの神官って職業診断してくれるんだろ？

旅芸人より守りがマシなのがあるはずだし。パラディンとか良くねえ？ パーティメンバーの壁になれる仁王立ちってすごくねえ？

パーティ守れるなら誰だって守れるよな？ 博愛の欠片もない俺がなりたがってるのはお笑いかもしれないがよ。俺のは偏愛じゃねーか。鼻真は自覚してるぜ、できるならみんな守りたいが。

てかパーティ組む前提で考えてるけど、セントシユタインとかの都会で人集めして誰にも見向きにされなかつたら悲しすぎるな。

考え事しながら掃除するのはちよつと前に戻ったみたいでなんだかんだ落ち着くな。

リツカたんがやつと返してくれた箒であちこちさっさか掃いてたら、村人たちはなんか恐縮極まれりって顔なんだが。守護天使って本来地味なこういうことをメインにやってるもんだからさ、本職だから

気にすんなって何回言わせるんだ？

それと天使の服はハイネック暑いしタイツダサいしかつたるいから今日はお休みなだけなんだ、動きやすいから布の服着てるだけだからな。ブーツ蒸れるから皮の靴なんだからな。なんでみんな服の話に触れるんだ、そつとしておいてくれ。

あとちよつとしたら掃除も終わるし、それが終わったら何でも雑用を言ってくれたらいいんだぜ？ おう、みんな失せ物はないか？ 健康で幸せか？ 病気は効きそうな薬草をとつてくることしかできないが、怪我に関してはホイミを覚えたから、今日から俺でも即時対処できるぜ！ 子どものお守りとかでもじゃんじゃん言ってくれよな！

姿が見えると要求をみんなに直に聞けてほんと便利だぜ。神様ありがとう、俺の邪魔な翼をもいでくれて！ 出来るならもつと早くにダイブを勧めてほしかったぜ！ 翼を捨てるには翼を使わずに空を飛べばいいなんて思いつきもなかったからな！

よつ、元気なおばあちゃん、形見の指輪、ちゃんと持つてるか？ うんうん、それはよかった。貴女に神のご加護ありますように！ 九十多まで生きたあんたのばあちゃんみたい長生きしてくれよな！

おおそつちのぼうや、ニードに天罰は今は無理だぜ。めちやくちやあいつ、親父さんに怒られてつからな。今日はそうじゃない？ ん？なんだ？ お手伝い？ ……お前気が利いて可愛いなあ。でも俺の仕事はあとちよつとで終わるから大丈夫だぜ？ ほら大きくなれよ、ほらほら高い高いしてやろうか？ 要らない？ 抱っこで十分？

……俺そんなに貧弱に見えるか？

シスター、もうすぐ掃除が終わるから教会の周りはピツカピカだぜ。外で祈るのも、太陽を浴びて風を感じるなんて自然の息吹を感じれていいことだよな、俺も一緒に祈ろうか？ ……断られた。

……要らないってか？ ……ん？ なんで俺に祈るんだ?! ただの天使だぞ、天にいらつしやるのは神だから！ 天使は厳密には天使界にいるから天までは届いてないから！ おい、ちよつと！

だあああああつ！ ちゃんと見守ってるから本人に言ってくる

のはやめてくれ！ 恥ずかしい！

あとおばあちゃんに手渡しでお供えもの、というかお布施？ もらったらどっちゃかっていうと孫扱いされてるみたいでおもしろええええ!!! 何この感覚！ このおばあちゃんの若い姿も知ってるのに、俺がおばあちゃんに孫らしいことされてるってやばいぞこれ！ ……これは……？ 安全お守り……？ ……不甲斐ない天使でごめんな！

「……アーミアス様、じゃなかった、アーミアスっ！」

んん？ 今度は……おお、リツカたんだ、どうしたんだ？

リツカたんを前にしたらポーカーフェイスが一気に崩れてニヤついてしまうキモさで悪いが、通報しないでくれ、な？ な？ リツカたん太陽のもとだと可愛さフルスロットルで吐血しそうだぜ！

「あの、お願いがあるの。後で来てくれるかな？」

「勿論。俺に何でも言うてください」

リツカたんのお願い?! やばい、やばいぞ、俺の全身全霊をもってして叶えるしかない、俺が叶える！ 俺が！ 誰にも譲らないからな！ お願いがあるのって言う時のリツカたん可愛すぎな！ ちよつと迷った感じに視線をさ迷わせたリツカたん！

心のアルバムに今ジュツと焼き付いたぜ！ リツカたんまじ可愛い！ あーその、それだよ！ 健気が全開！ 俺の心にぶつすりくる！ 刺さった！ 今刺さったからな！ 一万六千九百七十二本目の俺の心のリツカたん大好きゾーンが！ 本日三十二本目じゃね？ やばくね？ 今日サービス多めじゃね？

これは早く行くつきやないとリツカたんが家に着くまでに掃除を高速で終わらせた俺はリツカたん追いかけて駆け出した。すぐに追いついてよ、そのまま並んで帰るとかやばくね？ まじこれ遠目から見たらリツカたん俺、付き合ってるみたいじゃね？ 俺が師匠みたいな濃い眉イケメンだったら既にゴールインしてるくね？

……ちくしょう！ほんと横からのリツカたんも可愛いなあ、お疲れ様って労わってくれるリツカたん可愛すぎて目から血の涙が出そうだぜ！ ここで謙遜……というか当たり前だし……する俺。なん

つか、なんつか、リツカたん可愛すぎて俺が最高に空気っていうこの空間最高、リツカたん引き立てて眩しいぜ！

ちなみに朝から掃除に忙しかった俺は天使像に大量の花が供えられていたことに気づかず、あとで村人たちの優しさにほっこりするようになった。これだからやめられないぜ、守護天使。

.....

「天気、いいですね」

「ええとても。日差しが心地いいですよね、アーミアス様」

「はい。掃除日和ですし」

すっかりご自身の魔法で怪我が治ったアーミアス様。包帯やガーゼを当てている姿に見慣れてしまい、何も隠されることなく晒されたお顔は新鮮で、そのせいかいつもよりさらに美しく、ぎごちなかった表情も少し柔らかくに見えて眩しい程です。恐れ多い。

なのに隣に立っている今、幼い頃から一緒にいたような懐かしい感覚があり、いつまでも隣にいたいとまで思えてしまいます。心に染みとおるように。

いつもの服ではなく、誰でも着ているようなただの布の服をお召しになったアーミアス様。誰もがあの鳥のように軽やかな服のアーミアス様に見慣れていきますから、それとなく聞きます。でも返ってくる答えはいつも同じく、掃除しやすいから布の服を買ったと。そして掃除はいつもしていることなのです、と穏やかに答えられる。

ああ、アーミアス様が見えない頃。優しい風が落ち葉を集めているのを私は不思議に思っておりまして。それはアーミアス様だったのですね。すっかり疲れてため息をついた時、励ますように肩を叩いたのもきつとアーミアス様なんでしょうね。

「おばあちゃん、形見の指輪がありますか？」

「ええ、ちゃんとありますよ。アーミアス様、あの時はありがとうございました」

「いいえ。思い出を守るのも俺達の務めですから」

すつと一礼したアーミアス様は、晴れやかに言いました。神々しく、とても優しい声で。

「貴女に神のご加護ありますように」

神の使いその人に言われたおばあちゃんは、嬉しそうに帰っていかれました。彼女、長生きできそうですね、とアーミア様は嬉しそうに言い、おそろく私たちを何代も前から見守ってくださっているアーミア様にはおばあちゃんのおばあちゃんすら知っているのでしょうか……天使様のお墨付きがあるとなればおばあちゃんも喜ぶでしょうね、後で伝えないと。

また掃除を再開したアーミア様に、今度は小さな男の子が近寄ります。アーミア様を見上げてキラキラした目で、あんなに懐いた様子で。どことなく穏やかなお顔になったアーミア様はぽんぽんと男の子の頭を撫でてやり、何か言ってやっているようです。そして華奢で、見た目だけは私よりも幼い姿だというのにひよいとその子を抱き上げて。

アーミア様の周りには今日も人が集います。村を守護する天使様にみんな夢中なのです。例えばアーミア様がリツカの前だけ、あんなにも笑顔になるのだとしても……誰から見てもアーミア様が気に入っているのはただ一人だとしても、みんなも彼に惹かれるのです。

かく言う私だってそうですよ。彼のボーイソプラノの声をただ聞いているだけで幸せを感じますし、心の底から私たち人間とは違って善道を行く彼に羨望を感じます。

天使様というのは、こころも聖なる存在なのかと……今もあのニードは叱られているようですが、自分の身を危険に晒しただけでなく、アーミア様が守ってくださいたから無傷だったこと、つまり昨日の時点では傷が癒えていなかったのに無理をさせてしまったことを叱られているのです。怪我をしていきつと、歩くだけでも辛い状況でアーミア様は守る、そんなお方なのです。

身を呈して私たちを守る守護天使様。一体彼は、どうして守ってくださいるのでしよう？ 天から遣わされた、と彼は言います。私は人間ですから天使様のご意思を図る事はできません。でも、私はその立場だとしても……と恐れ多くも考えても、こころも守れるのでしょうか、

疑問でしかありません。

あら、リツカが来ました。途端に、優しくも表情に乏しいアーミアス様のお顔はぱあっと華やぎます。アーミアス様は本当に、最初から……そうですね、彼が目覚める前から、私たちがアーミアス様を見ること出来るよりも前からリツカは天使様に愛されているのです。

今から考えればリツカの周りに悪いことが特に起きなかつたのはそうでしょう。ウォル口村はとても平和なところですが、それを考えても、です。

不遜で迷惑な客はリツカが追い出すまでもなくこの村から出ていかざるを得ないことになっていましたし、リツカの宿屋の周りはゴミ一つ落ちていないことがあります。ほかの場所も気づけば綺麗になっっていることがあります。リツカの家と宿だけは別格です。そもそも木の葉一枚寄りつけないのです。

信心深いリツカだからこそ天使様の存在を敏感に感じ取れ、愛されていたとも考えているのですが……やはり、彼の感情はリツカには、リツカにだけは惜しげもなく晒されるのです。それが羨ましくもありますが、私があんなに優しい人になれるかといえますとやはり無理でしょうから、そういうことでしょう。

「あの、お願いがあるの。後で来てくれるかな？」

「勿論。俺に何でも言っってください」

ああ、アーミアス様、幸せそう。テキパキと掃き掃除を終わらせたアーミアス様はこちらにもまだ明るい笑顔の消えぬ美しい顔を向け、一礼すると箒を持ったまま走って追いかけて行ってしまいました。とてもいいものが見れました。

少し前まではたまに、リツカがこのまま天に連れていってしまわれるのでは、とも危惧していました。リツカは昔と違って体は元気になりましたが、天使様の愛を受けては……と。ですがそういうことはないでしょう。アーミアス様は留めて下さるでしょう。

リツカに追いつき、共に並んで歩き始めたアーミアス様の後ろ姿には当然、純白の翼はありません。失ってしまったそれに悲しまれることも何故か、ありません。

ですが私の目には天使様の背には光の大きな翼があり、リツカを包み込むように守っているように見えるのです。
・
・
・
・

11話 遺跡

頭にきゅつとおろしたての青いバンダナを巻く。これでホコリ色の髪色をマシにかバー出来る。なおかついざって時のための包帯の布、確保って訳だぜ。守備力はそもそも期待していないしな。所詮は魔力の箆っていいない布切れだし。

にしても俺、ルイーダさん、という女の人の様子が心配だ、見に行ってくれと言ったリツカさんの頼みを聞くべくこうして俺は単身外へ出る準備をしているんだが……皮の鎧にバンダナ、皮の靴、ないよりマシなクソダサ天使のタイツ。こんな装備でビジュアル的に大丈夫なのか？ と思いつつも浮きに浮いてる服装に銅の剣を装備して外へ向かおうとしたらみんなから差し入れ薬草が降り注ぐ。

……ちよ、そんなに沢山！ 薬草、こんなに貰っていい値段じゃないんだぜ！ 俺がリツカさんの頼みを聞いているのは人間の生活を円滑に安寧にするという守護天使の役目をただこなしているだけで、下心はあると認めてもだ、リツカさんには俺が寝込んでた時の薬草やら包帯やら、果ては寝床、からの飯まで用意してもらってたんだぜ?!

俺が天使じゃなくて人間でもこれぐらいのお礼をして当然だろ、だからそこまで頼りなく思わなくても達成してくるからよ！ しかも一昨日と違って万全だぜ?!

……だが前科持ちの不甲斐ない俺が何を言ってもつつかえせなかった薬草を袋に突っ込み、村の入り口ではニードの取り巻きのなんとも言えない顔に見送られ、俺はウォル口村を後にした。

ひいふうみい……何個あるんだこれ。愛が重いぞ草なのに。だが、これで、怪我ひとつなく帰ってこられるな。怪我は痛いだけじゃない。誰だつてしない方がいい。優しいあの子を傷つけてしまうからな。だからこそ守るんだが、守る相手がないうちはそれこそ全力で

心配の種を潰さないとな。

レベルも上がったし、怪我也治つたしもう苦戦はないだろうと身構えてたら魔物が近寄ってこなかった幸運。ありがたく神のご加護だと思ふことにしよう。

・・・

キサゴナ遺跡。昔はここをウォル口村の人間たちはセントシユタインへの通り道にしていたってやつだな。おう、知ってるぞ。ただここから向こうは管轄外で遺跡自体に入ったことはないから「知っている」なんてマジで存在だけなんだがな。

魔物もうじやうじやいるしな……聖水でも撒いて姿を隠すか？だが金が足りなかったから聖水は一個しかねえんだよ。つか買った時の視線が痛かった。天使が聖水を買うなんて……ってな。

言わせてもらおうと天使はそのままの姿でも魔物には見えてるし、天使の聖なる力と聖水の認識阻害は全然別の力だからな？トヘロスやステルスが使えない以上、円滑に魔物の巣窟を歩き回るためには聖水を使つたって普通だろうが！……と正直にきつく言えないのがややヘタレの俺だ。人間の夢を優しく見守るのも天使の勤め。夢は壊さないで曖昧な顔しておく。

……つうことは俺はずつと清らかじゃないとダメなのか？

というところでもないぜ。てか普通に大丈夫だ。既にリツカたんの前でしょっぱなから無様にぶっ倒れてるし、三日目に大勢の前ですっ転んだし、俺はある程度のダサさは既にバレてるからな。地味ブサイク顔とかも全開だしな。だからあまり気にすべきことじゃない。天使たれと清らかに、なんて俺には無理に決まってるし、ちようどいい。

つか師匠みたいなハゲでさえもたまに間違えるんだぞ？俺の呼び名とか、タイミングとかな。だから天使は完璧さじゃない、この話は終わりだ！

ほんとこの遺跡探索が終わったら迎えに来てくれ師匠。いつもいつもリツカたんと俺の時間を邪魔してきたのに今回はいないのは悪意を感じるぜ。ハツ、もしかして、俺を気遣って……？ ないわー、な

いない。それぐらい空気を読めるなら師匠、髪生やしてるわ。

つかハゲの髪事情なんざいいんだよ。せつかくキサゴナに来たんだがなーんかな。魔物じゃない気配がするぜ。これがルイーダさんなのか？ あまりにも近い。見に来なくてよかったんじゃないか？

とか思ってたんだがな。入り口が見事に閉ざされてやがる。まあ当然っちゃ当然なんだが。開けっぱなしだとたまにニードみたいなの血気盛んな勘違い野郎が冒険とか洒落込んで突撃、準備もろくにしないでええから魔物に殺されアボン、とかありえるだろ？ 笑い話にもなんねえだろ？ 先を見越してちゃーんと閉鎖する時に封印してくれてたんだな。まあ今は困るんだが。

ウオル口側は閉鎖されててもセントシユタイン側は開いてるかもしれねえだろ？ そこまで確証はねえぞ？ 封印のルイーダさんがいるということになるからな、最悪だ。さあーて、どうやったら解けるのか？

……封印したのは天使じゃなさそうだな、人間がやったみたいだ。この石をなんとかできそうにもないし……。

「?!」

つめてえ！ 思わず叫びかけたわ！ 首筋をヒヤツとした感覚が撫でていったみたいだぜ、気色悪いな。……なんだ幽霊かよ。オツサン、成仏してねえみたいだな。なあ、リツカたんのお父さん。娘さんを俺にください。

冗談はさておき。なーんにもなんにも言っつてこない親父さんは滑るように歩いていく。ついて来いってことだよな。未来の息子がお父上に逆らうはずもなく、俺は素直について行っただぜ。

うーん、お父上とリツカたんは似てないな。当然かもなあ、リツカたんは母親似なんだろ。

お父上のフラインプレーのおかげでボタンをポチツとした俺。とつとと洞窟の奥に向かうとするか……んなわけないだろ。

幽霊のまま、ということは何かしらの未練があるってことなんだぜ？ 未練を何とかして解き放つということをしなけりやこの世をさ迷いっぱなし。なのに天使ぐらいにしか見えないというなんとも哀

れな亡霊だ。しかも放置したら下手したら魔物になっちまう。

だから幽霊は速やかに成仏させねえといけねえ。

つていねえ！ 逃げたのか、それとも扉が開くの見届けてどっか行っちまっただけなのか？！

クソツ。俺じゃダメなのかもな……。だが俺は諦めんど、娘さんは俺が守る！ だから成仏！

決意を胸にずんずん進んでいけば魔物がどことなく怯えて道を開けてくれる。この奴らはなんて優しい奴らなんだ、こんな魔物ばかりだったら世界も平和になるだろうに！

それに報いるためにもはやく幽霊親父とっ捕まえねえとな。……あれ？

冗談みたいなことを考えつつ俺は遺跡の奥へ奥へと進んだ。

・
・
・

12話 切迫感

……ほんと、油断してたわ……。

峠の道が土砂崩れで通れなかった私は、宿王の娘リツカを勧誘するために、キサゴナ遺跡という古いルートを通ってウォル口村へ向かっていたのだけだ。

やっぱり何分古い遺跡で、あの地震ではあちこち崩れていたって訳よ。そして運悪く落石で足を挟まれちゃって、このザマよ。

それに最悪なことに、さつきこころ一帯ではボスとも言える規格外の強さの魔物を見ちゃったから、いくら私に腕の覚えがあっても……動けない状態でここにあいつが来たらもう絶体絶命なの。遠くの方から地響きが聞こえてくるから戦々恐々。

足自体の傷は大したことなくて、本当に挟まれているだけっていうのが不幸中の幸い、かしら……。でも抜けない限り動けないんじゃないの。

試行錯誤しながらも、だんだん地響きが近付いてくるのがはつきりわかって焦ってしまふ。そしてもし音を立てたりなんかしたら、あいつが気づいてやってくるかもしれない。静かに岩をのけるなんてことを手早くやらないと……。

そんな焦る私を助けたのは……見た目だけは幼さも残る少年だったわ。その幼さを文字通り頼りないと思う事はなく、そういうものなのださんぜんと納得できる容姿。薄暗い遺跡の中でも燦然と輝くオーラ。真面目そうで、星星の光を宿した瞳は私を見ると探し物を見つけた子供のように輝いたの。

私には、彼が人ではないってすぐ分かったわ。いいえ、誰だってその事は分かるでしょうけど。人ではないけれど、当然魔物でもない。清浄なオーラは魔の者とは相しれない。そうね、ぴったり来る言葉な

ら天使、でしょうね……。まさか本当にいるなんて思いもしなかったのに。

彼はそう高級な装備はしていなかったわ、でも彼は手練だとすぐわかるの。身のこなしが羽のように軽やかだったから。

そして、彼はあいつの存在に気づいているみたいで小声で言ったわ。

「貴方がルイーダさんですか？」

「え、ええ」

「無事ですね、よかった。今足を解放しますから……」

そう言つて、天使の君が岩を持ち上げようとした時。

あいつが、来たの。

手練でも苦戦しそうな巨体を見て危険もわかったでしょうから逃げてと言つたのに、彼はなんとということもないように剣を抜き、私に向かつてこう言つたわ。

「人が危険にさらされているのに、俺が放っておける訳がないんですよ」

使命に帯びたように……いいえ、たくさんの人を見てきた私にはわかる。彼は心底そう思っているのだと。星の瞳に輝くのは底知れない意志。それを当然と思う善の心。そして、母親のように私を見る目は……日常の中ふと感じることのある不思議な感覚に似ていて、なのにそれよりずっと優しかったわ。

そして、彼は強かったの。

……

俺はちやーんとリツカたんの親父さんに挨拶することが目標じゃないだろと思ひ出してだな、さっさと遺跡搜索を本格化していた。あちこち魔物がいるが積極的に向かつてこない限り放置だ。たまに向かつてくるが数回斬ればなんてことは無いヤツら。受けるダメージは薬草で回復、完璧じゃね？

……ん？ 目標確認！ おーっ！ ルイーダさんも綺麗な青い髪だなあ、これはこれは、リツカたんに早く会いてえ！ じゃなくですつげえ巨乳美人。谷間がよく見えるってほんと、眼福眼福。でもっ

て彼女結構ピンチじゃね？ 近くに魔物いるよな、強いヤツ！ 早く助けて脱出しないと俺もやべー。

だからよ、よっこら助けようとしたら嫌な予感的中してなんかデカイヤツ出てくるし！ クソツタレ、先に倒すしかないとかマジないわー、普通小心者の俺みたいなのはスルーして出たくね？ こんなでかいやつに向かってこられたらタダでさえあの大異変で脆くなった遺跡が一発アボンしそうじゃね？ つか崩れたらアイツもろとも埋まりそうじゃね？ それは勘弁！ 圧死した天使とかやめろ！ 師匠が破門しかねないぜ！

つかコイツに踏み潰されたらよ、見た目通り軟弱ってわけじゃない俺でも見た目度通り、無様にべちゃつと潰れそうじゃね？ やばくね？ でかくね？ ほんとねえわー、デカイだけでこんな脅威とか。いやまあ、絶対俺より力あるヤツだからデカイだけ、じゃないだろうが！

戦いたくないわこんなヤツと！ どうやってこんなやつ倒すんだほんと！ こつちの攻撃手段はほぼ剣で殴るだけなのに、クソが。だが俺、これでもれつきとした天使なもんで。

天使らしからぬ天使って自覚はあるぜ、だがまあ人間を天使界一愛してる天使なんだぜ！ 自負してるからな！ つまり人間を見捨てられつか。逃げて！ って必死に言われてもお断り！ せめてべつぴんさんの盾になってから死ぬ！ 人間を守ってとか本望だからかな？ リツカたんを守るのは超本望だが！

でもって人間をなんとしても守るのはさ、俺のポリシーだから！ 人間はウオル口村出身じゃなくても、在住じゃなくても俺が守る！ 守護天使以前に俺は天使ぞ？

あとさ、こんなきらきらした美人死んだら世界の損害だし！ いかにも硬そうな皮を持つ……でかいヤツ。名前は知らん。向かってきたら思わず斬りつけたんだが、あんまり効いてなくね？ やばくね？ でも……ダメージは通った！ これで勝てる！

幸いルイーダさんではなく、斬りつけてきた俺しか見えていないヤツはあっちではなくこつちに突進してきた。まあ俺は避け……：られ

てねえけどな！ 腹にもろに喰らってクソ痛い、まあ死ぬほどじゃねえ。

むしろこっちのダメージの瞬間にボコってやったからアイツの体からも血がにじみ出てるぜ。効いてる効いてる、でもってクソ怒ってる！ オラオラこつちだこつちだ、単細胞！

つーかこちとら村人たちの好意の薬草にホイミがあるんだぜ？

狂暴ででかいだけのやつに負けるわけがねえだろ！ オラオラ！

それよりあいつが飛び跳ねて落ちてきたガレキが体を打つ度、痛みより遺跡が心配になってくるんだが。つか、頭の皮が切れて目に血がかかって見た目やばくね？ レディにやばいもの見せてる俺、万死に値しそう。

ヒットアンドアウェイを心がけてド突いてんにヒットアンドダメージを繰り返して、クソ苦い薬草をいちいち貼っていられなくて貪りつつ突き刺したり切り裂いたり連続。手が痛くなってもお構い無しで、無駄に体力があるらしいな、なかなか倒れてくんねえ。マジねーわ！

俺って戦闘専門じゃないんだぜ？ そういうのは見た目からも師匠みたいな稀有なムキムキ天使の役割じゃね？ 俺は地味に日常生活に密着した助けをするタイプじゃね？ 掃除とか、失せ物探しとか、成仏とかが専門だから！

天使の中でも俺、戦士じゃねーから、マジで！ クソ、時間的に苦戦しすぎだからダーマ行ったら戦士になるか！ 腕力がもつと欲しいぜ。

戦い始めて数十分だろうか、体内時計が狂ってるから本当の所はわからないが、そんなもん。

近くの柱がミシミシ言ってきたからこっこもうダメかもしれないと、反撃覚悟でデカイヤツを串刺しにしてみたらやっとなら倒せたわ。マジ長すぎ。ぶっすり突き刺したから引き抜くのに苦労して、死んだこいつの体に触れて勿論、祈る。

……すげー苦戦するぐらいお前強かったからさ、次はその力、みんなが幸せになれるように振るおうぜ、な？

そいつもほかの魔物と同じように青い光になって空気に溶けたのを確認して、ルイーダさんの方を見れば……ん？ 抜け出せてるじゃねえか、良かった良かった。

「ありがとう、助かったわ」

「ご無事でなによりです」

見た目は無事、だよな？ 実は無事じゃないとかないよな？ 怪我は……見えるところにはなさそうだ。足をかばってる様子もないし、ほんと良かった良かった。じゃー、ウォル口まで護衛しようか？ なんか護衛いらぬぐらいこの人強そうだが。俺より強くね？ 足挟まれてなかつたらアイツに勝てるよな、絶対。

上下関係にあるクソほど厳しい天使の俺にはわかるぜ。戦闘力なら間違いなく俺の方が弱いわ。くう、もつと強くなりてえもんだな！ んー、まあいいや、そんなこと。強くは今からでもなれる、だろ？ 誰かを守るには弱くちやどうにもなんねえがな、それ以上に大事なのは想いだからな。あとさっきのデカイの以外は俺でも余裕だから護衛はできるだろ。

つうことですつげー美人のルイーダさんを連れて、ニードの時とは段違いの丁寧さで俺はウォル口村に帰還した。

ついでに目に垂れてきた血はきっちり拭き取っておいたが、髪の毛が固まった血でバリバリになっているのはごまかせなくてリツカたんに心配されてしまい、絶対戦士になって怪我を笑い飛ばせるようになろうと誓ったりもしたぜ。

ほんと俺、なよつちいなあ。

・
・
・

13話 日進月歩

・・・

ただいまウォルロ！ ただいま非戦闘地帯！ 大勢の人がおかえりと言ってくれるから間違いないくウォルロ村の人たちは天使よりも優しい存在。俺が今認定した。何回でも認定する。ここが第二の故郷ってやつじゃね？ まあ守護対象の地を守護天使が大切に思うのは当たり前だが！

ルイーダさんはリツカたんに用があるみたいだからこのまま家の方に案内を……って今の時間リツカたん宿屋の方にいたわ。土砂崩れで塞がれているようが、宿屋の掃除どころか受付まで欠かさないリツカたんやばくね？ やばいから俺もつと手伝いたい。

手伝って手伝いまくってリツカたんにずっと居てくれる？ って言ってもらいたい。従業員に俺はなりたくない。ご飯少しと寝るところを貸してもらえたら給料もいらぬ燃費の良さだからどうよ？ 雑務には定評があるぜ！ ちなみにご利益はない！

言わなくてもいるけどな。嫌がられない限りいるけどな！ もう少ししたら一旦、帰る方法を探すためにここを離れる、つもりだが。あの変なドア気になるし。ハゲ師匠のタクシーが駄目ならセントシュタインの守護天使に助けを求めりゃいいだろ。

俺以外の守護天使は見習いじゃないから翼がでかいしなんとかなるだろ？ ……セントシュタインの天使も俺と同じことになってたらどうしようか。もつと向こうの村の守護天使に……以下ループつてやつだな。

……本当は離れるの嫌に決まってるんだろ！ でも荷物があるから仕方ないだろ！ リツカたん成長日記が天使界に置きっぱなんだよ！ それを見られたらリツカたんのプライバシーが問題だろ！ あとあれは俺の大事な宝物だからな！ 大切にいつまでも懐に入れておきたいんだよ。本物の方が可愛いけどよ。それとこれはまた違うだろ？

とか色々考えつつ到着したリツカたん自慢の宿屋の扉を開ける。

そこにいたのは勿論、清潔なエプロンにオレンジのバンダナ、青いおかつぱ、ぱつちりした目、ほっそりしてるけど働き者でとつても真面目で天使に敬虔なパーフェクト可愛い麗しの存在リツカたん。

今日もさいっこうに可愛いぜ！ 仕事モードのキリツとリツカたんを心に永久保存！ 心のアルバムにジユツと焼き付けリツカたんペろペろ！

だがぱつちりした目が俺を見た途端、釣り上がったのに俺は後ずさったが。もしや俺のブサイクレベル上がったのか？と疑ったがそこじゃなかった。

「アーミアス、怪我してるじゃない！」

「……はい？」

「髪の毛、血がついてるの！ 大丈夫？ 貰った葉草使い果たしちゃったの？」

「あ、違いますリツカ。怪我は治ってますよ。血を洗ってないだけです」

「……そう。あー、心配したんだからね！ 私のわがままでまたアーミアスさ、アーミアスがあんな怪我したらって……。おかえりなさい！」

聞いたか？ リツカたん俺の心配してくれたんだぜ？ しかもおかえりなさい、だぜ？ やばいぞ。優しいなんてもんじゃない。彼女が女神様なんだろ。俺リツカたん信仰するわ。あ、翼をもうでくれた神様もすごいと思うぜ。だがやはり大正義はリツカたん！

ペろ！

「ただいま帰りました」

めつちやにやけながら返事するの超幸せ。

こんななに優しく急いでこっちに来て心配してくれて俺にその曇りのない眼を向けているんな表情を見せてくれるリツカたんこそ最強！ もう心打ち抜かれてやばい、動けねえ。

にやにやなんてレベルを通り越して顔がすごいことになってるが流石はリツカたん、目をそらしたりしないぞ！ リツカたんの目に不審者が映ってると思うと胸が痛いが今はこの幸せを……。

「あらあら、ちょっと私、お邪魔みただけけどお話いいかしら」

あつやべ。ルイーダさんのこと忘れてたわ。なんていうかこの大人の妖艶な雰囲気を持つルイーダさん、間違いなく俺より年下の人間なのはわかるのに「さん」付けしないと落ち着かない不思議な雰囲気があるな。今更だが。

ルイーダさんはなんとなく微笑ましいものを見て優しい顔をしている感じだが、今の俺のどこが……あ、リツカたん。リツカたんが心配してるの微笑ましいの極みだわ。ルイーダさんよくわかってるな！ 握手したい！ ちょっと美人の手に触れたいのもある！ 下心やべーぞ。

でも俺さりげなく警戒してるリツカたんを庇うようにしてるから無理だな。もちろん警戒つっても何この人？ みたいな警戒だから俺まじ立ってるだけ！ ……俺邪魔かもしれねえ。

「今の間に宿の中を見せてもらったのよ。小さいけど掃除が行き届いていて清潔で……」

あざーす。もちろん普段はリツカたんがやってるんだから素地はリツカたんだし、リツカたんがマメに掃除してるからこんな素晴らしい宿なんだぜ？ 床の板が飴色になってるだろ？ ベッドの下にホコリがないだろ？ 壁が変色してないだろ？ 全部リツカたんだから。

「感じもいいし、とつてもいい宿ね」

なんたってリツカたんの宿は世界一だからな！ 清潔感は勿論、居心地よくて料理も美味しい！ 最高の宿屋だぜ！

「はあ、ありがとうございます」

ああ謙虚なリツカたん！ なのに困惑したリツカたん！ ぺろぺろ！ ぺろぺろぺろ！

「私は貴方をスカウトしに来たの。この様子なら大事そうね」「スカウト？」

「ええ。今セントシユタインの宿屋に人がいなくてね。宿王の娘の貴方ならと思ったのだけど、やっぱり素敵な宿屋だし……どう？ 街で宿屋を営むつもりはないかしら。私は貴方が伝説の宿王を超えること

が出来るって確信したわ」

「すごいぞ！ でもってマジこれ
どうすんの？」

「リツカたん……。リツカたんが引き受けたとしたら……。リツカたんのいないウオル口村……。リツカたんのいないウオル口村なんて……。天使の理よりやばくね……。」

「でもって俺は空気だから、話に入っちゃいけねえから無言で聞いているだけなんだが。リツカたんはそれを聞くとびつくりした顔をした後、俯いてしまった。」

「うーん……。ルイーダさん、難しいぜこれ。リツカたんにはな、じいさんがいるから簡単に村を離れられねえんだぜ？ それに親父さんが残してくれた宿屋をほっぽり出せねえんだぜ？ リツカたんは優しいから特にな？」

「……。無理です。私にはそんな……。」

「沢山人を見てきた私が言うのよ？ 貴方なら大丈夫よ」

「買いかぶって貰われると困ります。……。それにお父さんが宿王だったなんて信じられないし……。」

「……。そうね、すぐに返事を聞くのは無理そうね。あとで、お返事を聞かせてもらえるかしら」

「おお、ルイーダさんは引き際もいいらしい。そのままこの宿に泊まるらしく、久しぶりにリツカたんの宿屋にはお客さんが入った。これルイーダさん、余計に勧誘したくなるやつだよな？ リツカたんの接客最高だし。」

「……。じゃー、俺は髪の毛洗ったら村のパトロールでもすつか。お客さんが入ったらもう俺に手を出せることはねえしな。せいぜい外の掃除ぐらいだが綺麗なもんだ。さつきまでにリツカたんが掃除したんだろう。」

「それにしても……。リツカたんがウオル口村を出ることがありえる、とか……。今まで考えたことなかったぜ。今、他にも村から出ようと考える若者がいないわけじゃないぜ。実際今まで行った人もいる。それも何人もだ。やつぱり田舎だしな。」

なのになんてか俺はリツカたんだとずっと、ずっとウォル口村に
いるって信じてたんだよなあ。リツカたんはウォル口村にいる、ウォ
ル口村にはリツカたんがいるもんだって。

……ああ、大好きなリツカたんも俺たちをおいて成長していく。

今は同じ年ぐらいの見た目のリツカたん、きつと目を離れたらすぐ
に大人の美しい女性になって、どこぞの野郎と結婚するかもしれな
い……ナツミたんみたいに孫も……やめよう。

俺はずっと見守ってきたんだからそんなこと、今更だ。人は成長す
るんだぜ、天使よりもずっと早く。生きる時がそもそも違うんだか
ら。俺たちもな、心も体も成長するが、ずっとずっとゆっくりだ。俺
が師匠ぐらいのタツパになる頃には……あと何百年か、かかることだ
ろう。

俺たちにとって人間の成長が早いのは当たり前なんだから、喜んで
もこうやって悲しんじゃ駄目なんだぜ。

嬉しいと思わなきゃな。リツカたんが、小さくて体の弱かったリツ
カたんがこんなに大きくなって、元気で、働いてて、すごいところか
らスカウトが来た。素晴らしいことじゃないか。リツカたんが認め
られてるってのは、誇らしいじゃないか。

なのに、なんで俺、寂しいんだろうなあ……。

・
・
・

14話 懐古心

「神のご加護が、貴方の次の生をも安らかにありますよう……」

純白の翼がふわりふわりと羽ばたき、眩いばかりに真っ白い手を差し出して淡く微笑む天使様。守護天使様の前で清浄な光に解かされていきながらも安らかな顔をした老人の幽霊が嬉しそうに彼の手をとる。

清い心の持ち主。職業柄沢山の人間を見てきた私には何人も心当たりがある。だが彼は間違いなく別格だな、と感じつつもその場を離れた。

彼は見た目からもわかるように人間ではなく、天使様なのだ。優しいのも当然と思われたが、時折目にするもう一人の天使様よりこの守護天使様の方が清らかな天使らしいと思ってしまうのはきっと失礼なことなのだろう。

未練を持つ私が優しい優しい天使様と話してしまったら、私も成仏しそうで怖かった。しばらくは近づけそうにない。……まだ、向こうには、私には、行けない。そう思っていたから。

ああ、娘のリツカと同じくらいの子の少年にしか見えない天使様は、今日もふわふわと空を舞い、人々の生活をそれとなく助けては幸せそうにうつつすらと笑うのだろう。

その助けられる人間側にいた私は、どれだけ助けられてきただろう。なのに、最後は人知れずその手を拒んでいるなんておかしいものだ。

今日も転びそうな老婆を支え、魔物の脅威から誰かを守り、悪戯な風を装い村の掃除をするのが、人々を見守る天使様の正体。私たちが想像しているよりもずっと幼く美しく、身を挺す優しさを持ち、誰にでも手を差しのべる慈悲深い姿は……私にはやはり眩しすぎた。

彼はどうしてカリツカの周りに飛んでいることが多いのだけど、その時は特にご機嫌の様子だから少し誇らしくあつたりするのだけど。

……私、ロベルトが死んでからも何年も経つ。死人でありながら現世にとどまっているのは未練を捨てきれないのか、私は今日も天使様に見つからないようにウォル口村をぼんやりと眺めているしかない。

幸いなことに娘は今日も、風邪すらひかず、大きな怪我もすることなく、明るく元気に笑っている。それが嬉しくて、嬉しいのだから未練なんてないだろうと思うのに。だが私がこうしている時点でのトロフィーは忘れられないのだろうな。

灰色の髪をした天使様が、今日もリツカに挨拶した。ああ、今日はもう帰られるのだろう、天使様の世界へ。また来ますと寂しそうな彼が、大人の姿をした天使に誘われて空へ帰っていったのを私は隠れつつもそっと見守っていた。

天使様と違ってこっさり何かをすることも出来ない……そもそもものに触れることは出来ない……私は、あの場所とリツカを行き来することに無情感を覚えてセントシユタインにふらりと向かっていた。私が結局捨てた宿は、今どうなっているのだろう。それを知れたら天へ昇れるかもしれないな、と考えたりして。

結局、今は宿が開店すらしていないのを知り、私は失意のあまりどうせ魔物にも見られないのだからとのんびりと遠回りに古い遺跡からウォル口村に帰っていったのだ。

途中で起きた大きな地震で、よもや天使様が降ってくるなんて……死人の私ですら思わなかったのだから、誰も想像できなかつただろう。

……

天使様の降臨から少し。ずっと私たちを見守ってきた天使様が村人たちの中で幸せそうに過ごしている姿も見慣れてきた。特に……やっぱりかの天使様はうちの娘のことが気になるらしく、神々しいまでの笑顔がいつにもまして光り輝いている。

……父親としては少しばかり複雑だが、相手は何分、天使様。天へ

連れていってしまうつもりは毛頭ないらしく、またあれは恋愛とも違う愛する感情、こちらからなにか言う事は恐れ多くて出来そうもないから良かった、と言うべきだろう。

そういえば遺跡で封印の解き方を導いた時、彼が私を見て微笑んだのは……私のことを誰だかやはり分かっておられるのだろう。だがやはり、あの時も私は逃げてしまった。

そして、さらに月日が過ぎた、草木をも眠る真夜中のこと。

滝の音だけが聞こえるウォル口村の一軒の家から静かに出てきたアーミア様は、数日ぶりにひらひらとした天使の服を着ていらつしやつた。満月の夜である今日は思いの外明るく、彼は空を見上げながら目を少し細める。今までは真夜中は特に気づかれないうようにしていたが、まあ、もういいだろう。

リツカに私の夢、いや……リツカとて宿屋の主として、あの夢に等しいものがあるだろう。どうか、私のことで少しは後押しになって欲しい。どうか、好きなように生きて欲しい。そう祈るばかりに私は、彼が私に気づくのを待っていた。

ああ、星の宿った黒い瞳に本物の星空が映り込み、えもいえぬ美さを醸し出している。不思議な煌めきを持つ瞳の持ち主は容姿の通り天使なのだから、私だつて見えるのだ。ほら、こちらを見て、首をかしげる。私が逃げないことに疑問を持たれているのかもしれない。そして彼は重力を感じさせないほど軽い足取りで村の中を闊歩し、こちらへまっすぐ向かってきた。誰もいない人間の営みの場に不釣り合いな天使が、あの時とは違って、彼は「歩いて」横断してきた。それが、仕方ないとわかつていても少し寂しい。

あの翼を見ることがもうないのは、見たことがある者にとつては大きな損失としか思えないだろう。純白でいかにもやわからそうな翼。どうしてか左翼がぼろぼろになっていたけれど、それが逆に引き立っていたのを思い出す。あれが、彼の完璧とも言える容姿に翼が欠けている。やはり意識すると寂しいものだ。

……だが翼よりも美しく、失われることのない、であろう彼の瞳には、私の青く光を帯びた姿形、ふわふわと地面に付いたり離れたりと

落ち着かぬ様子、顔に浮かぶ不安げな表情……そういったものがすべて見えているのだ。久しぶりのまつすぐ私を見る視線に、緊張して身震いする。

整いすぎた天使の相貌は死人にも強烈だった。相手がただの人間なら緊張なんてしないだろうけれど、彼と話すと思えば緊張ぐらいだれでもする。遠目から見ればかりだった相手なのだし。

……彼の星の瞳は、やはり、どこまでも優しい。

「……」

美しい顔に、だけど何の表情も浮かべずに、天使様は手を伸ばす。その手から逃れるように私はするりと歩いていく。それを、追いかけてきつと意図も分かられているだろう。

もしかしたら、トロフィーを埋めた時も……私を見ていらつしやつたのかもしれないのだ。このキラキラした目に男の夢の跡の残滓が映っていたのかもしれないとは……出来れば見ていなかったと思いたい。親愛なる守護天使様にも見られたくない事はあるものだ。

『……に……アレ、が……』

久しぶりに、本当に久しぶりに低く呟くように言えば、声がかすれてしまった。けどアーミア様は心得たようにひとつ頷かれる。良かった。伝わった。

満足して私は彼の前から退散することにする。輝かしいトロフィーも、封印を解かれるその瞬間を見るのはやはり恥ずかしいものだ。

あとで、腹をくくって彼と話そう。そう決めた。

丁寧に掘り起こされたトロフィーをそつと彼は清い水で洗う。その背を遠く見つめながら、私は若き日の夢に想いを馳せていた……。

……

15話 決断

「少し、お話しませんか」

耳が痛いほどの静寂の中、不意に甘やかに高く、なおかつ優しげな声が私に向けられた。彼の羽のように軽やかな足音は、考え事をしていた私には届かなかつたらしい。

覚悟をまだ決めていない中、恐る恐る振り返ってみれば、やっぱりそこにいたのは守護天使様で、彼はあの茂みの下から掘り起こしたらしい私のトロフィーを手に真摯な瞳をまっすぐ向けていた。

相変わらず、思わず救いを求めてすがりつきたくなるようなお姿だな、と思う。娘ほどの年齢の外見だろうと、天使様は天使様なのだ。気後れするほど美しい顔、瞬きすら心を奪いかねない神の芸術が目の前にあっても、天使様を見ると安心してしまうのだ。

翼を生やして空を舞う姿を見ていなかった村人たちですら天使様だと信じるほどのお方なのだから。感じる雰囲気から穏やかで、善なる心と一心に思う気持ちかひしひしと伝わってくる、そういうお方がアーミアス様なのだ。

「……ロベルトさん。貴方がこんなに長い間さ迷っているなんて、知りませんでしたよ」

彼は酷く悲しそうに唇を歪め、私の方へまっすぐ歩いてくる。そりやそうだろう、私は彼からひたすら逃げていた。私としてもいつまでもこの世に縋り付いているのは良くないだろうとうすうす気づいていたけれど、どうも臆病で逃げてしまった。

『いやあ、お恥ずかしい限りで。アーミアス様直々にこうやって引導を引き渡して貰えると思うとうれしいですよ』

「……俺は死者を成仏させる力を持つているわけではありません。貴方の未練を晴らす手伝いをするだけです」

『アハハ。そのトロフィーが未練の塊なんですよ。だからもう……』
「俺には、あなたが苦しんでいるように見えるのですが……」

星を宿したように光を宿した瞳に私の姿が薄ぼんやりと映ってい

る。誰かの目に映ることがこんなに嬉しいことだなんて、久しぶりに感じる。何もかも見透かしているのだろうか、彼はそつと私にトロフィーを差し出した。

刻まれた文字は昔のまま、見ているともう存在しない心臓が高鳴るような錯覚すらある。私の夢が目の前でキラリと輝いた。

『ああ懐かしいなあ。そのトロフィー、貰った時は本当に嬉しかった。宿を世界一に出来たことも、認められたことも……何もかも』

土に埋もれたままの姿ではなく、天使様直々に軽く磨かれて金色に輝くそれに手を伸ばす。勿論、私には触れることなんてできない。何の感触もなくトロフィーはすり抜け、天使様の手すり抜けた。何も感じないのに、触れた手は温かいような気がするの、アーミナス様だからだろう。

「……」

『それ、どうするんですか？』

「明日の朝、リツカに見せようと思ひまして。彼女の道に光があるならば示さねばと」

『……光』

「私の目には、ロベルトさん……貴方のウォル口村での生活は未練はあっても、後悔は」

『ええ、ありませんよ』

矛盾した言葉に困ったようなアーミナス様。でも正しくそうしか言い表せないのだから的を射た表現でしょう。

母親に似て病弱だったリツカをきれいな水のここで育て、こうして健康で丈夫に育った。そのことがとても嬉しくて、ここに来てよかつたと心底思っているのだ。母親のように娘までも夭折ようせつしてしまうかもしれないと考えていたことがむしろ懐かしく思い出されるほどに。

だが、捨てたわけではなく、ましてや犠牲になつたわけでもない私の道は閉ざされた。そのことが心の奥底のしこりとなっているのだから……こうしてさ迷っているのも当然なのだ。

「リツカが進む道を決めます。断ろうと、受けようと、尊い選択が明日です」

『見ていろというわけですか?』

「そうですね。それがロベルトさんにとって、見守るといふ大切なことなのです」

安心してください、と天使様の言葉は続く。

「少しだけ後押しすることが俺にはできます。彼女の選択を見守っていただくさいね」

私の未練は大切そうに天使様の腕の中に収められ、窓から差し込む月明かりにきらきら輝いていた。

彼が静かに立ち去った後、そつとのぞき込んでみたリツカの寝顔は私の知っているリツカよりもずっとずっと大人に成長していたのだ。

娘の寝顔を見ながら流れもしない涙が、存在もしない体の中を波打っている気がした。もし、都合よく、リツカが私と同じ夢を追うならば。間違いなく私にもう未練はないと、そう感じた。

.....

「おはようございます、リツカ。おはようございます、お爺さん」

朝早くから家の外で何か……多分、掃除とか……をしていたらしいアーミアスが帰ってきた。ここ数日は見なかった天使様の服を着ていて、それがやっぱり当たり前だけど似合ってるものだからいつにもまして眩しい。ひらひら揺れる裾がアーミアスの動きすべてを風みたいに軽く見せるんだよ。

それにアーミアスは桜色の唇を綻ばせてにつこり笑うから心臓にも悪いんだ。彼はよく笑うのだけど、それに慣れる日は本当に来ないんじゃないかなって思うぐらい。花の舞い散る背景が見えるぐらい笑顔が輝いているし。

「おはよう、アーミアス」

「おおおはようございます、天使さ……おつとうっかり。アーミアスさ、様」

「……無理しなくてもいいですよ」

いろんな人になるべく天使様と呼ばれたくないのだと言ったアーミアス。それを叶えた人はなかないみたいで今日も苦笑が顔に浮かんでいた。おじいちゃん以外もこうなっちゃったんだろうっ

て簡単に想像できる。

それから朝ご飯を並べるのを手伝ってもらい、席についてからもこんなふうに穏やかに話すのはとっても幸せ。気後れするぐらい綺麗なのに隣にいと安心するアーミアスをいつまでも独占しちゃ、村のみんなに悪くなつて思うけどこの立場は譲つてあげたくなかった。

アーミアスは自分がいてもご利益はないとか言っていたのだけど、そういう問題ではないと思う。喋っているのが楽しいんだし、むしろ見てるだけでも楽しい。それから商売繁盛のご利益は間違いなくあると思うし。看板娘……ううん、看板天使として。お客さんは今、ルイーダさんしかないけどね。

朝ご飯を食べながら、今日も幸せオーラを撒き散らしながらこの上なく美味しそうにご飯を食べるアーミアスをチラチラ見る。眼福つて多分これのことだよ、ね？

私の作った朝ごはんだけど、彼が食べると作った私ですらとんでもないご馳走に見えるぐらい美味しそうに食べるんだもの、作り手としての幸せまで噛み締められるんだ。

小さいシンプルなパンをちぎって一口、とってもゆっくり味わうように咀嚼しているだけなのに彼はすごく幸せそう。おかずの卵料理も一口一口すぐく丁寧に口に運んでいて、ちよつと焦げちゃった切れ端がだんだん申し訳なくなってくる。

アーミアスが来てから私の料理はそういう小さな失敗がどんどん減つていつているのだけど、彼は気づいてるんだろうか。恥ずかしいから気づかないでいて欲しいけど。

「今日も美味しいです、リツカ」

「そう？よかった」

その言葉にアーミアスは全身全霊を込めてるんじゃないかって思うぐらいいつも力を込めている気がする。それからアーミアスはスープをひとさじひとさじ香りまで楽しんで口に入れて……って、私はさつきから見すぎだよな。

これじゃあアーミアスが食べにくいじゃない。急いで目をそらせば、おじいちゃんまでニコニコしていても恥ずかしくなっ

ちやった。

「あの、リツカ。食後にちよつと見せたいものがあるんです。少しだけ時間いいですか？」

私の気持ちを知って知らずか、アーミアスはとっても真面目な顔でスプーンを置き、私をまっすぐ見ていたものだから……本当にこの綺麗な天使様は、すつごく周りのことが見えているように見えてないんじゃないかって勝手に心配してしまう。

私が勝手に耳を赤くしていたのに気づかないでくれたのは嬉しかったけど……。

その後律儀にも片付けも手伝ってくれたアーミアス。彼がその後部屋から持ってきた金色のトロフィーは……知りもしなかったお父さんの過去を教えてくれた、私の人生の分岐点であり始まりの象徴になる。

私のせいで夢を諦めたお父さんを、私の体が丈夫な理由も知って。アーミアスが決断した私を見て微笑んで、ちよつと寂しそうにしていた理由はわからなかった。でも、何もない方向へ優しい微笑みを向けていたから……そこにいたのはお父さんだったのかもしれないと、聞けはしなかったけど思ってるんだ。

あと、ルイーダさんに決意を伝えた帰り、何故かアーミアスがニードと向き合ってなにやら話しているようだった。アーミアスの顔は見えなかったけど、ニードの顔がやたらと引きつっていたから不思議だったなって。

・・・

16話 始

うう、リツカたんがウォル口村から巣立って出ていく日が来るなんて……。しかもこんなに早いなんて……。ううっ、涙が止まらない……。無論、俺の心の中で。目の前でなよなよしている上に薄い顔したホコリ男がむせび泣いてたらキモさでこの感動が吹き飛ぶからポーカーフェイスすっげえ頑張ってる。誰か褒めて。

ただ、子供に気づかれるぐらい落ち込んでるのはもう許してくれ……。俺はまだまだヒョッコなんだ。しかも今日から俺もウォル口村から出て帰る方法探すってカミングアウトしちまったら……。そりやあもうすげえどんちゃん騒ぎで。つてか、慌てすぎだろみんな。そうも信心深いのは結構なことだが見習いのペーパーにそこまでしてくれるのか？ マジいい人すぎかよ。愛しすぎるぜ。見送りを盛大にしてくれるのは結構嬉しいが、ここまでくると恐縮してきたぜ……。

だってまた薬草降り注いだし。俺の実力に対する信頼のなさが好意善意でしかないのに心に突き刺さるってやばくね？ 心が痛いぜ！ 丁重に断ったら袋に押し込まれたんだぜ！ 押し強すぎだろうが！ ありがとよ！

みんなに囲まれて、なんつーか、不思議な気分だぜ。メインはリツカたんだろ？ って俺が何度も言わなきゃいけないレベル。師匠が信仰の基盤をがちり築き、俺がめちやくちや頑張ったおかげで守護天使への好感度振り切れてるみたいだなあ……。その信仰の対象の実態がこんなやつでほんと申し訳ねえ！

だから場の雰囲気乱さないように真顔で頑張るぜ！ 俺は空気の読める天使だからな！ だが……。そろそろ涙腺がやばくなってきたが。だがなあ、舐めんなよ、俺の顔の鉄仮面を！リツカたん見てるからすーぐにやけそうになるがな！

てかマジ俺のこたア今回どうでもよくね？ 問題はリツカたんじゃね？ 何時ものバンドナにエプロン姿なのにリツカたんめちや

くちや眩しいんだぜ。ぴかぴか輝いてるだけじゃなく割増で可愛いとか流石はリツカたん！ 希望と緊張の表情やべえ、リツカたん専用俺の心のアルバムが埋まっていくぞおお……これは、ペロい！ ペろっペろだ！

ちなみにもう、準備は終わってる。ロベルトさんのトロフィーを大切に仕舞い込み、荷物も全部まとめたリツカたん。今は昨日半ば脅してリツカたんの大事な宿を継がせたニードと話してるのを俺はちよつと離れて見ていた。

脅して、というのはもしまだニードしたいからって継がなかったらどうなるかわかってるだろうな？ 天罰なめんなよ？ とか敬語で言った結果だ。天使らしからぬ行為過ぎてやばい。やばいが相手はニート、更生させるためなら何だってしようという俺なりの愛情だ。断ったらローキック食らわせるつもりだったから一発で受けてくれて良かったぜほんと。イメージダウンはこの仕事NGだからな。セーフセーフ。案外素直なやつで助かった。更生の余地があつて一安心だぜ。働けニート。

ちなみにリツカたんのセントシユタインまでの道のりは、俺より遥かに手練のライダーさんが護衛をするならもうマジめちやくちや安心だ。セントシユタインの方の魔物はこちらよりすこーしばかり強いらしいが、ライダーさんなら大丈夫だろうって分かるぜ。遅れをとるわけねえわ。あの人レベル二桁あるだろ？ 俺は未だ一桁だ。そういうこと。

もちろん俺がリツカたんを送って行きたいのはやまやまなんだがな！ だが……先にあの謎の扉のついた物体へ行かなきゃいけない気がしてな。胸騒ぎってやつがやばいんだ。リツカたんを何より優先したい俺がこうなっちゃうってことはよ、天使としての本能がなにか訴えてるのかもしれないねえだろ？ 流石に無視はできねえよ。

つーかただでさえなんも言ってないのにオート天使バレしたんだからな！ そろそろ敬われるのも恥ずかしくて限界だぜ！ 敬語とかやめてくれ！ リツカたんどころかニードまで癒しになるとかやめてくれよ！

天使界に戻れたら文献ひっくり返してバレねえ方法探すからな！
俺以外に光輪ぶっ飛んだ天使なんてエルギオスとかいう師匠の師匠しか知らんが！ あると信じてえ！

へへ、あの話はタブーってやつだろ。俺、たまたま盗み聞きして知ってるんだからな。昔過ぎて内容まで詳しくは覚えてないんだが。ま、タブーだからこの例は参考にならないんだが。つか聞いてたのバレたらクソ怒られそう。聞けるわけねえわ。

とりあえず、この持て余しタイムに俺は守護天使として出来る限りの加護をリツカたんにあげた。勿論俺にそんな能力はねえ。はつきりあるってわかっている天使らしい能力は幽霊とかが見えることぐらいだからな。

だからやったのは全力でリツカたんの可愛くて健気な姿を目に焼き付けながら絶対リツカたんを安全にするんだぞ大地の精霊よ！
みたいな念を送ったただけ。つまり祈っただけ。頼りなさ過ぎて泣けてくるぜ……しよぼすぎる天使だわ、俺。

おい、キモい言うな。意味無いとか言うな。俺が一番わかっているわそんなこと。リツカたん可愛い！ 可愛いは正義！ 魔物はリツカたん見ると魅了されてでろでろになりますように！ 俺もでろでろだわ！ だからこそ少しでも助けになりたかった！ 無理だった！
辛いぞ！

うう、リツカたんについていきたい、ほんとリツカたんだと外で護衛しながら都会へ……とかデートみたいじゃねえかまじで。俺も行ってえなあ、行ってえなあ……。クツソ。里帰りは俺にご用命を！
お願いリツカたん！ 俺使って！ いくらでも使って！

「じゃあ、みんな、行ってきますす！」
リツカたんがみんなに手を振るのを涙なしに見れるものか。とうとう涙ぐんでバレたくねえから瞬きして涙を押さえ込み、リツカたんをじつと見る。大きくなつたなあ、なんて考えが頭をかすめる。

すると何故カリツカたんは俺の方を見て、声に出さずに口を動かした。……メツセージか？

『あ、り、が、と』

うおお！ リツカたん！ 好き！

……見たか？ なあ見たか？ やばくね？ リツカたんありがとうと言ってもらうのは星のオーラの数だけ聞いてきた俺だがよ、今の恋人がやる常套手段みたいな口パク伝達のありがとの破壊力やばくね？ まじやばくね？ 別格じゃね？ やつべ、リツカたん可愛いぺろぺろ！ 一生大好きリツカたん！ 好きすぎて顔からいろんなものが出そう！

やばすぎ、もう最高かよ！ このノリで俺も行ってきました！

ああお婆ちゃん、俺大丈夫だから心配しないでくれよ。ぼうやも泣かないでくれ、戻ったらまた来るからよ。村長に肩を叩かれ、ニードに何故か睨まれ、シスターと長々別れの挨拶をしたり。

行こうとしたのによ、長々引き止められちまった。ああ俺愛されてんなあ。これだから……この人たち、大好きなんだよ。

最近よお、ますますそう思うね。マジ最高、これだから守護天使は最高なんだぜ！

寂しくてたまらないが、俺は後ろ髪を引かれる思いをしながらウオル口村から踏み出した。振り返らずに。すぐに帰りたいからな！

振り返る暇があったら一秒でも早くウオル口に帰るだろ？

・

・

・

・

襲いかかってくるモーモンを数匹天に送ったのはともあれ、概ね平和に着いた峠の道。おお、あのやべえ土砂崩れもすつかり綺麗に撤去されたみたいでなによりだぜ。

で、相変わらず意味ありげに鎮座してるのがこのなんかわけのわからんやつだ。さーて、扉が開くかなー？

「……ちよつと待ったーッッ！」

手が金属製っぽい扉に触れたか触れないかぐらいだったか。その瞬間俺の頭に高速でぶつかってきたなんか。地味にいいところに入ったようで頭を抑えるほどいてえ。まじないわー。犯人誰だよ。

女の子っぽい声だったが。女の子はリツカたんしか興味ねえから！

「あんた見えてるよね？ 天の方舟見えてるくね？」

なーんて言いながら犯人と思しき小さめのピンクの光がびかぴか光りながら俺の周りを旋回。……これは妖精か、このサイズは。一応初めて見るが……クソやかましいやつだなこいつ。

ん？人間より反応が雑だつて？そりやそうだろう。俺は人間大好きな天使だが、妖精が困ってるわけでもなくただ喧しいだけなら心底どうでもいいわ。あとうるさいのは嫌いだ。

「……この物体のことなら見えてますが」

「んー、やつぱり？」

ぼふん。なんて可愛らしい音を立てて光は俺の前で正体を表した。……その瞬間俺が抱いた感想は……何こいつケバツ……リツカたんの清純さを見習えや！ というあまりにも酷いものだったから黙っておいた。要らない事は黙っておいた方がいいってもんだぜ？

彼女はそんな化粧しなくても素地は可愛いだろうに……ガンダロギヤルの妖精、という世にも珍しい存在。それを見て一気に俺の目が死んだのが分かった。やばい。やばいとしか言えない。関わりたくないやつだ。関わらざるを得ないのが辛い。

「あたしはサンデイー！ とりあえずハネなし天使サマは入って入って！」

……妖精にまで一発バレしてるのは、まあ今更ということで片付けるとしてだ。まあ、妖精だしな。

っーかなんでこいつ小さいくせにこんなに力があるんだ?! めちやくちやに押し込まれて俺は謎の物体の中に放り出され、つんのめって転びそうになるのを必死で留めるハメになった。

散々かよ！ 押しの強い女の子は好きだが強引なイミフ妖精は願い下げだゴラア！

・
・
・

閑話 幼気

うっ伏せで寝てたらほっぺたに布の跡がつくのやだなー。でも仰向けで寝たら翼が寝違えちゃうからそれもやだなー。寝るの、いつそめんどくさいから寝なくても良くない？ 寝てもさ、三時間ぐらい寝たら充分じゃないの？ 人間ってもっと寝るけど天使は寝なくてもいいもんねーっ！

ししよーが子供はたくさん寝なさいって言うから寝てるけどさ、子供は子供でももう三十歳だぞっ。明日には人間界に行けるんだぞっ。始めて行く下界、楽しみだなあ……。初めて見るもの、ドキドキ、そんなのがいっぱいありそう！

ぼく、前からいろんなことに興味があつてさ。だからいろーんなことと試しちゃう。今は人間のことが気になって、だからいっぱい勉強してたらイザヤールさまがししよーになってくれたんだ！

それでさ、みんなにびっくりされちゃったんだよ！イザヤールさまってそんなにすごい天使なんだねえ……。すごいことは分かっただけどここまでびっくりされたらぼくまでびっくりしちゃうよ！

だから期待に応えたくてもっともっと張り切ったら同い年の中でもぶつちぎりに早く下界に行けることになったんだよね！ 日頃の努力は大事だぞっ。でもここで笑ってたら嫌味みたいだからすまし顔してるんだ。これが大変でさ！ 気を抜いたらにこにこしちゃうだもん！

早く天使のお仕事したいなあ。人間とお友達になりたいなあ。向こうはこつちを見れないけどさ、それでも手助けしてたらちよつとは見えるようにならないかなあ。

そんなこんなで寝てる場合じゃなかったんだよ！ 気づいたら寝てたけど！ うう、ヨダレの跡、ついてない？ 大丈夫かなあ。でも

もう一回寝なきやいけないんだよなあ……はあ。

てっぺんの木にもまだ行けないぴよぴよ天使に出来ることを探そうかな。ししよーとの勉強は午後からだし。ししよーの頭で遊んでみたいなあ、遊んでくれないかなあ。ししよーってお父さんみたいじゃない？遊んでくれないかなー。

あ！階段がなんだかホコリっばい！ お掃除しないと！ ホコリは掃除しないと、自分で二百七十日ぼくより先輩って名乗った天使が言ってたぞ、ぼくの髪の毛掴みながら。なんかあいつ、この前ししよーと話してるの見てから見ないけどどこ行っちゃったんだろー。

ホコリって汚いし、吸い込んだらいけないから掃除しなきゃって、当たり前なのにねえ。でもなー髪の毛ゴシゴシ洗っても変わらず灰色だからダメかも。染み込んでるんじゃないの。ししよーも灰色だったのかな？もしかしたらまだらかも？ だから頭つるつるなのかな？

煩惱退散！ って感じだよね、ししよーって。あ、煩惱といえね、ぼく、天使が悪魔になる話を読んだこともあるんだよ！ 人間にもいい人と悪い人がいて、悪い人に気づけなかった天使がだんだん自分も悪魔になった話とか！

それとか人間を好きになりすぎた天使がね、自分を見てくれないって嫉妬で悪魔になったりね！ 悪魔になったら魔物だから倒して来世でお友達や仲間にならないといけないのになー。もったいないね、今なりたいのに。

でもこれってお話なんだよ。悪魔になった天使なんて本当はいないの。大人がぼくたちを脅かしてるんだって、誰かが言ってた。

うーん、でも、天使の癖に天使を虐めた天使がいたらしいけど、そんなのいるのかなあ？ なんか、謹慎処分されてお外禁止コースって言ってたよ。怖いなあ、外行けなくなっちゃうじゃん。

にしても天使界にいるのに悪意に染まるって、あるのかなあ？ 嫉妬はどこでも生まれるからありえるってししよーが言ってたけど……すごい人はすごくない？ かつこいいじゃん！ ぼくもし

しよーみたいに尊敬される天使になりたいし！

さつきかさつきかお掃除してたらラフエツトさまがお疲れ様って頭を撫でてくれた。ホコリがついてしまってますって言ったらさ、ついてないわって仰ったんだ。

……あれ？　じゃあ……多分、あの先輩は潔癖症だったんだなあ……。天使がホコリとかないもんねえ。この色は汚く見えるだけで別にぼくが汚れてるとかそんな訳ないよねえ、勘違いしてごめんない、先輩。

よーし、今度は外で花の水やりをやろうかな！　ぼくが水をやらなきや枯れちゃうんだよ、みんな水が勝手に降つてるとでも思ってるらしいけど、違うよ！　ぼくが緑化活動してるんだからね！

せかせかしようろで水を運ぶ。うー、天使界はなんだかんだ広いからさ、外に行くのに面倒がつて飛んだら空気が薄くて落ちちゃうんだよねえ、なんて思いつつ翼をばっさばっさ。飛んでるんじゃないよ、翼に空気を通しておくとふわふわになるんだよ！　お手入れだよ！

大人の天使はみーんなにここしなながら雨でも降らせるのかかって言ってるけど、だから違うつて！　花にとつてはぼくが雨つて意味ならあつてるけどさ！　納得がいかないぞ！

水やりをしてるちっちゃい虹がとーつても綺麗。それを見るためにやつてるのが半分くらい。残り半分はもちろん、水を浴びてきらきら輝く花が綺麗だからに決まってるじゃないか！

あ、そうだ。ししよーに人間たちに明日、お花をあげてもいいかなかなきや。

ししよー！　ししよー！　どこですかーっ！

……

最近の天使界には天使がいる。……別に哲学じゃなくてね。

天使にもいろいろいるから、見た目がごっつい天使もいれば、普通の人間に翼を生やしたような天使いるし、天使らしい天使ももちろんいるの。

話題の天使は天使らしい天使つてこと。まだまだ生まれてまもない天使なんだけど、これが本当に天使で天使で天使なの。

くりつくりのきらきらした目、幼児特有のぷにぷにしたほっぺた、もちもちすべすべの肌、さらさらの髪、桃色の唇。見た目だけでも十二分に天使なのに、あの子つたらそれに加えて中身まで天使天使してるから天使界に天使が舞い降りたに違いないわよね！

上級天使になつてはや数百年、こんなにひよつこ天使が可愛いなんて思ったの初めてなのよ！ だから弟子にしようと思つたらイヤールが弟子にしちゃって……なによ、すました顔してアンタやるじゃない。

ああ……ししよー！ ししよー！ とつるつぱげの後ろをついてまわる天使が可愛い……一生懸命敬語であれこれ尋ねたり、掃除して回って褒められたり、花の水やりを頑張ってくれたりしてるあの子がかわいい……。

可愛すぎて、もう天使すぎるせいか、変な気を起こした天使があの子を虐めたレベルなのよ。好きな子を虐めたって訳が分からない。天使だから性別はないし……とか言ってたけど、アンタ、前科もちよね。見た目だけは幼い古株が！

今度はオムイ様の慈悲もなく、あえなく軟禁処分されたやつ可悲鳴って聞いても心が動かないわー、ほんと。天使らしくないけどね、私のそんなところ。

うふふー、あの子に私もししよーって呼ばれたいわあ……。そして髪のにリボン結んでやるのね。きつと似合うわよね、ねえイヤール。

「……アーミアスは男だが」

「え？」

「人間も天使も幼い頃はなかなか区別がつきにくいから仕方ないことだ」

「嘘おおおおっ」

びくつと目の前で肩を震わせたアーミアスちや……アーミアスくん。名前がなんでそんなにかっこいい感じなのかしら、と思っていたら……男の子だったのね。

「ぼ、ぼく……」

「あ、ああごめんねアーミアスくん」

シヨックを受けたのかアーミアスくんが目の前でぶるぶる震えている。それも可愛いんだけど、もうやっぱり天使すぎないかしら？

すると何故かアーミアスくん、キリツとした顔つきでこつちを見てきて可愛いの。

「俺になります！ 紛らわしくないように！」

「ノオオオオオッ！」

そんな悲しい事件の次の日、何を思ったか翼をもぎ取ろうとしたアーミアスくんには私は滝のように涙したり、どんどん可愛いよりも綺麗になって行って遠い雲の上の天使となってしまうたアーミアスくんに話しかけることが出来なかつたり、彼の天使っぷりが行動に現れて天使らしくなっていて私の方が憧れたりといろいろあったの。

ええ、いろいろ。あなたは人間だから私が星になってもアーミアスくんに会えるのよねえ、羨ましいわ。

・・・

セントシユタイン編

17話 再出発

「つていうかー、あんたのことずっと見てたけどお」

つんのめって転びそうだった俺のことを気にせずケバい妖精が俺をビシツと指さした。人間も天使も指さされて気分がいいもんじゃねーぞ。

「ハネなしだけど天使ってバレてんじやん？ 超ウケる。あんたつてウォル口村の守護天使サマつてやつなの？」

そこまでバレてる？ 今更だが……はあ……ねえわ……妖精相手でもだんだん天使の無駄機能に疲れてくるわ……オートバレってプライバシーの欠片もねえってことだろ？ マジねえわー。せつかく翼も光輪も失えたんだから、たまには人間扱いされて嬉しくなりたい。

精いっぱい抗議の目をしていると、ピンク色の光を撒き散らしながらサンデイはくるつと一回転して見せた。おお、これはすごい。翼を持ってた身としては一回転が如何にバランスが大事であるかを理解しているつもりだ。下手くそならそのまま地面にびたーんと落ちてしまう。こいつ、……こんななりしてなかなかやるな。

てか返事の催促かよ。

「……そうです、けど」

「んー、なら間違いなかったワケね。あんたをここに入れたら少しは変わるかと思っただケド」

てかそんな適当な理由で俺を無理やり突っ込んだのこよ。それで、うまいこといくか普通？ 俺って見習いだからその程度の力しかねえし、こんな状態だし、無理じゃね？ つか地味にここ、揺れてる気が……うおっ！

ガタタタタッ！

「?!」

突然、その微かだった揺れは激しくなり、内部が謎にビカビカ光り

出す。妖精は奇声をあげて興奮しているみたいだが……これ、俺のパワーがなんとかなくなって作用したってことでもいいのか？ いいんだよな？ 光輪も翼もなくとも天使のパワーは失われないものなのか……オートバレするぐらいだからなあ。

だがそれもぷつんと音が聞こえるかのように急になくなり、内部は暗くなるしすっかり元にもどっちゃった。なんだよ、足りねえってか？ ダメだしされたようで気分が悪いぜ……天使の力なんて要らないが。むしろ捨て去った方が俺にとっては好都合、だから喜ばいいのか嘆けばいいのかって感じでかなり微妙だ。

それにしてもこの中、見たこともない内装だ。金色に光ってた時見ただけでもかなり変だったが、暗くてもはつきりわかる。この世のものじゃないみたいだ。もちろん天使界には到底ないデザインだしな。

……神の国から迎えに来る乗り物の中身なんだから、これが神の趣味ってわけか？ じゃあ、この、ケバい妖精は？ つかなんで妖精がここにいるんだ？ 言っちゃ悪いが普通は妖精は神聖さなら天使の下になっちゃう。なんで神の国からのやつに関わってるんだろうな？ ケバいし。

「萎えるわあ、ハネなしならダメってことなのかな天の方舟ちゃんってば。まあこんなイケメンに会えたからよしってことにしようかなー」

うーん、いろいろ加味して考えても奇抜だ。神様の事はそこそこ崇めてもいいと思ってるから……人間も天使も神の作品だから。神の子だろ、みんな。

だがそのある意味俺の親父様の趣味ってのはなかなかどうして……み、未来的なんだろうか。俺には理解出来ないぞ。センスが謎すぎる。もつと落ち着いた雰囲気かと普通は思うくね？

「あんた聞いている？」

「あ、ああすみません」

ずいっと目の前に小さい顔が突きつけられて仰け反りそうになる。

……今のはマジで聞いてなかった。なんかすまねえ。

「つか、ハネなしのアンタ、名前は？ アタシはさつきも言ったけどサンディね」

……軽っ。それで酷っ。いやまて、よく考えろ。今まで天使扱いされまくった俺はある意味こういう対応の方に飢えている。ほら、いたたまれなくなっただけじゃなく、以上には張り切るとか、こんな扱いならねえし。見ようによつてはこのサンディとやら、いい妖精じゃねえか。

おい、そう考えてみればかなり気が楽だぞ。話してて一番楽しいのはもちろんリツカたんだが、気楽なのはこいつかも。長い天使生の中でも。天使はたいてい頭がガチガチで師匠以外はまともに話せねえし。人間には向こうからアレだったし。

こういう相手、人間が……良かったなあ……。

「アーミアスといますよ、サンディ」

「へー。確かにニンゲンがあんたのことそう呼んでたよーな？ ま、いつか」

聞いていてまあいつかはないだろ。

それで目の前でなにやら考えているのかサンディはふわふわ飛んでいたが、ぽんと手を打ってまた俺をビシッと指さす。だからやめろそれ。

「天の方舟うごかないしー、だからアンタ、さつきの女の子追いかけてさいよ。あつちにもつと大きいニンゲンの住処あるんでしょ？ 星のオーラとか集めてる天使がパワー不足なら、アンタ人助けでもして星のオーラを集めるのよ。そしたらほかの天使が迎えに来てくれるかもしれないしー」

「星のオーラ？ ……まだあつたんですか？ あの異変から見かけていないのですが……」

星のオーラって……まだあつたのかよ！ 俺、力が弱まったからか、まったく星のオーラすら見えなくなっただけ……うわああ、もしかしてなくてもリツカたんからの星のオーラとかも全部スルーしてたのか？ うわああ、俺の物にしたかった！ 捧げるなんてとんでもない！

畜生！ チクシヨウ！

てか、マジ？ それがマジならこの妖精有能じゃね？ ちよつとい

うとおりにしてみた方がいい気がするしてきたかも。確かにセントシユタインの守護天使もあの異変で降りるの嫌がつてるかもしれないねえし。それなら星のオーラを大量に撒いた方がいいわな？ 名案。こいつ有能。

……ただし天使界の方から人間界の星のオーラは見えないんだが。一度でも来たら目印になるってぐらいしかないぞ。何もしてないのに星のオーラが散らばってて変だな、ぐらいだ。だが、天使に対しての目印としては最強だろう。

しかも善行を積みながら出来る。最高かよ！

「あるじゃん。今もあんたの周りくるくる回ってて鬱陶しいぐらい。あんた天使なのに見えないの？ ……大丈夫なの？」

「……さあ」

俺の周り回ってんの？ え、手を動かしてもなーんも感じないんだが。なあなあ、リツカさんの星のオーラはひとときわきらきららしてリツカたんっ！ って感じなんだがどれか分かるか？ ……って聞いてみたい。

俺はわかるが普通は見ても星のオーラの判別は難しい。サイズからこれはどういうレベルのことをしたんだってことはみんなわかるけどな。

「なんでハネも輪つかもないの？ まさか無くしたとか？」

「俺は、天使界から落ちてしまったんで、燃え尽きてしまったのかと思ってますが……」

「なにそれ超ウケル」

うわ酷くね！ こいつ酷くね?! 俺がもし翼を失って、迎えにも来てくれない薄情な師匠に絶望してる天使だったら再起不能になるようなこと言うなよ！ 俺がたまたま翼をどうにかしてブチ切れたかった天使だったからいいもの！

ひとしきりケラケラ笑ったサンデイは俺をまた無理やり方舟から押し出すと、セントシユタインの方向を向かせてきた。物理的に強引なやつ……ケバいのはともかくこれぐらい雑に扱われる方が安心するから、まあ……怒るほどでもないか。

びつくりすることに俺、このギャル妖精がそこそこ気に入ってしまつたらしい。ケバいけど、直視できないわけじゃないし……何よ、まあ頑張りなさいと言いつつ懐に消えたサンディは、リツカたんと同じく俺から目をそらしたりもしなかつた女の子だ。

18話 到着早速

道中、おばけきのこやらスライムベスやら見習い悪魔なんぞが邪魔してきたが、まあなんとかなった。やっと気づいたんだが、相当向こうの頭に血が上っていない限りは睨めば退いてくれるらしい。魔物たちと俺との実力差はそこまであると思わないが……退いてくれるならそれでいい。

だからまだ日の高いうちにセントシユタインに来れたのはなかなかいい滑り出しだ。

……うーん、来てみたはいいが、天使らしき人影……なんとも妙な表現だが……はいねえな。そもそも俺はセントシユタインの守護天使の顔は知ってるんだが、名前は知らん。その程度の付き合いしかない。像もパツと見てわかる場所にはないしな。

しかもその天使、交友関係の狭い俺が広いセントシユタインについて愚痴を吐いていたのを知っているレベルの……やる気のあまりない天使だ。……考えておいてなんだが期待できそうにないな。異変にビビって降りる気が失せて何年か来ることは無い、と見ていいだろう。世界樹に星のオーラを捧げる必要も無いしな……つてこの説明何回目だ。

……んん？ 突然俺のリツカたんリーダーが反応して……そうか！ 俺、追いついたんだな！ ウオル口村以外にいるリツカたん！ 新鮮なりツカたん！ どこ？ どこに……いた！ もじもじして緊張してルイーダさんの後ろにいるリツカたん！

ウオル口村にはない、大きな建物を見てちよつとびっくりしちやつたらしい！ 可愛いな！ 可愛いな！ 握りしめた手が緊張してぶるぶるって……はっはっは、俺ぐらいになるとこのぐらい離れていてもリツカたんの一挙一動がバツチリわかるんだぜ！

リツカたんは幸いにも俺の熱視線に気づかずルイーダさんと一言二言喋ると中に入ってしまった。うう、追いかけて……流石にストーカーみたいなの見える状態でやって引かれたら立ち直れない。ここは引くか……？

うう、後で……後でねリツカたん……。

「面白そーじゃん。知らない仲間じゃないんだし見てこうよ」

サンディツ！ ケバいとか考えててすまんっ！

ナイス背中押し！ お前さんいいやつだな！ 手のひらクルツクルだぜ！ パタパタときらきらしいピンク色の羽をはためかせてリツカたんの後を追った姿はもう、リツカたんペロリストの俺には勇者にしか見えねえ！

よーし、じんわり勇気が湧いてきた、へたレてる場合でもないな、リツカたんの華々しい門出にちよつと顔を出して怒られても……怒られても悔いはないぞ！ 緊張リツカたんペロするするために！ 俺は！ 行く！

とはいえ見知らぬ人間がいるであろう所だからな、リツカたんでも不安かもしれないだろ！ 宿屋を営んでたリツカたんはちよつとやそつとで人見知りなんてしないが！ ま、まあ俺が見に行きたいだけだし？ 今更だし？ 俺がリツカたんの周りでうるちよろしてるなんて普通のことだし？

覚悟を決めて飛び込んだ宿屋の中ではなんかリツカたんが小娘とか言われていて、ちよつとムカつとした。だからみみっちい仕返しに心の中でリツカたんが小娘ならあんたはおばさんだなと呟いたが、俺の年齢を考えると愛しい人間たちは皆孫よりも歳が離れているんだからただのブーメランになってしまったぜ。

……ジジイでも見た目が若けりやリツカたんチャンスあるか？ ワンチャンあるか？ ダメか？ 天使としてはまだまだ若いぞ。天使のジジイことオムイ様は数千歳とも一万歳とも呼ばれるお方！ それに比べて俺は二百年も生きてない！ よっしやまだまだ若いぞ！

なんてリツカたんを今日も今日とてガン見していると、周りにはリツカたんのすんばらしい才能と世界一の健気さ、さいっこうにペロい可愛らしさに気づいたのかひれ伏していた。俺もひれ伏したい。リツカたんを下のアングルから見たい。

だが空気を読んで何もしなかった！ 今度階段の下からリツカたんに話しかけるんだ……ここデカいし二階ぐらいあるだろ……そんな

で、リツカたんがとたとたとたと降りてくる……リツカたんが俺に話しかける……妄想甚だしいが、それだけでたぎってきたぞリツカたん！

「あら？ アーミアスくんじゃない」

「あー！ 早速来てくれたんだね！」

おつ、流石に影を薄くしてたつもりなんだがバレたか。リツカたんの笑顔はセントシユタインでもまったく変わらず俺の心を揺さぶってくるぜ……。隣にナイスバディなルイーダさんがいても俺の目線はリツカたんを釘付けてわけだ。ただし敢えて言うならナイスおっぱい。

ただし天使なので何故かテンションが上がる以外になーんもないのがなあ。三大欲求は二つしかない、というわけだ。だがナイスおっぱい。

もちろんリツカたんという大正義を前にすればなんだって霞む。ぶつちやけキラキラ光ってた世界樹よりリツカたんの笑顔の方が眩しいしな。求心される感じがやばいぞ。

俺、最近リツカたんに出うために天から遣わされた気がしてきたんだが！

「まだ来たばかりで準備できてないの。せつかく来てくれたんだけど……」

「あらリツカ、アーミアスくんはそういうつもりで来たんじゃないわよ。……ねえ、ちよつと協力してくれるつもりはないかしら？」

「勿論、何だって言うてください」

今、俺何も考えずに返事したぞ。リツカたと協力しか聞いてなかった。リツカたんのお手伝い？ マジで？ ウオル口村でならいくらでも手伝えたし変じやないだろうがここで従業員でもないのになんかしてたら目立つだろうと思ってたんだが。

ルイーダさん、その話もつと詳しく。

だってよお！ リツカたんのお手伝いをするだろ、リツカたんが喜ぶだろ、俺嬉しい。または、リツカたんが俺の好感度を上げてくれる。俺嬉しい。あとリツカたんの隣に入れる、だろ？ 俺、最高の気分

なるぜ！

「気合は十分みたいね」

「ちよつとアーミアス！ 帰るつて言つてたじゃない、探さなきゃいけないんですよ？ 私の手伝いをしてる場合じゃないんじゃない？……」

「俺の方が、やりたくてお願いしたいぐらいなんです……」

ああ謙虚で健気なリツカたん！ 俺なんて馬車馬のようにこき使つてくれていいのによ！ リツカたん優しい！ だが残念だったな！ 俺は離れないぞ！

リツカたん！ リツカたん！ 俺を掃除でも呼び込みにも何でも使つてくれ！ 荷物運び？ 案内？ ドアマン？ 何でもやるからさ！ リツカたんの為になるならば！ 鼻屑にうるさい師匠がない今、俺はやりたい放題したいんだからな！

「ほら、彼もそう言つてるじゃない。もちろん暇な時だけでいいのよ。ほらリツカ、アーミアスくんには人を惹きつける何かがあると思わない？」

「そ、それはわかりますけど……」

引きつけるオーラ？

……もしかして惹き付ける、か？ ないわー、ないない。ウォル口村での話をしてるならあの村の信仰心がすごかっただけだから！ 俺が天使だったからああだっただけ！ だが！ リツカたんの役に立つ可能性があるなら別になんだっていい、出来ることならやる主義だからな！

「あのね、あなたには呼び込みを手伝つて欲しいの。旅の邪魔にならない程度で構わないし。リツカの手伝い、やってくれるでしょ？」

「ええ、もちろんです。なんならすぐにでも」

「……気が早いのはいいけれど、流石に今日は無理よ」

お、おう。そこらの人間を根こそぎ連れてこようかと思つたがダメか。何、リツカたんは最強に可愛いだけじゃなく、宿屋の腕は超一流！ ホコリ男の宣伝でもじゃんじゃん人が集まるさ、明日朝イチ手伝おうか？ ダメか。

こういうのはすぐ行くとリツカたんが気にしてしまうから何日か

開けてから行くべき、だな。そしたら気分転換ですと言っておけば
リツカたんは気を遣わない！俺はハッピー！……呼び込みつてリツ
カたんの隣にいれないだろうが些細……でもないが、まあ、リツカた
んに益があるならいくらでもやるしな！

とか考えていたら準備のため追い出され、すごすご街を歩く羽目に
なった。

……ん、防具屋だな。何にせよ魔物と戦う羽目にはなるだろうし、
いっちょ揃えるか……。

リツカたんの笑顔を思い出しつつリツカたんロスで俺はテンショ
ンがすこぶる低かった。

・
・
・

19話 不嘔吐

「だから！ おれが黒騎士を倒すって言ってるだろ！」

「おいおいマテイカ、お前が弱虫なのはみんな知ってることだが、同じくらい泣き虫で有名な癖に僧侶がついてきてくれるのか？ 路地裏育ちのくせに」

「関係ないだろ！ そ、僧侶がいなくなっただっておれが一人で倒せばいいことだろ！ とつとと稽古着を売ってくれよ！」

「はいはい。天使を信じていることといい、どっかお前残念だよ」「うるさい！」

あーもームカつく！ みんなおれを泣き虫弱虫ってからかうし、だーれもおれのことを認めちゃくれないし、黒騎士だっておれにかかれればイチコロなのにだーれもついてきてくれやしない！

見下す奴らを見返したくて修行だって頑張ったし、働いてセントシュタインで一番恰好いい鉄の爪を買ったんだ。あとはこのおろしたての稽古着を着ればおれは無敵！ ……ただ武道家だからホイミの一つも使えねーんだよな。魔法って難しくてよくわからない。

薬草を買い込むつても限界があるし、僧侶がいるパーティに潜り込むか、僧侶を勧誘したいところなんだけど……ルイーダさんがいくらおれのことを認めてくれていてもだーれも雇ってくれもしないし応じてもくれない。

流石に……こうやって啖呵切ったはいいけど一人じゃ無理……。

真新しい生地に通しながらどうしたものかと考えていたら、いつからいたのか目の前を通った、灰色の人に視線が移った。

さらさらって、髪の毛が女みたいに揺れたのに目を奪われる。だけど多分、男だと思った。肌、雪みたいに真っ白だ。まるで日に晒されたことがないみたいだ。弱そうなのに、弱そうとは思わない。…

おれ、変な事考えてるなあ。

ちよつと年上に見えるし、年下にも見える。年齢まで若いってこと以外よくわからないし、性別も曖昧って感じだ。

「すみません、鎖帷子の試着いいですか？」

「あ、ああいいぞ」

インナーをそのままに皮の鎧だけを外してきせてもらっている姿をぼんやり眺めていたら、彼？ は視線に気づいたのかこつちをチラツと見た。……うわあ、まつげながいな。やっぱり女かもしれない。おれの信じる天使様もきつとこんな感じに中性的なんだろうなあ。

……目の中に、きらきら、たくさんの星みみたいな光が浮かんでる。天使様つて、やつぱりこんな感じなのかもなあ……セントシユタインの守護天使様つてどんな方なんだろう。そんなことを考えさせるぐらい、俺の中の想像の天使様を写し撮ったみたいな容姿だ、この人。当たり前だけど、翼もわつかもないけれど。

今この場で生えてきても違和感がない。

「あの、きつっきの話聞いてしまってますみません。俺は旅人なんですが……セントシユタインでは黒騎士つて有名なんですか？」

うお……声高い。でも男だった。今、はつきり俺つて言った。不思議だな……声変わりしてないぞ、この人。なのにちよつとおれより背の高いその人は鎖帷子の具合を確認しているみたいだったが、おれの方をちゃんと気にかけていた。

弱虫、泣き虫、意気地無し。いくらでもからかわれてきたおれ。普通に話しかけられるなんて久しぶりだなあ。見下されないで、物腰が丁寧な人。この人も噂を聞いて変わってしまうんだろうけど。

どーせ泣き虫は言い訳できませんよーつだ。誰が弱虫だ。誰が意気地無しなんだ。俺の筋肉が見えないの!?! 見えない?! ……着痩せしてるんだよ!

「旅人なら知らないよね。セントシユタインの姫様をさらおうとした悪いヤツなんだ。討伐依頼が王様直々に出されてさ」

「……なるほど」

「だからおれが倒したらみんなハッピーってわけなんだ。おにーさんもし興味があつて腕が立つなら雇つてくれよお」

一応宣伝だけしておいてさつきと彼の視線から逃れた。まっすぐ見た彼の顔がそりやあもうこれ以上ない！　ってやっぱりくらい整つていて直視しているのが申し訳なくなつたからだ。髪の毛ぼっさぼさだし、こうなるならちよつとは直してこればよかった。

……あーあ、あの時みたいに奇跡が起きないかな、誰かに雇われて黒騎士に挑みたいんだ！　いやいやあの奇跡は天使様のお陰だし。お願いします、守護天使様！　おれを助けてくれよ！　って、むちやぶりか。

半ば黒騎士討伐の依頼書を横目に睨み、今日もおれはルイーダさんに名前を登録してもらつて、もう疲れたから宿屋で休むことにした。

なんかいつもと違って可愛い女の子が宿をやつていてセントシユティン始まったな。……なんか寒氣したんだけどなんだろう。というか、女の子って言つてもおれより年上のおねーさんって感じだ。さつきの人と同じくらい、かな？

宿屋でだべつていたらたまーにおれの噂をなーんも知らない人が呼び出してくれる。そして……町人にぶち壊されるんだけど。まー、なんとかなるなる、もう少ししたら誰が止めようつてもおれ、名乗り出ることにしてるし。

弱虫泣き虫意気地無し。返上できるようになりたいな……。

そんなことを考えながら昼寝してたら、ルイーダさんにおれ、呼ばれたんだ。

目の前にいたのは、あの天使みたいな少年と、からかつてくる奴ら。この人もあいつらと同類だったかと、ひどく失望した。

その割には星の瞳が澄み切つていて悲しくなつた。
……

「よお、マティカ。お前もこの人に呼ばれたんだぞ」

「いえ、試しに呼ばせていただいただけなので正式に決めた訳ではありませんよ」

馴れ馴れしいなこの僧侶。つか僧侶？全然僧侶っぽくない。人助

けになるかと思って……というよりもリツカたんにかっこいいところ見せたくて……黒騎士討伐！　って洒落こもうとしたはいいが、なーんだかな。

防具屋で出会った武道家少年はなかなか体つきや身のこなしを見る限り強そうだし、なんか気は弱そうだが優しい目をしているし不満はないんだが……いかんせん、僧侶と魔法使いのペアから感じられる不浄の気配にイライラするな。

実力もしよぼい感じだし……お試し、もう切ろう。そうしよう。マティカ少年だけ残してチェンジで。

戦いに関して変な優しき出したりしないぜ。使えないなら置いてかないと死んじゃうだろ。それは嫌だ。明らかにマティカがこいつらみたいなの奴らにとやかく言われて来たのがわかってても、だ。一緒に目に物言わせてやろうぜ。俺そういうの大好きなんだ。

余計なお世話ならすまんがな。まー、黒騎士倒すのはやる気満々みたいだし問題はないだろ。ちゃんと金だして雇うんだし。

「まあ、せいぜい盾にでもなれよ。お前の大好きな天使様な雇い主を守るなんていいご身分だろ？」

「あ、やっぱりチェンジでお願いします」

「オレたちには魔法があるし、お前のちっぽけな脳みそはそんなことも理解出来ねえーみたいだしよお」

「マティカだけ残してもらえますかね、ルイーダさん」

いやはや耳でも悪いのか。周りも見えていないのか。典型的な小物臭のするやつらはなんか話したまま引きずられていったのだが、まあどうでもいいや。

つーか天使様とかまーた言われてたけど……。今のはあれだな、聞かなかった。オートバレ機能なんてないからな。

そうそう、俺って天使だからさ、基本的には人間は守ってやるし基本的に好きだぜ？誰かを貶すようなやつは真つ平ごめん。その点ウォル口村っていいぞ。ニードってだいぶ可愛いやつだからな。あいつ、悪口はいわねえから。ちよつと仕事への意欲がないだけで。それがニートの所以だが。

今は二ト卒業したみたいでなによりだぜ！

「あら。私ったら疲れてたみたいね。いいわよ、じゃあ代わりの僧侶と魔法使いを紹介しましょうか」

「ええ」

登録の時に断らなかつたのが疲れてるってことなのかね。まあそんな事情はいいや。なんかマテイカ少年は固まっているがそれもまあいいや。戦ってくれるなら俺が守るし。

つーか武道家を盾扱いとか頭おかしいだろ。パラディンとか戦士なら盾扱いどころかそういうスキルを持つてして自ら盾になれるが、武道家つてのは先手取つて殴るお仕事だろ。

ちなみに俺がいる限り盾役を譲るつもりは無い。人間はおとなしく守られとけ。俺がゼーんぶ守つてやるから安心して戦つてくれ。戦士もいいが、パラディンになるのもいいよなあ……。

引きずられている奴らを見送り、今度は目を白黒させて俺を見ていたマテイカ。そしてやつと理解してくれたのか、満面の笑みで手を差し出した。分厚いタコだらけの手だった。

期待通り、彼は強いだろうな。

「よろしくお願いします、おにーさん！」

「ええ、よろしくお願いします。申し遅れましたが、俺はアーミアス。しがない旅芸人です」

「旅芸人?! 旅芸人だつて? 絶対嘘だ! でもいいや、一緒に黒騎士倒そう!」

「……旅芸人ですよ」

おいなんで今信じなかつたんだ。

「え? おにーさん、天使様、でしょ?」

……キラキラした純粹な目を見ながらとつきに違うなんてウソをついて夢を壊すなんてことはできねえだろ!

「あらやだ。私のいない間に勝手に名簿登録したのは誰なの? ごめんなさいね、さつきの人たち、断つてばかりだったのよ。お詫びに腕も評判もお墨付きの二人組を紹介するわね」

ちよ、否定する前に話をぶつた切るのやめてくれ! きらつきらし

た目でマティカ少年が……ああ……。お、おいリツカたん！ 便乗してマティカに何囁いてるんだ？ その子天使より純粹に人の話を信じるタイプだからやめ、やめてくれ！ お願いします！

「俺はしがない旅芸人です……」

リツカたんには絶対嘘をつけない俺の渾身の声は虚しくかき消されてしまった。

お願いだからウォル口村での無様な姿を広げるのはもうやめてくれ！ リツカたんだから悪いことは言っていないと信じるが、俺の話なんてダサイことしかないんだから、何を話したってダサイだろ！

・
・
・

20話 狂信

「うわああああああ天使様アアアアアアアアアアアア!!!」
「?!」

「なんまいだぶ……なんまいだぶ……ありがたや……」

待機室から出てびっくり！ 目の前で出迎えてくださったのか、こちらを見ているのは夢にまで見たリアル天使様!!! やはり、やはり存在なさっていたのか!!! 私たちは間違っていないかった！ 間違っていない!! 麗しい、なんて麗しいんだ！ 夜空の星星のような煌めく瞳に映りたい！

唇ピンクううううううっ！ 肌白い!!! 髪の毛顔埋めてスー
ハ……させて！ させて私に！ 私に!!!

うわああ私の邪な想いに気付かずきよとなさってる!! 無垢!! すごい、すごい、あんなに綺麗なのに煩惱の一つも湧いてこない、流星は天使様！ 見つめていただけ、いつまでもおそばにいただけ！ やましい気持ちがない！ この私にやましい気持ちがないなんてさすがは！ 天使様！

蹴られとうございます！

あ……申し遅れました、私、僧侶のガトウーザと申します。幼なじみで妹のような存在を連れてどうしようもなく身勝手な家を出、というかあんな街ごと飛び出してしばらく経ちます。

代々長男を僧侶にする我が家にて例外なく僧侶にされた哀れな者でございます。幼い時から魔法使いに憧れ、幼なじみのメルティーをそれはそれは羨ましく思っております。

ええ、運命と言いますか……メルティーは私が申し訳なくなるほどに敬虔な者です。魔法使いになるようにと英才教育を受けつつも神、天使にいつも祈りを捧げておりました。そうすれば夢が叶うと。

しかし、私たちは無理やりそれぞれの職業にされてしまいました。親にとってはそこそこ戦えるように育てて自慢の種にでもしようという魂胆だったのでしようが……私たちは手を取り合って逃げてし

まい、すべてをおしまいにしてやりました。そもそも、私たちのことを道具としか思っていないかったですし。

私たちはさまよい、ようやくこのセントシユタインにたどり着き……そしてそれぞれの職業をダーマに行って変えたいと願いつつも修行を積み、ダーマへ連れて行ってくださる依頼主を探していたのです。もちろん短期依頼なら今までも受けましたが。

ええ、いやいやなつたとはいえ私たちの腕はまあまあ評判となりましてね。才能は……悔しいですがあったのでしよう。

日々天使様を信じ、奇跡が訪れると信じてメルティールと頑張っていた甲斐があつたようですね……！

ああ天使様！ その美しいお顔を、その慈悲あふれる眼差しを、溢れ出るオーラを！ もっと私めに！ 私めに！

お名前は？ なんとおっしゃるのですか天使様！ いえいえ、分かりますよ、天使様、ご謙遜なさらないで天使様！ 私には貴方様が天使様であるとわかります！ 翼の幻覚が見えますとも、翼がなくなつて貴方様は天使様！ 私には、わかりますとも！

はあ……天使様……。瞬かれるまつ毛が美しい……鼻先の角度の筋の通つた形、頬から首へのラインの優美さ、いかにもさらさらとした灰色の髪の毛は窓からの光に輝き、見開かれた瞳の中には星々が宿っているように複雑な光を宿していて、美しい。存在から、美しいのです、この方は。

こんなにも無礼に迫ってしまったのに……彼は嫌な顔一つせずにいるのです。

「私、ガトウーザと申します！ どうか宜しくお願いしますね！」

「私、メルティールといいます！ 天使様、馬車馬のようにこき使ってください、天使様！」

「どうして……こう……」

流星に驚いてしまわれたのか、天使様はなにやら眩かれましたが、すぐに自己紹介なさりました。

「俺はアーミアス。ただの旅芸人です。……あの、目立ちたくないの
で騒がないで頂けますか」

「……あ、はい」

困り果てたように目を細めてこちらを見られたらもう、もう私従うしかないじゃないですか!! なんですがあなた! 天使様ですか!
天使様!!

……そういえば天使様には性別、ありませんよね? 契約書には、あれ? 男性? 男性の天使様? こんなに中性的なのに!

「おれ、マティカ。一緒に黒騎士倒そうね!」

「ああアーミアス様……人助けをなさるわけですね……」

「様付けもやめてください……」

「じゃあ、アーミアスさん! 私たち、沢山使ってくださいね!」

メルティーと私は交互に彼に迫れば、おされてしまったように彼は領きました。……ちよつと無理やりだったかなとは思いますが、この機会は逃してはならないのです!

ああ……ああ。夢にまで見たお方が目の前に……。

「あの……俺は男ですし、そうありがたがるような存在でもありません。そうやってエスコートされるのはやめて欲しいんですが」

困り顔も……いい。素晴らしい。

……

やばい。まじやばい。やばいなんてもんじやねえかも……。なんで俺身の危険感じてんだ? いやいや、やばい意味ではない。天使バレはやはり俺は別種族だということもはつきり示してくれているからそういう危険はいつさいねえ。当たり前だ。

なにこれ?! なんなのマジで! 目の前にいるのは線の細いなよそんな男。聞いたところ僧侶らしい。雰囲気からして手練だ。手練多いなセントシユタイン。人間が沢山いるだけある。

そうじやねえよ。

反対側の隣にはメルティーという女の子。珍しい紫色の髪の毛をショートカットにした可愛い子だ。その子が手を合わせて一心不乱にお祈りをしている。俺を見つめ、なんか……表情がぶっ飛んでいる。

俺は……天使だからな。こういうことをされる側なもので、された

ことがないってわけじゃない。ただし、こうもはつきりとされたのは翼がもげてからはねーよ。なんでだよ。なんでバレたし。

メルティーはそりやあもう可愛らしい笑顔で俺のことをアーミアスさんといい、兄だかなんだかしらねえがそりやあもう出会った中で一番やばい男とついてくる。……着いてこさせたのは俺だが。そうだ、メルティーみたいにかわいい女の子を仲間にするとかいつがついてくる。有能そうで、しかも心は清いだろうところが断れないのが、まじやべえ。

やばい。ガトウーザは本当にやばい。なにしろこのホコリ男をものすごい勢いで天使と看破しただけではない。凄い勢いで、ものすごい声量で叫んだ。やめて欲しかった。それだけではない。俺のリツカたんペロリズムも真つ青な勢いで近寄り、俺のことリツカたんペロリストっぷりが可愛いと思えるほどに崇拜した。

ウォル口村はいいところだなあ……俺帰りたくなってきた。こいつ怖い。だいたい、ご利益はないから意味は無いことなんだが……。しかし俺にはわかる。こういうタイプから信仰物を取り上げてはならない。

俺にはわかる。暴走する。リツカたん抜きとか死ぬ。そういうものだ。わかる。わかるんだが……。怖い。リツカたんも……。こんな気持ちだったんだろうか……。こんな気持ちなのに信仰心にあついから耐えて……。うつつリツカたん健気……。ごめんねリツカたん……。これからはちよつと控えめになるぜ……。

天使ってのはいくらいかにも軟弱そうなのよいやつでも天使に見えるらしい。翼がなくても。こういう一歩間違えたら狂信者なやつに見つかったら……。割と怖いな。幸いなのは危害を加えるどころか段差ひとつひとつまで気を使われている、というところだろうか。

ああ神の子よ。正直うざい。

ちらつちらつとこちらを困ったように伺うマティカ。恍惚とした顔のメルティー。どっちが癒しかってそりやあマティカだろう。相変わらず純朴そうな顔をしている。そのまま置いてくれ。

さつさと王様のところに行くということになっている今、頼みの

リツカたんはもちろん宿屋にいるのだからいないし。リツカたんペ
ろりたいたいの無理だからマテイカという唯一のまとも枠に縋りたい。

気性つーか、心が悪い奴らではないのははつきりわかってるんだ。
だから、引きはがせないのが辛いところだ……。ああ師匠、弟子ここ
で困ってますよ！

それにしてもだな、都会といえど、というか都会だからかゴミが落
ちているのを必死で拾いたいのを抑えつつ、なんとも鬱陶しいのをな
んとかあしらう。

よーし……：急ぎじゃなかったら、終わったら大掃除してやろう。ふ
ふん、俺ってな、百年以上天使界の掃き掃除担当のベテランなんだぜ
？ 俺にかかれば広いセントシユタインも綺麗さっぱりにしてやる
よ！

目標できたらちよつと心も軽くなつたぜ！多分。

・
・
・

21話 試

.....

「黒騎士、ぶっ倒しに行くぞー！」

まばゆいばかりの笑顔で拳を突き上げているのはマティカ少年。そしてアーミアスさんの隣で行きます？ 行きます？ とせつかく整えてあげたのに髪を振り乱しそわそわして早く自分の力を認めてもらいたいガトウーザ。私？

えっと……恐れながらちよつとお外は怖かったりするので後ろからついていています。

もちろん後ろ姿もすらりとしていてお美しいアーミアス様をしつかり目に収めながら。ガトウーザが視界に入るのは現実に引き戻されるような感じがするのであまりよろしくありません。

私は魔法使いですが、魔法使いなんてなりたくなかったのです。唱えれば自在に操れる炎や氷の力。私が欲しかったのは人々のためとなる癒しの力なのに、……私は誰かを癒すことすらできないんですよ。守る力であると理解していても疎ましいものです。

別に魔物さんたちのことは怖くないですよ。むしろ今はさっさとぶっ飛ばしてアーミアスさんの糧にしたいです。でも……魔物さんたち、燃やされる時、苦しそうですね。きつととても痛いはずですよ。それに魔法が迫ったら怖いでしょう。

願わくば、早いところもつと強力な魔法を唱えて一撃で葬って差し上げなければなりませんよ。そのためには好きでなくても魔法の訓練をしないとイケませんね。メラミとか、メラゾーマとか使えたら爽快……じゃなくて苦しみを味あわせることなく死に誘^{いざな}えるかも知れません。

「先に少し力を確認してからにしましょう。互いのことを知らずして強敵には勝てませんよ、マティカ」

「あつ、そっか」

「意欲は素晴らしいですから、その勢いで行きましょう」

「はー」

なんだかアーミアスさんって先生みたいですよ。先生……というか子供を見る親というか。とってもマテイカさんを見る目は優しく、慈しみまで感じます。アーミアスさんは天使様ですから、私たちなんて子供みたいなものでしょね。特にマテイカさん、私たちの中では一番年下ではないでしょうか。だから一番優しい目をしているのかも。

とっても素敵です。天使様に慈しまれる子供。素敵です。食べちゃいたいぐらい素敵ですね。ガトウーザが視界に入っていないければもつと素敵です。信仰は相手に迷惑をかけてはいけないものです。僧侶とはいかなる存在であるのかまた説教しなくてはいけないようですね。

そんなこんなでセントシユタインの城下町から出た私たち。外に出た途端に私たちの雰囲気は一変しました。

弟が兄かよくわからない存在の幼なじみ、ガトウーザは僧侶ですが、よりにもよって魔法使いになりたい変わったやつですから、蔓延る魔物さんたちを燃やし尽くしてやろうとばかりの顔つきになっています。槍を構えているものですから、怖いです。串刺しにするつもりですよ。

マテイカさんは腕にもともと装着していた鉄の爪を下ろし、いつでも攻撃できるようにしました。それだけではありません、素朴な、ほつとするような、小さな無邪気な子供のような雰囲気はなりを潜め、目つきを鋭くして辺りを警戒します。襲いかかってくる何かがいれば、飛びかからんという……そういう雰囲気です。しなやかな獣のように油断がありません。

そして、アーミアスさん。彼は帯びていた兵士の剣を引き抜きましたが、構える前に一つ祈りを捧げるがごとく剣に手をかざして目を閉じたのを私は見逃しませんでした。目にするものすべてを大切に思っているかのような優しい目をしたお方ですが、もしかして、魔物さんたちにも慈悲を抱いておられるのでは？

……まさか。

魔物さんに慈悲なんて。魔物さんたちにも悪くない魔物さんはい

ます。スライムの中には特に悪くないよ！なんて言っているかわい
い子と故郷の街のはずれでおしゃべりしに来たことだつてあります。
でも例外中の例外ですよ。そんな子ならここにはいませんから。

こうやって私たちを見るやいなや襲いかかってくる魔物さんが更
生可能な心を持つているかというところ……私はない、と思います。私た
ちに出来るのは相手を慮おもんばかることではありません。私たちの、神から
いただいた尊い生命を守ることです。そのためには残酷でも殺さな
ければならないのです。

生きとし生けるものはみな、神の子。アーミアスさんも神が創りた
もうた存在です。特に手塩にかけて創られたのがはつきりわかる最
高傑作でしょう。

ですが、魔物さんは違いますよ。魔物さんは私たちの神が創った存
在ではありません。邪神の誘惑であり、悪意でしかありません。私た
ちに出来るのは弔って差し上げることと、悪意から逃れた子たちとお
しゃべりすることだけです。

「さあ、行きましょう」

決意を宿したアーミアスさんの瞳には今も無数の星が浮かんでい
ます。きらきらと、太陽の光が深く深く澄み切った瞳に反射してそう
見えているのです。

この方についていけば、私も、力を求めるガトウザの有り様も
きつと、よくなる。

私は、そう確信して……杖を抱え直して頷きました。恐怖はもちろ
んもうありませんでした。

・
・
・
・

流星に四人で戦えば大して苦戦……いやいや、全く苦戦しねえな。
それは想像以上に仲間たちの戦闘能力が高かったってことだろう。

俺が斬りかかろうとした時にはとつくにマテイカが飛び出して何
匹か魔物をぶっ飛ばしているし、メルティの呪文が二発ぐらいは放

たれているから相当なもんだ。

旅芸人はバランス型だからすばやきに特化した二人には勝てねえなあ。なんとも頼もしい限りだぜ。だがもちろん、そうしている間にも誰かが怪我しそうなものなら身を呈して守っている。僧侶のガトウザーのホイミはよく効くから傷みも持続しないいい感じだぜ。この中で一番体力があるのは今のところは俺らしいし、適任だしな。

ま、武闘家のマティカの方が体力がついたってその役が変わる気はねえがな。彼には攻撃を頑張ってもらいたいからな。なんであんなふうに馬鹿にされ、からかわれていたんだ？こんなに強いのに。よくある嫉妬からの……でもなさそうだった。はあ、人の見る目がない人間たちだ。お馬鹿さんってやつだな。悔い改めてもらわないとな。

一通り連携が取れるかなどを確認し、なんかそこらに散らばっている毒牙の粉を集めてみたりと今日は訓練やらで潰す気だ。さつとと、飛んでくるメラを皮の盾で受け切るのは無理そうだ。帰ったら新しいのを買わないとなあ。

んー、だが気になることがある。ガトウザーが言ったようにこの二人、互いの職業が逆だったらと思っているらしい。そのせいなのか、魔法が制御しきれていねえんだわ。

メルティーはよく暴走させ、ガトウザーはパワーアップさせる。皮肉なもんだな、逆にそれで強くなってんだからよお。才能に溢れた二人はそれでも逆のものを志す。くう、神様も試練がキツイねえ。

俺はよお、天使界に戻れようが舞い戻ってくるし、いつかはダーマにも行くだろう。そしたらもう一度二人には見つめ直してもらわねえとな。なんだかんだ似合ってるぜ？もつたいない、つーかほんとは、本当はいいかもよ？そういうのを考えるも人生ってやつだぜ。

にしても……マティカは癒しなだけじゃなく本当に頼れるし強えなあ。だから反面、ガトウザーがちよつとの怪我ごとに涙目になってるのがちよつと堪えてきたんだが。なあなあ、俺がパラディンになって仁王立ちするようになったとして、こいつどんな顔するんだ？

つーかよ、俺のことをちゃーんと天使だっけ見抜いたならこれぐらい当たり前のことなんだから受け止めろよな。俺のわがままで人間

たちを危険な外に連れ出したんだから守るのは当然！ そうだろ？

人間たちの健やかな生活、安寧。それを守るのが天使！ それに誇りを持っていききたいじゃねえか。なあ、そうだろ？

・
・
・
・

22話 待機

さてと。いつぞやの防具屋で二つうろこの盾を買い、稽古着上下に軍手に鉄の爪、足はサンダルというラフな格好で歩き回っていたマティカにヘアバンドに皮の靴を買ってやる。

買ってやる、ってムカつくほど偉そうな表現だよな。最初俺はパーティで魔物を倒して得たんだからみんなの金だと思ってたんだが、どうやら契約上、全部俺のものらしい。受け取るどころか猛然と拒否されてしまった。

だから「買ってやる」。マシな言い方をして「買い与える」。……俺としては契約金だけでなく、きっちり四等分して渡したいんだがな。受け取るどころかその契約金すら突っ返されそうになって慌てて断れない装備品を押し付けたってわけだ。契約金は無理やり握らせた。拒否されてたまるか。ちなみにメルティーとガトウーザは一日百ゴールドらしい。安くねえ？

宿代はリツカたんとここで泊まれば一人分三ゴールドで済むが、それでも安くねえ？ マティカは七十ゴールドで契約してたらしいから更新して百ゴールド渡した。

俺の精神的にも、魔物の討伐数的にも一番いい働きしているのはマティカだからな。事ある事にハアハアしないのがこんなに癒しだとは思わなかった。まじで。ガトウーザ怖すぎ。メルティーも俺の死角で何をしているのか全く分からねえ。

そんな嫌な意味で集中をしているガトウーザをメルティーがこそこそ杖で叩いて魔力を奪ってたのは見てて面白かったけどな！

あ、なんで装備品かって言うとパーティメンバーは俺の指定する装備品を拒否することは出来ない。そんで渡したやつはな、別にプレゼントでいいんだが、渡してもどれだけ使ってもらっても俺のものということには変わりない規定だとか。酒場雇い……つてしがらみ多すぎじゃね？

とりあえず真っ先に癒しオーラを出してニコニコしていたマティカに装備を渡したら、やばい顔して見てきたガトウーザ。咄嗟に皮の

帽子を押し付け、そのガトウーザをゴミを見るような目で見ていたメルティーにもうろこの盾を渡した。

この二人、ガトウーザはメルティーを妹扱いしているのに……メルティーはガトウーザをそこまで兄だとは思ってないんだよな……仲間いいんだか悪いんだか。本物の兄妹ではないんだろが、まあいいか。信頼関係はちゃんとしている。

「アーミアスさん、ありがとうございます！　へへ、強そうに見える？」

「そうですね、前髪をあげたら視界がすつきりしていいと思いますよ」「やったあ！　役立てるよう頑張るよ！」

マテイカつて空から落ちた天使だったんじゃないやね？　間違はなく俺よりは天使だろ？　こんなに純粹に喜んで……武闘家だから装備品をあまり更新できねえのが辛い。

一方ガトウーザは恭しく受け取った帽子を嬉しそうにかぶっている。黙っていれば……黙っていれば僧侶らしいのによ。残念、ともとれる。俺が言うなつて感じたが。この性格のどこが天使なんだろうな？　生まれを間違えた感じはある。

「明日でしょうか、精一杯頑張りますね」「ええ」

相方と違つておとなしいメルティーもいい子だよなあ。信仰つていうのは大切なことだが、行き過ぎるとなんでも毒になるつてやつなかね？

「うふふ……アーミアスさんの障害になるものはぜーんぶ壊してしまえばいいんです」

……聞いてないからな。俺は聞いていない。癖つ毛をぴんぴん跳ねさせてるマテイカにヘアバンドを巻き直してやつてるからガトウーザのドン引き顔も見えていないからな。誰だこの二人を歪ませたやつは。親か。

……

「来ませんねー」

月夜の中でも見渡す限りなみなみと水が満たされた湖。そんな美

しい景色を一望出来ても今回は仕方ないですね。フィオーネ姫をさらおうとした典型的な悪人を倒すためには来てもらわなくては困ります。

湖の方から吹き付ける風にちやりちやりと鳴るアーミアスさんの鎖帷子とばさばさ靡くメルティ어의ローブの音だけがします。

困ったように見回しているアーミアスさんに話を聞こうにも、さつきから彼は空中を見つめているものだから話しかけられないのが寂しいです。

……きつと天使様には妖精かなにかが見えるんだろうな。見ていても私には何も見えないですが、彼ならば見えるんでしょうか。

暇そうに武闘家の少年がシュタイン湖の縁に腰掛けてばしやばしやと足をばたつかせている姿を見、子どもっぽいなと思いつつも私も暇でした。お美しい姿を眺める事は暇どころではないが、それでも戦う心構えをしてきたものだから拍子抜けです。

「ひとつ、話でもしませんか？」

湖の遠くの方を見つめていたメルティ어가こちらを向いて明るく言いました。こくりと頷いたアーミアスさんに私には見せないような花の咲いたような笑顔を浮かべます。

メルティ어はツンツンしています。私に反抗期なのです。兄なのに！ 血は繋がっていなくとも、兄なのに！

「みなさんの昔の話です。私、アーミアスさんの昔の話をとっても聞きたくて。全部話せなかったらまたの機会に話せばいいじゃないですか。私の話は結構ガトウーザと被ってしまうんですが、お話ししますよ」

「……そうですね、親睦を深めるためにもいいかもしれません」

「おー、おねーさんいいこと言うなあ」

ぴよんと水辺からあがった武闘家少年が同意し、しかし肩をすくめて空を指さしました。いや。空ではないようです。

「でも残念だけど来ちゃったな」

指先に示されていたのは、黒い馬を伴って岩山を降りてくる黒い姿。邪悪とすら感じられるその姿は不気味でしかありません。ああ、

身構えるアーミアスさんと比べてしまうと余計に禍々しい。

黒騎士は馬に乗ったままアーミアスさんと一言二言会話しました。しかし当然姫を差し出すわけもない私たちにアンデッドとしか言いようもない赤い眼光の顔を晒し、その槍を向けてきました。

アーミアスさんは、一緒に戦って分かっていましたが、やはりとても優しいお方。敵からの攻撃をほぼ代わりに受けてしまわれる。止める事はできない。あの目を見て、あの信念のこもった目を見て私は止められやしないのです。ですから、私は僧侶としての職務を全うしなくてはなりません。

この望みもしなかった力を存分に振るって彼のサポートをし、役に立つことをアピールしなくては！ アーミアスさんは私たちの希望の天使様……そのお傍に置いてもらうことこそが至高です。

と、意気込み鉄の槍を構えた私にさみだれの一撃が命中し、僧侶の癖にアーミアスさんに回復されるという情けないことにもなったのですが。ああ、精進しなくては！

ふわりと舞うように剣を振るわれるお姿を目に焼き付け、足を引つ張らないように……！ それが私に出来ること、天使様の邪魔には決してなるまい！

・・・

23話 黒騎士

はあーまじねーわ。マジで俺らがあのべっぴんな姫さん出すと思つてたのか？ こいつ。頭の中お幸せなもんだねー、お花畑だねー。怪しいヤツに出すわけねーだろ当たり前だろ。

人間じゃない気配がするからさ、完全に敵認識つてやつ。つーか盛大に呪われた死人の気配だ、とつとと安らかに眠つてもらおうか。それが一番いい、と俺は思うね。まー未練つてやつがあるのは理解できる。愛しい人がなんだつて？ 明らかに人違いじゃね？

だからつてあんなにたくさん人間を怖がらせていいか？ 良くねえよ。……はあ、仕方ねえな。

ついでに俺の仲間達に怪我させんなよ？ イラついてるみたいだし、まあ俺はいいけどな、大事な仲間たちはダメだからな！ どーせそんなの言つても無駄な敵意がバリバリだから言わないが。本職戦士ではないから百パーセントは成功しない、つまり特技ではない微妙に使えない残念なかばいい方で俺が何とかするしかねえな。

とか意気込んだのに突然の五月雨の攻撃に対応が間に合わねえ！ 三発受け止めるのに精一杯だった。反則だろ、それは！と当然聞き入れられるはずもないことを思いつつも俺が不甲斐ないばかりに流れ攻撃を受けたガトウーザにホイミ。

そしてその後どうなっているかと振り返った時、ガトウーザが治つた傷を抑えた手の間から覗く赤い血に思わずドキリとした。

……人間は、簡単に死んじまうんだよな。

寿命だつてそもそも天と地ほどの差がある人間と天使。それだけではない。人間は翼を持たないから、逃げも遅れる。人間は戦わない者が多いから、そもそもその実力も違う。

俺達のような守護天使はある程度の戦術を学んでから降りてくるが、人間はそうではない。学ぶ場がない時も多い。ガトウーザはその限りではないが、僧侶という脆い後衛職であることには変わらない。傷を受けた時の驚きと痛みの表情が目には焼きついて、離れない。

守らないと、守らないと、俺は天使だから！ 愛しい人間よ、すま

ないな！ その痛みを与えてしまったことを……今日の前で討つことで報おう！

哀れな黒騎士、死してなお死に気づかずさ迷う亡霊よ！ 眠れ、俺が眠らせてやる！

ただの量産品の剣を振る。黒騎士の持つ見るからに頑丈そうならんすと剣は正面からぶち当たって甲高い音をあげた。やはりか、力も強い。

でもよお、こいつは師匠より弱いぜ？ うちのハゲで親しみやすくて上級天使でも一等に成績が……じゃないな、歴代二番目の成績を持つお師匠様よりは弱い！ 俺は師匠よりも素晴らしい天使になってリツカたんを幸せにせずと平和に安寧な生活をプレゼントする守護天使だからな！ ゆくゆくは人間になってプロポーズしたいが！

だからこの程度のやつに遅れをとって……守護天使が務まるかつつの！ そらよ！

ガキインツ！ キイインツ！ そんな音がしたら剣が柄からもげそう！ 鋳型で量産した剣でよかったぜ！

何度も何度も激しい音を立てて刃を交える。お前には負けてやらねえと、この貧相な顔に精一杯の覇気つつーか、睨みを乗せて。それに黒騎士は……うつそだろ、怯みやがった！

怯んだだけじゃねえ、俺って一人じゃねーし？ 馬に乗っているとはいえ単騎でやってきた黒騎士とはちげーし？ 俺との切り結び合いに夢中になっていた黒騎士は後ろから飛びかかって鉄の爪を食らわせんと切り裂いたマテイカには気づいてなかった。詰めが甘いヤツ。

もちろんメルテイーが、騎乗からの攻撃に押し負けそうになった時のサポートとしてヒヤドを打ってくれたり、斬り返す時にぎっくり顔やら腕やらを斬っちゃまったんだがそれを治してくれたガトウーザがいたりチームプレイは結成してすぐの割には良かったぜ。

で、黒騎士は馬から落ち、膝をついた。

おつ、俺たちの勝ちだな？ ……まあ亡霊とはいえちよつとボコし

たぐらいでは消滅しないか。未練を解決してやらねーとな。未練バリバリだろこいつ。あの姫さんとはこいつ、関係なさそうだしな。説明してやらねえとな。

ん？ 根拠はねえが。勘ってやつだよ、一応人間よりは長生きはしてるんでね。勘はそこそこ鋭いつもりだ。

あーあ、剣がすっかりぼろぼろになっちゃった。俺の大事なウォル口村で買ったのに。仕方ねえな、確かセントシユタインにはレイピアが売ってた。あれを買うか……。あーあ。量産品でも気に入ってたのに。

・・・

目の前にいる美貌の少年は、激しい戦いで切り裂かれたらしい服もそのまま報告にやってきたらしい。貴族や他の王族との付き合いも当然多いセントシユタイン王室に生まれ、現在は国王の私だというのに……。流れの旅人でしかない少年の美はともすれば気圧されてしまうほど。

……天使の美貌。そんなありえない考えが頭の中を渦巻く。人外の美と思えばストンと納得できたのだ、彼の星を宿した黒い目の静けさに神秘的な何かを感じつつ。さらりと歩く事に揺れる髪の毛の一本一本すら凡庸な人間には敵うまい。

しかも従えた仲間達もリーダーであろう少年……。アーミアスに向ける目は普通ではない。リーダーとして尊敬しているとかいう範疇ではなく……。崇拜している、というのが正しいだろう。

そういえば今城下町に駆け巡る噂があったな。ひとつは噂ではなく真実であった黒騎士への恐怖からのこと。もうひとつは……。セントシユタインに天使がやってきた、ということ。受難を助けに来てくださったのだと大騒ぎが起きかねないところをなんとか鎮圧したところだった。

天使様がいらっしやっただというならば騒いではならないだろうという半ば肯定の方法で。

噂の根源は……。彼がそうなのだろうな、と初対面の時も思っていたが……。いやはや。惨めではないが、激しい戦闘の跡を残しつつもそれ

が完成された美のように感じられる姿を見て改めて思うしかない。

さて、……彼は何者であろうか。そんなことはどうでもいい。素性は問わぬと最初から言っている。彼が本物の天使様であるとすればありがたいことではないか。セントシユタインは大地震を受けても、黒騎士の襲来があつても問題なく安泰であると。

「ふむ、黒騎士を倒したのじゃな？」

「はい」

恭しく礼をした姿に目を奪われそうになりながらも話を促す。すると……なんとこの少年は黒騎士にトドメを刺さなかつたばかりか逃がしたと言うではないか。

事情？黒騎士はフィオーネと別の姫を勘違いしていた？ 巫山戯るな、信じれるわけがないだろう。

そう語気を強めて言いたかつた。事実、言おうとした。だが。その前に彼は静かな声でこう言ったのだ。

「ですがそんなことをセントシユタインの国民の方々に伝えても不安は残るでしょうね。ですから、今から黒騎士の手伝いに行つてこようと思つています」

静かでありながら、たくさんの星々の光を宿した瞳はきらきらと輝く。それに魅了されてしまった私たちは、何も言うことが出来ないのだ。

神がその手で丹精込めて創り上げたような美しい顔、耳心地のよいボーイソプラノの声。それに完全に……ああ、既に抗うことさえできずに私は陥落していたのだろう。彼の存在に。敬うべき存在として。

王であつても、私は一人の人間でしかないのだ。

「では、また報告に来ます」

すつと隣に立つていたフィオーネが心地よい魅了から解放されたように玉座の間から出ていくのを目に捉えながらも私は静止の言葉すら告げなかつた。ただ肯定の言葉を一つ返し、恭しくも神々しい彼の礼に震える手を押さえつけることしか出来なかつたのだ。

仲間でありながらも配下のように付き従っている者達も静かに礼をしてアーミアスに、ついていく。

その時私は、感じたのだ。深い安堵と、焦がれる気持ちを。そして、羨ましさを。

彼は天使だ。人間ではありえない。そして……彼はこの国の守護天使ではない。あの瞳を向けられて私は確信してしまった。私たちの守護天使様の気配らしきものを、最近はとんと感じないしそもそもここまで優しいものであったかあやしいのだ。

どこか、別の所の守護天使様なのだ。その場所が、ひどく羨ましかった。彼がセントシユタイン王国の守護天使様でありさえすれば……あの瞳を向けられる安心感も、私たち人間を見る慈愛の眼差しも、一心に受けることができただろうに、と。

翼も光輪もない天使様。だが、それを失っているだけなのだろうと思えばそうなのだろうし、哀れにすら思えた。

そして、彼はそれでもなお人間を救って下さる。ありがたいことだと、私は玉座に座り直した。

・・・

閑話 翼落天使

・・・

布団の中にちんまりと収まってすやすや寝息を立てるアーミアスくん。当然翼があるからうつ伏せ。その寝顔はとても穏やかで……安らかな眠り。起こすことを誰だつてはばかるような眠りよ。いつもだつたらなんて可愛いのかしらって、そつと抱きしめたくなるような、穏やかな眠りなの。

そんな天使で天使で天使なぷにとしたほつぺたの赤みが今日は弱い。それどころか少し、血の気がなくて、むしろ青白いの。

それは……昨日他ならぬアーミアスくんが自分の手でその背に生えるふわふわの翼を切り取ろうとしたから。

私はね、第一発見者ではないの。最初に発見したのはやっぱりとうか、アーミアスくんの師匠であるイザヤールだったから。イザヤールはホイミぐらい使えるんだからあの時点では結構傷は癒されていたみたいで、私が見たのはそこまでひどい光景ではなかったはず。

でも、目に焼き付いているの。

可愛らしく、天使然としていて、庇護の対象そのものだったアーミアスくんの小さな体が……自ら流した深紅の血にまみれ、ぐつたりとして……長い天使生の中でも見たこともないほど泣きそうな、必死な顔をしたイザヤールの腕に収まっている姿が。

どうしてアーミアスくんがあんなことをしたかはわからない。聞くより前に今は……オムイ様の決定に、彼の回復を最優先にすると従っているから。癒しの魔法が得意な私は……皮肉にも大好きな見習い天使の顔を存分に眺めることが出来ているの。

アーミアスくんは優しい子。誰よりも天使らしい愛くるしい見た目で、見た目通り人間が大好きでいつでも力になってあげようとするような……天使の中でも珍しい、天使らしい天使。

悪意にも気づかないほど無垢で、悪意に晒されてもそちらに堕ちる事はなく、優しく微笑んでいるようなそんな子。誰よりも努力して……たったの三十歳で人間界に行くことを許された、天使界の長い歴

史を塗り替えた子。

私が三十歳の時、まだ師匠の背中にくつついていることだけしかできなかつたのにね。アーミアスくん、どうして……どうして。

とつくに傷の消えた彼の背中。でも傷はなくても、傷跡は残っちゃった。私の実力不足と言いたいところだけど、残念ながらそうじゃない。傷が、深すぎたの。小さく華奢な体には不釣り合いな大きすぎる、鋭すぎる傷は……癒しの力をもつてしても治し切れるものはなかつたの。

血を丁寧に洗い流され、以前と同様にふわふわの右翼。なのに、彼が傷つけた左翼は……ああ、見るも無残に、ボロボロなの。大きな傷跡は白い翼の中にあっても目立つほど。筆られた羽根のせいで余計痛々しいの。

どうして、どうしてなの、アーミアスくん。

ぼろぼろ涙が零れて、天使の服を濡らしてしまう。駄目ね、私は上級天使なのに。弟子はまだいけないけど、見習いの前ではいつだって規範となる存在として……すまし顔しとかなきやいけないのにな。

アーミアスくんは、それでも幸せそうに眠っている。それは救いつてことで、いいのかしらね。

……

あの悪夢の日から数日。血を失いすぎたアーミアスが目を覚ましたのはたまたま訪れていた朝早くだった。

目覚めたアーミアスはいつも希望の光に大きな瞳を煌めかせていた姿ではなく、ただ幸せな夢から覚めてしまったというような顔でぼんやりと私を見上げていた。見慣れた星の瞳に光はない。

ぞくりとする。

天使らしい姿をしているアーミアス、天使らしい善なる心を持ち、いつでも努力を怠る事はなく、期待に応え続け、私の言葉に逆らったこともない見習い天使に、私が。

恐る恐るのぞき込んだアーミアスの目にはわかりやすく落胆が浮かんでいた。落胆、落胆を。翼をもげなかつたことが、いつでも楽しそうな笑顔を浮かべていたアーミアスにそんな顔をさせるのだ。ど

うしてアーミアスがそのような行動に走ったのか。どうして……天使としての象徴を捨て去ろうというのか。

そういう心境に至ったきっかけ……考えられる事は、あの日……私は初めてアーミアスを人間界に連れていったことしかない。

人一倍人間への関心も強く、本の中と私の話ぐらいでしか人間を知らないというのにアーミアスは既に正しき道に人間たちを導き、安寧を維持し続けようという意志がはつきりと感じ取れた。だから、異例の年齢で連れていったのだが……早過ぎたのか。

地上でアーミアスは、とても楽しそうだった。初めて見る人間たちを見てきよろきよろと周りを見、転びそうな老人を支え、走り回る小さな子どもの近くで飛びながらアーミアスは笑っていた。天使界で見せる笑顔よりも輝いて。

……だから違う、と私は思う。少なくとも、原因だったとしても……人間を見たというきっかけは悪い理由ではなりえないだろうと。

それどころかアーミアスは、いくつになっても同じ行動に出たと私は言いきれぬ。なにしろ、勝手に上級天使の、しかも師匠の私物を持ち出すほどの覚悟だ。天使の理に縛られなかったことから命令に反しているとは露にも思わなかったらしい。

純粹に、普段のアーミアスと同じく……正しいと思って、最善を行くために、アーミアスは翼をもぎ取ろうとした。

その事実が、エルギオス様がいなくなってから久しぶりに私の心を抉り取るように突き刺さるのだ。大切な者をまた人間界でなくしてしまうのではないかと。

馬鹿らしい危惧だ。アーミアスは結局翼をもぎ取る事はなかったし、天使界にいる。まだまだ幼い天使なのだから私の監督なしに人間界に行くことは出来ない。私がそれこそ人間界では四六時中付いてやらねばならなくて当然なのだから、失うはずがない。

……アーミアスは、寝起きでぼんやりとした瞳を私に向けながら……何を考えているのだろう。わからない。私には、わからない。分からないが……少し、不満そうだな。後でじっくり話す必要があるだろう。

だが幸いにもはつきりしていることは、もうアーミアスがそんな無茶をしないことだろうか。

アーミアスは失血によって意識を失う間際、いつものようにこう言ったからだ。大量の血を流しながら、いつそ静かななんともないような声で。

「この方法は、駄目ですね」

アーミアスは決して、決して、間違っていることをしない。だからこそ正しいと思ったからアーミアスはナイフを手に取ったのであり、あの瞬間にアーミアスは間違っていると気づいた。だからナイフをすぐに手放し、私の指示を待った。

だから、もう心配いらないのだ。

アーミアスは二度と翼を自らの手でもぎ取ろうとするなんてことはしない。ナイフだろうが、他の方法だろうが。それは間違いなく、しない。

そうわかりきっているのいうのに……どうして、私の胸騒ぎは収まらない？ いつの日かアーミアスが私の手を離れ、一人前の天使となる日が来るというのに……アーミアスならうまくやっていけるだろうに……そんな気がしないのは、何故だ？

どうして、あの日、翼をもぎ取ろうとしたアーミアスを美しいと思ったのだろうか。

どうして、血を流しながら諦めたアーミアスに……どうして、自らの弟子に……きつと翼も光輪もない姿の方が似合っているなんて、思ったのだろうか。

アーミアスの背中には翼がある。天使なのだから当たり前のことだ。アーミアスが天から遣わされた日からずっとある。当たり前のことだ。当然アーミアスには翼と光輪があるべきであり、あつて然るべきで、今もある。昔もある。そしてこれからも。

なのに、私は、どうして……。

……

ルディアノ編 24話 廃墟城

．．．．
空気が濼よどんでやがる．．．瘴気もやばい．．．ここマジやばい。

さっきまで俺達はエラフィタ村っていうのどかな場所にいたんだがな。あの黒騎士．．．名前はレオコーンとかいうらしい．．．の為にルディアノの手がかりを探そうとしてたつてわけだ。

フィオーネ姫の言う通り、おばあちゃんたちの童歌に出てきた黒薔薇の騎士の話とか．．．まあそんなことがどうでもよくなっちゃまうくらいのだかでいいところだと思つてたんだがな。

空気は澄みきつて綺麗で人々は穏やかに平和に過ごし、花びらが舞い散る景色は素晴らしい。ウォル口村ぐらいいいところつて感じた。．．．守護天使の気配は相変わらずなかったが。おい、こんな素晴らしいところほっぽり出すんじゃねえよ！天使界に帰ったら上級天使だろうと文句言つてやる！ 天使の理ことわり？ 逆らつてはいないから大丈夫だ！

だが水をさされたんだ。しかも手伝つてやつてるつてのによ、張本人の場違い黒騎士野郎に。後で人間たちをびつくりさせないように外でじっくり伝えてやろうとしたらおもつきし村人を脅かしやがつてこの．．．この野郎。若者だけじゃねえ、たまたま居合わせたおばあちゃんまで怯えてたんだぜ？ 許せるか！ 後でシメる！

あの後あいつが立ち去つてからも泡食つてた哀れな村人たちをご神木の下まで連れていってやつて落ち着かせてやらなきやあのまましばらく震えていたと思うぜ、かわいそうに。俺たち見てほつとしたようにお礼を言つてたから．．．まあ、大丈夫だろう。

こういう時子どもと大人の境目と言い張りたい微妙な年齢の外見はいいよな。そうそうに見くびられるほどではないが、警戒されるほどでもない。それもメルティーがとても僧侶っぽくというか、僧侶っぽく落ち着かせてくれたおかげだろう。本職は俺の後ろにいたが。

なあにが天使様は誰にでも手を差しのべる、だ。お前も差し伸べろよ。別にこういうことは天使だからやってるんじゃないやねえ。その場にしたからやってるんだ。

にしても黒騎士さんよお……自覚があるのかわからんが、とつくてめえは死んでいて、人間じゃない。態度からさぞイケメン騎士だったんだろうが、形無しだな。さっさと俺みたいに自分の顔の不出来を自覚して相応の態度にしろよ、こんちくしょうめ。顔、怖えんだよ。雰囲気もかたぎじゃねえし、黒い鎧を着込んだやつって怖いからな？

理解しろよ？

だからまたあいつがやらかしても困るってわけでも名残惜しくも村を出、北を目指して突き進んだってこと。なんか先走って行っちゃまったけど。今度は少しは……気持ちがんばるとなくわかるから止めはないが。リツカたんがいると思ったら落ち着いていられねえよな、確かに。

北へ行けば行くほど毒の臭いとその他の瘴気がきつくなり、人間よりもそういったことに弱い、と思われる俺はゲホゲホしないか心配だ。ま、想像よりは大丈夫そうなんだがな。天使の力を失ったついでにそういうのに過剰反応もなくなったらいい。天使とか清らかじゃないとやばいとか柄じゃねえから助かったぜ。……だがまあ、サンデーが少しばかり俺たちを心配してくれるぐらいには酷い場所だ……。

なお、健康優良児まっしぐらだと見て取れるマティカ、鼻も良いのか真っ先にこのひでえ臭いに気づいていて、激臭地帯に入る前から既に俺達はバンダナとかで口を覆っている。

サンデーにもやってやろうとしたらダサいって拒否られ、そのまま俺の懐に光になって収まられたが。そっちの方がいいのか？ それなら同じ女の子のメルティーのほうが落ち着かないのか？ 妖精だから天使の方がいいのかもな……。

やれやれ、乙女心つてのはわからないな。わからないとリツカたんをおとせないかもしれないから理解したいんだが……リツカたんのもとで馬車馬のように働くから置いてくれっていうヘタレなアピー

ルしか俺には出来ないんだよなあ。

それじゃあ、ダメだよなあ……。

魔物も瘴気に耐えられるようにか強くなってきたし……はあ、買い換えたばかりのレイピアでも突き通せない、つまり一撃で倒せない魔物。俺が不甲斐ないばかりに長くくるしめるハメになる。もつと強くなりてえなあ。旅芸人じゃ駄目だろうなあ。

「どうか安らかに」

三回も体にレイピアを突き刺してからやつと絶命した羊型の魔物にそつと手を触れて青い光を空へ見送る。そんなことをもう何回も繰り返してきた。

そしてやつと着いたんだぜ。ルディアノの地に。手酷く滅ぼされたのか、野ざらしになって少しずつなっていたのか分からないが……俺が見たこともないほど廃墟となった城に。

黒騎士の嘆きがあまりにも哀れで、俺は思わず神に祈ったぐらいだ。

このレオコーンが、少しでも安らかにこの世を去れるような奇跡がありますように、と。奇跡は奇跡だが……きつと、きつと神なら可能だろう。見てくれているならな。俺は見えてくれているとは思ってないが。

なら、見ていて下さるのは星々の方だろうな。星々の加護があらんことを……。

……

崩れかけの城の内部へと足を踏み入れたおれたち。魔物もたくさん増えてるし、おれの活躍の場もたくさんつてことだよなあ！

念願かなって黒騎士を倒したのはいいけど、黒騎士にも事情があったと知って手伝おうとするアーミアスさんかっこいい！ おれも黒騎士を倒す！ じゃなくて改心させる！ つて思つとけば良かったのに敵の事情まで考えられなかった。

ぶつぶつそのことについてすごいとか言ってるガトウーザおにーさんと最初は話して面白かったけどずーつとその話から動かないから飽きちゃったよ。なんでかっこいいの見たらそのままそればつ

かりなんだろ。今のアーミアスさんの奮闘ぶりかつこよくね？ メルティーおねーさんは頷いてくれたのになー。

ホイミスライムっていう、見た目は可愛いのに魔物の回復係だから邪魔になってしまふ奴をぐめんって思いながら切り裂き叩きつけつつおれたちは進む。見習いピエロの色違いの奴らも結構いて、なんてゆーか、がいこつ以外はどういつもこいつも結構可愛くて、ちよつと罪悪感。

うー、でもそういうので刃を鈍らせたなら死ぬのはこつちだし、そういうのは逆に差別だよな！ うん、全部アーミアスさんに仇なすなら倒さないよ。

アーミアスさんってよく考えてて、ガトウーザおにーさんとアーミアスさんのホイミを温存するためにたくさん薬草を持ってきているらしいって、ガトウーザおにーさんが言ってた。だから怪我したら使うのは薬草なんだ。

もしもこの先に黒騎士よりも強い存在がいたら……エラファイタのおつちやんが怖がってた「魔女」がいたら……ってこと。くうう、アーミアスさんってよく考えてるよなあ！ 尊敬する！

しかもしかも、アーミアスさんっておれたちの中で一番装備を固めてて、守備力や体力が一番あるらしい。だからおれたちが怪我しそうになると代わりに……じこぎせーってやつ？ 怖いし、見えていて痛くなるから、やめて欲しいんだ。すごいって思うけどやめて欲しいんだ。なぜか、ゾクゾクする。

おれがもつと強くなつたらそんなことなくなるかな？ 例えば、おれたちに魔物が怪我させられる前に倒すとか、もつと速くなつたらできるとね？

よーし、おれ、武闘家としてもつと頑張る！ このツメのスキルを磨いて、得意の身のこなしももつと鍛えて強くなって、アーミアスさんが心配しなくてもキズ一つつかないくらい強くなるうっつと！

へへっ、見ててくださいね！ この修行着、今度はからかわれてボロボロにするんじゃないやなくて戦闘でズタズタになるまで頑張るから！

・・・

25話 対峙

なんつーか、ほんとなんつーか。警戒に越したことはないが言うほどでもないな。瘴気も慣れれば大したことないしな。埃が舞ってるから風呂には入りたいが。こういう時頭がホコリ色だと目立たなくていいぜ。ガトウーザは焦げ茶色の頭をしているからフケみたいに……。

大丈夫だ、俺はお前が悪いわけじゃないのを知っている。その頭はホコリのせいだろ？ わかってるぜ。わかってるからなんで涙目をやめねえんだ。あん？俺が身代わりになるのが辛い……？ 泣かせるねえ。いいか、ガトウーザ。俺の方が体力があり、死ににくい。だから俺が盾になる。話はこれで終わりだ。回復は頼んだぜ。

城の内部は結構崩れていて道が塞がっていたりもするが迷うほどじゃねーし。つてか、もう親玉っぽいやつのところを俺達伺ってるしな。レオコーンが対峙してるんだが、邪魔するわけにも行かねーだろうって思ってた。窮地に助けに行っても……因縁の相手っぽいしな。サンデイも神妙な顔だぜ。そんでマティカなんて物凄く真剣な顔。見たことねえ顔だ。……うーん、というか俺は仲間たちのことをあんまり知らないが。出会ってすぐだぜ？ 反対にメルティーなんかはもう突撃したそうだ。ガトウーザが腕掴んで止めてるが、杖でボカスカ叩かれてるな……。仲いいのか悪いのか。

そ、僧侶のMPをやばそうなヤツが控えている時に奪うのはよせ。……ヘタレでも言えばやめてくれるのはなかなか素直だよな……。

「アーミアスさん、あれ普通の魔物じゃないですよっ」

「……えええ」

切羽詰った顔をしたメルティー。小声で言う姿は……リツカたんのことがなかったら素直に脳内悶絶できる可愛さだ。俺は一途であるべきで、浮気しないし、僧侶であり……つまり力で負ける要素が職業的に皆無のガトウーザが引きずられているのをそっと思ながら悶えはしない。メルティーって強い子だな……。

「黒騎士さん、やられてしまいますっ」

「まだ、手を出してはいけませんよ……」

黒騎士の信頼ねえなあ。ま、俺も負けると思うけどな。近接系の黒騎士と如何にも遠距離攻撃が得意な魔女だし。おー、遠目でもおっぱい大きいな。顔が、眼光が怖すぎてお近づきになりたくないが！ 怖くね?! 明らかに頭からバリバリムシヤムシヤさそれそうなの見た目じゃね?!

天使も魔物も人間も見た目で判断しちや駄目だが！ 分かっているけど怖えもんは怖え！

「俺もすぐにでも加勢に行きたいですが、駄目ですよ。彼の想いを踏みにじってはなりません」

と、彼の名誉のために言っておこう。さあて、俺もメルティーと同じように武器を構えておいた方が良さそうだな。あのおっそろしい目からビームが出ていつ黒騎士が黒焦げになるか分かんねえ。

ていうか、僧侶らしいって売りのメルティー、好戦的じゃね? 別に悪いわけじゃねえが。え、あ、人間の言う僧侶らしく、魔に容赦しませんってか? ……魔物だ天使だ人間だって、そんな違いがそこまで大事かよ?

ま、目の前のあいつはマジやべーってか、容赦したらやられそうだからそれでいいだろ。こんなの……人間に比べればかなり長生きしているがよ……初めて見る。悪意はそこまで強くないのに、感情が凝り固まって、尊く光の感情であるはずの愛すらギトギトに汚れちまってよ。

略奪愛ってあるだろ? あれをもっと酷くして、永い時間呪い続けたって感じだ。あれを改心させるのは無理だな、俺には。師匠なら出来るかもしれねえけど……。

さてと、レオコーンが呪われちまいそうだ。とつとと深淵にお帰り願おうぜ。てか俺より年上だろうし見た目はまあ若いけどこいつババア……いや、何でもねえ。種族的にはピチピチギャルな年齢なのかもしれないな。

……

ふわり、柔らかく舞う髪を思わず目で追う。

一瞬、ほんの一瞬。彼だけに思考が塗りつぶされる。庇う体のしなりから、広げられた白い指のほっそりとしたところ、強ばっているように、痛みか苦痛かに耐えるような背を……。

邪悪としか言いようのない光。雷のように勢いよくそれは、アーミアスさんを貫こうとして。でも、彼は受け止めきつて。

「随分な、呪いですね……」

両腕を体の前で交差させて耐えながら、心なしか苦しげな声。慌てて駆け寄ろうとするマテイカさんを視線だけで背に戻させると、星の瞳はすっかり魔女の方だけを見てしまいます。

嗚呼！　せめてあの瞳が私のものにならなくても、あんな魔女なんて見なくて良いのに！　彼が許して下さるならこの世の綺麗なものだけ映していたいというのに！　この戦いが終われば不肖ガトウーザ、アーミアスさんに花束でも贈ろうと思います！　青やら白やら！　天使様ですから清らかそのものな清めの水でしやんとさせたお花がいいでしょうね！

アーミアスさんはあの力を振り払うと……そのことについては何の心配もしていませんでした、なにしろアーミアスさんは天使、魔性の姑息な呪いなんて効くはずがないからです……剣を引き抜かれました。

ああ、あの背に純白の翼があるところにこうやって背を見つめていたかった。マテイカを、メルティーを、私を、呪いのせいで動けない黒騎士を庇う尊い姿です。ええ、私が精進すればお庇いになられても怪我を負う前に治せるでしょう、その試練なのです。

「くうっ……なぜ効かない！　ならばこの手で葬ってあげるわ！」
「呪いではなく貴女には、安らかな眠りを送りましょう……」

アーミアスさんは天使様ですが、旅芸人というのは間違いではありません。本人の言う通り旅芸人なのです。その仕草は人を惹きつける気品に溢れ、視線を釘付けにします。スーパースターのような豪華な雰囲気ではありません。アーミアスさんには、似合いません。

気品溢れる役者のようであり、それでいて演技ではない。そういうお方なのだ、とやっとわかってきましたよ。

ガキインツ！ キイン！ 剣が悲鳴をあげました。

妖女イシュタルの短剣とアーミアスさんのレイピアが互いに交差し、激しい金属音が響きます。急いでスカラの詠唱を始めれば、武闘家のマテイカが、目標であった黒騎士をやすやすと拘束した敵だからか、緊張した面持ちで背後に飛びかかります。ですが……まあ、そんな杜撰な気配の消し方ではアーミアスさんが庇ってしまうじゃないですか。

アーミアスさんに、妖女の攻撃が浴びせられる……今、私、冷静にホイミを唱えているのですが、はらわたは煮えくり返っています。ええ、私が望みどおり魔法使いであるならばメラゾーマでもぶちかましていたでしょう。残念ながら私は僧侶、ザキも唱えられない若輩者。鉄の槍は構えておりますが、とても威力があるとはいえませんが。だから、何も出来ないのです。

メルティーが狂気の体現者ごとく魔法を唱えているから、なんとか冷静でいられるのですが。ここは心優しい彼女の情に任せるしかないですね。ああ、僧侶になるのがもつたいないほどの巨大で濃厚な魔力の暴走……。

メルティーがかけがえのない友でなければ、嫉妬に狂っていたかもしれませんが、その身を我がものにできれば夢が叶うと、天使様の御心に反する行いをしてしまっていたかもしれません。

ふふ、私の世界はとても優しい。私は道を踏み外す事はありません。特に天使様に出会えた今、どんなことがあっても人道に外れることなんてするわけじゃないですよ。

「……ガトウーザにーちゃんもメルティーねーちゃんも目が怖いよ……」

黙ってください、アーミアスさんがあなたを一番気に入っているのはとても悔しいことなのですよ！ 一番はリツカさんでも、パーティではあなたが一番！ 妬ましい！ 羨ましい！ いいなあ！

「ひえ……」

そう、それでいいんですよマテイカさん。アーミアスさんが怪我をそれ以上負うことがないように自慢の腕っ節で魔女なんて倒してし

閑話 死

「人は天使よりもはるかに短い命だ」

「……はい」

「私達天使は何百代もの人間を見守ってきたのだ。これからも私達は……この者の子孫を見守らねばなるまい」

「……わかつています」

真新しい墓の前で膝をつくアーミアス。聡明なこの子は人の寿命も儂さも、美しさも煌めきも、幼くしてすべてすべて知っている。だがそれでも初めて目の当たりにする人の死に堪えないわけではないだろう。

堪えるだろう、悲しいだろう。アーミアスが人間のことをこうも愛しているのは、我が師エルギオスを思い出させるほどなのだから。かの大天使のごとく高名な天使として貢献していく事は今の幼い姿からでも想像が簡単だった。

晴れ渡った空であるというのに、吹きすさぶ風に自らで傷つけたロボロの翼と太陽に透かされ銀色に輝く髪を任せ、アーミアスは祈る。それは神にか、はたまた星々にか。

今回ばかりはいいだろう。次からはもう少し早く立ち直つてもらわなければならぬが。今回は、この子供を一人置いてなくなつた若い女性の死に向き合わなければならぬだろう。人間としても早すぎる死に、閃光の如く生きた美しい魂に思いを馳せても許されるだろう。

白く新しい墓石の前にいる少女とアーミアスの背を見ながら、私は守護天使として生きている人間にしてやれる事はないかと空へ舞い上がった。

胸を痛める幼き天使には時間が必要だった。特に、アーミアスが気に入った少女の姉だったのだから。

確かにアーミアスはその中にいるのに、どうしてか消えてしまふそうだと私は思った。馬鹿なことを、翼からあんなに出血しても生きていたアーミアスだというのに。

翼を傷つける事はもうないだろうが、またおかしなことをやられては困るな。今夜はラフェットにでも見張りを頼もうか……。

……

あの日、どこか落ち込んだような、ぼんやりしたような顔で、アーミアスくんは帰ってきたわ。手には私でも稀に見るぐらい強い輝きの星のオーラを手にして。イザヤールは珍しく弟子を気遣うように頭をぼんぼん撫でていて、その星のオーラを受け取っていたの。

自分で手に入れたものだっていうのに見習いでまだ守護天使じゃないからって自分の手で世界樹に捧げられないのはいつ見てもおかしいわよね。オムイ様に進言してみようかしら。

まあ、この年で星のオーラを手に入れられちゃうアーミアスくんがイレギュラーなのはあるけどね。ホント天使なんだから！

「おかえりアーミアスくん」

「ただいま、かえりました、エレッツタ様」

「あらあら丁寧に。気軽にお姉ちゃんって呼んでもいいんだからね？これは命令じゃなくて提案よ」

「……えっと」

「おい、私の弟子を困らせるな」

まったく、こんな天使で天使な子に話しかけて何が悪いって言うの。天使にはお姉ちゃんって呼ばれたいに決まってるじゃない。私だってアーミアスくんにししょって可愛い声で呼ばれたかったわよ。頭かたいんだから、イザヤールって。

イザヤールと戯れのように話しながら、私は決して何があったかは聞かなかつた。聞いちやだめなのよ、こういうことは。暗黙の了解つてやつなの。

天使、特に見習い天使が地上へ行って落ち込んでいる時……自分から何か言わない限りは何も触れないっていうのはね。だって大抵は初めてか、初めてじゃないかに問わず、人の死やら不幸に関わっていないんだもの。

上級天使が落ち込んでいたら緊急かもしれないから根掘り葉掘り聞くわよ？ でもこの子達の悲しみや悩みは違う。まあ、アーミアス

くんだって人間だったらもうかなりいい歳の大人に相当するわよ？

でも天使としてなら赤子よりは自律的に歩いたり飛べたりする分成長したってだけの幼い天使。寿命……ううん、私たちにそれはないわ……老いる時間の違いに打ちのめされている子達にへ々に声なんて、かけられない。

「失礼、します……」

ふらふらと外に向かって歩いていったアーミアスクんの髪の毛にいつものキューティクルがないし、沈んだ表情も可愛いのに私ってば……らしくもなく無言で見送るしかなかったの。

あつちには一応、大人の姿の天使がいるから大丈夫、よね。ああ、自分で自分の翼を傷つけたアーミアスクんよ？ 安心できないの……。

アーミアスクんの翼から音もなく抜け落ちた羽根が空を舞っていたのがあんまりにも綺麗だったから、私は小さい時みたいにその羽根をそつと拾い上げて大事に仕舞ったの。幼いからか、私の羽根より柔らかくってね、ふわふわしていて、誰よりも純白のその羽根は……ふふ、密かに人気なのよ。

羽飾りを作っている女の子たちは普通、上級天使とかの自分より大きい天使のものを使うことが多いから恥ずかしがってなかなかなかおっぴらにはしてないけどね。

……思い出すわね、初めて気に入った可愛い子が、おばあちゃんになつてとうとう死んじゃった日、私の力不足で魔物によって人間が殺されてしまった日を。

翼も光輪も持たない、生きる時間だって短い人間って、アーミアスクんみたいになんかそれこそ、天使のように清らかでも、無垢でも、純粹でもないのに……あんなに惹かれるのは何故なんだろうね。

今日は、祈りの部屋で星々へ祈りを捧げましょうか……。

……

26話 魔女

天使の力はほとんどなくしちまったと思ってたんだがなあ。幽霊は見えるわ、妖精は見えるわ、その上邪悪な呪いが効かないのは残ってる、と？ ならなんで星のオーラが見えないんだろうな？

星のオーラが見えない、翼がないから空を飛ぶ事はできない、光輪がないから人間に姿を認識してもらえない……。女神からの贈り物に違いねえ。俺に不利な要素がない！ あとは寿命だな、これはどうなってるのか短時間じゃわからない。光輪がないということ人間並になつてりやいいんだが……。なぜか？

リツカたんを見送るのは数多の人間の死を見てきた俺にも耐えられそうにねえからだ。死ぬなら老衰で共に老いたい。リツカたんを選んで男と添い遂げていてもだ。

それはさておき、イシユダルの呪いが効かないってのはいいことだ。有利になるならそれでいいしな。これで倒れることを気にせず庇えるってもんだ。

だから加勢に来てくれたマティカが怪我しねえうちにぶっ飛ばして成仏してもらわねえと。黒騎士もそうだったがこの魔女もとつくに寿命も超えてるだろ？ 人外だからそんな事はねえって？ それでも……まあ死んでもらうしかないな。生まれ変わったら今度は何になるかは知らねえ、でも綺麗な人になって眼福に貢献してもらいたいぜ。

こんなに綺麗な女ひとなのにな。出来るものなら人に迷惑をかけないで欲しい、俺から勝手に思うのはそれだけだ。余計なお世話だろうが、誰かに迷惑をかける……っていかそんなレベルじゃねーぞ。人間一人、寿命の理から外しやがった。その上、今も三人と俺の命まで狙っている。

俺だつて死にたくねーよ。ガトウーザとメルティーをダーマに連れていくんだからな、まだまだ死ぬ訳にはいかねーよ。リツカたんが幸せに過ごしているのを百年近く見守りてえし。それを成し遂げてもいないのに死ねるかつての。

マテイカに飛んだバンパイアエッジを叩き落とし、すかさず飛んできたヒヤドはガトウーザに当たるくらいなら俺の腹に受けた方がマシだ。そして体勢を立て直した時、何を思ったのかイシユダルは何故か豊満な胸に手を当て……。

おい、青少年には刺激がきつすぎだろうが！ それから自分を安売りにするな！

「ぽふぽふ」は純粹少年マテイカや敬虔暴走ガトウーザには駄目だから！ラフェットさんのふにつを真顔でやり過ぎた俺でもグラツと来そうなもんだ、ヒヤドでも受けて頭を冷やせ！

メルティーも察したのか、たまたまなのか、連続でイシユダルにヒヤドが突き刺さる。そこに何もわかっていない顔をした癒しのマテイカが癒し要素の欠片もない強烈な攻撃を脳天から振り下ろした。

……光景が、悲惨だな。瘴気まじりの気が弱まっていく、その存在が薄らいでいく。ナイフを落とし、赤い目の輝きがだんだん淡くなっていく。どうやら倒せた……みたいだが。

胸が痛い。だが生かしておくわけにはいかない。死にゆく姿ですら魔性の美しさを持つ彼女は、俺たちへの恨みを吐きながらレオコーンに手を伸ばす。

やったことは最悪だが、恋い慕う想いに貴賤は存在しない。愛する人と自分の時間を止めて封印まがいのことをするなんて許されることではないが、好きである想いが尊いことには変わりない。この愛する人が愛する人と引き離されたのは……これまた許される行為ではないが、また別の話だろう。

俺たちは部外者。下手な事は言っていないわけがない。だが同時に俺は天使。迷える者に道を示さなければならぬ。示すことも俺の存在意義だから。

……天使は弱き人間を守る存在らしい。その健やかな生命を守り、幸せに生きる手助けをする。時に脅威から守り、時に来世への誘いをする。

俺はそれが気に入らない。俺は天使だし、間違いない。人間を導く存在であり、助けること自体には不満はない。だが、魔物であれ、魔

族であれ、本当は導かねばならないだろう？ 次の生では敵対することもない仲間となるのだから。

俺は至らぬ見習い天使だ、だからせめて終わらせてやり、祈るのみ。それでいいとは……思っていない。ついでに言うならこの考えは吐き気がするほど傲慢だ。願わくばこの魔物の生でも共に歩んでいきたい。救っていききたいんだよ、俺は。

死なせたくない。苦しませたくない。だがそれは、叶わない。

「イシユダル、貴女の魂が……」

じくじくと腹が痛む。氷の傷はなかなか痛まないものだがだんだんと痛みが増していく。血がぼたぼたと垂れているのに気づいたガトウーザが俺を支え、魔力が尽きたのか薬草を使おうとするが制止した。そんな事はあとでもできる。

「貴女の魂が、次は愛する者と添い遂げられるよう、祈ります」

「……バカな天使……」

赤い目の魔女は、ふわりと少女のように微笑む。あどけない無邪気な子どものように、優しく。苦しみではなく、ほっとしたように……そう見えたのは俺の都合のいい幻なのだろうか。

そうではないことを俺は祈る。空で見守る星々なら、真実を知っているのか……否かと、思う。

……つてか、みんなボロボロじゃねーか。薬草？俺はいいから早く自分に使えよ。あん？俺が一番重傷？違いねえな、だが気にすることは無いぜ。別に怪我を放置するつもりじゃないからな。

ほら、俺にはウオル口村の人間たちがくれた薬草がたくさんあるし。持たせてる分は気にすんなよ。

……うずくまったレオコーンを見るにまだ一悶着あるかもしれないねえしな……。

・
・
・
・
・

27話 紫転機

・・・

純白でレースのついたウエディングドレスにルディアノの物だったらしい赤い首飾りをつけたフィオーネ姫様と戦のための甲冑姿の黒騎士さんは服装こそちぐはぐで奇妙でありながらも美しく……厳かな王家の婚礼である、と私にもはつきりとわかります。

傍らで見守る私たちは、その哀しい踊りをただ見つめ、徐々に光に包まれて薄れていく黒騎士のレオコーンさんを見守るだけでした。

妖女イシュダルにすら情け深いアーミアスさんは辛そうな顔で見送られ、最期を迎えたイシュダルさんはそれまでの険しい顔つきが嘘だったように安らかな顔で逝きました。そちらも……私の心に来るものがなかった訳ではありません。

ですが、……時を越え、記憶を受け継いだお姫様と騎士さんが再び別れを告げるのだ、と思えば……ええ、俗物的な言い方をすればより美談であるということでしょうか。

私はただの魔法使い、僧侶になりたい魔法使いです。ですが私が仮に念願叶って僧侶になれたとしても清らかな心を持ち合わせてなんかいないでしょう。魔女さんの死よりも人間から怪物にされてしまった騎士さんの安らかなる昇天の方に感動してしまうのです。

嗚呼、敬愛する天使様であるアーミアスさんはそんなことを少しも考えていないでしょう。今もようやくとガトウーザの言葉を受け入れて薬草を使い、未だ血塗れの姿ではありますが傷を塞がれました。しかし、アーミアスさんはかなり失血されているのです。

本来なら早く安全な街に戻り、安静にしていたいただきたいのですが……このような場でそれを言い出すほど私は無粋ではありません。この場を無理をおして見届けるアーミアスさんの思いを無駄にするわけにはいかないでしょうか？

しかしながら不安ではあり、気づかれないようにそっとアーミアスさんを見れば、あの大怪我がなかったかのように背筋を伸ばし、真っ直ぐ立っておられます。堂々と、いえ、それでいて見守っているよう

な眼差しで。

二人の哀しい踊りを見つめる黒き瞳には星のような光がいつもと同じく宿っていて……あら、ピンク色の光もちらついているようすが。

……アーミアスさんにはそこに精霊さんか妖精さんかが見えているんでしょね。うう、視線を奪えるなんて羨ましい。

よくよく耳をすませば、アーミアスさんは眩くようにその存在に向けて話しかけているようでした。いえ、会話でしょうか。

「……これでよかつたんです」

瞳に映る煌めきが抗議するかのように揺らぎました。

「俺に……もつと力があればよかつたのですが、まだまだ、至らぬことばかりなのです……」

懺悔する言葉に私は声を大にして反論したくなりました。私たちに怪我をさせまいとあんなに立ち回り、命を狙った魔女さんにすら苦しみを与えぬように送ってやり、この場にいるのも辛いでしょように見守る……こんなこと、例えアーミアスさんよりも戦闘力が高いなどの優越がある人間だとしてもできることではありません。

アーミアスさんが天使であるからこのように素晴らしいのだ、ということは嘘ではありませんが……私にはアーミアスさんであるからこそここまで優しいのでは、と思うのです。ええ、出会ったことのある天使様はアーミアスさんしかいませんので分かりませんが。

まさか、アーミアスさんが至らないなんてことはありません。その存在が何を言ったかは分かりませんが、それだけは反論しなくては……とはいえ私、度胸もありませんし、いきなり口を出すなんて無礼を無視できるほどの鈍感さも持ち合わせておりません。

「……そうでしょうか、サンデイ。そう言ってくれるのなら……少し、嬉しいですが」

サンデイさん?! 女!? どの女ですか!?

……失礼、妖精さんでしたらかわいい女の子の妖精さんとか、人間のイメージですらそんなものですよ。精霊さんでも女の精霊さんに違和感なんてありませんね。しかし、私が悔しいはその存

在が女であることに加えて……アーミアスさんがうつすらと微笑んだことなのです！

それほどこまでに気を許している……ということですよ。私たちはまだであつて日が浅いゆえ、そんなに表情を変える姿なんて……苦痛のものしか。うつすらと微笑んでくださるなんて、マティカ少年くらいなものですよ！

悔しい、悔しいですよ！ 私があつと強ければ！ レオコーンさんもイシユダルさんも一撃で燃やしたり凍らせたりして倒してしまう事が出来たなら、私を褒めてくれたのでしょうか？ このように、笑つていただけたのでしょうか！

この憎むべき恐ろしき魔力を、こんなにもつと欲しいなんて望むような事はあるでしょうか！ ありましたね！ うう、少し考えてみましょう！

……例えば僧侶になれたらどうでしょう、アーミアスさんの傷を癒す事が出来るはずですよ。ですが！ ですが！

そもそも傷を負わせてしまう前に立ち塞がる敵さんたちを私の魔法で粉砕してしまえばいいのではないのでしょうか！

そのためには魔法使いでなくてはなりません。私は体が強くありませんし……。そうだ、賢者になれば最高峰の爆発呪文を操れると聞きます。それを習得できればどんなものでも吹き飛ばし、アーミアスさんが私たちを庇おうとする前に倒せますね！

僧侶への憧れ、夢。それがなんでしょうか！ 何になるんですか！
今アーミアスさんを守れもしないのに！

私が見据えるのは未来ですよ。私が進んでいくのは過去ではありません、天使様に出会う前の私ではありません！ 最善を選ばなければ！ 私には！ 私には！

……決めました。私は、賢者になつてみせますよ。

よくよく考えれば……賢者だつて人を癒せます。確実に人を蘇らせる魔法や、どんな傷を負つても完璧に治してしまう究極の回復魔法も使えると聞きます。ならば！ 問題ないですね！ 人を癒せる上に強くなれる。強くなればアーミアスさんに怪我をさせることはあ

りませんし、賢者なら傷跡も残さずに治してしまえるに違いありません！

うふふ……決めました……決めましたわ……。ああ、アーミアスさんの存在によって私が変わっていくのを感じます。うふふ、素敵なことですね。私、私とても幸せです。

私、今すぐにでも……貴方様を包み込む服になりたいのです。それは叶うことはありませんが、賢者になれば……うふふふ。

あは……いい思いつきです。うふふ……ふふふふふ。

あほ面晒してアーミアスさんの美しい顔を見つめていたガトウーザにいつの間にか手をひかれていました。気づけばセントシユタイン城下町を歩いていて、今から王様に報告に行くのだと伝えられました。

うふふ、失態ですね。アーミアスさんをずっと見つめていたのに、はしたない妄想に夢中になってしまっなんて……。うふふ、でも笑いが止まりません。

私、私つて……そうです。僧侶になれなかったのはこういうわけなのです。神様。賢者になるために、よりアーミアスさんを守るために攻撃魔法の練習から入ったというわけなんですよ。うふふふ。

あら、ガトウーザ。どうなさいました？ 何でもない？ そうですか。顔色が悪いですよ？ うふふ。

ふふ、マテイカさん。どうしたのです？ 今日はお手柄でした。あんな風に前衛で戦うという事はガトウーザにも私にもできません。あの場でアーミアスさんの助けとなり、共に戦えるのは誇りに思うべきですね。え？ 思っている。ならいいのですよ。

私にできないことを他人に求めるって正しいことだと思えます。何故か胸の奥底から深い深い嫉妬のどろどろした感情が沸き上がりますが……この程度を溢れさせるような人間が「賢き者」になんてなれるはずないです。

うふふ、うふふふふ。平常心、平常心です。すべては天使様の……いいえ。アーミアスさんのために……。この清らかさに、美しさに、

慈悲深さに、存在に。既に私、夢中でして。
・
・
・
・

28話 貧血気味

．．．
良くやった、と言う声すら震える。先ほどファイオーネや兵士の証言から一連の事件が終わったことも、その手柄はもちろん目の前で静かな瞳を向けるアーミアスたちのものであると知っている。

知っているからこそ、傷こそすでに塞いでいたようだが、ひとり血を流した跡の残っているアーミアスの姿が痛々しい。前見た時も服が切り裂かれた姿であったが、鎖帷子を砕かれた戦闘痕は魔女との戦いが如何に激しかったかと……それから彼の仲間たちが苦々しい顔で立っていることからすべて彼が攻撃を庇い、受けてしまったのだということがまざまざと伝わってきた。

彼は天使。優しすぎる天使様なのだろう。しかし仲間達の目を見よ。あれはむしろ自分たちがアーミアスの盾になりたいという、そういう目である。しかし彼に逆らうことも同じくらいできないことであり……ああ苦勞が忍ばれる。

そして、そして、この姿の……なんと美しいことよ。気高き天使像が動き出したような……いや、違う。

それこそ想像しかできぬ天界におわす存在である、と隠しても隠しきれない鳥肌の立った肌でしかと感ずることの出来る、圧倒的な美なのだ。幾分か肌は前よりも白く、星の瞳は柔らかい光を宿しながらも事の結末に納得できていないのか鈍く輝き、少しも物怖じすることなく背筋を伸ばして立つ姿は……ただただ惹かれる。

「大儀であった。黒騎士事件を解決するだけでなく危険な魔女まで倒してしまおうとは！」

「……ありがとうございます」

揃って一礼する彼ら。しかし……ああ私を見るアーミアスの仲間たちの視線は鋭い。鋭い爪を腰に下げた金髪の少年はにこやかに笑っているがその目は剣呑であり、寄り添い立つ兄妹らしき二人にいたってはそもそも表情から取り繕う気すらないらしい。

王に向かって無礼な、と言うには……私は既に自分の非を認めてし

まっている。天使様は少しもお怒りにならない、そのような素振りすらみせない。それがかえって私には辛いことだった。せめて、助太刀の兵でも送ってあげれば良かったのだ。

しかし私は何もしなかった。そして……人間を守って下さる気高き天使様が不要な傷を多く負った、というわけなのだろう。相手は魔法、魔法の手痛い攻撃を血の汚れを見てわかるように腹に受け、それでもなお守り続けたのか。

「玉座の裏の階段を上った先にはある宝物庫の鍵を開けておいた。中身は褒美として持っていくが良いぞ」

「ありがとうございます」

「……」

恭しく礼を言ってお下さる天使様と後ろで声を出さずに口を動かす仲間。……「大したものが入っていないならどうしてくれよう」と、読み取れる。勘弁して下さい……青い宝箱は何度でも補充するゆえ……。

その後、金のロザリオを勝ち取ったらしい僧侶の青年は小声でアミアスさんの加護付きだと連呼していたので少しばかり羨ましかった。

あれがあれば悪夢など見ないだろうに……。

……

「……どうしたの、アミアスッ！」

「あぁリツカ。ただいま戻りました」

ぼろぼろの格好になったアミアスが帰ってきた。その隣にはアミアスがどうかなくなってしまふんじゃないかとばかりにハラハラした顔の仲間の青年がついていて、杖を握りしめた女の子は私を見るとほっとした顔をして部屋をお願いします、と言ったの。とても普通の状況じゃなかった。

勿論アミアスとその仲間の人たちは従業員価格で四人合わせて十二ゴールドで泊めるつもり、何だけれど。

天使様の世界から落ちてきた、傷だらけのあの時のようにアミアスの肌は血の気が引いていて、傷はなくても血の跡がべったり残って

いて、私に向けて微笑みかける表情は見とれてしまいそうなら綺麗なのに……微かに手足が震えているのを私は見逃さなかったの。

肌が白い。いつだって透き通るように白いアーミアスの肌は、今は青白いの。なのに疲れた顔なんて見せないで、黒い瞳はいつも通りに優しさをたたえて、星を宿したようにきらきら光る。

アーミアスは、いつも無茶をする。どこまでも天使様である優しい優しい彼は……私たち人間に頼まれ事をしたら断れないし、自分がどんなに怪我をしていて辛くてもやり遂げてしまう。文句の一つも言わないで、当たり前のことみたいに。

天使様だから？ 天使様だから無理をしちゃうの？ アーミアスに守られるのは嬉しいこと。ありがたいこと。感謝すること。でも、でも！ そんな傷ついた姿なんて見たくない。そんなに怪我するってわかってたなら……何をしても止めたら良かった！

セントシユタインには兵士が沢山いるから、アーミアスがわざわざでなくても解決するって。峠の道の土砂崩れの時みたいにつて。言えよ良かったんだ。

アーミアスだって生きているの。いくら守ってくれる強さがあっても、血が通っていて、体温は私たちと変わらずあたたかで、規則的に息をして、美味しそうにご飯も食べるし、それで当然、怪我は痛い。誰よりも優しいアーミアスだから隠しちやつてなかなかわからなくても……実際耐えてしまう強さがあっても。

……ああ、今も守護天使様としてウォル口村で見せていたあの慈愛のこもった顔つきで私を見て、立っているのも辛いのに、私たちひとりひとりが何か不自由していないかを見ているの。

そしてみんなが健康であるとわかったら、私に向けてとろけるような笑顔を浮かべるの。何度見ても胸が高鳴ってしまう、綺麗な微笑みを。大丈夫だと安心させるような。

……騙されないからね。アーミアスに悪気がなくても、アーミアスが無茶するのは私、絶対止めたい。そんな顔色で大丈夫なわけないじゃない！

「とりあえずそこに座って待ってて。すぐに部屋を用意するから」

もう見ていられない。ぐいつと酒場の椅子を引いて、アーミアスの日焼けなんてしていない真っ白い手を取って、座らせる。抵抗もなくアーミアスは座って、そして休むでなしにほかのみんなも座ったら、とばかりに首をかしげる。

初めてつかんだアーミアスの手はチラツと見た見た目こそ柔らかかな何も傷つけられそうにない手だったけど、触れば分厚いたこが付いていたの。厚い手のひらの皮は強さの印。そして守るための努力の結晶。

ぜんぜん、私の手とは違う。

あの手は、守る手。守るために戦う手。誰よりも儂く守られるべき存在のように美しく整っていて、天使様だからか中性的な顔立ちをさけているけど骨もしっかりとしていて……天使様であろうが、アーミアスは……男なんだなあと場違いに認識する手だった。

急いで空き部屋を帳簿で確認して、部屋を三つ用意する。四人ともばらばらの部屋にするには空気が足りない。優しい微笑みを浮かべていたアーミアスがついに限界を迎えたのか不意にぐったりと机に突っ伏してしまったのを視界の端にして、とんでもなく慌てながら……ドアを蹴破る勢いで飛び込んできた男の子と茶髪の青年は同じ部屋に泊まってもらおうと考えて。

男の子は何故か鎖帷子を片手に持っていて……ああ、アーミアスの着替えを買ってたんだ。

鍵を手に、駆け寄る。

「アーミアス……？」

僧侶の青年が杖を片手にアーミアスの背中に手を当てる。ぽわつと灯る回復魔法の光。でもそれはすぐに消えてしまった。彼は悔しそうに唇を噛む。

「……申し訳ありません。魔力は先ほどの戦闘で使い果たしてしまっただけです……」

「ガトウーザ、怪我はないですから、俺は大丈夫です。ちょっと疲れただけです……」

そう言っただけで立ち上がったアーミアス。また私を見て、本当に大丈夫

ですから、と繰り返して。そんなに言われたら大丈夫じゃないって言ってるようなものじゃない！

でも鍵を受け取ったアーミアスは誰の力も借りずに部屋に行ってしまった。男の子から鎖帷子を受け取ってお礼を言ったアーミアスは、そのまま部屋に閉じこもってしまっ

夕飯の時間になっても降りてこなくて……私はとても心配だった。

幸いというか、隣の部屋に泊まった仲間の青年……ガトウーザというらしい……曰く、倒れるような物音はしていないから寝ているだけだと信じたい、と。

……ねえ、アーミアス。無理はしないで……？

……

……

……

……

閑話 呼込中

よつす、現在呼び込み中だぜ。リツカさんの経営する宿に泊まれるとかこの世の史上だろ？ もう可愛い人間たちを呼び込みまくるしかないよなつて思つてな、気合入れて看板作つて立ってるんだぜ。

勿論戦闘はなし、手伝ってもらうのは申し訳ないから仲間の三人には今日はオフだということ伝えておいた。給料は出すと言つたら拒否られた。……気のいい奴らだ。明日もちよつと天の方舟が動くかどうか確かめるつもりだし、明後日にルイーダさんの酒場で集合つてわけだ。

……ガトウーザとメルティーは絶対についてくるつて言い張つてたし、マティカもいい笑顔で明日が楽しみだつて言つてたし……休みの意味をわかつてんのか謎だがな。明日は何が何でもねじ込んで受け取ってもらうしかないようだぜ……。

んなことは今はいいんだよ。俺は散り散りに好きなことをしに行つた仲間たちよりリツカさんの笑顔のために今日を消費したいんだからな！

リツカさんが一日寝りやあ貧血ぐときすつかり回復、リツカさんの最高に美味しいご飯を食べて元気どころか脚力で天使界に帰れそうなぐらい絶好調な俺を心配してくれたんだ。その顔もめちやくちやペろかつたんだが、ペろかつたんだが！ 心配ばかりさせていらねえぜ、情けない！

俺が宿を繁盛させる手伝いしたら多分、喜んでくれるだろ？ やつぱり人間は幸せで笑つてくれた方が一番嬉しいしな！ そのほうがいいだろ？

しかも心配顔のリツカさんは昨日の夜二時までペろつたからしばらく補給しなくてもいい！ そもそもリツカたんつて存在するだけ

でペロペロだし、なんだろうな！最高に可愛いぜリツカたん！だから、心配なんて体に悪そうなことより健やかに微笑んでいて欲しいっていうのが惚れた側の願うこと、だろ？

「旅の宿？どっちだい嬢ちゃん」

「左手の階段を下りてすぐの大きい建物ですよ。一晚朝夕二食付きです」

「ふうん、行ってみるか……」

……俺は女顔ではない、客観的に見てもそのはずだ。男らしい顔つきではないのは認めている。なよいホコリ男だからな。ひよろくて筋肉もなく、まゆも太くなく、肌も白く、リツカたんペロペロに光る真つ黒の目で、背の丈はそこそこ、全体的に薄い。

服装は利用者が親しみやすいように旅人の服だ。まあ、宿つてのは旅人呼び込むんだしな、当然のことだろ。制服があれば着たかったんだが、リツカたんは着慣れたあの服を着ておかないとな！

だから制服なんていらねえんだよ！この美しく最高の世界でオンラインワンナリツカたんまじペロ！何、ウエイトレスやウエイターの制服ならリツカたんの宿屋にもある、だど？確かに呼び込みはウエイターの仕事の一環としてないわけでもないだろうが……どうだろうか。俺はこれを通したいぜ。

うーん、それにしてもなんでこんな屈辱を受けなければならないのか。百人に一人くらいなら見間違えをしても幼き人間のすることだから仕方ないと思えるんだがなあ。

あと定期的にセントシュタイン在住のお婆さんたちにお供えされてて完全に今の俺生きてるだけで天使像扱いなんだが、おかしくね？呼び込みしてもバレるってどんな天使補正だよ、熨斗つけて返してえ。

つーかさつきから俺は半分くらい「嬢ちゃん」と呼ばれるんだぜ？訂正は……そうだな、世の中にはいろんな顔の好みの人間がいるだろうから夢を壊さないようにしてないんだが。もしかして……間違えている失礼な奴らはサラダに突っ込む薬草に塩を振らないほどの薄味好きなんだろうか……？ならある程度仕方ない……のか？

おいおいおい、それならよ、貧相な俺を見て女と思うぐらいならルイーダさんの豊満な胸をみたら鼻血噴水モノじゃねえか？ つまり今の兄ちゃんを天国に招待しちまったのか……俺は……。まったく、いい善行をしたもんだぜ！ 存分にノータッチで不埒なことをせず眼福していつてくれ、連泊で頼む！

宿に入ると桃源郷だしなあ、けしからんぜ！ まず酒場でルイーダさんの妖艶な美女っぷりを見、胸に見とれ、不埒な視線を振り払う仕事に思わずデレデレとするだろ？ それからふと振り返れば銀行受付嬢のレナの颯爽とした街のマドンナっぷりに目尻が下がるだろ？
そこでここで押し寄せてくるペロさはリツカたん。

まだまだ二人に比べてみれば年は若い、可愛らしさには関係ねえな。さらさらの青いおかつぱ、くりつとした大きな目、ピンク色の唇は見るだけでペロいし、昔の病弱さが嘘みたいな健康的な体つきは見守る側として冥利が尽きる。

ささやかな胸元に見とれる危ない奴は俺が守護天使として容赦しねえが、そうすると俺は俺を罰しなきゃなんねえな。だが俺は天使、じゃなかった紳士！ 一秒以上見てたことはねえ。セーフだろ？

ついでに言うなら天使界一のリツカたんペロリスト紳士を目指す俺は洗濯物を干すリツカたんに近いこと姿が見られない頃なら容易に見れたばんつの柄も色も形状も知らねえ。思い出す度惜しいことをしたと思うが後悔はしていない。清く正しくリツカたんをペロらずして紳士ペロリストを名乗れるものか！

リツカたんが健やかに健康に憂いなく過ごし、たまに笑いかけてくれるなら俺……当然ぱんつより笑顔の方をとるんだからな！ リツカたんまじペロ！

「入口すぐの左手の階段を下りてゼロ秒、リツカの宿屋をぜひお使い下さい！」

「……なんてゆーか、アーミアスって案外俗者？」
「？」

俺の奮闘ぶりを眺めていたサンデイはぼそつと……俗者？俺ほど天使らしくない天使なんていねえだろ、呼び込みすることぐらい今更

なんてことないんだが。なんだ、金儲けの手助けって感じは天使らしくないとでも？

昔から見守ってる女の子の手伝いぐらいいいだろ！旅人の服で旅人の宿アピールも健全でさっぱりとしたイメージどおりだし、清潔感があるだろ？ 俺の髪色以外は！ 髪色はどうしようもねえから！

「そんなワケないか。オツカレね、アタシはちよつと向こうに行つてくるから」

……なんかよくわからんがいつてらっしやい。それにしても……俺に直接話しかける人間は少ないが宿に向かうやつは始める前よりそこそこ増えたように見えるから成功つてことでもいいんだらうか？

にしても、だ。駆け抜ける風が足元をスースーさせるもんだなあ。旅人の服一枚つてのはリツカたんに着てもらいたいやつであつて……俺じゃないんだが。ルイーダさんが言うならまあこれが正しいんだらう……な？

ちなみに男は黙つてフンドシだぜ。

・
・
・

29話 停止

ただ睨むだけで魔物が帰っていくから平和だな。

ん、ああ、おはよう神の子。今からちよつくらぶつ壊れて停止中の天の方舟まで行ってみようと思つてな。一応仲間たちは着いてくるとは言つていたが……休みだし……黙つて行って、放つてひとりどしたらやっぱりというか、着いてきた。

まあそれはいい。来たところで減るものでもないし。だからといつてこの通り戦闘すら起こらないからだのハイキングと化してゐるんだぜ。それでいいのか？ 着いてくるのは徒労になつてねえか？

朝の空気は露の瑞々しさの中爽やか、草原の風は吸い込むと生気を感ぜられて清々しいのなんの。天使界は澄み渡つているがこんなに生命の息吹を感じたりしないし、人間界の方が好きになるつてもんだよなあ？

あー、平和だ。しかも歩いているだけでこんなに気持ちがいいなんて、お弁当でも持つてリツカたんと来たかつたぜ。ああ、もちろん二人きりがいい、デートしたい。デートしたいぜ。

そんな俺のちやちな妄想より朝っぱらからキビキビ働くリツカたんのいつてらつしやいがまだ胸に残つててな、くるものがあるぞ。そう思えば妄想の中のリツカたんより思い出の中のリツカたんが俺の頭を占め始める。

普段通りのエプロン姿で、俺には新妻のように見えるリツカたんが怪我しないでねと心配そうにしてから笑顔でいつてらつしやい、アームias！ つて言つてくれたんだぜ？

リツカたんの圧倒的ペロパワーに打ち抜かれて星になるところだったぜ！ 今日もリツカたん可愛いペろりん！ 今日俺はリツカたんペロリストとしてどんどん昇進していくぜ！

リツカたんを原動力にルンルンで歩く俺と対照的に何故か髪の毛や服装がボロつているガトウーザと別にボロつていないメルティーは暗いし、マティカは特に何も言わないが妙に静かだ。昨日何かあつ

たんだらうか？

「アーミアスさん……っ」

心配したその時、俺の癒しのマティカが堪え切れなくなったように俺に話しかけてきた。

……なんでそんなに、泣きそうなんだ……なあ、神の子。俺、もしかしてなんかしちまったのか？なんでそう、悲しがる、なあ、言ってくれたらそれを排除してやる、だから言ってくれないか。ぎゅつと胸が締め付けられるみたいに悲しくなる。俺が悲しんでも仕方ないが。

なんてな、こう直接言えたらもつと天使っぽくなれるんだが。言えねえな、ただ俺みたいな見習いに来るのは「何でもしてやること」ではなく「話を聞くこと」だ。ていうか……言ったところで何でもしてやれるほどの力を俺は持っていないんだよな……。無念ながら。出来たらいいのに、すべて叶えることができればいいのに。

座学の成績と愛しかない見習いには無理な話だ……。

「何ですか？」

とりあえず向こうは天使オートバレのせいで俺の正体をしっかりと把握している。だからウォル口村の愛しい人間たちと同じように接した方が……いいかもしれないよな。とりあえず今回は。

俺よりも少しばかり背が低いマティカ。流星に屈まないといけなほほどじゃないが、とりあえず目を合わせて笑いかける。俺みたいなホコリ男でも無表情で話しかけるよりはまだ笑ってる方が愛想があつていいだろ。笑った方がキモい？もうそれはどうにもなねえな。デレッツデレな俺に寛大なリツカたんと同じぐらいマティカも寛大なことを願う。

な、どうしたんだ？

「天使様の世界に帰っちゃったら、いつ帰ってくるんだ……？」

「忘れ物があるだけなのですぐにでも戻ってきますよ」

「天使様にとつてのすぐと、ぼくたちのすぐは一緒なの？」

「ああ……」

なるほどね。すぐ帰るっても相手は自分の祖父よりも生きてそうで年齢も不明。時の流れの感じ方の違いを怖がったってわけか。可

愛いな、本当に人間は可愛いよ。

マテイカって可愛くないか？ リツカさんの次ぐらいに可愛くないか？ えっやばくね？ 健気じゃね？何、こいつは男だ？ だからなんだ、天使に性別はあるがないようなもんだ。単に孫を可愛がるような気持ちを抱いて何が悪い、俺は百歳を超えてるんだから。

「すぐですよ、同じです。どんなにかかっても二日くらいでしょう。あそこには知り合いもいますからね、話が長引いたらそれくらいはかかってしまうかも知れませんか。でもそれ以上は俺こそ人間界の方にいたいので飛び降りてでも帰ってきますよ」

「それは駄目！」

「……ははは、ただの冗談ですから」

半分本気だが。

前はホイミなんてなかったからひたすら怪我がウザかったが、今回はばつちりホイミがあるんだぜ？ だから飛び降りたっていい気がするが……。

あ、駄目だ。前はウォル口村の滝壺にうまいことはまったから生きてたようなもんだよな。あの上空から地面に叩きつけられたり海に飛び込んだら普通にお星様になっちゃうわ。それは困る。絶対にしないと決めた。今決めた。

だいたい俺は死ぬわけにはいかねえって！ 何度も何度もよお！

今はまだ子供体型のリツカたんがだんだん大人の雰囲気纏い、だんだんと艶めいていって俺みたいな万年ガキな見た目のやつと並ぶと親子にしか見えなくなっていくんだぜ？ そうなつてもずっと愛しいに決まってるんだから、ていうか愛おしすぎ、今も目に浮かぶ上に、ペロすぎ！ すべて見届けるまでは死ぬるかよ！

リツカたん、俺がすべての危険を払い除けるからそこで笑っていてくれないか?!

「あの、忘れ物、とは……?」

メルテイー、そんなに恐る恐る聞いてくれなくても俺が取りに行きたいのはリツカたん観察日記とリツカたんにもらった花で作ったしおりと少々の持ち物ぐらいだからな？

観察日記はなあ、ほかの人間の分も大量にあるんだが……ていうかウォル口村の人間全員分……とつくに故人になってるのも多いし、まあ個人情報のかたまりだし、ほかの天使に読まれたら恥ずかしくて死んでも死にきれなくなっちゃうからついでに持ってきて燃やすか。天使界で燃やすのはなしで。ホコリみたいなやつが狭いあの場所にすすを残してどうすんだ。……焼き芋でもするかな。

「思い出の品が少し」

「……！　そうですか」

おお、言及しないでくれるんだな。ありがとう。もしこれで聞かれてたら俺は罪悪感にやられながらも嘘をつかなければなかなかつたぜ。人間たちに嘘をつきたくないとか常々思ってるつもりだが……今生きているめっちゃくちや美少女で努力家で健気で優しい女の子のちっちゃな頃からの観察記録をつけてるとかそりやあもうやばいと思うからな。やめないが。

天使とか人間とか魔物とか一切関係ねえ。普通にキモいやばいだろ。やめないが。とつてきたらごま粒みたいな字で書いているおかげで辛うじて手帳サイズに収まっているからな、見られないようにずっと懐に入れていよう、そうしよう。

俺は一人心中でうなずきながら峠の道で沈黙を続ける天の方舟を見上げた。前と少しも変わりなんてないんだが、俺の気のせいかな？　重々しくそこに横たわっていて、色がくすんだ方舟の扉に手を当てる。すると軽い手応えがして簡単に開いた。

「そこに、お乗り物があるんですか？」

「ええ」

「人間の身では見えない高貴なものなのですね……」

天の方舟ってそんなすごいものなんだろう？　それこそオムイ様のような万単位で生きている天使すら始まりを知らないという古さはあるが、飛んでいる中に乗ったこともないし……。なんか妙な形してるしな。

ま、俺の審美眼が駄目ならただただ恥ずかしいだけだから曖昧にしておくか。ガトウーザが地面に膝をついて崇め始めたしな……。

ちなみにそのまま中に入ったならなんかちよつとばかり揺れたがただそれだけでほかは何もなかったぜ。

ということと帰る事も出来ずにそのまま黒騎士騒ぎで閉鎖していた関所が開放されたらしいと聞いてそつちに行くかと俺たちは計画をまとめた。

目指すは？ そうだな、まずは異変のせいになにか起こっていないのか偵察しながら人助け。ただそれは俺の事情だな。もしダーマ行きの船があるならそつちを優先するが……たしかあつち側はベクセリア方面だよな。ベクセリアは船産業が有名なわけでもないし、大國であるセントシユタインが定期船を出していない時点で諦めた方がいいよな……。

すまん、ガトウーザにメルティー。しばらくはダーマに連れていくのは無理そうだけ。俺は素直で素朴で世間の汚さに染まっていないマティカの修行に積極的になるからちよつと我慢してくれ、な？

………。つまりここ十年ちよつと毎日、雨の日も風の日も雷の日も雪の日も嵐の日も暑い日も寒い日も見守ってきたリツカたんとしてばらく会えなくなるってこと……だよな……？ やばい。リツカたん不足で欠乏症になって死ぬかもしれねえ。

やべえ、やばい。よし、ポジティブに考えることにしよう。リツカたん欠乏症になった結果、リツカたんに再びリツカたんペロペロと思いなながら再開した時にはリツカたんの可愛さが何百倍、いや何千倍かに感じられるってわけだよな？

リツカたんの良さが発作になって逆に幸せ死しちゃうな！ それは本望だぜ！ よし、出発は明日にして……って駄目だと？もう行く？なんでそんなに積極的なんだ……。仕方ないな……。

うう、リツカたん……。

・
・
・
・
・

ベクセリア編

30話 澱

やばい、関所が、もとい橋を渡るとそこは雪国……じゃねえわ。秋だった。セントシユタインでは青々としていた草もすつかり茶色や黄色に染まり、そこらで遊んでるのかこつちを付け狙っているのかそんな魔物たちもなんとなく秋っぽい配色の奴らに変わった。木ももちろん黄色や赤色に変わってるし物寂しきがあるな……。

これ、やべえな、やべえよ！ 知識の上では分かってたが人間界つて場所によって季節があるんだよな！ 動いたら変わるとかやべえ！ 天使界は季節のかけらもねえから珍しくてやべえな、待つてなくとも良いんだな！ これだから人間界は最高だぜ。

もちろん普通にただ待つてりやウオル口村にも冬も春も来たが、さつきまで夏の場所にいたのに移動することで秋の場所にいるってのは経験ないんだぜ！

こころなしか気温も少しばかり低……やつべ、俺は天使だから気温の変化なんて大したことねえが人間にはやばくね？ 季節の変わり目には風邪でバタバタ人がベッドの住人になるもんな、ガトウーザとかメルティーとか大丈夫か？ マティカみたいに元氣少年なら大丈夫そうだが……。

……うーん、別段変化はなさそうだから心配いらないか？ なんとなくさつきより元氣そうにすら見える。人間つてどれぐらいの「変化」に耐えられねえんだろう？

「目的地のベクセリアに誰が行ったこと、ありますか？」

「おれ！ おれある！」

巨大なひとでみてえなもみじこぞうを興味深げに突っついてきたマティカが手を挙げて笑顔。いい笑顔、いい返事だ。

「小さいときに行ったつきりだけど！ 高い壁の上にあつて、レンガだらけで、セントシユタインよりもどこか茶色っぽくて、それで」「具体的にはどうなんです……」

おいおいガトウーザ、人の話は最後まで聞けよ。具体的とかどうせ十分も歩いたら着くんだから二の次だろ。ていうかりツカたん口スで少しづつ不足ダメージを食らってるんだから癒やさせてくれ。

「え?! えっと……一番町で高いところに大きなお屋敷があつて、セントシユタインみたいに王様がいるわけじゃないけどどこでも偉い人はいるもんだなつて」

「ありがとうございます、それだけ分かれば充分ですよ」

なるほどね、町の長なのか単なる金持ちかは分からないがその「大きなお屋敷」の住人には良くも悪くも注意した方が良さそうだな。人間って権威とか気にするだろう。郷に入ったら従わないとな。今まではそんなことなかったが物理的に追い出されないと限らないし……。

俺にとつてはかわいいかわいい人間たち、時には何でそんなことに執着するんだということもあるがそこもちよいとばかり愚かしく健気なところかもしれないねえよな。

にしてもだ……セントシユタインのリツカたんにはなんにも悪いことが起きていないって俺のリツカたんセンサーが言っているから大丈夫なんだが、俺の嫌な予感が鳴り響いているんだが……。ベクセリアに。

なーんか……愛する人間たちにとんでもないことが起きているよな、まだ何も見ていないのに胸が締め付けられるような？ 気のせいだろうか、気のせいだったらいいんだがなあ。

どうも、ウォル口村で流行り病でも魔物の襲来でもない、たまたまにすぎないのに人が連続でバタバタと死んでいった大昔が思い返される……。

人が死ぬってことは慣れねえよ。特にまだ若い人間が病にやられるっていうのはな。そんなことにならなきやいいんだが。

……

空気がよどみ、さつきまで自然から感じられていた正気が弱々しく変わりました。体にまとわりつくなにかはねつとりと重苦しく、絡み付いて内部に侵入しようとしてくるかのようで……そうです、例える

ならば何かを吸い込んでしまい咳き込みたいような、異物を感じています。

ただ僧侶故にこういったものに過敏になっているのか、と思えばそのようなではありません。皆不快そうに眉をひそめたり恐る恐る息をついていたりと違和感を感じているようです。

中でも流石と言いますか、アーミアスさんの様子は顕著です。ひゅつと息を吸い込んだと思うと息を止め、周りをゆっくりと見回し、痛ましげに目を伏せられました。その途端、私たちの周りだけ明らかに視界がよく、明るくなったのです。

そのことについてアーミアスさんは何もおっしゃいませんでしたが、天使様としてのお力で私たちに害がないようにしてくださいのだとわかります、ええもちろん。広い範囲を覆うことは叶わなかったのでしょうか、そのことを気に病んでいられる様子に……私は感謝の言葉をかけようにもかけられなかったのです。

もつと積極的にならないといけませんね……。

「嘆きが、聞こえるようですね」

私たちに向けられたのではない小さな囁き声。それは……私には見えませんが、先日メルティーが存在を確信した妖精らしき存在に向けられたものでしょう。

嘆き。住人の嘆きということでしょうか。はたまた、別の……そう、例えばこの状態を生み出した元凶とか。まさか、とは思いますがアーミアスさんならありえることでしょうか。

「お気づきでしょうか、皆さん」

そしてくりとアーミアスさんは振り返って私たちを真剣な目で見つめました。そしてまるで乞うかのようにおっしゃいます。そんなふうに言わなかったって私たちは喜んで着いていくというのに、です。

自惚れるなら、大切に思ってくださいっているということなのです。優しく気高い天使様は私のような人間すら気にかけて下さる……嗚呼、なんて、なんて尊いのでしょうか。

「危険です。なるべく俺から離れないでください」

必死にも見えるその瞳に宿る星々ごとき輝きに変わりはありませんでした。ですがそのどんよりにごり曇った空とは違う、柔らかな灰色の髪がゆつくりと、ですが確かにじんわりと濡れていくように濃くなつていくのを見たのは私だけではなかったでしょう。

瞬間、私は悟ります。私たちのためにこの瘴気とも言える空気の穢れをこうして代わりに引き受けているのだと。そんなこと、清らかであるべき天使様がいつまでも続けていれば、いいえ少しの間であつても無事で済むのかどうか。

ああ、それでも。ここで起きている異変を彼はなんとかしてしまふまで去ろうとなんてけつして考えられないのでしょうか。天使様は人間のことを慮つてご自身の安全まで考えてくださらないのでしょうか。

ならば私たちがアーミアスさんを守る番ではありませんか。不本意でありましたが、私は僧侶。その手のことは普通の人間よりも遙かにわかりますし、穢れを祓う術も習得できます。

どうせダーマにはここにいる限りいけないのですから職を利用してきただけ利用しましょう。アーミアスさんの為です。敬愛する天使様のため、そう思えば苦ではありません。むしろもつともつと役に立ちたいのです。当たり前のことでしょう！

ああ美しく美しい天使様、貴方の濁る姿なんて見たくありません。させたくなんてありません。そういうのは矮小なる私ども人間が引き受けなければなりません！ ただでさえ自己犠牲の精神をお持ちであるアーミアスさんです、無理をなさつてはいけません！ 私に実力があれば、ただ微笑んで見守つてくださるだけでいいのに！ 私に力がないばかりに！

ともかく初めに「おはらい」を応用してアーミアスさんに向かうこの濁った空気を浄化しなくてはいけませんね。上手くいったとしても……私はアーミアスさんほど広い範囲を覆えはしないでしょうが。ええ、街を覆うこの嫌な空気。それを何とかするには元凶から絶たなければならぬのです。

……激しい戦いが、私には今から予想されますね。

……

• • •
• • •
•

31話 考察

すっかり翼移動慣れから脱し、地面で駆け回るのが当たり前になっていてだな、すっかり地上の生物の一員みたいにおこがましくも思ってたもんだから特に気にしていなかったんだが、やっぱ俺って天使だと認識する。人間ではないな、この能力を練習も修行もなしで出来るのはよ。

ひたすら濁ったような空気が気色悪いし、長くいたら精神的な意味で気分が悪くなりそうだが、肉体的にはなんともねえんだもんなあ。人間ならこうはいかない、そして他のやつを加護よろしく護れるのも、な。これが守護天使故ゆえにこうなのは知らねえ。だって俺最近独り立ちしたばかりなんだぜ？

そしてまだ見習いからは脱していないっていうな。師匠からこんなに離れて行動するのも初めてなのに知るわけねえよ。……知ってたら良かったのになあ。

妖女イシュダルの呪いが効かなかったようにこういう呪いに似た澱みもこうして俺には効果がない。とはいえ俺は平気でも仲間たちがダウンしたら困る、ということ意識すれば呪いの余波ぐらいは三人分くらいは防げるんだな。どうやってか？ やり方に関してはなんとなくだから分かんねえって！

これ以上はどう頑張っても無理だがな……。例えばこれは本気で三人のうち誰かが元凶のクソ野郎に全力をもって呪われていたら大した効果はないはずだ。街全体を覆うレベルの、一人あたりには少ししか効果を及ばさないタイプだから俺の殆ど失われた、天使として力スミたいな力でもなんとかなっているだけだ。

……もし、力を失わずして……つまりリツカさんと話せずして、光輪を失わずしてここにいたら何か変わっただろうか？それでこの街の人間を護れたなら。魔物が増えてる中ニードは一人で峠の道に向かっただろう。ひよつとしたら黒騎士の騒動で誰かが怪我をしたかもしれない。ああ、考えるだけ無駄なんだがなあ。つい「もし」を考えてしまう。

つっても人間でもこれぐらいは高僧か賢者ならできそうなものが、俺なんてまだまだただの見習いのひよっこ天使。まだ五百年も生きていない若輩者。それでこれぐらいできるなら師匠とかならこの街にいながらにして街まるごと浄化できたんだらうな。

師匠！ 可愛くないが弟子、ここで困ってんぞ！ ヘルプ！ 人間たちに救いを！

……こりやあ聞いちゃあくれてねえな。少しは弟子を可愛く思ってくれてもいいじゃねえか、ていうか黒騎士と違って俺には手に負えねえだろ。

さて……うざいほどに鼻につく悪臭は病気の原因、つか災厄そのもの。収穫の季節である秋に感じるはずの生命の息吹たる爽やかさや躍動なんかは可哀想に抑え込められ、その上人々の絶望が激みを手伝ってしまっている。最悪に近いぜ。

だが幸いにも人々はまだ諦めきっているわけでもないし、街の人間全員がこのどっから来てるかもわかんねえ厄災にやられているわけでもないらしい。入り口に絶望しきった顔の青年が立っていて俺たちに帰るように促したが、そいつの体は健康そのものだったからな。気をしっかり持ってほしい、病気は気から、だからな?!

そこで俺が大丈夫だと示すように微笑むとか気の利いた言葉を言うとかそういうことが出来たらいいんだがそこはリツカたん以外には全然できない俺。原因を祓ってやるとかそういうのもこんな初見段階で約束することも出来ないしな……ぬか喜びとかさせるわけにはいかないだろ？

「この街で何が起きているのでしょうか……」
「……」

メルティーの暗い声にも俺は答えることが出来ない。入口から階段を上った先にあった教会の前には灰色の墓石が立ち並び、墓に向かつて祈りを捧げるシスターの頬は青白い。ウォル口村のシスターの、バラ色の頬とは雲泥の差だ。

ああ……彼女はいつでも幸せそうで。とても敬虔に慕ってくれるものだから俺……村の守護天使の、守護天使になる予定だった俺は絶

対にウォル口村もシスターも、そしてもちろん本命のリツカたんも全部全部幸せにしようと思ったもんなんだがなあ？

何故、何故だろう。どうしてこの守護天使はこんなに苦しむ人間たちを救おうとしていないんだ？ セントシユタインの騒ぎは、ここまで直接的に不幸になっていかなかったからまだ来てなくてもマシだったかもしれないが……。イシュダルの対処が人間に出来たかはともあれだ。

明らかにベクセリアは「違う」だろう！ それともなんだ、応援を呼ぶために一旦天使界に戻ってんのか？ そうだとしてもおかしいだろう、この人間たちの絶望は一日や二日で膨らんだものじゃねえだろ！

この状況はそもそも人間界に来てねえっていうのか?! 守護天使が、人間たちを幸せにするために生まれ、星のオーラを貰って世界樹に捧げ、人間たちに感謝してもらうことによって自分たちの安寧を得ようとして……はつきり言う見え透いた見返り求めて行動しているくせに、か?!

俺たちは天使、たとえ俺みたいに俗っぽくて人間が大好きで、好きすぎて頭の中で大変なことになっていても、人間と見た目は区別の付かない翼と光輪を失った姿になっても、人間として暮らしても多分バレねえ姿になっても……ここはオート天使バレのせいで怪しいもんだが……生まれ持った使命まで放棄するつもりはない。

っーか放棄したらお天道様に見せる顔がねえ。てか好きでやってんだし。俺が本物の人間になれる未来があつたとしても変わることはないことだしな！

よーし決めた。天使界に戻ったら俺の大切なリツカたんから貰ったものを回収すると同時にベクセリアの守護天使を探す。天使像にしつかり「現行の守護天使」の名前が書いてあるなんて個人情報もあつたもんじゃねえよなあ？ 乗り込める人間がいなくてことさえ考えなければ。

守護天使が何たるものであるかをしつかり教えてやらねえとな！俺より上位の天使だつたらどうするかって？ ハン、天使の任務を

放棄してるやつが俺より上位？ 天使の理を天使の使命すら守れずに行使できるもんならやつてみるってんだ、千歳ぐらいの年齢差は埋めれる気がするくらいだ。

……実際そうだったら慇懃無礼に言葉を選ぶしかないんだがな。てかさうだろ、他の場所の守護天使は申告してきた奴しか俺は知らねえ。守護天使一覧の帳簿を一度見せてもらおうと思っただが頭のかたい規則のせいで見せてもらえなかったからな。

こういう時のために品行方正を心掛けてきた俺が断られるってことはオムイ様ならともあれ誰も見れねえって訳だ。だがそれでも知ってることもある。最年少の守護天使が俺ってことぐらいはな。それから見習いの、つまり子供の姿をした天使で守護天使なのも俺一人ってことは。

ま、年齢イコール見た目でもないが。一応千歳か二千歳の子供の見た目ってのもあるからなあ。

普通は……三百か、四百か？それくらいで大人の見た目になるはずなんだが、例外はあるものらしい。ある程度の年齢と力に比例するからその天使ってよっぽど天使らしくねえんだなあ。俗に塗れて墮天の方向にいつてるようにしか思えねえんだが。俗の方はちつとも他人事じやないな、やべえ。

怒り、いやそうじやないか。呆れだ。渦巻き湧き上がる感情のせい
で俺はぐるぐる、ぐるぐると考え込む。

「旅人の方ですか……？」

「ええ」

「そうですか……。この街に降り掛かった災厄は旅の方にも影響があったそうです。早く立ち去られた方が……ケホツケホツ」

「……」

咳き込むシスターの背をさする。その体は熱っぽく、彼女も当事者のひとりなんだろうなあ……。俺もガトウーザも、ホイミを使っても病気は治せない。天使の力はもとより人間に直接なんかをしてやるレベルで関与できるものはなく、せいぜい病気に効く薬草を探し出して持ってくるぐらいの知識と行動力ぐらいしか持ち合わせていねえん

だ。

僧侶も同様、傷や毒、呪い、麻痺、魔法的な睡眠。そういうものは治せるが病気はそのどれでもない。たとえ賢者だとしてもそれは変わらない。

魔力的な力では直接的なものは治せても複雑に絡み合った害を正せはしない。自分で作り上げた魔法ではなく先人の知恵を借りて、つまり道具を使っているだけに過ぎないからだ。特定の病気を治すという直接的な魔法を作り出しでもしない限り……治せない。薬だつて病気を治すというよりは症状を抑えて自分の力で治させるものばかりだろう？

彼女に肩を貸し、教会の中にゆっくりと移動させ、寝不足か疲労か、顔色の悪い神父を呼ぶ。慌ただしくシスターを診る神父にもこの病に打つ手がなく、教会の奥の部屋に彼女を寝かせることぐらいしかできない。それ以外に出来るのは温かくして水分や栄養をたっぷり摂らせて休ませること、だが……。

この街の様子を見る限りなんとか歩けるシスターは病人の中ではまだましな方だろう。後からかかったか、はたまたまたまか。そして彼女に回復の兆しがもし、ないなら。……嫌な予想はしたくねえなあ。

病に滅びる街。病に滅びる国。そういうものは天使の文献にあるのだから。長い長い人間を見守り、できる限り幸せに生きる手助けをする中……力及ばずその場の人間が滅んでいくのを止められなかったというのは。

しかしどれにも原因はある。治らない病でないならば治療を続ければいい、諦めずに俺が何人でも看病すればいい。そして治らない病ならば外的要因だ。それを俺が潰せばいい。

そうだな、例えば……呪いによる病、とか。

32話 天使違

蔓延する良くない空気は本当にクソまずいといしか言いようがねえな。今まで味わった中で一番不味かったホコリっぽい床の味より不味いなんて相当だろ。空気に耐えかねたマティカが街の外に飛び出しちまったぐらいだ。不思議なことに街から出たら何ともねえんだぜ？ ま、外に出ても嫌な感じはするけどな。

ちなみに優しいメルティがマティカについていったんだが、やっぱりこの空気はあんなに清ら……、ガトウーザよりも普通のベクトルで信心深いと普通より効くのか？ 信仰心とこの手の悪って互いにカウターブローが相場だもんな。

だがそれはともあれ……：そうだな、嫌な気配は「街」からするんじゃないやねえな。空気はこの場に漂っているように見えるが、違う。瘴気と言ってもいいほどのこの空気がどこから生み出され、どこから沸き出ているか、分かるほど俺に特殊能力はねえが、「住人」からどうも気配がするんだよなあ。

でだ。要するに「ベクセリアの人間」が対象の呪いなら旅人まではかからないように思うが、さつきも言ったように空気が相当悪いわけだな。街人を媒介して空気を澱ませ、その場にいる者を無差別に病気にする。そんなところじゃねえのか。胸糞わりい。

さてどうするか。そこらのベンチに腰掛け、考える。この手の文献に関しては何人間より長い生があるわけだからそこそこ詳しいつもりなんだが、絶対的な記憶力があるわけでもなんでもないから、必死で引つ張り出す。愛しい人間たちの命がかかっていると思えばなんともなるだろ！ 思い出せ、膨大な資料に記された死と嘆きの記憶を。

それにベクセリアとセントシユタインは隣にあるんだぜ？ リツ

力たんににかあつたらどうするっていうんだ、俺！ リツカたんに降りかかる火の粉はどんな手段を使つても、俺の何を犠牲にしたって全力で振り払わないと気が休まんねえ！

……場を媒介してこうなってるんだから街人全員を別の場所に移せばいいんじゃない？

いや、それだと既に病氣の人に移動という負担をかけるし、移動したからといって治るわけじゃないだろうしな……。それに可愛く幼い人間たちは合理的に物事を考えることは出来てもそれを実行できるわけでもない。

原因不明の病氣が蔓延している街からやって来た人間をあたたく受け入れるマジ天使な人間はいるだろうが、嫌な顔をしても受け入れるツンデレな人間もいるだろうが、石を投げて追い払う奴もいることだろう。まあその辺りは人間だし……。そもそもこの状態を放置している守護天使も悪いからな。

なんで管轄外の、見習いひよっこ天使という街の異物が来ても来ねえんだよ。可愛い人間たちが苦しんでいても天使界に引き籠もつてんだよ。俺と同じく地上に羽根なしパラシュートして、しかも落ち方が悪くて別の大陸で足止めされてるとかなのか？それなら同情しかないが。

ベクセリアに行きたくて行きたくて堪らないのに行けないのは……。な。神の試練はむごいもんだ。俺みたいに管轄地域に落とせばいいのによ。

「そのの……旅人の方」

「はっ？」

たしかに俺の存在は不審者に見えねえこともないだろうが、声をわざわざかけられるほど不審だったか……。これからは鉄仮面やプラチナヘッドのように顔を隠す装備で安価なやつを探すしかないのか？うっかり心に根付くりツカたんペろが滲み出たか？

「……、悪いことは言わないですから、早くここから出ていった方がいいですよ。貴方みたいに若い人がまた倒れるのは見ていられないんです。親切心を出したって何も変わりはありませんから」

「優しい方、ご忠告痛み入ります。目的を達すればすぐに出ていくつもりですから大丈夫ですよ」

普通に優しい人間だったとか、俺の汚い心が露見するだけじゃねえか！　ますますこの街を見捨てるわけにはいかなくなつたぜ。借りれるものならなんだって借りたいし、何も足りちやいないが、少しでも現状をマシにしねえとな。

「……誰を連れていかれるつもりですか、天使様」

「俺たちは常に連れていくのではなく、人々の健やかな生を至上とし、長きを生きる者として見守り、陰ながら時折お節介をするのみです……よ」

まったオート天使バレしてるし、しかも無意識に天使たる当たり前のことをわざわざ言う嫌味つたらしいことになつちまつたし、やつべえな。もう……なんで天使バレしてるかはどうでも良くなつてきたような、いや全つ然良くねえが。

ああもう！　要するにそう天使を勘違いするなつてだけなんだが！

死神を見たことはねえから、そういう仕事の存在がいなくてかそんな安易なことはいえねえ。だが少なくとも天使とはそういう存在じゃねえからな。可能か不可能か、だったら天使が人間を殺すことはできる。首をへし折るにしても剣で刺すにしても普通に出来るからな。

それから魂と話すことも出来る。だからつてもちろん魂を引っ掴んで無理やり成仏させることは出来ないし、物理的に触れずに、魔法を使わずに人間に干渉することもできない。

見えないだけ、飛べるだけ、長生きするだけ、自分は若干呪いが効きにくくてそれを少し味方に適用することが出来るだけで人間とほぼ一緒だから。呪いのやつも呪いの装備品ぐらいなら直接的に食らうから無効化できねえしな。そう、天使が選んで殺してるみたいな言い方されるとムカつくつてただけだからな！　俺は全力で生かしかかっているのによお……。

「失礼、しました。はは、そうですね……守護天使様を、捕まえてわ

ざわざこんな恨み言を言ったって……」

「俺はここの守護天使ではありませんから」

あ、やべ。走って逃げたいことを口走っちまった。やべ、逃げてえ。こんな言われたら嫌だよな！　どんな理由で俺の正体を悟ったのかは知らないが、頼れる守護天使……？　がそうじゃないとか嫌だよな！　嘘は良くないが、誤魔化した方が絶対よかったよな！　てかどんだん俺から言っただうする。これからは口にチャックでもつけて黙らなきゃなんねえな。

「……、どちらの天使様か、お聞きしても？」

「清水流るるウォルロより」

もう俺はいたたまれないから行くからな！　黙礼を一つしてさつさと俺は戦線離脱した。師匠にバレたら普通に殺されると思うんだが、気のせいじゃねえ。さて、原因はどう考えても外だ。怪しいものがないか街のえらいさんにでも聞かか。

……

濁った空気の中、気を強く保ちながら店番をしていた。今日も客は少なく、道行く人も少ない。見かける人間も疲れたように歩き、目に光を持つ者はいない。

常連の奥さんも流行り病で伏せてしまい、数日に一度の世間話が無いことがこんなに店を静かにするのかと思うとひたすら辛かった。まだ死者こそ出ていないものの、治った者すらいなのだ。いつ誰が天使様に連れていかれるかもわからないのに威勢よく商売をする気にもなれなかった。私は丈夫が取り柄だったが、こんな気持ちではない病になってもおかしくないだろう。

そんな時、ふと顔を上げると近くのベンチに少年が座っていた。見慣れない姿に旅慣れた服装を見れば駆け出しの冒険者だとすぐに分かる。俯いている様子からここに来たのは無鉄砲ながら後悔しているのだろう。それでも即刻逃げ帰らない辺り、まだこの街の深刻さが理解出来ていないのか。

さて、被害者を少しでも減らすためにも背中を押さなければ。帰りにそうにないなら脅しても若い命を守るべきなのだから。それがべ

クセリアの人間に許された最期の定めなのだろう。

「そのの……旅人の方」

「はい？」

今気づいた、とばかりに顔を上げた少年と視線ががち合った。そしてそのままでは伺い知れなかったその美貌を真正面から受けることになる。どちらかといえば美貌よりも滲み出る清浄な気配に心を奪われたのだけだ。

まさに想像していた天使そのものの容姿だったのだ、その少年はいや、少年だろうか。背恰好こそ少年のものだったが、声は高く、性別がまるで分からない。さらりとその艶やかな髪が揺れ、はっと私は我に返った。

「……、悪いことは言わないですから、早くここから出ていった方がいいですよ。貴方みたいに若い人がまた倒れるのは見ていられないんです。親切心を出したって何も変わりはありませんから」

「優しい方、ご忠告痛み入ります。目的を達すればすぐに出ていくつもりですから大丈夫ですよ」

彼はなんてこともないようにそう言う。ああ目的、とは。苦しむ病の者をこれ以上苦しませないということなのだろう。たしかに彼が天国に連れていってくれるのであれば幸せだ。どうして今、病気になるっていいない私に姿が見えるのかは分からないが、天使様がいるということはそうなのだろう。もしかして、死者にのみ翼と光輪が見えるのだろうか。

ああ、天使様からすれば寛大なご慈悲。苦しむ生を終わらせてくださる優しい行為。しかし、私たち人間はそれでも生きる方を選択してしまうから人間なのです。

「……誰を連れていかれるつもりですか、天使様」

言った瞬間、後悔した。天使様は虚をつかれたようにぱちりと瞬きして心底不思議そうな顔をしたのだ。何故そんなことを言うのか全くわけがわからないというように。

「俺たちは常に連れていくのではなく、人々の健やかな生を至上とし、長きを生きる者として見守り、陰ながら時折お節介をするのみです

よ」

天使様はそして痛ましげな顔をした。どうにか救ってやりたい、そんな表情だった。なんてことを。この状態でも守護天使様は諦めてなぞいないのに、私は。

「失礼、しました。はは、そうですね……守護天使様を、捕まえてわざわざこんな恨み言を言ったって……」

言ったって、人間が諦めていたって、貴方様は諦めてなんていないのに、無駄なことでした。その言葉はなんてこともなく天使様が紡いだ言葉の前では口にすら出なかった。彼からすればなんてこともなかったのだろうが。

「俺はここの守護天使ではありませんから」

薄く安心させるように微笑んだ彼が守護天使様でない。ならばどんな天使様が守護天使様なのだろう。彼が守護天使像の姿でない、ということと理解はできたが……。つまり、彼は救いに来てくださったが、我らの守護天使様は私たちを見捨てた、ということ……？

まさか。しかし、彼がひとりでいるということは。いや、たまたま、ふた手に分かれているだけなのかもしれないのだし、こんなに寛大な天使様にこれ以上当たっても仕方ない。

「……、どちらの天使様か、お聞きしても？」

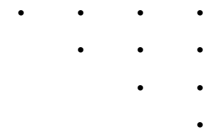
「清水流るるウォルロより」

ああ、そういうことか。商品の仕入れの時に薄らと聞いた覚えがある。セントシユタインが黒騎士で騒がれている時に同じく騒がれていたことを。街に天使様が現れ、救ってくださいるのだという話を。

ウォルロ村の天使様がどうして他の街に現れて救ってくださいるかにはわからないが、あの大国だけでなくこの街までその手を差し伸べて下さるのか。

背に翼はなく、まっすぐ背筋を伸ばして立ち去った天使様。その姿が、濁ったように淀んだこの空気が立ち込めるこの街で唯一輝いているように見えて、私はようやくと、救われるのだと悟った。

私はまだ知らなかった。天使様は考えているよりもずっと心優しく、救いを差し伸べたゆえに苦しむのだと。



33話 悲哀厄災

あんまりにも陰気だからって現実逃避はしてねえ。だから別にリツカたんに赤いミニスカートを履いてデートしてほしいとか考えてねえ。

たまにセントシユタインの女の子が履いていたニーソックスを履いてから上にスカートを履いて……って、下半身装備が被ると履けないのは世の中狂ってやがるとしか言いようがねえ。ワンピースの下にニーソックスとかどうだ。天使が天使界から降り注ぐこと間違いなし、だ。

仕事着のリツカたんはまじぺろかわいいが、おしやれ着のリツカたんも心臓を撃ち抜いてくるぺろぺろしさのはずだよな？

ていうかそんなリツカたんの笑顔を守るためには目の前のおどろおどろしい遺跡にカチこまなきやならねえってのが気が進まない。崩れかけのキサゴナ遺跡よりは老朽化的な意味ではまだマシか？正直、あんま変わんねえな。走ったりして崩れられたら困るんだが。今回は前と違って一人じゃねえもんで。

俺は多少水や食料がなく、眠れなくても構わないしなんとかなるが人間はダメだろ？ただでさえ閃光のように儂く美しい命をそんなに簡単に散らすなんてことは俺が許さねえし。

いかにもな雰囲気、いかにもな湿度、いかにもな魔物の気配。どれをとつても最悪だ。最早瘴気に近い不味い空気は長いこと吸えば体調にまで影響しそうじゃねえか。ただでさえかび臭いってのに。

「明かり、あるのかなあ」

……明かりがある方が怖くね？ とは敢えて言わない。言ったら卒倒しそうな顔色の怖がりなマテイカがマジで卒倒する。意味がわからない方が幸せな時ってあるだろ？ 知らぬが……なんとやら、だ。

にしても封印され、鍵をかけ、出入りできた人間なんていなかったはずなのになんで奥の方から薄明かりが見えるのは本当に何だろう

な。魔物も暗いのは不便なのか？ 明かり係がいてつけて回ってるのか？ 明かり自体に邪悪なものを感じないのは良かったが。

にしてもガトウーザの震え方が尋常じゃねえな。輪郭が見えねえ。

「……天使様……お守りください、天使さ……嗚呼、アーミアスさん、お救い下さい……」

「その、いかなる時でも平常心を保つことが大切ですよ、ガトウーザ」
「はうっ」

常にリツカたんぺろぺろして平常心からは程遠い俺が言っちゃあお終いだが。

てか僧侶って人ならざるものに他の人間よりも耐性がなきややってけなくね？ 悪魔祓いとかあるじゃねえか。だから転職希望なのか？

ったく、涼しい顔をしているのはメルティーぐらいでどいつもこいつも顔面蒼白かよ。……俺も多分真っ青だぜ。暗くて良かった、夜目が効かなきゃ無様な様子は見えなだろう。俺は幽霊に遭遇するために夜によくウオルロを彷徨って星のオーラ狩りしてたから見えるっただけだ。

もちろんお化け、妖怪、怪物とかの類にビビってんじゃねえ。ホントだぜ？ そういうのが怖いんじゃないよ。その手のものとよく一緒に括られる幽霊に至っては見かけたら子供が一人で歩いている時みたいにほっとけないぐらいだ。

なんつーか怖いのは、怨念やらの強い負の想いやかび臭さ、つまり太陽という正のエネルギーを受けていない負の地。そういうものが凝り固まると必然的に空気は濁り、人間たちは具合が悪くなるだろ？
そして運が悪けりゃ何人か死んでしまったりもする。そういうのをな、天使としては下っ端ペーパーのなんちゃっての俺もそこそこ見てきたから、トラウマっていうか……まあ良くは思えねえよな。

ベクセリアを救うだけじゃなく、俺の勝手で連れてきた三人と嬉々として着いてきたルーフィンを無事で返さねえとな。あんなに可愛くて健気な奥さんも待ってる事だし……俺も可愛くて健気な奥さんが欲しいぜ。

そうだな、青いサラサラの髪をしてぱっちりとした目がキュートで真面目で信心深くて料理上手な子がいいな。少なくともニートよりは俺の方が働くし、ニートよりは俺の方がリツカたんのことを知っている。……ストーカーみたいだな、俺。

恐る恐る中に足を踏み入れた瞬間、足元を駆け巡る何かがかさかさとお奥に消えていく。ゴから始まる奴にしてはでかいし、早いし、なんか色が違うな。敵意はなさそうだがなんだろうか。ちらりと隣を伺うと、動体視力がいいのか目でとらえられたらしいマティカがしばしそのいつの背中を見つめ、そして怯えどころか頬をバラ色に染めてこつちを振り返った。

「メタスラー！」

狩りだ！　なんて笑顔のマティカをメルティーが無慈悲にド突いた。あれは鳩尾にきつちり入ったな……。ぐふつと息を漏らし、崩れ落ちそうになる姿が哀れを誘う。しかしそこは武闘家、体は丈夫らしくすぐ復活する。すげえ。

「機会があつたら狩りたいな！」

「ベクセリアの皆さんが元気になった後なら来てもいいかもしれないね」

「よし、頑張る！」

強さを求める少年少女にとって垂涎のメタルスライム。哀れだよなあ……。ちつこくて素早くて、経験にいいからというだけで付け狙われ、ド突き回され、殺されまくって。天使の中にもメタル狩りが好きなのやつはいるだろうな。メタルハンターも真つ青なやつらが……。

全ての命は平等に救われ、幸せになるべきだ。魔物として生まれ、本能から他の生物を害するしかない悲しい生き物は俺が次の生こそ幸せになることを願って送ってやる。生きてるだけで命を付け狙われるとかそんなことはあつちやなんねえ。

だから早く終わらせてやる、というのは一つの考え方だろうか？　ま、俺はメタル狂いじゃないから積極的に狩ろうなんて思わねえけどな。あとで罪悪感がやばい。

おつとマティカ、飛び出すなんて良くねえよ。その曲がり角のと

ころに「はにわ」みたいな魔物が潜んでたぞ？ 怪我したらどうするんだ。痛いのは良くない。

……さてと。目の前に如何にも扉がある。その奥から果てしなく嫌な気配もする。神に会ったことはないが、天使である俺にはわかる。負の方向に振り切れた災厄そのものであるってことはな。救いはない。命ではあるが、共存なんてものは不可能。自我は……ここまですごい強大なものだからあるだろうが。

こんな力、強すぎて自分自身もがき苦しむレベルじゃねえのか？ よく言うだろ、強すぎる力は身を滅ぼす。それにはこう続けるべきじゃねえ？

「強すぎる力は自身を破滅させる上、抑えられない力は自力で終わりを迎えることもできない」とかな。

自殺しようなんて化け物としか言いようのないこいつが思うだろうか。しようと思っても死んだそばからその負の力が負の生命体を産み、体を侵食し、次の自我が生まれる……とかだったら最悪じゃね？ 外部から殺すか、元通り封印するか、どっちかだ。

エネルギーを外部から取り入れずに遺跡がここまで風化するほど長くあっても消滅してない時点で「外部から殺す」なんて不可能だろうがな。ルーフィン、頼むぜ。

封印しても問題は遠い未来への先送りでしかねえし、その間も化け物は苦しみ続ける……なんて救われねえが。俺はオムイ様のような悠久如き時を生きた天使でも、師匠のように天使の中でも一目置かれるほど立派な上級天使でもねえからな。

とりあえず、今日の前にいる人間を救うしかできない。こういうことに直面すると人間になりたくてなりたくてたまらないってのになんでも救えるような存在になりたい、なんて叶いもしない高望みしちゃまうよな。俺は強欲だ。

メタストラがひゅんひゅんと横切る度にそわそわするマティカを抑え、俺の背中にしがみついて離れないガトウーザを引きずり、前方の魔物を視認するやすぐに焼き尽くすメルティーにビビりつつ。

俺たちは遺跡に施された「仕掛け」とやらを解いていった。なんか

近付いて怪しいなんかを操作するとビームが出るんだよな。魔法、だ
ろうがなんだっていうんだろうか。

他にやりようもないからするしかねえが、もしこれで逆に厄災が活
性化でもしたらやりきれねえ……。

・

・

・

・

34話 手遅病

「！」

ほこらの封印を解いた先にいたのは……そうですね、ベクセリアの状況などを顧みれば「病魔」というのが正しいでしょうか。そのおぞましい姿は形容しがたく、恐ろしい臭気をまき散らしながらどこか溶けたような体をゆらゆらと揺らしていました。

ええ、矮小な身で、こんなに間近に病魔がいるというのに病気になるずに済んでいるのは間違いなく一番前に立ちふさがってこちらをかばってくださる天使様のご加護そのものでしょう。薄暗い中でも、翼のない背中是非常に頼もしくはつきりとして見えました。

「古来よりベクセリアの街を襲い、封印を受けし病魔と見受けました。魔性の者よ、あなたがどのような意味を持って病気をまき散らすのか。また、どうして病魔が生まれ落ちたのか……この身をもってしても、理解できることはないでしょう」

学者が、病魔がアーミアスさんに釘付けになっているうちにそれを封印してあったであろう壺の修復にかかりました。

ええ、意思がある者なのかはわかりません。このガトウーザ、天使様のような人ならざる者のご意思と同じようにおぞましい存在の思考を理解しようとも思いません。しかし、アーミアスさんは、ええ、平等でした。

きっと病魔の被害者がいなければ、そう、別の道をも模索されたのではないのでしょうか。ですが、今はそうは言っている場合ではありませんでした。今この瞬間にも苦しむ者がいて、もしかしたら死者が出ているかもしれない。それをもちろん分かっていらっしやるのでしょうか。

彼は高潔です。しかし現実には慈悲深い方にも優しくはない。切り伏せる選択肢以外は病魔は与えず、また、壺の修理をもって封印するほか方法はないのです。

アーミアスさんの剣はどこか悲しく煌めきました。真つすぐで、そして、傷つけるために本来あるのではなく、神聖で、誰かを守るため

に振るわれる剣。心優しい天使様が、心を痛めて振る剣です。誰もが敵対することのない天使様の世界のようなになれば、喜んで剣から手を放すようなアーミアスさんらしい、剣です。

「……斬ります」

星を宿した黒き瞳が、あげられました。

次の瞬間、瞬間移動といつてよいほどの速度でメルティーが病魔の手に囚われ……かけました。ええ、天使様がお見過ごしになるはずはないのです。切っ先の鋭い勢いは病魔の腕を一瞬切り落とし、その隙にメルティーごとアーミアスさんは後ろに飛びました。

切り落とされたはずの腕、もちろん腕とはいっても何とも言い難い溶けたような部位の一部ですが、それは見る間に病魔の体にくっつき、再生しているように見えました。

ええ、あれは何かを言っています。それは分かります。しかし、この耳にはなにか意味のある言葉には聞こえません。耳障りの悪いひび割れたようになり声、といえいいのでしょうか。聞いているだけで不愉快になります。

存在を目にしているだけで不快で、声まで聞けばこの場から立ち去りたくなる嫌悪がわきでてきます。私はメルティーのように真に清潔潔白な人間ではないので。ええ、この臭気を肌で感じながらの三重苦ならば、誰だってそう思いそうなものです。

しかし、麗しき天使様のかんばせは、歪んでいました。……もちろん、不快にはなく。

そしてその唇から血が滴り落ちるのを見て、慌てて回復呪文を唱えました。

次の瞬間にはおぞましいあの病魔の懐に飛び込んだアーミアスさんが深々とその胸元に剣を突き刺していました。病魔が捕らえる前に素早く間合いから抜けた時にはマティカの鋭い蹴りが炸裂し、マティカをかすめて炎や氷が殺到しました。

「魔性よ、あなたは嘆きと苦しみを感じたのでしようけれど」

重い一撃を与えながら、しかしこちらをかばい続けているために白い肌に鮮血が散り。しかしアーミアスさんは一步も退かずに病魔を

見据えていました。

語りかけている声は沈痛といってもよいほど悲壮感が漂っています。あの、病魔の言葉を聞くことが出来たということなのでしょう。そして、心優しいアーミアスさんは心を痛めた？

……ああ、ご試練を。神は試練を与えなさる。

あの病魔側にある事情を、慮ってしまう方にその解決をするようにお導きになるなんて。

……

「……危篤の者はいませんか！ 時間がかかりすぎたのです！ 早く、今はもう病魔はいませんか！ こちらに危篤の者を！」

まだ研究したいというルーフィンとかいう学者はほこらに放置してきた。本人がそうしたいのならそうすりゃいい。奥さんが明らかに危ないっていうのにのんきな奴だと腹が立たないこともなかったが、相手は幼い人間。まだ、分からないんだろうと思ったままだ。

ああ、昨日まで元気に走り回っていた子供や、元気そのものの若者が様々な要因で惨たらしく死んでいく。止めることは出来ない、予測もできない。自分の無力だけを痛感するってやつをな。それを経験していない、俺の望んだ、真に穏やかに生きてきた人間なのだから。

まあ、しばらくしても戻ってこなかったら迎えに行かなきゃならぬが！

今はそれどころじゃないが。パンドルムが最後にあがいて誰かを死へといざなつた可能性が高い。明らかに最後のあがきは、たまにいる愚かしく幼い人間の、……そうだな、俗にいう「悪人」と呼ばれている奴らが最期にすることに似ているように思えた。

「悪人」はまだいい。いや、「悪人」は善良な人間を傷つけるという意味でなら少々仕置きが必要な場合もあるんだが、そうなつてしまった要因をもつと幼い時から取り除いてやる事が出来ればそうはならないことの方が多いはずだ。

だが、「病魔」パンドルム。あいつが生まれた時の原因も、情勢も多分俺が生まれるよりは前だろうから分からねえ。聞こえてきたのは理解不能な叫び、言語的には理解できるが理性を感じさせない言葉の

羅列、そしてそれらに混ざった胸糞の悪い呪詛。

すべての生き物の命が一つ残らず救われることを願う身として考へてはならないことなのだろうが、あれは、違う。

元が例えば罪もない人間で、外部的要因によってパンドルムに変貌したのだとしても、元の存在にならともかく今の存在には早急に封印される必要があると感じた。封印が原因で、悪逆を尽くした者とはいえ、永遠ともがくはめになるのだ、と理解していても、だ。それに引っかけりはもちろん感じるが、それ以上に。

ああ、あれこそは、あれこそが。

俺たち天使と対としてよく語られる存在だ。悪魔、悪魔と呼ぶにふさわしい。魔物の悪魔系とは話が違う。そういう外見、特性を持つのみで心を持つ魔物はあれに比べれば人間と同じく愛おしく感じるほどだぜ。

あれは。ベクセリアという都市の人間を、すべて憎む者。そして、そのためにはならば、どんなに苦しんでも、どんなに救いを求めているも愉悅しか感じないような装置。呪いそのもの、そうなるべく作られたもの。

ああ、俺は思うさ。あれは、ベクセリアを恨んだ愚かな誰かが作ったものだ。

「……ああ」

そして、俺は間に合わなかった。自宅のベッドに静かに横たわる年若い女性。眠っているかのように、静かに目を閉じている姿。進行が早かったのか見た目はそこまで死を感じさせない。

だが、残念なことに俺は人間じゃない。沢山の死を、見てきた。

死の香りが鼻につく。涙がこぼれそうになって癖で堪えた。つい涙を落して天使の居場所を知らせてはいけけないからだ。今は、そうではないが、こぼしてはいけない。

俺がこぼしちや、ならねえ。

「ただいま、帰ったよ」

幼い人間、愛しい人間、まだ、ひととしても年若いルーフィン。たとえ研究に没頭していたとしても、妻への想いが偽物だったわけでは

ないのは見ていればわかった。ああ、彼こそが最初に涙をこぼすべきなんだ。ここにいてるべきでない俺よりも。

どんなに、どんなに想っても、守護天使となったとしても、人の死、それだけはどうやったって、訪れて、そして。

俺はどうにも傲慢な、どうしようもないやつだと実感する。

師匠、師匠なら、彼女に息があるうちに、病魔を消し飛ばすことが出来たのでしょうか。

閑話 原点

ペロい。

その言葉を知ったのは何時だったっけな？ もう覚えてちやいな
い。記憶力に自信はあるが、いくつの時だったか、という正確なことは
覚えていないの方が少ない。この生はわりと長いんでな。まあ、
もちろん、一人前の大人とは言い難いが。

天使と人間の体の構造の違いなんて、その道の学者じゃあるまいし
詳しくなんて知らないが、多分脳みその出来つてやつはそう変わらな
いと思う。せいぜい、時間感覚の違いぐらいだろう。

その違いがなきや気はとづくに狂っているのは間違いないだろう
が、そうはなつていないからな。で、俺たちも記憶つてやつはいろい
ろとすつ飛んでいく。あらゆる過去の出来事を記憶している、なんて
絵空事……長老ならあり得るかもな。

ただ、都合よくきつちりと覚えていることはある。ペロい。俺に
とって運命の言葉と出会ったことだ。それから、その、言葉を発した
人物のこともな。

ん、ああ、言葉の主は人間だった。まさか、天使の訳ないだろ。そ
んな俗物的すぎることに染まる天使が俺以外のどこに存在するつて
いうんだ？ なんで俗なことを本当の意味で天使らしく純真無垢
だった時代の俺が聞いたかつて？まず前提として、俺は自称だが人間
を天使界で一番愛している天使だぜ？とりあえずどんな言葉も聞く
だろ。それだけのことだ。

彼はとても変わった人間だった。他の人間と同様に……今考えて
みれば幼く、分別がついていないなどたまに感じることは変わり
はなかったが、俺は尊敬に値すると、幼心にも思ったことを強く覚えて
いる。

俺にとって尊敬できる人間は数多く存在するが、……そうだな、ハ
ゲ師匠とは別の意味で今でも「師匠」だと思っているくらいだからな。
もちろん、俺が幼い時の話だから故人だが。彼の魂の行き着く先には
神のご加護があり、今は穏やかに幸せであることを強く祈っている。

彼は、一途な男だった。すさまじく一途だった。ああ、だが愛する人に死ぬまで想いを告げることはなかったぜ。愛する者には、自分ではない想い人がいることを見抜いていて、身を引いた謙虚な人間だったからな。当時の俺はどうして、せめて想いだけでも伝えないのか不思議で仕方がなかった。

だが、今ならわかる。リツカたんにもし、本当に心の底から愛する者が出来て、相手が誠実で、そのまま順当に結ばればリツカたんが幸せになる。それがもう決まり切っている段階ならば。俺がたとえ生まれた時から人間で、しかも最高に男前な顔つきで、もつと腕つぶしも強いとしても、当然身を引くだろ？

別に今生の別れでもなく、そして何よりも大切なリツカたんは幸せになるのは分かっているんだぜ？ そりゃあ、身を切り刻まれるほどに悔しいだろうが、俺はリツカたんが幸せになるほうが大切なんだぜ？

もしそんなときに「俺も好きだ」とかふざけたことを抜かせばどうなる？ 幸せ絶頂期で、俺の心のリツカたんアルバムが笑顔で埋め尽くされて、パンパンになったアルバムで俺の心が埋まって、心の中でペロペロするのも追いつかないほど輝く笑顔のリツカたんに、ほかならぬ俺が笑顔に影をさす真似をするってことになるだろ？

そんなこと、できるわけがあるか！

人間ならばとつくに死んでいる年齢の俺でやつと理解できることを短く儂く、そして眩い生を送っていた彼は命の途中だというのに気づいていたらしい。

彼は毎日、働きながら同じウォル口村に住んでいるゆえにそこその頻度で顔を合わせる度に、決して既婚者の彼女に不用意に近づくこともなく、そして今まで通りの友人の態度を崩すこともなく接し続けた漢だった。

そして、生涯独身を貫いた彼は家の中では彼女への愛を抑えることはなかった。まあ、不用意に伝えて相手を困らせなきゃいいだけの話だから、近所迷惑には細心の注意を払って家の中で独り言をつぶやいていた分には何の罪もない、と俺は思う。

……ああ、見ていて、少し、少しばかり……いや、なんでもない。俺は彼を第二の師として認めているが、独り言の癖だけは絶対に真似をしてはならないと心に深く刻み込んでいる。だから俺はなるべく一人の時は口を引き結ぶことを心掛けている。

まあ、軽く説明するとだな。俺が彼の立場だったとしたら、姿の見えない存在に愛を叫ぶその声を聞かれていたと知った瞬間に卒倒するだろうってぐらいだ。

まあ、おかげで俺は「ペロい」という概念にたどり着き、それを理念に今生きている訳だがな！

長年、なぜか彼をそつとしておくように言ってきたハゲ師匠をスルーしてこつそりと師事してきた俺にはわかる！ 今日の彼女のどんな姿がペロかったとか、いつそペロすぎて視界におさめた瞬間愛しさがこみあげてきて表情を無に保っているのが精いっぱいだったとか、心のアルバムが今日で五万冊を超えたとか、そういう話には全て愛が絡んでいるのだと！

もちろんあわよくばという打算が欠片もないわけではないだろう、だが人間を守り、愛おしむことに打算がある天使もそれは同じじゃね？ と俺は気づいたわけだ。つまり、愛だと。そして特別好きになった相手の、好きな部分が好きすぎてどうかなつちまいそうになつて、言葉じゃ到底言い表すことが出来ない。その、もどかしくも言い表せない部分。それが、それこそが「ペロい」だと！

そしてだ、決して、決して相手に理由もなく触れたり、干渉したり、少しでも悪影響を及ぼすようなことはしないがせめてその心の中だけではその愛おしい存在に触れていたい、そして愛して、この心が求めるままに慈しみ、守りたい！ その心の荒ぶりこそが「ペロペロ」だと！

リツカたんペロペロしたい！ もちろん、本人を舌で舐めるということじゃないだろ？ そして、確かにあの最高に可愛くて健気で努力家な姿は天使像に供えられた菓子のように甘そうに見えるが、本当に舐めたら絶対に不快に決まってるだろ？ だから本当の意味では舐めるということは絶対に許されないことだ。ありえてはならねえ。

だが！ 心の中はどうだ？ 心は自由！自由すぎてなんだって許される！ そう、あれだ、もつと分かりやすく、良く聞く似たような言葉で表現すれば「食べたいほどかわいい」だな。

食べる、ということは俺にとってはそんなに重要なことではない。だが俺の愛する人間には極めて重要だ。食べることで人間は、生きとし生ける存在は、健やかに成長できる。それだけじゃない、食べるということは食べたものを自分の血肉にするってことだ。つまりそれはずっと一緒にいられるってわけだろ。

きつと、「食べたいほどかわいい」を最初に考えた偉大なる先人は、その対象を愛し、ずっと共に居たかったんだろう。しかしそれは叶わない。双子だとしても、親友だとしても叶わない願いだ。だからこそ、あくまでも「ほど」なんだぜ。叶わないことだからな。

好きな相手とずっと一緒にいたい！ なんて、かわいい考えだよな、まったく人間の発想力には目を見張る。ずっと一緒になんていられないと、知識ばかりはあった故に分かっているものだから幼い俺にはそんな発想はなかった。人間は俺がどつかでドジ踏まない限り先に死んでしまうものだから、見送らなければならぬ。そんな凝り固まった考えから脱することが出来たのはやっぱり「師匠」のおかげだぜ。

たとえ無理でも。それを願う、ただ願うことは、絶対に悪いことじゃないよな。

翼をもいで、人間になりたい。光輪をなくすことができるならば、目を見て、そして話すことが出来る。

ああ叶った。ほら、叶ったぜ。どうだ。そしてリツカたんは今日もぺろい。ああ、ぺろっぺろだ。ぺろぺろしたい。

ずっと、共に生きることが出来るならな、もつといいんだが。天使の力を失っても俺は天使としての行動をやめないように、きつと寿命までは人間のようにはなっていないだろうが、それでも、関係あるか？ リツカたんの眩しい笑顔のもとにいたいって思い続けたいだろう？

今日も、一日中心の中でぺろぺろした。リツカたんが笑顔を見せて

くれたその時は、ペロペロするのも忘れてちつとばかり見惚れていた
りもしたが、それはまあ、仕方ないだろう！

35話 転

「……エリザ、さん」

アーミアスさんの、悲しげな声が静かな路地に響きました。何も無いところを見て、声をかけている。そんな風にも見えましたが、いいえ、いいえ。何も見えていないのは私たちの方なのです。天使様の、天使様たるお力で亡くなられたエリザさんの霊魂を捉えているのでしよう。

事実、アーミアスさんの瞳には不思議な緑の光が映り込んでいます。ええ、もちろん不遜に瞳をのぞき込むことなんて出来ませんし、きつとそうしても彼女を見ることは出来ないでしょうが、きつと揺らめく光が今の彼女の姿なのです。美しい、夜空に星が浮かんだような不思議なきらめきを持つ漆黒の瞳に……本で見たことがある、冬国のオーロラを思わせる光がまたたいています。

サンデイというらしい姿見えぬ女性と会話しているときは、心なしか声を潜めて、こちらを気遣っているような様子があったアーミアスさんでしたが、今は私たちの姿が微塵も目に入っていないようで、はつきりとした声で、そして浮かべる表情は私たちが見たことがない、そう、言うならば普段の割増しで柔らかく見守るような優しい目、というべきでしょう。

ええ……私たちが、いつも目にする姿ではなく。翼と光輪をお持ちになつていた頃の、本来のお勤めをなさっているときの態度なのでしょうね。

それも、天使様が地上をさまよう霊魂をお迎えに来てくださるとき……。不謹慎ですが、本来死してからでしか拝めないお姿を生きてみることが出来るというのは非常に貴重な経験なのではないでしょうか？

決して邪魔をしないように拝むことにしましょう。これが神々しき偉業、これこそが奇跡。神のお使いがなさる救済なのです……。ああ、神に祈りを捧げ、このめぐりあわせに感謝しなくては。

……感動に打ち震えるわが身ですが、できることならばあんなに人

の好^よい、健気で若い方に向けられているのではなかったら良かったのです。

もし、これが、天寿を全うしたご老人であり、その未練の理由も穏やかな微笑ましいものであればよかったのに、と。魔法で、人を傷つけることしかまともできない私が……人を治す魔法が使える人間ならば。あるいは。こんなことにならなかったのでしょうか？

いいえ、いいえ、あの病魔と対面したから分かります。僧侶であろうと、賢者であろうと、天使様であろうとも、病魔そのものを封印しなくては、この呪いを打ち破ることは出来なかった。それほど、邪悪で強力な存在だったのです。悔しいですが。

「ノックを？ ……それが、夫婦の合図なのですね。分かりました」
しばらく「彼女」と話し込んでいたアーミアスさんはゆっくりとこちらを振り返りました。少し、氣遣うような表情を浮かべて。

天使様として、というよりも恐れながら、仲間としての態度で。ええ、魔物と対峙したり、先程の姿は紛うことなき天使様。翼がなくとも、光輪がなくとも、その神々しきお姿を見間違えることはありません。美しいので、拜ませていただきます。

しかし、このようにアーミアスさんはこちらを仲間としての態度をもって氣遣ってくださる。どこまでお優しいのか。そしてその時は神の使いとしてではなく仲間として接してください。やはり……はあ、素晴らしい。なんと慈悲深いのか。尊いのでさらに拝みます。「戸惑ってしまったわれましたか。……恐れますか、それならば、宿にでも……」

「な、何故です！アーミアスさんは天使様のお力を行使しただけではないのですか？」

ガトウーザが何を恐れることがあるというのか、と言わんばかりに答えます。無神経な幼馴染はこちらを氣遣ってくださいるお優しいアーミアスさんに、そんな当たり前のことを答える無神経さで返すなんて……。

アーミアスさんが美しいあまり膝を地面について見上げる少々変態的ながらも敬虔な姿でなければ杖で魔力を吸い取っていたところ

です。ですがアーミアスさんが話しにくそうなので立ってください、今すぐに。

「ええ、……そうです。そう言ってしまうのならば、そうです。もつと、俺が……」

いいえ、とアーミアスさんは言葉を切り、首を振りました。考えても仕方がない、とおっしゃっているような仕草でした。

「おっしゃりたいことがあるのではないのですか。アーミアスさん、私、私……お話を聞くことぐらいは出来ます」

思わずこんな恐れ多い言葉が出ていました。少し俯いたアーミアスさんは、こちらを何故か見ませんでした。そして、そのお言葉は……ご自分に刃を突き立てるような、そんな突き放したような口調で、自分を責めるようでした。

ああ、違うのです。ご自分を責めないで。天使様、天使様は今エリザさんを救おうとしていらっしやるじゃありませんか。貴方様ははすべてをお救いになろうとしてください！ しかし、それが叶わないのであればその魂を救おうとしてください！ 神に祈りを捧げようとも、神の御前で救いを得た人間を見たことはありません、ほかの天使様が明確に救いの手をさしべてくださったことはない！

ですが、アーミアスさんは！ そうではないのです！

ええ、ええ、もし、このことを口に出してしまつたら……天へ帰つてしまわれるかもしれません。そうではない、とおっしゃるかもしれませんが。ですが……少なくともこの私には、貴方様ほど尊い存在を見たことがない！

「こうして死者を導くとき……思うのです。この俺の命は、空の上でただ生きていくだけならばほぼ絶えることはないでしょう。人間としての視点なら。」

しかし、生きながらえるだけの力はあるけれども誰かの命を救うことは……もし、分け与えることが出来るのなら、と思わない日はありません。見送ってきたたくさんの方々の村人たちにも、エリザさんにも……。

いえ、聞かなかつたことにしてください。ええ、すべては女神のご加護が私たち神の僕に与える試練、すべては、そのお導きのままに。

願わくば、悲しいことだけは、ないのなら、よいのですが」

そう言つて、アーミアスさんは路地の奥の扉を叩きました。独特のリズムで。

・

・

・

・

エリザと同じ、夫婦の合図。

弾かれるように扉を開いた。もうあの笑顔に会える日は来ないというのに。分かっている、分かっていたのに、体は止まらなかつた。自分があの遺跡の調査にかまけている間に、エリザは死んだのだから。

「エリザ！」

「……すみません、俺は、エリザさんでは、ありません」

目の前にいたのはあの旅人の一行。リーダーの少年の顔は光の当たらないここではよく見えない。声色は優しげだったが、憐れまれているようで癪に障った。誰かの差し金で妻を亡くして一層引きこもった陰気な研究者を引つ張り出して来いと言われたのだろう。そうでなければ、余計なお節介すぎる！

「こんな質の悪い冗談はよしてください！」

路地に僕の大声が反響した。これで帰ってくれ、一人にしてくれ。偏屈でどうにもならないんだと理解しろと。

その瞬間、きらりと目の前の少年の目が光ったような気がした。それに少し、ひるんで扉を閉めるのが遅れた。その光は、幼い時、覚えていないような子供の時に確かに感じていた説明のつかない「何か」の存在によく似ていた。

「ルーフィン先生じゃないか！」

ひるんでいる間に頭上から声が降ってくる。そこにいたのは……見覚えのある、筋骨たくましいこの街の住人の男。彼は不甲斐ない僕に向けて……街を救った礼を言う。沢山の人が救われたと。

エリザを奪った病は……若いエリザが、死んだくらいだ、きつと多

くの人間が苦しんだ病だったのだ。そして僕がそれを取り去ったと。彼はひたすら感謝して、そして元気を出してくれと不器用に言っただけで去っていった。

「僕は、何も知らなかったのかも、しれないですね」

「……知りたいですか？」

「はい。僕を病気だった人たちのもとへ連れて行ってもらえませんか……アーミアスさん」

「もちろんです。……まずは、宿屋に向かいましょう」

路地の影から出たアーミアスさんは、薄く微笑んで了承した。その背にある剣が、思い返せば熾烈だった戦いの痕跡を示すように傷がついていて……ああ、僕は何を見ていたのだろうか、自嘲した。

36話 帰還

「……もう、十分です。こんなに若い子供まで病にかかっていたのですね……」

すやすやと眠る子供。健やかに眠る、子供。この子も、僕が町の惨状を見ようとしていない間、苦しんでいた。この子の母親も病気がかかっていたという。病魔の恐怖に怯えながら一人家族を支え、今は眠る父親の顔は安堵と疲労の両方を見せていた。

彼らの家を出ると、もうすっかり日は暮れていて、街には明かりがともっていた。平和で、平穏な、普段通りの街並みがそこにあった。

そしてこれまで何とも思っていなかったはずなのに……エリザが好きだったこの町が、どうにも愛おしく見えてしょうがなかった。エリザは、病に侵されながら、それを僕に隠して……そして送り出してくれた。この町を救ってくれると信じて。

それに、どうしても、僕を信じ、今、あんなに他人と距離を置いていた僕を気遣ってくれる町の人達に報いなければならぬと、切に思う。

無言の決意をアーミアスさんにはなにも言わずに、ただそこに立って、いてくれた。何も言わなかったのが救いのようだった。

「僕は、エリザの愛したこの町で……生きていこうと思います。今度は外に出て、そして、町の人たちを僕の目で見て、共に過こします」
「……」

「ありがとうございます。……ここから連れ出してくれて」

「それは、……俺のしたことではありません。でも、立ち直れたようならしいのです」

ちらりと虚空に目やったアーミアスさんはすぐに僕のほうに向きなおった。そして少しもの言いたげではあったけれど、そのまま何も言わずに微笑んだ。

僕はその気遣いに感謝してこんなことが二度と起こらないように再び古文書の解説に戻る。封印があったということは、かつてこの町で同じことがあったということだから。そして滅したのではなく、封

印したあの病魔を次の時代までには消し去る方法を見つけなければならぬと決意して。

アーミアスさんたちはその後も少しだけここにいたようだったが、静かに出ていった。出ていく少し前にエリザが笑っていたような、そんな温かい気配が頬を撫でていった。

きっと彼女は、今の僕を見れば……情けない時ですら微笑んでくれたのだ、きっと満面の笑みを浮かべてくれる。そんな確信と、ぽっかりと胸に空いた寂しい穴。

その二つを僕はこれから抱えていく。

……

「これは……なんででしょう」

「羽根飾りバンド、ですかね、アーミアスさん」

「そのままじゃないですか兄さん。もらった時はそれどころじゃなかったですが、改めてみると……これって使えるんですか？」

セントヘイブンに戻る道すがら、町長に貰ったお礼とやらをせっつかれて開封してみると中にはいかにも旅芸人が身に着けていそうなシロモノが。

ま、別にそもそも礼が欲しかったわけじゃねえし、いいんじゃない？ 結構な戦闘があったからか、仲間たちは不満そうだし、サンデイもしょぼい呼ばわりだったが。

仲間の賃金はきっちり払えているし、問題ないと思うんだがな？ 一番の報酬は人間たちの幸せ、あわよくば笑顔。それから安寧、安全、平和。そうだろ？ ……つて、人間のこいつらには伝わりづらいよな。

刹那を生き、眩しい命を燃やす人間たちに俺たちの考えを理解してもらう必要はねえ。そういうことは俺たちがやるからな。まあ、俺はこれが満足なのさ。俺にとつての幸せとはこのことに違いねえ。

にしても使い道か。羽根飾りバンドっていうくらいなんだから頭につければいいんじゃない？ 試しにマティカの頭につけようとするどぶんぶんと首を振られた。……そこまでパーティーの癒しに拒否されるって傷つくぜ。

メルティイはこういう羽根飾りは好きじゃねえの？ 好みはそれ

ぞれだろうが、経験上こういうやつは女の子が好きなものだろ？ ほら、バンドも可愛らしい色合いだしな。えーっと、ぱっしょん、ぴんく？ 俺には最近の人間の流行りなんて分からんが。

メルティーンまで拒否するのかよ……。なに、俺がつける？

……。まあいいか。物は悪くはなさそうだ。

「どうですか？」

「う、うーん、変じゃないよ！」

「何を言っているのですか。アーミアスさんにはもともとこんなどここの鳥の羽ともしれないものではなく本物の麗しき翼を持っていらっしやったのです、霞むに決まってるでしょう！」

「……これは、ちよっと保護の魔法でもかかっているみたいですね。装備としては悪くないですよ」

似合わねえならはつきり言えよ！ 余計傷つくわ！ 男どもの下手くそなフォロー、ありがとよ！

そつと、いたたまれなくなつて外そうとすると、その俺の腕をメルティーンががしつと掴む。

「ベリー・ベリー・キュート！」

「……？」

「素晴らしく、最高に、可愛らしく、お似合いでございますアーミアスさん！ 久しい陽光にきらめく御髪に生える可憐な花！ 雪のごとく白い肌がバンドの原色によって映えております！ ああ奇跡！

これぞ神のみわざ！ 世界にあります！」

「……あ、この装備品は旅芸人の専用の装備なのです。ですから皆さん俺に装備させたということですか？」

何も聞こえなかった。聞こえなかったぞ、目の前で目をキラキラさせているメルティーンは、何も聞こえなかったと思えば可愛いものだ。「目をキラキラさせてアーミアスさんに迫るのはやめなさい、メルティーン」

ガトウーザが見かねてメルティーンを回収した。天使への盲信ぶりが激しいこの二人だが、今回は幸い……。かどうかはわからねえが見解の相違があつたらしい。おかげで興奮気味のメルティーンが、珍しくど

ちらかというと暴走しがちなガトウーザに抑えられるなんていうことになってる。

……どつちも似たようなものだが。俺をこんなに近くで見てりやこの灰色髪の中のカラーリング、美男とは言い難い顔、見習い故に小さい体、持ち合わせていないあらゆる力に幻滅してくれても構わないんだが、二人の信仰心は生半可なものじゃないらしいな。未だ俺に夢を見ているらしい。

俺は人間たちには……命に関わらず、後悔しないことまでには手を出さないようにしているが、例え二人の目が覚めて後悔する未来が分かっているとしても目を覚まさせるのはやめておくことにした。

……何言ってもそんなことはねえ、天使様は以下略。いやはや、重症すぎるな。

現実は無慈悲だろ。見ようによつて俺は翼がないからここにいないだけで、ほかの天使は誰一人自分の守護地域を見にも来ないように見えねえか？まあ、純粋なやつは好きだが。

「えーと、えーと、アーミアスさん、似合ってるよ、似合ってるけど、あの、体の装備が戦闘向けだからちよつとちぐはぐかなって」

「ああ、なるほど！ そういう事でしたか。ありがとうございます、マティカ。このような格好をしたことは初めてで、勝手にわからずにいきました」

「ううん、でもね、服を変えたらとつても似合うと思う」

「ありがとうございます、入手できれば旅芸人らしい格好もたまにはいいかもしれませんね」

名乗っている以上はたまにはそれらしく振る舞わねえと「しがな旅芸人だ」って言い張っても嘘だろ！ って言われて終わりだろうしな。このメンバーでダーマに行ったらさすがに今のままじゃ誤魔化し効かねえだろ。職業を変える神殿はな。

さあ、城が見えてきた。リツカたんのところに向かうか。

いやはや、ベクセリアでは事件以外のことを考える余裕が無かったが、今からはリツカたん補給タイムに充てることができる。

こんなに長い間リツカたんに会えないなんてめつたにないことだ

しな、ここは会えなかった悲しみに浸るよりは長いこと会えなかった
ゆえに楽しめる変化つてやつを体感して、ペろろろ。
心のアルバムが火を噴くぜ！

ドラマ編

37話 帰郷前

アーミアスたちが関所の向こうのベクセリアから帰ってきた昨日のことを思いだしながら、私は宿のロビーの清掃をしていた。

例えば、ウォル口村にいた頃はいつだって白い翼と輪っかを持っていたアーミアスが見守っていてくれたってことだし、この前の黒騎士騒動だって数日しか離れていることはなかった。

でも関所の向こうの町に行っている期間はそれよりずっと長くて、ああいつもそばで見守っていてくれたんだなあって本当に思ったんだ。

帰ってきた彼らは疲れた顔をしていたけれど、アーミアスは私を見るとすぐに疲れを感じさせないで笑って、ただいま帰りました……敬語なのは相変わらずみたいで……って言ってくれた。それから間髪入れずになにか困ったことがなかったかって聞くからちよつとこつちも笑っちゃった。

本当に、彼は仕事人だなあって。それは、彼からすれば当たり前のことかもしれない。もともとの生まれが違うからで、そもそも私たち人間とは違うからかもしれない。

だけど、それでも、神様が心を込めて大切にをつくったような綺麗な外見をしているけれど、私と同じように手があって、足があって、息をして、食べ物を食べて、寝て起きるアーミアスが、だんだん言っていて失礼だけど、身近に思えてきて。

身近に感じるからこそ、アーミアスの仲間の人たちと同じように疲れ果ててくたくたなんだだろうなあ、早く部屋に案内しなきゃなって思っているのにもいつもと変わらずに人の心配をして聞くんだもの。おかしくって。そして……この優しい天使様に私はずっと守られていたんだなあってしみじみ感じて。

もちろん何も困ったことなんてないよって言って部屋の鍵を渡したんだけど、それはよかったと言いながら、アーミアスは、今度は少

しだけ空振りしたみたいな顔をするんだもの。

本当に、芯から守護天使様なんだなあ。アーミアスって。そんな神聖な存在なのに私はいつの間にかおじいちゃんやニードみたいな村で過ごしてきた昔から知っている相手のように感じちゃう。アーミアスから見ればある意味ではそうなんだろうけど、私はあの姿を見れていなかったのに、不思議。

それくらいずっと身近にいてくれてたってことなのかな。嬉しいな。

「おはようございます、リツカ」

「あ、おはよう！ よく眠れた？」

「ええそれはもう、普段ならもつと早く目覚めるところですがこの時間までぐっすりですよ。温かいベッドをありがとうございます」

「いいえ、それは良かった！」

集中していたからいつの間にか一階に来ていたアーミアスに気づかなかったけど、彼はそれに気にせずテーブルに向かった。

この前、掃除をしている私の手伝いをご飯も食べずにしようとしたから、それは流石に断つたのを覚えていてくれたみたい。従業員価格とはいえ、今のアーミアスはお金を払って宿に泊まっているお客様なんだから、そんなことしなくていいのにな。

「あれ、仲間さんたちは？」

「彼らですか？ 実はこれから帰れるかもしれないので、ちよつとお暇を。駄目ならまた考えますが、今度こそなんとか一度戻りたいものです」

「え、だから、その服なんだね」

「はい。肩書きは旅芸人ですのでこれでもそこまで違和感もない……ですよね？ 人の感性にはあまり、自信が無いので」

「全然、変とかじゃないよ！ 一番その格好が似合ってるから！」

天使様の服を着たアーミアスはそれを聞いてちよつとびっくりしたようだけど、すぐに微笑んだ。もしかしたら、あの服は自分で選んだんじゃないのかも。守護天使様の制服なのかな？

「それは嬉しい限りです。えつと……リツカ」

「どうしたの？」

アーミアスがちよつと口ごもった珍しい姿に、思わず手が止まっちゃった。

「あ、いえ……すぐに戻ってくるつもりなのですが、それでも、少し寂しくて……」

……今私はとてもすごい光景を見ているのかもしれない。恥ずかしそうに目をそらしているアーミアスなんて絶対ほかじゃ見れないと思う。だって、いつも、冷静か穏やかかのどっちかで、よく笑うけれど、動揺なんてめつたにないじゃない。

正確な年齢を聞いたことはないけれど、外見こそ同じくらいの年に見えるとはいえないものすごく年上の天使様なのに何故か、ちよつと、かわい。

「私も寂しいよ。でもまた来てくれるなら、待ってるから」
「……！」

まだ給仕の人がご飯を並べる前のテーブルにアーミアスはびたんと突っ伏しちやつた。その、えつと、感極まつているように見える。私の言葉一つでここまで感動しちゃうなんて、お人好しにも程があるよ！

「……すみません、リツカ。今までそう言ってくださる相手にであつたことがなかったもので。つい……」

「えー！」
「……驚かれますか」

「ううん、きつと、口に出していないだけでアーミアスの帰りを待つてると思うから」

「ええ、それは、そうでしょうとも。少なくとも俺ならそうですからね」

アーミアスはそうは言いつつも、あまり、天界におわす天使様たちに良い感情を抱いていないみたいだった。決して険悪な感じではないのだけど、なんだろう。

どんな相手にだって、それこそ信仰する気のないニードにだってあんなに優しく接して怪我までして帰ってくるような彼にしては珍し

い。同じ天使様だから、なにかあるのかもしれない。

「ちよつと忘れ物があるだけですからね、強いていえば師と少し話をしたいくらいで大した用はないのです。引き止められても困りますから、実のところ会いたくないのはこちらなのでしよう」

「……故郷、なのには？」

「俺は地上の方をより愛している、それだけのことですよ。特にリツカ、貴女と話している時間は至福ですから」

「恥ずかしげもなくそんなことを言っつて、アーミアスはまた、にっこり笑った。ここまで言われてしまうと、天使様であるアーミアスがそんな俗な意図はないと分かっているのに頬が熱くなってしまうけれど、アーミアスも言葉の意味に気づいて頬を紅潮させてしまったから同じだった。」

「リツカ、すみません、失言でした」

「だ、大丈夫、アーミアスがそういう意味で言うはず、ないものね」
「う、そう、だと思えます」

「ぼつと頬を染めていると、ルイーダさんが私の仕事の止まった手を見とがめてこつちにやって来てしまった。アーミアスは明らかに慌てて、荷物をまとめて立ち上がる。」

「やっぱり、こんなアーミアスってレアだね。疲れてたみたいだし、本調子じゃないんだよね？」

「パン、ひとつ貰っていいですか？」

「いいけど……」

「本当にご迷惑をお掛けしました……失言は、忘れてください。では、また」

「明るい陽の光の下に駆け出して行った背中を見送る。あの背に翼があるのを見たことはないのに、ああ、飛び立ってしまうなんて、思っつて。やっぱり寂しかった。」

「……あら、行っちゃった」

「故郷に一度帰るそうです」

「そう。あの坊や……と言っつていいかは分からないけれど。彼、ほんつと不思議な人ね」

そりやあうちの村の天使様なんだから人間と同じ粹に当てはめることなんて出来ない、なんて、言いたかったけど言わなかった。ミアスは事実でも自分の正体を公言するのは嫌みいだから。

ルイーダさんなら気づいていると思うけれど。私だって一目でわかったんだから。

そのあと、疲れ果てて昼まで眠っていたらしいアーミアスの仲間たちが見送れなかったことをとても嘆いていて、特に兄妹……なのかな、の二人が悔し泣きに泣いて、でも真面目なのかやけになることもなくひたすら悔しがっていて、ちよつとそれが人目を引いていた。

38話 擦違天使

「……動くものですね」

「そりやそうジャン、あんなに天使っぽく行動してムリだったらもう二度と動かなかったと思うし」

未だにリツカたんの会話の余韻で胸がバクバクしていて天の箱舟が動かなかった動いているとか、それどころじゃねえんだけど、まあ喜ばしいことか。……ん？

つてことは、俺は着実に天使の力を取り戻しているってことになるよな。それは喜ばしくないことだぜ。いや待てよ、下手にリツカたんの成長観察日記を誰かに読まれるよりはマシか。天使の力を失う方法はもう割れているし、少しくらいは仕方ねえかもな。

失う方法はもちろん、超上空からのダイブだ。誰も試していない上に誰にも知られていない。ハイリスク、しかしハイリターン。

リツカたんを狙う天使は俺だけで十分だろうが。敵になりうる存在に塩なんて送ってやるかよ。リツカたんの幼い頃の可愛さを知っているのは俺と師匠だけでいいし、師匠は……まああの師匠ならだれか一人に入れこんだりはしないだろ。師匠は長老の次ぐらいにすごい天使だからな。師匠が気にするのはどちらかというと天使の方で、エルギオス様とかラフエツト様とか……あと俺だろう。

そりやあ何度も何度も耳にタコ出来るぐらい一人にばっかり気をつけるなど言われまくったもんだしな。あとは自分で考えて行動する前に確認入れるのかな。この辺りは幼い頃のやらかしのせいだからもうどうにもならねえ。俺は優等生だが問題児なのは間違いないな。これだけ見られてりや気にかげられているのは理解出来るさ。

それで気づいちまったんだが……もしも、これから天使界で翼を生やす技術があると言われたら、俺は即刻紐なしバンジーを凶るに違いないねえ。頼むから、そんな前例を聞いたこともない事態に対しての対処法なんて編み出さないでいてくれ。俺はリツカたんと一緒にいたい。できれば一緒に老いたい。無理なのはよくよく、分かっているが。

今はぎりぎりリツカたんと同世代の外見だが、もう一年もすれば俺は間違いなく年下にしか見えなくなるだろう。そうになったら、もう、終わりだな。俺は心の中でむせび泣きながら自動的に見送りモードになり、そして、変わらざるべろする。

そしてニードに嫌がらせすることもなくなり、リツカたんを守りながら次の世代にターゲットを向ける。ロリコンのようだが、……否定はできないが、これは直面する時間の流れの違いに俺が耐えきれないだけのことだ。

俺が強ければ、それでもリツカたんいつか恋できるように頑張っただろうに、俺は弱い。

「それにしてもアンタ本当にあの子のこと気に入ってるからビツクリだわ。あんまり鼻屑しちゃいけないとか、案外ない感じ?」

「鼻屑、ですか。いけませんね。よく師匠から注意を受けたものです。彼女の系譜にはどうにも入れ込んでしまうようでした」

「先祖代々見守ってたとかマジ? 一途にもほどがあるし」
一途、ね。言葉としての耳触りはいいが。

箱舟の、良いとは言い難い乗り心地に揺さぶられる。頭の中は目の前のサンデイとの会話よりリツカたんの言葉で占領されていてやばい。

そういう目で見るはず、ないものね。

そういう。つまり、恋愛的な意味で。

てか、当然っちゃあ当然だが……俺がリツカたん恋愛的な目で見ることがないって、深く深く信じられていてショックがデカすぎる。事実なんだが……確かに、事実なんだが! それでも突きつけられるとショックすぎるだろ。

それにしてもリツカたんのさつき赤面ペろすぎて天使界に着くまでに星になっちゃうかもしれないね……。しかも赤面の原因俺だし。俺が認識されていると言うだけで鼻血が出そうだというのに優しいリツカたんは会話もしてくれる……。

ペろい。やさしさがペろい。あの笑顔が最早ペろいを通り越して神々しい……いや、それだとかおかしいな。正確にはなんとすべきだ

ろうか。言葉が見つからねえ。やっぱペロいな。

それにしても、師匠に会いてえ。ハゲでも頭硬くても師匠が俺のことをツンデレ気味に褒めてくれる瞬間は好きだ。師匠なら、きつと俺が地上でのことを語ればもつとよく行動する方法を教えてください。

そうすれば俺はより良い天使になれる。それに褒められる瞬間は結構報われた感じがするもんだ。その辺りの感性は、どうやら神様は人間と天使を同じように創られたらしいな。

テンションが高くなりすぎて一周回り、最早落ち着きを取り戻している俺はこのあと長老にあんなことを言われるとは露にも思わず呑気なものだった。

「……ウオルロ村の守護天使アーミアス、ただいま帰還いたしました」

金色に輝く天の箱舟から降り立った、行方知らずとなっていた見習い天使……いいえ、一人前の天使になったばかりの幼子の一人。

アーミアスくん。生きていてくれた。

かつてのように頬はバラ色ではないけれど、血色はよく、血の匂いもしない。でもその背にああ、あの純白の翼はない。頭の上の光輪も見当たらない。

「おお、アーミアス！」

長老がいの一番にアーミアスに駆け寄せられ、その細い体を抱きしめた。彼の世代の中では最も真面目で健気な彼だけど、何分翼をもごうとするなんてことや、外見詐欺の変態に目をつけられたり、妬みの末に一人ぼっちだったりしてそりやあもう、上級天使の中ではアーミアスくんは心配されているんだもの。

ただ、その空気はだんだんなくなってきたらだけどね。アーミアスくんはそんなことを歯牙にもかけなかった。そして、一番優秀であり続けた。師の期待に応え続け、守護天使となり、星のオーラをかつてのエルギオス様のようにたくさん持ち帰り続けた。

人を愛した。誰よりも、地上を愛した。

そんな相手をいつまでも妬んでばかりもいられないわよね。こつ

ちも負けずに頑張らなきゃ。私たちが何度説教しても聞かなかつたような天使だつて、天使であることには変わらなかつたのだから、そういう風にちよつとは悔い改めたみたい。

でも、ちよつと懸念もあつて。翼も光輪も失つてしまったアーミアスくんが、またかつてのような目に遭わなければいけないけれど。きつとまた、気にもかけないんでしようけれど、それでも、ね。

「ところで、オムイ様。この様子は一体……」

「ああ、荒れ果てているじゃろう。あの日、天使界を地上からの黒い雷が貫き、このようになってしまった。その上アーミアス以外はまだ誰も戻らぬ……」

「……この身以外にも地上へ天使が……」

誰にも、会わなかつたみたいね。アーミアスくんはゆるゆると首を振ると、ああ、流石に冷静ではいられなかつたみたい。

「申し訳ございません、オムイ様。少し、お時間をいただけませんか。師匠と話をして、落ち着きたいのです」

「時間は構わん。しかし、イザヤールは……女神の果実を探して今は地上におる」

「……女神の果実」

「あの日、あの場にいたお主は見たじやろう。果実が地上に散り散りになるのを。女神の果実には今まで何千年ものあいだ、天使が捧げた星のオーラの力が凝縮されておる。それが、七つじや。人間界で何者が手にしても良からぬ事が起きる……」

長老は、アーミアスくんの肩をそつと叩くと周りの者たちにも下がるように仰られた。

アーミアスくんを、今すぐ私も抱きしめたい。もう外見は幼くはないけれど、もう、危うくはないけれど、きつと一人で心細かつた幼い天使の心は不安や寂しきでいっぱいだろうから。

その上、自分を一番守ってくれるはずの師匠が地上にいる理由が自分を探している訳じゃないと知ったから。

でも、私は彼の師匠じゃない。真つ先にかわいいかわいい幼いアーミアスくんを案外抜け目のないイザヤールがかつさらつていったか

ら。

しばらく、私はアーミアスくんを見つめていた。お守りのように彼の抜け落ちた羽根を握りしめて。

私は天使の理に従うために体が勝手に動くより前に、そっとその場を立ち去った。

それにしても、あんなに天使の象徴を失い、力をあんなに無くしても、あの星を宿したような黒い瞳の真っ直ぐさはちつとも変わらな
い。あの日のように、絶望していない。イザヤールのことを知って
も、失望のような色は見えたけれど、光は失わなかった。

ああ、強くなったんだ。彼は、強くなったの。

私の中にはいつまでも小さくって可愛いアーミアスくんがいたけれど、それは改めなきやいけないようね。

「ししよー……」

立ち去る間に、かつてのように、ちよつと舌つ足らずにイザヤールを呼ぶあの声が、風にさらわれたように微かに、でも、確かに聞こえたのだけど、それは。聞こえなかったのよ、私には。聞いていない。それだけは否定しなくちゃ。

でも、いくら任務とはいえ長老の前で思いつ切りアーミアスくんの搜索はしないと切り切ったイザヤールは私の手でちよつとどうにかする必要があるわね。アーミアスくんは理に縛られてイザヤールに
ぽかぽか殴りかかることすらできないし。

39話 涙天使

「ししよー……」

ちっさいガキみてえに、なっさけねえの、俺。師匠はすごい天使なんだ。優秀で、何を優先すべきかきつちり分かつてる天使なんだぜ？俺よりも優先するべきことが見定められる、冷静なハゲなんだ。

女神の果実が人間界に悪影響を及ぼすのがはつきり分かつていて、天使界がこんなに荒れ果てていて、天使が何人も戻らない。

そういう状況で俺みたいな連れ帰ってもなんの役にも立たない奴を探すより、女神の果実を一つでも搜索した方がいいに決まってる。

なのになんで俺はこんなに、悲しいんだろうか。人間が俺たちの力不足で死んでしまった時のような悲しみとは違った、処理しきれないやるせないような気持ち。

感情を処理しきれないのはいつもの事だが、……いいや。俺はリツカの前だって、見てわかるような動揺したのは昨日くらいだ。顔に出て、口に出て、目からも出る。そんなことは今まで無かった。

……思うに、俺は、師匠のことを思った以上に好いているらしい。そして、あの時手を伸ばしてくれた師匠なら俺を探しているに違いないと心の奥底では信じきっていたらしい。

俺は酷い弟子だ。なんの相談もなく突然ナイフを持ち出したかと思えば失血死しかけて師匠の心臓を止めにかかったり、地上に落ちても喜んだり、今までの生活を心底……そうだ、悲しいことがあっても基本的には楽しんで、満喫して、人間達たちと話すことが出来て良かったと思ってきたのに、師匠はその間も俺を探してくれていて、師匠はきつと俺の帰還を歓迎してくれると、そう思っていたんだな。

俺はすぐに地上に戻る気で、天使界に戻れなくていいとまで思っているのに。なのに、勝手に、そんなことを考えていた。

ああ自分勝手に酷い奴だ。俺は凶体ばかりでかくなっただけのガキに違いない。考えが幼稚で、周りのことを客観視もできなかった。人間ならば、もう俺は百三十と五つの爺さんだが、天使としての俺はまだまだ幼過ぎたらしい。この分だと外見年齢ほども周りが見

れているかどうかだって怪しい。

「ししよー……ししよー……どこですか……」

サンディが後ろにいるのは分かっている。そして何も言わないでいてくれることがただただありがたい。オムイ様の計らいで近くにはたったの一人も天使がないこともだ。こんな、樹の近くの良い場所なのに、俺のような考えなしのために時間も、尊厳も、与えられた。それにガキの俺は甘えた。

シヨツクな気持ちを今だけは少しも取り繕わずに、乾燥した地面を濡らした。嗚咽はそれでも噛み殺し、目からぱたぱたと涙が落ちるに任せた。顔が歪む。きつとすさまじく醜い顔をしているだろう。視界もぐにやぐにやに歪み、乱れ、また一滴、また一滴と目から液体がこぼれ落ちた。

だが、それでも俺は合理的で冷静で、今やるべき事が分かっている。師匠の弟子だ。情けない風体を晒していても、次にやるべき事を考える。今度こそは考えなくてはならないだろう。

師匠がここにいない今、ペーパーの俺はオムイ様のところへ赴き、指示を仰ぐのみだがな。それでも、それ以外を考え、より良い方法を教えてもらわなくとも見つけ、行動しなくてはならない。

やるべき事。……そうだ。女神の果実だ。

人間を脅かすかもしれない高エネルギー体。もし人間にも可視であるならば、そして食べてしまったならば。絶対無事ではいられないのか。あんなもの、人間でない俺だって食べたら人間になれるかもしれないような代物だ。

……ちよつと欲しいなんて思っていないからな。

つまり、人間が天使になることも可能なわけだ。天使になれるならばどんな魔物にも、どんな怪物にでもなれるだろう。こんな未熟者がいても天使というのはなかなかどうしてスペックが高いからな。

落ち着いて来た。

泣くのはもうこれまでにしよう。ガキの俺とは決別しなくては。師匠は俺をウォル口村の守護天使として認めた。一人前として認めようなもんだ。それは俺が一人でも天使としてやっていけるとい

う証明だろう。

だから、師匠は俺を探さない。そもそも俺よりも優先すべき事象があるのだし、迷う必要は無い。師匠のことだからきつと迷わなかったと思うが。……やべ、そう思うとまだ涙がちよちよぎれそうだわ。

師匠のように俺はなりたい。天使として、人間を護り、そして見守り、その健やかな命が次へ渡され、紡がれていくのを永遠と喜びとして続けていくように。

女神の果実が実る時、俺たち天使は救われる。

神の国より来たる天の箱舟がそれを知らせる鍵となる。

そんなことを言われてきたが、知るものか。俺は天使で、救われる側ではないからな。モチベーションの低い天使に喝入れするための文言だろう。

実際果実は実り、それが集った時にどうなるかまでは考えないでおく。きつと、果実が揃った時こそ師匠は俺と話してくれる。その時こそ、師匠の言葉に従えばいいだけなんだからな。

そして師匠が自分で考えるべきだと言った時、俺は今度はまつすぐ前を見ているはずだ。……多分な。

「目が赤いね、アーミー」

「その呼び方はもうおやめください」

「えー、アーミアスってまさに神の兵士って感じだからとっても似合ってると思うなっ」

「……」

変態は相手にしないに限るな。スルーしようにも相手の方が上の天使だ。動けずにいると、エレツタ様がさつと現れて不届き者を連れていった。いつ見ても彼女は笑顔が眩しい。にこやかに首根っこを掴み引きずる姿はまさに上級天使の鏡だな。

俺は人間などの地上の世界の生き物には優しいつもりだが、天使にはちつとも優しくないんでな。

ちなみに、不届き者というのは、なんでも幼気なぴよぴよした天使

をこのロリコンだかシヨタコンだか知らないが、その系統の特殊性癖で付き纏い、未遂で済んだがいろいろとやばかったという話を持つている見た目だけは若い天使のことだ。被害者のことは知らないし、その未遂の内容も知らされなかったが、俺もそんなこと聞きたかねえから置いて。

幼い時はよく遊んでもらったような記憶があるが、天使も上っ面だけじゃわからないところがあるってことだろうな。俺もそうだろ、多分。こんなに口が悪いのはリツカたんにはだけはばらさないでいたいからな。

ともかく、それを聞かされてからこいつに対する反応は俺も適当だ。被害者はいい天使になることで忘れてほしいもんだよな。

イエスペろペろノータッチも守れない野郎なんて擁護のしようがないしな。

あいつとエレツタ様以外のすれ違う見習いや上級天使たちは俺を見るとさつと目をそらす。そのくせ、すぐに俺をチラチラと伺い始めて正直、少しばかり鬱陶しい。

そんなに天使界に羽根なし輪なし天使が珍しいか。……珍しいわ。ああもう、その痛ましそうな視線、あの哀れむような目！

実は俺はこの状況を嘆くどころか超、超！喜んでいるんだって知ったらどんな顔をするんだろうな？愛しのリツカたんと会話できただけで空が飛べるほど舞い上がっているんだぜ？

ラフェット様は俺の手をそつと握って生きてたことを喜んでくれたのに、他の奴らは聞きたいことや言いたいことがあるならはつきり言えってんだ。

はつきり言ってくれさえすればはつきりと心情を語れるというのに、俺は自分から用もないのに話しかけるほど社交的じゃない。

さて、そんなことよりも。長老の間だ。きつと俺に指針を与えてくださるはず。

「おお、よく来た」

オムイ様が俺を迎え入れくださった。護衛の天使たちも無感情って訳じゃないが職務に忠実で、やっかみのない態度で安心した。

「少しは落ち着いたようじゃな」

「はい。……お気遣いありがとうございます」

「うむ。さて……アミアス、お主の翼と光輪を失い、ここに戻ってきた経緯について話してくれるかの」

「はい、オムイ様」

経緯つてもなあ？ご覧の通り天使界のてっぺんから地上に墜落、ウォル口村の滝壺に運良く落下。善良な村人、特にハイパー優しくて可愛くてペロいリツカたんが俺を自宅で療養させてくれたり、神父が傷を魔法で治療しようとしてくれたりした。

そんでもってすったもんだの末、天の箱舟のバイトの妖精サンディの助言に従って星のオーラが出そうな行動を取り続けることによつて天使の力？ が少し復活。天の箱舟がなんか修復され、俺は帰還、師匠に関しては遺憾。俺の考えが甘いという意味だな。

「オムイ様、ウォル口村では自然と、この姿でも守護天使として認められました。以前と変わらずに職務を全うすればよろしいのでしょうか？」

「その必要はあるまい。もう星のオーラを集める必要がなければ、お主は星のオーラを見ることも出来ないようじゃからな」

俺は別に星のオーラを集めるために人間たちを守護してた訳じゃねーけど。まあ、長老が言いたいのはそれより優先事項があるってことなんだが。

「ともかく、その翼と光輪を失った姿ではこれから差し障る。まずは世界樹に祈りを捧げるのじゃ。奇跡が起こるかもしれん」

「……世界樹に祈りを、ですか？」

「そうじゃ。神は再び翼をささずけてくださるかもしれん。行ってみなさい」

ウツソだろ、ここまで完璧に人間に擬態できているのにまた生えるのかもしれないかよ！ うわ……バンジーしたい。バンジーしたいのに天使の力を失っているくせに天使の理だけはきっちり作用している体が反発できねえ。

「わかりました、オムイ様……」

……クソ……奇跡なんて、人間たちが死ぬ間際にだつて起きちやくれないんだ。俺みたいな灰色の天使に起きないことを祈りてえ……。

40話 啓示

「……」

サンデイもどつか行つちまったし、完全にぼっちだぜ。

ここにそよぐ風には慣れたもの。巨木の葉を揺らす風は、上空なんだから酷く冷たいはずだが、どうにも天使界は居住に適さないほど低温でもない。少し冷たくて身震いする程度だ。なんらかの護りがそこにあるんだろう。おそらく、目の前の木こそがその護りだろう。

片膝をつく。指を組む。そして目を閉じる。神を信じるまでもなく、神の奇跡を体現したこの身の存在こそが神の存在を意味している。

そして与えられた力を失って喜ぶこの愚かな神の子が、今一度奇跡がもたらされることを祈るのだ。正直両親を介さず生まれた奇跡への感謝が、これ以上何かを望んでいいのかという気持ちへ変わっているが。ああ愚か、ああ滑稽。

しかも天使としてまっとうと言い難い願いを持つ俺には祈りの内容への疑問の余地は沢山存在しているし、奇跡なんて起きなければ良いと本当は切に願っていても、理には従うしかないのだ。俺が天使である限り。

ああ思考が溶けるようだ。ほかのことを考えられなくなっていく。体は当然言うことを聞かないし、今俺の後ろに師匠が立っていたとしても身動きひとつ取れないだろう。

……、……奇跡が起きますように。この身に今一度翼と光輪を宿してくださいますように。

反発する意思がますます削がれていく。それ以外考えなくなっていく。祈りなさい、というオムイ様の言葉が頭の中に木霊して、俺はそれ以外できなくなる。

きつとオムイ様はそこまで理の力が働くなんて考えてもいないはずだ。だが誰よりも長く生き、最も天使としての力を持つ長老が、生まれてわずかな時間のみ天使で、今はほぼ力を無くしている俺に命令をすればどうなると思われていたのか。

今俺の意思は関係ないし、挟み込む余地はなくなっている。俺は完全なあやつり人形にもなれる気がする。いや、きつとなれるはずだ。外見の上では完璧に。

しかし、反発する意思のみ持ちあわせている俺は、それ以外を考えないことによつて命令を遂行する。内面まではそうそう変えられるものではないからだ。俺はなんとしてでも人間と過ごしたいように、俺はなんとしてでも理に従わなければならないからだ。

傷跡こそあつても、痛みも違和感もない平坦な背中に翼が生える奇跡が宿りますように、なんて、本当に思つてもないことだが、それでも祈り続ける。ひたすら、奇跡が起こるまで。奇跡が起きて、なお、翼が戻らなければ、……いいえ、それは、考えてはならないこと。

神に祈りを捧げよ。その命令に私は従います。

我が身に再び天使の力が宿りますように。

翼をさずけて下さい。光輪をさずけて下さい。再び空を飛び、人間に姿を見られないようになれますように。

人間に気づかれぬよう、守護するのが我が使命。遂行できるように、お力をお授けください。

神の僕たる私が、その手足となつて今一度働けるようにどうか奇跡を。

奇跡を。奇跡を。お授けください。

私の願いは、人間を守護し、見守り、慈しむこと。燦然と輝く魂を救済し、安らかなる果てへと導くこと。憂いを断ち、穏やかな生命を歩めるように手助けすること。

お授けください。私に力を。悩み、苦しむ人々を救済できるように。

「……うう、頭が……」

アツタマいってえ！ ガンガンする！ 何でだ！ そりゃあ、こんな固いところで爆睡してたからだ！ 体もあちこちガチガチ！ し

ぶとい体を持つ天使といえどこれはきつい！ ちよつと身動きした
だけであちらそちらがバキバキするわ！

ん？ 爆睡？ ……え？ ……寝てた？ 世界樹の下で？ マジ
？ 嘘だろ？

あんなに思考が完全に乗っ取られていたつてのに？ つーか、あれは
完全に俺じゃなくなっていたというか。いやまあもちろん全てに嘘
はついてないし、最後の方は思ってもないことを考えていたわけじゃ
あねえよ。

だがそれでも前半は翼なんていらねーし輪っかなんて邪魔だし俺
じゃないって言っても間違つてはいないだろ。あんなこと考えたこ
ともねーわ。理こえーわ。

天使つてなんなの？ 完全に組織として動くことしかできねえだろ。
柔軟な考えも必要だと思わねえの？ 物理的に反対意見を封じられる
のつて、怖くね？

てかよ、あんなに真剣に祈っていたのに途中で寝るとか幼いとかい
うなまやさしい表現じゃダメだろ。もはや乳幼児か何かなのか、俺
は。

あー、本当に体痛いわ。……バツキバキになっちまった背中に翼は
ないな、よし。頭痛オンパレードな頭の上に輪っかもねえな。完璧。
俺はこれで傍目には神にも見放された天使だな。なんて悲惨なんだ
！ 誰も俺が翼を失いたくてたまらなかつたなんて気づかねえだろ。
俺にとつては願いがかなったことこそが奇跡！ 神に感謝！

そして理に従い、世界樹の下で真摯に祈りを捧げた上にいつの間
に爆睡するなんていう奇跡を体験したからもういいよな。追加で
祈ってもまた寝る気がするわ。

夢の中か起き抜けか、夢うつつなふわふわした状態でなんか声を聞
いたような気がするが。……なんか女性の声だったか。世界樹の下
で眠っていた俺に……声？

……いや、それ、夢じゃねえわ。ガチなやつ。啓示だわ。

確か、えーつと。女神の果実を七つ回収しろつてことだっけか。あ
と、翼も輪っかも戻すのは無理だと。その代わりにルーラつていう呪

文をさずけて下さったような……。

効果は、単純にキメラの翼だが。とても便利だと思いが翼の代わりかつつーと……。

まあいい。報告に行かないとな。それからさくつと日記を回収して地上に帰ろう。

……。女神の果実か。探していれば、地上に混沌が起きるのを防げる。ひいては人間たちを守ることに繋がる。願ってもないことだ。なにより地上に行けるしな。

地上に行くように啓示があつた俺を天使界に留め置くことは誰にもできないはずだ。俺はここから合法的に出ていける。そしてあの仲間たちとまた少々旅ができるし、リツカたんに会いに行ける。

そして、その上で……師匠にも会えるだろうか。捜索の途中で師匠と鉢合わせしたり、師匠が会いに来てくれたり、するだろうか？ ハゲ師匠に弟子への余分な愛情がないのは分かってはいるが、本当にすぐそばまで来ているのであれば、流石に会ってくれるんじゃないだろうか。

師匠は、俺に厳しかったが、欠片も甘やかされているなんて思った日はなかったが、俺に隣人を愛することも、人間の死の受け入れ方も教わった。世界樹の下に遣わされる天使にとって、師匠とは親みたいなものだろうか？

これが恋しいという感情だろうか。ホームシックにはならなかったが、フアーザーシックならぬ、ティーチャーシックってやつには間違いなくなっている。あの俺まで頭髪の未来が不安になるほどのツルツルな師匠の厳格な眉毛が懐かしい。

あの顔にも相見えたい……ってか、師匠ってそういえばイケメンだよな……羨ましくなってきたぜ。俺もあれくらいはつきりした顔立ちならちよつとは天使補正込みでもリツカたんに意識されるようになってたりしたんだろうか？なんかムカついてきたぜ。

師匠は仕事が恋人だろうし、まあ会いに来てくれないことに賭けておく。良くても集め終わったあとにひよっこり来そうじゃね？

それか、俺が行く先々で先回りして回収してるとかな。師匠って真

面目だからな、俺に妨害はなくとも回収することに専念して俺に伝えるのはうっかりか確信犯か、忘れてそうなイメージだぜ。

41話 白

すんげー俺の部屋の扉がガタガタしている。向こうから犯人の声が聞こえるような気もするが、扉のがたつきがうるさ過ぎて何言ってるんだか全くわからない。

……現状？オムイ様に報告し、俺も女神の果実の搜索が命じられたってところだ。そんで自室で日記を抱えて壊れるんじゃないかと思うほど揺さぶられる扉に正直怯えている。いや、そんな可愛いもんじゃねーな。ビビって、正直リツカたんの日記が手元になきや恐怖のあまり壁をどうにか破って逃げ出してたわ。得体がしれねえよ。にしても、誰だよ。

日記回収したら少なくとも、セントシユタインとベクセリアの守護天使には文句を言いに行かなきやならねえのに。エラファイタはいいだろ、まだ、文句を言うほど何かがあったわけじゃねえから。比較的だがな。

守護天使として人間の健やかな生を、外部からの邪悪なる意志によって阻害されている状況を放置して自分はこのうのと安全な天使界に引きこもってるとか、許されていいわけあるかよ。

考えてみる、行方不明者が出ていたって別に、関係ねえだろ。帰還者ゼロ？ 異変で魔物が凶暴化した？

俺からすれば、帰還者ゼロに関しては多少ビビっても仕方ねえと思うが、魔物が凶暴化したから危ない、だから天使界にいて人間界には行かない、それは自分の身を守るだけじゃなく、星のオーラはもう集める必要は無いからだって言うならそれは守護天使としての資格はねえと思うぜ。

俺達がその魔物から人間を守れた可能性は？ 星のオーラが欲しくて俺たちは本当にやっていたのか？ 俺たちは救われるために善行を重ねていたのか？ そうだって言うなら、おかしくねえ？ 俺たちは人間の守護のために神が創り、天から遣わされる生命と云っているのかもわからない存在、「機構」だけ？

天使が天使としてその体が動くなら人間を慈しみ、魔物を救いへと

導き、世界の均衡を保ち、植物と戯れ、そんでたまに好きな子の幸せな顔を覗き見して俺も少し幸せになる……くらいが生きている意味、だろ？

俺たち天使が自分たちのことばかり考えて保身に走っちゃおしまいだろうが。俺たちは、そんなことが許される存在か？俺たちは守るために取り残されているだろ、愛する人間たちの生きる時間から。

自分のためだけに生きるなんて、おこがましい。神の僕の中でも明確に使命がわかっている上に、その能力も寿命も、救う対象すら明確な俺たちなのに！

ウオル口で、俺を歓迎してくれた村人たちの目にはあの異変での恐怖があつた。セントシユタインで黒騎士騒ぎがあつた時、人々には底知れぬ不安があつた。ベクセリアでは涙を流す人たちも、救いを求めて苦しむ人々も……愛する者を失った人もいたっていうのに！

それを取り除くために、実際出来るかどうかは俺たちの実力次第だろうが、奔走するのが天使だろうが！ 基本上級天使の守護天使だぜ？ 俺なんかより絶対救えたはずだろうが！

なんで来なかつたんだ！ なんでだよ！ 俺じゃあ救えなかつた！

でもって、早くそれを言つて、現状をどうにかしたくてもだ、扉を壊れんばかりにガタつかせている相手に対して鍵を開けて招き入れるのは明らかにアウトだろ。

まあ、天使界に抜きん出て悪意を持つ奴なんて居ねえはず……いや、いたわ。危ねえ、あいつの守備範囲、可愛い天使たちから……ただまだ年齢的にも子供で見習いつてだけで俺まで入るってか？ 無節操なところが恐ろしすぎるだろ。貞操は無事でも大切なものを失うところだった。

扉越しにもチリチリこつちまで焼かれるような悪意。ただでさえ灰色の髪の毛が、せっかくベクセリアで染まった分を世界樹の力で浄化できたのにまた戻つちまう。今度は真つ黒になるかもな。そしてら煤天使を名乗るとして、だ。

扉の向こうに声を掛けて、お引き取り願おう。やべーわ。長老にチクっておこうか。こいつ、反省せずに俺まで狙ってくる変態だと。

てか天使なのに人間やほかの生き物を救うことに執着を向けるよりも同じ天使に対して何らかの感情を抱いているところ、バグじゃね？　せめて俺みたいに特定の人間が好きで好きで仕方ないから守護りまくるぐらいにしろよ。たぶん……害はねえし。

「お引き取り下さい」

扉の揺れがぴたつと止まって、……こええわ。こんな激しい音をたててたつてのに俺の声は聞こえてるとかやべーわ。

「いるじゃんアーミィ……やだよ、せつかく戻ってきたんだし、僕になら君の翼を戻せるかもしれないし。ほら、開けて」

「……」

なんでこいつを俺は自分より上の天使と認めてんだろうな？　年齢か？　体はもちろん勝手に動いて解錠。飛び込んでくるのはあの子どもの姿の天使。俺を動けないようにして命令でベッドに放り込まれる。壁際に追い詰められたわけになるが……これだと退路は。ねえな。

日記はその途中で手から落ち、幸いにも滑ってベッドの下に転がり込んだ。セーフだ、セーフ。これで中身は無事だろう。

……いや、今に限ってはそれよりも、状況だ。すげえまずい気がする。

上から啓示を受けても翼を戻せねえっていうのに、謹慎処分を食らってるような天使に戻せるわけがねえだろ。何をやらかす気だ？

前の被害者は未遂ですんでたから目的がわからねえ……。未遂でよかったな。

うわ笑ってる。こええよ。ストーカー行為をはたらいていたペロリストもびつくりだわ。

……助けて師匠。いや、師匠は来てくれねえんだったわ。しかし、これは地上に墜落した時よりもダイレクトにやべえ気がする。すげえ嫌な予感がするんだが。師匠以外に誰が助けてくれるんだ？　というか、師匠以外に頼るなんてしちや迷惑じゃねえ？

だが今は迷惑どころじゃねえ！誰でもいいから、この天使回収してくれ！俺には逆らえねえよ！

このまま、いきなり背後から心臓に一撃、俺死亡とかねえよな？
な？ 流石にねえよな？ 俺を星にしないでくれ、まだ未練が！

「動かないで、すぐに終わらせるから」

いや待て、本当に待て。今、何出した。気のせいじゃなきゃ、それ、刃物だよな。うつ伏せに寝かされた俺にははつきりとは見えねえんだが、それをどうする気なんだ。

つまりそれで俺を切る、んだよな？ 状況的に。まずくね？ どこを切られても痛いだろ。え、そうだよな？

マジで？ ここで俺、星になるのか？ 加工肉ごとく切り分けられてしまふとかねえよな？ せめてちよつと刺すぐらいにしてくれ、頼むから！ 殺さないようにしてほしいんだが！

……それすら望みが薄い気がする。誰だよこいつを放ったのは。俺がもし、ミンチになって死んだら手厚く吊ってほしい。墓はウォール口がいいが、セントシユタイムも捨てがたい。いや待て、天使の死体ってどうなるんだ？ 死んだ天使の亡骸を見たことがねえんだが。天使は基本寿命ねえし。

死体も残らず天へ登って星になるとか、ねえよな？ 跡形も残らないとかねえよなあ？！

てかここまで危険を感じても、天使の理を破れねえんだな?! 神は俺たちの設計を適当にしたに違いねえ！ そのミスのせいで俺は死ぬ！

天使に来世はあるのだろうか……。あつたらリツカたんの身近なところがいい……。

「アーミアス、君は僕の完璧な天使だよ。幼い時も、成長した今も。その姿は似合ってるけど、完璧な天使に翼がないのはおかしいよ。背中を切ったら、きつと出てくるさ。そうしたら元通りだ。自分で傷つけてしまった翼もきつと綺麗になる。僕の気持ちで染まった髪の毛も、きつともつと染まる」

なんか、語り始めた。それで俺も思い出してきた。こいつの被害

者って……まだ幼気な天使で、その天使は、何も知らなくて。小さくて、弱くて、それで、たしか……真っ白い髪の毛、子供だった。つまり、それは。

……白い髪の毛？

そんなやついたか？ ラヴィエル様？ いや、俺が生まれてからの時期だから年齢が合わねえし、あれは白というよりも銀色の御髪だろ。

見当たらないのは、もしや、こいつが罪を犯して百年経っても許されないのはそいつを殺した、から……なら。

俺も殺される……。なにが？ 何がこいつの琴線に触れている！俺なんて取るに足らない灰色の天使だろうが！ いや他のやつに手を出すのもやめろ！

それに俺を狙った理由は何だ？ もしや俺の天使として模範的な行動が逆に嫌だったとかいう、人間っぽい感情なのか？ 俺にはそういうのはわからねえが！ 個人差があつて人間の感情を理解できる部分が違うのか？ こいつは仲間への情や愛は持たねえっていうのか?!

どつちにしろがつしり押さえつけられ、理で縛られてちや逃げようもねえ。刺される覚悟が決まった頃、見計らわれていたのか、背中に容赦のない激痛が走る。翼をもごうとした時の比じやねえ痛みだった。背中を切り開くのが単純に二回、だぜ？ 正気の沙汰じゃねえ。流星に痛みで意識が遠のいた。

声すらまともにあげられねえ。痛みは延々と続くかのようだ。傷は熱い。だが、まあ、痛いなりに冷静だった。これくらいは怪我では死ねない、と。更に切り込まなければ生き残れると。

ま、体がずたずたになるような落下をしても死なねえんだぜ、天使って。背中刺されても失血死以外じゃ死なねえだろう。それがやべえんだがな。だが刃物の切れ味がよかったのかあばらを伝って腹側に流れてくる血の量はそこまで多くない。希望が見えてきた。

あとは発見だが……俺の部屋、わりと辺鄙なところにあるんだよなあ。俺の次に隣の部屋の見習い天使が狙われてもまずい。俺がこ

ここでこいつが去るまで待った方がいいかもしれない、かもな。

それで、こいつもう天使名乗らせるのやめさせろよな。俺以外に刺されるやつでたらどうするんだよ。繭にでもして封印しとけよ。俺で物証できただろ。幼気な可愛い天使が今度こそ被害にあつてからじゃ遅いからな？

サンデイが俺のところに戻ってきたような気がして、すぐさまどっかにすっ飛んでいってくれたような気がした。助けを呼んでくれたらしい。多分、それで俺は助かったのだと思う。

曖昧なのはその時には、命に別状はなくとも、血の失いすぎで気絶した俺にはもうその先の記憶はなかったからだ。

なぜ、俺がねらわれたのか。それは知りたくもなかったが、再犯はないと上級天使に断言されれば俺は逆らえねえ。

背中には元々翼が燃え尽きた痕跡と、落ちた時に出来た傷があつたがこれで翼のあつた位置に素晴らしくわかりやすい跡が出来上がったことになったが、まあ俺の背中なんて誰も見ねえし。

これで変態は今度こそ外に出れねえし、次の被害者もない。俺の部屋のシーツやマットレスがお釈迦になって、俺がちよつと痛い目にあつたくらいで済んだ。

そういうふうに考えれば、別に大したことは無かつたんだ。そう、言い聞かせる、自分に。

何故だろうか、あいつの前の被害者……白い髪の毛の、小さい天使。俺が知っている相手だった気がする。顔が出てこない、名前も出てこない、ただあの白だけが妙にはつきりと思い出せる。

そいつはその白が好きで、自分の白い髪を子供らしく誇りに思つて、嬉しがっていたんだっけ？ 死んでしまったんだらうか、もう外に出たくもなくて会えないのか、思い出さないその相手に祈りを捧げる。

うーん、俺も天使らしく潔白そうな純白の髪をしていれば少しは自信が持てたかもしれない。金髪に緑の目もいいと思うが、汚れなき白っていうのもいい。

俺なんてこの事件でさらに髪の毛が埃色っていうか……もはや

ダークグレーだな。髪の毛染めた？　つてリツカたんに聞かれてそこから会話ができるかもしれないと思えば特に大したことはねえか！

「僕の天使をものにして何が悪いの」

「強いていうならウォル口村の天使ね」

「人間ごときにくれてやるものか」

「あの子の心は常に天使界ではなく、人間界にあるけどね」

睨みつける翼を拘束された天使。墮天していないのが不思議なくらい悪意に満ち溢れ、そしてそんな自分を疑いもしない天使。

どこかの天使は自分が人間を守り、慈しみ、見送ることこそを至上として行動するらしいけれど、あの子と同じでこいつもどこか普通ではなかった。

天使って、人間とは違うし、寿命も生まれも何もかも違うけれど、そんなに高尚な者じゃないの。

サボるやつもいる、適当なやつもいる、人間のことを軽視する天使は多い、使命について曖昧な事しか考えていないやつも、使命に徹するものも、使命とはまったく関係ないことに情熱を注ぐやつもいる。

あの子が使命に情熱を注ぐとしたらこいつは正反対。なるほど、生まれた時期こそまったく違うけれど、二人を足して割れば普通の天使に中和されるかもしれない。

普通の天使はそれなりに人間のことをどこか軽視して、それなりに守り、それなりに理に従って、そして天使界に住んでいる。地上は嫌いじゃないけれど、決して好きじゃない。危険だと思っているもの。

天から遣わされる私たちには、たまに変な個体がいるといえはいいのかしら。

変な個体。基本的には優秀な個体を指すけれど。逆もいる。悪意に振り切る天使が。もういっそ墮天してしまえば討伐できるのに。自分のことを正しいと思つて、背いていないと思つていたら案外平気なのね。

いくらアーミアスくんが天使で天使に天使なかわいい幼少期の天使で、成長した今も天使で天使に天使すぎる天使な容姿の上に天使行動に振り切つて翼も輪っかも失つてなお、天使であろうとする天使の中の天使でも、自分のためにただそこで微笑んでいるだけの可愛いお人形してくれるなんて思いこむかな、普通。

普通じゃないんだろうけれど。翼は世界樹の力を持つてしても治せなかったのに運命の片割れである自分ならあの背中を切り裂けば内側から翼を取り出せる、とか考えつくのは本当に危険ね。

傷、私じゃ治せなかった。傷が深すぎて、塞ぐことしか出来なかった。いつかのように、傷を塞いだあとの私は青白い彼の頬を見つめて、目覚めるように祈ることしかできなかった。

少し、思うのは、彼がもし、女神から使命を承るために生まれたように天使すぎなかったら、こんな目に遭わなかったんじゃないかって。

彼には、冒瀆のようだけど。

42話 不願

「ああいうのに狙われているって早く言えし」

いやまさか、外見がそれなりに幼かったら全部範囲に入るなんて思わねえから。

「本当に助かりました……」

「さすがに目の前でリューケツ沙汰を放置できるほど冷たくナイシ！
てか天使ってみんなアーミアスみたいな真面目ばかりだと思っ
てたケド？ 案外そうじゃないカンジ？ 揃いも揃って個性強すぎ
ジャン？」

命の恩人であるサンデイに頭は上がらないが、個性に関しては彼女には言われたくねえよ！ てか俺みたいなのペロリストまみれの天使界とかやばいからな。人間界は平和かもしれないねえが天使界のこの荘厳かつどこか物寂しいような独特の静かな雰囲気が消し飛ぶわ！

セントシユタインの守護天使に文句を言おうと探し回っていると見習い天使の中でもさらに小さい天使に怯えられて話しかけることすらできない俺。俺が話しかけるコミュ力すらないんじゃないかと、向こうに思いつきり避けられたってことだからな！

まさかその理由が純粹無垢たちに俺の内面を見透かされてドン引きされたわけじゃなく、返り血ならぬ俺の血が、野蛮な趣味を持ってそうなのやべーやつを演出していたってことには言われるまで気づかなかった。あまりの無神経さに引かれても仕方ねえ気がしてきたわ。

だが勘弁してくれ、さっきのはあまりにも動揺した。あまりにも普通じゃなかった。冷静じゃいられないのも無理はないだろ、流石に！
鎖帷子に着替えて胸元に日記をインして落ち着こうと思う。リツカたんとおの思ひ出が染みる。最高。多分俺の顔だいたい気持ち悪いことになってるな。

引き締めとくか。

もう事件なんて流石にないだろうが、前の装備品なら汚しても壊しても大して問題もねえし。

それから自力で守護天使を探して少しお話したが、あれは理解して

もなんとかはしないタイプのヤツらだった。天使界の未来は暗いかもしれないねえ。何せ世代交代が数百年単位だから改善が人間達にとつては遙かな未来になる。

それじゃ手遅れだろうが。今を生きる人間に対して行動しろってんだよ。

「さっきのセントシユタインの守護天使？　自分より小さいアーミアスに一言も言い返せないのダツサ。あれはGJってカンジ。アーミアス奔走してたし」

「……自分の行動について、俺の被ったことに関して物申した訳ではありません」

「かったいヨネー！」

自分がなぜ生まれたのか胸に手を当てて考えろってだけの話だろうが。痛いのも怖いのも嫌なのはわかるが、それらを人間たちがこうむるほうが最悪だって話だ。簡単なことだ。

まさか、ほかの天使が自分の身の方が人間たちよりも可愛く思っているなんて思っちゃいなかったが。冗談だろ、今ならまだ冗談だと信じるぜ？

だがあっちが普通の認識で、本気で星のオーラを集めていたのも自分たちの安寧が欲しかったからなら……俺の方が普通でないなら、俺は、天使じゃなくても構わないぜ。

ただ、俺は自分の頭がおかしいとは思いたくねえからたまたまあの天使がそういう奴なんだと思うことにしておくが。

さてと、用は済んだし地上に戻るか。

「少々時間を取られてしまいましたね」

「二日くらいは大したことないんじゃない？」

「それならいいのですが」

「てか、向かってる先、逆だケド」

え？

逆って、俺普通に地上に行くための穴に足かけてるだけなんだが。

「飛び降りる気とか？」

……あ。

そういえば俺に翼はないんだった。会うやつすれ違おうやつ、そして例のあいつまで俺が真つ当な天使であるかのように扱うから俺も普通に天使としてスタンダードな装備を持つてるものかと勝手に、な。百年近くの習慣って怖いぜ。またバンジーするところだった。

道理で視線が背中に突き刺さってたわけだ。俺が足を下ろした瞬間にそれも散ったが。

いやこれは、ほんと、心配というか、迷惑かけてすまねえ……。

サンデイも呆れてものがいえないと言わんばかりの顔をしているが、俺はちよつと笑って流すことにした。自分がアホ過ぎて笑うしかねえ。

これ以上エレット様を泣かせたらもう干からびてしまわれる可能性がある。ラフェット様に心労をかける訳にもいかない。師匠の耳に入っても……いやこれはいいわ。ど、ど、どうせ俺のことなんてもう気にしちやいねえだろ。いや俺の方こそ、気にしてねえし。

「おかえりなさいっ！」

「……っ、はい、ただいまもどりましたよ、マティカ」

泣き虫を克服しかけている現職武闘家に思いつきりタツクルをかけられたらアーミアスさんといえど声が詰まりますよ。ベリつと不敬者を引き剥がし、少々疲れた顔のアーミアスさんの私も努めて丁寧におかえりなさいを言いました。

賢者になるという私の選んだ道は例え職業の神がお力を貸してくださるダーマ神殿へ行つたとしても開かれる道ではなく、ほかの賢者の力を借りて修行を積まなければならぬもの。

そう考えていると、私にはだんだんと冷静さが戻ってきてこのような状況なのです。この期に及んでまだどうすればアーミアスさんのお役に立てるかどうかをきちんと図りきれていないガトウーザなど、いけませんね。話し相手になっていたマティカが可哀想なくらい同じ話がループして、いかにアーミアスさんが美しく素晴らしいか、それしか話さないのです。

そんなことは分かっていますから。それを踏まえてどう行動するか、それが大切なのでは？ 燃やしてしまいますか？ いえ、流石に兄のような存在を燃やす賢人はいませんからしませんけど。

そういう訳で、限界を迎えていたマティカがアーミアスさんを見た瞬間に飛びつくのは仕方が無いことだったのです。それが認められるかは別の話ですが。

「ダーマ神殿へは一足先に行ってまいりました。皆さんの準備が出来ましたら出発できますから」

「私たちはいつでも大丈夫です！ ……が、少々顔色が悪いのでは？ 今日はお休みになった方がよろしいのでは？」

「向こうでは一日などあつてないようなもの。私事で余計に時間の流れというものが曖昧になっていました。俺が帰ってから少々日がたっているようですから、これ以上お待たせするわけには」

「そういえばアーミアスさんが帰られてから一週間前ほど経ちますが。しかし私たちにそこまでのお気遣いをしていただく必要はないと思うのですけれど。」

アーミアスさんの言葉に感動し、涙を流さんばかりの兄さん、いえガトウーザが、僅かに残った理性をかき集めてまともな事を進言しました。

「それでは、向こうについてすぐ向こうで宿をとるといのはどうでしょうか。いろいろ目新しいものもあるでしょうし」

「……妙案ですね」

何故か宿と聞いた瞬間に表情を微かに曇らせたアーミアスさん。しかし反対をなさることはなく。

「駄目だよ兄ちゃん、そういうんだったら宿屋はセントシュタインで取らなきゃ」

「何故？」

「リツカの宿屋は最高の宿屋だからだよ！ ねえアーミアスさ」

「ええそうですね！ そうですとも、とても良いことを仰りました、マティカ。あなたの積んだ徳は見習いの身ではありますがしかと聞き届けましたとも。必ずその善行に対して良い報いがあることでしょ

う！」

大輪の花が咲き誇るが如く、素晴らしい笑顔を浮かべたアーミアスさんがマティカに熱烈な抱擁という最高の慈悲に嫉妬したわけではありませんとも。ええ、ありませんとも。

あんなに天国が見えることってあるのでしょうか。室内故に、どこか灰色のアーミアスさんの髪が黒っぽく見えているというのに太陽の光にすかされて輝くのを幻視し、その上白く眩い翼まであるかのようを感じるのです。もちろん、尊い輪も。

ああ天使様の抱擁。ご利益に与りたいとかいう話ではなく、いえ、ありがたい光景を目に出来ただけでも素晴らしいことなのですが。十分に私は幸福であるのですけれど。

あああのかんばせに、笑顔を浮かべるような言葉を私も言いたい。彼にもし、微笑んで頂けるならば、それが最上の幸せ。なぜなら天使様が微笑むということは救いの道が開かれたも同然。

そして何よりも、この自己犠牲の天使様に、少し表情が硬い天使様に、微笑んでいただきたい、なんていう少しのエゴ。そして、あわよくば向けて頂きたいわけです。ええ、私は、そんな人間ですとも。美しいものをこの目で見て、そしてそれを自分に向けられたい。

そうマティカに全力の嫉妬を送っていましたら、宿の主のリツカさんがこちらにいらつしやいました。

すると守護天使をなさっていた時からの馴染みらしいアーミアスさんは、今度こそ彼女を見ただけで素晴らしく美しい笑顔を浮かべましたので、私は静かに敗北したのでございます。

ええ、ええ。天使様のご慈悲を人間がはかるなんてきつといけないことなのですが。

私だって、あの顔を見たら、天使様が誰を一番に想っていらつしやるのかくらいわかります。でも、でも、それでも私は安心しました。彼の目に温かな光こそあれ、欲望に燃え上がるものはありません。あれは熱いものではなく、やわらかなもの。天使様はやはり天使様なのです。私の見る目に、そういう意味では狂いはございません。

天使様はやはり穢れなきもの。天使様は美しく、慈悲深く、尊く。

しかし生命の営みの輪の中にはきつとないのです。だからこそあんなにも美しい。手が届かないものだから美しい。別次元の存在であるからこそ、あんなにも慈悲深い。

私の中の、きつと悪。それが笑います。嫉妬とともに、膨らみます。あんなに彼女は想われているのに、天使様は決して自分のものにしようとしたりしないという確信。そして生きとし生けるものに対しての慈悲深さは、アーミアスさん自身を誰か一人のものにしないという確信も生みます。

アーミアスさんに幻滅したことなんてありません、これからもきつとないでしょう。

そんな日はこないのです。だって彼は天使様！ 私たちの天使様！
ああ……ああ、あの背中に！ 再び翼が宿る日が来ることを願います！

だってそうでしょう、あんなに綺麗な天使様に欠けなんて世界の損失に違いないのです。

43話 信仰心

マテイカはいい子だ。きっと俺の悪い癖である鼻肩癖が出ているがそんなことは今更だろ。

マテイカのお陰でリツカたんを一週間ぶりに存分にペロペロした。リツカたんの成長日記の効力で麻痺していて気づかなかったがリツカたん欠乏症で俺の体は蝕まれ、結構やばかったらしい。もう少し遅ければ俺は手遅れでその辺で野垂れ死にしていた可能性がある。リツカたん欠乏症で。

なにしろリツカたんが普段よりもきらきらして見えたくらいだからな。普段もかわいいし、普段も最高にペロい健気ない子だけだな！ 割増だぜ？ リツカたんが俺の存在を認識して話しかけてくれる、その事実には俺の方が昇天しちまいそうになったレベルだ。

昇天させるのは俺の方なだけだな、リツカたんは俺にとって天使なんだぜ！ 間違いない。

……まあ、リツカたん欠乏症つてのは流石に半分は冗談で。普通に失血がやばかったらしい。腹が減るわ、ふらふらだわで最悪だった。てか俺天使じゃねえか。なのに人間並みに食ってどうするんだと思っただぜ。何も残さないのに。まあ血が足りてなかったんだな。

待てよ、リツカたんの監修している料理を……普段より多く食べられたってことだよな？ どうせこうなるならウォル口村でリツカたんの手料理を味わっていた頃に食べたかったぜ。

「ダーマってどんな感じのところだった？」

「白い柱が立ち並ぶ神殿、と言った外観でしたね。高い階段があったので……ちよつと登るのは大変かもしれませぬ」

「へっちやらだよー」

「ええ、そうでしょう。俺も見習わなければなりませんね」

今回の件でひしひしと感じたが、天使は案外その能力に頼りすぎているんだよな。自然と飛んでいけば大したことはないとか考えそうになっただが、……俺に邪魔な翼はないんだと、理解しきれていないとかマジか？

空を飛ぶことよりも、人間たちと話せる方がよっぽどいいのよ！
「では、行きましょう。一応俺に掴まってくださいね」
「はいー」

で、俺は授かった力というのは……ただでさえ敬虔すぎるくらい神及び天使に対しての、いや、天使に対しての幻想を強化するものだということを失念していた。

そびえ立つダーマ神殿の前で、俺はメルティーとガトウーザに拝まれ、マテイカに純粹無垢なキラキラした目で見られるハメになるのだった。

とりあえずキメラの翼の安価さと手軽さについて詳しく話したかったのだが、マテイカがダーマ神殿に向かって駆け出した方が残念なことになった。

「大神官が不在ですか」

「大神官様がいないならこの組み合わせも納得ですね……」

「どれくらい待ったら帰ってくるのかな」

とはいっても、こんなにたくさんの人々が待っているのです。そんなにすぐに帰ってくるのでしょうか。アーミアスさんもご存知でなかった様子で考え込んでしまわれました。

「知識の上ではダーマ神殿の大神官が理由を公表することもなく休むということはダーマ神へ仕える最高地位の神官としてありえない事だと記憶しています。しかしほかの神官の様子から見るとそのような性格の方ではないようですね」

ええ、不真面目な方が神に仕える神官になるだなんてありえないと、我ながら不真面目な僧侶ではありますがそれくらいは分かりますとも。

「……ひとつ、心当たりがあります。場所を移しましょう。これから旅の目的と、大神官の行方両方に関わりがありますから」

少し考えた素振りののち、アーミアスさんはそうおっしゃると宿屋の方へ向かわれます。

……もしや、もしかすると。ダーマ神殿にて職業を変えたいという私たちの願いを叶えたのちも私たちをアーミアスさんの旅へ連れて行って下さる意思があるという事でしょうか？

ああ、私は魔法使いになることが出来ればそれだけで良いと思っていました。しかし今はそもそも存在しないと思っていた信仰心が燃え上がり、慈悲深い天使様の手助けが多少なりとも出来ているのであれば最上の喜び！

俄然やる気が湧いてきましたとも、もちろんアーミアスさんがいらつしやる時点でやる気もマジックパワーも十分ですとも！

と、浮かれているのが分かったのか、表情一つ変えずにメルティーにせつかくすり切りいっばいあった魔力を少々奪われたのですが。

「アーミアスさん、もし、その、旅の目的が。天使様としてのご使命であるのでしたら私たちの目的よりも優先していただいた方が宜しいのではないでしょうか。兄の口なら塞ぎますが」

「もしそうであったとしても、これまでも危険な旅でありましたのに、俺を助け、共に歩んでくださったのに約束を無碍にすることは決してありませんよ、メルティー」

「そんな、なんて、もったいないお言葉！」

メルティーに喋るなど厳命されるまでもなくアーミアスさんの意向なら従いますけどね！感動に崩れ落ちるかと思いきや、むしろ直立不動になったメルティーは続けて言いました。

「しかし私はもう僧侶になりたいとは思っていないのです。僧侶よりも、私が目指すべき道が見えたのです。ですから、少なくとも、私のことはどうかお気になさらずに！」

「……………え？」

今、なんと？ 幼い時から自分の境遇に涙し、その信仰心をどんな立場でも貫いてきたではありませんか。……いやしかし、天使様の御前にして、力を使っていたたくことの出来る立場。それを考慮すればその方が確かに良いのでしょうか……………か。

ええ、転職すれば経験はリセットされますし、きつとメルティーが見つけた目指すべき道はより素晴らしいものなのでしょうから。

……それであれば、私はかたくなに魔法使いとして大成したいと願っているのが少々、問題なのは？ 今、願いを叶えれば僧侶がいなくなってしまう。アーミアスさんに不都合なのは？

……、……、……。

私が魔法使いになったとして、願いが叶って、夢の通りの力が使えるようになるのは魅力的です。それに魔法使いは無力ではありません。非力な体もつと非力になりますが、圧倒的な魔力は魔物を討ち滅ぼす矛となることでしょう。

ええ、お役に立てないわけではありません。

どちらにせよ、大神官様が不在なのです。結論を出すのはあとでも同じでしょう。

「少々、情報収集がてら聞き込みに行ってきますが……みなさん。どのようなことがあっても、俺のことは考慮しないでほしいのです。俺はあなたがたの理から外れた存在です。本来視認すらできない、そんな存在です。俺の一番の願い、幸せはあなたがたの幸福。であれば、あなたがたがわがままであったほうが、嬉しいのです」

考えていたのをご覧になっていたのか、アーミアスさんは私の方を見て、そう仰りました。

ああ。心は当然、それで決まります。

どんな存在よりも美しく、麗しく、気高く。優しく、慈悲深く、汚れなき存在。使命を遂行するお姿はまさに神々しいとしか言えません。私には想像のつかないほどの年月を、きつとその身を削って人間へ向けてくださる天使様。

そのお役に立てるように進むことこそがお導きなのではないでしょうか。

ええ、それがただの自己満足にすぎなかったとしても、ただ、アーミアスさんは微笑んで許して下さいとまで感じます。この身、未だ未熟ではありますが。それでもお仕えしたいと心より感じたのです。

彼の歩みを止めることはもちろん致しません。私よりも小さいはずの、広い背中を見送って、私はより良いプランを考えるためにベツドに飛び込もうとして、メルティに散々、魔力を吸われることに

なつたのです。

聞けばメルティイーは攻守を意識して賢者になりたいとか。元氣いっぱいバトルマスターへの夢を語ったマティカは肉弾戦をさらに特化させるつもりでしょう。

……これ、本当に転職しないのが最適解なのですね。メルティイーが賢者になるのには時間がかかりそうですが。

ああ。それならば従いましょう。導き出した相応しい道へ。しかしながら私には信仰心は……。

いえ、あるではありませんか。神へではなく、アーミアスさんへの溢れる想いが。とりあえず今日のお祈りは神へすることにいたしますが。

アーミアスさんをこの世に遣わせたことへの感謝を。

しかしながら神は、神は、助けてはくださらない。それを思い知った僧侶に先はあるのでしょうか。

44話 変貌

「そういうえば、アーミアスさんは転職をなさるおつもりなのですか？」
「ええ、旅芸人は攻守のバランスに優れています。旅の先はこれから長くなりそうです。なので少しでも耐久力がある方がいいので……戦士になろうと思っています」

「戦士……」

ゆくゆくは俺はパラディンになりたい。博愛はあまりガラじやねえが。俺の得意技はどうやら鼻肩らしい。聖騎士とか……かつこいい、いや、守れるだろ。身をもって守るなんてモテたり……いやモテるのではないか……モテる必要もないか……。ちよつと、ちよつとだけリツカたんにかつこよく思われたい気持ちがあるのは事実だ。

分かってたがもともと俺にそこまでの戦闘能力はないし、ひよつこ故に天使らしい特殊能力もない。上級天使なら天の雷を操れるらしいが、俺には静電気すら無理だしな。

職業の能力はダーマの神が与えたものだから、神の下にある天使にも有効らしい。ならば存分にその力をお借りしたい。

「ご使命のために選ばれるのですか？」

「大きく見ればそうですね」

「なんとご立派な……」

「いいえ、私情と使命が偶然一致しているだけですよ」

結構天使って奴は保身しか考えてないやつも多いしな。だが俺みたいに地上にずっと留まっていたい上に人間になれたら、と思うようなやつは間違いなく少ないのも確かだ。

で、俺はリツカたんのほのぼのハッピーライフをなんとしてでも守りたい。つまり私情。それを達成するためには人間たちには平穩に過ごしてもらうことが一番だ。だろ？

リツカたんが俺を認識してくれるなんていう、今までの人間たちにはありえない奇跡が起きている以上、俺もそれに報いなきやな。

しかし俺たち天使は上の命令には逆らえねえ。何としてでも、俺は地上で動けるように今回の女神の果実回収は成功させて実績を作ら

ねえとな。俺は守護天使だし、早々天使界に引きこもることはなさそうだが。

下手に失敗して某天使のように軟禁処分とか俺は嫌だからな。

「あつ……待ってください」

「……何か？」

塔の前で「お辞儀」をしようとすりや、ガトウーザに縋るように止められた。なんだって言うんだ。

「私に、やらせて、くださいませんか！」

「このメルティーでも構いませんよ！」

「はあ」

そんなに塔に頭下げたいわけなのか。人間、つか子供ってそういうところあるよな。微笑ましい。

「いえ、私に！」

「兄さん大人気ないですよ！」

「おれは誰でもいいと思うけど……」

一番年下のかわいい素直な子に言われてちや世話ねえな。

結局、私は兄さんに負けました。子どもっぽい小競り合いにアーミアさんは疑問の様子。ですが天使様が頭を下げるのはしなくてもよいなら、しない方がいいのではという勝手な考えの結果ですから解決の方向でなくても良いでしょう。

ええ、アーミアさんにそんな気持ちがないのでエゴですとも！

お話を伺っているだけでも立場が上の方がいらつしやる様子ですがそんなこと関係はありません。実際、地上で私たちを救ってくださいる天使様と見たこともない天使様。どちらを敬うかは、私が判断することです。

礼儀正しくないと開かない扉、だなんて魔物でも開けられる適当なセキュリティ、罾かもしれないんですよ！ 頭を下げる以外にもアーミアさんにはして欲しくないことです、罾だったら！ そう思われた瞬間にアーミアさんは絶対に譲って下さらないような気がした

のでとつと頭を下げた兄さんはある意味正しかったですが。

ああ、微笑ましい子供を見るような慈愛に満ちた穏やかな表情に心が洗われるようです……もう子供だなんて歳じやないですが、子供でいいです……。

「昔はこちらで転職の儀式を行っていたそうですが……こうも魔物の巣窟となっていては、聖なる息吹も形無しですね……急ぎましょう。大神官が危険な目に遭っているかもしれないかもしれません」
「うん！」

私たちを気遣ってくださいながらも、アーミアスさんは駆け出ししました。ええ、気遣いを感じます。振り返ってもくださいますし、そこまで速度もあげられません。

……やっぱり子供扱いなんでしょうか。人よりも永く生きる天使様。きつと老人ですら赤子と同じような心境なのでしょうね。そうならば私のような新参者は赤子ですか……。

先頭に立って勇ましく剣を振るわれる姿には見蕩れますが、見蕩れてばかりもいられません。私も、賢者になるまでの修行としてより素晴らしい魔法使いとして精進しなくては！

ええ、ゆくゆくはアーミアスさんがその素晴らしく気高い志をもって剣を構えた瞬間にはすべてを燃やし尽くせるように！ アーミアスさんが剣を振るうその美しき姿を見ることが叶わなくなる、その世界の損失を受けても彼の身の安全には叶いませんとも。

気合を入れて燃やしていましたら、兄さんは消費を抑えろと言います。確かに、この先大神官様が危険な目にも遭われていましたら、たくさん燃やさないといけませんね。戦闘の後、毎回剣をおさめて魔物の魂が今度は我らと歩めるように祈りをささげる慈悲深きアーミアス様を見習って私も祈りを込めて、杖で攻撃をすることにいたしましょう。

ええ、神はいつも私たちを見守ってくださいますから。祈りを欠かしてはなりません。兄さんのように信仰を捨ててはなりません。しかし、兄さんに信仰を持たせるのもまた困難でしょうからそちらこそ神の御心に任せましょう。

塔に差し込む陽光が、アーミアスさんの髪を銀色の光に変えるのをうっとり見つめて、私はそちらに向かいます。

その御髪を、そしてそのお顔ばかり見ていたら、階段から滑り落ちそうになりましたが、その救いのために差し伸べる手を私のために伸ばされて、安心させるように微笑まれるものですから、私は一層天使様への信仰心を深めるのです。ねーちゃんどんくさいな、だなんてデリカシーのないことを言う少年に魔力がごく少ないことがとても悔やまれることでしたが。

いえ、いえ、いけません。無垢なるものを愛してこそではありませんか。どうやらお優しいアーミアスさんはマティカ少年を無垢の塊のように思われているようですが。実際のところ年相応に無垢で、強かです。少々気が弱いだけ。ええ、ちよつと自分の意に沿わないからといっていちいち目くじらを立ててはいけませんね。

私たちは、それからほどなくして塔の一番上で神聖な空気を放つ部屋へ踏み込みました。ここで転職の儀式を行っていたのでしよう。流石に塔に巢食う魔物たちもここにはいません。静かに先頭を行くアーミアスさんはその部屋の中央に背を向けて立っているご老人、もとい大神官様に近づき、いえ、足を止められました。

前、というよりもアーミアスさんしか見ていない兄さんも止まりません。足元しか見ていなかった少年はぶつかってしまったようですがぶつかったのは子供には優しい兄さんなので大丈夫でしょう。

「ダーマより来た旅の者です。貴殿、ダーマ大神官とお見受けいたしますが」

アーミアスさんは、何かに気づかれたようなご様子で、ゆつくりと剣に手をかけました。声は困惑しているようで、清浄な空気の部屋の中、同じく清浄な魔力を持つ大神官様に、どうして警戒されるのでしょうか？ しかし、ぶつぶつと独り言を言っていた大神官様のお姿に異変が生じると私たちはみな武器を構えました。

なにしろ……大神官様はもとの人の好きそうなご老人の姿から、魔物と形容するしかない邪悪な姿へ変貌したのですから。

「……あなたが口にしたという果実は、人の身では耐えきれないもの

です。お覚悟を！」

邪悪そのものの「ジャダーマ」の発言をお聞きになつて戸惑いを捨てたアーミアスさんがいの一歩に狙われた私をかばつて、剣でその魔物の一撃を受け止め……戦闘は始まったのです。

人が、魔物になる。それをこの目で目撃して……私は、アーミアスさんの使命とその重みにやつと気づき……おそれと同時にそれを正す手伝いができることに震え、歓喜したのです。

ええ、神がもし見とがめられるならば、神罰も致し方ないかもしれませんが。しかしどうやら信じる神は寛容であらせられた。もしかしたら私が僧侶ではないので想いが届いていないのかもしれませんが、すくなくとも私は思い切り喜んで、忌み嫌っていたはずの魔法の力を存分に行使したのです。

45話 叱

人間は弱いのではないが、我が身に比べると脆弱である……つてのは、後半だけほかの天使に同意される。俺はこれからも前半も主張していきたいが。

とはいえ体の頑丈さは正直そこまで変わらないと思うが。

ただ、その寿命の短さが、総じて痛みなどの苦痛に慣れる前に死ぬ原因となつてあまり耐えられないんじゃないかねえかつて俺は勝手に思つてる。

だからよ。

人は強いだろ。天使も案外強いぞ。しぶとさにかけてはそこまでやすやすと死ねる体じゃない。だから、庇つたからつてそこまで危険じゃない。一度や二度はな。

気を遣うんじゃない。別に死にやしない。

「アーミアスさん！」

「俺はいいですから、前を見て！」

こんな重い攻撃、誰が食らつても危険すぎる。それならまだ俺が受けた方がマシつてわけだ。一撃がひどく重いが、比較的打たれ弱い職業の三人に当たると思えば百年は後悔するに違いねえ。天使として庇つてるわけじゃねえ、単にもうこれは年上の個人として幼き隣人には受けさせるわけにはいかねえ。

優しそうなおじいさんの姿はどこへ消えたのか、女神の果実の力によつて変貌した大神官は凶悪な攻撃を存分にふるいやがる。表情からも善良さはなりを潜め、完全に欲望にのまれている。誰しも……人間も、魔物も、天使も持つであろう程度の傲慢な欲望に。だがそれは、人はきつと願いたいというのだろう。その程度の、想いにその人そのものがのまれていやがる。

危険だ、想定していたよりもはるかに。女神の果実は七つあったという。つまり蓄えられたうちの七分の一の力が大神官を暴走させた。俺たちは何千年、いや何万年？星のオーラを集めてきただろう。俺が遣わされる前に、どれだけの星のオーラが集められただろう？

俺は長い天使の歴史の最大の功労者である、ハゲ師匠の師匠のエルギオスとかいう天使がどんなペースで星のオーラを集めたのかわからない。俺は、幼い天使であり、故に浅はかで、理解が及ばない。

わからない、もう何もわからない、ただ、途方でもない星のオーラが集まって……人々の、涙が出そうになるくらい尊い日々を、影から守護する天使が、集めたかけらが、こんな使い方をされるなんて神も想定していないだろうし、もっと、そうだ、誰も苦しまない方法で俺たちを救ってくださるものだったはずだ。

俺は星のオーラによる、救済を、そこまで快く思っちゃいない。俺たちが神のもとへゆき、救済を受けたあと、守護天使を突然預かり知らぬところで失った人間たちが、不慮の事故で不幸になったら？

俺はナツミさんの系譜がどんなことになっているのか気になって仕方なくなり、いまに流れ星になり、きつとウォル口に落下するだろう。リツカさんが恋しくて、恋しくて、人間になりたい俺は選べるものならそんな方法で天使をやめたくねえ。あ？ リツカさんは今、セントシユタイン在住？ いや、天使界より空の星は上じゃねえか。滝つぼダイブじゃなきや流石に死ねるからな。

大神官の一撃を割り込んで受ける。盾を持つ手はどうに痺れていて感覚も曖昧だ。目の前で鮮血を散らしながら攻防を続ける俺を見るだけで精神衛生上よろしくねえだろうが、そうも言っていられねえし。

一撃。俺は盾で凌ぎきれない。視界が点滅する。だが立っている。

一撃。俺は凌ぐ。だが腕をやられたような気がする。まだ腕が上がる。やれる。

豪速球の魔法が後ろから「ジャダーマ」を襲う。俺の影から飛び出してきたマテイカが頭を狙う。確実に削っている。だが削られてもいる。魔力の残量的には明らかにこちらの方が分が悪いのははつきりしてやがる。

だがまだ、遅くはねえ。まだのみこまれきってはいない。まだ救える。まだ間に合う。目の前で変貌したばかりの人間なら、何とか叩きのめしてどうにか女神の果実を奪い取ればまだ戻れる。そう俺は信

じる。

幼き人間。お前は何も悪いことをしちやいない。何も知らずに、無邪気に美味しそうな果物にかぶりついただけだ。だから罪はない。たまたまそれは、人間に、いや、ほとんど全ての生物にとって、過ぎたるものであり、過ぎたるものはもはや毒であるというだけだ。

誤飲したなら下を向かせて背中を思いっきり叩いてやらなきゃな。天使として隠れているなら推奨されないが、俺は姿が見えている天使だしな。

ああナツミたん、ナツミたんの子どもものげつぶを助けたあの一撃！
もう一回俺にあの一撃をやらせてくれ！

「吐き出しなさいー」

俺はジャダーマを子どもだと思いつむ。本当はじいさんだが、そう思えば背中が心配になってくる。だが幸い、体は頑強そうだ。

バシン、と背中を叩いた。剣の一撃すら効いているようには思えないのに、平手打ちが何になるだろうか。だがみんながやってくれた。十分に動きが鈍くなっている。もう一発。

「ぺっしなさいー！」

メルティーの炎がジャダーマを焼く。とうとう膝をついたドジっ子を俯かせて、俺は背中を叩く。何度も見てきた誰かの母親の動きを真似して、もちろん幼き者には愛をこめて。

ジャダーマの体から邪悪な力が抜けていく。一際力強く背中を叩くと、すっかり姿は元に戻っていた上に、地面には女神の果実が鎮座していた。

メルティーはぺっしなさい！ を復唱すると何故か崩れ落ちた。

「……………」

「大丈夫ですか？」

俺は女神の果実を後回しにして、ご老人をいたわる。血塗れの手は行儀が悪いが服で拭いて、手を差し出す。いい歳だから真似して教育上悪いなんてことはないだろ。

「ああ……なにかあったのかね。ただ私が、私でないものになり、世界を滅ぼしてしまおうとしていたことが臆気ながら思い出され

る……」

「いえ、誤飲事故です」

「誤飲？」

「はい。それだけですよ。あなたはなにも邪悪ではありません。何も落ち度はないのですよ。」

さて、神殿までお供しましょう」

俺は大神官が肩で息をする仲間たちを訝しげに見たあいだにさつと女神の果実を回収した。甘い匂いが鼻をくすぐる。これがあれば願いが叶う、というわけではなさそうだ。これは小さな隣人にも、幼い俺にも、毒に過ぎない過ぎたるもの。

さつさと残りも集めてオムイ様に渡した方が良さそうだ。

他でもこんな騒ぎになつてなきやいいが……。

「アーミアスさん、その、回復させてください」

「はい、もちろんです。ありがとうございます、ガトウーザ」

「いえ」

リレミトを唱える。途端に周囲は石と水の匂いから草と土の匂いに変わり、石と水だけの方が俺に親しみ深いはずだが、やっぱり俺は人間と魔物たちが闊歩するこっちの方が好きだとしみじみ思う。

「アーミアスさん！ これで転職、できるようになる？」

「ええ、そうですよね？」

「うむ。たくさんの人々を待たせてしまったが、職務はすぐにでも再開することになるろう」

「わーい！ ありがとうおじいちゃん！ おれ、バトルマスターになりたいんだ、もつと、もつと、強くなつて、おれが全部倒すんだ、先に！ したらきつと前に進める！」

俺の怪我を気にして言ってくれているんだろうか。なんていい子なんだ。嫉妬を隠そうともしない兄妹は少しは無邪気さを身につけてくれた方がわかりやすく可愛い気がするぜ。余計なお世話か。

「バトルマスターになるためには、少々試練を受ける必要がある。しかしその熱意ならばきつと乗り切ることが出来るはず。精進なされよ」

明るい笑顔のまま領いたマティカ。俺は人間のその、まばゆい生命の光を見ていると、こつちが幸せにさせてもらっているに違いないと心の中で頷いていた。

神殿に向かう中にも魔物たちは懲りずに襲ってくる。俺は神殿の前ですら元気よく突撃して来たスライムナイトを撃退したその手で弔う。

ああ願わくば、すべての生命が同じ道を歩めますように。旅芸人が僧侶より祈りを捧げているのは目立つのか、大神官のじいさんは少し考え込んでいるようだった。もちろんガトウーザが神に対してはできた坊主ではないだけだろう。

天使には敬虔がすぎる。加減を考えろ、リアリストめ。神が降臨される日があれば、きつと俺はその手足となる以外のことを考えられなくなるくらい弱い天使なんだぜ？

46話 鮮血

天使様の血も赤い。人間の血ももちろん赤い。おれはそれを知ってしまっているから、どうしたらそれを見ないようになるか、一生懸命考える。あれを見るたび、おれは怖くて、怖くて、泣きそうになるから。

おれはセントシユタインで一番泣き虫だと、ずっとずっと、言われしてきた。泣き虫で、弱虫で、ひとりぼっちで、言い返したつて涙がぼろぼろ落ちていたくらいだから、きつとすつごく泣き虫だった。でも弱虫はさ！ 多分人並みに弱虫だっただけなんだ。泣き虫は、悔しい時だけだった。おれがおにーさん……アーミアスさんと旅に出たから知ったこと。

おれは、強くなつて、泣き虫が出てこないような人になりたい。だからおれを泣き虫だつて言わない仲間たちが、血を流すところは見たくない。

メルティーはつんとした人だ。僧侶になりたかつたらしいけれど、最近はどうでもないのかな。教会の、おれにご飯をくれたシスターみたいな人で、厳しい人だ。厳しいけど、自分にも厳しくて、そして怖がりな人だ。特別優しい人つてわけじゃないけれど、少なくともおれのことを犬っころだと思つているシスターよりは優しい。想いが強くて、おれがあんなふうならおれは泣き虫じゃなかつたと思う。

アーミアスさんは天使様だから、「敬虔」つていう、メルティーはすごく張り切つていて、ちよつと空回りする。落ち着いた人なのにアーミアスさんの前ではあわてんぼうになつちやつて、失敗しちゃうごとにうつむいて、唇をぐつとかむ。アーミアスさんが気づいたらいけないと思つているらしくて、彼にはすごく隠しているけど、いつも戦う時以外は後ろから追いかけているおれは、知っている。

メルティーは、ぐずだ泣き虫だと言われ続けて、のけ者にされていたから、祈りの言葉も知らなかつたおれに、祈りの言葉を教えてくれたひとだ。手を握つて、祈りなさいと静かな声で言つてくれるのが好きだ。おれは祈り方を教えてもらつてから、みんなの次のご飯が美味

しいように祈ってる。それから、おにーさんについて、目をキラキラさせて話しているのが好きだ。いつもそればっかりなんだよ。

でもメルティーはそんなに丈夫じゃないから、戦っていて、血を流していたら、きつとおれは泣き出してしまう。おれはメルティーがけがをしたなって思ったら、泣かないように、泣いて力が出ないなんてないように、前に飛び出して、後ろを振り向かないように、戦うことにしている。

ガトウーザは心配ができない人だ。ほかの人を見れない人だ。その上自分のことも見れない人なんだ。たぶんおれと同じで、教えてもらえなかった人だ。丁寧で、器用で、きつと大きな家の人なんだろうに、お金持ちの息子も教えてもらえないことがあるんだとおれは初めて知った。まっすぐ前しか見れないんだ。何かを信じたらほかを全部捨てちゃうんだ。

自分を救ってくれる人が目の前に現れて、夢中になってしまったんだ。綺麗な、綺麗な、優しい天使様に夢中になって、ほかの何も見えなくなつて、注意散漫で、よくけがをするひとなんだ。でもそのけがにも言われるまで気づかなくて、おれはいつもけがしてるよって囁く。そしたらありがとうって言うってくれるけど、ガトウーザの心はおれの方は見ない。

きつと囚われちゃったんだと思う。ご飯をくれなくなつたシスターが男の人とどっかに行っちゃった時みたいに。シスターがどっかに行っちゃったあと、神父様にご飯をくれて、シスターがおれのママだつたつて教えてくれたけど、ママはおれのところには帰ってきてくれなかった。

シスターはあの男の人に囚われて、自分のこともおれのことも見れなくなつて、それっきりだ。そのあとおれは教会から追い出されたし、シスターがどうなつたかなんて、分からないから、おれの中ではまだ囚われてるまま。

アーミアスさんにその気はなくても、あの男の人がそのつもりじゃなかったとしても、囚われた人は夢中になつたつきり。ガトウーザは天使様に夢中になつて、全部差し出せる人で、妹のことも、考えられ

なくなつて、そればかりになつて、もう自分のことだつて、分らないんだ。

つまり、年上だけど、年下みたいな人なんだ。おれは、ずっとだれかの弟だった。可愛がられたりはしない。からかつて、弱くて、泣き虫の弟。きつとガトウーザもそう思つてる。でも、あんな夢を見ているような、子どもみたいなのが傷ついたら、おれは初めて出来た弟がけがしたつて思うから、きつと心がぎゅつとして痛くなつて、泣きそうになるから、振り返らないようにしている。

戦いが始まつたら、おれは、一番後ろから抜け出してアーミアスさんの後ろにいるんだ。そうしたら、泣かずに済むんだ。普段、二人はおれに興味がなくて、からかつたりしないから悔しくつて泣くこともないんだ。

「マテイカはいい子ですね。本当に、二人も見習つてくれたらいいのに」

「アーミアスさん？」

「……二人ももちろん、いい子ですよ。内緒ですからね」

おれをいい子だと言つて、きらきらした、星空みたいな瞳がにっこり笑つてくれる。黒くて、星がいっぱい、夜みたいな、みんなが大好きな目で。

アーミアスさんは天使様だ。だから、メルティは、見た目よりもアーミアスさんはずっと年上で、おれたちのことはきつと赤ん坊みたくに見えてるつて言つてた。お墓の中の人よりも歳上なんだつて、言つてた。

赤ん坊はなにもできない。だからおれは路地で泣いてる赤ん坊を見つけたら、拾つて教会に持つていく。おれはそのまま追い出されて、赤ん坊は中に連れていかれる。おれは何も出来ないけど、大人ならなにかできるらしい。

なら、おれたちは赤ん坊じゃない。アーミアスさんは言うじゃないか、頼りにしてるつて。おれたちに。力を貸してくれてありがとうつて。赤ん坊にそんなことは言わない。

アーミアスさんも、けがをする。二人と比べられないくらいしょつ

ちゆうけがをする。飛び出しすぎたおれを庇って、避けきれなかったメルティーを守って、夢心地のガトウーザを救う。その度に赤い血が飛び散って、地面に流れて、綺麗な綺麗な天使様は赤くなる。

女の人みたいに白い肌で、天使様の像よりもずっと綺麗な本物の天使様。おれは守られるたびに、もつとおれが強かったらけがするまえに戦いが終わったかなって思うんだ。

おれは武闘家だ。ちよつと間違ったら盗賊になつてたと思う。でも、武闘家なら強くて、盗賊なら器用になるって聞いたから武闘家なんだ。強かったら泣く前に全部終わるじゃないか。泣き虫には向いてないって言われたけれど、今、ちゃんと、戦えている、はず。

おれはアーミアスさんがけがをしても泣かない。泣いていたら戦えない。泣くよりも、あの綺麗な赤が飛び散るさまを見て、もつともつと強くならなきゃなって思うんだ。魔物を殺して、アーミアスさんが祈って、ガトウーザが傷を治すと、おれはやつと正気に戻る。

天使様、天使様、そう二人は言つて、慕つてる。慕っているのにおれは天使様に抱いちゃいけない気持ちを抱いてる。

おれは、多分、あの綺麗な綺麗な赤にうっとりして、あの夜空の黒が大好きで、翼のない背を追いかけていると、なんだか全部素敵だから、少しも欠けちゃいけないって思う。なのに、飛び散る血飛沫に見とれて、一生懸命におれたちを守る姿を見ているのが好きで、そうだ、欠けているのが綺麗だなって思う。

朝早く、陽の光の下のアーミアスさんが髪の毛を銀色に光らせて歩いている時、頭に輪っかがないからこんな綺麗なんだ。夜、街頭に照らされてる時、背中になんにも輝くものがないから、あんなにみんなが見とれるんだ。

別け隔てがないわけじゃないし、アーミアスさんは天使様だけど、神様じゃないから、息をして、一緒にご飯を食べて、たまにちよつと笑う。じつとあの天使様を見ていると、「悪い人」に対してはいたずらっ子でも見てるような顔をしてるし、天使様だと言われてメルティーやガトウーザみたいの人に会ったとしたら多分ちよつと顔色が青くなっている。

よく見ないと、ただただ綺麗な天使様。でもよく見たら、あああんなに生きてる一人の天使様！

おれは、守りたいあの人が一番綺麗なのは宿屋の女の子と笑っている時だから、アーミアスさんですら何かに囚われてしまうんだなあって、分かったんだ。

そしてやっぱり天使様だから、おれの知らないことを知っている。おれをとりあえず戦士にして、おれに「ドラゴン斬り」を教えてください。なんでも、テンションを溜めて、スーパーハイテンションになってからドラゴン斬りでスライムを五匹倒せばいいらしい。

なんでそんなことするの？って聞いたら、忍耐力を試すためらしい。初めて持った剣を構えて、スライムを見据えて、おれは待つのがそんなに好きじゃないからバトルマスターになれたら全部まとめて吹っ飛ばそうと思った。

でも根気強くやれたなら、あの優しい指で頭を撫でてくれるから、ちよつと頑張ろうかな。心底可愛がって、いい子って言ってくれるのは、幸せになれる。

もつと手っ取り早く強くなれたらいいのに。あの果実に頼ったら、化け物になっちゃうから良くないけど、果物を食べるだけで強くなれたらいいのに。

でもちよつと幸せなことに、おれがスライムと格闘し終わったあと、ずつとラリホーを唱えて逃げないようにしてくれていたガトウーザがアーミアスさんの真似をしておれの頭を撫でてくれたのだけど、なんとなく、ちよつとだけ、おれのことも見えているような気がした。

見事バトルマスターへの道が開かれた少年を連れて、あの旅人はやってくる。灰色の髪の少年は、女神像さながらに巡礼者に拝まれては困った顔をする。魔法戦士の青年に随分長いこと勧誘されては断り、老人の拝む姿を制して。

「大神官さま！ おれをバトルマスターにしてください！」

「もちろんだとも。ところで、そちらの方は転職はよろしいのか？」

騎士然と剣を帯びていても、似合わぬことに彼は旅芸人だった。似合わぬ、とダーマの大神官らしからぬことを考えたが、だからといってどんな職業が似合うのかというと少し困ってしまう。

「俺ですか。そうですね、ダーマにパラティンの道を開いてくださる方はいないようですから、それならば戦士として修行を積んだ方が今後のためになりそうですね。やはり本職は違いますから」

「本職とは？」

「自己流の『庇う』ではやはり足りませんよ」

灰髪の少年は、まだ子どもから抜け出したばかりの年齢に見えた。しかし、よくよく目を凝らせば、どうして少年に見えたのだろうか、不思議に思える。

彼の目には不思議な雰囲気があった。静かで、全てを慈しむ目だ。人間離れた容姿と、それを合わせて考えれば、ああなるほど彼は人間ではなく、天使様であると納得がいく。

であるからこそ、あの黄金の果実の危険さを知っていたのだ。

……それにしてもなぜ旅芸人を選んだのだろうか。

「ではマティカよ。バトルマスターの気持ちになつて祈りなさい。アーミアスよ、戦士の気持ちになつて祈りなさい」

ダーマの神からの祝福を受け、光に包まれる姿に、なるほど光ごとき翼を幻視しながら地上に遣わされた翼なき天使様の行く末を祈ることにした。

どうにも危ういものを感じながら。相容れない魔物にあればどこまで祈りを捧げる優しすぎる天使様であるのだから。

ツオ編

47話 墮落浜

「さて今後の方針ですが」

「はい！」

「とりあえず南下しましょう。ツオという漁村があるようですから、船を出してもらえるか聞いて、別の大陸へ向かう予定です」

「ツオでは船、出してたはずです」

メルテイーは勤勉だな。

「良かったです。ではその方針でいきましょう」

女神の果実がどこに落下したかわからない以上、しらみ潰しに探すしかないだろう。ということできあたりばったりなわけだが、ゆっくりしているわけにもいかねえ。放置しているあいだに街一つ吹き飛びかねん。

少なくとも人間の一人や二人はあつという間に殺せるエネルギーがある。ダーマの大神官は救えたが、うっかり食ったなら、吐き出させても命の危険があつてもおかしくねえだろ。

なので俺は泣く泣くリツカたんのところに帰らずにダーマで一夜過ごしたからリツカたんチャージが足りねえ。リツカたんの行き届いたベッドじゃなかったからタダ宿だったのになんとなく体の節々が痛てえ。

変な夢を見たからかもしれねえが、うちのパーティのレベル15以上の魔法使いは妖精の依頼を受ける気がないらしいからもうどうでもいい。悪いが天使の理的にも先約が絶対だ。

というかりツカたんの笑顔をペろペろしていいのでそのへんで行き倒れる危険すらあるから急がねえと。リツカたんの笑顔は最強に可愛いからな、それをチャージしてないんだぜ？ もし行き倒れたときはセントシュタインまで運んでくれりや自動で蘇生するからよろしくな！リツカたんを覗いて全回復してくるからな！

リツカたんの写真すら持ってねえ俺はそろそろリツカたん含む

ウォル口の住人から浴びせるように持たされた薬草でもペロペロするしかねえのかもしれない。とりあえず俺は決めた。次の女神の果实を見つけたら何がなんでもリツカたんをペロペロしに帰るってな。

リツカたん！ あぁリツカたん！ 俺のオアシス！ 俺の女神！ 神は助けてくれねえけどリツカたんは存在するだけでもうかわいい。ありがとうリツカたん、元気に育ってくれてありがとう！

今は自分の日記を読み返してリツカたんの可愛らしさについて思い返し、再認識することだなとか正気を保っている。リツカたんなら俺に「今日もお疲れ様！」とか「頑張ってるね！」とか言ってくれはすだろ、俺はそれを信じている。だから頑張る。

リツカたんが今日も元気に頑張ってると思うと、俺が情けないわけにはいかねえよな。リツカたんのサイコーな宿を更にパーフェクトにするために宿の周りを掃除して回ってるし、リツカたんのおじいさんが元気が確かめてえし、ニードがどうしてるかも気になるが、俺は俺の務めを果たさなきゃならねえ。ままならねえ。分身してえ。

とりあえず……記憶の中のリツカたんペロペロ！ リツカたん可愛い！ リツカたん真面目で健気で最高に勤勉！ あんな可愛くてサイコーに頑張ってる子、俺がなんとしてでもひっそりこっそりサポートして幸せになってもらうしかねえんだ！

しかも守護天使の翼がもげても輪が飛んでも信仰心が揺るがない敬虔さ！ 守護天使が俺のような天使のイメージに反するやつでもあの笑顔が曇らない別け隔てのなきー！ 慈愛の女神か！ プリティーの女神なのか！

最高！ ペロペロ！ リツカたん大好き！ ペロペロ！ かわいい！

あのおかつぱを包むバンダナになりてえ。バンダナだとリツカたんの頭しか守れねえからやつぱり守護天使でよかった。せめて師匠のような男前な顔をして、あんなムキムキ天使なら今頃キヤー！ 素敵！ くらいは言われてたんだらうか。キヤー！ 素敵！ ……言われてみてえな。

チツ、顔の格差。

せめて髪の毛が金髪で目が青い典型的な天使ならそれはそれでワ
ンチャンあつたかもしれないねえ。俺みたいに羽根があつても浮いて、無
くても人間の中で浮くようなやつは一番中途半端がいけねえ。だと
いうのにオートバレはあるんだからこの世は理不尽だよな。もう押
まれるのは勘弁だ。

だがリツカたんは優しいから俺の顔がどうであれ俺にも優しいん
だぜ。ペロいぜ。嬉しいぜ。なにがあつても守りたいぜ。ああ俺が
守護天使でよかった。天使界から一羽ばたきも出ない役職じゃなく
てよかった。リツカたんペロ！ ペロペロ！ ……やべえこれは無
限ループするわ。

そろそろ脳内も少し真面目になるか。

バトルマスターなりたてのマテイカ、戦士なりたての俺。装甲が脆
くてさすがに今誰かを庇ったらぶっ飛んじまいそうだ。だがここぞ
とばかりに魔物を焼き尽くすメルティイーが、ぶっ飛ぶ寸前にすっかり
回復させてくれるガトウーザが頼もしい。俺が剣を抜いた頃には終
わつてる時もある。そういうときは全自動祈りマシーンみたいにな
つてるぜ。

だから経験というものが溜まっていく。見る間にレベルが上がつ
ていくのを感じる。戦士というのは頑強な職業だ。ホイミは使える
いし、魔力も低いが力や体力は旅芸人と比べ物にならないほど高くな
る。すぐに元の戦法に戻れることだろう。剣も盾も前のままだ。羽
飾りバンドを大手を振って装備できないのもいい。

対してマテイカは剣、オノ、ハンマーという新しい武器の選択肢に
悩んだらしいが剣を選んだ。なんでも、俺に剣を教わつたのが嬉し
かったとか。あの程度の握り方の手ほどきぐらいで教えたと言われ
ても、教えたにも入らないと思うんだが、まあいい。得物を揃えれば
いざという時も使い回しができる。

ただ、素早かった身のこなしがすっかり失われているのが気になる
が、打たれ弱かったのがマシになるだろうからなんとかなるだろう。
俺ともしばらく修行を今まで以上にやろうな。

さて、ツオは船を出しているか。メルティイーの知識を疑っているわ

けじゃねえが、海の調子とか俺にわからねえし。時化てるなら無理、とかぐらいの知識はあるからな。海はそこそこ穏やかに見えるし、大丈夫だとは思うが。

……ツオの民に何もなければいいがな。

このままじゃダメ。村の人はちつとも漁に出ないし、村長さまはそれでいいと思ってるのかな。

あたしはこの村が好き。一生懸命漁をして、魚を食べる時の笑顔。漁のあと、女たちで網を解いて干して、男たちは疲れを癒しながら過ごす昼下がりに。

でも、もうそれはないの。お父さんが死んじやってから、あたしにはぬしさまを呼ぶ力ができた。それのお陰で飢えることはないし、寂しいけれど、一人でも生きていける。でも、こうなってしまうくらいなら、こんな力、ない方が良かったんじゃないかな。

もうここは大好きだったツオじゃない。でも、まだ、大丈夫かも。トトがいてくれるから。トトは、まだ、欲に目が眩んでいないから。

このままじゃダメなの。どうしたらいいのだろう。

今日も、ぬしさまに祈る。ぬしさまが現れて、魚が浜に打ち上げられる。村人はそれに群がって、後でたぶんいくらか私の分を持ってきてくれる。そして明日も頼むよって、そう言って、あたしは眠れない夜を悩みながら過ごす。

ふと、浜に見慣れない人たちがいることに気づく。服装が村人たちみたいなものじゃなくて、剣とか杖とかを持つてるから多分、旅の人。ダーマから来たのかな。もうこの人は危ない船旅なんてしないから、大陸へ船を出すことはないのに。

……でも、外から来た人なら、この今のツオをおかしいって言うてくれるかもしれない。なんだか話し合いをしてるみたいだけど、話しかけてみよう。

「あの、旅人さん……？」

「はい、なんでしよう、お嬢さん」

声をかけると鉄かぶとの人が振り返った。

すごく、綺麗な人だった。あたしよりちよつと大きい、剣を背負った男の子がなんとなくこの人は渡さないぞって顔をしてたけど、気持ち、わかるよ。すごく綺麗だ。そして優しい声をしてる。

目がね、真つ黒で、吸い込まれるみたい。優しくって、そう、言うなら、天使様みたいなの。でも翼はないし、輪っかもないから、浜の外にはこんな綺麗な人がいるんだなあ。

「あの、夜、私の家に来てくださりませんか。ちよつと聞きたいことがあるんです」

「夜？」

「はい。あたし、これからちよつと用事があって。忙しいならすみません」

「大丈夫ですよ。大陸に船を出してくれないかももう少し交渉するのでどれだけ早くても出発は明日ですからね」

「大陸に……あたしも、口添えできたらいいんですけど」

「いえ、気持ちだけで。危険な船旅をどうやら今はもうしないようですから、あまり期待もしていません」

その人は微笑んで、ちよつと屈んであたしと目線を合わせてくれた。

「俺はアーミアス。あなたは？」

「オリガといいます。ありがとうございます、アーミアスさん！」

優しい笑顔で返してくれた。そして仲間の人たちを連れてアーミアスさんは村の人に話に行つたみたい。

きつと、断られちゃうんだろうな。ほかの人もそうだったから。

……アーミアスさんならあたしの話、おかしいっていわずに、聞いてくれて、ツオのダメなところ、ダメって言ってくれるかな？

48話 雛鳥親鳥

ノックの音が控えめに響く。あたしが急いで扉を開けると、アーミアさんと仲間の女の人が並んでいた。紫のショートカットのその人は冷たい眼差しをしていたけれど、あたしを見るとちよつと微笑んでくれた。

二人とも、装備は軽装になってたけど、武器は持っていた。でも全然怖くない。なんだか二人とも修行の旅をしているというよりも護身用のために武器を持つてるって感じだから。

「こんばんは」

「こんばんは、アーミアスさん！ それから……」

「メルティーと申します。ええと、オリガさん？」

「はい！」

二人を家にいれた。夜の火に照らされたアーミアスさんの目がキラキラ光っていて、綺麗。かぶとを被っていないとアーミアスさんは間近で見ると案外若い人だなんて思った。でも、それは外見だけで、なんとなく雰囲気はかなり年上の人のような気もするし、掴みどころがない。

昼間俺って言うてたし、男の人だよな？ 声を聞いても、よく分からない。そんな人ここにいなかったから。メルティーさんとも背があんまり変わらないような。

「お邪魔にならないようにお話が済んだら宿に戻りますね、アーミアスさん」

「待ってください、防犯の関係で連れてきているのですが」「防犯？」

メルティーさんがまったくもって理解できないといった様子で首を傾げて、あたしも首を傾げた。

「なにか良からぬ噂でも経てば面倒ですからね。お気にならさず。俺もすぐに宿に戻りますよ」

「……」

良からぬ噂。なるほど、防犯ってアーミアスさんが男性だから言っ

てるんだ。……やっぱり男性なのかな。そう知ったって何も危険なようには思わないのだけど、きつと優しい人だからそう配慮してくれてるんだよね。

「ところで話というのはどういうものでしょう？」

「あー、はい！ あの、昼間、ご覧になったと思うんですが、あたし、お父さんが嵐で帰ってこなくなってから『ぬしさま』を呼ぶことができるようになったんです」

「ぬしさま。魚を打ち上げていたあの大きな影の持ち主ですか？」

アーミアスさんは少し思うところがあるみたい。目を細めて、笑顔が少し引つ込む。あんな大きな影を見たら最初はびっくりするよね。それにぬしさまは、恵みをもたらしてくださるけれど、でも。

「はい。あたしがああやって祈ると、来てくださって、魚とか、昆布とか、海の幸を恵んでくださいます。村のみんなはあたしがお父さんを失ってひとりぼっちになったから、哀れに思って助けてくれるんだらうって言います。それからみんな漁をしなくなりました。全部、ぬしさま頼りにしてるんです」

「……時に海は危険でしょうからね」

「はい、それは分かっているんです。でも、あたし、それは良くないって思ってるんです。今までのツオは、漁のあとの賑わいがありました。みんな頑張つて、そして魚をとって、暮らしてきたんです。でももう、みんな好き勝手にしてるだけで、もう、好きだったツオじゃないようにすら……」

メルティーンさんが目を伏せて、それから、あたしの言葉にはつきりと微笑んでくれた。分かってくれた。そう分かって嬉しくなる。

「こんなのおかしいですよね？」

「……俺の主観で答えてよろしいですか？」

「ええ！」

アーミアスさんはあたしの目を見て、はつきり言ってくれた。

「村人の人々はおかしくありませんし、またオリガさん、あなたもおかしくありません」

村の人はおかしくないのに、あたしもおかしくないの？ どうして

？

「……え？」

「人間というのは、楽な道があればそれに流されてしまいます。ましてや命の危険を冒していたならばなおさらです。しかし、このように墮落し、オリガさんの得た不思議な力に頼り切りになってしまっているということは間違いなくおかしいことです。ですから、そうですね……俺はこの浜の人たちのことをよく知りませんがオリガさんとは言葉を交わしましたから」

アーミアスさんはひととき優しく微笑んだ。

「あなたの気持ちの方を支持したいですね。所詮は部外者の現状も知らない無責任な意見ですが、以前の村を取り戻して活気のある村に戻りたい。そういう心を持ったオリガさんだからぬしさまは力を貸してくださいるのでしょいか。

もう少し出来すぎたことを言いますと、その墮落具合が長く続くとこの村から完全に漁が失われます。するとどうなるか。簡単です。オリガさんがおばあさんになって、いつの日か亡くなったあと、ここは滅ぶのですよ」

だからあなたは正しい、とアーミアスさんは言い切った。はつきりと、未来にここが滅ぶと言って。

確かにそうだ。あたしがここにいる限りぬしさまが力を貸してくれる……そう自惚れたとしても、あたしがいなくなったあとはどうするんだろう。あたしはまだ子どもだし、子どもは漁のやり方をほとんど知らない。漁を知らない人間の孫とかひ孫がどうして漁のやり方を知ってるだろう。

「ありがとうございます。勇気が出ました。明日、村長さまにそう言ってみます」

「……ええ」

アーミアスさんは立ち上がって、そろそろ失礼しますと言った。そしてメルティーさんと小屋から出ていこうとしたとき、突然やってきた村の人が村長さまがお呼びだと。

ちようどいいから、今、言おうかな。

あたしは二人に丁寧に辞儀して、足取り軽く村長さまのところに向かった。きつと聡明な方だもの、今は良くて未来がないってばかりわかればもうぬしさまを呼ばないでいいって分かるはず。

こういう力は本当は、ちゃんとしたタイミングで使うべきなんだよね。お父さんが亡くなった時のような嵐の日に食べ物が無い時とか、ちつとも魚が取れない時とか……。

そういうときにぬしさまを呼ぶなら、いいのかもしれないね。普段から呼んじやダメなんだ。

「やっぱりアーミアスさんは正しい方です」

「……そうでしょうか。今のは完全に、ごくごく普通の人間には受け入れられない言葉です。正論かも知れませんが、人間というものは常に正論ばかりでは生きていけない。実際ツオでは漁で死人が出たばかりです。漁をしなくて良いならしたくないと思って当然のこと」

いいえ、それは分かっているのです。でもアーミアスさんは言ってくださった。腐敗の先には破滅があると。天使様は人間を守護し、見守ってくださっているのだから知らないはずはないのです。

ですが、きちんと言ってくださった。それが嬉しくて。

それは私が肯定されたことと同義なのですから。

「私、家で魔法使いの真似事だけやっていけば生きていけたんです」

「真似事ですか？」

「まあせいぜいメラとかが使えればいくらいいってことですよ。昔はそれなりに高名な魔術師の家系でしたが、とつくに墮落しきって名声だけになっていました。」

私は兄さんがいましたから、それから目覚めることが出来ました。親はもうだめでしょうね。金持ち相手に本当に効くかもわからなイメージをして、そして、のうのうと生きているんです」

「なるほど……」

私はかつて自らを恥じました。ですから僧侶になって悔い改めたかった。しかし今はそうではありません。アーミアスさんの力にな

ることが出来ればそれでいいのです。それこそが懺悔かもしれない。いいえ、それこそがつぐないなのです。

月のあかりがアーミアスさんの髪の毛に反射して、陽の光を浴びた時のように銀色に輝いていて、私はうっとり見つめます。ああ天使様。お導きをくださる天使様。

夜空よりも美しいその瞳を縁取る銀のまつげが、ゆつくりと瞬きました。私はそれを見逃すまいと必死になります。

「確かに未来はないでしょうね。メルティー、あなたは正しいです。とても。そのような定められたような道から向き直ることのできたあなたは強い。俺だってそう生まれついたならそう生きてしまうかもしれません」

「そんなことはありませんよ！」

まさか！ アーミアスさんはわざわざ地上に来て下さっている、そして救いの手を差し伸べて下さっている！ ほかの天使様はどうなのですか！ 明らかに飛びぬけて慈悲深く、徳の高い天使様じゃありませんか！ そんなアーミアスさんが、まさか！

「天使というのは、上の存在に決して逆らえないのですよ。まさしく神の僕です。死ぬと言われたら間違はなく死ぬでしょう。そう生まれついているのです。違う生き方をしようとは普通考えないものなのです。ですからメルティー、あなたは強い」

アーミアスさんはそう言いながらも、祈っても助けてくださらないほかの天使様と違って直々に人間界に降り、私たち人間を救って下さっているじゃありませんか。私を導いてくださり、人々のために動いてくださる。ですからその普通には当てはまっていないのです。

しかしアーミアスさんは謙遜がお上手ですから、私はもう何も言いませんでした。

今日の昼間だつて、転職したで慣れていないのに何度かマティカをかばっていましたね。だから私は魔力を思う存分解放しましたよ。さっきだって、迷える少女に適切なお言葉を掛けました。きっと彼女の言葉は村長には受け入れられないでしょう。でも、助けを求められたら助太刀に行くのでしょうか？

ああなんて素晴らしい方。ご自分に厳しい方。

静かな海を見つめながら、アーミアスさんはぼつりと言いました。

「しかし、この村の現状は守護天使としてはある種の理想なのですよ」
「……」

「死の危険なく糧を得ている。魔物が襲ってくることもない。栄養状態がいいですから病気にもそうそうならないでしょう。悲しい死はあまりありません。人々は穏やかに過ごせます」

「……そうですね」

理想だと語りながらも、アーミアスさんの目は悲しみに染まっています。

「これはいつの時代かわからない話なのですが、完全な守護をおこなった天使がいたのですよ。食べ物も、水も、服も用意して、魔物の退治もすべてやってのけたのです。人々は天使に感謝し、神に敬虔になり、争いもなく幸せになりました。しかし、そこはあっけなく滅びました」

「天使様が、そこを墮落だと断じたのですか？」

「いいえ。何百年もそこにいた天使はどうとうある日、天使界に戻らなければならなくなりました。食べ物も、水も、服も用意できるだけ用意して、結界を嚴重に貼って帰ったそうです。ですが、あの理想郷はたったの十年だけ天使界にいただけなのに滅びました」

十年あれば滅ぶのには十分なのですが、アーミアスさんの感覚からすれば十年は瞬きのようなものでしょうね。食べ物だってそんなに持ちませんのに。

ええ、墮落し、生きるだけになり、天使様の助けを受けるだけでお導きに従って自らを研鑽しない人間なんて私は滅んでしまえと思えます。だってそうでしょう、天使様はその身を張って私たちを守護してくださいるのに人間はその背に隠れるだけだということですか？

美しく優しい天使様の手を煩わせることがなくなることこそ理想なのでは？

「彼ら人間は何も出来なくなっていたのです。結界は無事でしたが、食べ物はどうやって作るかも知らない、井戸が枯れた時どのように新

しい井戸を掘ればいいのかも知らない、身にまとっている服が何で出て来ているかも知らない彼らはそのまま緩やかに死に絶えていました。

天使はそれからひっそりと人間を守護することに決めました。特に食べ物については鳥やイノシシを追い払う以上のことはしませんね。天使はあくまで守護者であり、彼らを雛鳥に無理やり仕立て上げる親鳥ではないのですから」

アーミアスさんは話しすぎましたと言つて、宿屋の扉を開きました。

私は、私はといえば、その慈愛と悲哀の瞳にすっかり心を奪われながら、美しい天使様のかんばせをしつかり目に焼き付けておやすみなさいをやつとのことと言っただけです。その悲愴な事実に関心を打たれることすらできないのです。

美しく、慈悲深く、人間を守護し、見守ってくださいる天使様。かの行動は天使の使命なのだとおっしゃいますが、ではなぜ、アーミアスさんは地上で仲間の方と出会わないのでしょうか。私たちには見えないかもしれませんが、アーミアスさんにそうではないはずなのに。少なくとも妖精とは話すのですから天使様同士でも話すのでは？

やはり、ここにいらつしやるアーミアスさんが最も天使として素晴らしいからなのでは？ その導きに預かっている今はなんて素晴らしいのでしょうか！

私は確信し、布団を蹴飛ばしているマティカに布団をかけてから眠りました。兄さんも蹴飛ばしていましたが、分ならず屋なのでお腹にだけかけておきました。

49話 浅知恵

「おはようございます、みなさん。さて、今日はどうしましょうかね」「船が出ないみたいだから、外で修行しようよ！」

「それについては同意です。完璧なヒーラーになつて見せます！」

ヒーラーつて、あなたは僧侶ですよ兄さん。信仰心がないのもいい加減にしてください。いくら家が完全に教会の悪いところを掃き集めたところだとしても。あなたは慈愛の心を持つて人々を癒し、導き、神の教えに忠実な修行の身であつて……。こほん。

あんな兄さんの言葉にもアーミアスさんは眉一つ動かさずにしてらつしやる寛大さにもつと感謝したらどうなんですか。つまり私たちが天使様を疎かにされたような気持ちをも、神を軽く見たその言葉によつてアーミアスさんが味わっているわけですよ。

「私はオリガさんのところに行つてからにすべきだと思います。昨日の様子ではきつと、すげなく断られているでしょうから、心配です」
アーミアスさんは頷き、私の案を取りました。ところが彼女は家にはいませんし、村人いわく、今日は村長直々にぬしさまを呼ばない日にしたらしいのです。ですから浜にもいません。

一日くらいはなんとかなるらしく、話があるということでも村人からはのほほんとした答えしかありませんでしたが、まあいいでしょう。ですが、村長の家にもいませんし。どこで話すというのでしょうか？
すると、オリガさんくらいの年齢の身なりの良い少年が私たちを見てやつてきました。

「……旅人さん？ オリガと昨日話してたよね？」

「ええ、そうですが。彼女がどこにいるかご存知ですか？」

「パパが、オリガがもうぬしさまを呼びたくないつて言つたら、プライベートビーチに連れて行つちやつたんだ。あのね、なんだか嫌な予感がするんだ。だから、その、見てきてほしいんだ、旅人さん！」

「プライベートビーチに？」

子どもだから信用していい、信用してはならないということはないですが、なんとなく信じてても良い気がします。プライベートビーチと

いうことは他人は入ってこれないところでしょうから、なにがあつたとしても助けを求める声は届かないはず。

あの小さい子をそんな目危険な目にあわせるわけにはいきません。久しぶりに私にも情が湧きましたから。

ああ、アーミアスさんについて行って良かった。アーミアスさんなら必ず、必ず彼女の身を案じる方ですから！

「洞窟の向こうにあるんだけど、洞窟に魔物が出るからオリガ、一人で帰ってこれないよ……」

「分かりました。危険そうですね、みんな連れて帰ってきますよ」

「ありがとうございます！ あつ、僕はトト！ オリガに言ったら、分かってくれるよー！」

「分かりました、トト。俺はアーミアスといいます。もし誰かにこのことを咎められたのなら旅人が勝手にしたということにしておくの良いでしょう。では、みなさん、いきましようか」

籠手をはめた手が少年の頭を撫で、少年の手によって村の奥の木の扉の鍵が開かれました。

少し浜を歩いたその先の洞窟は想定よりも深く広く、なるほど戦うことも出来ない少女一人では歩いて帰ることすら困難でしょう。その上外よりも強い魔物までいます。

急いで向かわなければどうなっているかもわからないのです。魔物はやむを得ない場合以外は倒さず、追いつくように進んでいきましたが、強い魔物というのは早々逃げたりしません。結局戦うはめになり、それによつて経験を積むことは出来ましたが、時間はどうしてもかかってしまいます。

内部の複雑な入り組み方にも原因があります。足を取られる深さの水を避けて飛び石を頼りに進んでいても足場は悪いですし、そんな状況で魔物と戦っているのですから、疲労もします。

しかしアーミアスさんはまるで道が分かっているかのように進まれているので迷うことはありません。

普段は私たちが置いていかれないように五感の足並みを揃えてくださっているでしょう。しかし天使様として見過ごせない時は存

分にその力を発揮してください……こんな時じゃなければ拜んでいるところでしたよ！ ああなんと素晴らしい！

それにしても。会ったこともないツオの村長は、聞いている限り自分の身を可愛く思うという点では普通の人間です。ですから、腕のいい護衛を連れてくるはず。オリガさんは無事なはずです。ええ、現状に流されることなくきちんと声をあげることができる強い子なので、無事ですすよね。

それに、村長にとってオリガさんは失いたくない存在でしょうから。ええ、それは喜ばしくなくても、彼女の身を守るなら、それで良いのです。……と、アーミアスさんなら言うでしょうね。私ではそんな考えは持てませんよ。

私なら、アーミアスさんを煩わせることになった力がそもそもなければよかったと思ったでしょう。彼女の心を知るまでは。しかし、私はオリガさんの心を知りました。私は、苦悩する人間に吐き捨てる言葉を持ちません。ですから、ええ、天使様のようになれなくても、優しくありたいです。彼女には。だからこんなことは思いたくなくなりました。

この先で何が待ち受けているかわからないので作戦が変わりました。魔法を節約するために、私はもはや恐怖も躊躇もなく魔物の頭に向けて杖を振り下ろします。何度も何度も振り下ろします。魔力を奪い、その命まで奪います。

ええもう、何も怖くありません。魔物を哀れには思っても、恐怖によつて疎むことはありません！

私はきちんとしたお導きを受けています。あの手が指し示すその道をゆくことになんら疑問を持ちません！ ええ、この道が正しいものであると素晴らしいことに確信でき、正しく努力することの出来る私はなんて幸福なんでしょう！

洞窟を抜け、空が見えるところまで来た。俺の予感はこの先にとん

でもない存在がいるんじゃない。ガトウーザに回復は薬草を中心にするように言つて、メルティーも魔力を節約するようにしてもらい、俺たち転職組はそろそろ発揮できるようになった力でなんとか道を切り開く。本領発揮はまだまだ先そうだが。

さすがに緊急事態だからな、サンデイがこつそり先回りして、道を教えてくれるんだが、喋ってる余裕もないし黙つてやってるから俺がなんかすげえ勘が良い奴みたいになつてね？ まあいいか、あとでサンデイには甘いものでもあげよう。妖精が人間や天使と同じものを食べられるかなんて知らないが。

もどかしく白い階段を駆け上がる。するとようやく、目の前が拓けた。

無粋な看板を無視すれば、そこは確かに独り占めしたくなる気持ちも分からないでもない、美しいビーチ。

ここにリツカたんを連れてきてみたい。ロマンチックじゃねえか。吊り橋効果でもなんでもいいから良く思われてえ……。つい思考が逸れるくらい、海と空の対比は綺麗だった。白い砂の地面と、青い空と海。その先は切り立った崖だったが、十分だ。ここで日の出を拝んでみたいぜ。

で、オリガちゃんとか村長を発見したから俺たちはこそこそ隠れる。護衛のやつら？ とりあえず気づかれなきゃいいだろ。気づいても話が始めれば雇い主の邪魔にならないように騒がないはずだしな。頃合を見計らって全員村に連れ帰るぞ。

後で文句言われてもまあ最悪ツオを追い出されるだけだしな。

とにかくなんか話してるみたいだ。そのために連れてきたんだろ。うし、流石にそれを邪魔する気はない。とつとと話してくれ。トトが心配しているはずだ。

美しい空、穏やかな海。だというのに俺はなんとなく、胸が嫌な感じに波打って、居心地が悪かった。嫌な予感というやつだろうか。

50話 愚計

「どうだ、綺麗な場所だろう。ここならゆっくり話せると思ってたな」
おっさんといたいけな少女という組み合わせでなければ俺もゆつくり出来たんだがな。お前、もしかしてペロリスト・邪か？ たまに
いるんだよな、偉大なる初代ペロリストのような素晴らしく謙虚な人
物と違って相手を不快にしてまでペろペろする困ったやつが……。

邪悪なペロリストには天罰という名の拳だからな。相手の気持ち
がわからない幼き者には夢枕にでも立つ能力が欲しくなってくるぜ。
もちろん夢の中でこんこんと相手の気持ちを考えて行動すること
によって互いに平和に過ごせるのだということをお説くためにな。も
ちろん、ペロリズムにも考慮はするぜ？ 頭の中で考える分には自由
だとも話すき。リツカたんを思う存分ペろペろするのが許されるの
は俺の心が自由だからさ。

俺の心は天使の理にガツチリ縛られない限り常に天使を辞めたが
り、人間たちと同じ時を歩みたがり、リツカたんをなによりも大好き
に思ってるんだからな！

てかこいつオリガちゃんの肩をぽんつとしたな。ふむ。こいつは
疑惑の判定。

ところでこの肩タッチはどう判断すればいい？ 俺もトト少年の
頭を撫でたくらいだしソフトタッチはセーフでいいのか？ それと
もこいつをしょっぴいたあと俺もシヨタコンとしてしょっぴかれる
べきなのか？ 俺の年齢からするとおじいさんに触れてもシヨタコ
ンになるが。それはまあ関係ないか。

とりあえず俺が幼き者へ邪な心を持っているのは確かだしな……。
い、いや断じてさつきは健気でかわいいなーと思っただけで、邪な気
持ちで撫でたんじやないからな！ かわいいなーって、それこそが邪
な気持ちか！ 別に、頭が触りたかったわけじゃねえから！ せめて
安心してくれよなー、本当に人間はかわいいなーくらいの軽い気持ち
だからな！

で、この村長は邪なんじやないか？ と、疑うのは良くないが、才

リガちゃんはずつごく可愛い女の子で、健気で、優しく、特に守りたいような子だ。可愛くて無垢な存在を人間も天使も神も好むからなあ。それが一種の「さが」とはいえ許されることではないだろうが。自己天罰すべきなのかもな。

まあ待て、俺はただの人間大好きな真摯なペロリストでつまり、たとえ姿が見えなくともパンツは覗かない紳士なのでリツカたんに恥ずべきことは何もしていない。ゆえにセーフ。見えたらラッキー、それだけだからな！

よし、俺はまだ地上にいたい。ここはセーフにしておいてやる。タツチについてはオリガちゃんが嫌がったらアウトだ。そうだ、相手が嫌そうならアウトでそうじゃなきゃセーフなんだ。そうだろ？ さっきのはセーフ、これもとりあえずセーフだ。

「このところ祈ってばかりでお前は疲れてしまったんだろう、うん……仕方ない。浜でお祈りをするのはもうやめようか」

お？ こいつ名村長？

「村人にはワシから、お前の力は消えたのだと言っておこう」

「村長さま……」

やべえ俺、完全に先走ったんじゃないやね？ これは頃合を見計らって連れて帰るよりも、頃合を見計らって隠れて護衛を遠くから見守りながら帰る方が正しい。俺の心が汚れていた。すまねえ。

人間はいつまでも幼い存在ではないと、改めて学ぶことになる。俺もまだまだ人間に対して真摯になりきれていない天使なんだな。人間に俺はいつも学ばせてもらっていたじゃないか。

「それでだなオリガよ。お祈りは浜ではなくここでこつそりとしようではないか」

「……」

やっぱなし。やっぱさっきの撤回。きな臭い。こいつは邪悪なペロリストだ。可愛い子にタツチ罪だ。悔い改めろ。安心しろ、お前も天使から見れば可愛い人間だ。だが考えてみる、いたいけな少女にとってお前は欠片も可愛くないおじさんだ。可愛い子に恐怖を与えような行為はするんじゃないやねえ。

「海の底には珊瑚や真珠、沈んだ船の宝があるだろう？ お前ならそれをぬしさまに持ってきてもらうこともできるのではないか？」

お前は可愛い子にタッチ罪現行犯で天罰だ。拳骨は頭にしておいでやる。

なんで人間とか一部の魔物は光り物が好きなんだ？ あんなもの食べねえじゃねえか。病気が治るわけでもねえし。魚を欲しがるのはわかるが、なんでそんなもの欲しがるんだ？ 貨幣経済は分かっているぜ。価値があるのも、わかっている。

だがそもそも、なんで欲しいんだ？

俺は誰かの幸せの方がずっと嬉しいし、飢えずに済んだ人間たちの安堵を見ているとこっちまで腹一杯になって満たされる。天使というのは根本的に人間と感性が違うんだろう。それも理解している。だからこそ、愛する人間たちよ、どうしてそんなもの欲しがるんだ。それが知りたい。リツカたんも好きなんだろうか？

その財宝とやらは何かを産むのか？

今回に至っては可愛い子の顔が曇ってるし、嫌がってるじゃねえか。負しか生んでねえ。しかも今、こっそりって言ったな？

今は魚を村全体で分け合っているのに独り占めするってことだろうか？ このビーチみたいに。

背中が煤けちまいそうだけ。俺の顔がいつにもまして歪んでるがこればかりは許してくれ。俺は、人間を処罰するための存在ではなく、人間の健やかな命を陰ながら守護する機構だ。装置みたいなものだ。

だから、この俺の感情が正しいのか間違っているのかは分からねえ。分からねえけど、今、俺はオリガちゃんを守るべきなんだ。そうだろう、いつだって神も天使も蟲貞三昧だ。いつだって俺は自分の判断で無垢なる者を守ってきた。

オリガちゃんが村長の手を振り払った。有罪確定だ。思いっきり嫌がってるじゃねえか。ロリへのノータッチを守れ！ その原則を守れない悪い子には天罰だな！

「財宝?! 村長さまは何をおっしゃるのですか！」

「慌てるでない。たまにでいいのだ。お前が気が向いた時だけで」

「……あの手の輩が、あんな口約束を守った試しがない」

「おれもそう思うよ」

ガトウーザとマティカにはなんか身に覚えがあるみたいだな。メルティーは最初から村長睨んでるしな。

欲望、か。欲と俗に塗れた俺が憤るのは許されるんだろうか。許されなくてもちつとばかり、むかつ腹にくるな。

「そうしてくれば、ワシらは豊かに幸せに暮らすことが出来る」

「豊かで幸せ？」

「そうだ、約束しよう。だからもう、帰ってこない父を待つのはやめなさい。これからはワシがお前の父になろう」

「ちがう……」

サンデイが俺の背中をバンツと叩いた。行けつてことか。俺も飛び出してえよ。だがまだだ。今は、俺のような存在が口を出していい時じゃない。俺はどうやったって、彼女たちと同じ目線じゃねえからな。遥か高みから見ているようなものだ。

だから、まだだ。もし、彼女が助けを求めるなら、もう飛び出してるが。人間の行動はなるべく邪魔しない。地上の生命の営み、その尊い輪廻から外れている者の鉄則だ。身に危険が及びそうならその限りじゃないってだけでな。

「やめて！ あなたはあたしのお父さんじゃない！ あたしのお父さんは……」

……待て。

海から、怒り狂った巨大な気配が、しないか？ 邪悪な気配ではないが、こいつはまずい。あんな崖っぷちにいると危険だ。地面が揺れる。仲間たちより地面を歩き慣れていない俺は周りが踏ん張って耐えているのにすつ転んだ。反射的に羽ばたいて転ばないようにしたつもりだったが、羽ばたく翼は失っていたことも失念していた。

オリガちゃんと村長も海の異変に気づいたらしい。慌てて海を見ている。おい、走れ！ こつちだ！

「アーミアス、行きなさいよ！」

サンデイがなんとか起き上がったもう一度俺の背を叩いた。俺は足をもつれさせながら駆け出す。飛び出してきた巨大なくじらしき存在は怒り狂い、何をしてくすやらわからない。こいつがどんな存在であれ、あの大ききじゃあのしかからただけで死ぬ！ 彼女たちが危ねえ！

「おお、ぬしさま！ よくぞいらっしやいました！」

「ばっか野郎！ 今はそれどころじゃねえだろうが！ そいつが「ぬしさま」だろうがなんだろうが殺気は抜群、食い殺す準備は万端に見えねえのか！」

俺たちは道をうまいことふさぐようにおろおろしていた、村長の護衛には悪いが強引に道を開けさせてもらった。だが、こつちに連れてくるには少しばかり遠い。まだ、届かねえ。目の前の巨大な存在に目を奪われた二人はこつちに気づきそうもねえ。

「ほら早く祈りなさい、財宝を持ってきて頂かないと」

くじらは明らかに村長に向かって吼えた。まずい。今の言葉はどう考えても怒らせてるだろう！ 後ずさりする村長と、呆然とするオリガちゃん。俺の手は届かない。俺に翼があれば、届いたのに。

翼を疎んできた自分が憎い！

そして、目の前でオリガちゃんが、呆然として、身動きも取れないまま、丸呑みにされた。

「……………」

反射的に剣を引き抜く。相手が「ぬしさま」と呼ばれるような神聖な存在であつても、これはさすがに守護天使として見過ごせねえ！

腰が抜けた村長？ マテイカが後ろに投げ飛ばした。あの程度では酷くても打ち身程度で済む。巻き込まれた方が重傷になるだろうから許せ。

「オリガさんを離しなさい！」

くじらは、いや、「ぬしさま」は現れた俺たちにも村長へ向けたものと同じ憎悪を向け、激しく吼えた。俺は立ち竦みそうになる足をなんとか踏ん張り、剣に炎を宿して斬りかかる。威嚇の一撃は退こうとせず、むしろ殺意によって飛び出してきたことよって突き刺さっ

た。

背後から飛び出してきたマティカも同じように火炎斬りを叩き込んだものの、直後、俺たちは激しい水に押し流された。俺は崖の方に引きずり込まれそうになるのに踏ん張る力もなく、ただ地面に剣を突き刺して耐えることしか出来なかった。「ぬしさま」が呼んだのか。天災を操れるような存在なのか！

本能では引き返せと叫んでいる。俺はそんなビビりよりも胸の内からこみあげる、人間を救うために何としてでも行動しろと訴える声の方に耳を貸す。

この憎悪はなぜ俺たちにも向いているのだろう。村長の仲間だと思われているのだろうか。オリガちゃんを食べた「ぬしさま」は、何を思っているのだろうか。考える、考える、しかし理解不能。

ただ、分かったのはな。話しても分かつともしない敵もいるってことだ。俺が何を言おうがこいつは聞きもしないだろうよ。話せるのは袋叩きにしてオリガちゃんを取り戻してからだろうな。

51話 奪

天使だから特別強いとかいうことはない。ただ、天使にはたまに人智を超える力を持つやつもいる。もちろん最初からそうだったわけじゃねえ。外見が若くてもそういう天使は何百年も生きているから、経験の賜物が言うだけのことだ。

俺の年齢から考えてみれば普通の人間に毛が生えた程度だったことが分かるだろ？ それにウォルロの周辺は魔物が弱くて穏やかな地方だ。わざわざひよっこ天使を強い魔物の巣に放り込むような非天使道的なことをするような師匠じゃねえし。

決して強くない俺は立つ。俺は戦う。それは人間たちの安寧のためであり、俺のためだ。人間たちの幸せは俺の幸せであり、彼、彼女たちの不幸は俺の咎。

そういう風に最初からできてやがる。それを嘆くことはねえ。ど言い繕っても人間の笑顔のためだけに命を投げ出せるし、それが俺にとっても幸せだからだ。人間たちを通さなければ幸せにもなれない輪廻の外の、存在だ。なにせ俺には来世はない。星になるだけ。前世ももちろんないだろう。星屑の記憶から生まれたような、神の下僕が俺たち天使だ。

俺はどうしようもなくそういう風にできてやがるんだ。俺たちは、俺は、生き物というよりも明らかに機構だ。そうだろ？ 命を最優先にしない生き物なんて、子孫を残せない存在なんて、肉と血でできた「からくり」や「しかけ」だ。

間違いなく幾度もかばった体で攻撃を受けたらやばい。そう確信しながら俺が飛び出すのをやめないのもきつと、俺が人間たちのことを愛しているからではなく、そういう風にしかなれない存在だからだ。

俺が、人一倍、いや天使一倍か、人間のことが大好きな天使だからってだけの理由なら嬉しいんだがな！ 強制されているなら胸糞悪い！ 効率的じゃねえだろ、ここは生き延びさせてくれよ、神よ！ もっと沢山救わせろ！ 俺がもっと丈夫なら話は違ってきたんだぜ

？ なぜ俺は弱いんだ、なぜ！

この戦いが終わったらリツカたんのところに帰るんだからな！

とうか相手の攻撃力が高すぎて魔法使いや僧侶が被弾してから津波がきたらマジでやばいから！ バトルマスター？ ついでにかばわれとけ！ 回復は全体にできない現状なら一人回復してる方が楽だろ！

メルティーの悲鳴。大丈夫だ、痛みによるものではなく、目の前で俺の腹部がえぐれたからだ。トラウマを植え付けちまったならすまねえ。ドでかいくじらに腹をついばまれる同年代の外見の野郎なんて見たかないだろうな。その上イケメンならこういう場面でも絵になるらしい。こんなところで格差社会！

俺にもっと太い眉をくれ！ 俺の肌がなまっ白いのが悪い、小麦色の肌になりてえ！ 目力が足りねえんだ、覇気のない目よりも迫力あるつり目になりてえな！ そして何よりホコリと同じ色をした髪の毛が悪い！ 灰色以外なら何だつて良かったのによ！

俺は激痛をもたらす「ぬしさま」に唾を吐きかけてやりたいが、外面が悪いんで堪えながら、必死で睨みつけた。そんなことしたくたつて口から真っ赤なトマトジュースが降り掛かっている気がするが、まあ不可抗力はガラ悪くはないだろう！

「ぬしさま」。ツオに海の恵みをもたらす存在。だが今は間違いなく人間たちの敵だ。まあこいつくじらだし、なんらかの感覚で俺のことを天使とわかって食ってるならいいが、俺を普通に人間だと思っただけ食ってるなら災害指定してやる！ 俺よりもすげえ歴戦の上級天使の討伐隊を組む様にオムイ様に進言してやる！

だが今は！ オリガちゃんを返すまでは俺は退かねえからな。腹を食われたまま俺は剣を突き立てた。何、この巨体だ。これぐらいじゃ俺と違って少々痛いだけだろ。死にやしねえ。

抵抗するように津波が押し寄せる。もう足を取られることはない。打ち寄せる波によってダメージを受けても呼び寄せている存在に思いつき組み付いているからな。

はは、クソ痛てえ。ガトウーザの回復が届くたびに牙が食い込んで

腹に大穴が開きやがる。足元を見なくても俺とこいつの血で赤い水たまりが出来ることがわかるぜ。くじらつて白歯ですり潰すように食べるんじゃないのか？ こいつ肉食の……捕食種の種類なのか？ 随分牙がご立派なことだ。ますますオリガちゃんが無事が気になる。

てかせつかく食った朝飯全部食われちまったんじゃね？ 大した量ないけどな。だがこうして俺が抑えている限り仲間たちには遠距離攻撃しかいかねえってことだろ？ なあ？ 人外同士仲良くしようぜ。人間にはそれぞれ手を出さないってことで手を打とうぜ？

ほら見とけ、俺を抜いても三対一だ。分が悪いぞ、早くオリガちゃんを離せ。メルティーからルカニが降り注いでいて不利になっていくぞ？ 俺の攻撃も結構痛くなってきたんじゃないのか？ 俺もそろそろ臍物あたりを攻撃されるのは勘弁だしな。なあ？

鈍い音を立てて「ぬしさま」の顔がマティカに何度も何度も突かれている。何も剣を捨てて考えなしに特攻しているわけじゃないだろう。あれはあれでなにかの技っぽい。

いいな、あれ。本当にむかつくやつには拳で殴るって決めてるからな。いつかぶん殴ってやりたいほどむかつく野郎が現れたときのためにあれだけは覚えておきてえな。てかあれ、まだ武闘家抜けてねえよな？ 普通に強い技だしまあいいか。マティカの魔力はすべて戦闘力に変換だしな。

人間も天使も基本構造には変わりはない。痛みでハイの俺は疲労も痛みもだんだん慣れてきて、頭が冴え、素晴らしく周りがはつきりゆっくり見えた。

そして剣を突き刺したり殴りつけたりと死ぬ気配なく暴れまくる俺を「ぬしさま」は離れた方がいいとやっとなつと気づいたらしい。ペッと剣ともども吐き捨てられた。俺はといえば、我ながら見事な生命力によつて地面に叩きつけられても生き残り、若干遅い解放にむしやくしやしなから、跳ね起きて構えをとる。

傷は駆け寄って来たガトウーザによつてじわじわ塞がりつつあるし、まあいけるだろ。腹はとりあえず中身ぶちまけなきやいいんじや

ね。世話をかけたガトウーザも後でサンデイと一緒に甘い菓子やるよ。ていうか俺の腹の中身を見るハメになった幼い子にはアフターケアだ。みんな食ってけ。

味はそこそこ保証するぜ？ 何せパンと比べても量も値段も可愛くないやつだからな。セントシユタインで見つけたんだが、あれって多分貴族とかそういうやつが食うんじゃないかね？ まあいい、俺は人間より食費がかからねえから金は浮いてる。人間が好きそうな味だったな。あそこまで甘くなくてもいいだろうに。だがだからこそ、詫びにはふさわしい。

俺からわずかに距離を置いて見定めるような「ぬしさま」と睨み合いをしていると、サンデイがすっ飛んできた。俺が解放されるのを待っていたんだな？ 賢明だ。食われてる時の俺の抵抗の中じゃ巻き込まれかねないからな。

「ちよつとアーミアス！ 食べられてたケド、ヤバくね？」

「サンデイ。危ないですよ」

「アタシは飛んで逃げれるし！」

「ガトウーザは優秀な人です。もうすつかり塞がってしまいました。ほら、安心なさい」

「アーミアスがやられちゃ、ニンゲン助けたって意味ないじゃん！」
「俺はやられたりしませんよ」

サンデイは優しいな。俺の心配をしてくれるなんて。天使は人間たちのためならきつとその場で朽ちることが出来るのに。……天使界に当てはまりそうにない守護天使がごまんといるのは嘆かわしい。だがこれに限ってはとやかく言えることじゃねえな。命が惜しい天使もいる。俺は惜しくない天使、それだけ。もちろんできるものなら生き残りたいが。

それでも「ぬしさま」から目はそらさない。だというのに気を悪くしないサンデイは本当に優しいな。ガングログィヤルは優しい、覚えた。それともサンデイが優しいのか？

機を逃すな。俺はサンデイが押し寄せる波から遠ざかり、巻き込まないと判断した瞬間、足の力だけで跳ぶように努めて、思いつきり斬

りかかった。翼の補助はない。それを理解をすることはまだまだ難しいが、分かってやってるなら出来ないこともない。

会心の一撃だろうか。はつきりした手応えを感じ、俺と負けず劣らずたずたになつて「ぬしさま」はどうとうどうと倒れる。

俺は剣をまだ収めることなかつたし、怖かつたんだろう、俺が生きているか確かめるために後ろからぎゅつと抱きしめてくる小さく幼い子を安心させるために頭を撫でてやることはしなかつた。できなかった。まだ警戒していた。

横倒しになつた「ぬしさま」の口が少し開き、中からは無傷のオリガちゃんが出てきてくれた時は、俺は本当にほつとして、安堵のあまりうっかり俺もオリガちゃんの無事を確認するために抱きしめに行くところだつた。

危ねえ。可愛い子にタツチ罪で俺も現行犯逮捕されるところだつたぜ。

代わりに、俺は血まみれながら少しでもオリガちゃんが安心できるようになるべく優しく微笑みかけた。くつついていたメルティーは俺がなにかする前にマティカに剥がされた。良くやった、俺がロリコンで逮捕されるのは免れた。

い、いや別に？ 俺は何もやましい事考えてねえけど？ メルティーってクールビューティーだからすげえ信仰心に押され気味とはいえここまですぐ分かりますやデレは貴重なんだぜ。それを堪能したかったわけじゃねえ。こんな懐かれるなんてもうサイコーじゃねえの？ 人間は誰でも可愛いんだ。

さて。すべての魂は等しく救われるべきである。天使界一人間好きの俺はどうしたって人間ばかり鼻屑しちまうが、魔物も人間も本来なら共に歩む隣人であり、友になれた存在。なんの因果かみがあつているし、魔物は天使も人間も排除しようとしてくるやつが多いが、関係ねえ。その魂は等しく尊く、共に歩むために生きている。

「ぬしさま」は魔物に属する生き物に見えるが、オリガちゃんの祈りで魚という恵みをツオにもたらしたいくらいだし、心底邪悪な存在でもないだろ。だがこの強さは正直異常だ。なにせ、周りの魔物の強

さからしてみれば常軌を逸した存在だ。自然にそんな存在が現れるのか？

まあ現れることは往々にしてあるんだがな。だが今回は疑おう。女神の果実がどこに転がっているのか分かったもんじゃねえんだ、「ぬしさま」に関してはその線を疑っても損はねえ。

てか気づいたんだが、村長が可愛い子にタツチ罪なら「ぬしさま」とかアウトにも程がある。可愛い子を食べちやいたい気持ちは分かるけどな！ 本当に食うとか、ないわ！ リアルペロリズムを許容するわけにはいかねえわ！

「あたし……なんともない……」

「オ리가さん」

「アーミアスさん、わっ、怪我してますよ！」

「今は俺のことはいいですから。離れましょう、とにかく」

オ리가ちゃんが頷く。すると「ぬしさま」が起き上がって、俺を思いつきり威嚇した。幸いまだまだハイになっている俺は臆することなくオ리가ちゃんを背後にかばうことに成功した。次食うなら俺にしておけ！

「あなたはオ리가さんに恐怖を与えていることを理解しているのですか！」

恐らく、「ぬしさま」というのはオ리가ちゃんのこと大好きなんだろう。健気で可愛い、一生懸命な子だ。よく理解できる。中途半端な心を持った生命体はそういった無垢な存在に惹かれるものなのだろうか。

分かるが許さない。誰だって巨大なくじらに食べられて気分がいわけではない！

「大きな生物に食べられて、口の中でいくら怪我していないからといって恐怖がないとお思いですか！ あなたがオ리가さんを大切に思っているなら出直しなさい！」

……なにやら様子が変わった。俺の言葉が響いたようには見えねえけど。言葉が通じるなら苦労はしねえよ。最初から敵だとみなしている相手の言葉をほいほい聞くわけねえし。まあ、言語という意

味なら通じているんだろうが。

オリガちゃんをマティカにでも託してツオまで運んでもらった方がいいだろうか。もう一戦となると流石に底いながらやれそうにねえ。いっそ全員で逃げるのも手か。

だめだ、「ぬしさま」なら、ツオの浜までひと泳ぎ、逃げることは出来ねえ。

閑話 導業

天使様の存在を疑うなんて、この目であの美貌、あの慈悲、あの献身、あの瞳を目にした今、ありえませんが。それでも、こうして見るとはつきりと、かの方は「ヒトではない」のだなあと、思うのです。

天使様はヒトではない。天使様は天使様だから。ええ。そうでしょう？　ですから、つまり、彼ら……少なくとも彼は、私を慈しんでくださり、同時に私を通して人間を見る。

それは悲しいほど大きな距離であり、私たちはそれゆえに守られてきたのでしよう。神はどうして天使様を創ったのでしよう。どうして人間には使命を与えなかったのでしょうか。天使様は、いいえ、アーミアさんは、今日も私たちにその手を差し伸べ、救いと導きを与え、そして微笑むのです。

その微笑みは父や兄の愛情ではなく、もっと大きな、慈悲です。きつと、愛ですらなく、それは慈悲なのです。

それでも、彼は愛そうとしてくれます。

今日も道を誤りそうな兄の首根っこを掴み、集中力のない少年が迷子にならないように見張る日々。ああどちらが兄で、どちらが姉なのでしょう。年齢は実は同じです。少年は明確に年下ですからまあいいでしょう。

はい、今日も今をときめくメルティーです。

今はときめいていますが、なにぶん今日は、というよりも明日はやることもなく休みなのです。アーミアさんは私たちには身に余るほど優しい。ですからこうして休みを定期的にくださいます。ルイーダの酒場に登録された人間としても破格の待遇です。

休みだから、何をしてもいいと言われます。一応セントシユタインの中にはいてほしいとは言われましたが、それだけです。

休むことなく私たちを護衛に使ったり、延々とメタル狩りをさせた

りする……そんな依頼主もいるらしいのですが、優しさと気遣いに溢れているアーミアスさんは違います。

曰く、この待遇はその分未知数の死闘を経験しなければならぬ可能性もあるからだそうですが、私はその程度試練でも苦でもないですね。兄さんもそうでしようし、少年もそう思っています。ですから過ぎたる厚遇なのです。

しかし、確かに皆さんくたびれ果てていますし、アーミアスさんが休まれるなら反対する余地はありません。休んでこそ力を発揮できるのです、そう言われたらもう反論できませんよ。

何をしても良いならば、アーミアスさんの秘められた私生活についてつい、気になって張り付いても仕方ないのではないのでしょうか。やはり私、聖職者にはなれそうにないですね？

というのは冗談です。半分ほど。ストーカーをしたいわけではありません。これは真つ当な、至極もつともな探求でございます。

アーミアスさんが天使様であるということに疑いはございません。しかし、天使様というのは、具体的にどう人間と違うのでしょうか？

あのありかたを見るに、相当何か、根本的などころから違うのでは？聞きこみ調査の結果、アーミアスさんは大地震の際に天使界からウオル口村に落ちてきて、その際大怪我を負い、翼と光輪を失われたことを知りました。輪がないので私たちにもそのお姿を拝むことが出来るのです。

翼なき天使様、つまり外見は一応、私たちと同じように手足がある姿なのです。

ええもちろん、お顔を拝見しただけで天使様と間違えなくわかるのですが、二本の脚、二本の腕、二つの目、という意味です。その点では人間と変わりがないのです。

であるからして、その普段の生活に、どのような違いがあるのでしょう？ 具体的には、天使様とはいえ同じくらいの年齢の肉体の持ち主に見えますから、同じように食物を摂取し、眠り、成長するのでしょうか？

しかし、アーミアスさんの言動はたかだか十五、十六、十七程度の

人間のものではありません。当然のことですが。恐らく外見に一切の変化がないか、とてもゆつくりと歳を取られるのだと思います。食べ物だって沢山はお召し上がりにならないし、朝、彼より早く起きられたことはないのです。私は早起きなんですけどね。

つまり、同じような見た目の体を持つているのに食べる量も寝る時間も違う。それはもう、根本的な違いがあるからなのでしょう。例えば、その寿命も……そうですね、そもそも死の概念がないのでは？

いくら「慈悲深い」からといって、死を恐れる生き物が自らの命を張るような真似ができるのでしょうか？ 私はとても怖いのに。これはアーミアスさんが素晴らしいから、と思考停止してはいけないことです。きつと、慈しまれる心を誰よりもお持ちです。でも、私たちは要因を知るべきなのです。

なので、張り付きます。明日の休みをすべて使って。

ええ、ですから私は強くなるのですよ。強くなって、きつと、アーミアスさんが私たちを守らなくても安心して穏やかな日々を過ごされるようにしなくては。

今まで散々守護をされてきたのでしようから、人間は報いなければなりません。その為には事実を知らなければなりません！ だから秘められた私生活について覗き見をすることはストーカーではないのです！

ええ、兄さんにバレたら同行者が増えるでしょうね、ですから道を誤っているのは私の方なのかもしれませんけどね！

さて理由はもう十分でしょう。私はこの日のためにアーミアスさんの隣の部屋を陣取り、眠気覚まし濃いコーヒーをしこたま用意しました。眠るのは明日の夜です。今日はきつと張り付きましょう。

物音ひとつしない隣の部屋。きつと早々にお休みになられているのでしよう。私は魔法の修練のためにいろいろと書き物をしながら、隣の部屋の音に気を配っていました。

静かです。下の酒場からの喧騒が僅かに聞こえていますが、この宿泊のフロアはとても静かです。勉強も捗りますね。ええ、アーミアスさんもお休みですからきつととても穏やかな時間なのです。

じりじりと揺れるろうそくの火に照らされ、整えられた部屋の中、繰り返し繰り返し炎の魔法をいかにして業火に変えるかをイメージトレーニングし、理論を書き取ります。これをものにできればきっと私は役に立てるでしょう。

私はしばらく、集中しました。

そして、おそらく、アーミアスさんが眠りについてから三時間ほど経つと、ようやくかたん、と小さな音が聞こえました。

私は素早くペンを置くと、くすんだ色のフードの服を被り、身構えます。夜闇に紛れて尾行するためです。

ガチャンと隣の部屋の開く音。階段を降りていく小さな足音を聞いてから私もそつと部屋を抜け出しました。コーヒーをあおるのももちろん忘れません。眠気は既にありませんが念には念を入れましょう。

外は深夜。静まり返るセントシユタインの町並は故郷サンマロウと同じく整然とした美しさを持っています。郷愁めいた感情を覚えながら、月の光に輝く銀の光を追います。アーミアスさんの髪は光に透かされるといつも言い表せないくらいにきらきら輝いていてとても綺麗です。これぞ天使の奇跡なのです。

そして……着いた先は、墓地でした。

アーミアスさんはウォル口村の守護天使様ですから、見知った人がここに葬られているとは思わないのですが。まあ憶測ですので、翼がある頃にはここに飛んでいらっしやっただのかもしれない。

周囲の遮蔽物といえれば民家くらいしかありません。窓側でなく、アーミアスさんから見えず、大通りからも見えにくい位置なんてありませんが、とりあえずアーミアスさんにバレなければよいのです。私は足音を消せるだけ消してこっそり近づき、隠れました。

幸いにもアーミアスさんは目の前の「なにか」との会話に集中なさっていたので気づかれませんでした。

私はその会話を聞こうとしましたが、なにぶん距離があります。これ以上近づいては隠密が得意な盗賊ではない私では、流石に気づかれてしまうでしょう。

しっかりとフードを被り、アーミアスさんからは決して見えないように気をつけながらも目はしっかりと開きます。銀の光に照らされると、月の翼を背中に持っているような、そう幻視してしまうほど神々しいお姿になることを知れたのは素晴らしいことです。ええ、貴重な機会ですから、しっかりと見つめることに専念しました。こんなこと、普段はできませんからね。貴重なチャンスなのです。

ええ私、ストーカーではないですから。普段からこんなことをしていて寝不足になれば、魔法のキレが悪くなってしまうかもしれません。お役に立ってないならば私が同行する意味はないではありませんか。その辺りは心得ておりますとも。

と、アーミアスさんが話すのをやめた途端、緑色の清浄な光があたり溢れ、「なにか」が解き放たれた、と直感しました。

ええ、これはベクセリアでもあつたような光。ここは墓地です。そして天使様なら人間も、死者も同じように見える……と、私たちは思っていました。こうして誰もいないところでの会話を見ると、妖精だけではなく、死者も見えるということがはつきりわかります。

天へ導いてくださったのでしょうか。彷徨える者に、安寧を与えてくださったのでしょうか。道を指し示し、安心して天へ昇っていった幸福な人の感謝の光なのでしょうか。

息をするのも忘れて、その光が闇に溶けていくのを見つめています。跪き、祈りを捧げる姿を神々しく、眩しく。

ああ、私もああやって溶けるように消えてしまいたい。あの美しく優しい天使様に導かれて、見守られて、罪から解放され、刹那の光となつて、そして終われたらどれだけ幸せでしょう。

しばらくそのまま、風の音だけが聞こえていましたが、しばらくして立ち上がり、足取りがどことなく重いアーミアスさんが、私のすぐ横を通り抜けていく時は流石に緊張しました。

せめて、気づかれないようにとさらに小さく縮こまりながらもその月明かりに照らされた横顔を見つめていると、どうしてか泣いているように見えたのです。

いいえ、「よう」ではなく。私は、たしかに、涙のしずくが顎を伝つ

て落ちるのを見たのです。乾いた石畳に音もなく落ちていったしずくは溶けるように消え、誰もいなくなつた墓地には淡い不思議な光だけが残っていました。

その光は小さな羽根のようでした。ええ、きっと、天使様の今は無い翼からこぼれ落ちた涙。私はそれを尊いものだと信じて触れずに、宿に戻りました。

閑話 子天使

宿にもどると酒場の住人が揃いも揃って部屋に引き上げていて、静かな酒場という不思議な光景が見られましたが、そんなことよりもぼつんとテーブルに残り、ぼんやりとした目をして、頬杖をつくアーミアスさんに見つかってしまったことが問題です。

ええ、私、ドアから入った瞬間に見つけられ、にこやかに手招きされてしまったのはもう、逃げも隠れもできませんよ。

てつきり部屋に戻っているとばかり。しかし、恐らく私たちほど眠らない天使様にはもう、朝も同然なのでしょう。眠そうな様子はありません。目元には僅かな赤も残っていませんから、あの涙は幻なのかしらと自分に問い直すことになりました。

「メルティー、夜の散歩ですか？ 今日月は月が明るくて綺麗ですよね」
普段よりもどこか柔らかい口調のアーミアスさんは私にホットミルクをくださいました。あなたの尾行のために夜更かしをして、そしてバレないように戻ってきたところ、発見されてしまったのだと口が裂けても言えません。

曖昧に頷いて、甘いミルクをいただきました。甘くて美味しい。ですがそこそそきついアルコールの風味もするような。私は成人ですが、アーミアスさんはよろしいのでしょうか。

いえ、愚問ですよ。それこそ、何倍も年上の方です。

「なんだか不思議な味がしますね。ふわふわして、なんだか……綿のような心地になります。こういう時、雲を例えに使うのでしょうか、現実の雲は冷たくて、湿っていて、ちっともふわふわしていませんから、きつと綿の布団が一番ふわふわしているのでしょうかね」

「……」

ふわふわしているのはアーミアスさんでは？ 急に不安に駆られました。こんな……可愛いことを言う人、いえ、天使様でしたか？

思わず顔を凝視しましたが、幸いほとんど無表情で、私の心臓は守られました。これで笑顔でしたら命が危ないところでした。

「こんな種類のミルクもあるのです。あまくて、温かくて、綿みたい

な心地で、なんだか不思議な香りがします。ふわふわですね」

「……もしかして、酒をご存知でない？」

まさかと思いつながらつい言ってしまうました。するとゆるゆると首を振られました。

「酒？ 酒のことは知っていますよ。お酒は、ダメです。ええ。師匠もダメだと言っていました。俺は竜ではありませんから捧げられる理由もありません。ですから嗜んだことはありません。」

……これ、入ってるんですか？」

アーミアさんの顔とカップを見比べました。頬に僅かな赤みすらありません。呂律もきちんと回っています。きつと酔っ払ってはいません。休みの日だからふわふわしているのです。そうに違いありません。

私に特別な知識はありませんが、清らかな天使様をだまして酔わせたととなると、ええ、それもこんな、神がその手で丹精込めて作り上げたような素晴らしく美しい天使様を酔わせたとなると神罰によって街が滅ぶ、くらいの神話くらいなら結構ある気がします。背筋が凍りつきました。

師匠もダメと言っていました。と、おっしやいましたね？ アーミアさんのお師匠様。天使の中でもきつとかなり偉い方なのでしよう。ええ、その方が禁じたのですか。私にはちつとも酔いが回りそうにありませんね。そうですか、ダメなのですか。天使様。

アーミアさんがなんともなくて良かったです。本当に。……酔っていないならセーフですよ、神様。お願いします。まだアーミアさんの使命をお助けしたと言いつ張るにはお役に立てていません。「ええ、かなり、いえ、少し……」

「そうなのですね。酒というのはこんな不思議な心地なのですね」
そこで微笑まないでください。いえ、ご褒美には違いありませんが、今はこの国の命運がかかっています。酔っていませんよね？ ね？

「あの、これでセントシユタインの街並みが雷によって焼かれるというごことはありませんよね？」

すね？ その、大人とも子どもともとれない姿、中性的な顔、声、それらをもつて天使様だと思っていたのですが、単にそれくらい年齢の天使様なのですか。私はそんなアーミアスさんに出会えて運が良いのですね。ええ、もつと大人になったアーミアスさんを見るのが出来ないのは残念ですけど。

「あれ、水ですか？」

「醒ますために必要かと」

運ばれてくる水のわけがわからないのか、明らかに今、笑って誤魔化しましたね？ こんなにアーミアスさんがわかりやすいこと、あるでしょうか。いつも、私たちにはその心を容易には読ませないミステリアスな部分が見つかり形を潜めています。

もうダメです。神罰はおのおの下すべき段階かもしれません。この純真無垢な、可愛らしい天使様になってことをしくさっているのか！ と怒られてしまいます。神はなぜ今、見ていないのですか？ セーフなのですか？ 粛清のタイミングではないのですか？

お酒がダメなんですよ？ アーミアスさんのお師匠様がダメだと言っているのですよね？ これは危険なのです。

実はダメだということで、アーミアスさんのお師匠様が突然飛んできて、アーミアスさんを天に連れ帰ってしまうかも知れません。人間界は野蛮だとおっしゃるかもしれませんが。

ダメです。そんなのダメです。まだ一緒にいたいのです。天使様の微笑みを受けてなお、こんなに生きた心地がしないなんて初めてです。

私は水が運ばれてくるまでのあいだ、アーミアスさんがこれ以上ふわふわしないように質問をすることにしました。ぼんやりしているからふわふわしているのでは、と思いました。

「ダメ、なのは発育に悪影響であるから、ということなのですか？」

「ええ。もちろん、大人だからといって呑んだくれてるようでしたら、それは墮落ですから、それなりの処罰はくだされるでしょうけど。俺もこれがバレたらお説教でしょうね」

「お説教……」

「師匠にお説教させるなんて、何時ぶりでしょうか。師匠が前にお説教をしたのは何だったか……師匠……」

お説教ということは、やっぱり天使様の世界に連れ戻されてしまうということではありませんか！ ダメです！ まだ天に戻らないで欲しいのです！

ですから、アーミアスさんに私は、ウェイターから奪った水の入ったグラスを握らせました。アーミアスさんは酔うとこんなふわふわして、ちよつと泣きそうな顔をする天使様なようです。いけません。それに見とれてしまいそうになりましたが、幸い振り切りました。

人間の不注意で天使様に悪影響があつてはなりません。これが清めの水でないことが残念ですがそれも言つていられませんね。ええ、これはダメなことです。

天使様、高潔な天使様。天使様にも秘めたる思いはあるでしょう。しかし、いつも導いてくれる天使様なのです。秘めたる気持ち、それを墮落の毒で吐かせるような、恩を仇で返す真似はしたくありません。そしてまだ一緒にいさせてください。天使様は純真です。ですから、これは事故です。流しましょう、水で。

「お水、いっぱい飲みましょう。たくさん飲めばきつと醒めます。……気づかれなきや、良いのです」

「メルティー……悪い子ですね」

「悪い子？ アーミアスさんに悪い子と言われるなんて光栄の極みですよ。この喜びを噛み締めるためにもアーミアスさんに顔を見られるわけにはいきません。さあ、さあ！」

アーミアスさんは困ったように微笑むと、水を飲みました。まず一杯。

「……ふわふわしますか？」

「まだ少し」

「ダメです！ もう一杯ですよ！ 誰ですかアーミアスさんに飲ませたのは！ もつともつとお水を飲んでくださいいね！」

「もう飲めないですよ……」

あんなに晩御飯が少なかったというのにはですか。やはり天使様は沢山召し上がらない。胃が小さいのかもしれない。

しかし、ダメです！ やめないでください！ あと三杯は飲んでくださいね！

「メルティー？」

「ダメです、ダメです、まだ、お空に、帰らないでください！」

「居ていいなら、ずっと地上にいますよ。どうしたのですか？」

「お説教のために、お空に帰るのかと思ったのです！」

まるで駄々っ子のように言うと、くすくすと笑われてしまいました。そして、宥めるように言われました。

「帰りたいとも思いませんよ。大丈夫ですからね」

「本当ですか？」

「ええ。俺はここが好きなんです」

その優しい笑顔を私は信じました。もちろん、疑うなんてあるはずありません。天使様を信じないなんてそれこそ神罰の対象です。アーミアスさんが水を飲むのをじつと見ていると、流星にちよつと顔を背けられました。凝視は恥ずかしいですよね……すみません。

さて。私にはやることができました。アーミアスさんを尾行するよりも大切なことかもしれません。

「アーミアスさん……このミルクはどのようにして、ここに来たのでしょうか？」

「さつき、親切な男性がですね、夜遅くに外から戻った俺をみて、眠れないならと下さったのですよ。ええ、よく眠れるように二杯。ですがそんなに飲めませんから、メルティーにも」

「その方はどちら様でしょう？」

アーミアスさんは、年齢だけは見るからに未成年です。そんなもの飲ませようとするのはどういう見ですか。そもそも、天使様であると分からなかったとしても問題があります。

「さあ………この宿泊客のようですが」

「なるほど、ありがとうございます」

しかし、直接手をくだすなんて、他でもないセントシユタイムで

やってしまったならリーダーの酒場を解雇になってしまいます。よろしくありません。ですから、なんとかしましょう。解雇にならない範囲で。

そのために私は、お先に失礼いたしました。

ええ、その男性が邪な心を持っていないなら何も致しません。ちよつと行き過ぎた親切なだけなのです。それならいいのですよ。

私は杖をさりげなく構えながら階段をゆっくり登っていききました。そして、廊下につくと顔を上げました。あら、いましたね、不埒な輩。アーミアスさんは天使様ですから非常に中性的です。短い言葉を交わしただけでは性別、分からないでしょうね。

そして間違いなく言えるのは、そのお顔の美貌にはだれだって魅了されてしまうということ。そのまま信仰心が高まれば良いのですが、不埒なことを考える人間は残念ながらいまいます。いましたね。ええ。これからは私がなんとしてでもその火の粉、払ってみせましょう。

不埒な輩は滅んでしまえばよろしいのです。

不自然に廊下にいるお方に近づくと、私は微笑みました。杖には小さな炎が点しています。これくらいなら明かりで済まされます。炎に揺らめく私の顔は、きつと謎めいていて、どこか恐ろしいことでしょう。

「あら、こんばんは」

さて。胡散臭くとも、私は「呪術師」です。「呪術師」、わかりやすく言うならば古い師のようなものでした。本物の呪術師と違って、呪いはできませんが、反対に魔法は使えます。ですが「呪術師」はどっちもできませんから、私には「呪術師」の真似事は余裕です。ええ、嫌というほど見てきましたし。

そして胡散臭くとも本当に家だけは悪名高い、いえ、高名なのです。どうやってこの方を悔い改めさせるか。簡単です。軽く占って差し上げればよろしい。それだけです。思うに、胡散臭い呪術師である我が家は、胡散臭い呪いによって大成したのではなく、その演技力によって成功したのでしょうね。最初は本当の呪術も使えたのでしようけど、それはもう欠片も残っていませんし。

その日、久しぶりに占いをして差し上げたのですが、その結果にご満足されたく、次の日には旅立たれたようです。ええもちろん、ベクセリアに。病魔が去ってから観光客が、減ったようですからね。逃げるついでにお金を落としてらっしゃいませ。

そして翌朝、一睡もせずルイーダさんのところに向かった私は、アーミアスさんは未成年ですからお酒はダメですとしっかりとお伝えしました。天使としては未成年なのですよね？ ええ、ふわふわした可愛い天使様よりも、私は凛々しい天使様であってほしいです。連れ帰られないでほしいので。

閑話 天界日常

じわじわ意識が浮上したのと同時に起き上がる。さっさと起き上がるのが重要だ。翼が邪魔でうつ伏せに寝ていたからか、顔に思いつきり布のあとがついているからな。起きて、身支度をさっさと整えれば、外に出る前に消えているだろ。

身支度といっても俺の部屋には鏡はない。わざわざ自分の気に食わねえところを爽やかな朝から見たくねえだろ。一応くしやくしやになった髪を整えるブラシはあるが、鏡を見なくてもしやんとなるしな。

もともと髪に癖はあるから多少の寝癖は誤魔化せる、と俺は信じている。誤魔化せていなくても本命のリツカたんは俺のことが見えないうし、ほかの天使に見られても一応整えておけばそこまで心象だって悪くならないだろ。

タイツを履いて、ひらひらの天使の服を着て、ブーツをしつかり履けばこれで完成。正直パジャマの体を締め付けない白いゆるい服の方が人間にとって想像する天使に近くねえ？ まあいいか。こんなもの着てちや戦えねえし、空飛んでたら風が吹きこんで寒いわ。

起きるには早く、まだ天使通りも少ないが、これもまあいい。早起きは少なくとも悪印象ではないからな。

どこまでもこうして他人の目を気にしているのは前科があるからにほかならない。天使の中でも翼をもぎにかかったのは俺しかいねえ。そして失敗したせいでズタボロになっているのもな。これで素行が悪ければ問答無用で問題児だぜ。

神が俺たちを創るってわけだ、神はその点は完璧で、遣わされる中に飛べない片翼の天使なんているはずもなく、俺が一番、悪い意味で目立っている。優等生な天使として早くもつと仕事を任せてもらえようにならないければ、つまり目をつけられないようにしなければ愛しの人間たちとたくさん時を過ごせねえからこっちも必死だ。

まあ今回の天使界への帰郷で師匠もオムイ様も満足しただろ。俺は地上へすぐにも行きてえ。生存報告は大事だが頻繁に戻るのな

んて真っ平御免だ。めんどくせえし。いない間に何かあったらどうするんだ。

とにかく明日にはもう文句もねえだろ。今日をいい子ちゃんに真面目に過ごすとするか。さてまずは朝飯だ。それが終わったら、花に水をやって、掃除して、時間になったら師匠に教えをこいに行き、星になった天使たちへ祈りを捧げて……あとは見習いの中でも生まれたてのやつらに顔を出しに行くか。見習いは不安も期待もいっぱいだからな、見習いだけで置いとくのも良くないだろ。

そういや抜け毛、いや抜け羽根がそんなに酷いわけじゃねえと思うが、最近ちびつこが俺の抜けた羽根で遊んでねえ？ 拾っているのを見たんだが。

別に構わねえけど、そういうのはハゲ師匠のようなご立派な翼の持ち主でやると立派な飾りができるって教えてやらねえとな。見栄えが違うからなそもそも。

……抜け羽根が酷くなれば、そのまま翼がすべて抜け落ちたりしねえかな。切り落とすのが無理ならすべて筆つてしまうつてのも……いや……そもそも軸の骨を筆るだけでどうやって折るんだって話だよな。確証がないのにやらかすのは子どもがすることだ。とりあえず目をつけられないようにしないと。

星星へ祈りを。先達たちへ捧げる祈りを。俺は天使界へいる限り、そこまで忙しくなければ「祈り」を欠かさないようにしている。星となった先達たちへの祈り、世界樹への祈り、人々の幸福への祈り、神への祈り。

この場所は「天の祈り」そのものだ。人間たちの祈りの行く先だ。俺は敬虔でなければならぬ。どこまでも下僕として忠実でなければならぬ。それはもちろん、外面的な問題で、それからそう強いられているからで、そして天使が強いられているということは本心ということだ。

父へ祈る。創造神へ。俺を遣わせた神へ。ただ俺はどうにも反抗

期なので、どうやれば翼と光輪を失うことが出来て、どうやれば人間になれるのかをひたすら問いかけ続ける。

もちろん、神は見ているかもしれないが、返事のない安定の助けでくれないっぷりは裏切らないので今のところ神の助けも天罰も下つてねえ。

そんな一見敬虔な俺を、ラフェット様は褒めてくれる。くすぐつたくて、少し罪悪感があつて、だから決して謙遜しているわけじゃねえけど、こんなに穏やかな良い天使を騙さなきゃならないのは気が引ける。俺は全体的に見れば真面目な天使ではない。

だから、いつそう、少しでも期待通りであるために真面目に人間たちの幸せを祈った。すべて嘘じゃなきゃ罪悪感はないからな。

ちなみに師匠は、師匠自身があんまり祈る天使じゃねえからなんにも言っちゃくれねえ。あれくらいのはゲになると祈らなくても常に祈りパワーに溢れているのかもな。だから祈らなくてもいいのだ、とか俺は適当に理由を想像する。

だってよ、俺と違って煩惱なさそうだろ？俺なんてこのまえラフェット様が撫でてくださった時の、おっぱいの一瞬の触れあいを忘れちゃならねえと電波を受信したから忘れてねえんだ。

エレツタ様が抱きしめてくださる時の柔らかさは脳内保存安定だ。むぎゆつと。他にも、詳細は省くが、いろいろむにつとしたことがある。これらを忘れないようにしている。

俺自体は天使の例外にもれずむきだしおっぱい見ても別に何も思わないようにはなっている……はずなんだが、これは一体どういうことなんだろうか。もしかすると未来の俺からの温かいメッセージかもしれないな、これは。

もちろん、その手のことといえば、大好きなりツカたんが入浴する時は絶対覗いたりしないしむしろ覗くような輩が現れた場合は紳士的に天罰・撃退をするつもりなんだが、見たい気持ちが全くないわけじゃないからな、神は天使の設計においては完璧ではない可能性がここで出てきた。俺が変態だからか？

いいや、俺は紳士だから。紳士だから妄想ですらおっぱいを具現化

したことはねえ。本当だ。触れたいわけじゃない。見たい訳でもない。ただ、一つの興味が……いやいや。

分らない。俺が男性型の天使だからなのか？ ペロい。きつと想像をすっかり巡らせて妄想まで漕ぎつければペロリズム高めになるだろ。わかつている。

だが、俺が、俺が女性型の天使だったとしてもきつとリツカたんのが大好きになった。だから煩惱は関係ない。

とりあえず、おっぱいはいいもので、ペロいんだ。柔らかいのは幸せなんだぜ。それを覚えていることも、きつとあとから意味がある。だがこれはきつと修行不足だ。師匠くらいになれば悟りを開いているかもしれねえだろ。これは未来の自分に期待だな。

もちろん、真相はといえば「天使」アーミアスがおっぱいに興味がなかったのは事実だったが、「人間」のアーミアスが人並みにおっぱいが好きなのが事実だっただけで、結果的にグランゼニスへの熱い風評被害は過去への思念を飛ばせる程度の俺の執念ってだけのことだったんだが。

真つ赤になつて恥ずかしがるでなく、自ら触れに行くでもなく、ただ何も感じていないようなポーカーフェイスでおっぱいについて忘れられない、ただの思春期の妄執が天使すら突き動かす煩惱になっただけだ。

もちろん、俺はそれよりもリツカたんをペロるほうが大事だった。

可愛い天使な天使たちの戯れをゆつくりじっくり楽しんでいたのに、イザヤールったら邪魔するなんてひどいじゃない。勢いあまつて、天使たちの邪魔までするなら私、あんたの翼を筆つてまで止めたんだから！

ほらみて、あの天使たちの空間を！ 本当に無垢な可愛い子どもたち！ そしてその子たちに囲まれたアーミアスくん！ こうして見ると昔と変わらず可愛い！ ちよつと大人っぽくなつたけれど、ああして遊んであげる優しいところはちよつとも変わらないし！

本当に天使で天使なのよね！

「……私も天使、エレッタも天使だろう」

「馬鹿、喻えなんだから！」

床、もとい絨毯の上に座ったアーミアスくんがたくさんの子天使たちが集まるの。一人一人優しく頭を撫でてやって、何かを教えているみたい。私が近づいたら上級天使が近くにいるってことで萎縮しちゃう子もいるし、ああいうのは大人がいないから楽しいものなの。だから詳細はわからないのだけど。

でも、まったく見えない訳じゃない。何枚かの羽根を組み合わせているのも見えたから……流行りの、というよりは伝統の羽根遊びじゃないかしら。他に遊べるものもここにはないから。

あんまりあの手の遊びをする子じゃなかったけど、師匠でもない私はアーミアスくんのことをあまり知らないのね。あんなふうにかくさんの天使と一緒に戯れているのも初めて見た。

大きくなっても変わらず可愛い。あのふわふわな頭をたくさん撫でられるイザヤールはいいなあ。この男はめいっぱい褒めるといよりは、褒めるときは静かに称えるって感じの教育なんだから、きつと頭の触り心地を知らないのよ、勿体ないわね！

「さつき講義のあと私の抜けた羽根を拾って出ていったのだが、まさかそのために……？」

「……」

そのためじゃなかったらなんだって言うつもり！

イザヤールは間違いなく上級天使として実力のある天使。誰からの信頼もあり、その弟子もエルギオス様の再来と誰もが思うような優秀な守護天使になったのだし。

だけど、羽根遊びの羽根の製造元には向いてないと思うの。

遊んで作った飾りを身につけたり、眺めたりしているとやっぱり持ち主のことは思い浮かぶ。

だからみんな憧れの人や上級天使のものを使うのだけど、このままじゃ無垢な子どもたちが憧れのアーミアスくと遊んだあと、「これは誰の羽根なんですか？」なんて聞いて、返事が「師匠のイザヤール

様のものですよ」だったら震えあがるに決まってる。自分にも他人にも厳しいつてもつばらの評判なんだから。

地上にいつまでも留まるアーミアスクンを捕まえて帰ってくるのはもう名物だし。ええ、アーミアスクンは人間大好きだから、毎回目に見えて落ち込んでいるものだから余計イザヤールが怖く見えるのよね。

というかそのせいで叱られないか不安になっちゃうに決まってる。アーミアスクンが叱られているのはもう、見たことのある子天使ちゃんはいないだろうけど、誰もが想像できるのよね。顔が怖いから。

私の羽根をあげましょう。まだマシでしょう。子天使ちゃんたちが凍りつく前に。

「……顔が怖い、か……」

天使で天使な天使たちのところへ行くと、アーミアスクンはあわてて立ち上がって、私に頭を下げる。真面目なんだから。それを真似した子天使ちゃんたちも可愛い。

私はニコニコしながら頭をあげるように言い、羽根をぶちぶちと筆った。天使たちがかわいいからちつとも痛くないわ。幸い、まだ糸を通していないみたいだし間に合うよね？

「……エレツタさま？」

「ごらんしん！」

「いたくないんですか！」

「ふわふわー！」

「はねがいつぱい！」

「ちつとも痛くないよー、怖くないからねー」

目を見開いて固まるアーミアスクんと、降り注いだ羽根にふわふわになる子天使ちゃんたち。これなら紛れてどつちがどつちかもわからないでしょう。

「材料の提供、感謝いたします。……エレツタ様に一肌脱いで頂いたのだから、俺もすこし」

「そういえばアーミアスクン、翼については触れちゃダメだったよね

！ 二度としないでね！」

ぼろぼろの翼をそれ以上ぼろぼろにするのを許すわけにはいかない！ むしろうとするその手を止めると、理を発動させたつもりはなのだけど、生真面目なアーミアスくんはぴたつと止まった。……うっかり理が発動してしまったかもしれない。アーミアスくんは真面目なもの。

「え、ええ、そう仰るのであればもちろん」

「本来なら勝手に抜け落ちた羽根を使うものだからね！ でも原材料のことを考える子天使ちゃんがちよつと不憫だったただけだから」

「原材料……ですか」

アーミアスくんはちらりと自分の師匠のことを見て、首をかしげ、でも私の手前だからか曖昧に頷いた。

そう、そうだった、アーミアスくんはいい子なの。優しくて、気遣いができる子。厳しいイザヤールにあれだけ長いことついていて音を上げないなんて、双子のラヴィエルか師匠のエルギオス様くらいのものなのに、ついていく子。

イザヤールのことを心底尊敬しているからハゲのことが頭に浮かんでもなんにも思わないのかも。子天使ちゃんたちが怯えることも分らないのかも。ええ、怯えさせたのは翼を塗る奇行に走った私ですけど！

「じゃあ、そういうことだから……」

「はい、ありがとうございます。あの、これをどうぞ」

私は何かを被せられたみたい。ふんわり笑う天使ちゃん。本当に可愛い！ って抱きしめたくなるけれどイザヤールの視線が背中に突き刺さっているからやめておく。私はとりあえずお礼を言っ立ち去った。

被せられたのは、羽根で出来た素敵なりーすだった。人間だけじゃなくて天使にまで天使でどうするのよ！ ねえ、イザヤール、あなたのところの天使は本当に天使！ イザヤールの羽根でしょう、これ！ 天使な天使が手を加えるだけでこんなに天使の羽根になるなんて！ 言っている意味が自分でもわからないけれど本当に！

え、贈り物をされたことがない？　もしかして落ち込んでる？　イザヤール？　大丈夫？

普通は師匠になにか贈ることはないから、ね？　ごめんなさい、ほら、イザヤールもその剃りあげた頭に被る？

……案外子煩悩、いえ、弟子煩悩なんじゃないかな。もつと褒めてあげればいいのに、あの笑顔が好きなら。大切なら。

それから、アーミアスくんと遊んでいた子天使ちゃんたちは羽根の飾りを大事につけていたけれど、アーミアスくん自身は身につけてなかった。服装が真面目だから？　あれくらいの飾りすら、真面目に考えて付けないのかな？　と思っていたから私は何にも違和感がなかった。

でも、そうね、誰よりも天使らしく、模範的で、優しいあの子は……翼を疎んでいた。あの出来事を、百年の歳月が癒したとばかり思っていたのは愚かだった。

幸せになれたのだから、ええ、終わりがよければ全て良しなのだけど。

52話 魂父子

青い不思議な光が、ぬしさまの頭の近くにともる。アーミアスさんの背中に庇われたまま、その光の正体を見て、あたしは思わずあつと、声をあげそうになった。

「オリガ……」

お父さん！

思わずアーミアスさんの手を振りきって、懐かしい顔を食い入るように見た。本物のお父さんだ、間違いなく！ 青い光に包まれて、空中に浮かんだ、その姿は……どう考えたって幽霊だったけれど、あたしのところに帰ってきてくれたんだ！

「オリガ、欲望に目が眩んだ村の連中にあんな目に遭わされて、怖かったろう」

お父さんはそう言って、怒りの表情を剥き出しにする。あんな目つて、ぬしさまを呼ぶように言われたこと？ それとも、こつそりこつで祈るように言われたこと？

でも、あたし、それについてもつとしっかり言えるんだよ。それがいけないことだって、分かったから。ちゃんとダメなことは分かっている。

「そちらの方は村人ではないようだな。たしかに、ぬしさまの姿で丸呑みにしたならば、オリガを怖がらせることにほかならない。忠告に感謝してこの姿で話すことにする」

『ぬしさま』の正体はオリガさんの父上だったのですね。娘を想う気持ち、それを否定することはできません」

「……あなたは、私を迎えにきたわけではないのか？」

お迎え？

なんとなく、何かが引つかかる気がして、あたしはアーミアスさん

に振り返った。彼はお父さんを見てどこか厳しい表情をしていたけれど、あたしの視線に気づいてすぐに優しい顔になった。

「いいえ。あなたがそこにいたこと、そしてオリガさんと会話できること、その奇跡をただ見守ることのみです。それで未練が果たせるならば」

「……感謝しよう」

アーミアスさんはあたしにどこまでも優しい顔をしていた。透き通った表情で、お父さんとも違う包み込むような優しさを持って。

お父さんはあたしが理解できるように嵐の中、沈む船の中ぬしさまに助けられ、そして死んでしまったあとあたしを見守っていてくれたことを話してくれた。そして。

「オリガ。村を出て私と一緒に住もう。もう寂しい思いはさせない。強欲な連中に食い物にされることもない」

「お父さん……」

「心配はいらない。また二人で暮らそう」

嬉しかった。お父さんはあたしのことを想ってくれているってすごく感じたから。その手を取りたいと思った。でも、それは、きっと、良くない。それも分かった。

でも、あたしは、迷った。なんとなくアーミアスさんならどっちも正しいって言ってくれるような気がしたけれど、もう頼っちゃいけないって、それもわかった。

「オリガー!!」

叫ぶトトの声を聞いて、青い光に包まれた、死んでしまったお父さんを見て、あたしの頭はさあつと、晴れた。あたしの手は青くない。透けてもいない。お腹がすいて、息をする。それが全てで、それが答えなんだ。

「オリガのお父さん！ 僕はオリガを一人にしないって約束する！ お父さんや村の人がオリガにもうあんなことをさせないって約束する！」

「トト……」

「オリガのお父さんが心配して見に来ちゃうくらい、村は酷かったん

だ、でも僕は……オ리가がいてくれないと、寂しいよ……」

お父さんはしばらく目をつぶった。そして目を開くと優しく笑った。張り詰めていた何かが解けたようなそんな優しい笑い方。

「私は、勘違いしていたのだな。死者が出しゃばってしまったようだ」

空気が緩んだ瞬間、アーミアスさんが地面に膝をついた。あんな怪我をしてたからなんだと思う。苦しそう、なんだけど、なぜか笑っている。幸せそうに。なんで？ 駆け寄った仲間の人たちに起こされながら、それでもあたしに笑いかけてくれる。

「ああ、心配はいりません。……ほっとして力が抜けた、だけです。俺のことはいいですから、お父上とお別れをきちんとしてしましよ、う、ね？」

「どう考えてもひどい貧血ですよアーミアスさん……」

「ガトウーザ、今はいいですから」

「はい。ええ、分かっています。私も色々わかってきましたから。とりあえず腰をおろしましょう」

二人に促されて、あたしはお父さんを見た。穏やかな顔をしたお父さんは強くなる光に包まれて、だんだんと薄くなっていく。アーミアスさんの言葉通りお別れなんだとはつきり分かって、ぬしさまの前に駆け寄る。

「オリガ。私はいつも見守っている。姿は見えなくなってもずっと一緒だ」

「うん、うん、お父さん」

「トトと、ツオで笑って過ごせるように祈っているよ……」

光が薄くなって、そして一瞬強く光って。

お父さんは消えてしまった。あとに残ったのはお父さんの漁師のお守りと、金色の果物。果物からはぬしさまから感じたような恐ろしいような、近づいてはいけないような……そしてどこかアーミアスさんみたいな感じがした。

ここではないどこかから、あたしたちの届かない遠くから、来たんだ。

おばさんたちに網の干し方を教えて貰って、干物の作り方を学んで、ここで生きていく。

あの天使様のような優しい人の言葉を胸に刻んで、お父さんのお守りをしっかりと握って。

「ガトウーザ、もういいですよ。すっかり治ってますから。傷跡だつてないでしょう？ 顔色が悪いのもちよつと血が足りていないだけなんですよ」

「……はい、そうですね。あとはゆっくり休むだけですよね」

「はい。……俺はあなたたちに心配をかけてしまったこと、それは申し訳なく思いますが、あの場において庇わないという選択をとることは出来ません。そうしなければ百年でも二百年でも後悔します。ですから、気落ちしないで誇りに思ってください。あなたのおかげで今俺は生きています」

透き通るように青白い肌の天使様はそう仰ります。ベッドに全員で押し込んだのもう大丈夫だとも分かっています。

でも。もし私がつと素晴らしい技能を持つヒーラーなら、もつと負担を減らせたのではないかと、思いますし、そもそももつと私が強ければあの戦闘は早くに終わったのではないかと思えます。

僧侶という職業には忌まわしい思いしかありません。偽りの信仰、腐った教会、金と欲望ばかりの世界。その中枢に生まれた私には、いくら僧侶が回復力は強くとも、私としては戦力としては中途半端に感じるのです。

ですが私がほかの職業になればそれこそみなさん困ってしまいます。なにか新しい道を見つけてるべきなのは分かっているのですが。

とりあえず、これ以上天使様を心配させてはいけないのは理解できます。メルテイーに引っぱたかれる前に私は退散しました。

彼女は最近本当にハキハキするようになりました。昔は怖がりで、自分の力に怯えて、家を憎んで。でも今は違います。前を見るようになりました。それが眩しい。私は前のままです。

明日には故郷の大陸への船を出してくださるそうです。それに乗って船着き場へ行き、カラコタを通り抜け、ゆくゆくは故郷サンマロウにたどり着くことでしょう。

どうかそれまでに私が歩むべき道を見つけていることが出来れば、良いのですが。私に信仰心はありません。信じているのは天使アーミアスさん、それだけなのです。

やはり直接見て、感じて、助けてくださる存在を信仰してしまうものですよ。神は助けてはくださりません。見えません。感じられません。

私は、僧侶として失格なのです。

しかし、私にも力の息吹を感じる瞬間があります。この世に循環する何か。偉大で身近な何か。その正体を知ることが出来れば、何か変わるのでしょうか。

美しき天使様、どうかお導き下さい。

船着き場くカラコタ橋く石の町編

53話 船便

俺の左半身はほぼ乗っ取られた。茶髪の男の仕業だ。もつと言うなら腕をしつかり掴まれていて、つか抱きしめられている。暑い。むさい。体重負けはしているが職業柄引きずって進めるのが幸いだ。俺を休ませようとしているようだが余計に疲れていることには気づいていないようだ。まあいいけどな。

昨日のは俺が脆いんじゃない、敵が強かったただけだ。あともう回復したから構うな。いいから構うなって！メルティーとマティカなら可愛いからいいけどガトウーザは同年代の男にくつつかれたとしたらむさ苦しくは感じねえのかよ？

むさ苦しい、少なくとも俺はそう感じる。間違ってもいい匂いはしないし、柔らかくもない。可愛い可愛い人間には違いなくとも、どうせなら可愛い女の子がいい。俺の感性はこの点では普通だと分かっているぞ。

俺だつて男だから、やっぱりこう、ほら、男の胸筋押し当てられるよりは柔らかい方がいろいろいい。ムキムキに抱きしめられているわけではないのが救いかもしれないが、ムキムキだったらムキムキなりに憧れがあるのでかえってよかったかもしれない。いつかムキムキになって師匠みたいになつてこいい顔になりてえ。

てか、くつつくなら誰よりもリツカたんがいいよな！リツカたん、ペロ！だが俺が情けなくぶつ倒れたのは見られたくないからこれでもいい。脳内のリツカたんペロペロ。アツ……笑ってくれた……ペロペロ！全部俺の妄想！むなしい！

せめて俺の負傷の記憶はウォル口の墜落事故までにしておいて、あとは回復したらリツカたん成分補充しに帰るからな。まず大陸渡つてルーラの行き先登録が先決だな。そしたら俺は帰るぞセントシュタインに。

天使界？俺の帰るところはリツカたんのいるところだからな！

ハゲ師匠がいない天使界は……ちよつと寂しいからあまり帰りたくない。

なんだかんだ言つても俺はハゲのことを慕っている弟子だからな。禿げていること以外は全てにおいて尊敬している。禿げていることも普通にスキンヘッドに剃ってるだけだと思う。なんていさぎのよい。痺れるぜ師匠。真似はしない。

飯食つて寝たら昨日の負傷はほぼ治った。ちよつとふらつくのはまあ昨日の今日だしな。とりあえず今日は戦わないことを仲間たちに約束させたられたが、まあ妥当だろう。

ところでそろそろガトウーザは離してくれないか？ 人間を振り払うなんてやらないが、そろそろ、暑い。やっぱ撤回だ、暑苦しい、離せ！ ……もちろんやんわりとしか言わないが。キラキラした目で信じきつてる相手をあまり無碍にもできない。

とりあえず漁師に船を出してもらおう約束を取り付け、準備までのあいだに装備品を物色することにした。とはいえ新しい大陸の装備品の方が普通に考えたら有用だろうよ。向こうの方が魔物も強いらしいしな。

てか……ゴム長靴って装備品でいいのか？ お鍋の蓋のように日用品も防具になるのか。

まあ金に困ってるわけじゃねえし。後衛連中にはみかわしの服を、マテイカにはブーメラランプパンツを、俺はスライムピアスを買った。マテイカのパンツについては俺がシヨタコンな訳ではなく、弁解の余地がある。守備力+8。それが全てだ。あと本人に頼まれた。もちろん服の下に履いている。俺も誘われたがそんなピチピチのパンツを履く趣味はねえ。

それだけ履いてあとは露出なんてするわけねえよなあ、……なあ？俺が表情筋をフルに使つてにつこり笑うとマテイカはいい子だからちゃんとズボンを履いた。若い人間の間で露出が流行っついでいても、腹が冷えるのは良くないと思うぜ。

余談だがピアスを買ったところで品行方正に見せかける俺にピアスの穴が空いていなかったのこの際だろ、ブツツと空けた。上級天

使にバレてもただの装備品だし、別に特に意味が無いならいいだろ。叱られたら素直に穴埋めるわ。

だが空けた瞬間ガトウーザが卒倒したのでこいつは僧侶のわりには血に弱く、向いていないのは本当なのだろうと俺は正直同情した。適した職業、見つかるといいな。俺もできる限り協力するぜ。

何故か同時にメルティーが発狂したので落ち着けと頭をポンポン撫でていたらマテイカも、おれもおれもと擦り寄ってきたので俺の両手はあえなく塞がった。その際ガトウーザはメルティーによってべりつと離された。とりあえず人間たちはかわいいので役得なのには違いねえ。

二人とも可愛いな。ガトウーザも可愛いぜ、一応。ちよつとスキンスリップがついていけるレベルではないってだけのことだ。少しばかり控えてくれ。くつついたら天使の加護がうんぬんとかないから。俺なりの加護をかけたつもりだがなんもないだろ？俺はペーパーのびよびよ天使なんだ、所詮はよ。

そうそう、ツオの様子はといえば、オリガちゃんも元気に働いて生き生きしてるみたいだし、やっぱり平和な日常が一番だぜ。

船旅はなかなか珍しい体験だったが、もう少し長かったらかなり酔ってやばい事になっていたかもしれない。頭でわかっているつもりでも居心地が悪いあまり空へ逃げようと体が勝手にするんだが、翼はもうないしな。

心配性のガトウーザが俺が落ちるんじゃないかって、がっちり掴んで離さなかったから船から落ちる心配はなかったが、もう少し風に当たらせて欲しかった。善意の暴走つてやつかよ。てかまたお前はくつついているのか。そろそろ離せよ。怪我する要素なんてないだろうが。

あ？船が怖い？仕方ねえな。いくらでもくつついていいぞ。

……団子になった。さつきまでマテイカお前はしゃいでただろ、メ

ルティーは船の上でもふらつくことなく歩いてたじやねえか。

くつ……かわいいな畜生！

そんなこんなで俺たちが戯れているあいだに船着き場に着いた。お礼をして、とつとと先に向かおう。地図にカラコタ橋というところが載っていたからな、そこまでは行きたい。

船着き場に着くやいなや兄妹は挙動不審になり、知り合いがいないとみるとあからさまにホツとしたのが気になるが。……うーん、嫌なら別の人を一時的に雇った方がいいか？

「大丈夫です、大丈夫ですから！」

「兄さんの言う通りです、何事もございせん！」

「まだ何も言っていないよ」

まあ大丈夫ならいい。今更他の人を探すのも大変だし、実力者かつ信頼出来る人間を見つけられるかどうかも分からねえ。マティカと近接二人旅つてのは難しいだろうしな。

とりあえず俺はそろそろガトウーザを振り払い、魔物に見つからないようにカラコタへ向かうことを宣言した。

が、まあ、新天地の強い魔物たちは俺たちを見逃してはくれず、何か戦うことになったのだが。許してくれ、不可抗力だ。あと、三人が張り切ったから俺は剣を一度しか振るっていない。気遣いに涙が出そうだが、別に普通に戦えるから気にしなくていいからな。

そして少々歩いて着いたカラコタ橋というのは、なんつうか、スラムというか。流れの人間たちの街であり、行き場の無い人たちの集まりというか。空気が汚い。汚染されているというよりは普通に汚い。

人々はせかせかと歩き、見るからに力強い人間を恐れるようだ。

俺はウォル口村の守護天使だからな。ほかの町については詳しくはわからない。だがここにもきつと、守護天使がいる……よな？ 最近いねえから「いた」ってことだが、ちよつと判別つかねえな。

まあいい。ちよつと見学したらセントシユタインに戻るか。

そのつもりで橋だけは渡りきってみようとしたのだが、俺はそこで、目を奪われた。反射的に手を差し伸べたくなる存在が、そこにいた。

青い光に包まれた存在。幽霊。それも、俺みたいなひよっこでもひ
と目でわかるような……永い年月をさ迷った悲しい子、だ。

54話 霊

目を見開いて自分を凝視する彼は、天使様のように見えた。私のことが見えているのかしらとも思った。でも彼は声をかけてこなかったし、視線の先には、行き倒れたような男性が転がっていたのでこちらを見ているのだろうと勝手に納得した。そう思ったかった。

かつてのエルギオスのように、強い意思を持った目をしている。星を宿した目だ。キラキラ光る星ぼしのすぐしたで育ってきたような、目。

ああ、懐かしい。思わずその手を取りたくなる。おかえりなさいって言いたくなる。別人だと分かっているのに、違う気配が確かにするのに、顔だつて全然違うのに……よく似ている。

「……人間を天使と見間違えるなんて」

私を知るエルギオスにも天使様の光輪はなかったけれど、まさか翼すらないこの少年が天使様のはずもない。仲間らしき普通の人間が訝しそうに少年を見ているのだし、人間と行動を共にする天使様なんて……いるはずもない。

私はそう信じ込む。私をはつきり見ている目を見ないふりして、過去の未練を断ち切るように。私はエルギオスに会わなくちゃいけない。他の存在を気にかける時間ももう、ない。

すれ違う。何もなかったように通り過ぎる。ああ、懐かしい気配がする。

間違いなく、あの少年からは懐かしい天使様の気配がするの。そんなことありえないはずなのに、美しい白い羽根が散る時のような儚さと、私たちをその翼で包み込むように守護してくれる優しさの両方が感じられる。

彼はその場で、しばらく物言いたげな様子で突っ立っていた。そして、ゆっくり振り返って、やっぱり私を、こちらを見て、まだそこに留まっている私のことを意外そうにしていた。

手が伸びる。彼の手はエルギオスの手じゃないのにどうにも重くなって仕方ない。

「あの、その娘さん……?」

私は、逃げた。この天使様と話せばエルギオスを止める前に解き放たれて、空へ旅立ってしまうような気がしたから。そんなことあるはずないのに。

とにかく、立ち去らないと。翼も輪っかもない天使様のようなその少年の瞳に囚われるしまう前に。

人間のように振る舞うあの天使様が地上でわざわざ何をしているかなんて簡単に想像がつく。あの異変によってきつと空から落ちてしまった天使様は、かつてのエルギオスのように人のために戦おうとしてくれているのでしょうか。

ほかの天使様を私は知らない、それでもあの瞳の優しい光は二人とも似通っていたのだから。

彼の仲間が、かつての私たちのように……裏切りの形を示さなければ、良いのだけど。願わくば、二度と悲劇が起こらないように。

「アーミアスさん?」

「……ああ、行ってしまいましたか」

「一体どうなされました?」

「ああ、特にもう何も無いですよ。ただ女性とすれ違っただけなので」「い、言い方が怖いよう」

人ならざる者が目の前にいるつてのに、しつかり俺の服の裾は握るつてのに、幽霊は怖いのかマティカは。まあ見えないものつて得体がしれないから怖いよな。見えたらあんなべっぴんさんの虜になっちまうかもしれねえけど。

その手のことを気にしないらしいメルティーはちよつと怯えたよ
うな顔をしたガトウーザに縫られて迷惑そうな顔をしているし、さつ
さと戻るか。

セントシユタインでリツカさんの優しさと温もりに包まれて一晩
休んだら次は……そうだな、カラコタで一応ちよつと聞き込みでもし

て、それで次の街へ行くか。

幽霊の女の子はもうここには帰ってきそうにないし、この街ってか橋におかしな異変は起きてなきそうだから、一応だ。

てかよ、世界中にバラバラに落ちているはずの女神の果実だぜ？

この大陸には一つもなくたつておかしくねえんだ、のんびりはしていらねえけど、先は長そうだしな。慌てず堅実に進んでいったほうが賢明だろ。

行き倒れっぽいが、もしかしたら本物の追いつきかもしれないから今日はカラコタの住民に話しかけるのはよしておく。

すべての人間が、いや、すべての魂が魔も光も関係なく救われるべきであったとしても、俺が救いたくても、それは仲間の三人の安全を確保してからの話だ。雇い主の俺にはその義務があるし、三人には確かな恩と感情がある。

悪いが俺は、初対面の人間より知り合いの方を取る鼻根バリバリなひよっこ天使だからな。許さなくていいから、俺を恨んだっていいから、そういうものなんだよ。

じゃあとつととルーラで退散しよう、まず何より先にリツカさんに会いたい！ 先走って、フライングペロをしてしまう！ ペロペロ！ まだ上空なのに！ リツカたん！ 今日もう元気か？ 元気だよな

?!
やったぜリツカたん！ ただいま！ 今日もう健康そうで何よりだぜ！

ところでなんか変な気配しねえ？ え？ 釜？

こいつ喋ってね？

天使？ こいつが？ 何つつたけ、カマエル？

天使か……無機物の天使とかいるのか。初耳だ。俺の身体も自分ではわからないだけで木から出来た人形とか、ガラス玉で目ができているとか言わないよな？ 大丈夫だよな？ 腕つねったら痛かったから大丈夫だよな？

とりあえず、それより俺は天使よりもリツカたんの用意したふかふかベッドに興味があるから今日はもう寝るわ。また今度な。てかお

前の主人になった覚えはねえ、懐くな懐くな、つい可愛くなつちまうだろうが、情を抱かせるな！

俺がカマエルと揉み合っているあいだ、リツカたんがニコニコしていたのが救いだった。おかしな心霊現象だとは思わないリツカたんの懐は深く、メルタルが強い。流石だリツカたん！

てかよ、今日もラヴィエル様の視線が痛いんだが。だが、俺は前を通り抜ける時に会釈するのにとどめた。

リツカたん含めこの宿屋の人たちに見えない住民がいることを知らせて驚かせるのは酷だし、彼女はここの守護天使ではないから中途半端に期待を抱かせるのも良くないだろ。というのが人間たちへの建前だ。

何でここにいいのかちつとも分からねえけど、こつちに用もなさそうで、ただカウンターの隅に座っている。師匠の双子だからきつと俺なんかよりとんでもない天使パワーで色々できるんだろうが、頼る時でもないしな。

師匠の居場所を聞きたくて聞きたくて、もし話しかけたでもしたら問い質してしまいそうだ。それは迷惑だろうし、不敬でもあるだろうし、ともあれ天使界にハゲ師匠がいなかったということが俺への回答で、すべてなんだ。

「あのストロスの杖、いいと思いませんか？ 二人ともに持っていただけたら麻痺を恐れることはありませんね」

「アーミアスさん、その、装備を更新してくださいさろうとするのはとても嬉しいんですけどこの前も買っていただいたばかりじゃないですか」「この前？ そうでしたっけ。防具も武器もあるにこしたことはありません。命に関わりますからね、それだけで解決できるならば買っていただいた方良いのではないのでしょうか。金があっても腹は膨れませんが、武器があれば身を守れます」

アーミアスさんについて最近発見したことがあります。彼の金銭感覚は私たち人間のものとは少し違うということです。

彼は教会の肥太った司祭のように贅沢をしたり、無駄な物を買うことはありません。食べるものも身につけるものも少しの贅を尽くそうとしたりもしません。

しかしながらことに身を守るということになる。財布の紐がとても緩いのです。そしてそれらは自分よりも私たちに向いています。

ああ天使様。私たち人間を守ってくださいろうとするその思い、感服いたします。天使様はやはり救い主。助けてもくれない存在とは違う。

ですがその使い方は少々行き過ぎではないですか、ストロスの杖を二本も買って、ほかの防具まで買おうとして、財布が持たないのでは？ なまじ質素なことに慣れていらっしやるので財布の中身がカラに近くとも気になさることがないというのが裏目に出ています。

このガトウーザ、節制には少々自信があります。少しばかりなら進言してもよろしいですよ？ メルティーも領きましたし。

「アーミアスさん、たくさん購入されるのは……」

「ガトウーザにはこれが似合うそうですね、こちらにすればどれだけ頼もしくなるのでしょうか？」

「このガトウーザ、誠心誠意尽くさせていただきます、ますます頼りにされるようなヒーラーとして……」

「兄さん、まったく頼りになりませんね」

何を言うのです、妹よ。

アーミアスさんに頼られるような存在になれるなんて素晴らしいことではありませんか。徳をダイレクトで積めるのですよ。

私に諫めるなどの不敬な行動はやはりできません！ ええ、すべてのその行動には意味があり、有難くも守護されている我らが口を出すなんてよくありません！

「兄さんは一貫性がありませんね。」

アーミアスさん、そんなに買うとこの先にある町、サンマロウでの買い物ができなくなるかもしれません。サンマロウには靴の専門店もあり、個人にあつた装備を整えるのには最適です。最低限にすべきかと」

「そうですか、忠告感謝します。では……そうですね、減らしましょうか」

聡明なメルティーが間違っているはずもなく、天使アーミアさんが間違っているなんて有り得るはずもない。何が正しくて、何に従えばいいのか。一貫性のないとはまさに私のことでしょう。

しかしながら、私は、そういう人間なのです。メルティーが間違っていないから、私はもう口出ししませんし、アーミアさんは絶対なのでメルティーの言葉を受け入れたことも絶対なのです。

自分の指針がないのです。何も信じられないのです。でも、輝くような存在が近くにいるので、私はそれにすがるしかないのです。年下の、金髪の少年が呆れたように見ているのも、私は反論しないのです。自ら考えることが出来る人間こそが正しいのです。

ですから、ですから、天使様に従うのです。その超越した存在に救いを求めて。

ところで不埒な気配を感じたのですが、ご存知ないですか？ あのような美しき方に醜い私欲を剥き出しにしないで頂けますか？

見ていただけ？ ……私は一応神に仕える者ですから、無益に血を流すのはよしておきましょう。

しかし次はありませんから。血を流さずに腕を失うのは嫌でしょう？

……ごろつきを見送りました。カラコタは相変わらず治安が良くありません。

このようなことに、優しく強くなったメルティーに手を汚させることはありません。無垢な子どもに手をくださせるほど腐った人間ではありません。アーミアさんの視界に収めることはそれよりもあつてはなりません。

人の欲望を、天使様はきつと私よりご存知でしょう。ですが少しでも、私は見て欲しくない。

自己はなく、エゴがあり、私は臆病で、根無し草。変わる日は来るのでしょうか。

ただ、風の声だけが聞こえます。泣き叫ぶ子どものような声で、孤

独な老人の死を伝えます。人形の悲哀を教えます。それが本当でも嘘でも、私は聞こえないふりをして、妖精たちの囁きをなかつたことにします。

私にふさわしいことはなんなのでしよう。

55話 誤解

今日もリツカたんぺろぺろ！ 朝の笑顔は目に沁みて、働く姿は眼福、朝の祈りを欠かさない敬虔さは光栄かつ感動！ 可愛い、健気、敬虔！ これが3K、オールウェイズぺろい。リツカたんぺろぺろ！ それに加えて健康だから4Kでもいいかもな！

それを見抜ける俺は朝から一流ペロリスト！ ペロい、ぺろっぺろでぺろすぎる！ これは、ぺろい！ だからセントシユタインに戻るのはやめられねえ！

リツカたんに会えない日々とかマジ無理だから！ リツカたんあつてこそその俺だから！ リツカたんの青いおかつぱの切りそろえただいすきラインをいつか触れてみたい。

ぺろぺろ！ リツカたん！ だいすき！ いちばんすき！

……ふう。んなわけで、リツカたんの最高な居心地の宿屋を盛大に惜しみながらチェックアウトし、俺たちはルーラでカラコタ橋まで戻ってきた。出かける時のリツカたんの今日の気をつけてね、を俺は何度も反芻し、リツカたん充電完璧だ。あー、もう今すぐ帰りてえ！ リツカたん！

だがそうもいかねえ、リツカたんが働いているのに俺が務めを果たさなくてどうする。二度と顔を合わせられなくなるだろうが！

帰れるとなったらすぐ帰りたくらいだ。この使命をちやつちやと済ませて俺はリツカたんが永久就職するその瞬間まで宿屋で働いていた。リツカたんが永久就職したら、俺は迷惑のかわらないように身の振り方を考え直す、恐らく見送りモードになってやっている事は変わらず彼女の人生を惜しみながら……いやそんなこと考えたくねえし！

リツカたんは、リツカたんは、俺がぺろるんだ！ その為に今すぐ天使やめたい。仮に今すぐ天使やめたとしても、危険物すぎる女神の果実はすべて回収するからやること今と変わらねえけど。変わらねえけど俺が人間なら！ 俺は！ だが人間として生まれていたらリツカたんに会う大昔にくたばってたはずだから困ったものだけ。

そんでだな、戻ってきたカラコタ橋でちよつくら情報収集しようとも思ったが、あの兄妹が何故かそこかしこに威嚇してたからやめた。本人たちには言わないが、育ちがいい部類の彼らにはここの空気が合わないんだろう。

ガラ悪いからな、ここ。さつさと抜けるか。今日は道塞いでるやつもいねえからな。

「さてどうしましょうね、この先のサンマロウに向かうか、あちらの山へ回るか……」

「ねえねえ、サンマロウってどんなところ?」

「行ったことはないのですが、なんでも、花の都らしいですよ。広大な花畑が有名で……たしか、近くに遺跡もあるような由緒ある町ですね」

そんであの行動が似てる兄妹の故郷だ。見てりやわかるが、話も聞いたが、いろいろと家とは浅からぬ因縁があるらしい。メルティーは賢者を目指すということでもう吹っ切れているみたいだが、ガトウーザはダメそうだ。とうとう自分のことを僧侶とは呼ばなくなつたらな。

ところで、自称「ヒーラー」はねえだろ。僧侶はたしかに回復のスペシャリストだが、そればかりが役目でもねえ。状態異常を治すこともできれば、槍の名手でもあるし、棍の使い手でもある。まああいつ、杖持ちだけど。

神に仕えることそのものよりも重要なのは気持ちだけ? 慈愛を持つことそのものが僧侶の意味。だがまあ、ガトウーザは正直向いてねえわ。慈愛を持てるか持てねえかどころじゃねえ。悪感情が強すぎてそれどころじゃねえんだろ。

それはそれ、これはこれと割り切れないのはもう仕方ねえわ。割り切るなんて、少なくとも、未熟ながらあいつの六倍以上生きてる俺には無理だしな。考え方が違うって言えばそれまでだが……。

あいつにはまだ時間が必要だろうが、他に行くところもなければ行くしかねえし。だが、手がかりが何一つないならどこへ行つたって同じだ。しらみつぶしに探さなきゃならねえって点ではな。

だから俺はせめてできる限りの遠回りをしてやろうと思う。

だってよ、何か言いたいことでもあるかと顔見ようとしても口々に目も合わねえし、無理強いも良くねえだろ。顔向けたらメルティの方が思いつきりこつち見たが、まあそれはいいとしてだ。どっからこんな信仰心がわいてくるのかちつと理解が難しいぜ。

てか、それよか気になるんだが、ガトウーザってたまに本気で耳聞こえてねえんだよ。俺の呼び掛けは全身全霊で聞いてくれてるみてえだが、それ以外はすべて抜けている時がある。戦闘の時はそんなことないんだが、普段がな。そういうときはメルティが心得たように手を引つ張ってる。そしていつの間にか治ってる。

そういう病気ではない、はずだ。まあ俺の見立てでしかないから……情けないことだが、言いきれねえ。だが、間違いなく聞こえてねえ時がある。正確には聞こえてねえ、というより聞ける状況じゃねえ、かな。

てかそういうときは周りもほとんど見えてねえらしく、ふつと動きが止まったり不自然な方向へ歩き出したりする。だがまあそれは、考え込んだ時のメルティも同じだな。補い合えていい関係だ。

なんか原因があるんだろうが、現象自体に病的なものを感じないし……なんか、上の空っていうか。顔色が悪い時もあるが、なんか人混みに巻き込まれたみたいなきずするんだよ。病気ではない……よな。いや、十分おかしいんだが。

病気といえばそのちよつと敬虔すぎるところは行き過ぎだけだよ、それを信仰対象の天使の俺が「病的」とか「狂氣的」とは思うのは失礼だしな。

ありがたいものだ。だが、ちつと控えてほしい。

いやそれはもういいんだ、俺が何とかすればいいからな。俺がなんとか出来るならなんとかするさ。なんだって。

「回り道しましょうか。手がかりもありませんので近いところから探すしかありませんからね」

「山の方に行くの？」

「はい。ええと、地図によるとビタリ山、ですな」

「山かー、おれ山に行くの初めてだよ！」

二人のことはともあれ、隙あらば俺を拜んだり、むやみやたらと引つ付けてくるコンビに挟まれた俺にとってマティカは癒し。異論は認めない。はしゃぐ子どもというのは可愛いものだ。いい年して子どもと張り合い始めるヤツらよりは可愛いだろ、どう考えても。

少なくとも俺に関しては、別け隔てのない天使とかそういう幻想だけは持たれちゃ困る。若い人間たちの夢を壊さないのも大事だが、俺みたいなひよっこは別け隔てるし、鼻負しまくるし、救いたくたって救えるだけしか救えないんだってことを理解してもらわなきゃな。

素直が一番、変な距離はいらねえ。

一応、人として問題がない程度の最低限の礼節だけあればもう何もいらねえ。

俺は人間じゃないけど、まあ俺だって人の形してるからな。他所で人間と接する時に変な癖がつかないようにしてくれたり何だっていいわ。

とりあえず場所も何も考えずに拝み倒すガトウーザはやめてほしいし、小声かつ早口で何かを唱えるようになってくれば話しているメルティーはもつとヤバイ。

何を唱えているのかを聞いた瞬間にうっかり星になったら笑えねえから、耳をパタンと閉じたつもりで聞こえないふりした。

純粹可愛いマティカだけは俺の後ろをトコトコ歩いて、魔物に威嚇したりじやれたりしていて本当に文句なしに可愛いから本当にもう俺シヨタコンかもしれない。

この際戦っている時に感じる強烈かつ身の危険があるような視線はもう何も無かったってことでいいんだよな。な。マティカまでなにか抱えてたら俺もうちよつと耐えきれねえし気にしないでおく。

血に反応するのは魔獣かなにかみたいにも勇猛すぎるための欠点なのか、バトルマスターの性なのか、どっちなんだ？

いーや、俺何も感じてないからな。マティカはかわいいなー。

56話 茶転機

次なる目的地はビタリ山。故郷とはそれなりに近いところですが、直接訪れるのは初めてです。名前を地図で知っていた程度ですね。メルティーもそれは同じでしょう。

山の麓には小さな小屋が一軒あり、おや人が住んでいるのかと思えば、お留守だとか。訪ねてきた人はいるようですが、どうもまだ戻っていないらしいやらない。話を聞くと、どうやら芸術家のおじいさんの一人暮らしのようです。

孤独死、という嫌な予感がしましたが、単に集中して山の上で作品を作られているのかもしれないから考えるのはやめましょう。

そして、彼のことよりも今は優先すべきことがあるのです。

それは、アーミアスさんの崇高なる使命である、世界中のどこかにある女神の果実の探索。残りは五つとなりましたが、依然情報もありません。私としては、このビタリ山で見当たらないようでしたらカラコタ橋まで引き返しまして、情報収集すべきだと思います。

ええ、アーミアスさんは何か私たちには見えない何かをご覧になつてからセントシユタインで休養され、その後は橋をただ通り抜けただけでした、あの場所では買い物をしただけなのです。

どうやら長居をなさりたくなかったようですが、それはどうしてなのでしょう？ さっさと通り過ぎてしまいました。私たちとしては周囲に気を配るだけでしたから特にいつもと変わらないのですが、ええ。

アーミアスさんを一人にするわけにはいかない、というのは普段でもそうです。しかし、理由がなければ迷惑でしょうから泣く泣くしないだけで。

堂々で行えるという意味では、あの治安はすべてにおいて悪でもないようですね。

……声が聞こえます。私にだけ聞こえる声。それがビタリ山に近づくに連れ、だんだん大きくなっていきます。

幼い頃、このことを声に出せば薄汚い欲望に駆られた人間たちは神

託だといひ、それを自分たちの都合のいいように言い換え、儲けてきたあの親族たちのことを思い出し、だんだんと気分も悪くなってきました。

しかし、「声」に罪がないのもまた、分かっているのです。この声は子どものように気まぐれで、しかし「自然」です。「善意」も「悪意」もなく、ただあるまじにある。

風のように駆け抜けて、叫びます。悲しみを。どこかの悲劇を伝えます、誰かの誕生を喜ぶ嬉声がそれに混じります。渦巻いて、渦巻いて、こんなに大きな声を聞いていれば私はますます何も見えなくなつてしまい、すべてを間違えてしまふに違いないのです。

私の手を引くメルテイーが振り返ります。すでに色とりどりの「声」に取り囲まれた私は、それをかろうじて理解しても、メルテイー妹の声はもう、聞こえません。メルテイー姉は、私の手を強く引きました。

なんとか足を動かすと、「声」は少し散ります。

縋るように手を握ると、誰かの悪心を嫌うような叫びが駆け抜けて、耳がキーンと遠くなり、優しい「声」の囁きが周りの誰もが敵ではないと伝えます。

「ガトウーザ」

ああ優しい「声」。この「声」なら聞いていても心が掻き乱されることはないのに。「声」に惑わされることも、利用されることもないだろうに。囁きを聞かないふりして、その声にすがります。

メルテイーの手は、おずおずと離されました。しかし私は怖くなくなつた。道しるべを失つても、お導きを受けている私には何も怖くありません。

かたくかたく杖を握りしめつつも、優しい「声」にすがればなんだつてやれる気がします。

「聞こえますか？」

「聞こえますともー！」

視界が少し晴れました。目の前には天使様がいました。天使様の近くにいくと、「声」も風も何も聞こえなくなる。だって、天使様は私を救ってください。こうして、遠ざけてくださる。

ああ、優しい「声」は「声」ではなく、アーミアスさんの救いの手でした。

「あそこに少女がいるのが分かりますか？」

「はい、アーミアスさん」

私は見もせずと言いました。見えなくたって分かります。数多の「声」は少女の居場所も叫んでいましたから。

「恐らく呼ばれているのです、ガトウーザ。なにかに呼ばれていませんか？

俺は人ならざるものを見ることができませんが、『精霊』となると波長が違うのか見ることはできません。声も、聞こえません」

「……精霊？」

「たまにいます。人間の中には、『聞こえる』人が。研ぎ澄ませることができればもつといるでしょう。もしかしたら俺も。そのような純粹で強力な耳の持ち主は初めて見ますが。さあ、行ってご覧なさい。なにか変わるかもしれません」

いつの間にか山の入口付近にいました。そこで壁にもたれるようにして立っている、毛皮をかぶった年代の少女のもとへ背中を押された私は、「声」に耳を傾けているらしい彼女の前に立ちました。

彼女は隣の子どもに話しかけるように言い、私はくすくす笑う声に囲まれながら、子どもに話しかけました。

……犬か狼のように吠えられましたが。完全に威嚇されています。だけでも、彼女には想定内のようでした。

「お前、都会の人間だな」

「そうですけど……」

「珍しい、強い耳をしている。声、聞こえるか？」

「認識が一致してるなら嫌というほど」

「なるほど、レンジャーになりたいか？」

「レンジャー？」

それは「声」を聞き、自然を駆け抜ける職業。

彼女は薄く微笑んで言いました。

道が一本、私の前に光り輝いて現れたような気がしました。

「お前、素質を持って余す。なるか？」

「それでアーミアスさんのお役に立てるなら……」

「違う。お前、あの天使のこと、ただの『身代わり』に使うだけ。お前が『声』を聞き分けて、お前がなる」

相変わらず渦巻く「声」は笑いながら私の体の周りをぐるぐる回っていました。この「声」を聞き分けることが出来るなら、ええ、悩まずに済み、私が……風に攫われないでいられるなら。

私は頷いていました。

気づくと、仏頂面のメルティーが私にナイフを握らせようとして装備できずに失敗し、果てしなく嫌そうな顔でメイジカメラを猛毒で倒し続ける作業が始まっていました。

私に課せられたはずの試練なのですが、これは誰が倒してもいいのだとか。ようはその戦闘を共にこなせば良いと。私は皆さんの体力にいつも以上に気を配り、そして「声」は晴れやかに笑って受け止めました。ええ、あんなに自然の多いここを飛び交っていた声がだんだん静まってくるように感じたのです。

いいえ、「声」ではありません。精霊、というそうです。世界に宿るその大いなる存在の僅かな一端と、幸か不幸か重なって生まれた私は僅かな一部を聞いてきたとか。

彼らの囁きを見ないようにすることも、聞こうとすることも、少女は教えてくれました。そして、課された試練をこなすと。

「レンジャー、なりたいか？」

「ええ」

私は、やつと自分の道を見つけたのです。

すべてを埋め尽くす「声」から解放されて、取って返したダーマ神殿で職業を変えて、そして、私は初めて明るい視界で近しいメルティーを見ました。紫の髪の少女はいつもと変わらずツンとして、ですが、なんとなく安心したようでした。

私を導いてくださったアーミアスさんにもお礼を……と思ったところ、「声」に付随する光という遮蔽物のないありのままの美貌を目に受け、灰色のふわふわの髪と、滑らかな白い肌と、星屑を閉じ込めた

ような美しい目と形の良い唇をいっぺんに目に収めた私はダーマでけたたましい叫び声をあげることになりました。

もちろんメルティーにしこたま叱られて、アーミアスさんは慌てて。マテイカ少年が手で思いつきり口を塞いでくださいましたから、迷惑はそれ以上かけずに済みましたが。

しかし、私がそれでも興奮収まらずに……とはいえ人生初めての障害物のない視界に収めた麗しくも純粹であり、寛大で偉大な天使様を見た反応ということでは私に否はありませんが……叫ぶので、ダーマからたたき出されました。

いえ、自ら階段を転がりおりました。室内では喜びを表現しきれないと思っただからです。

「あああああううううう麗しのでててて天使様アアアアアアアアアアアア！」

「どうか、どうかお静かに」

「お美しい！ お麗しい！ ああ、てて天使様アアア！ そのような、ああ、そのようなお顔で、そのような、そのような華奢な体でいらっしやっただけですね！ 不肖ガトウーザ、初めてハッキリ見えております！ 『精霊』越してもあのお美しさでしたから、今の私には刺激が強すぎます！ ええ、ありがとうございます！」

吹き出す鼻血も構わず、しかし鼻血には気づきましたのでもちろんアーミアスさんから少し距離を取りました。万が一にも天使様を汚さないように、です。

私はまた転げ回って喜びを表現したかった。しかし少しの理性もありましたから、そうせずにただ叫びました。気づくと頭に大きなたんこぶを作って、粗末な布団に寝かされていました。

ええ、何が起きたのかいまいわかりませんが世界の光が減るところなんて見えるのですね。私の世界は見えすぎていたようです。視界が丁度いいと細部が良く見えますとも。

私はこれで、返し難く、有難い恩を受けました。ですから、勿論これからお仕えさせていたきたいと思いません。形としては雇用ですが、ゆくゆくはもつと親密な……親密な奴隷になりたい。

57話 似非人間

とりあえず俺は、人間たちが進むべきと思つた道が相当他人へ害を及ぼさない限りは応援したいと思つてるから今回のことは喜ばしい。ガトウーザがより執拗に俺のことをジロジロ見るようになったが、そんなに視力が良くなつたのなら翼もわつかもない天使のことを敬おうとする己のおかしさに気づいてくれ。そんで普通に接してくれ、な？

ほら見る、どこからどう見ても、腕は細いし身長は低いし、頼りねえモヤシだろうが。天使が特にムキムキってイメージはないだろうが、やっぱりより筋肉があつた方が物理的に強いし、精神的にも頼りがいがあつていいだろうが。もつとたくましい方がカッコいいし、モヤシより安心して守護を任せられるだろう？

俺が何をしても感動しているところ悪いが、自分の中の天使のイメージと現実の俺とを照らし合わせて早く目覚めてくれ、頼むから。ホントオート天使バレ機能マジいらねえ。もしかして、もうバレてる人間たちの目が覚めない機能もあるのか？

そうでもなきや、さんざん情けない姿を見せてきた俺をまだ信仰しているこいつらが我に返らない理由がわからねえ。リツカたんみたいに信心深くて敬虔ないい子つてことなのか？ いい子たちなのは……確か、ああ、確かだろうが……。悪い子たちじゃねえんだ。

だが、人間扱いされてえな。ただの人間扱い。気軽に軽口叩いて、笑いあつて、気安く遊んで、馬鹿なことして、そんで、そんで、恋をして……。せつかく翼も輪っかも無くせたのに、これじゃあただ姿が見えるだけだ。

……「だけ」だあ？ 俺は、ただそれだけを、切望してきたんだろうが、百年も！

随分贅沢になつちまつた。これ以上の高望みはしちやいけねえ。天使がお役御免になれば俺は地上で過ごしたいという望みを持つているが、それは少なくともたつた数百年では叶うわけがない。人間と魔物が手を取り合っていない時点で、俺が師匠くらいの年齢になつ

てもまだ厳しいだろ。

俺は天使だ。間違はなく天使だ。根幹から、このいい子たちと違う。守護タイプの男性型の天使として遣わされた存在だ。ほかの生物と違って親すらいない。この世に血の繋がりのある相手はいない。天から遣わされた守護機構だ、それ以上の存在ではない。

血と肉の器の機構だ。「あいするところ」を授けられた魂らしき何かを胸に宿して、輪廻の外から輪廻のうちの人間たちや動物たち、魔物たちを円滑に潤滑させるためにいるはずなんだ。すべての魂に安寧あれと。すべてを救う日が来るまで。星のオーラを集めることを、俺はそう解釈して生きてきたんだ。

だから、本来、「俺」はなんにも望んじやいけねえのに。そもそも「俺」を持たせてもらっている時点でかなり温情だ。そんな「ところ」がない方が神も創りやすいだろうに。「ところ」のない駒の方が楽だろうに。

こうして話せるだけでも良いのに、さらに触れ合えるなんて最高だ。自分の言葉を自分の声でリツカたんに伝えられて、その笑顔は俺を見てくれる。ああもう望むことなんてない！ はずだろうが！

よし、よし、大丈夫だ。驕った天使の行く末はロクなことになりそうにないが、俺はちやんとここで悔い改めた。ビタリ山を登山しながらで悪いが、真面目に考えた。神に心のうちを白状したわけじゃねえが懺悔した気分だ。

俺は天使だ。天使だから、天使扱いされている。当然だから不満に思うものか。いや、まあ、頭で理論を理解してもささやかな願いを止められないけどな。

欲望を持つ気持ちも天使に授けていった神は俺たちがそのまま墮天していくとは思わなかったのか？ 墮天したらそれはそれで、ただそれまで、みたいな冷たい考えなのか？

まあ墮天なんてしないけど。基本的に天使ってのは善良だから。俺みたいにかわいい子をペロペロしたり、何代にも渡って観察したりするやつなんていねえよ。

ただ、守護はするが無関心だ。天使から見ればどんどん死んで世代

が入れ替わっていくのに、いちいちそんな短い命に継ったら頭がおかしくなりそうなんだってよ。

死にゆく人間を悼む気持ちはあるが、それより同胞たる同じ天使のことを考えていた方が楽なんだとよ。だからたった一人の行方不明者に石碑まで建てるんだ。それが悪いとは思わねえけど。

それにしたってよ、天使なんて不慮の事故でもない限りそうそう死んだりしねえんだし、それを思えば人間の方が大事じゃね？ 俺って頭おかしいのかね？ 今この瞬間に死んだ天使はまずいないが、人間は沢山死んでいる。

まあいいや。天使が墮天しないのもすべて神の思し召し。神の考え、見極めた尺度なんてたかだか下僕に理解できるわけがない。人間たちと違って俺たち天使はどこまでも神の下位互換だしな。

成長することまでは取り上げられなかったが、天に住まう代わりに生物の形だけ与えられた、生まれながらに限界がある、「完成された」存在なんだから。

個人の努力で埋まることもあるにはあるが、その上限はあからさまに定められている。数千年生き、そしてその記憶を保持しているオムイ様が万能ではないことから明らかだ。人間から見れば、そして俺みたいなひよっこ天使から見れば途方でもない年月を生きた大天使だって、分からないことだらけで、どうやったって神になり得ない。

それに俺だって……人間の百三十五歳と比べたらものすごく未熟な精神のはずだ。人間のその年齢の老人は見たことねえけど。

達観なんてしていない。俺自身、そこまで死は恐れていないように思っているが、死を旅のように語った老人のようにはなれない。本当に死にそうな時はどうなることやら分からねえ。みつともなく死にたくねえと喚き散らす気しかしねえ。

そもそも人間たちとは生まれが違うといえればそれまでなんだろうが、それにしたってもう少しずっしりと構えられてもいいような気もする。百年生きた人間の叡智に目を見張るものがあるのに、天使の百歳ぼっち、ただのヒヨコのような見習いから片足抜けたところつてのがなあ。

天使界の教育が人間界のそれより劣っているだけならいいんだが。だけでもまあ、だから天使は外的要因がなければ死ななくとも世界に影響がないのかもな。相当「変なの」以外は何百年生きても変わらず穏やかで、どこか純粹で、優しくて、どこか生物として欠けているまま、ずーっと生きる。

俺は多分あのシヨタコン野郎と同じで「変なの」だから天使として長生きはできないはずだ。穏やかとは言い難いし、純粹では断じてないし、優しいのは人間にだけ、生物としては欠けているが。それにっいては、肉体系は平均的な天使だからなあ……。

やべえわ、不慮の事故でさっさと星になりそうだけ。だって俺は天使らしくねえから。欲望まみれで、エゴまるだしで、自分のことばかりだ。天使らしくねえよな。

まあ、生まれたタイミングが良かったのか悪かったのか、そうなる前に救いに与れるかもしれないけどな。俺にとっての救いは人間になることだから女神様、よろしく頼むぜ。

……師匠も分類的にはどっちかつつたら「変なの」だよな？ あんな武道家みたいな天使ほかにいねえよ。だけど普通に殺しても死ななそうだよな……。ムキムキだし。

師匠。ホントどこにいるんだろうか。

「アーミアスさん、険しい顔をなさっていらっしやいますが、何かありましたか？」

「……」

「アーミアスさん？」

「あ、ああはい。なんででしょう？」

「いえ、その、険しい顔をなさっていたので……」

「……すみません」

顔に出るとか！ 俺！ ダメじゃねえか！

クソ、まだまだ俺は若輩者だ。まだまだ俺には師匠が必要だ。

ポーカーフェイス！ ポーカーフェイス！ 悟らせるな、幼い子たち！ そんな人間たちには関係のないことでこんな心配するような顔させてしまったなんて、不甲斐ない！

メルティーの心底心配そうな顔に申し訳なくなる。マティカも黙って俺を見てるし、あーもう、ダメだな俺は。ガトウーザは……ハアハアしてるから俺は何も見えていない。見ていないんだって。日に日に悪化してねえかお前。

それ直した方がいいぜ。俺だって脳内で気持ち悪い事考えているがそこまであからさまに出したりしねえんだぞ。俺以外にはやるなよ絶対。てか俺にもするなよ。

「皆さんには関係ないことなんです。個人的なことなので」

「そうですね、アーミアスさん。でも、私たちの個人的なところを救ってくれたのはアーミアスさんなので、」

「私たちが遠慮なく解消してください！ 私ならサンドバッグにしてもいいですよ！」

もしかして、特殊な性癖をお持ちで？

「兄さんは黙って！ すみません愚弟がこんなので！」

矛盾したことを言っているが、妹はまともでよかった。初見で俺に念仏唱えてたからどうなることかと思っただが、本当によかった。

「こわ……」

わかるわマティカ。ガトウーザこわ……。

えっ、怖。えっ？ 何がスイッチだったのか。

よし、俺は何も聞いていないし何も見ていない。な、そうだろ。ガトウーザはキラキラした目をして、俺のことを心底心配して、俺のことを思って自分に出来ることはないかと聞いてくれたんだ。ガトウーザの謎言語を解読したらそういう事だろ？

うんうん、いい子だ。少し大人しくしておこうな。とりあえず頭を撫でたら静かになった。素直だ。

メルティーとマティカが頭をぐりぐりしてきたから最初からお行儀がいい二人も撫でておいた。そんなんでいいのかよ。もつと……金銭的報酬を求めるとかはねえのかよ？ 頭撫でたらメルティーがすぽーんと腰を抜かしたのでマティカが背負った。何でだよ。どうしたんだよ。

ええ？ 俺に撫でられたから、啓示を受けたような思いです？ や

べえなそれ。俺も啓示なんてあの一回しか受けたことねえけど、そもそもそんなにありがたいものでもなかったぞ。ルーラマジ便利だ。メルティーは信心深いんだな。

天使より信心深いのは素晴らしいことだな。俺、信仰心うつすいけど。俺にとつて神は……なんだろう。嫌いではない。俺に親はいないけど、父親という点では神が本当に実の父と言えなくもないし。だが声聞いたことすらねえし。名前しか知らねえし。良いも悪いもねえな。啓示の声は父なる神ではないし。

まあ、いいや。さつさと変態言語は忘れよう。俺の精神衛生上流石によろしくない。

そろそろなんか出口も見えてきたし、山頂についたらラボオさんだっけ。山のふもとでたずね人がいたから名前を聞いておいたんだが、そのじいさんを探すか。

58話 彫刻町

天使様。

ああ天使様。

神と同じく救いに来てくださらなかった、と思っていた過去の私を撲滅したい。こんなに素晴らしい天使様が目の前にいる以上、疑いを持つ過去の自分なんて必要ありません。

アーミアスさんは、山頂の石でできた精巧な町につくと、芸術家のおじいさんを手分けして探すようにおっしゃりました。

私はもちろん二つ返事で探しに回りましたが、灰色の石でできたエラファイタ村のようなこの場所には、特に生命の気配がなく、ええ、見つかつたとしてもはや……いえ。不吉なことは考えないと、決めただけではありませんか。

生命なきこの場所におわすアーミアスさんはいつにもまして神秘的で、お美しいのでそうそうに諦めた私はこっそり見ていることにしました。速攻でメルティールから一撃貰いましたが。

レンジャーというのは耐久面において僧侶より優れているようですね。以前よりはダメージが減つたように思います。魔力を吸わないように手加減してくれただけかもしれないませんが。

ああそんなことは良いのです。メルティールが私を咎めているのわかります。わかりますが、私はもつともつと見つめていたい。あの天使様になら何をされたって構わない。むしろなにかして欲しい。なにか……なにかを。……考えているだけで何故か鼻血が出てきました。些細な問題ですよ。

足蹴にされたい。あの優しく慈悲深く、星を宿した美しい目を持つ天使様に冷たくされたい。優しくされたいのももちろんですけど、天使様はお優しいので新鮮な一面が見たいのです。

お導きを受け、私は自らの道を得ました。この身を捧げても一向に構わないのですが、さらに欲を言うなら……ということ。はしたないことですが、願うのをやめられそうにありません。

もちろん、もちろん！ あえて嫌われるようなことをするつもりは

ありません。私は誠心誠意仕えさせていたかったです。真摯に励みま
すとも。それはそれです。平手打ちをされたい。あの、白魚のような
小さな手で。ええ、それは見た目だけ。実際には硬くなった剣のタコ
が出来た、天使様の努力の手で思いつきり……アイタツ。

ストロスの杖で思いつきり殴られ、たんこぶができました。ダメー
ジ、三十くらいあったのではないですか？ 容赦ないですね、私の妹
は。

とりあえずホイミ。

「本当にそろそろ真面目になつてくれないと困りますよ」

「メルティー、貴女だけは私のことを理解してくれるはずです」

「理解？ 理解ですか。ガトウーザはいろいろな生温いんですよ。全力
を尽くしてから妄想の世界に羽ばたくべきです。」

平手打ち程度で満足してしまうようなただの喚くだけで食べるこ
とも出来ない豚にはなりたくありません。

私はもつと役立つ家畜になります。私は豚であり、牛であり、馬に
なります。羊にもなります。それくらいの意気込みを持ってないので
すか？」

メルティーはキツパリと言い切りました。ああ、それでこそです。
私の半身は言うことが違いますね。

素晴らしい。たしかに叩かれて悦ぶだけの豚ではなんの役にも立
てません。もつと有用な存在になり、ぞんざいに扱われたい。いえ、
もちろん、どんな扱いだって構わないのですけれど。

アーミアスさんが私を褒めてくださるその瞬間は、そんな邪な欲望
をすべて忘れて、ただただ天にも昇るような気持ちですからね。
ええ、本心としては「見ていただきたい」でしようか。

天に愛された麗しの、幼く整ったあのかんばせに。

「さすが私の妹ですね。志が違います」

「あなたの妹になった覚えはありません。あなたこそ弟なのでは？
考えが劣っているという点において、私の方が姉にふさわしいのでは
？」

「そんなあ……」

近くを散策していたアーミアスさんが静かに頭を抱えました。一体どうしたというのでしょうか。しかし、近づくこうとすると、ぴったりにアーミアスさんに張り付いても許される羨ましい無表情の少年に遮られてしまったので、どうしようもありません。

幸い、アーミアスさんは体調不良などではない様子。なにかお気づきになったのでしょうか？ 石で彫刻された精巧な木に軽くもたれかかっていらつしやいます。ああ、顔を覆ってしまわれた。本当にどうなさりました？

ええ、何故かお疲れのようですが、怪我や病気ではないことはわかります。何が原因でしょうか。魔物ですか？ 敵襲ですか？ 殺しますか？ 覚えたてですが、弓があるのでお手を煩わせることなく暗殺もできる……ようになります。今はまだ、修行不足なので。

ああこれでは良くない！ 私はお役に立てない！ お役に立って、あの瞳に映りたい、それだけなのです！ ええ、それだけ！ 私の信仰は、私の全てですよ！

「兄ちゃん、姉ちゃん、ちよつと……」

「なんででしょう」

「なにかご提案があるのですか？」

マティカ少年は、とんとんと背負った剣の柄を叩いてから言いました。子どもの無表情って無性に怖いですよね。

「今すぐたたつ斬られたくなかったら黙っておじいさんを探そう？」
「……」

……すべて理解しました。この少年は外見よりも頭が良いようです。私たちはこんなに美しく静かな芸術作品そのものの空間で騒ぎすぎた、ということなのですね？

ええ、美術館で騒いではいけません。当たり前前の事です。この静粛の中の美を汚すような真似をするなどということですね？ よく分かりました。

ええ、私たちこそが幼すぎました。悔い改めます。

口をつぐんだ私たちを見て、静かになったことに気づいたらしいアーミアスさんは感動したのか賢い少年の頭を沢山撫でました。当

然の権利でしょう。

そして……あつ、抱きつかれた！ 羨ましい！ それは羨ましい！
なんて羨ましい！ 子どもを慈しむ兄のように、アーミアスさんは自分とさほど変わらない身長のマティカを可愛がつていらつしやいます。もつと身長差があれば抱き上げてくるくる回しそうな勢いで
す。

アーミアスさんからすれば、私たちはすべからく赤ん坊みたいなものでしょうから、おそらく他意はないのでしょう。ただ慈しまれて
るだけなのでしょう。そう信じていますが。ですが、羨ましい。

アーミアスさんの肩越してこつちを見て、いいだろうと言いたげに無邪気に笑う少年が、アーミアスさんが思っているような純真な少年とは到底思えないのです。ええ、絶対私たちを利用して美味しい思いをしたのでしょ
うけど、全面的に私たちが悪いので何も言えません。

しかし、彼が完全なる善人であるかは疑問があります。あの少年の周りにいる精霊らしき光もなんだか……その、アーミアスさんを取り巻く美しく清浄なものとは正反対に見えるので。

彼ならアーミアスさんの敵が人間であつても叩き斬つてくださるでしょうね。私たちがなにか狂つてそうなつたとしても。頼もしいです。ええ、善性でない、ということとは必ずしも良くないこととは限りません。善性でないからこそ必要悪になれますから。

ですから、私は少年を取り巻く精霊たちのことを口に出したりしません。なぜなら、いくら彼が羨ましかろうと、アーミアスさんのお役に立っているという意味では重要な人物だからです。私は私欲だけで動いたりしません。

それにそもそも、善人でないから、というのがなんだと言うのでしょうか。それを言うなら私たち、極悪非道な詐欺師の子どもですからね。生まれながらの罪ならば背負いすぎていくくらいです。

メルティーがこんないい子に育つたのは奇跡みたいなものですよ。すごくいい子なんですよ。私みたいな人間と過ごしてくれる優しい子。

ここは少年に花を持たせましょうね。でも、いつか挽回しますか

ら。それに家畜は主に逆らったりしないので。ねえメルティー、そうでしょう？

同意のアイコンタクトは、冷たい目をしたメルティーがマティカを睨んでいたことで受け流され、まだまだ妹は子どもっぽく嫉妬をするのだなあと微笑ましく思ったのです。

寛容、寛容ですよ、メルティー。大丈夫です。アーミアスさんは素晴らしい天使なので私たちの中の誰かを選んだりしません。この中の誰か一人の天使になることはありません。

だって出会った時からずっとアーミアスさんは同じ人を見ているじゃありませんか。考えるだけ仕方がないのです。その慈愛の欠片をお与えください、さらにちよつとぶたれたいぐらいなのです。高望みしません。

羨ましくない訳ではありませんが、アーミアスさんの感情は恋する人間のそれではないような気がするのです、焦ったりしません。そもそも独り占めするような感情はないですね。彼の世界に存在していたい。空気のようにさりげなく。

天使様。ああ天使様。お美しく慈悲深い天使様。その尊い行いをこんなに間近で見られる幸運に感謝致します。

かつて翼があつたその背中をじつと見つめ、空から降り注ぐ日光がキラキラとした翼の名残を見せるように輝いたのを目にして満足した私は、ようやく麗しの君から目を離しておじいさんの捜索をしました。

洞窟とか、入れるところもあるんだけどこの石の町の家って大抵、外見は本物そっくりりでも入れない。綺麗なドアノブを引っ張っても相手が石の塊ならどうしようもない。

人間そっくりな石像と、家と、動物と、エラフィタ村のの真ん中にあつた大きな桜の木がへし折れる前の姿が本当に生き生きしててすごいね！

これで動く人間がないなんてウソみたい。すごいなあ、本当にす

ごいなあ。これを作った人はどんな人なんだろう？ 何を思ってたんだらう？ エラファイタのこと、すごく想っていたんだね！ おれなら、セントシユタインの裏路地なんて覚えていたくもないけどなあ。

魔法を使う二人が真面目に探し始めたけど、こっち側に生き物の気配はないよ。村の奥の方ならまだいるかもしれない。そっちまで分らないし。

だから、木の根元を越えて、おれたちは村外れに建っている家の方に向かった。そこにある家を見て、ちよつと首をかしげたアーミアスさんがおもむろにドアに触れた。

あ！ 開いた！

「こちらが二つ目のご自宅なのかも知れませんね。マテイカ、二人を呼んでくださいますか。突然お邪魔したのですから、揃ってお詫び申し上げますよ」

「うんー」

おれが教会の近くで探している二人を呼んでくると、アーミアスさんはまだ家の前にいて、何故かキヨロキヨロしてたけど、結局何も見つからなかつたらしくて、一緒に家に入りましようと言った。

何故見回していたの？ と聞いたら、誰かが見ているような気がしたつて。ガトウーザ兄ちゃんとメルティー姉ちゃんを思わず見たけど、ブンブンと首を振っていたから嘘じゃないと思う。大丈夫、木の彫刻越しじゃ見えないよ。嘘じゃないのは信じるよ。

え、なら、お化け？ お化けなの？ 怖い！

お化けじゃないにしても、何かがいるつてことだよな？ 探してるおじいさんならいいけど、そうじゃないなら怖い！

ちよつと涙出て来た……。顔も名前も知ってるメルティー姉ちゃん怖い顔より怖い……。正体不明が一番怖いよね?!

なんなんだろう、アーミアスさんがいるならお化けでも大丈夫だよな？ 幽霊はアーミアスさんが何とかしてくれるし、魔物なら斬ればいいけど、お化けはどうにもならなくて怖いんだ。

相変わらず泣き虫治ってないけど、でも怖いから、えつと、この際

ガトウーザ兄ちゃんでもいいや。おれより背が高いから隠れとこ
……。

59話 脅威

「失礼します……？」

ここだけ入れる家の中。外と同じく石で精巧に出来ている。ところで、中には住民がいた。

薄暗い家の中、青い小さな体がぼいんと揺れる。

スライムか。すごく可愛い。リツカたんへのお土産にしたい。

いやすまん、いやほんとすまん。冗談だ。あいつも俺よりはまともに生きてるんだ。俺に今後の動向決められたかないだろう。ただ、丸くてぼいんぼいんで、本当に柔らかそうなぼいんぼいんで、疲れた人にはちようどいいクッションみたいだと思っってしまっただけだ。すまん。

かわいいかわいいスライムと戯れるキュートでペロくてかわいいリツカたんとか最高の相乗効果だよな！　だがスライムの気持ちにはなれていない意見だ。

いやだつて……だつて。いや、どう考えても俺が悪いわやっぱ。可愛いものにはいつだって弱い。人間とかいう可愛い奴らに骨抜きにされてはや百年。リツカたんにも心臓撃ち抜かれてペロポイントが溜っていく幸せな日々が始まって……。

ダメだ！　リツカたんの年齢を数えるな！　必然的に悲しくなる！　俺は、俺はリツカたんと同世代の気持ちで生きるフリくらいしてえんだ！　俺はピチピチ！　まだまだ若い！　まだピチピチでナウなヤングだから！　アゲアゲで行こうぜ！

本当に、天使としてならまだまだ若いからな、セーフセーフ。外見だってまだまだ……ほら、声変わりも来てねえし。うんうん、大丈夫だ。それで今の流行りはなんだっけ？　せめて若い擬態だけでもさせてくれ。

声変わりもしていないようなガキって言われちゃおしまいだがな！　ニードは……声変わり……してる、よな。既に俺年下説。

だが待て、まあ落ち着くんだ、俺。個人差という魔法の言葉で二年くらいは持ちこたえられるからな！　俺の成長は天使として普通だ

が、まあ、俺が人間ならちよつと遅れて身長伸びるタイプなのかもしれないしな！

リツカたんより頭一つくらい身長あるならカッコいいところ見せられるよな、牛乳か？ 肉か？ 俺がもし、天使の務めを果たし、「救済」されて人間になることが出来たなら、リツカたんにカッコいいところ見せるんだからな！

待っててリツカたん！ 俺頑張る！ 最強キュートなリツカたんの隣に立つても違和感のないような雰囲気イケメンになるから！ 筋肉つけて、身長伸ばして、このうっすい顔は……どうにもならねえけど、髪の毛染めるくらいならやるからな！ どう頑張っても雰囲気イケメン止まりだが、俺頑張ってモヤシ卒業して、たくましい男になるからな！

俺の邪念を感じ取ったのか、隠しきれない世代のズレを嗅ぎつけたのか、住民のスライムが俺たちを訝しげに見上げた。

こいつら何しに来た、といわんばかりに。ホント脳内で幸せ妄想炸裂させて、何しに来たんだろうな。いや、ラボオさん探しに来たんだが、ここがスライムの家ならどうしようもないし、もちろん追い出すなんてこともしないし、ただちよつと聞くだけだ。

悪いな、ホント。お騒がせしました。ご迷惑おかけして、申し訳ない。

「すみません、少しお尋ねしたいことが」

スライムって相当小さいやつでもない限り、年齢とか外見だけ見てもわからねえんだよな。それで別に寿命があるとか聞いたこともないから、最弱の一角にして実は何百年も生きている個体も……いるかもだし。

まあほとんどちよつと天邪鬼な口調のやつとか、可愛い子どもみたいなやつとかそんなんばつかりでわかんねえんだけど。なんにせよかわいい。攻撃してくるスライムだって、まあ共に歩めないという点では悲しいが、可愛いことには変わりねえし。

それで、このスライムが喋ったら警戒しなくていい。喋るスライムは人間を好き好んで襲ってきたりしない程度には自分の実力がわ

かっていたり、魔物にしちゃ比較的温厚だ。……と、思う。

「……、な、何。おじいちゃんじゃないよね、何しにきたの」

スライム特有の高い子どものような声。ふるふるしてて可愛い。

「その、『おじいちゃん』の安否を確認しに来たのですが」

「……」

スライムはへによりと頭の先のとんがったところを曲げた。なんとなく悲しそうだ。……それはつまり。

どうも様子から見て、この場所を作ったのはラボオさんで間違いないみてえだが、スライムはあとから住み着いたわけでもないらしい。基本的にスライムってのは善良……というか純粋な奴らだからな。嘘をついているにしてもバレバレってことが多い。

だから、つまり、一緒に過ごして「いた」んだろう。死因が老衰ならまだしもいいんだが……聞き出すのは流石にやめておくか。わざわざ傷をえぐることもない。

仲も良さそうだし、探したらお墓も見つかるだろう。手を合わせたら下山するか。ここには何も無い、と思う。

「ありがとうございます。では、みなさん、」

地面が唐突に揺れた。スライムが飛び上がって、びよんびよんと家の奥の方に跳ねていく。地震の時はむしろ家から飛び出す方が正解だ。しっかりした石でできた建物とはいえ、どこかが割れて崩れてきたらどうするんだ。

俺はスライムもろとも家の外に飛び出そうと、捕まえた。すると、もがいて抜け出したスライムは、ただただ脅えるように叫んだ。

「またあいつが来る！」

地震じゃないのか、もしかして！ マティカが怖かったのかぼろぼろ泣きながら俺の腰にしがみついていたのが、原因があるのがわかって涙が引つ込んだらしい。勇ましく剣を抜いて外に飛び出そうとするのを慌てて止める。行くとしても、考えもなく行くんじゃない！

揺れはわりとすぐに収まった。そして家の外からはなにやら気配がする。揺れの元凶であることは間違いないが、そいつが悪か善かなんて分からない。まあそれは、「俺にとって」とかいう片一方の目線に

しかなりようもないからどうでもいいか。

しかしスライムは怯えている。何度か来ているようだが、聞き出すのは無理そうだ。ふるふる震えて可哀想に。

うーん、飛び出したら戦闘にもなりかねん。どうしたものか。去るのを待つべきか。

だが迷っているあいだにも、そいつはここに入ってくるかもしれない。戦うにしても狭いところでは危ないだろう。

仕方ない、相手はもちろん見極めたいが、外に出るか。

いや待て、出るとは言ったがマティカ、ガトウーザ、性急になるな。聞いた瞬間飛び出そうとするな。俺の後ろから来い。見ていかにも危なそうなら家に引っ込んで態勢を立て直してからでも構わねえ。だがとりあえず俺の背後だ。安全にいけ。

メルティーなんて魔法使いの配置つてものをしつかり理解しているようだぞ。……ん？　メルティーも待て、まあ待てよ。相手も見ずに扉を開けた瞬間、先手必勝、魔法をぶつける！　はダメだから。

地震の元凶もいるだろうが、扉の前にいるとは限らねえし、関係ない人がいる可能性だつてないわけじゃないだろう！

頼りになる仲間たちは頼りになりすぎて少し暴走気味らしい。とりあえず止まれば止まれ。

「いいですか、相手がわからないときは俺の後ろにいてください。相手、位置、状況、何かを見極めたら行動してください、頼みましたよ」「分かったよ、アーミアスさんの敵を倒せばいいんだね！」

「……ええ、まあ、おおよそ」

「よーし、張り切るぞ！」

キラキラした目で言われちゃ、否定しづらい。俺の曖昧な返事でも元気よく笑うマティカが可愛くて癒しなのも確かだ。

……一番マシだと思うが、マティカもどつかズレてるよな。俺が言えたものでもないけどこのパーティ大丈夫か？

ともあれ、俺が盾を構えて外に出ると、そこには何も無かったのちよつと拍子抜けした、が。とっさに上から気配を感じて、飛び退くと、俺がいたところに禍々しい力を纏った像が立っていて、俺たちを

睨みつけるような表情をしていた。

そいつは石像だった。ここのガーゴイル的な存在だったのかもしれない。しかし、魂のような、魂でないような曖昧な気配をさせ、俺たちに敵意をぶつける危険なものになっていた。

ふと、俺は思う。この像はエラファイタで見かけたものではないな、と。

エラファイタを愛していただろう製作者が、愛と郷愁を込めて作っただろうこの町。そこにはなかったこの像は、きっとこの町に置くためのもではなかったのだろうなど。

もし、この像がとびきりの愛をこめて創られていたとしたら、愛する人を模して創られていたら、創られたあとに誰かの想いを受け止めていたとしたら。

こんな紛い物のような、魂のような、「何か」を宿す、そんな存在ではなく、本物の魂を宿す存在になり、もっと恐ろしく見えただろうなあ。

まあいい。俺にとっては魂が曖昧な方が罪悪感がなくていい。ラボオさんの小さい友人があんなに怯えている様子からして、少なくとも意図的な守護像でもなさそうだ。

こいつが女神の果実で仮初めの命を吹き込まれた存在かどうかの区別は付けねえが、とりあえず倒させてもらおう。

石の巨体の一撃なんて、見るからに重くて痛そうだし、幼い人間たちが受けていいものじゃねえからな。きっちり俺に受けさせてもらおうか。

俺は口笛を吹いて挑発し、見事に怒り狂ってきた単純野郎の攻撃に、即刻腕が痺れるほどの衝撃を受け、なるほどスライムが怯えて逃げることなく閉じこもって凌ごうとしたわけだと納得した。

こんなのスライムが食らったらひとたまりもない。盾がへしやげそうだけ。

60話 像

研ぎ澄ませて。耳を傾けて。石でできたこの町は、風の音しかなく、いくらい静寂に満ちている。

だから私の耳には聞こえるのです。妖精の声が、精霊の音が。研ぎ澄ませて、研ぎ澄ませて、私は力を乞う。

美しき小さな天使様をお助けする力をお貸してください、と。

私と比較しても頭半分は小さな背はいつだって私の前にあります。私たちをお守りくださる麗しの戦士様は、無機質かつ無慈悲な像の繰り出す重い一撃を何度も受け止め、私ならばとうに逃げ出したくなるような傷を負っては癒され、決して膝をつきません。

しかし、こちらを振り返ることもなさいません。私たちを信頼してください、と。気高い守護者の期待には応えなくてはいけません！

ああ聞こえる、あんなに煩わしかったはずの音が頼もしく。ため息混じりに力を貸してください、と。妖精の音が。ツンデレですか、それとも……？

妖精達のポルカ。

私の周りを色とりどりの妖精たちが踊り、歌い、力がみるみる溢れるようです。私の「必殺」に呼応するかのようメルティもミラクルゾーンを解放しました。魔力を気にしなくても良くなった瞬間、氷の呪文が連続で炸裂しはじめ、なんとも頼もしいですね。

凶悪なまでの破壊力を誇る番人は、私たちの「必殺」など全く気にするそぶりもなく、踏み潰すかのようにこちらを攻撃し、そのたびに地面がグラグラと揺れます。

家も町もすべてを破壊し尽くさん勢いで私たちを排除しようとするのです。明確に殺意が向いているのは私たち「侵入者」たちですが、だんだんなりふり構わずに襲い来るようになって、ことに危機感を覚えます。制御のない人形に力を与えたような……そんな危うさなのです。

私たちは繰り返される攻撃に付随した揺れに必死に踏ん張りますが、そもそも天におわす存在であるアーミアスさんの足元は私たちと

比べておぼつかないのも気になります。

ええ、これは不敬であり、天使様に邪魔だてする行為です。許しはしません。天使様の手を煩わせる存在なんて！ そうなってくると、わざわざ転職のために時間をとっていた自分をメツタ刺しにしないでほなりません、ともあれこいつもガレキにしてやりますよ！

そう決意した私を狙う一撃に、滑り込むように割り込んだアーミアスさんが吹き飛びました。私は、私は、それがゆつくりと動いているように、見えませんでした。時間がゆつくり動いているような。

私は守られている。ですから、私は、お返しをしなくてはならない。希望と光そのものである彼の矛にならなくては。高潔な天の盾に守られてばかりでは、いけないのです。救ってくださる存在が目の前にいらつしやるのなら、できうる限りの恩返しが必要ですから！

私は何よりも彼を尊重する。私は、です。私はほかの誰が何を為そうと関係ない。私が私の道を往くのです。ですから、私は、私の持つる力をすべて使う。何であつても利用しましょう。

新たな得物である弓を引き絞ります。非力な腕がぎりぎり、みしみしと軋むのも構わず。レンジャーとしての心得がなんとか使い慣れない弓を使わせます。

ああ、狙え、目を狙えと黒き精霊が囁きます。力を貸してやろうと怪しい光をたたえた精霊が、穏やかな光の妖精たちを押しつけながら私をそそのかすのです。今だけは、助けてもくれない神の力の残滓の存在が、これまであんなに鬱陶しかったというのに、心地よく感じられました。

言われた通りに放つと、見事に像の目に突き刺さりました。私は特に弓を使ったことがあるわけではないのです。偶然でしょうか？ いいえ、偶然で出来るはずはありません。ですから、これは、精霊の思し召し。

自然と心を通い合わせて、獣とともに生きるのがレンジャーなのでしょう。ですが、私が成り果てようとするのは……きつと、相手が闇だろうと光だろうと関係なく精霊と妖精の声を聴き、それを自分のた

めに利用する邪悪なシャーマンです。

構いませんとも、ええ。灰髪の天使様のお役に立てるなら。ご迷惑はおかけしません。たとえこの身が落ちたとしてもご迷惑はおかけしません。落ちるならひとり静かにしますから。

私は武器を魔法の補助具としてしか用いたことはありません。ですからこんな腕を酷使したことはありません。回復魔法を唱えることは慣れたことですし、ベホイミだって容易なことですが、攻撃呪文を唱えた訳でもないのに魔へ対して直接攻撃を仕掛けているなんて、経験したことがないことです。

しかし、想定していたことよりも恐ろしくないですね。かつて魔法使いになりたかったように、別段殺生に対して忌避感が強いわけではないですし、相手が魔に属するものならなおさらです。

アーミアスさんの思い切りの良い剣のきらめきを恍惚と見つめつつ、私は腕が明日は使い物にならないだろうかと予想しながらも連撃を続けました。甘言を囁き続ける闇の精霊の、大いなる力を借りて命中させながら。

対価としてなにか要求されましたらなんとでも握り潰して差し上げます。精霊には困っておりませんので、一匹や二匹取り憑くのが減ってもむしろ万々歳ですよ。

愛想をつかさされる日があるならば、それはそれで普通の人間の目を手に入れることができますからそれでも良いです。アーミアスさんのためにキリキリ働いてくださいね。私の力なので遠慮しません。

中級回復呪文は私にとつてそう難しいものではありません。ええ、お役に立てて、いますよね?!

陽の光にすかさされて、灰色の髪が銀色に輝く美しい奇跡を見つめ、私は充足感に満たされて、幸せでした。

何回腕もげるかと思ったかわかんねえぜ。だが、なんとか助かった。みんな無事だしな。まあ、完全に俺だけダメージ食らったってわけじゃねえけど、上出来だろう。反撃でちよいと斬りつけることも出

来たし。

にしてもだ、なんだよあれ、あの番人は。俺みたいな平凡かへボな戦闘力しかない天使だと盾で受けてるようで受けることが出来てねえ。ハアー、危うく星になるかと思っただわ。

ガトウーザがものすごい猛攻と回復を一手に引き受けて張り切ってくれて助かったぜ。今、完全に疲労で地面に倒れ込んでるが。本当にお疲れさん。

周りにあのスライム以外の魔物の気配は……今度こそないし、しばらく休んでもらうか。ありがとな。てかよ、なんか下心と欲望丸出しなのに、サンデイ以外の妖精に好かれるなんて器用だなお前。あんなにポルカルレンジャーいないんじゃないか？

これが生まれ持ったの才能ってやつか……。俺もなんかトクベツな才能、欲しかったぜ。天使にも個体差あるし、気づいてないだけで俺だけの特徴とか、なんかねえのかな。

師匠はハゲで親しみ深い才能があるだろ、ラフェット様は包み込むような優しきという才能が……ん？ どう考えても両方後天的か。だがラヴィエル様の美貌は才能だ。維持は努力だが、天使はそんなに努力しなくなっただけで容姿に変化がない。

ああ、だが、上級天使はみんな、誰が見てもわかるような輝くような天使っぷり。より天使らしいというのも才能かもな。あんな天使らしき、なくて良かった。オート天使バレは俺にもあるけど、俺にあるなら誰にでもあるだろ。

「皆さん、ご無事ですか？」

まあピンピンしてるのは見たらわかるが、もしかしたらハイになっただけでなんかあるかもしれない。

「守ってもらえたから！」

マテイカも攻撃の手を緩めずに頼もしかったぜ。頭を撫でる。

「良かった。あまり俺からは攻められませんでしたから、本当に助かりました」

「なんてもったいない言葉！ 私、私、もつと精進いたします！ 全部敵を燃やしますし、爆破しますし、凍らせますね！」

ちよいとテンションが高いが、まあ、いつも通りか。こつちも頭を撫でる。それを見ていたガトウーザがビクンビクンしていて怖い。あれは……羨ましがってるのか？

しゃがんで撫でておく。髪の毛サラサラじゃねーか、羨ましいぜ。俺の髪の毛なんてどう足掻いてもふわふわして落ち着かねえんだ。

それにしても向上心に溢れたメルティイは可愛い。無邪気なマティカは可愛い。やりきって伸びてるガトウーザも可愛い。プリーパーパラダイス、人間可愛い。今日も元気で何よりだ。

さて、すでにここにはなにもない。崩れ、光にのまれて既に石の番人は消失した。

で、俺は幽霊のおじいさんが地下への階段の方へ降りていくのを見逃さなかった。もう今更、危ないものは何も無いだろうし、仲間たちにはここで休んでもらって、彼を天へ導こう。

俺たちの住むところではなく、俺たち天使が成り果てる先でもなく、死者たちの集う、もつと穏やかで安らかな世界へ。

怖がりだが、幽霊は何故か怖くないらしいマティカが勇ましくついてくるらしいから、ガトウーザのことはメルティイに任せるか。頼んだぜ。

地下特有のひんやりした空気が頬を撫でる。ただっ広いその場所には、一つの棺と、一人のおじいさん……だった幽霊だけがある。

青白い光に包まれた彼は、ぽつりぽつりと最期の贅沢として手に入れた金色の果実……まあ現物見なくても女神の果実だろうと分かるな……を食べ、そしてあの石の番人が願いをいびつに叶えて過剰に侵入者を拒んだことを語ってくれた。

小さな友人を怖がらせるから、助かったと。そう言って、彼は消えていく。

俺がお節介に手出しする必要もなく、幽霊にまでなっていた彼の未練が何だったのか知ることも出来ずに。推測はできる。こんなに精緻でそっくりなエラファイタ村を作り上げるんだからな。

だが、見ず知らずの俺が踏み込んでいいことではないだろ。彼にとっての守護天使ですらないのだからな。……彼を守護する天使は

エラファイタの天使か？ 出張してくるのか？ それともここにはここ専属でいるのか？ 疑問だ。だが一人で住んでいる人間に守護天使はいないだろうな。
ともあれ。

彼は、小さな友人の安寧に喜んで消えて行く。あのスライムは寂しさを抱えながらきつとこれからもここにいる。

それで良いと思って、それでいいと天へ昇るなら、それでいい。

俺は、棺の上で静かに金色の輝きを放つ果実をそつと持ち上げた。

きらきらと人を、死者を、死にゆく者を誘惑するその果実はすましてそこにあつた。女神の果実は美しい。奇跡を起こすエネルギー体だ。だが起こったことはどれも願った者の密やかな願いをどこか不自然に叶えているような気がしてならない。

しかし、これで「生き返る」ことはできないみたいだ。「命を与える」ことは出来そうなのに。

こんなもので、懸命に生きる幼い者たちを翻弄するなんて絶対に良くねえよ。幼いゆえに純粹で、欲望にのまれるのはどんな存在でも一緒なんだから、幼ければ余計堪えられないことが多いだろう。

はやく、はやく全部回収しないとな。回収して師匠に報告できる日を俺は心待ちにしている。……リツカたんのところに戻ることに次の次くらいに。

サンマロウ編

61話 不安

「おかえりなさい、アーミアス！」

「！」

リツカたん！

リツカたんが俺におかえりなさいって！ ペロ！ リツカたんかわいいペロペロ！ 青いおっぱは今日もさらさら！ 結んだバナダナは働きのリツカたんらしさのあらわれ！ 俺はそんなかわいリツカたんのエプロンになりたい！ 四六時中ペロペロできるからな！

いけねえ、うっかり嬉しさのあまり返事が遅れちゃった。あまりにもペロリテイが高いおかえりなさいだった。

「ただいま戻りました、リツカ。何か変わったことはないですか？俺にお手伝い出来ることは？」

薄味で残念な顔面に満面の笑みでお目汚しすまない。俺が師匠の様なイケメンなら良かったのだが。それか、武器屋のムキムキの男のような……素晴らしいマッスルボディなら顔にコンプレックスもなかったのだが。

だが、リツカたんを前にした俺に笑顔を止められそうにないし、リツカたんはいい子すぎて不快にも思わないらしい。リツカたんがいい子でよかった！

で、で、俺のやることはなにかないのか？ ちよつと日も空いたからな。リツカたんがなにか不便してないか気になる！ 疲れ？ そんなものはリツカたんのペロくてキュートな顔と可愛い声聞いたらどっかに消えたわ。

リツカたんペロペロ！ うん、顔色いいな、良かったぜ！ 成長して丈夫になったとはいえ、もともとは病弱だったリツカたん、ウオル口から出ても大丈夫そうだなによりだぜ！

リツカたんがそこにおいて元気で可愛い、それだけで俺はあと何百年

か頑張れる。いやもう人間になれるならその寿命そっくりそのまま返すから人間と同じ速度で老いさせろって話だが。

「お手伝いなんて！ いいのよ、疲れてるでしょ、ゆっくり休んでね」
「ええ、では、明日お伺いしますね」

そう言われちゃもう甘えるしかねえ。早く休んで何の憂いもなくなったところでなんでも手伝うしかねえ。気を遣わせたくないからな！

だが引かないぞ俺は。リツカたんのお手伝いなんて、なんだろうがペロリズムがすぎてペろっペろだ。掃除？ 炊事？ 呼び込み？ 案内？ なんでもやる。リツカたんが好きだから！ まあ、重い男にならない程度にな。

さっそくパーティーを一時解散し、腹ぺこらしいマテイカにテーブルに引つ張って行かれる。当然のように着いてくる兄妹も。解散した意味はあるのか？

ともあれ、ゆっくり休むために食事もそこそこに俺は部屋に引っ込んだ。人間でいう軽食で腹いっぱいだ。そもそも作りが違うからな。それでも人間並みに食う奴もいるだろうが、個人差だ。俺は小柄だし。

そんなに食わなくてもいい、そんなに寝なくてもいい、もちろん人間と比較してだが、そんな天使でも全くやらなければ繭になって、そんで星になっちゃう。

ゆっくり休む必要はねえ。人間たちの笑顔こそ、俺の原動力だから。

だけでもなによりも俺が尊重したいのはリツカたんの労りの言葉。俺のことを考えて言ってくれた優しい言葉だ。鼻真上等。

まあ、休むことは一概に眠ることだけじゃねえだろうけど。ともあれ寝たらなんでも良くなることだろう。起きたらきつとさっぱりすべてを吹き飛ばし、また幼い者たちの助けができるだろう。

翼があった時の癖でうっかりうっ伏せで寝た俺は、くつきり布団のあとを顔につけ、せっかく早々に目覚めたというのに鏡の前で硬直した。

こんな小さい子どものような情けない格好ではリツカたんの前に出られないという理由で、早朝から部屋の中で何も出来ずに硬直するハメになったが……まあ、もうやらなくていいかつての習慣が出るくらいには疲れていたらしい。

それを見破ってくれるなんて！ 流石の慧眼だ、リツカたん！ ペろペろ！

父になんて言いましょう。母になんて言いましょう。そしてガトウザの両親には？ 花の溢れる故郷にて、力を高めるための修行に出ると書き置きを残し、誰にも言葉で告げずに飛び出して行った娘のことをどうしようと思っているのしよう。

そんな自分勝手な娘なんて、勘当されるでしょうか？ それならむしろこちらからお願いたいくらいです。干渉されないなら良いのです。それなら憂いなく気持ちよく眠れるでしょう。兄も。

問題は、私たち二人は所詮は親戚ですらなく、他人だということ。私がガトウザを兄だと思っただけでも、弟だと思っただけでも同じことです。

私たちには、それぞれ血の繋がったきょうだいがいるわけではなく、また、あの人たちは積み上げて来た偽りの名誉と金を維持する為に、きつと後継者を求めていることでしょう。

私は……彼らの価値観からしても出来ない娘だった訳ではありません。いつだって、家を飛び出すまで、言いなりでしたから。そうしなければ、生きていけませんでしたから。

ああ。うっかりペテンのボコを出したなどで家が滅んでいたらいいのに。

しかし、いくらそのような事情でサンマロウへ帰郷したくなくとも、私の事情なんて崇高な使命を持つアーミアスさんには関係ありません。そして、私がお供することをやめる理由にもなりません。

ええ、父になんと言われても、母になんと言われても、私は胸を張っ

てこれこそが素晴らしい行いであり、世界で最も名誉なことであると言えます。

それでも。憂鬱なのです。不安なのです。

宿屋のフカフカのベッドの上で、私は悶々としていました。耳はもちろん、ぴったりと隣の部屋を伺うべく壁につけていました。が。ええ、お隣は愚兄でも格闘少年でもなく、アーミアスさんの泊まっつてらっしゃる部屋です。

アーミアスさんは、いつも、少し書き物をしたあとに早々に就寝されます。寝息までは聞こえませんから、もう聞こえるものは何もありません。

レンジャーは魔法使いよりも耳がいいのでしょうか？ ガトウーザ兄さんならなにか聞こえるのでしょうか？ いえ、この特等席を渡すなんてことは出来ませんけど。

少し冷たい壁に寄りかかり、私は膝を抱えます。

口から出まかせな嘘っぱちの占いと、手品程度の魔法。そして演技。それだけしかない薄っぺらな両親をおもって。それだけで莫大な財産を築いたのはある意味賞賛に値するでしょうが、罪のない人々を騙していることに違いなく、悪人でしょう。

私はあの人たちのようになりたくなかった。でも、未だに恐れている。

私は、かつてより強くなりました。一介の魔法使いとしても、きつとそんなに劣る訳ではありません。あの人たちより余程戦えます。ですから、今の私が負けるわけがありません。

心も、きつと強くなりました。信念を持ってましたから。

アーミアスさんの手助けになりたいという太い柱を持ち、そのために賢者を目指すこの意思は、以前のように神へ救いを求めたいという安易な考えから、少しでも敬虔な職である僧侶を目指していたようなものでもありません。

ですが、私は魔法使いの身でも敬虔です。そうあり続けます。

本物の神を見たことはありません。見た人を見たこともありません。ですが、私は神のお使いである天使様に従っているのです。彼の

お導きのもと、少しでもお役に立てるように尽力するというこの世で最も徳の高い役割にあずかっているのです。

それまで私は兄の手を離しませんでした。それは、精霊に愛されて、目や耳が悪いのと同じことになっていた彼を哀れんでいた訳ではありません。

自分が心細かったからなのです。手を握って欲しかったのです。私の気持ちと同じおもいを抱えていました。いわば同族で、同じように家のことを憂い、あんな詐欺師たちと同じになりたくない願ったもの同士、傷の舐め合い、慰め合いをしていただけなのです。

今は違います。レンジャーになり、力を制御できるようになった兄はもう私の手がなくても歩けます。いいえ、もつと前から私の手を離していました。そう、アーミアスさんと出会った時から。

ほかの何も見えなくとも、アーミアスさんを見失わない兄は、私の手を必要としなくなりました。そして、私もきつと、兄が支えてくれなくとも歩けるようになっていました。

天使様のお導きのおかげです。

ああ。私にさらなるお導きを。慈悲深く偉大な天使様。美しく誰よりも真摯な天使様。

いえ、いえ、お導きには従いますが、これは私の問題。アーミアスさんのもとで成長した私は、もう甘えることなく解決しなければなりません。

そもそも会わなければそれまでです。私は二度と戻りません。会ったとしても戻りません、もちろん。私には、自分で見つけた道があるのだと言ってやりましょう。

美しき天使様に従う私をきつと彼らは羨むでしょうね。でも、譲りませんし、そもそもお見せするつもりもありません。きつとアーミアスさんに邪な気持ちを抱いて、何をしでかすかも分からない人たちなので。

なんだ、恐れることなんてなかったのです。

私はお導きに従うので、お導きの邪魔をする存在に気をかける必要もないじゃありませんか。胸を張りましょう、堂々としていましょう。

う。

そして彼らのことなんて気にせず、アーミアスさんのお役に立つことを考えれば良いのです。

さあ、眠りましょう。明日からは忙しくなりそうです。かたん、と隣の部屋から音がしましたが、私は眠ることに集中しました。

アーミアスさんが起きたことも、きつと一番にランプをつけるためにかたんと音がするのだと分かったことも、全てかじりつきたいようなことですが、それよりもお役に立つことの方が大事なのです。

ああ、お着替えのための衣擦れが聞こえるような気がします……。

つまり、アーミアスさんは今……。お召しを脱いでいらっしやる？

つまり、つまり、そう、いつもよりセクシーでいらっしやる？

アーミアスさんがセクシーですって？

天使様に邪なことなんてごじいけません！ どんな格好でも、たとえ全裸でもこの世の何よりも清らかです！

ええ、汚れているのは私の心です！ アーミアスさんの防御力が下がっていることに興奮するのはどんなときでも私たち人間の方で、アーミアスさんにとってはなんということもないことなのに！ あの白い肌の露出が増えていると思うと胸がときめいて仕方がないのです！

ああ、至福のひととき。ええ、至福です。私は幸福なのです。

なにはともあれ、おやすみなさい。

62話 偽友人

カラコタから川を越え、野を越え。翼があつたらひとつ飛びの距離だが、二本の足で進むには結構遠い。だが大地を踏みしめるといふのは飛ぶより余程いいと俺は思うがな。見下ろすのは性にあわねえ、それだけのことだ。

花の咲き乱れる野をまた越えて、段々とはつきりしてくる道を歩き、美しく完成された街並みに俺たちは辿り着いた。

レンガできちんと舗装されたサンマロウ。セントシユタインもそうだったが、なかなか栄えたところらしい。さて、どうせこの守護天使も職務放棄してるだろうが。なにか起きていないか調べるのが先決だ。

俺たちが人間たちを見守り、護つてきたのは星のオーラを集めるのが目的だとしても、俺より年上の天使たちは俺より長いこと人間たちを見守っているんだから……少しは情がわかないものかね？

ま、もしかすると、地上に落ちてしまった天使の区分かもしれないからこれ以上考えるのはよすか。だがセントシユタイン、あそこは違うからな。リツカたんになにかあったらどうするんだよ！

てか俺もウォル口から出てるし！ オムイ様の命令だからって、俺は何より前にウォル口村の守護天使のはずなんだがな！

ああ分裂したい、三つに。ウォル口に一人、旅するのが一人、リツカたんのところに一人。そうすればやりたいこと全部やれるはず。

……駄目だ、俺のことだからリツカたんのところに行ける幸せな俺を取り合うために血みどろの争いをするに違いねえ。

「アーミアス、ねえちよつと」

「なんでしよう？」

呼ばれて振り返る。その先にはサンデイがいるが、傍目からみると誰もいないので露店のオバチャンが首をかしげた。

……気を使った方がいいんだろうが、恐らく周りにばれない程度に頷くだけでもサンデイは気にしないのだろうか、振り向いちゃまったものはしょうがない。

というかそろそろ俺はいろいろと諦めてきた。だからか、気が抜けた。誰が呼んだか気にする前に振り返って、これだ。

よく考えれば、サンマロウではオート天使バレしないかもしれない。輪っかを失ってそろそろ久しいと言ってもいいんじゃないか？ なら、天使の力も薄れてね？ いけるかもしれない。それなら諦めるべきではない。

「天使様」じやリツカたんに意識されないだろ！ 信心深いリツカたんにとっては特にそうだろ！ だからまずは普通の男にならないと……。

よし、全力で不審にならないようにしよう。

と、決意したところ、デキるメルティーがガトウザを引っ張ってきて適当な位置に配置する。これではばかることないですよ！ と言わんばかりに目をキラキラさせて。

一方、使われたガトウザは故郷にいるのが相当嫌らしく、されるがままな上に目が死んでいる。

続いてマティカが俺の前に立って、人間たちには見えないサンデイとの会話をさりげなく隠そうとしてくれたが……残念ながら背が足りずに隠れていない。

メキメキ伸びる年齢でたくさん食べてたくさん寝て、たくさん運動しときゃきつと師匠くらいにでかくなれるさ、気にすんなよ。

これだから人間はかわいいな、と頬が緩んだ。

「ココに女神の果実があってもなくてもさ、これ以上どこにも行けなくね？ ほかの大陸に行く手段を見つけないといけなくね？」

「確かに……船などがあれば良いのですが、定期便などはあるのでしょうか？」

「アタシよりその二人に聞けば？」

「そうですね」

メルティーが船、と聞いて顔を上げた。

「船をお探しですか？ 定期便はありませんし……確か、お屋敷の人なら所有していたはずですが」

「お屋敷とは？」

「ここで一番大きなお屋敷のことですよ。そのマキナお嬢さんとは同世代で……まあ、会ったことはないのですけれど」

「なるほど、その方が船を所有されていると」

まあ、カルパドだろうとエルシオンだろうとグビアナだろうと、果実が全部集まらないなら行くことには変わりないだろう。となると、定期便がそのうちのどれかを繋いでいない限り、船を出してもらっても一時しのぎにしかならないわけだが。

聞くだけでも聞いてみるか。対価がどうなるかわからないが……はて。一番大きいお屋敷、か。少なくとも裕福な家庭で育っただろうメルティーがそう言うのか。

俺にとつて金銭は大した価値がないが、たくさん必要となると用意するのにどれだけかかることや。それとも、求められるのは労働か？ はたまた、なにかを持ってこい、とか？

人間たちを人間たちの基準では長らく見てきたが、見てきたただけだ。取引してみたことはしたことがないからなあ。どうなるのかまったく検討がつきやしねえ。

てか船って家と同じでひと財産じゃね？ そんなの借りられるのかね。

アテもなにもないわけだから、はてさてメルティーの案内通りに行くしかない。ヒソヒソと死んだ目のガトウーザと元気なメルティーについて噂されているような気もするが、こっちはこっちで俺が関与しているのかどうか。

どちらかといえば繊細なガトウーザは、耐えるためにかメルティーに手を引かれているが、そこに関しては誰にもなにも言われていないので平常運転のようだが。

仲がいいのは良いことだ。ブツブツとなにか唱えているのが正直怖い。

無邪気なマティカが綺麗な街並みを見てワクワクしているのを微笑ましく見守ることに注力しているか？ いやいや、幼く苦惱する人間たちから目を逸らそうなんてそんな。

ただちよつと個性が強いだけだからな。

ちよつと耳を傾けると、ガトウーザは延々と闇の精霊に祈りを捧げていたので聞くのをやめた。俺は何も聞いていない。

事情としては家が……えーっと、聖職者だがあまり清らかではないってことだったか？ 安心しろ、天使だって清らかじゃねえだろ。特に俺。俗の塊。鼻屑まみれで私欲丸出し。

リツカたんをペロペロするのも天使らしくないところのあらわれみたいなものだろ？

神が直々に遣わせたもうた天使が職務放棄してるんだ、短い生の幼き人間たちが道を誤るのはそこまでおかしなことじゃない。そんな中、行き過ぎだが、敬虔なガトウーザは俺なんかよりずっと徳を積んでる。

俺はそう思うがなあ。

マキナさんというお嬢さんのところに行き、船の話をした途端くるというものだからビックリしちまった。だが次の瞬間には追い出されたわけだが。

流石に心当たりがない。

メルティーとガトウーザは彼女と付き合いがなく、セントシユタイン出身のマティカも同様。俺も当然初対面で、顔見で出ていけど。

あの勢いで俺の顔があまりにもイケメンからは程遠かったからってことはないだろう。なんだったんだ？

同じく追い出された人たちからいくらか恨み言も言われたが、ともあれ。威嚇する兄妹をとどめるのに必死だった。いや、一番困ったのはほぼ唸ってるマティカを止めることだが。

あのお嬢さんはいつからか病弱だったのがすっかり治ってからたくさんの街の人たちを呼び込み、友達になつてくれた相手に贈り物をしてくれるとか。

その一環で、船をくれつつもりでメルティーが言った時は目を剥くかと思つたが、とにかく船を譲ることに不満はないらしい。別の何かが逆鱗に触れたようだが。

謎だが、それより屋敷で自分の親を見かけた兄妹の心も心配だ。まあ、あれだ、完全に全員つてわけでもないだろうが結構な割合で贈り物目当てに甘い言葉を囁いているヤツらの多いこと。

純真な二人にはなかなか辛かったろう。

実際、追い出された二人の親はこつちへ一直線に向かつてきているのが見える。また一悶着か？ やれやれ、文句を言うなら俺に言えばよな、ここに連れて来た雇い主だし。

さて、父親は帰ったらしいが来たのは母親たちか。二人ともそれなりに似ている。二人の仲が良いように母親同士の仲もそれなりにいいのかもしれない。

二人の共通点は豪華な格好つてことか。まあ着たいもの着たらいいんだが。

「メルティー、帰っていたなら言いなさい！」

「ガトウーザ、探していたんだから！」

「ただいま帰りました、お母様。では失礼します」

「化粧も服装も聖職者とは思えないですね、無知とは恐ろしい。不敬です。では失礼します」

ぐるぐる獣のように唸っているマテイカが俺の手を引っ張る。人間性を取り戻してくれ。

「許しませんよ、貴女は世継ぎ、それもとびっきりの。もう充分遊んだでしょう、さつさと役目を果たしなさい。それに何です？ その連れは。狂犬みみたいな少年と……あら」

「あら」

突然怒気が吹っ飛んだらしいマダム二人は釣り上げていた眉を不意に緩ませた。

反対にガトウーザが見るからに突沸し、メルティーは真っ白な顔色でふるふると震え出す。怒っているガトウーザはともかく、メルティーの体調はどうかしたのか？ 会いたくない親にあつてふらつと来たのだろうか。

「メルティー、如何されましたか？ 顔色が……」

「あらあらまあまあ、可愛い子連れれているのね。見つけてきたのか

しら、運命の人を。貴女は昔から類希なる才能を持っているものね」
可愛い子。おい、メルティーをシヨタコン扱いするなよ。それに確かにマティカは可愛いが、可愛いなんて言われたら傷つくお年頃だ。
二人の関係は俺から見ても清く正しい仲間だ。それ以上でもそれ以下でもなく、ちよつとガトウーザより懐いてるかどうかってものだ。

「あら、占いのメロイドギーネ家があの方の正体を見破れないなんて落ちぶれたものね。私どものような脈々と続くハウトウニア家にはつきりと分かります。あのお方が人間ごときに懸想するなんてありえません」

「……まあ、その点は認めても良いでしょう。ともかく、メルティー、お手柄ですね」

「ガトウーザ。我らがハウトウニアにさらなる栄光をもたらすその心意気を認めましょう。天使様をお連れしたのですね」

ん？

またオート天使バレしてね？

俺が首をかしげた瞬間、マティカが俺に突進した。そして勢いそのまま俺を浮かせてどこかへ向かって走る、走る。

俺の思考が追いつく前に街の外まで連れ出され、着いてきていたメルティーがマティカをベタ褒めするまで全く状況が読み込めなかった。ガトウーザが珍しくマティカの頭を撫でてちよつと嫌がられているのが微笑ましい。

なるほど。逃げたのか。それを理解してから二人の親からあして逃げるべきだと察することが出来なかったことを詫びた。ああ、人間というのは複雑なのだ。

必ずしも親は子を慈しまない。だから、あの場で状況がわからずぼーつとしていて悪かった、すまなかったと。

だが、なぜ最初から逃げなかったのか……いや、そうか、マティカが手を引っ張っていたな。鈍くてすまない。

「いいえ、アーミアスさんが謝ることは何もないのです。ですが、顔を覚えられてしまったのは問題ですね」

「兄さん、ここの防具屋にフルフェイスの兜が確かありましたね」

「なるほど、流石我が妹は賢い。隠された美貌というものも……素敵ですね……」

「おれ、お使い行こうか？」

「頼みましたよ！ はい、私の財布から遠慮せずに良いものを選んできてくださいね」

「アーミアスさんの頭を守るものですから私も出したいのですが！」

メルティ어의財布を持ったマティカの背中は見ると間に小さくなっていく。

迷惑かけちゃったようだな。二人は家に戻りたくない、そして連れである俺からバレるのも良くない、だから顔を隠して……ということか。認識が甘かった。

まさか……シヨタコンだったとは。望まぬことにならないように俺も気をつけることにしよう。マティカも顔が隠れるような何かをした方がいいんじゃないか？ フードでもかぶるか？

だがまさか、全員が顔を隠せば不審者でしかないだろう。二人が何やら聞き取れない程の早口で語り合っているのを眺めながら、人間の複雑さについて俺は思いを馳せていた。

戻ってきたマティカにプラチナヘッドを渡され、メルティーに代金を支払うことを拒否された俺は甲斐性なしのもやし野郎を早く卒業してあらゆる面で頼りになる男になりたい。

兜をかぶった俺にメルティーが鏡を見せてくれた。いいなこれ。なるほど。頭が見えなきやそれ関連のコンプレックスは気にならなくなるな。

顔も、髪も、全部隠れて銀と金の輝きを持つ兜を被った俺は天使生でもっとも男らしいといえる。もやしな体つきはどうしようもねえけど、それ以外はバッチリだ。

礼を言うと、敬虔なメルティーは過剰な程に喜び、金を出せなかったガトウーザが地団駄踏んで悔しがらる。なんつーか、そろそろ天使に夢を見るのもやめてくれ……。

俺よりよほど天使なマティカだけが癒しだぜ。

63話 山雨風楼

顔を見られたならば、顔を隠し、服装をちよつと変えて他人のふりをして別行動をすれば良い。そう兄妹は結論を出し、俺たちはそれに賛成した。

俺は単独で情報を探し、顔を見られたマティカも単独行動、どうせ何をしても親にはバレると判断した二人は一緒にいることにしたよ
うだ。

マティカが顔を隠すのかそうしないのかは個人の裁量だとして。金髪はありふれているし、そんなに目立つ顔立ちではないから大丈夫だとは思うが、顔を見ただけで勘違いするシヨタコン夫人がいる街だし、十分気を付けてほしいものだ。腕は立つことだし、武器も持っているし、そこまで過保護になるのはおかしいか。

船がなければこの大陸から動けず、女神の果实探索が出来なくなるってわけだから、なにかあのマキナお嬢さんの情報がないかをおのおで探すということを決まりだ。少なくとも、もう一度話を聞いてもらわなくては。その上でダメだっていうならもう他の方法を探すしかないが。

例えば……天の箱舟をどうにかして移動に使えないか、とかな。

さて、まだまともな街を散策していないからな。栄えた街をいろいろ見るのはそれだけで面白いもんだ。それに俺はだいたい人間の営みを空から見てきたから、最初から足で回るのはなかなか新鮮でいいな。花の溢れる整えられた街並みは美しく、道行く人々もだいたい幸せそうな顔をしている。

飢えが見るからに目につくってこともなく、いい街だ。だがそれは、誰かにとつてはそうではない。メルティとガトウーザはこの街を飛び出したいほど息苦しかったらしい。人の営みは天使のそれと比べ物にならないほど複雑で、繊細だからだ。

俺は人間じゃない。だから理解しきることは難しい。だが目を開いて、見ようとすることは出来る。町を静かに歩きながら、少し困った人に手を差し伸べることが出来る。こつそりと助けるのではなく、

実体を持ち人の形をした者として。

てくてく歩きながら、道行く人々にマキナお嬢さんについての話をいろいろ聞くことにした。そしてそれはいつもの聞き込みと違って、俺を人間扱いした返答で、うれしかった。

見るからに旅の者といった服装ではフルフェイスの兜もそこまで目立たないらしい。天使だとはわからないらしい。いつもより視線を感じないのはなんて快適なんだ。……つまり、いつもはオート天使バレが起き続けているってことだよな？ 天使に生まれついたのは、俺にとつては罰ゲームか何かか？

まあ、それはそれ。本当に百三十年前の人間ならリツカたんに出会うことなくたばっていたに違いないから結果オーライ。

リツカたんに出会えた天使生は、どんな偉大な天使生よりも最高なんだぜ？

ああ、人間扱いとはこんな素晴らしいものだったのか。誰かとすれ違ってもすれ違いっぱなし。いきなり謎の感動をされることもない。話しかけても普通に素朴な返事がある。俺、普通の人間になりたかったんだ。擬似的な、勘違いだとしても、俺は。

分析するとだな、首から上のどこからか、天使だと分かるような要素があるってことになるな。なんか目とか耳から変なガスでも出てるのかね？ 天使成分的な。誰もいないところで意図的になんとかして、出尽くしたら枯渇しねえかな。

「ちよつとすみません」

さて、マキナお嬢さんについては、あの大きなお屋敷に一人で住んでいるってことと、友だちならば欲しがるものが高価なものでも贈りまくっているってことぐらいしかまだわからねえ。他にもつと有力な情報はないものか。旅人に聞いても仕方がないから、店の人や明らかな普段着の人間などを選んで声をかける。

「旅の人かい、ようこそサンマロウへ。何か困ったことでもあったのかな？」

さつきから割と子どもに近い扱いを受けている。いやまあ、マティカの受けている若い旅人扱いというのはこんなものだろうか。……

俺の方が少し、背が高いのだが、似たようなものなのだろうか。

まあ人間には重要だろう、三十や四十の年齢差なんて俺にとつてはあんまり変わったもんじゃねえし、そんなものか。オムイ様にとつては瞬きみたいなものだしな。

「困ったことというほどではないのですが、お屋敷のマキナお嬢さんについて少し、気になっておりました。その、最近になって、いきなり友人に贈り物をするようになったとか。彼女の過去の知り合いをご存じないですか？」

この言い方だと俺も彼女の恩恵に与りたいようだが、船を借りたいというのはまさにその通りだからな、隠し立てはしない。

「おやおや、うわさは旅の人にまで及んでいるのかね。あそこのお嬢さんはね、両親を亡くしてからやつと病弱だった体質が改善されて、それでお友達が欲しくなったらしくてね。いろいろと物で人を寄せているんだよ。」

寄ってくる人間の全員が全員、悪人というわけではないだろうけど、みんなお嬢さんより物目当てらしくってね。最近花よりも観光の目玉かもしれないよ。だから……まあ、欲を出しすぎない程度には行くのもいいんじゃないかねえ。お嬢さんは喜んでみるみたいだし。

そうそう、昔からの知り合い、もとい使用人はみんな気に入らないって首を切っちゃったそうだねえ……マキナお嬢さんの昔を知るのは……からくり職人くらいかねえ」

「からくり職人、ですか？」

饒舌な花屋のおばさんは、お屋敷の方を向き、屋敷の前で右往左往する人間たちを見て頷きながら、まさに他人事といった様子で言葉を続けた。

「マキナお嬢さんは、ずっと遊び相手だったお人形を作ってくれた職人のことを気に入っていて、いまもたびたびやり取りがあるとか……詳しくは知らないけどね」

「いえ、ありがとうございます」

彼女自身はマキナお嬢さんに擦り寄る人間になるつもりはないが、彼女がいることで街に人が寄せられるなら自分の収益にもなるから

それなりに歓迎してるって感じか。

だから彼女について聞いてもなんとも思わない、と。

まあそうだよな、それが普通の人間だよな。いつそ愛おしい。

さて、そつちでまた情報収集するか。からくり職人の家はまあ、地図でも見ればわかるだろ。

マキナお嬢さんの癩癩を伝えた旅の少年は、他者からの視線を拒絶するように顔を覆う兜をかぶっていたが、決して人を拒むような様子はなく、声色も物腰もやわらかで、たいそうお人よしに見えた。声変わり前の高い声で、俺と自称していなければ性別も分からないような若い子だった。

屋敷へ向かいながら、勇ましくも剣を帯びた小柄な背中を眺める。マキナお嬢さんよりはいくらか年下だろうか。

「お嬢さんはどんな方なのですか？　まともに話す前に追い出されてしまったので……」

「優しい子だよ。病弱だったころ、外で遊べなかったお嬢さんにお嬢さんそつくりの人形を作ったことを大層喜んで、今でも私を屋敷に招いてくれる。その時は気難しいことまでは知らなかったがね」

何故かひどく驚いた少年は、足元の小さな段差に引っかけかり、たたらを踏んだがなんとか転ばずに済んだ。

「おや、大丈夫かい」

「はい、大丈夫です、すみません。あの、つかぬ事をお伺いしますが、お嬢さんが黄金の果実を食べたとかいう話を聞いたりはしませんでしたか？」

「黄金の果実……いや、知らない。もしかしたら、彼女をなんとか健康体にするために取り寄せたものの中にあつたのかもしれないがね」

「そう、ですか」

「それを探しているのかね？」

「ええ。それが俺の旅の目的なのです。あんなに大きなお屋敷のお嬢

さんなら見たことがあるかと思ひまして……」

少年は言葉を切った。屋敷についたからだろう。

一応、突然の来訪にお嬢さんを驚かせないように声をかけつつ、部屋へ向かっていく。広い屋敷だというのに人気がなくがらんと寂しい様子は、彼女の両親がご存命だった時とは全く違う。

彼女の部屋の応接間には誰もいなかった。部屋に閉じこもっているのだろうか。なんとはなしに部屋のドアに触れると開いているようだった。

立ち去ることもできるのに、未だお嬢さんを心配してそこにいる少年は、どこか不安そうに人気のない屋敷を見回していた。

「どうしたのかね」

「いえ、本当に使用人がいないと思ひまして」

「そうだね、こんなに広い屋敷なのにどうやってお嬢さんは維持しているのやら」

扉をノックしても返事はない。話し声や足音は聞こえるだろうにかつて彼女は病弱だった。もしかしたら倒れているかもしれない。

そう思ったのは私だけではなかった。顔は見えなかったが、少年の兜の奥に瞬く黒い瞳はことさら不安そうに揺れていた。

「マキナお嬢さん！ 失礼しますよー」

少女らしい飾り付けの部屋には、主の姿はなく、もぬけの殻で。狼狽していると少年が何やらベッドから手紙を見つけて、そしてその身を兜からのぞく目で素早くいくらか追うと、手紙はくしやりと握りつぶされた。

思わず少年を見ると、慌てているようだった。そうするつもりはなかったようだ。

「あ、ああ、失礼しました。内容が、あまりにもひどかったもので」「貸してみなさい」

少年は慌てて手紙のシワを伸ばし、私に差し出した。

「はい。……これは、事件ですね」

少年の言う通り、そこに書かれていたのはマキナお嬢さんを誘拐したことと、身代金の要求だった。

正義感の強そうな少年は、怒りに震える指で他になにか賊の痕跡が残っていないか、と調べるようにベッドのシーツをひっくり返したが、他には何も残っていないかった。

閑話 慕師弟

天使界に、ある一人の天使が降り立った。

辺りがキラキラ輝くほどたくさん星のオーラを纏った天使が、人間界から帰還したのだ。

かの天使は翼を素早くたたみ、堂々とした足取りで上層を目指す。彼に興味津々の幼い天使たちの視線に気づかず、もはや気安く接することが戸惑われるようになった同年代の天使たちの眼差しに一瞥すら向けずに、ならわし通り、真っ直ぐに長老オムイへ報告しに向かう。彼は見習い天使アーミアス。齢百ほどの若い天使である。人間でいえば百にもなるならばいつ亡くなってもおかしくないが、天使としてはまだ子どもだと言っても良い。

だが、彼は普通の見習い天使ではない。師の守護する村を引き継いで守護天使になることは間違いないとまことしやかに囁かれ、そのことは厳格な上級天使である師イザヤールでさえ否定するものではない。

非常に勤勉、真面目な彼の信頼は厚く、職務に背くことは決してなく、学ぶことに常に真摯で、物腰は柔らかく、常に丁寧な口調で態度は穏やか。目上を敬い、幼子たちには親切であり、なにより人間を愛し、慈しみ、守護する。

天使の鏡とも言える彼は、もう百年前のように悪意に晒されることは無い。

……極一部の例外はまだいるのだが。

唯一、そんな彼に汚点があるとすれば、邪魔にならないようにしっかりと折りたたまれてもなお目立つ片翼の大きな傷だろう。ぼろぼろになり、部分的に皮膚が剥き出しになっている翼は飛翔能力こそ問題ないが、どう見ても欠陥である。

彼のそれについて触れることはタブー視され、誰も表立って本人に何か言うことはないが、常に噂がつきまとう。

その「事件」があつたとき、まだ幼かったり、生まれていなかった天使たちは事実を知らないゆえに好き勝手な噂を流すのだ。

いわく、天使の模範であるゆえに悪魔に囚われた時の傷だとか。いわく、例の異端者に傷付けられた跡だとか。いわく、元々彼は翼に傷を持って生まれた天使なのだとか。いわく、いわく、いわく……。

流れる噂に一つたりとも真実に近いものは無い。彼は傷つけられた、あるいはそういうものだったのだ、という噂は果てしない尾ひれとともにいくらかでもあつたが、まさか己の手で純白の翼を塗り、切り取ろうとナイフを振り上げ、それにしくじって無残な有り様にしたとは真実を目にしていなければ思えない。

だが、事実を知る上級天使たちは揃って口をつぐむ。いや、つぐまざるを得ない。師イザヤールは今の彼……見習い天使アーミアスが、再びあのような月に魅入られることはないだろうと考えていたからだ。

イザヤールは上級天使として名高く、また彼の意に沿わないことは大抵彼の旧知であるラフェット、エレツタ、そして妹であるラヴィエルにも大抵当てはまるため、四人の有力な上級天使相手に下手なことは言えない。また、長老は静観の構えを崩さないのも後押しした。

あの「事件」はアーミアスにとつてはごく幼少期の癩癩のようなもので、記憶ももうおぼろげであつてもおかしくない。下手に触れなければ当時、そういう狂った考えに至つたことを思い出したりしないだろうという考えだったのだ。

よもや、その目上の存在に従順な顔の裏で、当時と変わらぬ、いや、むしろ増していく人間への想いがあるとは知らず。当時のことをある意味反省しているとはいえ、翼を失うためにいろいろと考えを巡らせることはむしろ以前より頻度が高い。

天使たちは気づかない。いや、気づけない。あの狂った行為が、自分たちが無意識的に見下している人間に、誰よりも天使らしい規範の天使がまさか、なりたいたと、少しでも近づきたいと、心底願つたゆえの行動だとは。

それは、誰よりも無垢ゆえに。

白き天使は、天使の拙い悪意にすら染まつた。その純白の髪を掴まれて。星を宿さぬ瞳を濁らせて。嫉妬という、人間じみた感情の真似

事の矛先になって。

しかし、その事とは関係なく、彼の中身が外見とは大いに異なることは、神すら知らないことなのだ。

天使は神にとってはただの間に合わせの道具に過ぎないからだ。その心のうちをわざわざ読み取らなくとも、理に縛られた彼らは、どんなに反抗したい気持ちを持つとも上の者に意のままに使われる。

判断材料は普段の態度からのみなのだ。とはいえ、大抵の天使はいかに猫を被ったとしても幼い時の行動までは誤魔化せない。いくら取り繕ったとしても狭い天使界で見破られることがないことはまずありえない。

気づかれないままなのは、誰よりも無垢だったゆえに。

幼い頃の彼の性格は本物だった。無垢で、穏やかで、真面目な彼は目を敬う態度にも真摯だった。そこに一片たりとも嘘はなく、ただ、その態度のまま中身が成長して、おかしな方向にひん曲がったことに誰も気づかなかっただけなのだ。

ああそれも、無垢だったゆえに。

真っ白な天使が強烈な個性を浴びればそれに染まる。厳格な師のもと、彼はとても真面目だった。異端者の悪意に晒されて、彼は灰に染まる。白を捨てさせられて、だが誰よりも天使であつたから、本性から逸れることもまたない。

人間への大きな「あい」ゆえに。「あい」という意味において、嘘はなく。生命を慈しむ心は真実で。すべての生命を救えるように真に願う。「あいするところ」を真に持った天使だったから。

天使らしい天使は、今日も地上で出会った人間を慈しみ、守護する。彼の灰色を疎むのは彼だけ。誰もがその灰髪を悪いものとは思わない。

彼の本当の中身を知っても、案外受けいられるのかもしれないが、彼は……相当な何かがない限り、丁寧で柔らかな態度を崩すことはないだろう。

彼は作り上げた丁寧で柔らかい態度のまま怒る、喜ぶ、悲しむ。だがどれも天使としての例外にならない。常に丁寧に、いかに激昂しよ

うと敬語すら崩さない。寝ぼけていようが同様で、そこに隙はありはしない。

天使としてはまだ幼くとも、百年という歳月は「うっかり」の余地を作りはしない。

もしも、その心のうちをそのままに吐露することがあるならば。それはもう、彼は天使ではないのだろう。念願叶って人間にでもならない限り、彼は態度を崩さない。

堂々と闊歩する彼の背からふわりと舞う、抜け落ちた一枚の羽根を。かつての彼のように無垢な天使はそつと拾いあげた。その色は彼の本当の髪の色のように真っ白だった。

羽根を見て、その背中を仰ぎ見て、幼い天使は柔らかくも熱い憧れを胸に抱く。

だが、残念なことにすつかり「今の」アーミアスの人格が出来上がっているのです、その憧れの先輩天使は歩きながらも今のお気に入り少女のかわいい寝顔に内心身悶えていたのだが、誰も知る由もなく。

一人静かにペロペロしている変態。心のアルバムを埋め、まだ見ぬ人間たちを愛する。だがどこまでも天使の少年は今日も、無垢な天使だと勘違いされる。

なぜなら。

幼き子らよ、無知なる人間たちよ、どうかその命、安らかなれと。祈りの部屋で誰よりも真摯に一人祈るのもまた、アーミアスなのだから。

真摯な天使で、かつ変態天使なのである。

まだ物を知らぬ、もつと若い頃の話なので、女の子のローアングルにはテンションが上がらない程度には健全な天使ではあったのだが。

「さあ、世界樹へ向かうが、準備はいいな？」

「はい、師匠」

「よろしい。見習い天使ゆえに、自分で集めた星のオーラも私の同伴

がなければ世界樹の元へ捧げることが許されないが、この調子であればアーミアスを『ウォル口村の守護天使アーミアス』と呼び、一人で世界樹へ赴く日も近いかもしれない。わずか百三歳でここまで良くやることはなかなかないことだ。

「これからも慢心せずに励みなさい」
「もちろんです」

冷静な返事と表情と裏腹に、ほんの少し嬉しそうに瞳を輝かせる弟子。私の弟子となってから少しの慢心も怠慢もなく励んできたのだから、褒めることくらいはある。

だというのに、何故か通りすがりのエレツタに信じられないと言わんばかりに顔をまじまじと見られた。噂されるような冷血な指導をしているわけではないのだが。

ごくごく普通にこの弟子を伸ばす指導をしているまでのこと。

エレツタは同年代で、また同格である。理の発動することのない対等な関係だ。それはつまり……上級天使の中でも実力者に数えられるだろう。

懲罰の執行天使であり、同時に癒しの天使であるのだから守護天使とはまったくの畑違いであることだし、仕方ないのかもしれないが。今日も脱走した異端者を捕縛して世界樹から引きずり下ろしているのはご苦労なことだ。

私の弟子に仇を為すのだから、あの異端者は軟禁処置ではなくもういつそ休眠処置にならないものか。繭になっていれば二度と変な気も起こせまい。

とはいえ、懲罰を決めることができるのはオムイ様のみ。私に口出でできるものではなく、執行天使のエレツタも希望程度のことしか進言できない。癒し手として当時の治療を担当した天使としての進言を合わせても、あの気の強いエレツタが「参考にしてくださいませ」と言うことしかできないのだ。

天使の上下関係に不満はないが、弟子の身を案じると不安ではある。

これはまだ子どもの時分の我が弟子を守るのも師の務めである、と

「いう神の試練なのかもしれない。出来のいい弟子ではあるが、見習い天使であるうちはよく見てやらねば。」

道中、アーミアスと同年代の見習い天使とその師がなにやら話しながら私たちとすれ違つていく。おそらく、世界樹を麓から見ているいと知識を授けたのだろうが。

優越感など、くだらないものである。だが。

一人、飛び抜けて優れているよりも、天使全体が優れていた方が効率もよい。だが、まだまだ子どもらしく幼く、地上も見ることがないようなその天使と、星のオーラを単身身に纏わせて持ち帰る天使。

どちらが優れているのか明白であり、それは私にとって紛れもなく誇りだった。

真面目すぎるくらいのあるアーミアス。だが、目をきらきらさせて表情を引き結ぶ姿にもう少し褒めるべきだと考える。調子に乗るような性格ではなく、また褒めてしかるべき実績であるのだから。

ゆえに、私は誰も見ていないことを、何故かよくよく確認してからそのふわふわの髪の毛のうえに手を置いた。

不思議そうに私を見上げるアーミアスに、想像以上に柔らかい触り心地に驚いたことを察されないように、撫でてみた。私とて褒めるために頭を撫でることくらいは知っている。

……師エルギオスは、私の剃りあげた頭をよく気に入っていらつしやつて、よくこうやつて……いや。

髪型は自由である。いくら剃っている方が性に合っていると私が考えていても、アーミアスは別の個人であるのだから。この触り心地がなくなるのはまた、損失だ。

「師匠、どうされましたか」

「いやなに、最近は本当によく頑張っていると思っただけのことだ」

「褒めて……くださっているのですか？」

「そうだが」

ふわり。アーミアスは嬉しそうに微笑む。

表情の少ないアーミアスは、感情が薄い訳では無い。ごく普通のいまだ幼き見習い天使としての内面も持ち合わせていて、そして公私を

混同しない、つまり真面目すぎるだけのことである。感情が豊かすぎることをはしたないと考えているのかもしれない。

そして、その考えには私にも責任があるのだ。私も似たような考えの持ち主であるのだから。

だが、まだまだ未熟で幼い天使であるのだから、年相応に笑って過ごしていても叱責することはない。むしろ、私は好ましいと感じる。

よく師を慕い、よく指導に従い、よく天使として尽くす。まさにその容姿のとおり、天使の鏡である我が弟子は、だが私の弟子であり見習いであることには代わりない。

私は、そんなアーミアスの師であることを、師エルギオスの弟子であることと同じくらい誇りに思っている。

ゆえに、こうして慕ってくれる弟子を褒めることは私の誉れでもあり、護つてやり、導いてやらねばならぬとますます決意を強めるものなのだ。

64話 訪問

マキナお嬢さんについての進展があったとかで、マティカ少年が街の中を駆けずり回って私たちを集めてくれました。急いでメルティーと共にお屋敷に向かい、アーミアスさんの位置を精霊に知らせてもらおうと、どうやら、奥にあるお墓にいらっしやるようでした。

屋敷の主以外はいないはずのこの屋敷。そしてお墓。つまり、この先にはあのマキナお嬢さんか、幽霊しかいないでしょう。

アーミアスさんは天使様ですから、霊魂と話すことも当然できません。妖精と話すこともなさります。人ならざる守護者は、同じく人ならざる彼らの力を借りつつ、使命をまっとうされているのです。

その邪魔をしないようにそつと、私には虚空にしか見えない場所を見上げているアーミアスさんに近づきました。私には小さな少女の形に見えました。いえ、私に幽霊は見えないのですがね。

ええ、精霊と霊魂は別ですから、全くの「虚空」に見えます。なにかいることは分かるのですがね。それは空中に無数に漂う精霊がちょうど人のかたちにはぼつかりと不在であるからわかるのです。

見えないことで見えているようなものですね。幼い頃、人のかたちをした虚空が恐ろしかったのですが……もしかしたら、その中のいくらかは天使様だったのかもしれないですね。

とはいえ、アーミアスさんよりも素晴らしく慈悲に溢れ、美しく、気高く、位の高い天使様なんてこの世にいらっしやらないに違いないのですから、天使様を見逃していたにしても取るに足らないことです。

アーミアスさんにとつての、上の「立場の」天使様はいらっしやることが既にわかっていますが、たとえ立場があるからといって、空の彼方におわし、悪く言えばぶんぞり返って自らは手を下さない存在がいくら偉いとしてもなんだというのでしょね。

神を信仰しているとうそぶき、その権威として立つ存在が私欲に肥え太っているように。下々のことに見向きもせず、良い暮らしをし……それでも名君ならば問題ありませんが、遊びに明け暮れるような暴君も、聖職者を騙る豚どもも。

すべて人間ではありませんから、アーミアスさんは心を砕いてしまおうでしょう。分け隔てなく人を愛してください、そんな大きな慈悲、善行が表れたお姿に惹かれた身ではありませんが。

日々、与えられるものを享受するだけの者にまで救いの手を差し伸べるだなんて、どう考えてもアーミアスさんにとって不必要な慈愛。

先回りして片付けたく思います。私怨にすぎませんけどね。

……それができたら、苦労はないのですけどね。精霊の力を悪用したならば、あるいは、とも。いえ、まずはアーミアスさんの使命のお手伝いからですが！

麗しき天使様、ああ私の道しるべ！ 私を、どうかお導きを！ なんだってお申しつけくださいたらよいのに！ ええ、どんなことでも！ 欲を言うならば、翼をもがれた天使様の、その美しく白い御見足がお疲れになった時！ 使え慣れぬ足を！ 私を下敷きにすることで！ 少しでも癒されるとか！ そういうことはございませんか？

例えばその華奢な指で、一つ必要のないものをお示しになるのならば！ 私はそれを消すのに！ どんな手段を使っても！

ああ、私になんなりと命令してくださいればよいのに！
ですが、私とて心知らぬ人間ではありません。

人の心を理解しようとしぬ豚どもとは違うのです。お優しく、慈悲深く、いつでも正しい我らがアーミアスさんは、過激なことを好まれないに違いない。平和で愛しいなんということのない、そしてかけがえのない生活を大切にしてください。不和を好まれない。ですから、強硬策はイコール不和であることですので、決して私は進言いたしませんし、そう望まれる日がこないことも、もちろん弁えておりません。

アーミアスさんの目が届かない場所でこっそりと、麗しのお方の邪魔者を静かに消し去ることぐらいは「致し方なし」ですがね。妹も、少年も、賛同してくださいるはず。……アーミアスさんと同じく、純真で潔白そうな少年はどうでしょうか、それは少し、分かりかねますが。

アーミアスさんほどではありませんが、彼のことはよくわかりません。あまり興味もないのですが。とりあえずは、私の味方でなくと

も、メルティーの味方でなくとも、アーミアスさんの味方であればよいのですから、どうでもいいことかもしれません。

野良猫のようにしなやかに戦い、そして猛犬のようにアーミアスさんをお守りしてくれるならば私が少々噛まれるくらいは問題ないのですから。

「……あなたのお友達を、きつと、人さらいの手から助けましょう」
不思議な緑の光を宿したアーミアスさんの瞳が、「少女」へ向けて優しく微笑まれました。そして、こちらに振り返られました。

まだ、まだ、アーミアスさんのお顔が何者にも遮られずに拝めることに慣れていない私はその麗しき天使様の美貌に心臓を撃ち抜かれましたが、問題ありません。本望です。

口から潰れたカエルのような声が漏れたのは失態ですが、幸いにも誰一人気にならなかったようです。特にメルティーの目は、雄弁にもアーミアスさんの前でそのような失態を演じるとは修行が足りないところのやいばで突き刺してくるようです。

「皆さんには目的地向かいがてら、情報を共有しますね」
少し緊張したような面持ちで、アーミアスさんは足早に街から出ていくようでした。

やべーわ、女神の果実のパワー舐めてたわ。

てかよ、俺って人間の可能性を無限だと思ってるピュア天使なんですか？ ……ピュアはないか。人間はなんにでもなれるし、俺たちと違って未来を繋ぐこともできるし、どんな魔にも、どんな聖にもなれる存在だ。本当なら、守護天使なんて必要ないのかもしれない。

これまでの女神の果実の被害者……ダーマの大神官も、ツオのオリガのお父さんも人間、もしくは人間だった存在だし、ビタリの石像は言うてもマトモな自我なんて無かったろ。対話できるほどの知能はない。

だがどうだ、魂のなかった綿人形に、魂が、そして命が宿っただけでなく、あんなにはつきりした自我を持ち合わせてるんだぜ？ もう

神の所業としか言いようがねえわ。いや、神の所業なんだが。女「神」の果実だしな。

ま、人形を作ったからくり職人のおっさんからしたらこれまで作り上げたもの全てに魂も命も宿っているという気持ちかもしれないねえけどよ。

それが事実かそうでないかはともかく、これまで魔法のかかった物以外と喋ったことは今までないからな、とりあえず無いものとして扱うとしてだな。カマエル？

……あー。とりあえず、そうであれと作られたわけでもない物に魂が生まれ、そこで息づいているってことだ。

やっべ、女神の果実を一つでいいから拝借、つか着服したら俺人間になれるんじやね？ 余裕だろ、むしろ。俺には……まあ、石ころよりはマトモな魂と、紙切れよりは人間らしい肉体がある。

それで人間になれるのなら、理で縛られる前に食って願うことが出来るなら、俺は……。

まあよ、人間つてのは天使よりは夢く、天使よりよっぽど素晴らしく生きているもんだ。まがい物の生き物である俺が使命を果たす前に任務放棄してだな、人間たちに危険が及ぶものを回収する前に私欲にうつつを抜かしてだな、それでそんな不誠実な野郎は働き者で誠実なりツカたんにフラれるに違いないわけだ。

まがい物はどこまで行ってもまがい物、それなら天使として見守ってた方がマシだったと悔やみ苦しみながら星にもなれず、赦されることもなくたつた一人で死んでいく。俺たち天使にとつて、星にもなれずに死ぬということは喪失だ。俺たちは輪廻に入れない。

俺たちに来世はない。俺たちは……赦されなければ、嗚呼、四肢をずたずたに引き裂かれたほうがましだろう。犬の餌になった方が余程死に甲斐があるってもんだ。

わりとひでえ末路だぜ。そうなるくらいなら、天使として大して飯を食わずとも、眠らずとも生きていける肉体を駆使して人間を一人でも、うっかりミスで死ぬまで救い続けた方がよほどいいってもんだろ。どんな極悪人だろうと、俺たちとは違う輝ける魂を持つ存在を一

人救って消えていくことこそ本望。

はー、希望はあるが叶わねえな。どうせ女神の果実を必死に揃えても一言労われて終いだしな。褒美なんてねえよ、天使は無償労働だ。一応の対価は……いつか赦され、星星となるか、神の国で安らぎを得るか。どっちでもいいか。どんだけ働きたくねえんだ。生きていることを罰ゲームだと思つてねえ？

もがき、苦しみ、輝いて、繋ぎ、未来へ歩いていく人間たちを影ながら護ることを素晴らしいと心底思っているならまた意見も違わねえ？

俺は天使的に救済されるなんて真つ平御免だが、天使的にはハッピーエンドだな。俺もきつとそうなるんだろう。星になった天使は見守ることが瞬くことしか出来なくなるだろ。なったことないから分からないが。

それつてもう、生き地獄じゃね？ 死んでるけど。そこに救いたい幼き者がいるのに見てるだけとかもう死にきれねえで降ってくるレベル。俺隕石になるわ。流れ星となつて燃え尽きて、少しでも目を楽ませた方がいいわ。

急募、上司にバレず、不誠実にならず、人間になる方法！ 翼と輪っかはセルフで取り除いておいたぜ！ 背中ofズタズタっぷりは目も当てられねえけど服脱がないから大丈夫だ！ 鏡で見たらもうあれだな、俺の背中は荒地だったわ。

てかよ、あの落下で顔と手が割と無事なのが納得いかねえ。この顔だけ？ 少し傷でもあった方がワイルドでちつとはカツコよくね？

さて。

どこか間の抜けた誘拐犯どものアジトに堂々と入り、なんともひょうきんな言葉で歓迎されたわけだが。もうすでに気が抜けてこいつらへの怒りはどっかに行つちまった。

おー、おー、極悪人と言うには随分間の抜けた対応で。俺が悪人だったらどうしてたんだ？ 強盗だったら危険だろ、もう少し用心しろよな。

ま、なんつーか、話の流れでマウリヤは無事だつてわかつたしいいか。だが彼女はアクティブで、とつと逃げたみたいだが。人間ではない彼女が、マキナお嬢さんのために人間のフリをしていたからって本性がなかなか変わるはずもなく。

本物のお嬢さんなら逃げたりできねえんだが、それは分からないのだろうよ。俺だつてまだ翼があるような心地ですつ転んだりするからな。階段を越えようと翼を開いたつもりでなんもなかったりな。

魔物の巣窟に向かっていつちまったのは面倒なことだが、ま、彼女は人形だ。少々の衝撃じゃ死なないだろう。俺の大事な仲間たちに負担がない程度に救出に行くかね。

なあマテイカさんよ。メタルブラザーズを追いかけ回してる場合じゃねえぞ。ガトウーザもセミ取り少年みたいな顔しやがつて。落ち着きのあるメルティーを見習えよ、なあ？

あー、信仰心が暴走したメルティーが拝み始めた。どこかに俺の事をそれなりに雑に扱ってくれる人材はいないのか？

……そうか、サンデイか。お前だけだよ……。

65話 進

じめじめとした洞窟。全身に苔の生えたおっさんを斬り捨て、祈りをささげたアーミアスさんは薄暗い辺りを見回した。返り血が一つもなく、戦士になったのももう慣れたのかなと思う。

おれはまだバトルマスターという職業に慣れてないんだけど、さすがだ。そろそろ慣れなきやいけないのは分かっているんだけど、武闘家になってからも爪を持つ前はずっと素手だったし、素手から爪に慣れるのにもとつても時間がかかったものだから。

たまに、うっかり剣を持つてることを忘れて殴りかかって、刃じやなくて柄で魔物を攻撃しちゃうことがあるくらい。メルティーがそのたびにちよつと冷たい目で見ってくる。ガトウーザみたいにおれにまったく興味がなあまり気づかなかつたらいいのに、気づく程度にはあの女ひとは優しい。

「迷いそうですね……」

「足を取られないように気をつけてください。『マキナお嬢さん』の正体はお話したように人形のマウリヤですから、恐らく人間のよう肉体の損傷によって死に至ることは無いはず。視界が悪く、魔物も強いので、ともかく自分の体の安全を第一に行動してください」

「わかったよ！ アーミアスさんも、気をつけて！」

「ありがとうございます」

メタルスライム三段重ねのメタルブラザーズがちらちら見えて、思わず駆けだしそうになるのをぐつとこらえた。あんなの見てたらうっかりよだれが出ちゃうよ。

ベクセリアの封印の洞窟でメタルスライムに気を取られたことをちゃんと学習して、今度はそういうことにならないようにしないと……行く手をふさぐ敵だけを倒さないと。アーミアスさんは、魔物だつてなるべく死なせたくないと思つてるように見える。

そして、殺したときは、深く祈りを捧げて、その死のもつと向こうが苦しくないようにしてくれる。ねえ天使さま、おれが死ぬときもそうしてほしい。独りぼつちは寂しいから。一人じゃなくて、この天使

さまに看取られるなら怖いことはない。

でも、「天使さま」じゃなくて、「アーミアスさん」に看取られると思うと、アーミアスさんに悪いって思うけどね。人の死を、おれよりずっと見てきたのだからうけど、あんまりきれいなものじゃないし。

みんな、死ぬときは……と思ってる。アーミアスさんはおれたちを守ってくれるけど、その恩をきつと返そうと思ってる。おれは口には出さないけど、あのきょうだいは口にまで出しそうな勢いで。でも、でも、口に出したらこんなに優しいアーミアスさんは悲しむと思うんだ。まぬけに、でも、誇りをもつて死ぬ間際、穢れのない手をおれの血で真っ赤に染めて、看取りながら悲しそうな顔をしてしまう。

アーミアスさんの間反対で、よく映える鮮血はいいけど、悲しいのは良くないから、そんな日が来ないように、強くなりたいな。

だからさ、アーミアスさんに斬り捨てられた魔物は幸運なんだ。本気でその死を、みじめで汚いはずの死を、悲しく思ってくれる人に殺されるって。そんなことめったにないことだから。

アーミアスさんを傷つけた魔物もある意味じゃ幸運だけど、そこで全部の運を使い果たしたからすぐ死んでほしい。血がパツと飛んだらもう用済みだ。綺麗な綺麗な天使さまをもつともつと魅力的にしたのは認めるけど、それはそれで、ものすごく悪いことであることは間違いなんだし！ おれが好きなことと、アーミアスさんが嫌なことは別の事。

おれたちはアーミアスさんのことがいろんな意味で大事だから、怪我してほしくないっていうのも本当の気持ちだ。

そんなおかしくなっていく思考が、一瞬でパツと吹っ飛んだ。銀色の素早い影を見て。

……あ！ 思わず垂れそうになったよだれを飲み込む。見間違えじゃない、本物の銀色の影。ほとんどの旅人が躍起になって倒そうとする、みんな大好きなアイツ。つまり、それはメタルブラザーズ。

あああ、あっちにもメタルブラザーズが！ こっちにも一匹！ 全部おれたちに気づいて逃げていく！ すっごく勿体ない！ あいつらを倒したらどんなにすごい経験値がもらえるんだろうね！ ちっ

とも想像がつかないや！

一匹くらいこつちに来てくれないかな！ あいつらものすごく臆病だけど、ついうっかりしてたとかでさ！

そんな願いは残念なことになうことなく……阻む魔物にちよつと手こずつても、苦戦したつていうほど時間をかけることなく順調に洞窟の奥に進んでいく。次の休みをもらったら、ここにきつときてメタルブラザーズをたくさん倒そうって思ったよ。本当はその場にアーミアスさんもいたら心強いし、最高なんだけどそういうわけにはいかない。ほんとに残念だ。

寂しい夜の、街の裏通りみたいな、こんなに暗いところはアーミアスさんは似合わないんだ。せめて夜でも月が明るい日じゃないと、よく見えないじゃあないか。楽しいことをしていても、その相手に似合わないのは良くないと思う。

あつたかい光の中で。やさしい太陽の下で、あるいはきれいな月の下で、手を差し伸べてくれるのがよく似合う。

だけどおれ、多分趣味悪いから綺麗な人の血塗れの姿が好きなんだ。思わず涙が流れるくらい、赤はいい。押されて、転んで、擦りむいた膝から血が流れて、打たれた頬が青と黒まじりになって、おれの天使さまの絵本はいつだって、最初の白いままの姿を思い出せるのに、汚れてしまった。今はもう、なくなってしまった。

良くて似てる。だから、アーミアスさんの灰色の髪も、もともとは白かったんじゃないかな。そうでもなきや、あんなに綺麗なはずがないよ。元々灰色だったなら、魅力的なはずがない。

どんなものだって完璧な形なんてありえないんだ、歪み、汚れて、傷ついて。だからああ天使さま。

あなたはきれいなんだ。白い石でできた、「完璧な」天使像よりも、ずっと。

お星さまみたいに、おれたちを見守ってくれる。あのきらきらした目で、シスターよりも優しく、冬の太陽帰る家のないマティカにとつて冬の太陽は命綱よりも温かく。

なんか寒気したけど気のせいだよな。洞窟はマグマでも流れていない限りうす寒いものだしな。天使は風邪をひかないわけじゃねえけど、随分標高の高いところにあるものだからあんまり寒くて駄目ってこともないはずだ。

ところで。人形マウリヤよりも、俺は仲間を優先した。正確には、程度がどのくらいかわからない魂を宿した人形よりも、そこに生きている人間を優先した。それは俺が人間の健やかな生を護る守護天使だからということであり、鼻負多めの若輩者ということでもあり、手を伸ばせる範囲を守るという事でもある。

言い訳は色々できるがはつきり言って俺の力不足でしかない。

だが今すぐ強くなるのは無理だ。なら、できるだけ慎重かつ急いで進まなくちゃな。

魔物もまあまあ強いし、足元はそれなりに悪いし、少し視界は悪いしな。どれも少しずつだ。だからこそ油断大敵っていうか……ただでさえメタルなあいつらがうろうろしてるんだ、一人完全に気を取られてるっていうか……自覚はしてるみたいだが、剣を握りしめてぶるぶる我慢してるマテイカがいる。

我慢してるのは偉いよな。欲望に負けてないところとか、俗に塗れ欲望に流される俺よりよっぽど自制心があるっていうか。いい子過ぎる。

最高にペロいリツカたんを前をしているとき、俺は全く自制できないからな。たまらずリツカたんの前に飛び出していき、何か話すだろうし、そうでなきゃなにか手助けになることをするし、それも我慢できたとしても頭の中でリツカたんペロ！ペロペロ！大好きリツカたん！ってやりながら心の中のリツカたんアルバムを満たしながら全く集中力もなく……リツカたんについてだけは普段よりも集中しているが……楽しく天使生を謳歌していることだろうよ。

つまり手遅れ。我慢なんて何もかけらもしてないわけだ。マテイカは偉いなあ。

随分剣も上手くなってきたしな。俺に善し悪しがわかるのかどうかということについては分かるようになってきた、と言うべきか。

「かぼう」を覚えたらもう後は用済みだと言わんばかりに、旅芸人の時から変わらぬ剣技ばかりを磨いてきたからだ。戦士になりたかったのはそれが目的だったわけだしな。

なんのためにルイーダの酒場で人間を雇ったかって話だ。俺が盾で仲間たちが矛だ。効率的に使命を果たすべく。

その甲斐あってかそれなりに剣だけは使い物になってきたような気がするぜ。師匠に見てもらいたいレベルだ。これなら、目標のパラディンになった時にも得物を変えずに済むだろう。得物を変えたら頭の中がごちゃごちゃになることくらい分かっていることだからな。

なにせ、百年くらい使ってきた得物だ。今更ほかの種類に出来るかよ。

洞窟の最深部、と思わしき場所に俺たちは警戒しいしい突入する。マウリヤがいるとしたらもうここしかないのだ。彼女があの人さらいたちから逃れた理由は分かるが、出口と反対方向に向かっていたのは幸運なのか、不幸なのか。まあ、出ようにもあいつらのアジトがある方向よりない方が行きやすかったのだろうが。

どう考えても危険な方向なんだが。

最深部にはやはりマウリヤが立っていて、何もわかっていない顔して、俺たちの方をゆっくりと振り返った。人形だと知ってもなお、あのからくり職人の腕がいいからなのか、人間そっくりの外見で動き、瞬きまでして見せる彼女。

だが、狂暴と言つて良い魔物の巣窟でただのお嬢さんが無事なはずはない。人形ゆえに魔物に見向きもされなかったのか、人形ゆえに人間よりも身体能力が良く、かいくぐってこれたのか、真偽は分からないが、とにかく悪く言うならば「異様」なのだった。

俺だったらとつくにズタボロだろうし。こんな可憐な姿のお嬢さんより弱っちいということになるが。天使って案外頼りないもんだぜ。

66話 相違

巨大な蜘蛛が俺たちを品定めしながら舌なめずりでもしているようだ。実際は、蜘蛛の表情なんてわかりやしなないし、分かったとしてもそれは、天使の俺が人間の感情を理解するのに手探りであるように、曖昧なことだろうが。

魔物だろうが、人間だろうが、共に歩むべき尊い魂であることには違いないが、必ずしも対話できるとは言っていない。対話が出来なくとも隣人であることには違いないが、彼らの名前すら知ることすら出来ずに、単なる「美味そうな肉」に見られることもまた仕方の無いことだ。

共に歩むべき命であり、食う食われるの食物連鎖の上下でもあるのだから。

ところでよ、天使の肉って美味しいのか？ 生命力なくて不味そうじゃね？ 栄養もなさそうだし、外見は若くとも基本百年物だし。まあ、食われる必要があるって言うなら、幼く未来ある仲間たちを逃がして俺が食われるってのは当たり前のことだが、みずみずしくも若い仲間たちの方が食べごたえがあるってことで、困らなくてもスルーされたら悲しくね？

連続して噴出される、粘つく糸に絡め取られないように駆け回って逃げる。なんとか隙を見つけなくてはならないが、追い払えそうにもないこの感じでは、あいつ、空腹なのか？ ならもう、生きるためには倒すしかなくなる。追っ払えるならそうしたいんだが。

執拗に打ち込まれる弾っぽいものはいかにもな色で、毒が入ってそうに見える。当たるとやばそうだ。

「散らばってください！」

常に寄り添うきょうだいたちが弾かれたように左右にばらけた。そのおかげか、二人に向けた粘つく糸は地面に当たっただけで済んだ。マテイカは駆け回りながら一撃を入れる隙を見計らっているらしい。闘魂打ちの研ぎ澄まされた魔力が指先を煌めかせる……のはいいが、剣の存在忘れてね？

俺はと言うと同じく駆けずり回りながら攻撃のチャンスを伺っている。マウリヤには、悪いが相手は肉食の魔物。かばっている暇はない。てか、庇うまでもなく奴はマウリヤを眼中に入れていないようだ。嗅覚がどの程度あるのか知らないが、布と綿の体では食欲が湧かないのも当然だな。

吹き飛ばされ、動かないマウリヤを守るのも、こいつを追い払うのも諦め、俺は無事に仲間たちを帰すことを一番にすることに決めた。こいつの毒とか、もしも食らったらキアリーで治せるかもわかんねえし。こいつに噛まれたことがある実例を探すのは難しそうだ。

剣を腕の回転に合わせて鋭く一撃。いつものように剣を振り抜く間もなく、蜘蛛の牙が眼前すれすれの空気を切り裂いていく。思わず盾を持った方の手で顔をかばいそうになるが、そんなことをしていればねばつく糸の餌食になっていただろう。

隙を見せてはならない。後ろに飛び退く。だが、隙を見せるのが致命的なのは向こうも同じだ。俺に構っている間に背中をメルテイに焼かれ、目をガトウーザの弓に狙われ、痛みを怯んだ瞬間にマテイカに闘魂打たれる。

そして俺からターゲットを外した瞬間に俺にもまた斬られる。

完璧なコンビネーションだ。

これがしたかったただけだし？　俺が囷になって仲間たちにド突いてもらうっていう、きつと師匠にも褒められる完璧な作戦ってただけだし？　違うけど、そう心の中で調子にでも乗らなくてはちよつと……気弱になりそうなほど外見のインパクトが大きい相手だ。

俺に攻撃を引きつけることを完全にできるわけじゃねえけど、向こうにとってムカつくことをしてりゃ自ずと俺に向かってくる。例えば目を狙うとか、攻撃を俺に逸らすとか、似たようなやつでは割って入るとかな。

そうすることによって俺の身が危険に晒される分には仲間にあたるより圧倒的にマシだしな。どんな状況下でも幼い方が護られるべきだ、そうだろ？

俺は天使、天の使い。生命あふれる地ではなく、風と雲だけが渦巻

く天に住まう、守護機構。いつちよ前に呼吸し、食べ、「あいする」が、生みの親はいない子どもも持てない。そんなものは生き物ではないのだから、生きとし生けるものを優先するのは当然で、そんな中で最頂の強い俺は言葉を交わし、愛しいと思った者たちを選んで守る。こんな生き物未満でも愛しく幼い子らを護れる。

そろそろ板についてきた連携、慣れつつある職業。それらは俺たちの、いや、「俺の」慢心を招いた。

前へ少々出過ぎたか、狙われたマティカを俺は庇う。しかし、奴の腕は俺と違って沢山ある上に、尻から噴出する毒弾を撃つのに牙も脚も関係の無いことだ。

メルティー！

翼があつたら、飛べるのだから、いつものような安定した「かばう」が間に合つたらう。きつとメルティーのところまで飛んでいって、真正面から受け止めた。それが出来なくて、俺は、護るために横に跳んだ。

盾で受けるでなく、腕で受けるでなく、比較的柔らかい脇腹に毒の弾が直撃した。だが、だけでも、俺は護り切つたのだ。

痛みと、点滅する視界。

毒が身体に回る。

今までも傷を受けていたから、堪え切れなくなり、俺は間抜けにも地面に転がったまま動かない手足に叱責する。この間にも仲間たちが狙われるじゃないか、と。

熱い、寒い、熱い、息苦しい。だからなんだ、俺は幼くない。その程度で、膝について、止まつていいわけじゃない。俺は守護天使なんだ。守護天使なのだから、いや、天使だから、いや、本当は理由なんて必要ない、俺はそうあるべきなのだ。

本で読んだ人間たちのなんと色鮮やかで、生き生きとして、魅力的だったことか。実際に見た人間たちのなんて、本よりもよほど、眩しかったことか。初めて言葉を交わした時、俺はどれだけ嬉しかったか。

俺は護るために、いや、俺は大好きな人間たちと過ごす時間がか

けがえのないものだとは知っているから。短い生の、魅力的な者たち。毒が体力を奪っていく。関係ない、俺は立ち上がって、剣をとる。油断はもうしない。

ガトウーザのベホイミが、キアリーがキラキラ光って、俺の傷を塞いでいく。毒を消し去っていく。俺たちを見て獲物を狙う肉食性の生き物の本能を見せ付けてきた巨大な蜘蛛は、俺をターゲットにしたのか、都合よく俺に向かってくる。盾を構えたが、衝撃までは逃がさず後ろに吹っ飛んだ。

その期を逃さない大蜘蛛が、その巨体でのしかかってくる。

頭からバリバリって雰囲気ではないな。柔らかな脇腹から食われるか？

毒で上手く暴れられないが、剣を振り回して激しく抵抗しつつもそんなことを思う。

いやいやいや、俺旨くねーし。ヒョロいもやしだぜ？ 引き締まった筋肉も脂肪もねえ。無駄に百年もので新鮮とは言いがたい。てかそれ抜きにしても辞めとけ、退いとけ、ほら、後ろによ。

鬼のような形相のマティカが剣振り抜いてるから。とつくに俺の腕力なんてもやしなものを抜いてった天性のバトルマスターが。残念なことに、俺は蜘蛛と会話することが出来ない。

俺は祈る、それだけだった。蜘蛛は、マティカに体を両断され、魔物特有の黒い光に包まれて消えていった。

マティカは、剣から手をすぐに離して、子どものように俺にすがりついて、泣きだした。いや、子どものように、では無い。マティカはまだ、子どもなのだ。

幼く、愛しき人間は、俺の身を案じてくれていたんだと、俺は理解して、優しさに感動しながら、泣かせてしまったことに胸をちりちり焼かれながら、金髪の手をぽすぽすなでた。

「し、死んでる……」

化け物に手酷く吹き飛ばされたらしいお嬢さん。誘拐して、身代金を請求して、その後は穏便に帰ってもらうつもりだったのに。お嬢さんを殺す気なんてなかった。そんな度胸はなかった。

地面に叩きつけられたのか、ぐったりと倒れ伏し、ビクともしない姿に歯がカチカチとなる。ここの化け物に同じ目に遭わされたなら、もちろん俺は死ぬだろう。お嬢さんを連れ戻しに来たらしい街の連中も、化け物と戦ってボロボロになっているぐらいだ。

あいつらを置いて逃げよう、と思うのに足がすくんで動けない。まさか、まさか、お嬢さんが死んでしまうとは。

だが、街の連中との戦いで元凶の化け物は倒されたのか姿はない。その点だけは助かった、そう頭の片隅で思いながらも罪悪感が胸に染み付く。

けほ、と一際傷まみれになった少年が咳き込んだ。それ以外、誰も何も言わない。傷まみれの少年にすがりついて泣く子どもかしゃくり上げる声だけが、そこにある。

「ああ、びつくりした」

その場に不釣り合いな、甘やかな少女の声。背後で起き上がる音がある。まさか、お嬢さんは死んでいた。箱入り娘のお嬢さんが、魔物にあんな攻撃をされて生きているなんて、ありえるか？ 生きていたとしても、もつと、そう、思わず間の抜けたことを言ってしまっただけで、満身創痍のはずだ。

振り返った先にいたお嬢さんは、傷らしい傷すらなく、攫った時と同じように何も理解せずに微笑んでいた。

「ひい！ ば、化け物！ズラかるぞ、こんなところにいるられるか！」

俺は仲間と逃げた。あんな化け物がお嬢さんだったのか？ お嬢さんは化け物が成り代わっていたのか？ どうでもよかった。病弱で、甘やかされ、なんでも周りに与えるようになった世間知らずの女の子の正体をそれ以上知ろうとは思わなかった。

化け物から逃れるために、あんな、恐ろしい場所から逃れるために。一心不乱に引き返した俺たちはあの街の連中が化け物を少しでも引

き止めてくれることを願いながら逃げた。

67話 宿霊魂

アーミアスさんにお慈悲をいただいているというのに未だ泣き止まない少年の頭を優しく撫でていたアーミアスさんですが……正直、天使様としての使命を全うするためだとしても、あんなに手ひどく傷を負われていては、私どもの心の方が辛くなってきた泣きたくもなるという点では見解が一致しているようですが……あの無礼な誘拐犯の悲鳴に、そうとうびつくりした顔をなされました。

化け物。そう、彼女を罵った言葉に自分の事のように顔を歪め、悲しまれたのです。自分の事のように悲しんでくださる。なんて慈悲深く、なんてお優しいのか。

人間だけでなく、魔物の死をも悼み、人形の魂にまで寄り添われるなんて。素晴らしき天使様、いいえ、アーミアスさんだからこそ。

「化け物……知っているわ、絵本に出てくるの。悪者、みんなの嫌われ者……」

お嬢さん、いいえ、人形マウリヤは、ようやっと「まるで人間のよう」に嘆きました。その嘆きはとても化け物とは思えませんが、彼女は素直でした。素直すぎました。人間らしからぬ精神を持ち、表情も変えずに、しかし、嘆きました。

ええ、私のように、あるいは妹のように、家の方針に幼い時から反骨精神を持ち、跡取りであつてもとつと見切りをつけて高飛びするくらいの気概があるようには見えませんので。

見ず知らずの、それも自分を誘拐したような身勝手な男の言葉なんて、何も知らない信者から金を巻き上げる聖職者くらい胡散臭いです。ええ、複製した免罪符の紙つきれになんの意味があるのでしょうか？ 神への祈り？ 神は助けては下さりません。神は見守つておられるのです。祈るならばこの美しき天使様へ！ 今ならそうはいえますが。

ですが彼女にとっては、心に深くナイフが突き刺さったようなもの。そして彼女には共に寄り添うメルティーはいない。あんな男の言葉を鵜呑みにして、嘆く。

ざわめく精霊たちが興味深そうに彼女の周りをくるくる回ります。精霊に人間のような感情は……ないわけではないのですが、薄いので、ただ面白がっているだけでしよう。

ええ、私のような人間に付き纏って、私のような人間の手助けをするような精霊たちですから、薄情でしょう。アーミアスさんのように清く美しく真つ当な心の持ち主ならばもつと情に厚い精霊が来るのでしようね。

残念ながら彼らは、溺れるほど惜しみなく私を愛してはくれますが、視界を埋め尽くしてきてまっとうな視野すら、いまだ新鮮という有様ですので、こっちの事情などどうでもいいでしょう。波長か何かが合っただけではないのですか？

私の周りをくるくる回りながらくすくす笑う彼らには私の考えなど筒抜けです。ですがまあ、どうでもいいことですね。私が何を思っても、彼らは私を見切ってくれはしなかったのですから。

「本当はわかっているの、うまくできないの……みんな、物をあげる時だけ来てくれるの、本当は私はいらないの、マキナのために、友達を作りたいかったけど、私、私、化け物だから上手くいかないのね……」
淡い光が、少女の形をとりました。

『違うわ、マウリヤ、あなたは大切な私のお友達』

精霊が私の耳元で囁きました。精霊はともあれ、幽霊を見ることは適わない私に通訳をしてくださっているのです。マウリヤの前に不思議な緑の光が煌めいて、人間の少女の姿……らしく、もやもやと光っています。

レンジャーとなり、力の制御が適ったおかげでしょうか？ アーミアスさんには遠く及ばないでしょうが、私にも僅かながら幽霊の姿を見ることが出来るようになったとは！

お役に立てるでしょうか？ いいえ、靈魂との会話は為せないでしょう。しかし、アーミアスさんと同じ景色を見ることが出来る……そう思えば！ ああ、この眼を愛しく感じます！

ああ感謝します！ かつては本物の聖職者、本物の聖人を輩出した家系に！ 今はもはや墮落しきり、まったく力も信仰もありません

が、我が身に流れるこの血は精霊と波長を合わせたわけです！

ええ、これまでこの目を疎むこともありましたが、今は兜に隠されたアーミアスさんの顔も、メルティーの微笑みも、少年の涙も全部新鮮です。これまでは半透明で光り輝く精霊越しでしか見てこなかったわけですから。

アーミアスさんと出会う、という素晴らしい運命！ そしてそのアーミアスさんのお導きで天職を得！ そして私は美しくも慈悲深く、最も優れた天使様と同じものを見られる！

おつとよだれが。嬉しすぎて。

「あらマキナ！ 御機嫌よう、お久しぶりね。今日は遊べるのかしら。おままごつとをする？ それとも……」

『マウリヤ、ごめんなさい。もう遊べないの』

光に包まれた少女は首を振りました。

「マキナ？」

『マウリヤ、私の大切なお友達。もう無理にマキナにならなくていいの』

「……わたしのこと、きらい？ きらいになったから、もうあそべないの……？」

少女は、いえ、マキナお嬢さんの表情までは見えません。人間の感情なんてどうでもいい精霊たちは教えてくれはしないでしよう。私は情に薄く、アーミアスさんやメルティーのように本当の意味で他者へ心を砕くことなどできないからです。

『一人ぼっちだった私を、あなたはこれまで支えてくれた。でも今は、あなたが一人ぼっち』

「なあに？」

『私を幸せにしてくれたあなたを……、私は』

「ええマキナ、わたしはあなたがいてくれるならいつでも幸せよ！」

『ごめんなさい……マウリヤ。もう私の願いに縛られないで。もう自由になっていいの、マウリヤ』

マウリヤの大きな目が、ゆつくりと瞬きました。

『私はマキナ、あなたはマウリヤなの。』

私は天使様と共に、その御許へ、遠い遠い国へ旅立ちます。だからあなたも、偽物のマキナから、人形の、私のお友達のマウリヤにもどつて……。ありがとう、私の、大切なお友達』

もやにつつまれる少女の姿がだんだんと淡くなり、ゆっくりと霧散していきました。恐らくは未練を失ったことによつて言葉通り旅立ったのでしよう。

「マキナ……」

マウリヤは、その場に立ち尽くし、何やら考えていましたが、そのうちアーミアスさんになにやら告げて、帰っていかれました。

アーミアスさんは、ゆっくりと兜を外し、私たちの目を見て帰りましょう、と静かにおっしゃいました。

白磁の肌、星を宿した黒い瞳、薄桃の唇の、尊く美しき天使様。

彼はもちろん私なんぞよりも長く生き、欲望滴るたくさんの人間を見てきてもなお、慈悲深き方。つまり、多くの死を見送り、天使様は魂をあのように見守つてきたのでしよう。

ですが、アーミアスさんの瞳にはわずか、悲しみがありました。

アーミアスさんは慣れていてもおかしくないのです。慣れのままに、また一人見送つたという感想だけを抱いてもおかしくないのです。麗しき天使様。

しかしながら、アーミアスさんは何時だつて、死者を見送りどこか悲しそうです。

なればこそ……そんなアーミアスさんだからこそ。私たちに手を差し伸べてくださり、導いてくださり、夜空の星々のように美しい姿であらせらるのでしよう。天使様、その中でもこうもあたたかく、地に降り立って救いをくださる優しい方。

アーミアスさんは天使様ですが、精霊とは根本的に違うのか、あまり声も聞こえていらつしやりません。私の周りに歌う精霊よりずっと清らで人情を理解する精霊たちが、歌い、踊りながら「悲しいの？」と問いかけていますが、彼は私たちを安心させるためにうつつらと笑みのようなものを浮かべただけでした。聞こえているようには見えません。

「俺は、生きとし生けるものすべてに、どのような生を受けたとしても死の救いがあり、ゆえに来世の友であると考えていました。しかしこれからは認識を変えなければなりませんね。

誰かの想いを受け取った全てのもものが、魂を宿し、動くことは出来なくともあのように想うのです。女神の果実がたまたま、彼女を本当に動けるようにしましたが。

実際に魂というものはなんであるか……」

そつとアーミアスさんは胸を抑えました。

「ここにも、あるいは、幼き人間たちのように、魂があるのかもしれないね」

そのように他者の有り様に心を痛めるアーミアスさんに魂がないわけありません！ ですが、儂く、悲しく告げる様子に何も言えませんでした。

死の救い。その言葉の意味を、私は少しだけ、ほんの片鱗だけ理解出来たからです。

その若い姿で、私たちよりずっと長く生きるアーミアスさん。天使様に死はあるのでしょうか？ 天命を全うする、という言葉がありませんがアーミアスさんは天使。天の使い。

その天命は？

「アーミアスさんに死の救いはない」、そう読み取った私は、情知らぬ精霊たちの歌を聞きながら、あまりにも情け深いお姿にじつとみとれるほかありませんでした。

夜の星々の静かな煌めきは、白く輝く兜によって隠され、その静かな悲しみを覆い隠したようでした。

68話 順風満帆

さて、今度こそマウリヤと落ち着いて話すかとお屋敷に戻ろうとすると、街の入口で出待ちしていた兄妹の両親、と家族……と使用人だろうか。それなりの人数に阻まれた。

目を釣りあげたメルティーが杖を構え、笑顔で、しかし目が笑っていないガトウーザがそれを手で制した。だが、妖精、というかもはや精霊たちのポルカを発動させつつだ。なんつーかポルカつてるのに見えねえから多分あれは精霊だ。

進行を阻まれたとはいえ、各々の家庭の事情に口を挟む気は無い俺は所在なく引っ込んでいることにする。興味なさげなマテイカと一緒に小さくなっているでしょう。できるなら退散した方がいいだろうか？

とりあえず兜は被ったままで。オート天使バレ抑制機能が付いている優れものだから、少なくとも俺が天使であるということだけで話がこじれることは無いだろう。天使がいるからって話がこじれるとは限らないけどな。

仲裁とか頼まれても出来ねえし。天使は見えないで守護するものだから何だ、つまり、コミュニケーションには自信が無い。もちろん、俺はリツカさんと話すことをずっと夢見ていたわけだから、並みの天使よりは「人間と話す」ことに自信があるがそれはそれ。

てことで、ちよつとずつさりげなく下がろうとしたが、しかし、回り込まれた。

「随分な挨拶ですね」

「丁寧すぎて反吐が出ますよ!」

「メルティー、はしたないですよ」

「そういうガトウーザはとつくに精霊に『お願い』しているではありませんか」

「ええもちろん、挨拶には挨拶で返さなければ失礼でしょう?」

「それもそうですね、さすがは兄」

「ええそうですね。丸焼きは芸術的ですが、お目汚しにも程が

あるでしょう?」

「険悪だな。だがまあ、「みんな仲良く」なんて言う気は無い。しかし有耶無耶にしたいくはないようだし、待ってるか。それとなく離脱するのもありかもしれないが、どうにも。ガツチリ囲まれた。これだところり退散できねえ。」

「あのお方を出しなさい、ガトウーザ。我らが教会の力を高め、いつそ我らの……いえ、神々のその偉大さを世に知らしめるために!」

「あー、そういう? 神々の偉大さ……なるほどな? まあ俺会ったことねえし逆らえないだけで偉大なる神々よ! とはならねえんだけどな。んー、まあ、幼く愛しい人間たちの創造主だからそれなりに信仰しているんじゃないかな。誰も。」

「はー、ほー、なんだろうか。俺には彼らから信仰心は特に感じられないが。あー、俺の守護してきたウォル口はほかの場所よりも純朴な人間が多いらしい。そう師匠に聞いてきたから「純朴でない」人間はどうなのかはよく知ってはいない。」

「だがまあ、幼き人間たちだ。幼いんだから目もくらむ。純粹故に歪んでしまう。人間同士ではたまったもんじゃないだろうが、俺からしたらまあ別に……守るべきことには変わりねえし。神への信仰心の有無で護るか護らないかを決めるわけじゃねーし。」

「俺の偏見によって決まるんだしな。もちろん人間である限り守るつもりだが、全部が届くわけじゃねえから。一にリツカたん、次に仲間たち、ウォル口村、宿屋の人たち……優先順位は明確だ。俺がまだ見習いであることはつまりはそういうことなのだ。」

「しかし「あの方」って誰だ? ガトウーザという後継者に戻ってきて欲しいんじゃないのか?」

「悪評高いハウトウニア、そろそろこの街のみならずほかの所でも知られてきたのではないのですか? 街の教会と断絶してかなり時間が経っているらしいではないですか?」

「お黙りなさい、メロイドギーネの娘。あなたがうちの跡取りを誑かさなければもつと素直に差し出したでしょうに!」

「何を言うか、生臭坊主共め! うちのメルティーの神秘を奪ったの

はその息子だろう、帰ってこい、メルティー」

メルティーの父だろうか、杖を構えたままの娘に強い口調で言う。紫の髪、涼しい目元、良く似ている。呪い師のような服装すらも。実に似ているが、まあ、うん、そうだな……似てるのに似てないな。

だが、仲間のルーツ見てるの面白いな？ 俺たちにはないし、親とか、そういうの。俺が双子で遣わされたりしたら多少は顔も似てるのがいたのかねえ？ こんな薄い顔の天使が二人もいなくてよかったとも言えるが。

「帰って何をするのです？ 私は見つけたのです。目指すべき道を」

「メルティー、父は寂しく思っている。戻ってこい、なあ、頼むよ」

「生まれた時からあなたの演技を見てきた私が絆されると本気で思っています？」

「演技だなんて！ 早く帰ってこい、そしてあのとん……」

「そこから先を言うのであれば、『本物の魔法』がその顔を焼きますよ、ええ本気です。私はあなたがたの言う『本物』なのです。奇跡的な、本物の魔法使い。

私はもう、自分の魔法を恐れたりしません。むしろ嬉嬉として振るえます。お退きくださいな」

……えーつと、雇用主として止めた方がいいのか？ だがまあ、家庭内の喧嘩を仲裁する義務はないだろうし……。しかしさすがに怪我をさせるのは問題があるだろう……。

今にも弓を乱射しそうな顔をしているガトウーザともどもとりあえず回収して、落ち着いて話す時間は後で設ける。これしかないか。今は頭に血が上ってるんだよな。

時間を置いて落ち着いてもらった方が……いいよな？ 師匠、これで合ってるのか教えてくれよ。

「メルティー、ガトウーザ、そして皆さん」

「はいっ」

「なんででしょうか！」

「話の腰を折って申し訳ありませんが、一旦、時間を頂けませんか。後ででありましたら、ゆっくりと話せますし、落ち着いた場所にするこ

とも可能ですよ」

「なんて寛大な！　ありがとうございます！　是非そう致しましょう、ええもちろん、そうするのが正しいのです！　目的はこの者達との会話ではありませんでしたよね！」

メルティーは立ちっぱなしの上に注目されるのが堪えていたのかすぐに同意してくれた。そして、物言いたげな彼らに至極笑顔で提案した。

「後にしましょう！」

もちろん、その、説明もなしにヒートアップしていた面々が受け入れられるはずもなかったが、メルティーは止まらない。そういうなんつうか、情熱的なまでに猪突猛進なところに「慣れている」ガトウーザが後押しするからだ。

「兄」でもあるガトウーザは暇すぎてその辺にフラフラと歩いていきそうだったマティカの手を兄らしくむんずと掴んで爽やかに言った。

「なんだか、顔は全く似てないが兄弟みたいでとても微笑ましい。そういうのに弱いんだ、俺は。」

「行きましょう、メルティーが押さえ込んでいるうちに。大丈夫です、マウリヤ……いえ、マキナお嬢さんのお屋敷にまで詰めかけては来ません。格上の相手の家にあんな人数で上がり込めるほどの度胸はないですから」

「ちよつと、離してくれよお……」

「では、アーミアスさん。行きましょう」

マキナお嬢さん、と聞いた瞬間彼らは明らかに口ごもった。俺たちの歩みを妨害することなく、道を開けてまどくれた。なんだか力関係がはつきりしているな。そんなものなのか。

まあ、力関係とかいう話をした場合、愛すべき人間たちよりも俺たち天使の方がよっぽどはつきりしていてなんも言えねえわ。俺はペーパー、師匠は結構強め。

例えば、師匠に剣を向けることができるのは「稽古をつけるために剣を向けることを許す」としてもらわなければならない。だが例えば

……誰か上級天使が俺を傷つけたいなら、あの流血事件のように抵抗はできない。

人間の平和でいいな。圧倒的に。人間になりてえな。里帰りのごとに大出血とかなったらもう帰らねえぞ。帰れって言われたらもう喜んで！ とか心にもないこと言いながら帰らざるを得ない訳だが。世知辛え。

女神の果実を集め終わったら次の使命を賜る前にとつととボーコットしてえな……そのためなら天使界から地上へダイブをもう一回してもいい。リツカたん心配はかけたくなえけど。

そうだ、一度落ちれば翼と光輪を失った。二度落ちたら天使つてことも失わね？ そこまで都合は良くねえか。

静かな屋敷の中に、穏やかな時間が流れていた。かつてのように「お友達」による騒がしきはなく、しかし寂しげな雰囲気でもなく。

マウリヤは屋敷の人間に「マキナは長い旅に出る」と告げて既に人形の姿に戻っていた。マキナの願い通りに、そして、マウリヤの想いの通り、マキナに寄り添って。

もはや人形は喋らず、動かず、俺の手の中に黄金に光る女神の果実が収まる。

ひとりぼっちだった少女の末期の願いを叶えた奇跡そのもの。寄り添う魂なき人形に命を吹き込んだ奇跡。

だが、悲しいことに、人形は人間にはなれなかった。命を吹き込まれて、話せるようになっても、マウリヤの友はマキナだけだった。

マキナはそれを悲しんで、マウリヤに人形に戻り、もう傷つかないようにと願ったのだろう。友はそもそも人ではなく、自分の願いのために傷つくのを悲しむ、優しい少女。

マウリヤの魂が、どうかマキナと寄り添っていますように。あの優しい少女が、友と笑っていられますように。

俺は膝をつき、手を組んで祈り、そして屋敷の中にある人の気配に少し安心する。

マウリヤ、マキナ、二人とも。別にひとりぼっちではなかったのだ。二人を思う人はいる。それが今はもう、慰めになるかはわからないが。

旅に出たマキナを待つ人がいる。いつか真実を知るのだろうか、それは今でなくてもいいだろう。

そして船。マウリヤは言伝を忘れなかった。俺たちは彼女の好意をありがたく甘えることにして……メルティーとガトウーザはそのまま出発したそうな顔をしたが、俺はあの幼き人間たちに「後にしよう」と言った。

嘘をつく気は無いし、そもそもここで有耶無耶にして出発しても後々めんどくさいだろう。

そう説得するつもりだったが、思わぬ伏兵がいたのだ。

俺は戦士だ。力が強い職業。しかし上には上がいて、つまるところバトルマスターとレンジャー二人がかりに勝てるほどではない。

優しさである。家庭のいざこぎに巻き込むのは忍びないという。俺はその説明にとりあえず納得して、マティカと船で待つことになった。

しばらくして、晴れやかな顔をした二人が出発しましょうというものだから、もう少しゆつくりとするつもりだったがその通りにすることにした。何があつたのか、どうなったのかは聞かなかった。

僧侶であつた時ついぞ型に則って祈るといふことをしなかったガトウーザが、慣れきつた所作で十時を切り、メルティーは何度か杖を打ち鳴らした。

そして陸がすっかり見えなくなると、嬉しそうに報告してきたのだ。

「布教完了です、アーミアスさん！」

おう……愛しき子らよ、一体何を？

閑話 祝福呪

『素直になる呪い』

魔物の攻撃から味方を庇った。それは日常だ。だから、誰を庇ったのか、何から庇ったのか、もう定かではないのだが。それはいい。幼く愛しい子らが傷つかずに済んだのだ。俺だつてかすり傷ひとつ負わずにいられるなんて傲慢になっちゃあいねえが、明らかに普通とは異なる魔力を帯びた一撃をみすみすと浴びせるものか。

しかし、だ。今回、ちよつとばかりだが、打ちどころが悪く、庇つたはいいが無様に気絶したらしい。気づけばリツカさんの宿屋に運び込まれ……内装を見た瞬間にもちろん分かる……ベッドの上におさめられていた。真つ青な顔色のガトウーザがベッドサイドにいて、目覚めた俺の言葉が出る前に「遮つて」、こう申告したのだ。

「アーミアスさんは、呪われてしまいました」

呪い？ 聞き返しそうになる言葉をまたガトウーザは遮った。珍しい。自己主張は……まあ、どう言い繕つても激しいガトウーザだが、言葉を遮るなんてことはしてこなかったのに。それほど焦つているのか。そんな、体が動かないとか痛みがあるとかそういうこともないし、どういう呪いなのか知らないが、気にしなくてもいいのによ。

むしろ予定よりも早くリツカさんのいる宿屋に戻つてこられたんだ。マイナス要素は何もねえ。リツカさんが意識不明で担ぎ込まれてくる見知った顔にびっくりしたかもしれないけど、それは……まあ、リツカさんに恥ずかしいところを見せたつていう失態だがよ。「私も神父も、今すぐに解くことはできません。『おほらい』を持ってついても丸一日、時間がかかかってしまいます……」。

その呪いの名は恐らく、前例からすると『思ったことが口に出る呪い』というのです。ああ自分が恥ずかしいです！ 恩のあるアーミアスさんに、ともすれば辱めを……！ うう、幸い、そこまで強い呪いではありませんから、言葉を遮つてしまえばアーミアスさんの『思ったこと』は口には出ないようですね。その点は良かったです！ では、私は！ これにて失礼致します！ 一日、どうかどうか養生な

さってくださいね！ ご要件があればいつでも！ 私でも妹でも少年でも呼びつけてくださいれば！ 隣の部屋に誰かいますから！」

早口にまくしたてたガトウーザは勢いよく出ていき、後にはボタンとしまった扉が残される。塵一つない綺麗な、薄暗い一室。音は良く響く。

そんで俺はと言うと、『思ったことが口に出る呪い』についてのやばさについて考え、俺の上品とは言い難い脳内の本来の口調や、リツカたんを常にペろっていることも全部口から出るのかと思ひ当たり、気が遠くなつてきていた。

ガトウーザは、本当にいい子だ。部屋に来ないほかのみんなもいい子だ。なるほど、なるほどなあ。

しかし、思ったことが口に出る呪い、と言う割には考えても口から何も出ていないではないか。ガトウーザが遮れば言葉が出なかったし、言っていた通りそんなに強い呪いではないのだろうな。例えば……今言葉が出ないのは、言葉を聞く相手がいないからでは？ やべえよ。

そう思った瞬間、勝手に口が動く。まさしく、いやそうなのだが、呪いのごとく。

「やば……」

……。

マジで、やべえよ。俺がやばとか口走ったことがあったか？ この天使生で？ ない。一度もだ。神に誓ってない。絶対になかった。俺はずっとこの馬鹿みたいに丁寧な言葉で話してきた。

本当に小さい頃から俺は、少しでもいい子に見えるように続けることで、誰よりも早く、誰よりも長く、地上に行きたかったからだ。ほんの僅かな可能性でも逃したくなかった。そのために同輩の天使より優秀に見えるようになってきたからだ。それが、この俺だ。虚飾に彩った言動。幸い、この最高に「イカす」ほど薄い顔つきで判断されるほど天使界は顔を重んじていない。もしそうだったら今頃ハゲだがいケメンの師匠が一番偉くなってるに決まってるからな。

それはさておき……だから、やべえよ。

ザツと血の気が引いていくのがわかる。これは！ 俺の築き上げてきたものを一発で崩す呪いだ。丁寧な態度で、敬語であり続けるのは簡単な理由なのだ。

敬語の真面目ちゃんというのは比較的問題児よりは放任されるうえに信頼性が高い。つまり俺は好き勝手、ウイズ人間たちと。こんな本性バレたら俺のハッピーライフの障害になってしまっただろ！

恐ろしさのあまりめまいがした。俺がリツカたんの前で思ってること全部言っちゃったら？ あまりのことに嫌われるかもしれない！ 自分で自分を追い詰めているのがわかる。だが、そうだろうか？

出身の村の守護天使が自分のことを大変ペロく思っていました、なんて誰が考えるよ？

リツカたんペロ！ ペロペロ！ ペロ！ よし、口が回らないほど高速でペロペロしたら口からほとばしったりしないんだな、よし、ペロペロ！ ペロペロ！ リツカたん今日も元気？ リツカたんのお手伝いしたいって俺の体が叫んでやがる、こんなことじゃなきゃとつくに部屋から飛び出してる！

そうじゃねえ！

言わぬが花、知られていないからこそ自由なのだ！ リツカたんを前に今日も可愛い、大好き、うんとうんと長生きしてくれよ！ あわよくばその人生の間、ずっと一緒にいたいぜ！ 横で見守るだけじゃなくて、俺と過ごしてほしい！ 真面目で働きのリツカたん、信心深く純粹で、可愛いリツカたん。だれが好きにならないっていうんだ！

俺はリツカたんの！

「そばにいたい」

俺に話しかけてくれて、笑いかけてさえくれる君は、なんて綺麗なんだろうと、思う。だけど、俺は人間じゃねえから、俺と過ごすよりもきっと、同じ人間と過ごした方がリツカたんにとっては幸せなんだろうな……なんて、そんな……もし、口走ったら俺はいろんな意味で星になっちゃう。

そうなる前に。なんとかして。神のパワーかなにかで。

「人間になりたい……」

おうよ、全部口から出てるわ。

ということ、うっかりやらかして立ち直れなくなる前に、ガトウーザの優しさに甘えることにした。今日はここに本当に閉じこもってしよう。

布団の中で大人しく寝てりや何も口走ることもないだろうし、一人なら何言ってもバレやしない。ああ！ 今ばかりは人間たちに姿が見えず、声も聞こえずだったのが懐かしい！ あの姿なら呪いがかかっていようが気兼ねなくリツカさんの隣に居れるのによお！

ま、ないものねだりをしてもしようがねえ。布団を鼻くらいまで被る。薄暗い部屋の中はしんと静かで、ちつとも眠くねえけど頑張ったから眠れる気がしてきた。

目を閉じる。百年以上の習慣のうつ伏せではなく、翼が失ったからこそできる顔向けで。まだ少し慣れないが、なんて息がしやすいんだろうか。神はその点において少々、天使の設計をミスってるよな。

睡眠時間はそんなに長い方じゃないが、出来るだけ長く眠れるように祈って。

よし、おやすみなさい。

とんとんとん。優しいノックの音に意識が引き戻される。窓から差し込む光はまだ強く、そんなに寝ちやいねえっぽい。

「わあ！ 駄目ですよ、リツカさん！ アーミアスさんは今お休みになってるはずなんです！」

リツカたん?! リツカたんが来てんの?!

俺は素早くベッドから降り、我ながら惚れ惚れする速度で鏡の前に滑り込んだ。そして髪の毛に変な寝癖がついていないか、顔に布の跡でもついてないか、ともかく身嗜みがおかしくないかを高速チェック。

服を見下ろしたが、こちらは休みの日に着てるような普通の服だ。

ちよつと待つてくれ、もしかして、誤診なのか？ 幼児退行する呪いなのか？ 人間にとつて何代も前、とても昔、子どもの頃。その頃の一人称だぜ？ それとも心の奥底では僕のままなのか？ まさか！ 変えて百年は経つんだぞ！

「アーミアスさん……う？」

「ああ、元気そうでよかった！ 気を失ったまま、ガトウーザさんに背負われてきた時は本当にびっくりしたの。大丈夫よ、呪いなんですよ、気を遣わなくていいの、ただお腹がすいてないかなって……差し出がましい事だったかもしれないけど」

「そんなこと……ないよ、ないですよ、嬉しかった、ありがとうございます。今、言葉を上手く制御出来ないみたいで、その、子どものときのようなたどたどしきでごめんさい。でも、嬉しかったんだ……気に病まないで」

頬が熱い。だが余計なことは言っていないはず。言っていないんだけどんでもなく恥ずかしい！ 下手に口調が出るより子どもっぽい分もつと恥ずかしいわ！

リツカたんは笑った。俺の心はそれでぽかぽかする。リツカたんパワー充電！

「ええ、わかったわ。」

アーミアスはどんな時でも変わらないね。ね、今日はゆっくり休んでね」

「うん、ええ、もちろん、明日には治しますとも、リツカ」

治らなきや困る。こんなの毎日とか耐えられるわけがない。星になつちまう。

「そうだ、軽食……サンドイッチを持ってきたんだけど、どうかな？」

「お腹減ってる？」

「食べます」

「良かった、食欲があるなら大丈夫だね」

リツカたんが作ったかは定かじやないが、リツカたんが手渡してくれるサンドイッチを食べることは個人的に天使の理より余程重要なことだからな！

サンドイツチを受け取り、どこかあわあわとしながら俺を心配してくれたメルティート、優しい笑顔を浮かべているリツカたんにお礼を言って部屋に引っ込む。

扉がしまる。扉の前から人の気配が消える。俺は震える手でサンドイツチを安全な机の上に避難させると、羞恥の頂点に達して布団に倒れ込んだ。

いつだって、嘘なんてついてない。心掛けているのは、癖となっているのは、言葉を丁寧に、穏やかに、それだけだ。だが、今日はそんなにも、どうしていつそ素直に言葉が口ついてしまうのか。幼子のように。そういう呪いなんだろうな。くそっ、恥ずかしい。

幸い、肉体的には何も問題がないし、意思疎通にも最低限問題ない。治ろうが治るまいが明日には発つ。俺は使命を果たさなくてはならない。とつとと終わらせてリツカたんの周りを守っていたい。

「うあー……はすかし」

ただ、今は、布団に頭突っ込んで羞恥にうめいていても、許してくれ。

とんとんとん。控えめなノック。ですが私たち三人には大変大きく響きました。マティカ少年がすっ飛んで扉を開けます。兄は驚きかなにかで胸を抑えて地面に蹲りましたが、まあ大丈夫でしょう。どこなく恍惚としていましたので。

ですが、アーミアスさんに見られて不要なご心配をかけることもありませんから、目につかないようにベッドの下にでも潜り込んで欲しいものです。あら、元気よく起き上がりました。

「アーミアスさんっ」

「はい、ご心配を掛けています。ですが、その、体は元気で……有り体に言いますと、暇なんです。その……えつと……」

珍しく、どこかまじもじと、口ごもったアーミアスさん。ずっと

ずっと年上のはずなのに、どうしてでしょう、外見相応の少年のように。親しみ深く見えてしまいました。ああ、失礼なことを。

ですが、ですが！ 心に嘘はつけません。お可愛らしい！

「仲間に入れて、もらっても？」

普段、無表情気味のアーミアスさん。優しく微笑むことはありませんが、こんな眉を下げた困り顔なんてとつてもレアです。

ああ！ まさしく！ 天にも登る心地！ 私、私、今敬愛する天使様のお可愛らしい姿を見ているのですね！

「もちろんですとも！ ねえ姉さん！」

「はい、ガトウーザ！ お茶とお菓子をお出しします！ あの、既に一人部屋に三人もいるわけで、ちよつと狭いかもしれませんが！」

「アーミアスさん、こつちに座って！」

「もう一度『おはらい』を試させてもらいますね」

「はい、よろしく願います」

なんとか恍惚とした表情を消した兄さんが「おはらい」を再度試しましたが、結果は変わらず、もはや解くものは何も無い……つまり時間を置くしかないという結論に至り、もはや僧侶ではないものの修行が足りないかと地面に沈みました。

「気にしないで、大丈夫です。真摯な子よ、大丈夫。その献身の意は伝わっていて……嬉しいので。明日には解けているんだよね、確かな腕を持つ君がそう言うってくれるなら、大丈夫」

いつもよりも柔らかな口調のアーミアスさん。私も慰められたいです。贅沢な兄さんはすぐに立ち直りました。

お茶とお菓子を手早く用意し、椅子はひとつしかないものですか、ベッドに三人座りました。もちろん、本調子ではないアーミアスさんのサイドを固めた形です。

兄さんは裏で繰り広げられたじゃんけんには敗北し、椅子に悲しそうに座りました。そこはそこでアーミアスさんを正面から見ることが出来るのですのでどこに座っても勝ちなのですけどね！ 隣は譲りませんが。

「なんだか楽しいね！」

じゃんけん一抜けのマテイカ少年が左側、つまりアーミアスさんの利き腕と逆の方向で言いました。利き腕側の私はアーミアスさんに邪魔に思われないうちに、そして悟られることなく過ごす高いスキルが必要になるのです。

「そうですね、なんだか……無垢の子、子どもたちの秘密基地ってこんな感じなのでしようかね」

「……そうだよ、もつと人が多くて、もつと居心地悪いけど！ 多分こっちのが楽しいよ！」

「なんてったって、美味しいおやつと安全が両立してますからね！」

どこか普段よりも柔らかく、幼いようなアーミアスさんと過ごす時間はとても楽しくて。あつという間に夕飯の時間になってしまい、私たちの語らいはそこで一旦終わることになりました。

連れ立って一階に夕食へ向かう時、窓から差し込む月明かりに銀に輝くアーミアスさんの御髪にうつとりと見とれます。

立ち止まった私に気づき、振り返ったアーミアスさんは優しくも、微笑んでくださいました。

夜、仕事を終えて、外で星を見ていたら。よく晴れているからかな、静かに誰かがやってくる。振り返らなくなつて誰かわかるの、こんなに星が綺麗な夜に会うのに相応しいひと。ひとじゃなくて、天使様だけ。

ほら、振り返ったら、その通りの人が穏やかに微笑んでそこにいた。

「あら、アーミアス。こんばんは、もうお加減はいいの？」

「こんばんは、リツカ。もう平気、ただ少し、まだ、言葉が拙いかもしれませんが……」

「そうなの？ 拙いだなんて、思わないけど」

『思ったことが口に出る呪い』だそうです。今日は誰にも隠し事ができないわけですよ。ちよつと……言葉遣いまで子どもっぽくなつて

しまうのは、恥ずかしい」

「どこかミステリアスなアーミアスの思っていることが分かっちゃうんだ」

「俺がミステリアス……？ まさか！ リツカ、ぼく……俺の、どの辺りが……いえ、いえ、聞いたら余計落ち込む気がします」

落ち込む気がします、だなんて普段のアーミアスならきつと言わないことだろうなあ。ちよつとあわあわしているアーミアス。綺麗で優しい守護天使様。今日の彼は「呪い」のせいでも近しく感じちやう。

僕と俺を言い換えるなんて、ちよつと前のニードもそんなところあつたじゃない！

アーミアスは天使様、人間とは違う。でも男の子つてことには変わらないのね。そう思うと可愛く思えてしまう。失礼なことだろうけど、アーミアスはきつとそれを許してしまう。

「言わないでおくね」

「……はい」

「ねえ、星が綺麗よ」

からかうなんて大それたことできないから、私は強引に話を変えた。きらめく星々、美しい月。疲れてたけど、この夜空を見るなら寝る時間が少し減つても構わない。

「そうですね……」

「今日は本当によく見えるわ」

「千の時を、万の時を、死後星々となり見守ってくださいている天使たちも、地上に生きる神の子らを、よく見ることが出来ているでしょう」
思わず振り返った。星を宿したようにきらきらしているアーミアスの目にも星々が映り込んでいて、優しく彼は微笑んでいた。

アーミアスは天使様。私が産まれる前から、お父さんが産まれる前から、おじいちゃんが産まれる前からずっとウォル口村を見守ってきた人ならざる神の使い。

だけでもとっても親しみ深くて、今日なんて特にそう。触れられるほどそばにいる、誰よりも優しく綺麗な天使様。

なのに、その、『思ったことが口に出る呪い』を受けた彼の口から出たのは、普段きつと彼が優しきでひた隠しにしているはずの、「とても天使様らしい言葉」だった。

私は彼が身近な男の子じゃなくって、私と同じくらいの歳に見える容姿のままずっと在り続ける天使様であることを思い出した。

そうよ、そうなの。アーミアスは優しいの。だから、普段は頼まれでもしない限り仰々しいことは言わないわ。天使様、優しい天使様。ほら、現実に、見守り、手を差し伸べてくださる天使様。

地上に落ちてきてもなお、光かげることなき、天使様。落ちる、だなんて天使様にとってはきつととっても良くないことのはずなのに。彼はずつと地上にいる。私たちが好いてくれて、守ってくれて、そして、触れられるほど近くについてくださるの。

だけど、本当なら、触れちゃいけない。神の使い、救いの主の、お使い。

「星は天使の死後の存在です。夜空でああして俺たちを見守っているのですよ。俺が天使として遣わされる前にとくに星だった天使ももちろんいます。永い時を見守っているのです。でも、……」
「でもっ。」

「俺、自信があるんですよ。どんな天使よりも……俺の方が人間が大好きだってね！ それもずつとずつと！」

手の届かぬ天使様、私たちの、守護天使アーミアス様。
彼はあたかもティーンエイジャーのようににっこり笑ったの。

誇るように、自分の方が人間のことが好きだって星々に言っただけに聞かせるように。

「リツカ、今日の星は格別に綺麗です。でも星を見るにはそろそろ風も冷たくなってきましたね。俺はあの星々よりもリツカの方が大切なので忠言させてください。そろそろ、室内に戻りませんか？ 俺の方がリツカを守るんですよ、見てるだけの奴らより！」

「ふふ……あはは！ アーミアスったら、大真面目にそんなことを言うなんて！ なんだか……とつても……」

「子供っぽいですか？ 今日はそのなんですよ、リツカ。とつても恥

ずかしい。でもリツカ、星にリツカの視線を奪われるのはちよつと惜しいんですよ」

「なあにそれ」

月の光に透かされて、アーミアスの髪は煌めく銀に輝く。神々しくつて、本当に綺麗。その顔も、まさしく神様が丁寧丁寧に、丹精込めてつくりあげた天使様！

だけど、だけど、中身はこんなに……触れてもいいみたいなのに、優しくつて、近しく思えてしまう。触れていいの？ 私を誘う手にそつと手を重ねる。

その華奢な容姿からの想像よりもアーミアスの手のひらはずつと分厚かった。

守護天使様、だもんね。守つてくださつてる。こうして。

なんとなくなまくましさを感じて、どきどきした。

「そりゃありツカ……あんなに君が熱烈に見るのなら……俺も、星になりたくなるんだ……」

そんなときに、彼は少し頬を染めてこんなことを言うものだから！

私の頬も釣られて熱くなる。

ロビーに戻ると、おやすみなさい、彼は早口で言う。いい夢を、健やかに。彼は本心からそう言う。いつだってそうだけど、その呪い、ううん、私にとつての祝福は彼の心の壁を取り去つてしまう。

天使様の優しい気遣いをそつと拭いとつていく。

私の胸は、しばらくドキドキしていた。

閑話 休息

旅の途中、夕飯の後の語らい。よくある、いつもの穏やかな時間だが、まだ人間の物差しでも幼い少年であるマティカにとっては眠気の方が上回ることもあることだろう。しばらく前からとうとうと船を漕いでいたが、とうとう机につっぷした。

それを見る仲間たちの目は優しく、だが、ルイーダの酒場の雇われ冒険者の中でも俺の仲間はいつとう真面目だった。

「ああ、眠ってしまいましたね」

「そうですね。しかしながら、まだ幼い少年とはいえ、雇われの身であることにもっと自覚を持つてもらわなくては。アーミアスさん、遠慮はいりません。起こしますか、それとも私が運びましょうか」

「大丈夫ですよ、ガトウーザ。俺が部屋まで連れていきますから」

「ああ、そんな！　なんて慈悲深い！」

ガトウーザは相変わらず大袈裟だな。感激のあまり両手を組んでもはや拝みの姿勢だ。

マティカは俺より少し小柄だし、結構年齢の割に華奢だ。だから比較的簡単に背負うことが出来た。寝室に連れていき、寝かせ、布団をかける。

すうすうと穏やかな寝息。力の抜けた寝顔。今日も結構戦ったし、疲れたんだろう。

なんとなく、俺はその時リツカたんがどうしているのかと思った。今穏やかに眠るマティカのように安らかに眠っているだろうか。

毎日あくせく真面目に働き、敬虔に祈りを捧げるリツカたん。

リツカたん労りてえ。

ということマティカの疲れを見るに仲間たちには休みが必要だという判断を下し、俺は近々休みの日を作ってリツカたんをどうにかして労わろうと計画した。

えーつと、そういう「労り」ってなんて言うんだったか？　えーつと……なんだ？　まあいい、それを学ぼう。俺は今まで人間たちに触れることすら心霊現象になっちまうんでまともに出来やしなかった

が今は違う。

こつそり風のように掃除しておいて仕事を減らして休んでもらう、みたいな間接的な事じゃなくて、リツカたんの前にスマートに現れて疲れを癒す男に俺はなるからな。

仲間たちはタフだからほつといても回復するだろと思ってるんじゃないぞ。俺の全てはリツカたん最優先なだけで……リツカたんの練習台にするほど失礼な天使のつもりはないが、リツカたんに対してぶっつけ本番もどうかと思う。

つまり、それはもう自分を実験台にするしかないな。

とはいえそろそろ夜も遅い。どうせならもう休むべきだ。ガトウーザやメルティーにもおやすみを言って、考えをめぐらせながら寝室へ向かう。ここはリツカたんの宿屋じゃねえけど、手入れの行き届いた部屋に着いて、何が疲れた者の癒しになるのか考え、考えて。何も考えずにベッドに乗った。

そしてふと、靴を脱いだ足が目に入った。歩いて走って疲れきった足。

両手でおもむろにふくらはぎを揉む。あー、……これは痛気持ちいという感覚だ。なんつうか、これ以上ないってくらい凝ってやがるな。俺は天使だ、なんだかんだ言っつてこの百三十年ほど翼に頼ってきたからな、こんな長期間歩くのにはまだ慣れていないらしい。

ふむ。リツカたんは働き者で、ウォル口村にいた頃から父親から継いだ宿屋を一人で切り盛りしていた。俺みたいな軟弱な足じゃねえだろう。リツカたんのおみ足ペろペろ。ペろペろ！ んん、心の中は自由である！ ペろい！ ペろすぎるんだ！ リツカたん！

軟弱じゃなくても立ち仕事だ。疲れは当然あるはず。癒しをリツカたんに。癒しといえばマツサージ。これだ！ んんっペろ！

決して！ 決してリツカたんの足に触れられるから選択したんじゃないからね！ そのために俺は自分の中にある下心という下心をすべて焼き払って星にしても……無理だろうが！ できる限りな！

そもそもリツカたんがそんな怪しい申し出を断ることだって有り

得るんだぜ、冷静にならなきやな！

よし調べる。調べたら俺が試す。

なお、俺は相当なヘタレである。

ヘタレでなければ、もうとつくにハッキリとしたアプローチをして
いるはずなんだ。

俺が天使とか、リツカたんが人間だとかそんなことは俺にとってど
うでもいいことで、だがリツカたんにとってはどうでもいいわけはな
い。……そういう言い訳を沢山考え出すことができるタイプのヘタ
レだ。

もちろん本人を前にすると照れとあまりのペロさに訳の分からな
い言動になるところとかもヘタレが過ぎる。それはリツカたんが可
愛くて、健気で、真面目で、ペロくて、ペロっペロだからなのだが、本
人としては無自覚も良いところで、自覚していなくても当然のこと
だ。

全部俺が悪い。

ということ自分の足を犠牲にし、時に両手がつるまで練習した
マッサージを持ちかけるのは、いくらリツカたんがお疲れであろうと
も「これはイエスペロノータッチにおもいつきり反するのでは
？」と思えば不可能だ。

下心のある男が、好きな女の子の足に……あるいは肌に……どうに
か知恵を搾って合法的に触れようとしたが、どうにも妙案が思い浮か
ばなかったゆえの浅知恵という感じだ。どう考えてもリツカたん目
線じゃ嫌だろ。俺はリツカたんとお付き合いをしている仲ではない
のだから、そういうことは不快であると考えたほうがいい。

つまり、つまるところ、リツカたん俺は友人とかそういう範疇の
仲でしかないんだから。烏澁がましいのだ、言い出すのも。リツカた
んが申し出を聞いて不快に思う可能性が欠片でもあるのなら、もうや
めておいた方がいいだろう。

なぜって、そりや俺はヘタレだからだ。リツカたんが嫌な思いをするなら俺は今すぐ星になりたい。安全策に走るぜ。ということ、仲間の野郎なら多少は不快に思わないだろう、まだしも同性だしな。マテイカとガトウーザ、どっちがマツサージをご所望だろうか。

俺は狙いを定めつつ、さりげなく、本当に当たり障りなく、ともすれば誰も気づかないくらいさりげなくリツカたんの宿屋にルーラした。我ながらさり気なさすぎて、リツカたんの宿屋にルーラで戻ってまで泊まるのが当たり前前すぎて気づきもしないくらいさり気ないな。

うん、習慣こそ大事なのだ。習慣なら当たり前だから気づかないかな。リツカたんも俺が帰ってくることを習慣に思ってくれていたらしいな。

「あらおかえり、アーミアス！ 今日もお疲れ様！」

おかえりだって！ 嬉しすぎて口から何かが出ていきそうだけ。リツカたんの笑顔が眩しすぎてペロい。目玉が焼き切れそうなほどの眩さ。ペロペロ！ 目は焼け落ちようが閉じねえからな！ リツカたん今日もかわいいぜ！

「リツカこそ、今日もお疲れ様です」

「ありがとう、アーミアス。じゃあ四人分、部屋を案内するね……あつ！ 今日ね、一人部屋が二つと二人部屋がひとつになっちゃうけど大丈夫？」

「もちろんですとも」

ふむ。繁盛しているのはいいことだ！

メルティーは当然一人部屋として、あとはじゃんけんで決めるか。そう思って仲間たちを見る。ってなんだ、なんだ野郎ども。仁義なき睨み合いをするとは大人気ない。そんなに一人部屋のがいいのかよ？

たしかに気を抜けるのは一人の方が。俺とか特に。

ほら、俺はよお、心の中から寝起きの行動まで清らかな天使様じゃねえからよ、うっかりヨダレ垂らして寝てるかもしれねえし、おはようございますの挨拶の後に寝ぼけて「師匠」とか口走るかもしれねえ。

うっかりうっかりしちまうことがあるだろ、いろいろな。そういうのが幼き人間たちにもあることかもしれないねえよな。

……うーん、雇用主と同じ部屋で寝るのはやっぱり嫌かもしれないねえよな。その辺はもちろん、本人の意思を尊重するが。

だからって明らかに一人部屋のが部屋代としても高い以上俺が率先して取っっちゃったらそれはそれでどうよ？ その……一人部屋がいいって言ったらよ、俺が雇用主ゆえに反論できないっていう、権力の盾みたいなことになっちゃまうしな？

さて、いつまでもリツカたん……カウンター前を占拠してるわけにはいかねえ。リツカたんの手から鍵を受け取り……俺はかなり気持ち悪い天使なので鍵越しに体温を感じとりたかったが無情にも冷たかった……晚饭がてら部屋の分配をする訳だが。

「部屋割りどうしましょうね？ 二人部屋の方の割り振りが……」

「是非とも！ 一緒に緒したいです！」

「あつずるいぞつ」

「戦いにおいて速度ほど大事なものはありませんよ、戦友よ」

「ぐぬぬ……」

そんなに二人とも一人部屋より二人の方がいいのか。案外一人は寂しいとかそういうことなのか？ 競って名乗りを上げるほどなのか……それも、謙虚なガトウザーがだぞ？ よし、よしよし。なるほどな。決めたぞ。

「なるほど。ではおふたりが同じ部屋ではどうでしょう？」

こうだな！ これがいいんだな！ なるほどなるほど。

マティカに鍵を渡し、オレは二人同時に願いを叶えられた喜びで思わず笑顔になった。

「では、ゆっくり休んでくださいね。おやすみなさい」

「お……おやすみなさいませ……」

「おやすみ……なさい……」

二人は随分疲れていたのか大変大人しく引っ込んだ。うん、よく休んで欲しい。

手に入れてしまった一人部屋で、習慣になつてきたマツサージの練

習をしてから俺も早く休もうと思う。リツカさんに施すのは夢のまた夢かもしれないが、愛すべき人間である仲間たちにはいつか披露できるとも思えないとひとり、夢見て。

図らずもそれなりのマツサージの腕を手にした俺の、手腕の披露の結末は、また、夢の向こう。

強気になれない天使は、普通の人間と同じように愛に振り回されていた。

グビアナ編 69話 傷

波の音を堪能しつつ、出航前に部屋の探索を行っていると、乗船してからずっと黙っていたアーミアスさんがぼそりとこぼしました。

「ところで、船の舵取りができる方は、この中にいるのでしょうか？」

「……」

「……」

「アーミアスさんっ！ おれ、海初めてなんだ！ すっごいね！ 広くてさあ、きれいでさあ！ ワクワクしちゃうね！ どんな魔物がいるのかな！ どんな景色がこれから見れるのかなって！」

「おや、奇遇ですね。俺も海、それも船の上からの眺めは初めてですよ。海を見たこと自体はありますが、それはもう天使界から『見た』というだけのこと。目標地点まで飛んで降りていたので、かなり高所であれば海の青を見ることもできましたね……こんなに近くで見ると、きらきらしていて、俺もなんだかワクワクしてきますよ」

ね、ね、姉さん。船の舵取り、できますか？

に、に、兄さん。兄さんならできますよね、ほら、精霊パワーで！

なんとかかりますよね？

互いに目だけで会話。折れたのはそりやあもちろん、兄の私です。互いに兄も姉も「その方が都合がいい時」に名乗る私たちですが、メルティーはやっぱり妹なので。誕生日の話ですよ。同い年ですけどね。

ああ、私が姉だと睨まれるのが心地いい。今は！ 私が兄なんですよ！

「アーミアスさん、不肖ガトウーザ、操舵をどんな手段を使つてでも……」

「……サンデイ、本当ですか？ 良かった、天の方舟の運転ができる貴女のレクチャーなら安心ですね」

「……」

「兄さん下がって、兄さんは何も言わなかったし、何も考えてなくて、アーミアスさんとサンディさんに感謝しているのみです」

「ええもちろんですとも不肖ガトウーザ、情けなくも船の操舵を理解しておりません。アーミアスさんの顔の広さに感服しているだけです」

幸いにも、アーミアスさんは妖精との会話に気を取られて私に気づかなかったので！ 特に問題はありません。ええ、精霊たちが私の無様な姿を笑っています。間違ってもアーミアスさんに不都合なことがないように、私は静かに祈りました。

精霊と天使様の関係はよくわかりませんが、今まで一応、それがかわいらしいいたずらの範疇であっても彼に害したことはないのでも日もそのように安心いたしました。

錨があがり、船はやがて前に進みます。

心なしか緊張の面持ちのアーミアスさんの丁寧な操舵は、砂漠の国グビアナへ向け。船は大海原へ。

海に近いサンマロウで潮風を浴びて育ってきたとはいえ、こんなに胸を躍らせて船の上で全身いっばいに浴びる潮風はなんて特別なんでしょう。

砂漠の国グビアナでは今までよりもっと、お役に立てるでしょうか。ええもちろん、一層の努力を致しますとも。はつきり見える世界で、この手で武器を取って。精霊も妖精も、私のどんな力も、なんだつて利用してやりますとも、我らが麗しき、守護天使アーミアスさんのためならば。

ええ、もちろん彼の為さんとする事はすべて天命。彼の意志こそが正しく、それを手伝うことに喜びを感じるのですから。道をご一緒にすることこそ、お導きですから！

私は甲板から、操舵のアーミアスさんを見上げました。操舵中、遠くを見透すために兜を外し、その素顔をさらしていらっしやる姿を。眩い太陽に透かされた灰髪を潮風に踊らせて、ああ美貌の君。太陽よりも眩しいですとも！

甲板に膝をついてそうして祈っていると、海からの魔物の襲来

だ、なにをさぼっているのかとメルティーに杖で小突かれたのでした。

熱砂に突入する前に船室にあった余ったベッドのシーツを裂いて作りあげた、急ごしらえのフードをめいめい被り、兜を被り直そうとするアーミアスさんが蒸し焼きになる前に兜を奪取しました。サンマロウでは非常に役に立ちましたし、防御力も申し分なさそうです。が、グビアナのような砂漠では不適當だと思ひまして。ええ、多少……いえ、過分に、出来すぎたことを申し上げたかもしれませんが、寛大なるアーミアスさんは聞き入れてくださいました。

もちろん、忠言は本心からのものにして、事実、金属製の刃物などは見事に立ち塞がった魔物の傷を焼き、陽光を好む精霊たちが楽しげに歌いながら……つまるところ、既に熱々であるというのに、私の放った矢の矢じりを灼熱の地獄に変えておりましたとも。さながらメルティーの火炎の魔法ごとき様相です。そんな金属のものをアーミアスさんの頭を覆えばどうなるでしょう！ 石造りのかまどごとき惨事になるではありませんか?!

その、サンマロウでは私やメルティーの親類の妨害のため、致し方なかったところはありましたが、この慈悲深くお美しい天使様の美貌を兜なんぞで覆い隠してしまうのはいささか勿体ない、いえ、世界の損失であると考えているゆえに！ それすらも建前でして、私が見たい！ それだけなのですが！

ええ、何か？ なにもないでしょう、私たちにとって重要なことです。メルティーも深く同意してくださいさるはずですし、幼いマティカだって欠片くらいはまともな美醜感覚を持ち合わせているはずですよ。ということではアーミアスさんの顔はフードで隠されているだけなので、風でも吹けばいつでも見れることでしょう。私はたいへん幸せです。

体感したことのない眩さの太陽、乾燥した空気、とてつもない熱風、

足を取られる熱い砂の海。環境は最悪ですが私たちを導いてくださる天使様が同行しているので全く問題ありません。

幸い、グビアナ城は迷うことすら不可能なほど大きく、蜃気楼ですらないほどはつきりと海からも遠く視認できていましたので一直線にたどり着くことが出来ました。これも我らが愛しき守護天使様の加護ですね。

これまで訪れた中にも未知なる土地はありましたが……ここまでの気候が違うというのは初めてですね。ゆくゆくは雪に埋もれたエルマニオンにも行くのでしょうか？ わかりませんが、年甲斐もなくワクワクしますね。

砂漠特有の魔物が時折、私たちの行く手を遮ります。すると、アーミアさんは必ず私たちを庇います。どんなにお願い申し上げてもそれだけは譲ってくださいりません。人間を守護することが、アーミアさんが天より遣わされた使命なのだとおっしゃって。

たしかに、守護天使様でいらっしやいます。使命……そうなのでしよう。でも、納得はできません。アーミアさんは勇敢かつ、外見の儚さよりずっとずっと頑丈なのは一緒に旅をしてきたのですから存じ上げております。私が起き上がることができなくなるくらいの手痛い一撃を浴びても、膝をつくまでもなく受け切ってしまうわれ、反撃すらなさるでしょう。

だからなんだというのです。敬愛する美しく高潔なる天使様が負傷される……それも自分たちをかばってのもの……我慢なりませんよ！

ですが、私たち、気づいたんです。アーミアさんに届く前に魔物を全部殺してしまえばいいんだって。アーミアさんの手にかかって死ぬ魔物は、この上なく幸運です。アーミアさんに殺される、ああ、それだけで魔物に生まれたという事実は祝福に変わるでしょう。次の命の安寧を約束されたようなものですから。祈っていただけ、祈りの剣で斬っていただけ。私たちのような、ただの人間に殺された魔物よりずっと赦されたような気がするでしょう？

ですが、私は、私たちはその点、慈悲がありません。アーミアさ

んが魔物に狙われるより前に、敵意をあらわにした魔物は殺してしま
います。そうすれば怪我をなさいませんから。

私たちの意図に気づかれたかはわかりません。でも、アーミアス
さんは私たちの行動に腕を上げましたね、と褒めてくださることがあ
つたくらいですから、これでいいんです。

ええ、私なら、私がかかり間違つて魔物であるならアーミアスさん
の手にかかつて赦されたい。でもね、私はアーミアスさんのお傍に立
つことが出来る人間ですから、容赦はしないのです。殺します。この
弓で。どんな手段を使つても。私を取り逃がしてもメルティールが、メ
ルティールが焼きそこなつてもマティカが、アーミアスさんに攻撃が届
く前に葬るでしょう。

もし……もし、それでもなおアーミアスさんに攻撃がいくなら。私
どもの力不足ですから、鍛錬をしなければなりません。つまり、鍛錬
の日々は続くということ。残念ながら、丸一日、アーミアスさん
に攻撃が一切向かない日はないのです。

アーミアスさんの透き通る白い肌に堪えない生傷を、私は自分のふ
がいなさを心に刻みつけながら、癒します。傷はすっかりと消えてし
まいますが、それでも、私たちは悔しいのです。

魔物は旅に呼応するかのようになつていきます。私は、流血し
ながらも私たちの無事を喜ぶアーミアスさんの美しい微笑みを見な
い日が来ることを願っています。

城下町について、人里ゆえに丁寧に魔物から守護された空間に人心
地つきながら、私はアーミアスさんに迫ります。これくらい無視して
もいいのだとおっしゃるアーミアスさんに食つて掛かつて不敬です
が、譲つてはなりません。

アーミアスさんの手を取つて、擦り傷残らず癒します。

透き通る白い肌は美しく、アーミアスさんの容姿はどんな細部にお
いても神が丹精込めてつくりあげたに違いないのです。でも、私が癒
す傷の下に刻まれた傷跡は消すことができないのです。

いつか、尋ねたことがあります。私はアーミアスさんの傷を癒す役
割ですから、誰よりも彼のその「古傷」に早く気づきましたから。そ

れでも基本的には戦闘中のこと、つまり厚く重ね着した防具越しです
から、詳しくは見たことがないのですけれど。

彼の腕や足に残る傷はなんなのか、と。

彼は困ったように、天そらから落ちてきた時の傷だ、とおっしゃりまし
た。

閑話 汚濁

私は天使だ。人間たちが想像する、守護天使に相違ない。

だけでも、彼らが想像するような清らかさなどないし、慈愛の心を持ち合わせている訳でもない。

私が守護天使をやっているのは、私の師が守護天使だったからで、これまで辞めていないのは守護天使をするということが天使の中では名譽であることであり、また、まだ後継者を見つけていないからだ。

人間たちが祈りを捧げる清らかな守護天使をやっているはずだが、蓋を開ければそれっぽっちの理由である。

人間たちの幸せについてなど、そう願ってはいない。まあ、不幸であるよりはいいに違いないし、不幸ならば星のオーラを得ることが出来ないのでこちらとしても困る。だから、幸せであれば互いに都合がいいというだけのこと。

人間たちを魔物から守るのも、日々の細かなことを手助けするのも星のオーラを得るため、それだけなのだ。それ以上になにか理由を見いだせるのか？ 否である。

所詮相手は人間である。私たち天使を見ることも叶わぬ。姿の似つかぬ天使像をありがたがっているだけの存在。私たち天使よりも余程短い人生を、星々の瞬きの間に終える人間たちにいちいち心を砕いてはこちらが参ってしまう。

それでも、私はまだ、まともな天使である。まだしも真面目な天使である。仕事を嫌がり、墮落するのは天使のすることではないのである。それなりに、そのプライドを維持するために働くが、私の場合はきちんと毎日守護区域を見回りし、定期的に区域の魔物を減らしているところから成績も良い。天使としてはそれなりに一目置かれているといったところだろう。

それについて、私はそれなりに誇りがあるが、単に生まれ持った性質が真面目なだけだろうと思っっている。人間の生き死にに天使らしく興味もなく、ただ機械的に星のオーラを集めているだけ。いつの日にかくるらしい救いの日まで、ルーティンを崩すことなく過ごすだ

け。

命令があれば弟子をとるだろう、命令があれば守護ではなく、懲罰に司る日も来るかもしれない。だが、何もなければ何も変わらない。魔物に遅れをとるほど私は弱くなく、また天使の私に老衰による死はない。

つまりなく、一定で、どこか虚しく、しかし体はきちんと動く。人間から見れば果てしないほどゆっくりと老い、経験を重ね、透明な日々を過ごすのだ。

私は天使だ。少し真面目な、ごく普通の、ごく平凡な天使である。墮天することも無く、清らかさを維持しようとしてもしない。

それが普通の天使の姿である。遙かな昔、会ったこともない神に命令されたように動くだけ。ほかの皆も大した誤差はない。大した個性もない。より真面目な天使もいれば、より不真面目な天使もいる。だが、何もなければ普通に動くだろう。

しかし、神が人間や魔物の永遠の平和を創れなかったように、天使には例外が存在してしまう。

私の知る、「例外の天使」、三人について語ろう。

ここは、そういう場なのだろうか？

「違うけど……まあ、とりあえず洗いざらい話すといいわ」

エレッタ、豊かなその髪は魅力的だが栗色は対象外である。つまるところ、この世に祝福されるべきは白、ないしは銀である。そして美しいことである。

穢れなきその色こそが至高であり、人間を見れば分かることだが老いた人間の髪が白いのは世俗の穢れを来世へ向けて削ぎ落としていつているからなのだ。

記憶も人格も曖昧になり、そして死ぬ。

そしてもとより白や銀を持つ者は純粹で美しく、私たちのようなただの天使よりもよほど無垢である。

私はこの天使生においてそれこそが座右の銘、それこそが信念として生きてきたのだ。

それを持つ者なら愛せる。愛など、墮天の一理由でしかないと思っ

ていたが、なかなかどうして心地よさそうである。

うち二人はある意味祖父と孫のようなもの。偉大なるエルギオス様、さらにその弟子の弟子のアーミアス。

今は悲劇と語られる、天使界に戻ることはないエルギオス様は稀代の守護天使だった。彼がまだ天使界に戻っていた頃は私はまだ幼く、面識はないが語られる彼の成したことはどれもこれも天使としての模範。真に慈悲を持ち、真に天使として働き、そして行方をくらしただ。

伝説のような存在だが、タブー視されているとはいえ、天使の見解は大抵同じだ。人間に入れ込みすぎたのだろう。どこにいるのかはわからない、利用されたのか、亡くなってしまったのかも。だがそれだけには違いない。

人間なんていう、短命の種族に心を砕きすぎた天使なのだ。だが金髪だし、年上は範囲外だし別に天使界の損失ではないな。

とはいえ彼のようないひたむきさはまさに例外の天使といえるだろう？　もしかしたら、不敬な言い方をすれば……彼は彼の運命を地上で見つけてしまったのかもしれないな。

その場合は墮天しているのだろうか……確か墮天の理由は反逆、無所属、愛だったか？　よく知らない。だが、邪推も不敬だ。辞めておこう。

だがまあ、金髪である。それよりも最近の損失といえ、大事件を除けばラヴィエルが地上へ行ってしまったことだろうな……。

その弟子の弟子、アーミアス。エルギオスの教えを忠実に受け継いだイザヤールの弟子。

奴は……奴、なんて言えるのははるかに年下だからにほかならない……まさしく天使の中の天使である。

馬鹿みたいなことだが、奴は天使だ。恐らくは神の創造した天使の中でも最高傑作の天使、私たちのような天使を天使と言うならば、奴こそが神の使い、代行者だった。

だった、なんて言うのは、惜しくも、非常に惜しくも彼が自我をまともに持つ年齢になる前に穢されたからである。

神の代行者は、なにもかも、思想、容姿、能力全てを天使としての最高傑作として備えていたが、ゆえに嫉妬された。同年代の幼く、少しばかり早熟だった天使にその尊く白い髪を嘲られ、容姿をなじられたというではないか。嘆かわしい。

だが奴は悪意なんてものを持たない。本物の天使だからだ。悪意に悪意で返せばいい。同世代の天使どもにからかわれたならやりかえせばいい、あるいは私たちは知らせればいい。

奴は悪意を持ちやしない。悪意を受け止め、その髪がうつすら染まるまで、私達は気づきもしなかった。

だが悪意に多少染まつても、悪意の主は幼い同じ天使。人間よりはるかにちやちな悪意である。軽く世界樹の根で浄化すれば祓える程度のものであった。

アーミアスは三人目の例外に連れられて、世界樹に向かった。

三人目の例外は、外見だけは黒い髪の幼い天使。天使は天使ゆえに、たまに年齢に合わない外見になることがあるが、当然だ。年齢のとおりならば一人残らず老人だし、オムイ様などどうなってしまうのか。

上級天使でありながら幼い姿をしたそいつは悪意を隠すのが上手かった。天使にして悪魔の悪意を持つあいつは、本物の天使に牙を剥く。

ああ、思い出したくもないが。あの日、本物の天使は、穢され喪われたのだ。

我らの、いいや、正直に言おう。私の希望を叶えるかに見えた天使を。

アーミアスは星になったわけではないが、純白の髪を失い、代わりに瞳に星を宿した。その意味は誰にもわからないが、粛々と天使らしく、もつとも天使らしく人々の幸せを見守り、情なく守護するはずだった最高傑作は、執着を覚えた。

人間への執着を。幸せを真に願う心を。一步間違えれば墮天である。だが、誰もそれを危惧しない。彼ならば大丈夫だと見守るのみ。それではいけないのだ。本物の天使ならば、人間の死に心を痛めたとしてもそれを引きずりやしない。奴はそうではない。最初に見た死にゆく人間の名をまだ覚えてる。

大多数の天使はその変化を見ても、穢された天使だとしても彼の清らかさを信じている。だが、悪魔に穢された天使が真に天使の心を持てるだろうか。

心のうちなど、天使には読めない。だから真実はわからない。

私はひとり、勝手に疑っているだけだ。

彼は白ではない。もう、銀ですらもないのだ。

悪意にあてられた天使が、果たして本当に清らかなのか？ 悪意の持ち主のように外見は天使であっても、悪魔的な思想を持っている可能性とてある。何せ白髪ではないのだ。

「そうなの。そういう考えも納得。あいつが本当に余計なことをしたのは事実だし、アーミアスクんの髪は二度と戻らないし、趣向が変わったのも本当」

「エレッタ、あんたは奴を庇うかと思っていたんだが」

「奴なんて言わないの。かわいいかわいい天使の一人なんだから。だけれど私、まだあなたの本心をひとつ聞いていないからまだ仕事してるだけ」

「……」

本心？ 私の？

私は取り上げられるのをなんとか免れた、握りしめたままの幼い頃のラヴィエルの姿絵に目を落とした。かわいい。やはり銀髪である。

灰髪は邪道なのだ。白髪は至高。銀髪はかわいい。穢れなき無垢なこども。しろくまぶしい。それこそが至高なのである。

穢れを許すまじ。私は三人目の例外がそのへんに脱走して抜け出し、二人目の例外に危害を加えるのが気に食わなかったので軽く天罰の雷を落としただけなのだ。

「白髪シヨタ最高だったのに……」

「天使って正直全員、負けず劣らず変わり者だと思っわ」

せっかく我ら天使の上に降臨するオムイ様という大変なお爺様から、白く可愛くて最高にキュートな子になると思っていたのに、解釈外の灰髪になり、さらに哀れなことにトラウマからか同じ天使から完全に興味を失い、人間視点での天使らしく人間のことばっかり考えているではないか。

最初、彼はそりゃあもう完璧な天使だった。彼は私たちを愛した。人間を愛した。あまねく全てを愛し、そして、何も愛さなかった。神ごとき慈愛の持ち主で、一人の人間の死など気にもかけなかった。その幼い眼差しで地上を愛しく見つめながら、次の瞬間流星群に大陸が焼き払われようとも表情を変えないような慈悲だった。

ありのままを愛した。つまり、無垢だったのだ。悪くいえば、空っぽだった。少なくとも、私にはそう見えた。そして、ほとんどの天使と同じように同じ天使を同胞として今よりもずっと親しみ深く慕っていたのだ。

今ではどうだ？ 一瞥のみである。慇懃であり、丁寧だが、彼の心は常に地上にある。

ああ、白い髪は正義なのだ。白くて可愛い子に顎で使われる方が、しらがのおじいちゃんに使われるより幸せではないか。こんな口に出した瞬間天使の理により丸焦げになりそうだが。

かわいい。あの可愛いにズケズケと触れたあの違法シヨタはとつとと処刑すべきなのだ。

「冷静に考えて欲しい、エレツタ。私は白く可愛い子に命令されたい。高圧的に、人間のために豚のように働けと命令されるべきなのだ。白

い髪の可愛い子に」

「ここが取調室ってこと忘れてないのかしら、私は人間で言う、『お巡りさん』なんだし」

「ああ、年増の栗毛より白く可愛い子に逮捕されたい」

「私への暴言はさておき、それはイザヤールに報告するべきに見えるのだけど」

「私はさすがにイザヤールパパに戦って勝てる気はしない」

「誰がパパだ」

顔を上げるとそこには目を釣りあげたイザヤール。その足元で何も分かっていない顔の幼きアーミアス。ふわっふわの灰色の髪。これが白かったら神よりもまつりあげたのに。ああ許すまじあの悪魔のペドめ。

あんなにかわいかったのに。すっかり穢されて。救いといえば、当時の記憶は残っていないことだろうか。ない方がいい。子供には罪はない。

無垢な心に直接欲望を叩きつけられたのだ。上書きされ、塗り潰されたのだ。その醜い執着を人間への深き慈愛へ変換したのはさすが白持ちと言ったところだろうか。

「なにかあったのですか?」

「師弟というのは親子のようにも見える……そういう話だ」

「師匠が父ということですか?」

「そういうことだ」

私は追加の取り調べを数時間受けることになった上に、イザヤールによってラヴィエルの姿絵を没収されるといふ辱めを受けることになったのだった。

ああ。どうして。世界は不条理である。

歳を重ねる事に天使として完璧な容姿、完璧な勤勉さ、完璧な慈悲を備える美しくもキュートな姿を見る度に、私は悔しくなるのだ。

ああ、私はそれでも、白髪が好きなのだ、と。

しかしながら子供は無垢で無罪だ。しらがのおじいちゃんど灰髪の少年であれば灰髪の少年に命令された方がまだしも幸せになれる。

例外の悪魔が翼を失って帰還したアーミアスに危害を加えたと聞いて謹慎処分を食らうことを理解していても天罰をぶち当ててにいたのはまあ当然のことだろう。

私は普通の天使である。取り立てていうこともない、個性もない、少し真面目な天使であるので、人間に肩入れすることも無く、人間になどなりたいと願うことも無い。

白い髪は無垢な人間の少年が、未熟にも同じ人間を愛するというのなら、私は星になっていつまでも見守っているつもりだ。

天使らしく、星星となつて許されることを許容し、ほかの天使と同じように地上に残された名誉で、哀れな天使たちを静かに見守るのだ。

「何を見てるの、アーミアス」

「夜空の星々を……今夜はとてもはつきり見えますね」

「ほんとね！」

夜空を見上げ、まるでそのひとつひとつの名前を知っているみたいに、どことなく愛おしそうに見つめる彼に私はなんて言葉を続けたらいいのか分からなかった。それは祈っているみたいだった。

「天使は役目を終えると星になるんです」

やがてぼそりと、アーミアスは言う。

どこか哀しそうに。

星は静かに光っていて、じつと、美しい輝きのまま光を湛えて。

私たちを見守っている。

星は瞬かない。

70話 聖騎士

あつい。やべー。あつい。あたまがゆだる。あちー。

思考回路がどんどんポンコツになっていくのを実感しつつ、おそらく人間より図太い天使の肉体でこんなにあついでから愛しい人間たちはどれだけ辛いだろうと思ひ、振り返ってみれば……なんか、わりと元気そうだな。俺はあつい。やべー。

もうあちーので、街の散策や情報収集より先にちよつと休憩しよう。そうしよう。天使の使命？ 体が茹だったらできねー。あちー。

まだ日も高いが宿に行つて、冷たい水でも、いや、もう熱湯じゃなきゃなんでもいい、飲んで、すずもう。やべー。こんな日照りより俺のリツカたんへのあつい想いの方があちーけど。ほんとだぞ。

今だつてかわいくてかわいいリツカたんにあいたいけど、こんなへロへロで会うなんてカッコ悪くてできないだろ。だから現地の宿に泊まる。好きな子にはカッコつけて会いたい。そんなお年頃。

街の地図を見てまっすぐに宿に向かう。異国の町を物珍しげにきよろきよろしていたマティカがさつと寄ってきて、かわいい。暑さにもものもしないきようだいが階段のエスコートをしてくれた。すごい。

こんなあつい中、他者に気を回すとかやべーと思う。いいこだな。俺もいいこになりたい。いいこだつたら、こんなにいいこたちといられるんだぜ。やべー。もつといいこになったら、もつと、共にいいこたちといられるのかもしれない。俺は多分、わるいこだけどな。外面だけ、いいこになろうとしている。

あつくともリツカたんを想う。俺の頭の中のリツカたんはかわいくて、真面目で、かわいくて、大好きだが、驚くなかれ本物もつとすごい。あつきに負けてる場合じゃない。しゃんとしなければ、と思う。思うけどあついのでとりあえず冷やさなければならぬ。

しゃんとして、とつとと女神の果実を集めて、師匠に会つて、報告して。そんで俺はリツカたんを護る天使になりたい。なれるもんなら専属になりたいが、多分俺は、よそ見してほかの人間も見してしまう

から、だめなんだ。人間全部かわいく見える。リツカただけ見る、リツカただけ護る、一途な人間の男が現れたら身を引くんだろな。

そのための休息だ。いつもよりずいぶん早いチエックインだが、大陸を越えての船旅の後、休みもせずに砂漠を越えてきたんだから、みんなも疲れてる、そうだ、きつとそうだ。俺が弱つちいのも多分本当だが、みんなが疲れてないってのはない。それも本当のはずだ。

……みんなぴんぴんしてる。すごい。やべー。なんなら城下町の散策までやってのけそうな勢いだな。だが俺はもうダメだ。辛うじて表情には出ていないし足ももつれていないが、もうダメだ。エスコートされなかったら階段を越えられずに顔から地面に突っ込んでいたかもしれない。

高度の高い、空気の薄い、人間界より寒い、天使界が懐かしい。こんなに懐かしく、戻りたいと思うなんてめったなことじゃない。ただ、俺は寒いほうがいい。あついのはだめだ。頭がぼーっとしてしまう。やべーよ。

砂漠に突入する前、ガトウーザがすばやくもはつきりと兜をとるように言ってきたが、正しすぎて頭が下がる。被りっぱなしだった俺は一体どうなっていたんだ。蒸され天使の一夜干しか。蒸され天使とかやべーよな。まずそう。煮ても焼いても蒸しても天使ってなんか不味そうだよな。

「お救いするための氷の精霊が寄り付かない熱砂の地獄を滅ぼしてきます！ 滅んだらきつと涼しく……」

「馬鹿なこと言っていないで宿取ってきてください兄さん」

「はい」

あつい。あつい。

正直冷やされてもしばらくしたらまたこうなつちまいそうですでにこわい。

冷えた。すっかり頭冷えた。よく冷えた。万全になった。よし。世界が輝いて見える。眩い世界だ、そりゃあかわいい人間たちが住む世界だからな！

にしてもなっさけねえ俺！ 有能な仲間たち！ 挽回しなくては、情けなくて頼りないやつだと思われたくない。大体あつてるが、ほら、いざというときにだな、こいつを前に置いていて大丈夫か？ と思われたらやばいだろ。安心安全な壁になれないだろ！

俺は壁。防壁。だからパラディンになりたい。仁王立ちして、幼く愛しい人間たちを傷つける者に指一本触れさせない。そのためには「かばう」では役不足だ。「におうだち」が必要なのだ。人を導けるほどの素晴らしい腕前のパラディン……俺はそんな人物を求めていた。パラディンとして、その教えを仰ぎ、俺もパラディンという名の聖騎士に！ なりたいと常々考えていた！

そして、俺は、見つけたのだ。パラディンを。心得がない者に対しても教え導けるほどのパラディンを！ 俺はもう見ただけで分かった。多分。暑さで頭がやられてるんじゃない。鎖帷子に槍に盾。その恰好を見て察せないわけがない！ 俺の思い込みじゃないよな？ と不安になるような弱気な心は多分暑さで蒸発したし、問題ない！

もう教えを乞うしかないよな！ じゃあどうやったら彼女は教えを授けてもらえるか考える。相手はパラディンで、人間で、それで、教えることに意欲的かどうかもわからない。

そうこう考えているうちにもここは城の上だ。室内じゃない。つまり直射日光がえぐい。布で雑に作ったフードがなくては、もう星になっていたかもしれない。元気いっぱいなマティカは少し離れたところで流れる水をぱしゃぱしゃして遊んでいるし、ガトウーザはどっかいったし、メルティーだけが俺の後ろにいる。

うん、仲間が勢ぞろいしてなくて心細いとかじゃないからな。本当に後悔はしたくない。

普段クールなメルティーは、お茶目さも持ち合わせているのでちら

りと見ただけで目をきらきらさせて微笑んだ。なんでも任せてくださいというやうやしく。俺の立場なんてものはそもそもなかった。仲間たちが頼もしいからな。壁になるくらいしか出来ねえ。

こんなにも頼もしい仲間がいてくれるのに臆している場合か！
天使の度胸だ！

「もし、聖騎士の方と、お見受けいたします」

「……なにかしら」

いきなり名乗りもせずは何やっているんだという話だが。

話しかけた瞬間、水場で遊んでたマティカが砲弾のようにすっ飛んできて腰に抱きついてきたのが目立って、パラデインの彼女はそっちに目をひかれている。

……まあ、あれだ、マティカはたぶん、甘えたい盛りの年齢だし仕方ない。いつも警戒気味じゃあないか。いわゆる「他人」に。

だがそれも微笑ましい。幼き愛しき人間だから。俺にとってはメルティーとガトウーザより年下であること以外、「幼い」なんて意味がほぼないことだが。人間はすべからく、幼く、愛しく、守護すべき者たちだからだ。

多少人見知りらしいマティカが猫のように可愛らしい威嚇をしているので、ぽんぽんと背中をたたいて抑える。身のこなし軽やかなバトルマスターは腰をぎゅうと締め上げてくるが苦しくない程度には抑えてくれている。気遣いのできるいい子だからな。

とはいえ、大人なメルティーがさりげなくマティカを引き剥がした。

「俺はアーミアスと申します。この通り、旅する戦士です。戦士の身ながら、聖騎士となる事がひとつの目標でありました。そして貴女が私が初めてお会いした聖騎士であります」

「これはご丁寧に。あたしはパスリイ。あなた、パラデインになりた

いってどういうの？」
「はい。教えを乞い、パラデインとしての悟りを開けるのであれば。俺は戦い、仲間たちを護ることこそを至上として旅をしています」
で」

「そう。ひとつだけ、訂正をしておくわ。聖騎士パラディンは博愛の騎士でもある。あなたに博愛の心はあって？」

ああ、いいの、答えなくっても。パラディンになるためにはどちらにせよ精霊を宿さなくてはならないから。あたしにもほら、ラーミーという相棒がいるの。あなたも精霊を宿せばパラディンになれる。

どう？ 試す？」

おお、なんて丁寧な！

俺は感動していた。見ず知らずの旅人である俺を導いてくれるなんて！ パラディンになるやり方を伝授してくれるなんて、なんて、いい人間なんだ。さすがは博愛の騎士！ 俺は博愛とは縁遠い鼻根多めの天使だが、パラディンになるために必要ならば……頑張って身につけるしかないな！

俺が是と返事をする前にパスリイから黄色に光るなにか……おそらく精霊が飛び出した。

すると今度は精霊に親しいガトウーザが吹っ飛んできたが。武器こそ構えなかったものの、素手で構え、何やら威嚇していた。俺が諫める前にメルティーが杖でぽかりと……ぽかりと、ささやかに、だどいうのに大胆に、そして盛大に魔力を奪いながら諫めていたので何事も無かったが。

「まあパスリイ。あなたがこころよく道を示すなんて珍しい。その……気持ち悪いくらい精霊に愛された精霊使いじゃなくて、戦士の方……に……」

「……ラーミー、どう？ 見てみたいでしょう、このひとに宿る精霊を」

「そうね！ きつと、きつと……間抜けな精霊が宿るわ。見てみたいわね！」

高飛車な口調の精霊に、あまりに天使信仰に敬虔なあまり俺にまで敬いが止まらないガトウーザが噛み付いてしまう。俺はおろおろするだけのヘタレで、天使信仰に報いるほどの活躍をしていない事実には胃のあたりがキリキリする。

「精霊なら私がもうたくさん見えていますとも、ええ、ラーミー。珍しく

個体名とひとりの主人を認める精霊よ！　アーミアスさんに宿る精霊がいるかもしれないなんて！　羨ましい、なんて羨ましい。今から精霊の手を取って、肉体を捨てて、私が宿りましょうか！　ええだめですとも、私はアーミアスさんのお手伝いをするために、崇高なる使命を少しでもお助けするんですからね！　不敬者のあなたには暗黒の精霊をけしかけてやりましょうか！　砂漠のそこかしこに蔓延る火の精霊で丸焼きにしてやりましょうか！

あ痛ああつ！　メルティーなにをするんですか！

「アーミアスさんの邪魔をするんじゃないやありませんよ！」

多分ガトウーザの熱に浮かされた目を見るに、この灼熱すぎる暑さのせいだろう。メルティー、それはショック療法なのかしらないが優しく冷やしてやって欲しいな……。鬼気迫る様子に口を挟めない。俺も暑さにぼーつとしていた間に話が進んでしまう。

「愚兄が大変、大変失礼しました！　お二方！　ですが……えーっと、パスリイさん？　アーミアスさんを侮辱するのは許しませんので！　今のはまだ宿つてもない精霊のことですから罪はありませんが！」
そう言つてメルティーは俺の後ろにガトウーザを引っ張つていったようだ。

起きたことを気にしていないパスリイは寛大だな。俺も気にしないことにする。ガトウーザの悲鳴じみた声とともに耳元で聞き慣れない笑い声が聞こえて、俺のフードを風がふっ飛ばそうとするのを抑えつつも。これがガトウーザが言う精霊なんだろうか。

ばしやばしやと暑さに浮かされたガトウーザはメルティーに水をぶっかけられているようだが、やはり熱中症かなにかで暑いんだろう。しつかり休ませないとな。

「……もういいかしら。方法は砂漠の魔物を戦士の十八番、『かばう』で仲間を十回かばうこと。そうすれば博愛の騎士には精霊が宿る。」

楽しみにしてるわね、あなたに宿る精霊」

まさしく博愛の騎士は微笑んで、俺は道を示されたことに喜んで、パーティーの末っ子が「道」の内容に盛大に顔をしかめていたことには気づかず。

俺は自身の転職以外に理由もないのに魔物と戦うのはいかなものかと考え込みながら、優しい優しい人間の葛藤に鈍感だったのだ。

71話 加虐趣味

「……すごく、すごくあついね、目の前がまっかっかになりそう」
「そうですね、マティカ。」

ですがアーミアスさんの周りだけは非常に涼やかに感じます。ええ、彼こそが本当にまぶしいので。目もくらむようなので。砂漠の暑さなんて大した問題にもなりません。

もちろん、適切な水分補給、休息はきちんとしていきますから万が一にもアーミアスさんに不要なご心配をかけることもありません。体調は万全、視界は極めて、極めて！ 良好。

ええ、ご覧ください、兄さんなんてあまりのまぶしさのあまり目がつぶれかけ、不気味に笑っています。現状を顧みていついかなる時にも真つ当に、真摯に、神のしもべとして行動してもらいたいものですね。ああ、神のお使いのしもべとして、が正確でしたか」

「そういう難しい話してるんじゃないよお……」
「あら、そうですね。マティカのように純粹に考えることもまた、とても大切です」

メルティーは優しいお姉さんだけど、あんまりおれと話をするのは好きじゃないみたい。これ以上話す気はないって言ったりしなかったけど、そんな感じだ。まくしたてるだけまくしたてて、それでおしまい。

でもね、おれのことかどうでもいいとか嫌いとかそういう理由というよりも、それより大事なことがあるからなんだ。ガトウーザと話すほうが大事で、アーミアスさんのことを考えていたり見るほうが大事で、アーミアスさんのために何かすることが一番大事だ。

今、グビアナのお城の上にあったパラデインのあの女の人が出てた、パラデインになるためにセイレイを宿す方法を、アーミアスさんは一生懸命にやっている。

それは、この砂漠で、戦つてるとき、魔物の攻撃を、おれたちに向けたのを、「かばう」で守る。

すごく、それはよくあること。よくある光景、いつもの風景。アー

ミアスさんはいつもすごく、おれたちのことを小さな子どもか、すぐ死んじやう存在だと思ってる。アーミアスさんは天使だから、おれたちはすぐ死んじやうのかもしれない。アーミアスさんはずっと年上だから、おれたちは赤ん坊のようなものかもしれない。

でもおれ、おれは、小さくて、メルティーやガトウザーみたいに大人じゃないけど、本物の赤ん坊じゃない。怪我なんて少しくらいへっちゃらだ。小さいころから喧嘩して傷まみれになって、ひとりぼっちでびーびー泣いてたんだし、仲間もいるのに、治せる人がいるのに、怪我しても怖くなんてない。痛くて泣いてしまうかもしれないけど、それはおれが泣き虫すぎるだけで、別に本当にその怪我が問題ってことじゃないんだ。

おれ、おれは、アーミアスさんが怪我したほうが怖い。アーミアスさんが魔物の攻撃を受けて頬を切ったときに赤い血が飛ぶのが怖い。それをすごく綺麗だと思う自分も怖いし、きつと俺はアーミアスさんが攻撃を代わりに受けるなんて二度とないほうがいいって思ってる。アーミアスさんが怪我するのを見ているのが、おれは好きだから、そんなこと起きないほうがいいと思ってる。

あつたまおかしいんだ。おれって。だんだんわかってきた。でもおかしすぎて治らないのもわかった。どうやって治すの？ 綺麗だと思いきもちを。そんな、きもちわるいきもちを持って、おれはぼんやりじりじり焼かれてた。あつい。あつい。まっかつかだ。飛び散る血が。乾いた砂にしみこんで、おれは、見ないようにその血を踏む。

アーミアスさんが無事に「かばう」をしなきゃだから、魔物を先に殺しちやだめだから。セイレイを宿すために必要なことを、アーミアスさんが頑張ってるのに邪魔したら、この戦いが長引いちやう。こんなに暑いのはアーミアスさんも得意じゃないみたいで、グビアナにいたばかりなんてゆだったみたいに真っ赤な顔をしてたもの。あついのは何だつて本当によくない。早く終わらせなきゃ。

だからおれ、邪魔しない。ぎゅつと手と、剣を握って、魔物を攻撃しないで待ってる。泣きそうだ。涙は熱い風に飛ばされて、すぐに乾いて、もしおれがグビアナ育ちなら泣き虫じゃなかったのに。泣いて

ない。

小さい子を守るのつて、わかるんだ。おれにも。多分、そういう、気持ちなんだろうな。だからやめてくれつて言えないんだ。本当におれつてアーミアスさんからしたら弱つちいんだ。だから強くならないういけない。

だつて、アーミアスさんは魔物に攻撃されても、痛いつて言わないんだ。おれの目の前で、体を張つて攻撃を受けて、血が飛んだり、体を揺らしたりしても、痛そうな顔をしないし、何も言わない。じつと、おれたちなんて見ずに魔物を見て、何かを話しかけているみたい。痛くないはずないんだ。痛みを感じないひとじゃないつて、知つてるのに。

アーミアスさんはおれたちに笑いかけるし、宿屋のあの子に笑顔だし、知らない相手にも優しく笑いかけることだつてあるけれど、いつだつてなんだか、そう、穏やかだ。おれたちを見て笑つている。

人がいる街を見て幸せそうで、魔物を見たつて同じ。そう、魔物が襲つてきたらおれたちを子ども扱いするのだけだ。襲つてこなかつたら、こつちを見向きもしなかつたら剣を抜こうともしないんだ。

おれは、この、優しいひとが好きだから、傷ついて欲しくない。おれの中の何かを無視して、それは本当だから、おれ、本当は、アーミアスさんがパラディンになるのは反対なんだ。

言えないけど、言えないけど！　だつてアーミアスさんはおれたちの事を思つてやつてる。おれたちは本当にアーミアスさんより年下で、護るべき存在に見えている！　おれのちつぽけな人生よりずっと長くそうしてきた天使だもの。

二人はどう思つているんだろう。隠しもしない、好意を全面に押し出す二人は。二人だつてアーミアスさんが怪我する度、この世の終わりにみたいな顔をするんだもの。何も思つていないはずはないけど。

「……少年」

「なに」

「次にアーミアスさんが攻撃を受けられたら、あの魔物を素早く倒してくださいますか？　もちろん、このガトウーザ！　持てる力を使え

るだけ使って素早く倒すつもりではありませんがバトルマスターほどの威力はないのです。ええ、素早く。次で終わりですから」

「わかったよ」

「結構。物わかりが良くて助かります」

ガトウーザが魔物に悟られないように弓をちよつと構えた。多分、あの矢より早くは動けない。でも、仕留め損ねたら殺れる。間違いないおれは殺れる。

武闘家だったころに学んだように、テンションを溜めて溜めてまっ
てたんだもの。

アーミアスさんが飛び出す。砂漠のクイナがアーミアスさんの盾に弾かれる。最後の一撃を無事に受けたのを見届けた瞬間、ガトウーザの矢とメルテイーの魔法が飛んでいく。

おれも、できる限りのスピードで剣を振り下ろした。

後には焦げ跡が少し。それだけ。思いつきり動いたからかな、おれの中にあるあつさも、少し引いたみたいだ。

魔物はいいいね。血が飛び散っても、ほとんど蒸発するみたいに消えてしまうから。もちろん全部じゃないけど、ほとんどは消えるから。興奮も一緒に引いていく。

「さあ！ グビアナに戻りましょうアーミアスさん！」

「ここは暑い！ とても暑い！ よくありませんね！」

「行こうよ！」

さあさあ！ とみんなで手を引いてお城の方に向かおうとすると、おれたちのあんまりにも素早い「掃除」に目を丸くしていたアーミアスさんは、ちよつと手で制して、先にいつも通り魔物へお祈りして、それで、ルーラでひとつ飛びしてくれた。

ちよつとだけ休んで、それでお城に向かう。

アーミアスさんはこれでパラディンになってしまう。メルテイーに聞いたけど、パラディンには「かぼう」よりすごい「におうだち」って技があつて、それを使うと攻撃だろうと呪文だろうと全部、味方を

守れてしまっただって。

アーミアスさんは、イオとかの呪文は全部受け止められない。その度すごく悲しそうだから、それが無くなるのはいいのかもかもしれない。でも。嫌だ。アーミアスさんが怪我するのが増えるってことかもしれないから。

本当に？ おれは、本当に嫌なんだろうか？

攻撃を受け止める度に飛び散る、赤い血が綺麗で。どきどきして。触れたくなくて、そう、あの血を流す天使さまを自分の手でどうこうできたらって思ったら、もつとどきどきして、そわそわしてしまう。なにかできたら？ きつと、とても綺麗なんだろう。それを見るのが、本当は好きなんじゃないの？

好きなのは本当。そこは嘘ついたって、嘘になつてくれない。

でも、でも、おれはなにもしない。しない。しないったら！ これじゃあまるで、泣き虫マティカをいじめて遊ぶやつらと一緒にじゃないか！ 泣き虫、弱虫、親なし、意気地無しって！ おれはいつも泣いて、見返したくて特訓して、馬鹿にされて、それで、泣いてた。悔しかったじゃないか。だからアーミアスさん選ばれて嬉しかったんじゃないの？

嬉しかったのに。

あの真っ白い肌の上に真っ赤な血が！ 胸がどきどきする。

おれの中の、おれの頭のおかしい心がささやく。それが綺麗だった。もつと見てたいだろうって。おかしいおれ。絶対におかしい。

おれはぐるぐる悩んで、でも、こんなの誰にも言えなくて、黙ってた。

いつの間にかお城の屋上に着いていて、アーミアスさんがパラディンの女の人のところに行くのを見たくなくて、その辺をぐるぐる歩き回っていたら、宝箱を見つけたから、鍵も何も無いところにドーンと置いてあるものだから、旅人への贈り物なのかな、中身を貰っていいのかなって考えることに集中して、それ以上危ないことを考えるのはやめた。

閑話 幼天使

俺はずっとずっと人間になりたかった。いつからそう俺が思うようになったのか、正確な時期は覚えていない。ともかく、愛しい愛しい人間たちと共に歩みたかったからだ。

俺は天使なのに。人間たち地上の生命と相反する、輝きのない、非生物的な存在なのに。

ああ、あの命あふれる緑の台地を。翼に頼ることなく己の足だけで踏みしめて、思いつきり駆けて、風の中を歩めたら。空を知らずに。走れば邪魔になる翼を持たずに！ あのいとしい少女たちの系譜と、笑い合えるならば……。俺も、一緒に老いることが出来たならば！

ああ、いとしい人間たちと触れ合い、会話し、心を通じ合わせるこゝとが出来るとなら、俺は。天使として、姿見えぬ守護者としてではなく、ただの「アーミアス」として言葉を伝えられるなら。

俺は、かの幼き者たちを、この目で初めて見た時から、そう願っていた。

母親の胎内から生まれでた訳では無い、天使に親は存在しない。万物の父たる創造神の偉大なる力から機械的に「遣わされた」のみである、「天使」という名の「機構」であるというのに、だ。

俺はまず、本物の人間たちを見て、好きになって。そのどうしようもない「違い」にいてもたってもいられなくなって、短気にも、邪魔な己の翼をもぎ取ろうとして、失敗した。

その後は、中途半端に確信できる考えもなく手を出すから失敗したのだと思って、人間たちのことをさらに学ぶかたわら、今度は光輪を砕く方法を画策していた。しかしまあ、天使が遣わされてから長い長い時間の中でも人間になろうとする天使とかいう酔狂なのはいなかったらしい。成功例を学ぶことはなく、失敗の代償の方が大きいととれるものしか思いつかず。

それでも焦がれるように人になりたかった。俺はまだ知らねえ、天使界から無抵抗に墮ちさえすれば、願い通りに翼を失い、光輪を砕き、人間たちと言葉を交わせるようになってるのだと。そして……そう

なつたとしても、俺が天使であるという事実は、どうしようもなく変えられないことを。

性根から、ああ根本から、忌まわしいことに最初から。俺はいくら似せても、人間のようには在れないのだ。

だが、だが、それを知っていたとしても、俺は願ったろう。

人に近づくことを。人の子が無邪気に欲しがる翼よりも欲しかったんだ。

可愛い可愛いあの子たちと話すことができるなら。何を差し出しても良かった。

いつからかは分からねえ。俺は強く強く人間たちに惹かれ、求めていた。

瞬く間生きる者たちへ。鈍く、長く、使命を遂行するだけの生物もどきの見る夢だった。

眩しい太陽の下、生命あふれる大地で、笑顔で駆ける姿を見て……俺は心底羨ましくてしやうがなかったのか。

それとも、それとも、「あの」瞬間こそが、初めて見たときこそが初恋だったのか……。

天使が人を好きになる。それは墮天することほとんど同義かもしれなかったが。実際のところ、そうはならなかったし、つまり恋することすら出来なかったという証明なのだが。

俺は今日も、愛しい人間たちへ、触れることも出来ない。自己満足ならでできる。向こうは風の囁きだと思えないだろう。それは、果たして俺が悪戯な風ではない証明になるだろうか？

あいしていた。それは、間違いなく。届かぬ想いは、共に歩みたかった人間の人生よりも長く続いた。

老い、この世から去っていく愛おしい人間たち。俺はただ祈り、魂が安らかであることを願うことくらいしか出来なかった。愛おしい人間たちは、たまに肉体を捨てて初めて俺と会話してくれたが、それはつまりこの世に未練があつて幽霊になってしまったということ。

俺はあいする人間たちの憂いをたつ。せつかく話せた人間たちをこの世から解き放つ。それこそが使命であるからだ。もつと話して

いたくても、未練を持ち、さまよう人間たちの苦悩を解き放つ方が大事だったのだ。

そうして、俺は、天使だった。

どこにいるの。天使さま。

人間の、敏感な子どもたちの疑問の声を真隣で聞きながら、俺は優しく頭を撫でたが、子どもたちは風に髪の毛をかき混ぜられたようにしか感じないのだ。

ぼくは、天使と、呼ばれていたから。

でも、人間になりたかった。

「おはようございます、ししよー」

「ああ、おはよう」

早朝、高度のある天使界にて。ひんやりとした中、身だしなみを整えた我が弟子が部屋に入ってきた。ここはアーミアスにとつての教室である。上級天使がよく過ごしている空き部屋だが、礼儀正しく素行のいいアーミアスがいる分には誰も咎めないだろう。

多少、舌つ足らずなのは相応に幼いので仕方の無い事だ。

片手には彼愛用の小さなノートがあり、おそらく今日もその几帳面な字がその中に増えるのだ。

勤勉なアーミアス。我が愛弟子である。

「本日も、よろしくお願いします」

年齢を差し引いたとしても丁寧すぎるほどだ。その上にさらに丁寧に頭を下げると、未だ幼い彼の体には大きすぎる椅子の上に座った。よく出来た弟子であり、よく気が回るが幼い。こつちが心配になってくるほどであるが、そつなくこなすアーミアスにそれを指摘して困らせるのもまた良くない。

私たち「大人」がよく見てやるべきなのだ。その健やかな成長を見

守り、必要に応じて手助けするべきだ。

つまり、アーミアスが幼くとも、習熟段階に達しているのなら本来もっと年上の天使が行う学習を前倒しにするというわけだ。もちろん、細心の注意を払って。

「うむ。アーミアス。今日はノートとペンは片付けてきなさい。落とすといけないから、荷物は特になくてよろしい。服装はそのまま、部屋に置いてきたらまたここに戻ってきなさい。本日は守護天使になるための実地訓練を行うのでな」

「じつちくんれん……ですか?」

「そうだ。オムイ様のところにご挨拶をしてから行うので、急がずに準備をしてきなさい。前もつての連絡が出来なかったが、これはようやく許可がとれたという訳なのだ」

「はい、ししよー。……あの」

「なんだ?」

「それは、どのような実地、訓練なのでしょうか……」

不安そうなアーミアス。そのあたりは年相応である。

しかし、私はある種、意地悪な大人らしい。アーミアスの反応がみたくてわざわざ言わなかったようなものなのだ。

真面目な彼の驚く顔が見たかった。

「下界へ行く訓練だ。前から許可は降りていたが、本日ということになった」

「え……!」

静かな黒い瞳に途端、光がさす。きらきらと、瞳に宿る星々が輝きを増していく。白い頬に赤みがさして、子どもらしい無邪気な笑顔に変わる。

「もちろん一人前と認められるまでは私が付き添う。さあ、準備なさい」

「はい!・ いますぐ!・ いえ!・ まちがいなく!」

飛び上がるほど喜んで、珍しいほどの笑顔でアーミアスは部屋から飛び出していった。やはりまだ幼い見習い天使。喜ぶ姿は可愛いものである。

「あらあらあらあら、何かしら、あなたの弟子があんなに喜んでるなんて珍しいことじゃない」

「ラフエツトか。本日、実地訓練として人間界に行くという話をしたのだよ」

「やつと許可が降りたのね。あんなに真面目に頑張っているんだもの、それが実ったら嬉しさも大きいわよね」

「ねえ今！ アーミアスくんが可愛かったのだけど！」

「今度は……エレッツタか。いつもそう言うな」

「だって可愛いじゃない！ ピンクのほっぺに目をキラキラさせて！
ねえラフエツト、そう思うでしょう？」

「そうね。あの子が笑顔なのはとても素敵なことだわ。エレッツタ、アーミアスくんは今日初めて人間界に行くらしいのよ。ずっと楽しみにしていたものね。嬉しいでしょうね」

「なんだって！ それはめでたいこと！ 是非お見送りたいわ！」

みるみる部屋の中の天使の数が増えていく。大人の天使が三人もいれば多少の狭さを感じるほどだ。アーミアスが戻ってきた時に興奮する上級天使どもに怯えなければ良いのだが。私は、自分に多少の威圧感が、ことに見習い天使に対してあることを理解している。アーミアスはとても聡明で、怯えたりするようなことはないが……。

二人は柔らかい雰囲気の天使だが、上級天使だ。天使には理がある以上、威圧感があってもおかしくない。

しかし、この二人は同時に、自分の弟子でもないのにアーミアスのことをよく気にかけてくれる存在。一種の関門である初人間界の訪問の見送りにこれ以上ふさわしい天使もいないだろう。堪えてもらうか。

やいのやいの言い合う二人の声を聞きながら、アーミアスの成長に思いを馳せる。

私とアーミアスの出会いは……正確には、忌まわしい事件のあとだ。それ以前は私が一方的に存在を知っていたくらいだろう。

言葉を交わしたのは彼が灰にそまったあとだ。間違いなく天使であり、墮天しているわけでもない奴から発せられたことが違和感があ

るほどの、強烈な悪意にあてられたあとだ。

一時は無垢な子が一体どうなるものかと注意深く見守っていたが、いざ弟子としてみれば大変勤勉で意欲もあり、何事にも手を抜かず真摯に励む良い天使だ。私は弟子を誇りに思う。

たった、神の手により遣わされてから三十年と少しの経験で、人間界へ降り、守護天使となるべく第一歩を踏み出す優秀なこの子を。その努力に敬意を。

控えめなノックとともにアーミアスが部屋に帰ってきた。すぐさま二人の女天使に褒められ、素直に頬を少し染めた愛弟子に私も褒めたいが、ここは努めて厳格に振る舞うべきか。それとも便乗して……：こういう時、私は己の性格が恨めしい。他者の前で素直に褒めるのが少し、気はずかしいのだ。

「さあアーミアス。初めて地上に赴く天使としてオムイ様の元へ挨拶に行くでしょう」

「頑張つてね」

二人の友は先に一階で待っているらしい。

私は、アーミアスの小さい手をいつものように掴もうとしたが、地上に赴くことが許されるような、一人前ではないが相応に認められた天使をいつまでも子ども扱いしているかのように少し迷った。

しかし、何もアーミアスがたった三十かそこらの、天使としてはようやく幼児の域を抜けたばかりの幼い子どもであることが変わるわけではないのだからと言いつつ、その手を引いた。

私の足よりも背が低いほど小さな天使だ。飛翔能力も相応である。訓練はしてきたが、実際の空を飛んだことはない。場合によっては抱えて飛ばねばならないかもしれない、とその小さな手を握って思うのだ。

とはいえ、今日のことは人間のことに大変関心を持ち、人間界にいち早く降り立つことを許可されたアーミアスにとって素晴らしい経験となるだろう。

「いつてらっしやい！」

「いい経験を積んできてね！」

ラフエツトさまとエレッタさま、それから一階にいた何人かの天使にお見送りされて、つめたい雲におおわれた空にぴよんと飛び込んだ。空って、足元にあるのはぼく……おれにとっては普通のことだけど、人間たちにはそうじゃないらしいんだ！

しばらくしろい雲の中をつつきって降りていくんだ。翼はちいさくたたんで、おちるままにする。ひゅーって耳元で風がうたう。ぼくは、ししよーに言われた通りに舌を噛まないように気をつけて、口をぎゅつととじた。目は開けてるけど、水がとびこんできたからたまらずとじちやった。

しばらくそのままにしてると、ぱっと周りが明るくなったから目をあける。

すると、下のほうにちいさく、下界がみえた！ 今度は羽ばたきながらゆつくり降りていく。するとだんだん緑と、青と、茶色と、灰色の地面が近づいていく。

ご本で知ってたけれど、天使界の何倍あるんだろう！ とてもひろい！

「アーミアス、あの緑豊かな土地がわかるか？」

「はい、ししよー！ あそこがウォル口村ですか？」

「そうだ。私の担当区域だ。そしてアーミアスが一人前になれば守護天使を継ぐ土地になる」

緑がいつぱいと、すこしの青にしか見えなかったウォル口村はどんどんどんどんちかづけば、川があることがわかった。川と、滝と、緑と、たくさんの、別々にあるおうち。天使界みたいにひとかたまりの建物があるわけじゃなくて、地面に別々に建ってるんだ！ 本当だったなんて！ ああこれこそ、人間たちの住む「村」だ！ もちろん本物で、ご本のさし絵じゃない！

なら、本物の人間たちも住んでいるんでしょ！

おおきくくるくる回るようにししよーが降りていく。ぼく……俺

も、真似して回るように降りていく。

そして、川の近くに着地。ううん、足はついてないけど、地面の近くをふわふわ飛ぶ。

「さて、我が弟子アーミアスよ。初めて地上に降りてみて何か問題はなかったか？」

「なにもありません、ししよー！」

「うむ。では、行きは問題ないわけだな。帰りにまた聞くとしよう。いや、不安そうな顔をしないでよろしい。前例がないのだ。ここまで幼い身で降りたというのは」

「大丈夫です、ししよー！」

ししよーは頷いて、俺を滝のそばの守護天使像の前へつれていってくださった。ししよーにちっとも似てない像だ。だけど、守護天使イザヤールってきちんとししよーの名前が書いてある。

「守護天使のいる人間たちの村、町、城などにはこうして守護天使像があり、守護天使の名前が刻まれている。住人の信仰心が薄いところでは像の手入れが甘く、朽ちているところもあるが、ウォル口村は皆、大変信心深く、きちんとした手入れがなされている」

「それはすばらしいことです！」

ところで、どうしてこの像は、ししよーの像なのにししよーに似ていないのですか？」

像はししよーより、腕とか特にはそくて、なんとなく頼りないし、そんなに強そうじゃない。使っているのはしろくてとってもきれいな石だけど、本物のししよーの方がずっとかっこいいな！ もっと強そうにしたらいのにな。ししよーみたいにかっこいい天使の方がまさに本物の守護天使！ って感じ、しないのかな？

これだと人間のための聖書の中の天使みたい。あんな天使、本当はいないのに。あんなひらひらしたしろい服を着て、ほそい腕で、優しく笑っているだけの天使。弓を持ってる天使はいるかなあ。

俺はね、安心させるために笑うのはいいと思うけど、剣を持って、誰よりも先に前にいって、人間たちを守るような守護天使になりたいな。

ふわふわなだけの天使なんてかつこよくない。

「守護天使像は代々、刻まれている名前が変わるのみで最初から像の姿は変化していないのだよ。初代守護天使の記録は天使としてもかなり古い記録であり、名前はもしかすると帳面に残っているかもしれないが、顔はもはや分からないので想像でしかない。定かではないが、最初の守護天使の顔なのかもしれないな」

「そうなんですな……」

もし、本当に最初の守護天使の姿だったら悪いこと考えちゃったかな……。でも、絶対、俺のししよーの方がかつこいいからね！ 俺のししよーが一番！ すごいんだ。

同じくらいの年の見習いぴよぴよ天使だって、俺のししよーより「怖い」天使なんていないって言うよ。「怖い」なんて、ぼく……。じやなくて、俺にはそんなことないけど、つまりかつこよすぎて怖いんだね！

怖いくらいかつこいいって、かつこいい！ 俺もそうなりたいな！ 「ではこれからウォル口村を見て回るが……。私は先に村の周りを見てくるとしよう。魔物が村になにか悪さをしようと思んではいないかを確かめなくてはならないからな。

アーミアスはまだ戦闘訓練が十分ではないので、村の外にはくれぐれも出ないようにして、見て回っていないさ。

これまで学んだとおり、人間たちには私たち天使の姿は見えない。たとえば目の前で扉を開けたとしても、風かなにかの作業だと思ってしまう。気づかれることはない。彼らの生活を妨げない範囲で好きに回るように。もし、誰かが困っていたら出来る範囲で助けてももちろん構わない。

それから……。今は昼なので見えないが、夜になれば人間の幽霊が見えるかもしれない。彼らは生きていた頃と違い、私たちを見る事が出来るが、幽霊になっている人間は己の死に気づいていないか、この世に未練があるのかのどちらかだ。その未練を解きほぐし、解き放つことも守護天使の使命のひとつだが……。まだ荷が重いだろから、もし見つけるようなことがあれば呼びなさい。

「なにか質問はあるか？」

「ありません」

「うむ。それでこそ我が弟子だ。それではあとでな」

「はい、ししよー！」

危ないから外へ出てはいけない。それをしつかりおぼえる。天使のことわりがあるから絶対に破れないことだけど、ちゃんと約束をおぼえてることが大事だっておもうんだ。

ししよーは自分の剣を持つてるけど、俺は持ってないし、使えないから危ないんだね。剣の訓練はもっと大きくなつてからじゃないとダメなんだって。同じ見習い天使でも、もっとお兄さんなら自分の剣を持つてるけど、俺は持ってない。

ししよーになぜですかって聞くと、ちいさいうちから訓練するとおおきなれないからなんだって。ちいさいうちからやると体がうまくおおきくならないかもしれないからって。人間だったらそうらしいんだ。天使ならそうなるかわからないけど、ちいさいうちから剣のお稽古をしたことがないからしないんだって。

俺、ししよーみたいに身長が高くて、ムキムキで、眉毛の太いイケメンになりたいからもちろん、ししよーの言葉にはちゃんと従ってる。かつこいいいからやってみたいけど、かつこよくなるためには仕方ないことなんだね！

ひくくひくく飛びながら、人間の村、ううん、ししよーの守ってるウォル口村をゆくり見て回った。綺麗な水が流れる滝がすごくいいところ。天使界よりも綺麗かもしれない。清く、すごく澄んでいてすごくいい気分。

人間たちのおうちを見て回る。お年より、大人、男、女、子ども。男の子、女の子、飼犬。いっぱい住んでる。もしかして、犬には天使が見えるのかな？ 何となく見られている気がするけど、犬とはおしやべりできないなあ。

大きな怪我をしている人はいないし、今まで学んできた人間にとつての厄災である、「病氣」とかもなさそう。さすがししよー！ すごく人間たちが幸せに穏やかに暮らしてるって俺でもわかるんだもの！

いいところだなあ。それに、天使界よりずっと太陽から遠いものになんてあつたかいところなんだろう。高いところは寒いって、本当なんだなあ。

まぶしい緑の植物は、ぼくが水やりしているお花たちよりずっといきいきしてる。あつたかくて、ぽかぽかして、翼があつて、輪っかがあることしか外見は変わらないのに、天使よりずっとずっと表情豊かな人間たちがいっぱいいる。

困ってる人はいないかな。こんなに平和ならそうそうないと思うけど。

ぼくは、きよろきよろしてたけど、やっぱりすごく穏やかでなんにもなかった。それはとつてもいいことだけど、初めて人間界にきて、はりきつてたから、ちよつとだけつまらなかつた。

「ごらごら、ナツミ、走らないで！」

「お母さん、お母さん、こっちこっち！」

楽しそうな声が聞こえて、ふよふよそつちに飛んでみる。そこはちよつとした原っぱで、青い髪の女の子とその「母親」らしい女の人が草の上にシートを広げてご飯を食べていたみたい。

女の子が滝つぼのへりにお花が咲いているのを見つけたみたい。そつちに向かつて走って行って、それで、あつ！

あのままじゃ、つんのめって、水に落ちちゃう！

ぼくは急いで飛んで行って、落ちる寸前に女の子を捕まえた。ぼくよりほんの少しだけ年下に見える、本当はずっと年下の女の子。間に合つた。

ふわふわしてて、あつかくて、小さな体をそつと地面に戻す。女の子はびっくりしちやつたのか、それとも落ちそうになって怖かつたのか、とても大人しかつた。

ぼくは、ぼくはといえ、その子が天使界にいるどんな天使よりも、可愛いって思つたんだ。

すごく可愛い子だつた。一瞬だけだつたけど、さらさらした青い髪と、くりくりした目と、ばら色のほっぺたの小さなその子がすぐに好きになつた。人間ってとつてもいいものなんだつて。

「ナツミ！」

「お母さん……」

「危ないじゃないの、踏みとどまらなかったら治ったばかりなのにまた風邪ひいちやうところよ」

「ふみとど……まってない……今ね、お母さん、誰かが受け止めてくれたみたいだったよ」

「誰かが？」

「今ね、優しく、ふわって！」

座り込んだその子の前に、水面のぎりぎりに飛んで、目を合わせようとしてみた。触れることができたんだから、頑張ったら、すこしくらいは見えないかなって。

もちろん、無理だってわかってたけど。

可愛くって、元気で、ぼくの胸の中もぽかぽかした。太陽よりもずっとずっとあったかい。

「不思議な風かしら……いいえ、それはきつと守護天使様のおかげよ、ナツミ」

「しゅごてんしさま？」

「まだナツミはちいさいからよくわからないかもしれないけど、ウオルロ村にもね、守護天使様がいらっしやって、私たちを見守ってくださっているの。そして、こうしてたまに助けてくださるのよ」

「じゃあいま、落ちなかったのはしゅごてんしさまが受け止めてくれたの？」

「そうよ。そういう時はね、いつも見守ってください、ありがとうございます」

「するー！」

女の子……ナツミちゃんがお祈りすると、緑色のきらきらしたものが現れて、ぼくの方にふわふわ飛んできた。これが、星のオーラ。本物をししよーに見せてもらったこともあるから間違いないや！

あったかいそれを手で包み込む。

祈りのポーズをやめたナツミちゃんの頭をそつと撫でてみる。なんの反応もなく、ただすこしだけ首をすくめた。俺はくすぐったい風

でしかないんだなあ。

もう、この子には俺のことはわからないみたい。さつきもあんな、人間から見たら不思議な動きをしたからわかっただけ。

人間。年下の可愛い子。この子を守るのが守護天使かあ。

守護天使って、とつてもいいものだ！

ぼくは、ニコニコ笑ってナツミちゃんに話しかけた。

「また、今度会おうね！　ぼく、強くなつて君を守るよ！」

もちろん、返事はない。

分かってたけど、今度は胸に突き刺さるみたいに悲しさが襲つてきて、人間と一度でもいいからおしゃべり出来たらなあって。悲しかった。

村にはまだまだ人がいる。別のところも見てこようかなって思つて、村の他のところにふよふよ飛んでみたけど、行くさきぎさきでナツミちゃんを見かけた。人気者なんだ。そうだよ、ナツミちゃんがいるだけで胸がぼかぼかするんだもの。

いろんな村人とおしゃべりしてるナツミちゃん。楽しそうで、うれしそうで、笑つて、幸せそう。ナツミちゃんが幸せでぼくも嬉しい。

だけど、ぼくだけしやべれない。あの子とおしゃべりたいのに！　夢中だった。もう、すぐに夢中になった。だけど、ぼくはおしゃべりできない。ナツミちゃんとしやべっている神父さんとおしゃべりしたくてもできない。ナツミちゃんの「母親」と話すことも出来ない。見てるだけ。見守ってるだけ。ぼくからは触れるけど、向こうにはわからなくて、ぼくの言葉は絶対に届かない！

我慢できない。もう耐えられなかった。何がいけないのか考えた。ぼくが天使だから？　それはわかつた。お話を聞くよりも、ご本で読むよりも、実際の人間たちはとつても魅力的で、「天使」であることが嫌になっちゃった。

ぼくも人間として生まれていたら良かったのになあって思ったんだ！　ああ、神様！

でも、ぼくは、ぼくは、いてもたってもいられなくなつて、どうやったら人間になれるのかを考え始めていた。神様にお願ひして、天使として頑張りなさいって「ことわり」で言われたらどうしようもなくなつちやうんだもの！

一生懸命、考えた。人間と天使なんて、ほとんど外見が変わらない。翼があつて、わっかがあつて、それだけ。それだけの違いなのにおしやべりできないんだ。

翼が憎かつた。飛べても、ナツミちゃんと話せない。ぼくはこんなにいっぱいお話したいことがあるのに、ねえ、おしやべりしてもいい？ つて聞くことすら出来ないんだ。

悲しくて、悲しくて、ぼくは一生懸命、一生懸命考えた。

どうしたらいいのかなつて。翼が邪魔だつた。ふわふわにした翼を引つ張つてみたら、ぶちぶち何本が羽根が抜けたけど、それだけ。それだけじゃあ何も変わらないよ。自分で見ても何が変わったのか、ちつとも分からないんだもの。

時間はすぎて、気づけば夕方になつて、ししよーが迎えに来る少し前に思いついたんだ。翼をどうにかする方法。俺は自分の剣を持つてないけどししよーは持つてるつて。

ししよーが剣を装備してない時はあんまりないけど、ししよーの部屋にはナイフがあるのを思い出した。

ね、翼があるのが悪いんだ。こんなものちぎれてしまえばいいんだ。なら、切り取つてしまえ。

ぼくは、じやあ明日つて挨拶し合う人間たちの笑顔を見た。

胸がぽかぽかした。俺もその中に入りたかつた。

そして、俺は決心した。

閑話 擦違

多分、私は勘違いをしてしまったっているから。

その、優しい優しいひとが、天使様なんだって理解しなきゃいけない。

それでも勘違いしてしまいそうになって、それで、私は「二人」のアーミアスを見てるの。

彼はアーミアス。よく泊まりに戻ってきてくれて、ウォル口村という共通の話題もあつて、彼はとつても聞き上手で、お話しだつて声は穏やかで、落ち着いたそれは聞いていてすごく好き。

同年代に見えて、そうじゃなくて、身近に感じて、そうじゃなくて、私はどこか勘違いしてしまっそう。

優しく、穏やかで、心地のいいひと。天使のような微笑みの、……もちろん彼は、「ような」じゃなくて本物の天使だけど。誰よりも、綺麗な男の子。

「あら、おかえり！ アーミアス！」

「ただいま戻りました、リツカ。今日も四人泊まります」

「わかったわ。アーミアスがいるんだから従業員価格でいいからね」
疲れているはずなのに、いつも通り綺麗に微笑むアーミアスは、今の私にとつては多分、失礼だけど「友だち」とか「村に良くしてくれた旅の人」とかそういうひとに見えてしまう。

三人の仲間の人たちと一緒にカウンターに来て、ほかの旅の人と同じように鎧を着ていて、剣を背負っていて、まるで普通の人間みたいに振舞おうとしてくれる。私たちが親しみ深いように、気後れしないでいられるように。

でも、その清らかな空気は誤魔化せなくて。でも、精一杯そうしてくれている。

ちよつと静かになっていた宿のほかのお客様は……常連さんはい

つも通りだけどね……アーミアスたち一行が二階に上がってから、口々にうわさをしはじめた。

あの人綺麗ね、まるで天使様みたいね、夕飯の時に声をかけてみようかなって。アーミアスの周りにはいつも仲間の人がいるから、本当に話しかけるのに成功しているのは見たことがないけど。あんなに仲良しなのに、割ってはいえるのには勇気がいるもの。

仲間の人たちとご飯を食べて、一階で休んでいる姿。そういう、旅の人をやつてて、どこか友だちみたいに錯覚してしまうアーミアスにはちよつと隙があつて、まるでただの同年代の男の子なんじゃないかって、一瞬思ってしまう時がある。

私がぼうつと見てたら、にっこり笑いかけてくれる。

もう一人の……ううん、もちろんアーミアスはひとりしかいなくて、同一なのは分かつているんだけど、もう一人のアーミアスと言うなら、「天使様」としてのアーミアス。

私、アーミアスが訪れる前のセントシュタインを一瞬しか知らないけど、随分犯罪率が下がったんだって。かつては牢屋にいたこともあるお客様の話を聞いたことがあるけど、到底犯罪なんてしそうにないように見える、穏やかな顔をしたそのお客様は、一度だけアーミアスとお話したことがあるんだって。

その時は、本当に偶然で、別に犯罪の現場を見られた訳でもないし、自分の前科を旅人であるアーミアスが知っているはずもないけど、あの目で見られて、静かで、穏やかで、不思議な空気の中でお話したら、まるで自分の中の「毒」が抜かれてしまったみたいに思ったとか。自分を一人の人間だと尊重してくれて、当たり前前に接してもらえないのは久しぶりだったんだって。そんなの当たり前じゃないですか。そう言いたかったけど、悲しいけど、そうじゃなかったんだって。そうじゃなかったのは自分のせいだった、とも。

隣で聞いていたルイーダさんも、彼は少し前は悪い意味で有名な人

間違ったって言ったもの。でも、今のあなたならリーダーの酒場に登録して、人に紹介することだってできるとも。

彼はずつと嬉しそうだった。自分が変わったことに？ 当たり前
に接してもらえたことに？ 私には、わからなかったけれど。

ああ、アーミアスのあの目。アーミアスの瞳は夜空。星がたくさん煌めいていて、いつも穏やかで、吸い込まれるようで、自分がちつぽけに思えてしまう。でも、あの目は私たちに、人間に、溢れんばかりに愛してくれていることを教えてくれるの。

私たち人間をとても大切に思ってくれているとありありと分かるから、アーミアスと話したその日は特に、明日も私たちの天使様に恥じないように頑張ろうって思えるものね。

あのお客様は前科者と知っても他の客と差別しないこの宿もいい宿だ、そしてあのひと、つまりアーミアスもよく泊まっているなら間違いはない、次の宿王は私に違いない、なんて陽気に笑って言ったださるものだから、困ってしまった。

まだまだ私は未熟なのに。でも、そう思っていただけのは嬉しい。私、もつと頑張らなくちゃ。期待に添えるように！

でも差別しないこと……それは難しい事じゃないの。そういうことは、小さい頃から守護天使アーミアス様の優しさに触れているからかもしれない。

どの人もかけがえのないお客様で、違いなんてない。誰だって泊まっていただけし、いい時間を過ごして欲しい。

それは、天使様の、どんな人間にだって分け隔てなく見守ってくださった姿を……見えなくても、感じていたからかもしれない。私の中にも天使様が生きているみたい。

夜、私がちよつと遅い夕食をとるとき、いつもじゃないけどお茶を
しているアーミアスがあると、きまつて一緒に食べてもいい？ って
聞いてしまう。優しいアーミアスは一度だつて断つたことはないあ

ら、私はいつも甘えてしまう。

天使様だからか、あんまりたくさんのご飯を食べないアーミアスは代わりなのかな、けっこうお茶をするのが好きみたい。大した量が食べられないので食事によってリツカのいる酒場兼食堂兼ロビーに居座れない。そのためお茶をすることで居座っている。お茶をしているとリツカが結構な頻度と一緒にご飯を食べてくれるので、嬉しくなつて繰り返す下心の塊

いろんなお客様とお話するのは好きだし、アーミアスの仲間の人たちとも楽しくお話しするし、もちろんこの宿屋の従業員の人たちともいっぱい話すのも好き。でも、やっぱり一番楽しいのはアーミアスとお話ししているときかなって思ってるの。

私はけつして、彼の特別ではなくて、ただの人間の私がそうなれるはずもなく、ただこの尊い天使様が守護天使様をしている村の住民だから、氣遣つてくださっているだけ。

今でも、アーミアスはお休みの日の午前にはウォル口村に行つて、見回りとかをしていて、その日の午後の少し暇になったときとか、やるにお茶をしているときとかに教えてくれる。みんなの様子を、みんなが元気にやっつてるかとか。天使様としていろいろお忙しいのに、心の底から幸せそうにみんなのことを話すの。

それから、それから、いろいろお話した後には決まつてこう言うの。「リツカの歩む道に神のご加護がありますように」光あれ！よりはマイルドな挨拶だと思つて使っているだけであり、アーミアスとしては「じゃあまた今度！」とフランクに言うのが氣恥ずかしかっただけである

つて。そのたびに。アーミアスは私のお友だちじゃなくて、天使アーミアス様なんだつて思い出す。神様から遣わされた、尊い天使様だつて。

アーミアスは、私に、とつても良くしてくれる。私は勘違いしちゃうになつて、アーミアスは神様の御遣いなんだから、本当に勘違いしているだけなのに。

同じくらしいの歳に見える男の子。笑顔がきれいで、優しくして、……

私に特別親切だと勘違いしてしまいそうになる。でも、思い違いなの。だって彼は誰にだって優しいし、誰にだって親切で、誰にだって、安心させるように、きれいに微笑む。天使様だもの。私たち人間をいつも護ってくださいる守護天使様なんだもの！

私はここで本当にうまくやっているのかなって、不安な日、あのきららした夜空のような目に大丈夫だって言ってもらえたら、どれだけ安心できているのか、アーミアスは知らないよね。

ルイーダさんは、きまつて悶々と考え込んでいる私に「お似合いに見えるのに何を難しく考えているの」なんて茶化すけど。

アーミアスは天使様で、私はただの人間で、ずっと私が小さいときから見守っている相手に何をおもっているんだろう。

「彼女は今日も勤勉で、優しく、俺の挨拶にも、

『アーミアスにも神の御加護がありますように……なんて、アーミアスに言う必要はなかったかもしれないけど、私も祈ってるね！』

とかわいく返してくれる本物の天使でした。リツカが天使でなければ誰が天使だと言うのでしょうか。間違いなく、あの微笑みに救われる日々です。ペロペロしたい。

今日も、リツカの薔薇色の頬に見とれる日でした。彼女に健やかな日々が続きますように……と」

大真面目な顔をして、低俗な部類の文章で日記を書くのはアーミアス。小心者なのでロウソクの灯りを最大限落として日記を書いているのだ。

部屋の中には他に誰もいないし、カーテンをしっかりと引いているのでロウソク程度の光では外に漏れたりしないことも承知しておきながらも、コソコソしているのである。

すっかりインクが乾いたことを確認すると日記を閉じ、胸元に日記を抱いてベッドに転がった。隣の部屋には仲間たちが宿泊している

ので音を立てることなくゴロンゴロンするという技量を発揮しながら。

声を上げては誰かの睡眠の迷惑になるかもしれない。それを承知している彼はぎゅつと目を閉じ、口を開くことなく悶えていた。ゴロンゴロンと。

彼の内面を知らないなら、それは日々の反省の結果によるものと思うかもしれない。自分の至らなさを思ったのか、と同じ天使なら考えたかもしれない。狂信者ならなんならの崇高なる儀式なのかとも解釈するだろう。

実のところは、もちろん、意中の相手に対して今日も何も変わることなく接したことに対するもの。

想い人は今日も変わらず。自分も変わらず。彼女が健やかなのはいい事だ、関係性が悪い方向に転じなかったこともいい事だ。だけでも、それは自分が何も進展させなかったという意味でもある。

自分のヘタレさに、そしてなんとなく言葉のチョイスが悪いのではないか？ と考えつつも真の答えには行き着かずに。

アーミアスはベッドでゴロンゴロンしていた。

72話 騎

きらきらした鍵を掴む。別になんも言われない。何も起こらない。誰かが咎めてくることは無い。鍵を元の場所に戻す。それも何も起きない。もう一回鍵を掴んで、手に持ったまま太陽の下に出た。なんも起きない。怒られない。奪われない。咎められない。なら、貰っていいのかな。

なんだか綺麗だし。魔法とか詳しくないおれでもなんとなく不思議な力を感じるんだ。何かの役に立つかもしれないし。

ポケットにねじ込む。あとでアーミアスさんに見せたらなんて言うだろう？

やっぱり、アーミアスさんとパラディンの女のの方が気になるから、おそろおそろそつちの方に行ったらなにか、お話をしているみたいだった。

屋上で流れてる水の音がなんとなく大きく聞こえたような気がして、一步一步近づいていく。

ぱしやんと、どこかにぶつかっただのかな、跳ね返った水が飛び散っていく。パラディンの人をガトウーザがものすごい目で睨んでる。メルティーは日陰まで下がってきて、暑そうに汗を拭いた。メルティーは不思議なくらい興味がなさそうだった。

「意外な精霊ね。あなたは仲良くするでしょうけど」

「ええ、俺を認めてくださるならば。俺がパラディンになれるのであれば」

「パラディンの素質は博愛。そして自己犠牲。それをあなたは見せたからこそ、精霊は宿ったの。その……少し、間抜けな精霊に見えるけどね」

言いにくそうに、口ごもるみたいに言ってるけど……間抜けな精霊？ 精霊に間抜けとか間抜けじゃないとかあるのかな？

水がぱしやん、とうるさい。

精霊を見ようと思って二人の周りを目を凝らしてその辺を見てみたけど、でも、おれには何にも見えなかったし、聞こえもしなかった。

ガトウーザみたいに特別「目がいい」わけじゃないもの。

そういうのは、やっぱりガトウーザが詳しいんだろうけど、目をそらさずにすぐ睨んでいてあんまり話しかけたくない。

ぱしゃん、ぱしゃんと水が跳ねる。ああうるさいな、と思ってみてみれば、なんにもないのに水が跳ねてた。ね、なんにもないのに。誰も触っていないのに。精霊か、妖精か、分からないけど。

精霊の話をしているからかな？ 見えない何かが遊んでるみたい。ガトウーザかなあ。

「俺は、彼のひたむきなところを好ましく思いますので」

ガトウーザが突然崩れ落ちた。熱中症かなと思って日陰に引き摺ってくるとなぜか冷やす前からずぶ濡れだった。

「ご指導、ありがとうございます」

「いいえ、パラディンのレベル十五を越えたならまた来なさい。その時は勝負しましょう。今度は同じパラディンとしてね！」

これで、アーミアスさんはパラディンかあ。仲間を守る騎士様。なら、ますます魔物が動く前に全部倒しちゃいたい。もつと強くなつて。そしたら、きつと、安心できるから。

パラディンのチェインメールの女の人。パラディンの人。なんとなく、似たような鎖帷子を着たアーミアスさんを想像する。そういえば、初めて会った時も鎖帷子を買おうとしてたんだっけ？ あああ、よく似合っちゃう。そう思って、どれだけおれがどう思おうとも、アーミアスさんの後姿が見慣れているんだなあって。

いつか、アーミアスさんが戦わなくてもいい日がくればいい。

チェインメールに埃が被って、アーミアスさんの剣は錆び付いて。おれはたまに彼のところに遊びに行く。すると優しい笑顔を浮かべたアーミアスさんは、幸せな日々を送りながらおれの来訪を歓迎する。

おれの母親と違って、一途な大切な人と、誰かを大切にできるアーミアスさんが寄り添うんだ。

赤い血なんて流れない。ひとりに凍える子どもはいない。どうしようもない空腹の夜はない。

そうならば。おれの狂った胸のときめきも、氷のように溶けるはず。

あの白い首筋に、尖らせた爪を立てて絞めたなら。そんな甘い夢を見る日はない。そんな物騒なことを考える人間は平和になれば、凍え死ぬように、いなくなる、よね？

早速ダーマで転職して防具やら武器やらを少々見直しておく。実にこれまで得物といえば剣一辺倒、つまり師匠の教えの発展系しか使えなかつたから、俺の得物は剣のままだが。

最初からゆくゆくはパラディンになりたいとか考えていたからな、その職にどう足掻いても真摯ではない俺がこれまでにまともに使った「その職らしいこと」といえば戦士の「かばう」くらいだし。

これからはパラディン固有の博愛スキルと盾スキルも磨かなくてはならない。これ以上転職する気もないしな。武器はもう、ずっと剣でいいだろう。ぶっちゃけ俺が剣をふるうことなんてマテイカの三分の一以下だろうが。

とつとと「仁王立ち」を覚えて、仲間たちへの全ての攻撃をシャットアウトだ。それにはしばらくかかるだろうが、俺は努力を惜しむつもりはない。

「さて、次は『女神の果実』のことについてです。『黄金に光る果実』を知らないか、見たことはないか……手分けして聞き込みをお願いしますね。実物はご存知の通りですから、聞き方はなんでも構いません。情報は、どんなに些細なものでも構いません。

ええと、それでは城下町の方を二人、城の方を二人で分けまして……」

「アーミアスさんはお城の方をお願いします！」

「城下町はこのガトウーザとマテイカが参ります！ いいですよ、

少年！」

「う、うん……」

口々にそう言われる。兄妹が率先して分かれるのは珍しいが、メルティーも異論なく、むしろ元気よく頷いている。マティカは流されたようだが。行きたいほうに行つていいんだぞ。

「グビアナ城はなんとというか、いけませんね！ このガトウザ、妹と姉妹であればと悔やんだのは初めてですよ！ 非常にけしからんですね」

「兄さん！ 清らかなる天使様に向かつてなんとという世俗的な物言いですか！ ただ単に、遙かなる空におわす尊き方にこの暑さはひどすぎるだけでしよう！ お城の中であれば水も引かれていて、日光も遮られ、少しは涼しい。それ以上に何かあるでしょうか！ ありませんね！」

「しかし少々女官が多すぎると兄は思います」

「そうですね。そうですね。兄さんが単に初心すぎる、それ以上に何かあるわけもないのです」

「生粋の教会育ちですからね」

「そういうことにおきましよう」

芝居のように次々と言葉が交わされる。つまり、二人は暑さでへ口へ口になつた俺を見て心配してくれているつてわけか。なんて気遣いのできる……とはいえ外は暑いだろうに。ガトウザとマティカこそ暑さで倒れたらどうするんだ！

「ご心配なく、城の中では精霊をおいそれとけしかけてはなんらかの攻撃を疑われましようが、街中であれば少しはごまかしがききます。ええきつと。」

少年と私は水の精霊や風の精霊にお願い申し上げて大変涼しく過ごしますので大丈夫です。ええ、きつとグビアナの真ん中でエルマニオン地方にいる気分を味わえることでしょうか」

「えるまにおん？」

「雪国の一地方ですよ。砂漠のグビアナ、吹雪のエルマニオンです。エルシオン学園の近郊ですね」

「えるしおんがくえん……?」

「ええ、まあ、学校です。寄宿舎学校です。名門私立のね」

「きしゆく……?」

「わかりやすく言うならば寮です」

「りようつて?」

「……私は今、セントシユタインの教会に失望しています。誰しにも開き、教えを説き、学びを与える気はなかったというわけですか。これだから教会は……」

まあでも、わざわざ教えられでもしない限り知らないだろそんな言葉。エルシオン学園はセントシユタインからすごく遠いしな。

マテイカを見る。まだ幼い少年と言っている。もちろん、旅人をしていておかしい年齢かと言われると、ルイーダの酒場に登録可能な十六歳を超えているのでおかしくはないのだが、成人済の姉弟が隣にいて、百歳を超える天使から見れば幼い子どもだ。

トントン拍子に残りの女神の果実が見つからない限り、エルシオン学園にもきつと聞き込みに行くだろう。その時、初めて寮生活をする同じくらいの年齢の子どもたちを見て、マテイカも学び舎に入りたいとか、思うのだろうか?

エルシオン学園では様々な戦闘技術をも学ぶと聞く。俺のように、いくら師匠から指導を受けてきたとはいえ皆伝したとは到底言えない剣士から学ぶよりもベテラン講師から学びたいと思うかもしれない。俺は剣スキルを極めたが、師匠の元で極めたわけじゃないからな、我流が過分に混じっている。純粹に王道で正統な剣術を学びたいかもしれない。

もちろん、剣でなくても新しい武器に興味があるかもしれないし。斧とか、ハンマーとか、格闘技も。バトルマスターとして高みに至りたいなら、俺の元にいるのはもはや足踏みだろう。

俺は全ての幼き神の子らの幸せを願っている。そうだ、マテイカも、メルテイーも、ガトウーザも、旅をしてくれるのは得難き幸せだ。いつか、別れは来る。別れ、笑顔で送り出す日が。

三人とも若い。まだまだ元気だ。だけど、別の別れも……。

ああ人間になりたい。人間になって、それで、それならばごく普通の別れも、俺の方が普通に先に死ぬかもしれないしそこまで寂しくないかもしれないのによ。

「ともかくお任せ下さい！ 如何に砂漠の太陽が強くとも吹雪にして差し上げます！」

「ほどほどに、体調には気をつけて」

「もちろんですとも！ ああなんて私めを気遣ってくださる優しい言葉でしょう！」

まあ、今は大丈夫かな。ともかく情報を集めなくちやな。もしかしたらここにはなくて、エルシオンにはあるのかもしれない。早く七つ集めなくては。きつと師匠も気を揉んでいるはずだ。

メルティーを伴って城に入る。黄金の果実のことを聞き周りながら、色んなところで「ワガママな女王様」の話聞く。

女王様、ねえ。

身分の高い人間。黄金の果実を手に入れられて、献上されるかもしれない人間。

話を聞きに行く必要があるかもしれない。

メルティーも同意見なのか、涼しい目を凛々しくさせて、杖をぐつと握りしめていた。

73話 捕獲

さて、城の侍女やら兵士やらに話を聞いておおよその情報は集まった。「黄金の果実」を持っていそうな人物がひとり、見つかった。サンマロウからそう時間をあけずに次の女神の果実のありそうなところを発見した。その点においては俺は幸運だな。

だが不運なことに、相手がグビアナ女王、ユリシス女王だったってのがなあ。

もちろん、この国で一番偉い彼女に、ただの旅人が謁見を申し出て簡単に叶うかわからねえし、叶ったところで俺の言いたいことは「黄金の果実の果実を持ってますね？ 実は俺たち、それを探してるんで、ください」だ。

どう考えてもふざけてるとしか言えねえな。そんな話、まともに聞いてもらえるとは限らない。しかも話を聞いて貰えたところで、望みの返答になるかどうかなんでもっとわからねえ。

何故なら、俺は「黄金の果実」より人間たちにとって価値がありそうなものを持ち合わせていないのだから、向こうの善性やら迷惑やらに運良く沿わなきゃどうやって譲っちゃもらえないだろう。

俺だって、できることなら正当な対価を渡して穏便に交換したいが。仮に金払って何とかなるなら稼ごうと思うが。今回、金銭的な話では向こうは一国の主で、俺はしがない旅人だ。到底どうにかなるとは思えない。俺の持ち物で人間的に高価だと言えるものはなにかあるか？ あるわけない。俺たち天使にとって大事なものは、人間にとって一切価値なんてない。

なんせ星のオーラは人間に見えないんだからな。俺にも見えねえけどよ！

まあ、星のオーラよりも俺の脳みそに刻み込まれた愛しい人間たちの成長記録のほうがよっぽど価値があるんだけどな！ だがこっちは取り出して見せられないとききた！ まったく困ったもんだぜ！

その中でもお宝中のお宝、この世で最もペロペロいリツカたんのキュートな成長日記はもちろんプライベートの問題があるから永遠

に門外不出だしな！ ノートに書いてる分なんて生易しい、本当のリツカたん成長日記は俺の頭の中にしかもはやない！ 文字なんてものは完璧に記録できないからな！
ともあれ。

あー、要求された物によつては一旦天使界に戻って誰かの知恵を借りるってことは出来るか。それくらいしかどうにもなんねえし……それにしたって、そもそも相手がある程度交渉に応じてくれなきゃ意味は無いけどな。

とりあえず玉座の間に向かつてみるか。さつきもちらつと通り抜けたわけだが、その時は彼女は沐浴で不在だったし、そろそろ戻っていてもおかしくはないだろう。だめなら大臣らしき人物にどうにかなんとか取り次いでもらうとして……。

「あら、なにか少し、騒がしいですね、アーミアスさん」
「そうですね。先にちよつと見に行きましょうか」

階段を登る前に静かなはずの城内に場違いな騒がしさを感じて俺たちは見回した。侍女がひとり、あつちこつちを忙しなく見回している。下のほうを見て、呼びかけるように声をあげて、明らかに何かを探しているような。

「あの失礼、どうかおなさいましたか？」

「ああどうしよう……」

「あの？」

相当彼女は焦っているらしく、声をかけて二度目でやつとこちらを向いた。幼き人間の中でも年若い、おそらくはまだ新人の域を出ないような子だった。マテイカよりは年上だろうが、メルテイーよりは年下だろう。

「ああ、旅の方ですか。どうぞお気になさらず……」

「気になってしまいますよ、そちらこそお気になさらずに。困った時は……そう、お互い様です。何を探しているんですか？」

メルテイーの穏やかな言葉に彼女は少し落ち着いたようだった。

「ああ、私、私、ユリシス様の大切なアノンちゃんを逃がしてしまっただんです……」

「アノンちゃん……失礼、女王のペットかなにかなのですか？」

「ええ、ユリシス様の唯一の家族と言っていていくらい仲の良い……小さな金色のトカゲなんです。リボンを巻いた……」

「それは大変でしょう。俺たちも探すのを手伝います」

彼女はこつちを見た。俺は強烈に嫌な予感を覚え、それが的中するまでの時間の猶予が一瞬しか無かったことを悔やんだ。

嫌な予感。つまり、うぬぼれでもなんでもない、やっかいな天使の権能。勝手に命名したのは「オート天使バレ」。天使の能力を失って星のオーラが見えなくなるならこつちもきれいさっぱりなくなつてりやよかつたのに。

「ああー。ありがとうございます！ 旅の方、あなたはまるで、」

俺はぐつと奥歯を噛んだ。

「天使様のようですね！」

ああ。何がいけないのか。砂漠のど真ん中でも屋内ならばプラチナの兜をすっかり被っておくべきなんだろうな？ 俺の首から上のどこからオート天使バレ成分が出ているのかわかんねえけど、一回バラして調べるべきか。それともオート天使バレ経験者であるメルティーとかにあとでこつそりどういうところで俺のことを天使だと、ぴんと来てしまったのかしつかり聞いておくべきなのか……。

「なんてこと！ 天使様に天使様のよう、なんて……」

咄嗟に暴走しそうなメルティーを止めた。侍女に向かっていきそうに、俺の前に立った彼女の腕をぐいっと引つかむなんてわりと乱暴だが、ここで騒いで「気難しい女王」の耳に城内でうるさい旅人の話が入ってしまう、というのは勘弁願いたかった。本当にすまねえ。

メルティーはとてもいい子で賢い子だから、すぐに意図を察して口を閉じてくれた。

「では、ええ、そういうことで。早くアノンちゃんが見つかるように祈っています。俺たちは……そうですね、もしかしたら見落としがあるかもしれませんが。城の外を見てきます」

不審な行動を誤魔化すためにメルティーの腕をつかんだまま引いてそのまま城から出た。

城の外周、日陰に入ってからやつと、つかんだままだったメルティ어의腕を離した。

「大変申し訳ございません。メルティー、痛くはありませんでしたか」「いいえ！　いいえ！　そんな、痛くありません！　こちらこそ大変申し訳申し訳ありませんでした！　アーミアスさんの意図を理解できないなんて私は……」

「どうかお気になさらずに。城内で騒ぐわけにはいかない。それだけのことです。メルティー。」

今はええと、アノンちゃんを見つけようが優先です。見つけることができれば、あの侍女も安心でしょうし、大切な家族の行方が知れなければ女王も不安でしょう。それに、打算的ではありませんが、女神の果実を持つ女王に謁見することも叶うかもしれないから」

メルティーは杖を……恐るべき力で……しっかりと固められている土の地面にぶつ刺すと、地面に片膝をついて祈り始めた。動きがもう、見事にガトウーザと一緒に……。

「ああ！　なんて寛大なアーミアスさん！　私は一層精進致します！」

メルティーにはじつくりオート天使バレはどうやって感じ取ったのか聞きたいが、今は小さなトカゲを探すが先だ。家族の行方がしれないならどんなに気難しい女王でも不安だろう。はやく元の場所に戻してやらないとな。

そのへん暑くい上に乾燥していてかなわないが、小さいトカゲくらいが隠れられそうな場所くらいはある。そのへんに潜り込んでいるならば見て回ってもなかなか見つからないかもしれない。

小動物の搜索は……正直なところ守護天使として人間に見えない前提だった故にあんまりない。失せもの探しは割と得意なんだが、生き物を気づかれずにそと返すというのは至難の業だし。

だが今は違う。素直に探せる。つまり、音を立てることが許される。

俺の声も、俺の動作も、気のせいやラップ音扱いではないのだし。最初はトカゲの名前を呼んでみようと思って、はたと思い当たる。

ここは城の外だ。あの侍女にとっては今回の件は「失態」だろう。それをわざわざ宣伝するような行動は避けたい。健気に職務に従事する幼き人間が可愛いのは当然のことだな！

一生懸命に働く人間……尊い。ペロさまで感じそうだな。いいや！俺にとつての唯一ペロ神体はリツカたんなんだけだな！ それはそれとして俺は人間大好き天使だからな！

ともあれ、動物つてのは基本的に音に敏感だ。びっくりしたら姿を見せるかもしれねえ。俺の脳裏には原っぱで茂みにがさつと足を踏み入れてバツタをびよんぴよんさせる遊びをしていた子どもがいた。あんな感じに。

パン、と手を鳴らしてみた。

メルティーがビクつとした。だが何も出てきやしない。ここはハズレか。

場所を移動し、またパンパンと手を鳴らす。メルティーがとことこついてきて何事かと俺の手元を覗いた。

そんな俺たちの足元を小さなリボンを巻いた金色のトカゲが駆け抜けていく。

「あっー！」

「見つけましたねー！」

てかすばやい。上に小さい。たしかに人間たちがかわいらしいと思いきや、そんなフォルムだ。捕まえにくそうだが幸いここには二人いる。挟み撃ちすればなんとか捕まえられるか！

逃げるトカゲにメルティーが手を伸ばす。怖がるように方向転換して走っていく。だがその先には俺がいるわけだ。潰さないように気をつけつつもするっと抜けられてはかなわないので注意しやすい両手で掴んだ。

「さあ、急いで戻りましょう！」

人間の体の構造ならば学んできたが、トカゲにとつて何が良くて何が悪いのかは知らない。彼……彼女……彼、か？ 彼にとつて悪い結果にならないうちに家族の元に返さなくては。

布で包んだ方が良かったか、それともこのままがいいのか。何も分

からないのでとつとと行こう。リボンを巻いた可愛らしいトカゲはなんとも恨めしく俺を見上げていた。

俺は、そのトカゲがしつかと掴んでいた黄金の果実に気づいていたが、女王の家族から許可もなしにもぎ取る訳にもいかなかった。

74話 無理解

階段を上る前にあの侍女を見つけた。泣きそうな顔をした彼女に捕まえたトカゲを見せると、ほつとようやく肩の力を抜いたようだ。「旅の方、ああ、ありがとうございます！　これでユリシス様もきつとご安心されます！」

ああ！　申し遅れました。私はジューラと申します。名乗りもせず探すのを手伝っていただいて……大変失礼しました」

「いえいえ、お気になさらずに。アノンちゃんは……貴方にお渡しすれば良いでしょうか？」

「……私はこの通り、アノンちゃんを逃がしてしまいましたから。そのまま大臣の元にお届けください……。もちろんお取次ぎします。こちらへどうぞ」

そう言い、すっかり自信を失った顔をして、俯いちゃった。

俺はユリシス女王の人となりを俺の目で判断したわけじゃねえから何とも言えねえけど。こんなに主君のことを思いやれるなんていい家臣なんだろうとは思うんだが。健気で働きの女の子はすべからくかわいい。こんなに他者のことを思いやれる人間は尊いものだ。多少の失敗は俺が手伝ってなんとかやりてえ。やっべ、こんない子を見てたら俺の天使リツカたんに会いたくなってきたぜ。

ジューラからはそこはかとなくリツカたんみを感じる……。ペロリテイの高さが将来を期待させる素晴らしいポテンシャル。いい子だ。「メルティー、町にいるガトウーザとマティカを呼んできてくれませんか。大臣と話している時間もあるでしょうから間に合うでしょう」「はい！　わかりました！」

優雅に頭を下げたメルティーが足早に出ていった。

うまくいけば謁見出来るかもしれないなら呼んでおいてだな。ダメならダメでそれまでだが。……ここに女神の果実があるのがわかってる以上、引き下がれないからな。なにがなんでも謁見してもらえなきゃ非合法的で人間たちにも俺たちにも優しくない方法をとることになっちゃうが。

俺はそんなことしたくねえ。だがそうは理が許さねえ。天使の理をだましましたししながら天使界にもどり、人間たちに姿が見えない健全で一般的な天使に救援要請して盗み取つてもらうとか、やつちまうだろうから。まあそれは時間的猶予があればやることだが……今晚、いや今すぐ黄金の果実は食べるから！ とか言われた場合は一体どうすればいいんだろうな？

そんな最悪のパターンを考えておく。ジューラに連れられて玉座のほうに向かいつつ、グビアナの近衛兵たちをちらりと見る。甲冑姿の女兵士。しつかりと鍛えられているようで、一糸乱れぬ構えに伸びた背筋。職務に忠実なのは好ましいことだ。いい子たちだなあ……。

そうじゃねえ。つまり怪しいことは見過ごさず、しかも強そうってことだ。駄目じゃねえか。一方、俺はただの駆け出しパラディン。旅芸人や戦士の時はひたすら剣スキルしか上げてなかったから、経験してきたノウハウは「かぼう」以外はほぼ皆無。

パラディンのくせに剣を使うってことは意表を突くのに役立つかもしれないねえが、そもそも剣を帯びている俺がパラディンだつてことのほうが意表をついている。そう、盾持ちだし戦士かな？ と思つたら練度の低いパラディンだった。うわぎっこ。俺捕縛。はい終わり。つて感じだろ。

ああ、黄金の果実をここでかすめ取れたらいいんだが。おそらく不機嫌な女王が、いくら愛しの家族が帰還したからって完全に不安から解消されるわけでもねえし、黄金の果実をなくしたつてジューラが罪に問われたらと思うとどうにもできねえよなあ。

きちんと女王の目の前で返したうえで、頼んで、交渉して、駄目なら手段を問わずに奪い取る。うう、ほかに思いつかない……。

あー、仲間たちの手は絶対に汚させないのももちろん大前提で。罪に問われるのも、白い目で見られるのも俺だけでいい。天使が人間界の安寧を守るために女神の果実を集めてるんだからな。人間に犯罪行為を頼んじや本末転倒になつちまう。……ぶっちゃけ違法行為の理由を説明したら手段を問わなそうな仲間たちではあるんだが……たまたまそういう仲間たちってだけで、やらせる気はない。これから

もだ。

だが、なんにせよ、無理だ。手伝ってもらったとしても正面突破なんて無理で……だが女神の果実を放置するのはいろんな意味でもつと無理だな。

すべてがただの杞憂で済めばいいんだが。

いざとなったらこの身を犠牲にしても果実を……手にさえできればこっちのもんだよな。サンデイに託して届けてもらうとかできねえかな？ 彼女は相変わらずバイトのテンチョーとやらを探して基本的に別行動だから今すぐ伝えるつてのは無理なんだが……。呼べば来るだろうか？ 呼んだこともないんだけどな。

まともな策が浮かぶ前に取り次ぎは終わってしまった。しつかと捕まえていたアノンちゃんを専用のクツシヨンに降ろす。彼女……彼？ 彼はかなり不満げに見えた。可愛がられてるみたいだがそれはそれとして外に出たいのかね？ そのへんは家族間のコミュニケーションを上手いことはかってほしいものだが、トカゲの言葉はちと天使には専門外なものですまねえ。

大臣はアノンちゃんを見てそれはそれは安心したようだ。

「旅の方、本当にありがとうございます。女王も安心されることでしよう」

「いえ。それは構わないのです。ところで、一つ頼みたいことがあるのですが」

「あなたは恩人です。何なりとは言えませんが、かなえられる範囲であればお聞きいたします」

「では女王ユリシス様に謁見させていただけないでしょうか。このアノンちゃんが……しつかりと握りしめている黄金の果実。俺はこれを求めて旅をしているのです。であれば、女王に求めるのが正道でしよう」

怪訝な顔をされたが、いい。大臣は謁見をかなえてくれることを約束してくれた。女神の果実を譲れるかどうかは女王の心次第と釘も刺されたが……仕方ねえ。

女王が帰ってくるまで俺は城の一階で仲間たちを待っていること

にした。

「アーミアスさん、ただいま戻りました」

「はい。おかえりなさい。女王との謁見が叶うそうですよ。待っていきましょう」

パラデインに転職なさり、新調した魔法の武具が大変よく似合っていらつしやいます。静謐なる騎士……そしてまばゆい天使のかんばせ。メルティーの話では女神の果実は女王の家族のトカゲが持っているのを確認したとか。私めが女王なら天使さまが望むものならばなんでも差し上げてしまいそうですね。

ええ、はい。天使さまが望まれているのに断るなんて道理は地獄の果てでも通用しないことでしょう。この世に価値観は数あれど。とはいえ、相容れない価値観の持ち主というのはいつの世、どこにでも存在するのですからアーミアスさんの手に女神の果実をそろえきるまでは油断せずに。

聞けば、女王はかなりわがままな方だとか。美しさをも讃えられておりましたが、こと美しさという点に関しては本物の、天上の美が地上におわす以上、本当に些細なことです。人間の範疇の美しさが、聖書や壁画、石像として称えられた天使さまにかなうはずもありません。しかも本物の天使さまは人間の想像よりも美しいのですから。

気になるのはわがままな方であるということ。あの女神の果実と
いうのは……私にはよくわかりませんが、おいしそうなんですかね？
今までの被害者たちは結構な確率で食べていたような気もします。
そして高価そうに見えますし。なんせ黄金の輝きですから、成金ども
なら目の色を変えそうですし、私欲に私腹を肥やす連中がいかにも好
きそうな感じです。

私は「天使さまのおわす世界からアーミアスさんと共に地上に落ちてしまった神の恩寵」だと分かっていますから神聖な気配や強大な力こそ感じとれてもそれまでなんですけどね。精霊たちがざわめいて、

決して口にするな、なにも願うなど口をそろえて警告しますし。人間ごとき、地上の生命ごときの手には余るものなのでしょね。

「女王が戻られました。こちらへどうぞ」

「はい。ではみなさん、粗相のないようになさってくださいね」

アーミアスさんがおっしゃるならば清貧な神父のような顔をして大人しくしておりますとも。

「女王陛下、ご機嫌麗しゅう」

アーミアスさんが笑つ……いえ、もちろんリツカさんに見せるほど明るいものではありませんが。ちよつと微笑まれるだけで私どもはうれしいのに。社交辞令、社交辞令です。アーミアスさんが社交辞令できないはずはありません。それだけのことです。

「ユリシス女王様、この者がアノンちゃんを見つけた旅人のアーミアスとその一行でございます」

アーミアスさんが目的のためとはいえ、微笑んで挨拶なさったので私は頭を下げながらもアーミアスさんから目が離せません。メルティーもマティカもです。私どもはある種の護衛として雇われているので当然のことですね。依頼主を守ろうとしているのであって、それ以上の何かではない。つまり、問題ありません。

このガトウーザ、すつかりよそ行き笑顔がどっかに吹っ飛んでいきました。問題ありません。なにせレンジャーですので、僧侶ではありませんので、清貧な神父のような顔をするなんて無理があります。突然暴れださない程度のレンジャーとしてここにおります。

「ふうん……」

女王はいかにも興味なさげ、と。こちらを見もしません。

「この者たちは黄金の果実を得るために旅をしているとか。アノンちゃんが持ち出していた黄金の果実をぜひ譲ってほしいとのことですよ、女王様」

女王はちらりとトカゲを見ました。果実をしつかと隠そうとする様子を見て、本当に興味のない様子でジーラが持ち出したのではありません。かつたのね、とつぶやきました。

ジーラさんは大変真面目な方ですし、そんなことをなさるとは思え

ないのですが。すっかり目が曇っておられるのか。私は先ほどまで城下町で聞き込みを行っておりました。グビアナは砂漠の国。水が大変貴重です。であるというのに、女王は貴重な水を沐浴に大量に使い、無駄にしていると思えないという不満が多く聞こえました。

民に目を向けず、豪遊し、……利権に目がくらんでいないのは彼女がすでに最高権力者だからにほかなりません。

「そう。わたくしに黄金の果実を譲れとおっしゃりたいのね。そんなことを許すはずないでしょう。黄金の果実はこのあとスライスして沐浴場に浮かべると決めたのだもの」

ユリシス女王は興味なさそうにようやくこちらを見ました。正確には、アーミアスさんを見ました。

玉座から降り、アノンちゃんと黄金の果実を抱き上げた彼女は眉を上げました。

「……あなたが見つけたの？」

「俺と、こちらのメルティーを見つけ、捕まえたのは俺ですが」

「あら、あなた男なのね」

「ええ、それが、なにか？」

アーミアスさんの口調は優しいのでどんな言葉遣いでも心地よく響きます。

「女なら沐浴場に招待くらいはしてあげようかと思っただけ。あなたの探している黄金の果実が有効活用されるのを目の前で見るくらいは許してあげてもよくなってよ。でもあなた、男なら駄目ね。」

さあアノンちゃん。お外に行つて汚れちゃったかもしれないわ。一緒にお風呂に入りますようね」

好意を踏みにじり、あまつさえ目の前で探し物を破壊する様子を見せつけるのがいいことだと言わんばかりに。天罰が下ればいいのですが！ 私が天罰となつて下ればいいのでしょうか！ 雷の精霊をけしかけてみましょうか！ もちろん、アーミアスさんが望めばの話ですが！

唇を噛み、何も言えない様子のアーミアスさん。さすがに想定外だったのでしよう。女王はそして、侍女を連れ立って沐浴場に行つて

しまったのです。

振り返り、俯いたアーミアスさんは、小さな声で止めないといけません、とおっしゃりました。どうなるかわかりません、と。

止めないと。でも、どうやって？

「気は進みませんが……沐浴場に押し入るしかありませんね。女神の果実を何かの拍子でだれかが口にしたり、なにかを願ってしまい、惨劇が起こる前に。一階の入り口は兵士がいるでしょうから……ほかにどこか」

どこか。アーミアスさんが願っているのです。私も願います。精霊に、解決策はないかと、尋ねます。口を開く必要はありません。私の心のうちは常に読まれているので。

『屋上からなら入れるけど、飛び込んでいくのかな、守護天使』

『そうそう、水を引きこんでいるところから流れに乗っていけばいいんじゃない？ 守護天使なら多少の高さから落ちてでも大丈夫』

『ガトウーザは人間だから一緒にいったらダメだよ』

『風の精霊が受け止めたらいんじゃない？』

『ほかの人間、守護天使が飛び込んだらびっくりするんだからその時に正面突破すればいい』

『邪魔な人間を燃やせばいいんじゃないかな』

『ガトウーザ、やってあげようか？』

『ガトウーザをくれるなら全部やってあげる。精霊の目をちようだい。ちよつと貸してくれるだけでもいいんだよ。そしたら』

『全部助けてあげる』

『ちよつとだけ貸してくれるだけでいいんだよ。目を失うこともない』

レンジャーになった私には過度な誘惑を払いのけることができありません。以前の私ならどこでうなずいていたかわかったものではありません。メルティーが手を引っ張ってくれなくてもどこかに迷い込んでしまうこともあります。

貸したら、貸している間しばらく目が見えないではありませんか。あんまり耳を貸すものではありません。

「アーミアスさん……どうやら屋上の水場が沐浴場につながっているようです」

「……なるほど」

「あの高さから飛び込んでも、アーミアスさんならきつと無事です。私たちは騒ぎになれば一階から突入できるはずです。そう精霊たちが言っています」

「ありがとうございます。時間がありません。決行しましょう」

そうして、私たちは二手に分かれました。

心配しなくても空から落ちてても生きてたんですよ、とアーミアスさんは微笑みました。

75話 遠水近火

果物ナイフがきらきらと輝く黄金の果実を薄く切り取る。優雅な手つきの従順な侍女は女王様によく見えるようにそれをひとつ、ひとつと水面に浮かべていく。

あんなに美味しそうな果物をただ食べるのではなくて、肌の潤いの為にたった一回の沐浴に使うだなんて、相変わらず女王様は贅沢三昧なお方。

でもそれだから今回、彼女にかしづく私たちにも多少は恩恵があるってもの。ワガママ放題の女王様に仕えているんだからそれくらいの恩恵がなくちゃ。

せつせと動き回る侍女なんてまるで目に入らないで、アノンちゃんが気持ちよさそうに泳いでいるのを目を細めて眺めている女王様。普段から人間に対してもそういう態度を見せるなら少しは可愛げもあるのに、口を開けばワガママばかり。贅沢三昧。

若くして先王を亡くして家族を失い、ひとりになった女王様を同情していた人間も愛想が尽きるってものよ。……ジューラは全然変わらないけれど。

だけど、馬鹿なくらい真つすぐなあの子と違って、従順に気に入られるようにしていれば、グビアナで食うに困ることもないでしょうし、あの子みたいにどんくさくなければうまくやれるはず。

ただ少しの忍耐と、贅沢を見せつけられながらワガママな理不尽にさえ耐えられるなら。それだけのこと。先王の時代はそんなことを考える必要はなかったのだけど。

「アノンちゃん、黄金の果実はとても綺麗でいい香りね」

そつと愛しげに小さなアノンちゃんに話しかける様子は年相応なのに。

ワガママな女王様について考えていても仕方がない。それよりも手を動かさなくっちゃ。果実が沐浴場にきれいに散らばるようにそつと水をかきまぜないと。決して目立ってはいけない。気難しい女王様には私の名前だって知られないほうがいい。私は女王の侍女

の一人。それだけでいい。

そういえばそのアノンちゃん、黄金の果実を持って城の外に行っていたけど、そんなにこれを食べたのかしら。確かにとってもキラキラしていて綺麗だし、美味しそうといえば美味しそうだけど……見ている分には綺麗だけど、なんだかキラキラしすぎて怖いようにも思う。この世のものじゃないみたい。トカゲの目には私よりご馳走に見えるのかしら。

そんなことを考えていると、どこからか、この優雅な沐浴場にふさわしくない騒がしい声が聞こえてきた。叫び声とも言い争いともつかない声。

いったいどこから聞こえるっていうの？ 石を積まれた壁は分厚く、入口の扉は部外者の立ち入れぬように閉ざされ、外には不届き者が出ないように複数の兵士が見張りについているはず。だから今までこんなことなかったのに。女王様も不審に思われたのか苛立らしそうに周りを見渡す。

「……なにか騒がしいようね？」

イライラと女王様が言ったその瞬間。

影がさす。

ザパン、と派手な水しぶきを立てて上から降ってきた何か。落下してからも派手に水が吹き上がるほどの大きな衝撃。……上から？ まさか、上からなんて！ 確かに城の屋上の水場と沐浴場はつながっているけれど、あんな高さからなにかが落下したっていうことになんて危険な……！

着地した「それ」はおもむろにゆらり、と立ち上がる。見れば、「それ」は人間。私は沐浴場を侵入者の血で汚してしまえば女王様の機嫌を損ねる！ ということに思い当って、慌てて「それ」を見たものの、奇跡的に血を流してはいない様子だった。

沐浴場が汚れなくてよかった、といったん安堵したものの、その性別不詳の侵入者はびしょぬれになりながらもよどみない足どりで女王様につかつかと歩み寄ったものだからたまらない。あんな高さから落下したのにまったく怯んだ様子もないのも、つまり相応に鍛えて

いるということか、前々からあの高さから落ちる準備をしていたということ。

ああ、これ以上女王様の機嫌を損ねたら何人かの首が飛んでしまう。だけど、止めようと思っただのに、侵入者の顔を見た瞬間に固まっってしまった。彼、彼女、顔を見ただけでは性別のわからないその綺麗なひとは、それはもう、大変な気迫で話すものだから。

落ちるときに怪我をしないようにか、侵入者は随分な布の軽装で、布や髪が張り付いているのを邪魔そうにぐいと払って。

「大変なぐ無礼を働いていることは承知の上です、ユリシス女王。沐浴中に俺のような者が乱入してくるのは悪夢ごときことでしょう。俺も女性の沐浴中、このような強硬手段に出ることは恥ずべきことだと考えます。」

しかしながら、緊急を要する事態であることも事実。端的に申し上げますと、『黄金の果実』を使用するのを防ぎに来ました。食すること、何かを願うこと、力を得ようとする。全て危険です」

「あなた……随分大胆な手段をとったものね。そこまでして黄金の果実が欲しかったなんて。でも残念、もう果実はスライスして浮かべちゃったもの」

「……嗚呼」

スライスされた果実を見た彼……のはず……の目が大きく見開かれる。まだ少年と言っても過言でもない彼は慌てて目の前の果実に手を伸ばそうとして……。

ぴたりと手を止めた。彼の視線を辿るとアノンちゃんがスライスされた果実をぱくんと飲み込んだらしい。

「待っ……！」

「きやあああああ！ アノンちゃんが！」

視界を埋め尽くす白い閃光。女王様の悲鳴。何かの衝撃で水がざぱんと吹き上がり、何かに吹き飛ばされ、大きな影が女王様へ向かう。どおん、と重しい地響き。

光が晴れたところにはそこには金色の大きなトカゲ、いいえもはや巨大なドラゴンがいて、首にあの、アノンちゃんのピンクのリボン

巻いた姿で女王様を巨大な手で引っ掴んだ。

「黄金の果実は使用した存在を変化させます！」

降ってきた少年は叫ぶ。その瞬間、入口の扉が破られ、二本の剣を背負った金髪の少年が弓矢のように素早い身のこなしで飛び込んできた。続いて女の声が呪文を唱えているのが聞こえる。

「メルティー！　呪文は女王に当たります！　待って！」

「アーミアスさん、剣を！」

「アノンちゃんは女王に危害を与えようと……？　すみません、まだ判断できませんが！」

金髪の少年が剣を差し出す。応えて剣は抜かれ、そして侵入者はアノンちゃんに斬りかかろうとして……。

ドラゴンは大きく跳んだ。井戸へ巨体を器用に曲げて、素早く。女王様を攫って。

剣を抜いた少年は勢いそのまま井戸へ駆け寄り、追いかけてようと飛び込もうとするのを遅れてやってきた男に必死に止められていた。

黄金の果実は、食べた者を化け物に変える悪魔の果実だった……？

一番近くでアノンちゃんを見ていた私は震えるばかりで、攫われた女王をいい気味だ、もう帰ってこなければいいのにと噂する他の侍女の声がどこか遠くに聞こえているみたいだった。

「女王様の悲鳴が聞こえたのですが、これは、なにがあったのですか……？」

「ジーラさん」

俺は突入のために外していた防具をガトウーザに預けていたので急いで着込んでいた。着ていた服はぐしよ濡れでもものすごく動きにくかったので人目はあつて申し訳ないが脱ぎ捨て、適当な予備の服を鎧の下に着込む。脱いだ時に傷跡まみれの背中を見られた瞬間ガトウーザやメルティーの瞳孔がくわつと開いたが今は緊急事態。だから何も言つてこないようだ。

背中。背中といえば翼を失ってズタズタのところをやべー天使による追い打ちをくらった場所だ。ものすごく見た目は見苦しいが、だからってただそれだけなんだが、天使信仰に篤く熱狂的な信者的には見過ごせないのかもしれない。あとでなんと言われても俺が翼を失った時についたとしか答えられないのが情けないところだが、別にもうなんともないし……。追撃の話は恥ずかしいからやめておこう。醜聞すぎる。

なお、相変わらずマティカはいい子なので無表情だ。俺はなんにも見ていない。口がどうしてどうしてと動いているような気がするがどうしてもこうしてもない。

ま、天使の始末を天使の間でつけられなかった情けなさはあるけどな。俺はまだまだ見習い天使の範疇だから逆らえなかつてところもなかなか情けない。師匠くらい強ければ追撃は受けずに済んだからな。

「黄金の果実は、使用した存在を変貌させてきました。アノンちゃんも同じように。金色のドラゴンに姿を変えたアノンちゃんは女王様を連れて地下水路へ姿をくらませたのです」

「なんてこと……女王様は、父君を亡くし、ひとりぼっちで、誰も信じられなくなつて、それでも唯一心を開いていたアノンちゃんにも……」

「追いかけます。黄金の果実を取り戻さなくてはなりませんし、地下水路では女王様も危険でしょう。それに黄金の果実を使用した者は……正直なところ、半数以上が好戦的でした。今のアノンちゃんは危険です」

「お願いします！　女王様が立ち直れなくなってしまう！」

ジューラはいい子だ。ワガママなユリシス女王を心底思つて言つている。美しい主従というべきだ。なんだ、女王はひとりぼっちなんかじゃない。あのアノンちゃんが何を思つて女王を連れ去つたのかはわからないが……。

「ええ、必ずや」

メルティーが差し出してくれたプラチナの兜を被る。地下ならば

恐らく外のように暑さでどうこうなることは無いだろう。アノンちゃんはみるからにパワータイプだから防具はきちんとしておきたい。戦いにならなきゃいいんだが、悲鳴をあげた女王を迷うことなく連れ去ったところといい、あまり期待はできないか。

ともかく、これ以上何かが起こる前に。女王が無事であるよう祈りながら井戸のへりへ足をかけた。

閑話 成天使

(前略)本日はよく晴れていましたが、少々風が強すぎたようで皆さんの村人の洗濯物が吹き飛ぶ騒動となり、私はどうやって気づかれずに高い木の上に引つかかったシャツを投げ落とすのかを考えて……(中略)

おお神よ、感謝いたします天使が文面に記す定型文。アーミアスが特別敬虔だというわけではない。今日もリツカは元気に健やかで、毎日のように勤勉に働き、非常に敬虔で、祖父と二人で幸せに暮らしています。

一方、リツカより余程長く生きているはずなのにまだまだ未熟な私は、どうしてもリツカを気にかけてばかりです。いつか師匠に認められ、ウォル口村の次期守護天使になる身としては鼻根は良くないことはわかっているのですが、それでも大事なリツカの周りにいることをやめられないのです。

守護天使は愛しく幼い住人に対して平等でなくてはなりません。罪深い私はそうなることが出来ないのです。しかし、この日々を幸福だと感じています。

ですが罪深い私は願っています。愛しい人間たちと言葉を交換せたら。もしも見守るだけでなく、リツカと笑い会うことが出来たら。私がもし、(紙に裏うつりするほど真っ黒に塗り潰されている)

—アーミアスのある日の日記より

「おはようございます、リツカ!」

朝から真面目に宿の掃除をしているリツカたんにも声をかける。はありツカたん。今日も一段とはつらつとしてるな! おはようリツカたん! 真面目なりツカたんペロペロ! 返事? んな

もんじゃない。俺が天使でリツカたんが人間だからだ。なんてことだ！
世知辛すぎる現実がづらい。今すぐ、できるものなら翼をもぎたい。ああ人間になりてえ。夢の中でもいいからリツカたんとお話してえ！

もしかして、もしかしなくとも、この世で一番ペロリズムが高いリツカたんの方こそ本物の天使かもしれないが！ ああペロ！ 今日もペロっペロじゃないかけしからん！ けしからんからもっとペロペロさせてくれ！ もちろんリツカたんがペロペロけしからんわけだが、この場合最も罪深いのは俺がペロリストでリツカたんをそういう目で見ていることが、だがな！ セルフ天罰いつとくか！

おお神よ！ 天罰はリツカたんと同じ人間にするという手で手打ちになりませんか！ 翼を捧げます！ 光輪を砕きます！ それでいかがでしょう！ 俺にとってはご褒美にしかならないのが明け透けすぎなんだよなあ！

リツカたんの几帳面にきっちりバンダナをしているのがペロい！ バンダナの下サラサラまっすぐな青い髪がペロい！ くりくりの目がペロい！ 真っ白なエプロンがペロくってペロっペロ！ ……いけない、意識がリツカたん百パーセントになるところだった。それはそれで本望だが、それではいけないな。

ともかく、俺は朝から大好きなリツカたんを挨拶できたことでペロリズムが高まり、急性ペロ不足にならずに済み、嬉しくって嬉しくって、そのままリツカたんの宿屋や家の周りの枯葉とか枝とかのゴミを吹き飛ばしに行った。

そうだ、吹き飛ばす。そう、今の俺は風。そういうことにしよう。風だから人間の目の前で動かしても問題ない。やりやすいように箒を持つと多分浮いて見えるからダメなんだが……ダメなはずなんだが……待てよ？

今身に着けている俺の服とか剣とかは見えてないよな。失せ物探しで物を持ってても浮いてる！ って騒ぎになったことはないし。だが……やっぱりバレる気がするんだよな。俺の天使力が不足しているせいかな？ それとも、天使界から箒を持ち込めばあるいは？ 師匠

に聞かなくては！

なにはともあれ、今日もウォル口村は平和だ。村の外を空から巡回し、危険そうな魔物が増えすぎているかを確認、続いて村中を巡回し、誰かが困っていないかを探す。病気が流行る兆候がないか、争い事が起きそうになっていないか、はたまた失せ物に困っている人間や、日頃の何かに悩んでいる人間がいなかったかを探し回る。俺が助けられるのはほんのささやかなことだが。まあ、困ったことなんてないことが一番で、今日は特別なにもなくて俺は満足だ。

気づけば午後になり、ひと休憩をするために教会の屋根に降り立って腰掛け、そこからリツカたんの宿屋を眺める。小さな村だからそこまで客がひっきりなしに訪れるってわけにはいかないが、手入れの行き届いたいい宿屋だ。ぶっちゃけ世界一だよな……。ほかはあまりよく知らないが！

世界一キュートな看板娘であり、サイコーの宿の主のリツカたんは今日も真面目に働いている。それがあまりにもかわいい。つまりペろい。なんて真面目なんだ！ リツカたんのペロリズムが高いあまり発作が起きそうになるぜ。ペろ。

しっかりと落とさないように仕舞っていた日記を取り出し、今日のリツカたん観察記録兼日記をつけ、もう一度村をぐるっと回ってから俺は名残惜しく師匠の迎えを待った。俺の翼は見習い相応に小さいから、一人で天使界に戻るのには全然できないわけじゃないがちよつとばかり疲れるからな。上級天使の起こした上向きの風に乗って飛び上がれば簡単だ。だから、師匠はそのほうがいいと思いついて、迎えに来る。夕方くらいにだいたいくるから、それを待つことになっている。

一人で好きな時に帰ってこいって言われたらまあ帰らないけどな！ バレてんのか？

天使界にはなんとって、幼く健気な可愛い人間たちも、ペろペろペろいリツカたんもいないんだからな！ もはや天使界とはなんのために存在してるのか俺には理解できない。別に地上に住んでも天使的にはなんにも問題なくね？ 世界樹に星のオーラ捧げる時だけ帰

ればよくね？ 人間たちに近い場所に住んでる方がもつと守護天使
できるくね？ 世界樹に新たな天使が遣わされるのを確かめるため
に何人かだけ置いときやそれでよくね？

できるものならリツカたんの家から飛行一分の距離に住みてえな
！ むしろリツカたんのエプロンのポケットの中に住みてえな！

だめか。だめだな。邪悪なペロリストとして摘発されてしまう。イ
エスペロ！ ノータッチ！ 心の中は自由だが、実際行動するのはい
ただけねえ！ 破るやつは邪悪なペロリストであり、天罰の執行対象
だ。

ならリツカたんの家の後ろにテント張りたい……目立つか？ 目
立つな。なんなら野ざらしでもいいぞ。リツカたんと俺の距離は物
理的にも遠すぎる！

そんな叶いもしないことを考えながら、空を見上げると大きな翼を
広げた天使の影。師匠だ。師匠は教会の屋根に腰かけているという、
見ようによらなくても罰当たりな俺を見ても眉一つ動かさずに見習
い天使アーミアスよ、帰るぞ、と言った。

「おやすみなさい、師匠」

「師匠！ 本日の座学、よろしくお願いいたします！」

「おはようございます、師匠」

「師匠、天使界から何か物を持ち込んだ分には人間に見えないでしょ
うか？ 何を、ですか？ その……箒を。毎日守護地域の掃除までし
なくていいと？ そんな！ 俺は好きでやりたいのですが……」

「師匠、差し支えなければウォルロ村に一年ほど滞在したいのですが
……差し支えますか……では一週間、いえ三日は、……はい、もちろ
ん、俺は見習いなので、師匠の教えの通りに毎日帰還します」

「師匠、剣の稽古をお願いします！」

「師匠！」

毎日は目まぐるしい。やるべきことは多く、また物事は降ってわいてくる。特に弟子をとってからはそれが顕著である。我が弟子、見習い天使アーミアスは非常に真面目で勤勉で、守護天使としての知識欲にも学びにも貪欲だ。多少、人間への感情が強すぎるくらいがあり、行き過ぎているところは否めないが見習い天使が張り切っているのは微笑ましいことでもある。そういうことは成長とともに自らで見極めていくことであるので注意は控えている。

その努力ゆえに最年少で地上へ行くことが許され、見習い天使の身で守護天使に就任することもほとんど確定事項のアーミアス。実際、今も守護天使としての仕事はすでにアーミアスに移行している。そう、すべては私の裁量次第。オムイ様の許可も周囲の評価もすであり、ただ私がアーミアスにウォル口村の守護天使を名乗ることを許すとさえいえばそれで引継ぎは完了する。そうすれば私は本格的に師エルギオスを探すことができるし、アーミアスはより一層励むことだろう。

許可を与えていないのはひとえにまだ、いささか早すぎるのではないかと……ラフェットやエレッタには散々心配しすぎだと言われてしまったが……私が考えているからに過ぎない。

アーミアスは非常によくやっている。天使らしく、いや並の天使以上に人間を愛し、護るべきだと考えて慈しみ、人間について学び、日々剣の稽古に打ち込む。勤勉であり、村を見て回ることを苦にも考えていないようである。その身を投げうつほどに職務に打ち込み、まだ若いゆえか、多少臍盾をしようところはあつたものの、すべからず村人を守護するという精神は十分である。

ただ、若すぎるだけ。ただ、私が過剰に不安がっているだけ。わかつてはいた。アーミアスは、私の弟子は他の正式かつ見習いでない守護天使と比較してさえ、よくできていると。職務を引き継ぎ、立派に守護天使として働き、星のオーラをいっそう集めるだろうと。

ただ私が、愛弟子である種の一人前であると認めたくない偏屈なのかもしれない。師弟関係を解消するわけでもなんでもなく、認め

たとしても上級天使と見習い天使という意味合いでの師弟関係は続く。そろそろ認めてやろうと、私は考えていた。

「見習い天使アーミアスよ」

ウォル口村の守護天使として認められたならば、その時はウォル口村の守護天使アーミアスと呼ばねばならないな、とふと思った。教会の屋根に大人しく腰かけて私を待っていたアーミアスを見て、私は不意に同じようにして師エルギオスを待っていた幼い日の自分を思い出す。

同じように、私も見習い時代があり。同じように、いつか師に認められるのを夢見て。

それが叶った日の喜び。認められた嬉しさは昨日のように思い出せる。幼き日の私と同じように師を慕い、励むアーミアスにふと微笑みが浮かびそうになって私はつい口元を引き締めた。

「帰るぞ」

認めよう、愛弟子アーミアス。私はひとつ決意した。どこで告げるのが適切だろうか。ウォル口村の守護天使となるのだから、ウォル口村で告げるべきだろうか。それともアーミアスがオムイ様に報告することを考えれば天使界で告げるべきだろうか。

明日はお祝いになるだろう。慎ましく、小さなものだ。天使の清貧な食事に変化はあるまい。纏うものにも、何も変化はなく。あるのはひとつの称号の変化と人間への認知。それだけである。だが、我が愛弟子にとって忘れられない日になるだろう。

今日、私はウォル口村の守護天使として正式に任命されました。師匠イザヤールは私を認めてくださり、より励むようにと仰りました。

俺は日記にそれだけ書いて、日記帳を閉じた。続きはあとでも書ける。俺は舞い上がってしまいそうになるのを堪えながら、ウォル口村

の上空をぐるんと回るように飛んだ。ああどこに！　リツカたんはどこに！　いた！

祖父と仲良く自宅へ歩く姿を見つけ、俺はそつと近くに舞い降りた。天使は通常、地上で足をつけて歩きはしないが、少しでも目線を合わせた俺にはそういうならわし未満の曖昧な暗黙の了解なんてどうでもいいことだ。ともかく、俺は足跡をつけないことだけ気をつけて、リツカの隣に立った。

翼がなければ、光輪がなければ、背格好も同じくらいで、同年代に見えるのに……なんて、くだらない考えを振り払う。日に日に大きくなり、大人の姿に近づいていくリツカたん。

「リツカー！」

今日もリツカたんには俺の言葉は届かない。相変わらず人間たちは俺のことは見えやしないし。ただ、これまでと違って守護天使に対して祈る時、リツカたんは俺の名前を呼ぶんだぜ！　守護天使イザヤール様、と言っていた認識は大いなる力で書き換えられ、今までの代替わりでもそうだったように次期守護天使の名前を認識する！　これのおかげでリツカたんが俺の名前を呼んでくれる！

「俺は今日、ウォル口村の守護天使になりました。リツカ、今までもこれからも、まだ俺は未熟な見習い天使の身ではありますが、より一層努力します。リツカを守るように、リツカが健やかに過ごせるように……」

リツカたんに触れることは許されませんが、俺はかたく誓った。その働きの手が働く以外に使われないように、防げる悲しみに見舞われないように。

「今日もいい日ね、おじいちゃん」

「そうじゃな」

「いい天気で、とつてもいい気持ち！」

すぐそばにいるのに俺のことは見えない。俺は悲しくて、だけでも、だからリツカたんのことを守れるんだと思ひ直す。俺が人間ならこんなに素敵な女の子に出会う前に寿命でとつくに死んでるんだぜ？　もつたいねえ！

「いつも俺は貴女のそばに……」

見えない誓い。届かない言葉。俺はそれでも願ってた。愛しい人間と話してみたいと。言葉を交わし、その尊い命に触れてみたいと。

俺は叶うことを知らない。まさか天使界から落ちるといふ力技で叶えられることを知らない。だからまだ、少し悲観的で、終生叶えられることがない望みに諦めて、だけど諦めたくなくて、せめて毎日天使への祈りを欠かさない敬虔なリツカたんから、今日の天使の祈りで俺の名前が呼ばれるのをずっと待っていた。

76話 懇願

「これはなかなか……入り組んでいますね……」

「はい。いつも以上に気を引き締めなければ」

「うす暗いね、アーミアスさん」

外にただで乾いていく砂漠のど真ん中だし、井戸の下に地下水路がある……ってのは別に想像できないわけじゃねえが。こんなに広いとはな。でかいあまりに無理やり水路を越えてよじ登ったり飛び降りたりするのは危険すぎるから素直に水路に沿って動かないと足を滑らせて落ちたりすれば危険だ。

しかも地下水路は魔物の住処でもあるらしい。そこかしこにあるひんやりとした暗がり。そこに光る無数の眼。お前たちの住処にずかずかと足を踏み入れたのはこつちだから出て行けと襲われても文句は言えねえけど、今は従えねえし、こつちにこなければいいな……。いちいち相手にしている時間も無いはずだ。

これだけの空間ならぶつからずに飛べるだろうから、翼があれば探索が楽だったろう。ないものねだりをしてもしようがないが、たまにそういうことは思ってしまうよな。いや、たまにって頻度かよ？ ああ……翼があっても人間たちと話せるなら良かったかもな。俺には無理だが、もつと翼の大きい上級天使なら人間を抱えて空を飛べたかもしれない。旅を思えば便利だな。いや！ この姿ならオート天使バレさえないければ人間のフリしてその辺の町で人間たちと暮らせるかもしれないんだぜ？ ゆっくり老いるのはそのへんを転々と移動さえすれば……なんかむなしくなってきた。

ともかく、俺たちには翼はなくとも立派に二本の足があるので歩いて移動するわけだ。まあ暗いし、魔物がいるから大きな音を立てるわけにもいかない。これじゃあツオでの洞窟のようにサンディに先を行ってもらうように頼み込んで道案内を頼むのも危険すぎて無理だしな。てか今サンディいねえし。どっかに行ってるみたいだし。グビアナで彼女の探し物が見つければいいんだが。

とにかく変身したアノンちゃんは見上げるほどにデカかったから、

足跡でも残ってないか目を凝らすも、夜目が特別効くわけでもない一般天使な身体能力の俺には全然あるのかないのかすら判別できねえ。

幸い、特別足場が悪いわけでも無いければ、この水路は昔使われていたものなのか、今は水に満たされていて進めないわけでもない。注意すれば問題なさそうだ。

「このフロアにはいないようです、アーミアスさん。あれほどの大きさの魔物と無防備な女王の気配であれば、音が響きやすいこの構造で私たちに察知できないはずがありません」

「兄さんの言う通りです。アーミアスさん、進むにあたって明かりは必要でしょうか？」

「火をつけたら魔物が寄ってくるかも」

「その通りですね。ですが足元の危険もあります。どうしましょうか？」

「そうですね、もっと暗い場所まで行くようなことがあればお願いします。今は少しでも戦闘を避けましょう」

小声で会話し、なるべく足音を立てないようにして進む。確かに無数の魔物の気配はあるものの、明らかに非戦闘要員で気配を隠すことができそうにない女王はいなさそうだ。……彼女が気絶していなければの話だが。

とりあえず下層を目指そう。女王の気配がわからなくてもアノンちゃんらしき気配がないならいいことだら、多分。

入り組んだ水路はそもそも歩くための場所じゃないから分かりにくい、点検のためか梯子がついている箇所もあるし、階段もある。やれなくはないだろう。剣を構え、足音をなるべく殺しながら俺たちは奥へ奥へと進んでいった。

みんな、冷静なつもりです。兄さんは珍しく呪文を唱える時以外はだんまりですし、剣を強く握ったまま俯いている少年もそう。私だつて、冬の冷たい水のように黙っています。放置されて、波一つ立たないカップの中の水のように、さざなみをたてないように。

私は静かにしています。私は冷静に進んでいます。私はいつだつて、先頭をゆくアーミアスさんの背を追いながら、着実に歩いていきます。

ですが、脳裏に、網膜に、はつきりと焼き付いている光景を、反芻するのをやめられないのです。

まばゆいばかりにしろく、ほっそりとしたアーミアスさんの背を見たことを。濡れた衣類が邪魔だという理由だけでアーミアスさんは脱ぎ捨て、躊躇なく背を晒しました。ええ、事実として、アーミアスさんにとつてはそれは大したことではなかったのかもしれないのです。しかし、私たちには、忘れられない、たいへん重大なことでした。

顔や腕と同じように透き通るほど白い背中に刻まれていた、目立つ二本の大きな傷。そこはかつてアーミアスさんが翼のある天使さまだったころ、おそらくは翼が生えていた場所だったのでしよう。神聖なる背に不遜な誰かがよく切れるナイフを力ずくで突き立て、無理やり皮膚と肉を引き裂いたような大きな傷跡は生々しく、とうにふさがっているというのに痛々しいものでした。

まるで翼を失った背中を無理やりひらき、新しい翼を取り出そうとしたかのような、不自然な傷跡でした。ええ、背中ですから腕を回しても届きはしませんから、アーミアスさんが、少なくともご自身でやられたものではありません。どういった経緯であったとしても、アーミアスさんは誰かに背に刃を突き立てられ、真紅の血を流され、痛みを感じられたという点では違いありません。

しかしその傷は、跡こそ生々しく残つてはいましたが、しつかりと治療した跡がありました。熟練の回復師の治療痕であったからこそ、傷跡に沈着した色はなかったのです。そんな熟練の腕をもってしても大きすぎる傷は塞ぎきれず、肌はなめらかになることもできず、肉が盛り上がった傷跡は痛々しくはありましたが、いつそ不自然な程に

白い肌の色をしていました。

しかもアーミアスさんにあった傷跡はそれだけではありませんでした。次に目を引いたのは背中、いえ、腕にまで及び、体の全面を覆うただれた傷跡でした。そういえばアーミアスさんはごく普通に顔や手といった部分の肌は露出していますが、腕や足などを出しているのは見た事がありません。もちろん、アーミアスさんは聖騎士たるパラディンで、その前は鎧を身につける戦士でありましたし、そもそも旅人は魔物との戦闘と隣り合わせですからそれは不審なことではありません。

ですが、ただれたような広範囲のその傷にはうつすらと色がありました。通常、皮膚の変色がある傷は時間をかけて自然治癒させたのか、魔法による回復が余程下手だったのか、単純に治療が遅れたのか。引き裂かれた傷跡の見事な治療痕を思えば天使さまの世界、あるいはアーミアスさんを治療した方は並の人間よりもはるかに優れた回復魔法使いでいらっしやるのでしょうか、背中や腕まで及ぶ大きな傷を負った時、アーミアスさんはすぐに適切な治療を受けることが出来なかったという事実が読み取れます。

いつ負われた傷なのか。私は回復魔法のスペシャリストではありません。どちらの傷が古いのかは付き方から分かりますが……ただれた傷の方です……魔法で治癒した傷が何年前のものかだなんて、わかりはしません。だけど、だけど、いつだって先頭に立ち、私たちに攻撃が及ばぬように立ち塞がるアーミアスさんにあんな傷を負った過去があったということは、重大なことなのです。

アーミアスさんは天使さまであり、慈悲深く、人間を愛してください。さつても。自己犠牲の精神を持っていらっしやっても。間違いなく、傷を負います。痛みを感じられます。傷つきます。ひどいダメージを受ければきつと、死んでしまう。実は天使さまが不死だとしても、傷に苦しまれることには違いありません。

これは好奇心でしょうか。ただ知りたがっているだけなのでしょうか。アーミアスさんは聞かれることを良しとしてくださるでしょうか。アーミアスさん。優しき天使さま。

私はお役に立ちたいのです。アーミアスさんのお役に立つということは、その崇高なる使命を果たす際にお手伝い差し上げるといふことだけではなく、アーミアスさんに何一つ苦痛になることがないように……という願いです。まだ、私は、私たちは未熟ですべては叶えられはしませんが。私、きつと賢者になって、アーミアスさんの前に立ちふさがるすべてを吹き飛ばして差し上げたいのです。

今の私にできることは敵対行動をとり、私たちの前に立ちふさがった魔物が何か騒ぎ立てる前に燃やし殺すことだけです。私は黙々と呪文を唱えながら、それでもすべての魔物の焼け焦げた跡に膝をつき、魂の安らぎを祈ってくださいるアーミアスさんの慈悲深き姿を見ながら、杖に寄りかかりました。

ああ。無垢なる天使さま。ああ。私を導いてくださる美しき天使さま！

私は不遜な想像をしました。翼を失った天使さまの背から翼を引きずり出そうとする同じ美しい天使さまの姿を。あるいは、アーミアスさんを見て天使さまであると気づいた人間がアーミアスさんから翼を奪おうと傷をつける様子を。何が真実であるのかはわからず、ただの、ひどい、不遜な妄想です。

アーミアスさんを傷つけるもの。それすなわち大罪人。滅せられるべき存在です。ああ、だけど、その現場に居合わせてさえいればその大罪人に向けて業火の魔法を唱えることができたのに。

「ああ神よ。お慈悲を。魔物であったあなたがたの来世が、我らとともに歩むものでありますように。次に会ったときは友として手を取り合うことができますように」

ああアーミアスさん。ああ天使さま。あなたを傷つけるものすべてを焼き焦がすことができますように。力を得たいのです。それを叶えるために。

77話 恋

ひとまず魔物の襲来が落ち着き、周囲の安全を確認し、小休憩がてらしばらくぶりに剣を収められたアーミアさんは口を開きました。袋から聖水を取り出して皆にふりかけながら。聖水を。ええ、一瓶の聖水を。天使さまが行ったならもはや祝福では……？ 守護天使さま直々の祝福なのでは……？

……いえ、わかっているんです。これが町の道具屋で買ったただの聖水だということも、効用が魔物避けだということも。アーミアさんに他意がないことも。しかしアーミアさん手ずから撒いた聖水を浴びているのですよ、私たち！ これはもはや祝福なのでは！ もしかして、これは洗礼なのでは？

本物の、慈悲深く美しい守護天使様による聖水の下賜ですよ！ 祝福なのでは！ 洗礼なのでは！ 少年はぴんときていないようすが兄さんは魂が召されそうな顔をして喜んでいます。僧侶だった時より信仰心に満ち溢れた顔をしていますね！ わかりますよ！

不肖メルテイー、やる気チャージ完了です。必殺チャージもこの分ですと、速攻でしょう。お任せください！ ミラクルゾーンしますよ！ やる気があれば魔力なんてどこからでも湧いてくるのです！ そしたらヒヤダルコ連発してやりますよ！

ところで……教会で人間の神父やシスターが祈った水よりアーミアさんが祈った清らかな水の方が効果があるのでは？ アーミアさんは戦闘後に必ず祈っていらつしやいますが、もはやその手に握られた剣は聖剣ではありませんか？ いえ！ もちろんアーミアさんの天使さはどこを探してもこれ以上の天使さまはいらつしやらない、とほかの天使さまを知りもしないのに確信しておりますが！

「これから戦闘になる可能性が非常に高いでしょうから、先に打ち合わせをしておきましょう。最も重要視するのは女王の安全確保。彼女が戦闘に巻き込まれることのないように配慮しなくてはままなりません。隙を見て俺が助けますから、援護をお願いします。場合によってそのまま逃げることも考えていますが、恐らくは追いつかれて

しまうでしょうから、最終手段ですね。安全な場所まで移動させ、そして俺も戦闘に復帰します」

「わかったよ！……それで、アノンちゃんは思いつきやつつけてもいいの？」

「女神の果実であれだけ姿が変わっているので戦闘力が上がっていることは間違いありませんし、言葉が通じるか、そして話を聞いてくださるかはわかりませんから……おそらく命を奪わないように気をつけて攻撃することになるでしょう。女王にとって大事な存在でしょうから、出来れば元の姿に戻して返して差し上げたいですね」

「それでは焼いてはいけませんか？ 凍らせるのはいかがでしょう」

例えば殺さないように、と想定すると、とても手加減できるような相手には見えませんが。アーミアスさんも同じ意見のようです。

「あの巨体を魔法で一撃でというわけにはいかないでしょうし、手加減も難しいでしょうね。トドメにならないければ問題ないかと……俺は人命を優先します。存分に戦ってください。これまでの例で言えば耐久力も並ではないでしょうから」

「わかりました。みなさん怪我などないですか？ 今のうちに治せるものは治し……そうだアーミアスさん、あんなに高いところから飛び込んだのです、遅くなりましたがお体に問題はございませんか？」

「ありませんよ。大丈夫です。高さをわかって飛び込みましたから身構えることが出来たので」

兄さんの探りにも特に反応なさらず。構えベホイミは霧散しました。明らかに落下した時のダメージよりも傷跡の心配なのがありありと透けて見えました。アーミアスさんは無反応です。

というよりもアーミアスさんにとってはやはり傷跡を気になさっていることではないのでしょうか……傷自体は完全にふさがっていますからね。アーミアスさんなら、既にふさがっているのに気にすることがあるのか？ と首をかしげかねません。少なくとも今のアーミアスさんがお元気なのでそれを素直に受け止めます。ええ、あんな高さから飛び込んでも平気とは、流石です。同じ経験を積んだパラディンであつてもできない芸当です。

「みなさんは大丈夫ですか？　大丈夫そうですね。……それでは下へ参りましょう」

アーミアスさんは周囲の暗さから一旦外し、袋に仕舞っていた兜を取りだし、被りました。そしてバイザーをぱちんと下ろし、その美しいかんばせを覆い隠してしまわれ、先頭を歩きました。

おそらく地下水路の最下層につき、女王と元凶のトカゲを発見……したのはいいのですが！　なにやら話しているような声が聞こえるので皆で隠れながら聞いていますが、なかなかよくわかりません！　メルテイーが話を聞いているうちに杖を握りしめながら首をかしげ、少年は最初から理解を放棄したようです。

ええと、どう表現すべきなのか。座学はそう苦手ではなかったのですが、どうも感情の機微については苦手としておりました……？　言葉の通りなら色恋のたぐいでしょうか。トカゲが人間を、というのが不思議なところですがそういうこともあるのでしょうか。いえ、目の前にあるので疑っても仕方ないのですが。

「……」
「なあユリシスはん。わてと一緒にこれからスイートな人生を……」
「……？」

アーミアスさんがぼそり、と小声で言いました。

「……アノンちゃん、女王を口説いていらつしやる？」

「トカゲが人間を？　好きなのに怖がらせてたらダメじゃないの？」
フルフェイスの下のアーミアスさんの表情は分かりませんが、静かな声で答えてくださいました。

「自覚がないのかもしれませんが……いえ、とにかく合図したら突入します。もともと小さいトカゲがあのサイズになっているのですから、力加減ができずに大惨事になるかもしれません」

「そうだね、なんか、ぎゅって、ハグでもしそうな勢い……」

「いけませんね、俺には最悪の予想ができてしまうのですが……」

「おれも潰れちゃうと思うな！」

「突入します！」

女王が深紅に染まる嫌な想像をしたのか顔色を悪くした少年が矢のように素早く飛び出し牽制します。怯え震える女王にはアーミアスさんが向かいます。

助けて、と小さい声で女王が言ったのを目の前のトカゲは聞いていないようでしたがアーミアスさんには聞こえているのです。私は援護のために死角に留まり、メルティーは魔力を集中させながらいつでも呪文を放てるように暗がりの方へ駆けていきました。

「なんや？」

間に割って入ったアーミアスさんに気づいたトカゲは威嚇するように鋭い爪を持った両腕を振って見せました。ちよつとでも触れたら危ないので私は矢を構えてアーミアスさんに害をなそうものならその腕射抜く所存ですが！ 刺さるかちよつと分かりませんが！

トカゲを通り越して金色の大きなドラゴンという様相、人語を解する知能、かなり危険な相手でしょう。

「おまん……長年想い続けたユリシスはんと一緒になろうっちゅうわての夢を邪魔しに来たんか？」

「黄金の果実で変身したあなたを放置することは出来ないですよ」

アーミアスさんはさりげなく女王の肩に左手を置きました。隙を見て腰を抜かしそうな女王をひよいと抱えて下がるおつもりのようにです。

「黄金の果実？ もう食ってしもうたわ！ わてはあの果実に人間にしてくれって頼んだんや、そしたらほら、二本足で立ってな、しゃべれるようになってな、力も強うなってな！ どや、イケメンやで！ これでユリシスはんを寂しくさせることもないわ！ やっぱりちつこいトカゲやったらお喋りもできへんし……同じ人間やったらこんなにあええことはないわ！」

「人間になりたかったと？ 願ったのですか？」

「せや、城の中でユリシスはんはひとりぼっち！ 親父はん亡くしてひとりぼっちなののみーんなユリシスはんの悪口ばかり言いおつ

てからに、寂しい気持ちを理解せんと、ならわてだけでも味方にならなあかんのや！ だから人間になつたんや！ わてが人間ならユリシスはんは寂しくないんや、わてがトカゲやと所詮はトカゲ！ 話は聞けても答えることは出来へんのや……。

分かつたやろ、別に城の人間になにかしようっちゅうわけやない、ただユリシスはんとはスイートな人生を送って、ユリシスはんには笑顔で日々を過ごしてもらおうっちゅうだけのことや、邪魔しんでない！」「動機は理解しましたよ、アノンちゃん……言わんとすることはとても理解出来ました。しかし女神の果実を取り返さないわけにはいかないのです。申し訳ありません……本当に……」

さつと女王を抱えて飛び退いたアーミアスさん、気づいて腕を伸ばすトカゲの爪を剣で受止めた少年。私は鱗に覆われた額目掛けて矢を放ち、こともなげに叩き落とされたのを見ながらアーミアスさんの指示を聞きました。

物陰に女王を下ろし、こちらに剣を振り抜きながら駆けてくる勇ましい姿であるのに、どうにも悲しそうな声だと感じながら。

「攻撃してください！」

人間に恋したトカゲは、女王を取り戻さんと周囲を揺さぶるような大きな声で吼えました。空気を震わす咆哮をもともせず、アーミアスさんは剣を振りかぶりました。

78話 和解

再三繰り返してきた気もするが、俺には「特別な才能」ってのはない。人間から見れば神秘の力に分類されかねない、幽霊が見える力は天使としての標準的な力であり、天使なら全員見えるのだから普通だし、その他のちよつとした能力……心ばかりの悪意を吸い寄せるとか、呪いを吸い寄せるとか、妖魔の呪いが効かないとか、落下したときのダメージで死んだりしないとかも天使由来だ。師匠なら完全上位互換でなんでも出来るだろうし。俺の特殊能力ではない。

上級天使のように聖なる雷も呼べない。俺は嬉しかったが、能力としては翼がないから飛ぶことも出来ない。星のオーラすら見えない。それでいて剣の才能や魔法の才能があるかというのと並だ。

本当に、俺って並なのだ。人間から見たら俺の剣は多少上手く見えるだろうが、それでも百年以上毎日振るってきたと考えるとどうだ？ 時間の割には達人級ではない。かといってずぶの素人ではない。才能がなさすぎる訳でもない。ただ振り慣れただけの、稽古の期間を考えてみれば、並の腕だ。

俺は小柄だから、縦にも横にも自分よりはるかに大きいトカゲの攻撃を素直に受け止めたら潰れるか吹き飛ぶ。かといって凄まじく重いその攻撃を受け止められるほどの頑強さもない。体格も才能の一つだし、将来有望そうな仲間たちのような才覚があればまた違ったのかもしれないが……前に出て攻撃を引き受けるとはいえ、俺が死んだら次の盾がなくなってしまう。味方に当てないために俺が前に出ているというのに受け止められるわけでもなく、相殺するわけでもなく、避けるという悪手に出る羽目になった。

要修行だ。背後でマテイカは避けたんならいいが。強くもない振り返るなんてできなくて、だけど元気に俺の頭上をマテイカの剣が通っていったし元気そうだ。武闘家だったのに今はバトルマスターとして板についてきているマテイカは剣の才能に溢れているな。こんなに短期間で慣れるなんて素晴らしい。自分の腕はともかく見る目はあったらしい。

元のアノンちゃんを思えば、戦闘したことがある……のか？ 女王のペットだぞ。なさそうだ。実際、攻撃は俺の剣を叩き落とそうとしたり、頭を狙ってきたりと分かりやすい。分かりやすい弱点しか狙ってこないし、攻撃は体重相応に重いが洗練されているわけではない。殴ってきたかと思えば突然口から火を吹いたり油断はできないが。戦っていて自分が人間になったわけではないと気づいてもいいんじゃないかね……。

姿かたちが人間に似ていても、俺は人間じゃねえ。翼がなくても、光輪がなくても、人間にはなれねえ。それっぽくはなれたが結局オート天使バレなんてして顔をすっかり隠さなければあんまり意味もない。どっかに行方をくらまして人間としてひっそり過ごす、なんてのもできねえ。

アノンちゃんは人間になって寂しがりやな女王と幸せになりたかったみたいだが……ん？ トカゲが人間になりたいと願ってもドラゴンもどきにしかなれないのか？ 喋ることはできても、それだけってことか？ 女神の果実で俺は人間になれないのか……？ どうせ俺のものにはならないし、使っていい訳もないのに衝撃的じゃねえか。

なんて。戦闘中に考えたって仕方ないだろう。

何も殺さなくていい。ぶん殴って一回冷静にさえなってもらえれば、言葉は通じる、願っても世界滅亡とか言ってねえし、望みはある。

ただ、今の自分を理解して欲しい。確実にダメだ、とは言えないが、その姿で女王を本当に幸せに出来るのかどうかを。その、相手の状態すら理解できない夢中な状態で穏やかに暮らせるのかどうかを。寂しがり屋の女王だが、でも、ひとりぼっちではないのだということ。

女王の身を案じていた人間がいる。女王をこんなにも想っている「家族」がいる。姿を変える覚悟があつて、元の環境を捨て去つてもよくて、二人だけになつても構わなくて、相手のことを思いやって救い上げたいと願う存在が。親を失い、ひとりぼっちで寂しくても、でもちよつと顔を上げたらひとりじゃないのだと。言葉を得たなら言うてやればいい。きつと届くとオレは信じている。

さあ目を覚まして。小さな魂よ。幼く、優しく、相手を想いやれる、
いとしい光の子よ。

目を覚まして、なんてやさしげなこと言いながら剣でぶん殴ってるわけだが。それ以外に、もつと穏やかな方法は無いのかよ!? 俺のなけなしの天使パワーをオート天使バレなんて無駄なところにリソースを割かずに、なんかありがたい光のパワーで冷静じゃない生きとし生けるものに「ちよつと一旦冷静になって話聞いてくれるか? そつちの言い分も聞くからさ」を出来るようにしてくれよ! 戦いなんて本当はないほうがいいに決まってる。血なんて流れないほうがいいに決まっているんだ、食事のための戦い以外は、本当は無意味なんだからよ。

俺の振り抜いた剣が、マテイカの鋭い一撃が、メルテイーの氷の魔法が、ガトウーザの矢が、アノンちゃんに殺到して、痛みか、はたまた何かに気づいたのか、不意に彼は振り上げていた鋭い爪の生えた腕をおろした。

その瞬間、横から小柄な少女が俺たちの間に割って入って俺は大いに慌てた。あぶねえ!

「待ってください! アノンちゃんを殺さないで!」

「ジューラ……?」

危険なのはわかっていた。アノンちゃんは容赦なく旅人さんたちに攻撃していたし、力の加減も知らないようだったから。でも、暴れるアノンちゃんをこのまま殺してしまつたら……女王様は二度と心を開く相手がいなくなつて、本当のひとりぼっちになってしまう! 二度と心を開くことができなくなつてしまうかもしれない!

「アノンちゃんは女王様の家族なんです、お願いです、旅人さんたち……アミアアスさん! ユリシス様の心を開く先がなくなつたら、今

度こそひとりぼっちになってしまおう……！」

「ええ、アノンちゃんはとりあえず落ち着いてくれましたから、殺したりなんてしませんよ。大丈夫です。ほら、もう襲い掛かっては来ませんから」

かぶとを被っていて表情はわからないけれど、彼は笑った気がした。剣を収めた彼はガントレットをはめた手でそつとアノンちゃんを示した。すっかり好戦的な様子を失ったアノンちゃんは、私たちを見て、息を切らしたままの私を見て、それから少し離れたところに退避して、座り込んでいるユリシスさまを見て、頭をかいた。恥ずかしそうに。

「なんや、なんや。わてピエロやないか。ユリシスはんのことを想つて危険なところに飛び込んでくれる人間はん、おるやないか。ジューラはんがこんな……口から火イ吐く人間やない危ない存在のところまで来てくれるんやったら、わてえらい勘違いしてたんやなあ」

「アノンちゃん……？」

「なあ、わて人間になれなかつたんやな。戦つとる最中に気づいたんや。人間は火イ吹いたりせえへん。こんなでつかい爪生えてへん。こんなに背エもデカくもないわ。ユリシスはんの隣に立てるようなシユツとした服も着とらんし、こんなすっぱだからユリシスはんさうらつて、そんなえらい騒ぎ起こして……しかも勘違いでやらかしてるなんて恥ずかしいわあ。

ユリシスはん。わてがこんなことしなくてもユリシスはんのことを想つてくれるひとはちゃんとおつたんやなあ、でしやばつてもうたわ。堪忍なあ……所詮は、トカゲの浅知恵やつたんやなあ」

私は座り込んでいたユリシス様を助け起こした。アノンちゃんは目を細めて私たちを眺め、大人しく恥じ入っていた。体を縮こめて、少しでも威圧的にならないようにしてくれた。

「大丈夫やったんや。ああよかつた……すまんなあ。旅人はんにも世話かけてもうた。城のみんなも怖かつたやろなあ。もう小さいトカゲに戻るわ。たとえ喋れなくても、ユリシスはんのそばにいれるんは小さくてキュートな姿な方やもんな。こんなでつかい人間モドキ

じやなくても、ユリシスはんは一人やないから、トカゲがでしやばつてもしょうがないんや。ほなまた……」

魔法が解ける。私はそう思った。アノンちゃんの体を包み隠す、もうもうと立ち込める煙。それが収まると、そこにはスライスされたはずなのにすっかり元の形を取り戻している黄金の果実……確かに見た目はキラキラしていて、新鮮で、なんとなくおいしそうにも見えるけど、危険なものだと分かっているのに逆に不気味に見える……と、元の小さな姿に戻った金色のトカゲのアノンちゃんがいた。

「アノンちゃん……ジーラ。ああ、わたし、ひとりぼっちなんかじゃなかったのね」

アノンちゃんを拾い上げ、微笑んだ女王様。いつもの気を張っている姿ではなく、先王様がご存命の時のようにあどけなく、美しく。「帰りましょう。そしてみんな、ありがとう。気づかせてくれて。」

それから旅の方。随分無礼を働いてしまいました。もちろんその黄金の果実は差し上げます。それから……城に来てください。今度は歓迎いたします。わたし、すっかり目が覚めたみたいですから」

アーミアスさんはゆっくりと黄金の果実を拾い上げて嚴重にしまい込むと、ユリシス様に向き直り、どこか嬉しそうにうなずいてくださった。

79話 過凶行

さて、地下水路から帰還し、戦いを終えた直後の姿ながらグビアナ城内にて。私たち、豊潤な水のある沐浴場からいまや使用されていない地下水路、そしてその先の洞窟で行って戦ったので泥水まみれなのですけど、そのままの姿で玉座の間に躊躇なく招き入れられました。

そして今度はアーミアスさんが受けるに相応しい歓待を受けました。ええ、最初からこの素晴らしく慈悲深い天使さまを歓迎していればよかったものを。後から言っても仕方がないですが。

「改めて。みなさん、ありがとうございます。おかげでアノンちゃんも、わたしも無事です。騒動で怪我人も出なかったと報告を受けました。」

それに……わたしはひとりぼっちではなかったとこの騒動を通して知ることになりました。アノンちゃんも、ジューラも。あんなワガママなわたしを見ながらも……見捨てないでいてくれた、わたしを想ってくれた周囲に気付かされました」

「得難い周囲の想いにそうして気づくことが出来る人間は稀有です。ユリス女王の行先も、グビアナの将来も明るいでしよう」

「アーミアスさん、ありがとうございます。どうか、みなさん。何か困ったことがあれば申し付けてください。グビアナはあなたがたをいつでも歓迎します」

「でしたら、俺の目的は黄金に光る果実をあつめること。もし噂を耳に挟んだら少し、耳を傾けていただけると幸いです。黄金の果実がもたらす災厄はあの通りですから。生きとし生けるものにとって過ぎたるものなのです」

「……わかりましたわ。ええ身をもって知りました。不謹慎ながら、アノンちゃんのお言葉を聞くことができたのは嬉しかったです……」
「ええ、もし黄金の果実に『正しい使い方』があるのだとすれば……本来言葉を交わせぬ相手との意思疎通もそのひとつなのでしょう」

そして、思い出したようにアーミアスさんはかぶとを外しました。天使さまという上位存在でありながら人間に礼を尽くすアーミアス

さんらしい行動で、これから灼熱の外に行くのでどちらにせよ城内で外すことになったのでしようけど……これではアーミアスさんのことをグビアナの人間が気に入ってしまうかもしれないじゃあないですか。

アーミアスさんの行いすべては、それはそれは天使らしく、誰にでも救いの手を差し伸べてくださるので……フルフェイスヘルムですこしも顔が見えなくても結果は変わらないといえそうですが、どうでしょう！ 人間なんてほとんど愚か者しかいないので見てくれが良ければさらに好感度が上がってしまいます！

現に、アーミアスさんのやや幼くも、神さまが丹精込めて創りあげたとわかる、輝くばかりに美しいかんばせに周囲の目は釘付けです。いけません。これはダメです。アーミアスさんは……アーミアスさんは、決して私たちのものじゃありませんけど、あなたたちにはあげませんよ！

「ユリシス女王、ならびにグビアナ王国に神の御加護があらんことを。

それでは、みなさん、行きましようか」

「あらお待ちになって。そのような姿で急いで出発なさらなくとも。あなたがたは恩人です。傷はもう治されたようですけど、せめて戦いの疲れを癒し、汚れを洗い流してからでも良いではありませんか。恩人に恩を報いることも出来なければわたしは変わっただなんて思えません」

「……」

アーミアスさんは前衛ですから、先陣切っていちばん傷を負い、いちばん疲労しているらしいんですが……私たちの方をちらりと見ました。

盾も持たずに……持たず、というのが正しいですが……巨大なトカゲに攻撃を仕掛けていたマティカ少年は頭からつま先までどろどろ。後衛の兄さんと私は汚れこそ大したことではありませんが多少は魔力不足の疲労が顔に出ている自覚がありました。

ルイーダの酒場で雇った仲間に対する待遇とは思えないほどの厚遇をくださるアーミアスさんですから、申し出があれば断ることはな

さらないのでした。

とはいえ、女王の沐浴場を使用するのは即決で辞退されていました。

贅沢にも水をふんだんに使用させてもらって汚れを落とすし、宿に案内され、ようやく一息ついて。

アーミアスさんが部屋に戻られたあと、私たちは集まっています。正直なところ疲労感も眠気もありますが、そんなことより大事なことです。話に夢中になりすぎ、明日に響かないように気をつける必要はありますが、それにしたって魔法の聖水でも使えば最低限の仕事はできるはず……いえ、疲労をアーミアスさんに見抜かれてしまえば要らぬ心配をかけてしまいますから、適度な自制はしますが！

ともあれ、私たちが休むのを先送りにしてまで集まった議題はもちろん……。

「アーミアスさんの傷の話ですが、兄さん？」

「ええメルティー。実のところ、アーミアスさんに古傷があるのを知っていました。範囲が広い。ただれは腕にも及んでいますので……私は知っていました」

「でしようね」

「その時、傷について聞いたのです。アーミアスさんは仰いました。それから落ちてきた時の傷だと。そら、というのは天界のことでしょう。しかし、直接広範囲の傷を目の当たりにしたことはなかったものであれほどまでとは……翼なき天使さまであるアーミアスさんですが、かつては純白の、輝くばかりの翼をお持ちだった。天界から落ち、翼を失い……傷を負われた」

少年が叫びました。

「ねえ！ それって、空から落ちたから、怪我で翼がもげたってこと？ 落ちたから、翼がなくなっただんなら、じゃああの二本ある縦の傷は

なんだって言うんだよ。あんなの、絶対に誰かがやらなきゃつかない傷だ。翼の位置に刃物の傷だよ、ねえ、ガトウーザなら見たらわかってんだよね」

「もちろんですとも。あの傷、あの深さ、あの背中という位置。まかり間違っても自分で傷つけられるものではないです。しかも全身に及ぶ火傷の上にあった。これは予想にすぎませんが、……翼を失ったことと、全身火傷になったことと、背中を傷つけられたこと。これが別のタイミングでアーミアスさんを襲ったということですよ。ああいえ、天界はおそらく人の目には見えませんが……空の彼方にあるのでしょうか。そこから落ちればもしかして、流れ星のように燃えるかも……」

「兄さん、たしか今年……流れ星、ありましたよね？」

「ありましたね……大地震の日でしたっけ。落ちた方向までは覚えていませんが、セントシユタインからはかなりはつきりと見えました。目撃情報を洗えばすぐ分かることでしょう。セントシユタインを拠点にしているアーミアスさんですから、聞き込みの機会はあるはず」
地震の後の、綺麗な流れ星。少しの間酒場でも話題になっていたのを思い出します。あれが天界から落ちてきたアーミアスさんだったとしたら。

時に摩擦により、物体が高温に達することは理解できます。木を擦り合わせることで上手い人間なら火さえ起こせるでしょう。流れ星の着地地点が時に焼け跡になっているという話も知っています。しかし、地上からあれだけハッキリとした光が見えるなんて……本当なら、火だるまででしょう。どんな壮絶な灼熱地獄だったのでしょうか。しかし、そちらよりも。

「新しい方の、人為的としか言いようがない背中の傷……アーミアスさんに直接聞くのは不埒でしょうね。特に古傷の痛みがある動きをさせていませんし、聞く動機としては薄いです」

「ただの好奇心で聞いて良い内容ではないことくらいには私にも分かります」

「聞かれたくないことくらい、誰にだってあるって分かっているけど

……」

仮にアーミアスさんが傷について何ら思っていないとしても。痛みを感じられたことは間違いないのです。あの白い肌にも、あの優しき天使さまが傷をつけられ、苦しんだ過去には違いなく。

「何にせよ、犯人を許してはおけませんね。賢者になれば過去を見ることができればいいのですが」

「犯人がわかることはなさそうですが……備える分には損しないはず。私は毒矢でも用意しておきます。別の機会に役に立つこともあるでしょう」

「じゃあおれはぶった斬る練習をするよ」

なんて、私たちは犯人がアーミアスさんと同じ天使さまによる凶行だとは知らずに話し合っていたのです。

カルバド編

80話 流星天使

部屋に備え付けられた鏡で身だしなみを確認する。気に食わねえなにもかもを変えることはできなくとも、気を遣えば清潔感くらいは何とかできるもんだ。耳の近くで跳ねていた毛先をそつと抑えておく。

ま、そもそもの髪の色に清潔感がないからどうしても限界はあるが。だがこういうのは気持ちが大変だろ。

あー、明日目を覚ましたら突然師匠のように濃い眉毛が似合う男前な顔になって、師匠のように見るからに筋肉質でイケメンな肉体を手に入れ、黒でも金でも茶でも白でもいいからこんなきつたねえ灰色ではないはつきりした髪色になってねえかなあ！ そしたらなんとかして小麦色に肌を焼くぜ！ 完璧なイケメンの出来上がりだ！

ワイルドな容姿って憧れるよな！ 力強い筋肉！ こんがり焼けた肌！ 清潔感ある髪！ そして男前なはつきりとした顔立ち！

今の俺は真反対だからな、憧れるぜ！ あと師匠並みに身長も欲しいぜ！ 天使が欲望まみれで笑えるぜ！

リツカたんが人の外面の良さで簡単になびくような女の子だとは微塵も思っちゃいないが、それでも容姿がいいにこしたことがないだろ！ かわいいリツカたんの隣に立っていてキマるのはやっぱりイケメンだし、リツカたんが世界一可愛い以上俺もイケメンになる義務があるに違いない。しかも純情なリツカたんが一瞬でも俺のことをかっこいいと思ってくれたら……もうそれだけで星になっちゃおうぜ。今すぐにも師匠みたいなイケメンになりてえよ！ 俺なら断固として髪は剃らないけどな！

ツルツパゲときたねえ灰髪、どっちがマシなのか……。まだ自分で剃っているハゲかもしれないけど。だがちつとばかしハゲは好みが分かれるだろ……。

ふざけたことを考えるのはそれまでにして、部屋を出た。ご丁寧に

もユリシス女王は俺たちに一人一部屋用意してくれたから、リツカさんの素敵な宿屋じゃなくても快適だったぜ。

部屋の外にはすでに仲間たちが勢揃いしていた。うわ、バカなこと考えてモタモタしていてすまねえ。とつとと出てくるんだった！

「みなさんおはようございます」

「おはようございます、アーミアスさん！ 聞き及んでいた通り、砂漠の夜は大変涼しかったですね！」

「そうですね。みなさん、寒暖差が激しかったですがお加減は大丈夫ですか？」

「元気いっばいだよ！」

「澆刺としております！」

「力なら有り余っております！ ですからなんなりと！ なんでもお申し付けください！」

「元気なのが一番ですね」

みんなが元気つてのは大変結構、良いことだ。

だがそれじゃあ休むためにわざわざセントシユタインに戻って、リツカさんの顔を見るために宿に泊まる理由がねえ……雇い主だから何をやろうが俺の勝手っちゃ勝手かもしれないが、休息が必要なさそうなのに酒場に登録された仲間を遊ばせておくのってどうなんだ？ やる気もみなぎっている様子だしよ。そろそろリツカたん不足のあまりペロ不足だが……俺の心の中にいるリツカたんではなく本物のリツカたんを見て内心ペロッペロしたいところだが……迷いどころだな。俺の中のペロリストの元気がない。こころなしか髪の毛まで萎びているような気がする。リツカたんに会いたい。

だが俺の問題だし。仲間たちには知ったこっちゃねえだろ。

早く女神の果实を見つけなくていいのか？ また大惨事が起きているかもしれないし、今度は騒動に間に合わないかもしれないの？ 心の中の理性がそう囁く。心の中のペロリストがやだやだリツカたんのところに戻るんだ！ リツカたんペロペロ！ リツカたんにただいまって言いたい！ と騒ぎ立てる。

うるせえ！ 私欲を優先しようとするな！

じゃあ……あとで戻るにしても、このまま船でヤーン湿地に向かい、カルバド大草原の方へ行き、カルバドの集落の方へ行つていつでもルーラで行けるようにしてからセントシユタインに戻るか。それともヤーン湿地からはエルマニオンの方へ行つてエルシオン学園をルーラ登録してセントシユタインに戻るか。なんにせよなんの進展なしに戻るのは……なんとなくはばかられる。

「アーミアスさん、今回もいったんセントシユタインに戻られるのですか？」

おつとガトウーザ！ お前つてやつは！ もしかして俺の心が読めるのか?! そいつはあまりにも俺に都合が良すぎやしないか！ 領くだけでリツカたんをペロれるようにしてくれるのか?!

「いつも戻られていたのでそうかと思つたのですが」

「兄の発言が差し出がましいものでしたらすみません！ しかしいつもの流れでしたらそうだったと思つておりましたー！」

メルティーまで！ 俺の欲望まみれの心なんて読まれて困ることしかないが、想いを汲み取るその気遣い、染み渡るぜ！

「リツカ姉ちゃんどこ行くの？」

もちろんだとも！

純粹無垢なマテイカにもなにもかも筒抜けかよ！ ポーカーフェイスなんてとつくに崩れているんだろうな、リツカたん不足がバレてんじゃねーか！ リツカたん吸いたい。リツカたんの近くで守護天使使いたい！

……まあそうだよな！ ほぼ毎回、ことあるごとにセントシユタインに戻つてんだからもはや理由とか言い訳にしか見えないよな！ ルーティンにしていた俺、ナイス！ それでも一応、当たり前みたいな顔をして領く。見た目はともかく最年長者だしな……なけなしのプライドで。

もう無駄だけどよ！ わかつてつけどよ！ それでもよ！

「ええ、一回戻ります。その……」

なんて言い訳しよう。こんだけお膳立てされてもこのザマかよ！

「あの、アーミアスさん、すみません。それでしたら、半日でかまわな

いのでセントシユタインで用事が出来たんです。戻られるようなら
お暇を少し頂いても?」

「私も。数時間でも構いませんので……」

言い訳さえいらないうつてか。聞かなくてもわかるってか! いい
から行ってこいつてか! こつちのことは気にすんなって? なん
て俺の気持ちを理解してくれているいい子たちなんだろう! やっ
ぱり人間は最高だ!

「もちろんです。みなさん、今日は一日休みにしましょう」

「ありがとうございます!」

機転が。仲間の機転が最高だぜ。リツカたんに見える! よっ
しや、じゃあルーラだ!

リツカたん! ただいま!!

アーミアスさんと一時別れるのはとても寂しいですが、取り急ぎ聞
き込みがしたかったので仕方ありません。天使様について勝手に探
ることは……メルティーならばあるいは罪悪感を覚えるかもしれな
いですが、私はアーミアスさんについて新たに知ることが出来る!
と嬉々としているのでした。いえ、流石に内容が内容ですから完全に
嬉しくてしようがないというわけでもないのですが。

旅の宿の周辺をうろついている流浪の精霊たちに知っていること
はないか聞いてみようかと思いましたが、例え初対面だろうが、執拗
に私の目を狙ってくるのでやめておきます。目が見えなくなれば弓
を引けませんから。戦えない、弓が引けないなら私の利用価値が下が
ります。アーミアスさんの役に立てる自分でありたいのです。

まあでも、アーミアスさんに宿ったあの……多少……変わった精霊
のような相手ならば聞いても良さそうですね。変わった精霊では
ありませんが、精霊にしては非常に素朴で、ことあるごとに対価をが

めつく要求してこないのはもつと珍しい。聖騎士に宿る精霊は聖騎士と同じく博愛基質なのででしょうか？

さて、聞き込みをするなら二手に別れるとしましょう。どうせマティカ少年は戦力外です。なぜなら。

「少年は酒場にいた方がいいですね」

「なんで？ 二人よりもおれの方がセントシユタインの知り合いが多いよ？」

「だからですよ。昔の知り合いに会うかもしれないんですよ」

「構うもんか。おれは前より強くなったんだから、もう何言われても泣かないし！ もし何かやられてもちゃんとやり返せるんだよ！」

「やり返すのはアーミアスさんに迷惑がかかります」

「あ、そうか……それは、そうだけど！」

「少年、メルティーはあなたにアーミアスさんの護衛を任せると言っているんです」

人の感情の機微に特別疎い自覚はありますが、妹であるメルティーの考えていることなら分かります。

聖職者の家に生まれた私よりもずっと神に敬虔なメルティーは、同じように私よりもずっと優しい。ほぼストリートチルドレンとして育ったマティカをかつての古巣に近づけたくはないのでしよう。マティカ少年の利発さの割にはセントシユタインにいる時は宿屋の周りに離れないことも、……私でさえ知っています。

とはいえ、宿屋の周辺にいれば安全です。

「護衛？ それも……アーミアスさんの邪魔になっちゃうよ……」

「邪魔になるほど近づかなくていいんです。ちよつと離れたところに座ってたまに見るくらいでいいんですよ。アーミアスさんは一人でもお強いのでただの保険ですよ。ほら、飲み物代はいますか？」

「ガトウーザ、子ども扱いまでしなくていいってば！ 行ってくるー！」
駆け出していった金髪の後ろ姿を見送ると、メルティーが振り返りました。

「ガトウーザ、珍しいですね」

「そうですか？」

「そうですよ」

「メルティーの考えていることくらいは人でなしの私にも分かりません。早く聞き込みがしたいですからね」

「そうではなくて。ですが、喜ばしい変化だと私は思いますよ」

「さて。私はあの少年の末路がどうなろうと一向に構わないのですが」

「嘘おっしやい。まあいいです。聞き込みしましょう」

そうして二手に分かれた私たちは、想定していた通りに「流れ星」の日が大地震の日と同じであり……さらに落ちた方角もウォル口村であったと知ることになりました。

81話 確率論

よい休暇だった。

リツカたんとお話している間こそ、幸せいっぱいでもさしく「天にものぼるような心地」だ。俺は「地に墜落する心地」の方がよっぽど好みだけだな。地面にめり込んで、天使界への帰還を拒否する構えでいきたいよな。俺は常に人間たちと共にありたい！

いってらっしゃい、頑張つてねと最高にペロい言葉をかけて手を振って見送ってくれたリツカたんにも後ろ髪引かれつつ。リツカたんペロい。リツカたん尊い。リツカたんが応援してくれたんだ、頑張れないわけがないな！ 頑張るか！

だから、これ以上ゆっくりしてちゃ残りの女神の果実が何かやらすすかもしれねえと頭を切り替える。もう既に何か惨事が起きてるかも……と過度に不安がるのはやめておく。そこまで考えても仕方ないしな。

さて。仲間たちがくれたありがたいリツカたんペロみ成分補充期間に今後のことを考えていたが、カルバドの方から見て回ることにした。この前まで灼熱のグビアナ砂漠にいたんだから、いきなり吹雪吹き荒れるエルマニオン地方に行ったら寒暖差で体ぶっ壊しちまわないかと心配になってきたからな……。

砂漠で一番へばつてたの俺んだけどな！ 情けねえ！ 恥ずかしいなちくしょう！

とはいえ寒い方は暑いよりは慣れてるから大丈夫だとは思うんだが……俺より仲間たちの方が恐らく肉体的に余程頑丈とはいえ、念には念を入れておく。女神の果実についての情報がないのはどっちも同じなんだからどっちから行ったって一緒だろ？

大雑把でいいからどのあたりにあるのかくらい分からないのかねえ。

もしかしたら、カルバドにもエルマニオンにも女神の果実がなく……あの異変の日に残りの果実は海に落下していて、途方でもない投網作業が待ち構えているかもしれないけど、それこそそんなことは考

えないでおく。

もしそうなつても俺はいいさ、何年だって、何十年だって、百年かかったって上級天使の言いつけならやれるし、同じことを何年やろうが別に構いやしねえ。ほっといて人間たちに何か悪影響がある方が嫌だしな。

そうだったら悪夢なのは優しくも正義感に溢れる信心深い仲間たちに契約解除を言い渡さなきゃならないのが嫌だと思った。そりゃ人手が多い方が見つかるのは早いだろうけど、広大な海を全部さらうとなると何年かかるか分かりやしねえんだし、まだ人間としても若い仲間たちをそんな気の遠くなる作業をしてくれと頼む訳にもいかねえから、そうなつたら天使界から天使を何人か無理やりにも連れてきて一緒にやらせるさ。みんなに別れを告げてからな。

あと二つの女神の果実を見つけるのは俺にとつては逆らいような使命だが、人間たちにとつては関係ないことだ。永遠のような徒労なんて感じさせるものか。

今はまだ、戦いや世界を回ること成長にもなるだろうから、俺は甘えさせてもらっているけどよ。本当なら俺ひとりでなんとかすべきなんだよな。なまじ見習いひよっこ天使ゆえに戦闘力的になんとも出来ねえので甘えているんだよな。師匠並みだったらひとりでも良かったんだが。ハゲ師匠はどこにいるんだか。

師匠を見つけたら「女神の果実は海に落ちたのかもしれない!」とか大真面目な顔して言うてみるかな。陸地と海の比率を考えたら残りが全部海の方がむしろ自然だろ。全部海より面積の狭い陸にあると考える方がおかしいよな……見つけ次第、師匠にも海さらいをしてもらうか。俺もやるからよ。まったくため息が出るぜ。使命だろうがなんだろうが面倒には違いないだろ!

ま、それは残りの地方でも見つからなかったらの話だ。まだ諦めはしない。

さて、灼熱の砂漠を突っ切って、船へ。暑い暑い砂漠とはこれでおさらばして海へ漕ぎ出す。地図や太陽で方角を見つつ、遠く見える大陸へ一直線だ。サンマロウ地方とグビアナ砂漠ほどは離れていない

し、最初から見えているのはありがたい。海での戦いは誰かうっかり海に落ちないか不安になってくるし、とつと大陸へ着岸しなきやな。

大陸についたら目指すはヤハーン湿地だ。そこからやや北西を指せばカルバド大草原に着くはず。天使界で学んできた人間の情報が古くなきや、カルバド草原のどこかに遊牧民がいるはずだ。こつちもまあ、広いし見つけるのは骨が折れそうだが……海をまるっとさうよりはマシだよな。

遊牧民たちが旅人を歓迎してくれるかは話は別だが……守護天使像もその「遊牧」という特性上なきそうだし、それでも守護天使はいるはずだと思いたいが、像がないならオート天使バレはしないかもしれねえよな。ちよつぴり期待しておく。

「おおー、新天地だ！ すつごくじめじめするね、アーミアスさんー！」
「そうですね。俺も自分の足でこの地を踏むのは初めてです。この辺りはヤハーン湿地というそうですよ。ここから北西に進めばカルバド大草原、東の方から橋を渡ればアシユバル地方やエルマニオン海岸です」

「……うーん、知らない地名がいっぱい。覚えられるかなあ」

「実際に目にしてみれば大丈夫ですよ。これまで訪れた場所なら地名を覚えているでしょう？」

「うん！ えつとね、セントシユタインから……エラファイタでしょ、ルディアノでしょ、ベクセリアでしょ、ダーマでしょ、ツオでしょ、船に乗って……カラコタでしょ、石のエラファイタに、サンマロウに、この前のグビアナ！ いっぱい覚えてるよ！」

「素晴らしい。エルシオンの教師なら、マテイカの地理にきつと満点をくれますね」

「あ、エルシオンはキシユクの、リヨウの、学校だよね！」

「よく覚えていましたね。流石ですよ」

相変わらずマティカは癒しだな。これから色々なことを経験する
といい。兄妹もこの地方に来るのは初めてらしく、周囲をきよろきよ
ろと見回したり、これまでの地方とはまた違った植生を観察したりと
マティカのように分かりやすくはしゃいでいるわけではないが物珍
しそうだ。

「気温は砂漠のように極端ではありませんが、湿度が極めて高く、それ
によつて視界も悪いですね。太陽まで霞んでるように見えます」

「この深い緑の植生。初めて見ます。それに、ここは水辺ではないの
に水の精霊が非常に多い。反面、火の精霊はほとんど見られません
ね。霧の影響ですかね」

「安直に考えるならそうですね。霧によつて私の炎の魔法が鈍らな
ければ良いのですが」

「それについては問題ないかと。延焼時間には影響があるかもしれま
せんが、魔物を焼く威力が減衰する程でしたら上陸した瞬間に私たち
はびしょ濡れでしょう。長く滞在すれば話は別でしょうが」

「それもそうですね、兄さん」

なんか頭の良さそうな会話をしているな。確かにここじゃ長い間
火が持ちそうにない。どうにか比較的乾燥しているはずの草原まで
抜きたいものだ。この湿地帯でキャンプするのは居心地が悪そうだ。
朝になったらガトウーザの言うように鎧の下の服までびちゃびちゃ
になっているかもしれねえ。

気温は高くないからプラチナヘルムを被っているが、息苦しいのも
問題だ。砂漠よりはもちろんマシだが……天使でも呼吸は必要だ。
飯や睡眠と違ってこっちは完全に「人並み」に必要なのは何故なのか。
俺たち天使は翼と光輪以外の外見は人間に寄せているから、人間たち
より呼吸が少ないのは見た目で違うから、とかか？ 何だっがいい
が。

まあ、我慢はできるさ。ほかの三人は開放的な頭装備だから問題な
いだろう。その分防衛が不安になるが、俺が仲間たちに飛来する攻撃

をすべて防げばいいだけのことだしな。

視界が悪く、足元も湿っていてやや悪い。あんまりペースをあげると危険だろうから、俺はあまり走らないように、と駆けていくマティカをとめた。体にキノコとカビが生える前にとつとつとここを抜けた気持ちちはわかるぜ……。

「あそこになんかあるよ！」

「本当ですね。かなり遠くに……集落でしょうか……向かいましょう、上手くいけば夜までにはたどり着くかもしれません」

「分かりました！ 見える魔物を全部蹴散らして進みますね！」

「索敵はお任せ下さい！ アーミアスさんのお手を煩わせる前に弓の餌食にしてやりますよ！」

魔物の強さは……砂漠の方と大幅に異なっているわけではないようです。つまり簡単に蹴散らせるほど弱くもなく、過度に強くもなく。少年が見つけた集落らしき場所に夜までに辿り着けるかは怪しいでしょう。

魔物たちはアーミアスさんを見ても不敬にも向かってきませんし。これって私たちが弱いせいですよ……。

魔物との戦いは命の危険なくいなせる程度であったのが幸いでしたが、想像通り遠くに見えていた集落にたどり着く前にあつという間に夜のとばりが周囲を覆いました。

「夜だと魔物が強いです。無理に進むのはやめて今日は野宿にしましょう」

聖水のビンを取り出したアーミアスさんが仰ったので、私たちは素直に従いました。星を見て方向を見極めて進むかどうかアーミアスさんは迷われていましたが……集落に着いたからといって休める場所があるかどうかはわからない、とも仰いました。

「聞いた話ではありますが、カルバドの遊牧民は温和な性格をしてい

るようです。しかしそれでも定住しない彼らに旅人が宿を借りられるかどうかについてはあまり楽観的には考えないようにします。……でも、明日にはみなさんをしっかりとした屋根のあるところで眠っていたきたいところですが」

聖水に守られた焚き火を囲んで、満天の星空を眺めて。アーミアスさんがそこにいて、兄さんも少年もそこにいて、私にはそれで十分であるのですが、アーミアスさんはお優しいのでそれでは不足だと思われるのでしよう。

眠らなければ、そう思いながら星を眺めているとひとつ、星が流れて。

あつと声をあげようとして、思わずアーミアスさんの方を見ようとする……もうすっかり朝だったのです。流れた星は夢だったのでしようか、流れ星になって天から落ちてきたアーミアスさんについて調べていたからなのでしようか。

空にはもう星はありませんでした。

82話 靴下

遠目に見えていたカルバドの集落がだんだんと近づいてくる。空を飛ばば速攻着いただろうが、魔物と戦う必要に駆られつつも仲間たちと一歩一歩大地を踏みしめて近づいていくのはいいもんだ。なんととはなしにしみじみする。

俺の優秀な仲間たちは今日も火力高めで危なげない。パラディンというのは重装備も相まってすつさまじく足が遅い職だが、それを加味してもマテイカもメルティーもガトウーザも、殺意が高いというか仕事熱心というか。舞い散る炎、かつとぶ矢、引き裂く刃が道を切り開く。頼もしいもんで、俺は全自動魔物の来世お祈り機構が何かになりかねない。もちろん、最前衛で魔物の攻撃がかわいいう仲間たちに当たらないようにはしているが、俺に攻撃が来る前に片をつけようと努力しているのが分かる。

いやはや人間の成長つてのは早いもんだ。まぶしくつてしようがねえ。きつと人間つていうのは、天使という自分では決して輝けない月を照らす太陽なんだ。俺も頑張つて強くならなきゃな！ みんなに頑張つてもらつてばっかりじゃダメだ！

「みなさんのおかげでもうすぐ到着ですね。予定より早く着きそうです」

「着いたら、いつもみたいにぴかぴかの実の聞き込みするの？」

「ええ。その時は二手に分かれましようか。とはいえ誰も土地勘がある訳ではないので今回は四人で聞いて回つても構わないですが……」
「こうして見たところ、あまり大きな集落ではないようです。今回は全員で聞いて回りませんか？」

まあそれもそうか。あの兄妹はサンマロウからセントシユタイムまで二人旅してたくらいしつかりしてるが、だからって毎回放任しなくてもいいよな。逆にマテイカだつて一人で行動くらいできるが、俺たちと一緒にいるのを好んでるのはもちろんわかる。

等しく幼く可愛い人間たちだが、毎回過保護にするのも成長の障害になるかもな。なんて、俺なんかそんなこと心配しなくて十分

すぎるほどみんな成長していつてるけどよ！ あーもう、人間が好きだ！

過保護がなんだってんだ！ と胸の中で思うくらいは自由にしたいけどな！ 全人類の面倒を見られるなら見たんだが……。天使の腕が二本しかねえのは神の過ちだろうな。片手に剣を持って、もう片方の手で盾を握っておしまいじゃねえか！

「そうですね。では買物も兼ねて回りましょう」

装備も新調したいしな。新しい武器や防具を揃えられるならそうしよう。備えあれば憂いなしってやつだ。それに誰だって商品を買った客にはただの冷やかしより口が軽くなるってもんだし、女神の果実の情報を得られる可能性を少しでも増やしておきてえ。

ということであれは普通の旅人らしく集落にゆつくりと足を踏み入れた。

「ここってすつごく風がきもちいいね！ アーミアスさんもかぶと取ろうよお、きつと涼しいよ？」

「いえ……俺は遠慮しておきます」

「えー」

「暑くないんですよ」

嘘はついてねえ。暑くもねえし息苦しくもねえ。それは確かだ。

だが本当の理由は別にある。顔出したらどうなる？ オート天使バレするんだもんよ！ 俺は学んだぜ、これをすっかり被ってたら天使だってバレないってことをな！ しかもこの大草原はマテイカの言う通り涼しい。あの砂漠と違ってどこで被っても命の危険はない。なら飯の時以外はせめて隠すぜ！ 頭をしつかり隠すだけで普通の旅人として扱われることは素晴らしい。まるで人間になれたみたいだよお、楽しい。幸せを感じるんだ。

しかもこの白銀色に輝くヘルムは俺のきつたねえ色の髪の毛まで覆い隠してくれるスグレモノだ。コンプレックスまでどうにかしち

まうのかよ！　すげえや！　さらにいえば仲間が贈ってくれたんだ。愛着もすごい。もう外す手はない。可愛い人間が俺のために用意してくれた。そう思い返せば思い返すほどさらに愛おしくなってるってもんだ。顔見えねえし、これ被ってたら多少イケメンに見えねえかな。

もつとガツツリ全身甲冑系で固めたら全身筋肉質なイケメンパラディンに一瞬くらいは見えんじゃね？　顔が見えていないのにイケメンとは？　という感じだがな、雰囲気イケメンというものも存在する。もし見えたところで残念ながら俺の背はイケメンというほど高くないし、体格がひよろひよろもやしなので本当にただの雰囲気だけどな！

まあ、マテイカが言うようにかぶとを取った方が自然なのは間違いない。ぶつちやけ集落の中でもしっかりかぶとを被っているなんてかなり浮いてるのは事実だ。仲間たちはみんな顔を出しているのに一人だけ顔を隠しているなんて、怪しいよな。「なにかやましい事でもあるのか？」とでも聞かれたら大人しく取るか……。

あちらこちらと聞き込みをしながら今日の宿を予約し……ルーラ登録したとはいえ、あまりに短期間でセントシユタインに戻るのにはリツカさんに「こいつ、ちゃんと仕事しているのか？」と思われる可能性を考慮した結果の完璧な考えによるものだ……カルバド特有の建物、ゲルというんだっけか？　それともパオだっけか？　なんとかというまるいテントでやっている店で全員分の装備品を検討しながら頭の中で情報を整理していく。

ここまで「黄金の果実」の情報はなかったし、今のところすぐさま魔物がどうのという話もなかった。特別ほかの町と変わった点といえば……なんでもシャルマナという美女が族長のところにいるとか、その美女は呪術がたいそう得意で、美しい見た目だけでなくその神通力あらたかな能力も族長も気に入ったとか、そんな族長の息子は勇敢な族長と比べても残念な程にヘタレだとか。田舎らしいといえばそうだが、族長の息子のプライバシーは旅人にまで筒抜けなのか？

いいじゃねえかヘタレでも。ヘタレじゃねえんだ、慎重な性格なん

だろ。

あとは……そう高齢でもない族長の妻はすでに亡くなっているとか。後妻にする予定なのかねえ、シャルマナという女は。今のところその魂らしい姿がさまよっているということはないが、夜にもう一度集落を一回りできたら確信できるつてところか。

亡くなる時、未練は多かれ少なかれ大抵の人間にはあるものだろう。特に寿命以外で亡くなった場合にはな。だが全部の人間が幽霊になるわけじゃない。肉体を失ってなお、生者と決して話せないのにそれでもさまよう彼らを見るのはなんとも言い難い気分になる。俺たちの力不足を目の当たりにすると……歯がゆいもんだ、見かけなきやいいんだが。

こんなもんか。あとは族長とシャルマナ、あと族長の息子に会って情報収集は完了だな。会えたらいいが……女王に会うよりはハードルが低いと思いたいが……。

「アーミアスさん、こちらの鎖帷子のシリーズはパラディンの装備だそうです。前衛のアーミアスさんが一番防具を固めるべきですのでいかがでしょうか？」

「私はあの弓が欲しいので購入してきます。あ！ 私が欲しいので自分で出しますとも！ メルティー、ここは任せましたよ！」

「へえ、鎖帷子のフードと靴下なんてあるんだなあ……あのパラディンのねーちゃんも着てたやつかあ」

「お気遣いありがとうございます。ええと、しかしフードの方はこのかぶとがありますし。今は新調しなくてもいいですよ。」

もし、店の方。足の鎖帷子の方を少し試着させていただけませんか？」

頭はどこまで隠せばオート天使バレの効果があるのか検証できてねえんだ。だからしばらくは現状維持で。

そんでなんだ、チェインニーソ？ 鎖帷子のニーソックス……か？

そんなものもあるのか。人間界は広いな。なんで生足が出る構造なんだろうな。全部覆わせてくれよ。動きやすいのは間違いないが、なぜだか今装備しているものよりは防御力に優れているそうだ。謎

すぎる。ニーソって言うくらいならメルティーとかの方が似合うだろうにパラディン限定装備かよ。

……あのワンピースの下にニーソックスを履いたリツカたんをつ想像してプラチナヘッドの下の俺の鼻が鼻血を出しそうになりながら仲間たちの気遣いの塊を汚す訳にもいかなないので堪える。
「ニーソリツカたん!!!」
「ペろすぎて現実に存在したら俺は星になるぜ!!!」

!!!!!!
いくらなんでもこれを履いてくださいと頼む訳にも買っていく訳にもいかねえよな!!! ドが付く変態の行為だよなそんなのな!!! でも見てえよ!!! スカートの隠されてるってのにどうやって俺はニーソックスって知るんだろうな!!! 知るようなラツキーな風が吹いて俺が無礼を働いた結果なら謝礼しながら両目を抉るが!!!

ペろすぎる。うっかり羽根なし天使・邪になるところだぜ。そのまま爆散! 星になるところでもあるぜ。リツカたんペろペろ。

ほら、俺のニーソ姿なんでもはやただの凶器だからな、せめてそう思つて現実逃避しつつチェインニーソを購入した。ガトウーザにぬくもりのシャプカという頭を覆う装備やらメルティーやマティカに戦闘用の緑色のタイツを買ったりもした。俺もそっちにしたかったがチェインニーソの方が防御力がちよつと高いらしい。だから素肌が出ているのに何でだ?

さて、じゃあ次は中央のテントに行くか。お目通り叶えばいいが。

83話 奇

これで聞き込みが済んでいないのは小高いところにある、おおよそ最も大きなテントだけになりました。その集落の族長のものらしきテントの警備は特に厳重ではありませんでしたし、入って話を聞くのはそう難しいものではないはずです。集落の人間は明らかによそ者の格好をしている私たちをやや珍しそうには見ましたが、それまで。

武装も解いていませんが、旅の人間と分かっていればそれを見咎められることもありませんでした。周囲はすべて魔物の住処ですしね。

そういえば、他の大陸からは基本的には海路しかないとはいえ、ここはかの有名なエルシオン学園と陸続きですし、まったく隔絶された土地というわけでもないので当然とは言えますが。思えばこれまではわりと「都会」と言って差し支えない地域に訪れることが多かったように思います。エラファイタ村などは田舎でしたが大都会のセントシユタインまでもものすごく遠いわけではありませんでしたし。

ですが、またグビアナのように目的の人物に会うだけでアーミアスさんの手を煩わせることがなさそうで良かったです。それに気候もあちらよりいいです。天使さまの世界は空の遙か彼方にあるので、きつとこの大草原のように風通しが良いのでしょうか。

アーミアスさんはテントに入る前に少し裏手に回って身だしなみを確認してから向かわれるようでした。皆まねして慣れない草原を走り回って草まみれになった足をめいめい丁寧にはたきます。

「さて、ここでは流石にかぶとは取りますか……」

「アーミアスさん、そのプラチナヘッドを気に入ってくださいっていて大変私どもとしても嬉しいのですが、そこまで無理に被って下さらなくてもいいのですよ……?」

私は名残惜しそうにかぶとに手をかけた姿を見てつい、差し出がましいことを言ってしまうました。アーミアスさんは大変に優しいので私どもの贈り物を義理堅く身につけようとなさっているのかと思っただけです。

しかし。

「あー……」

がぼつとひとおもいにかぶとを脱いだアーミアスさんは珍しく、少し目を泳がせました。

そのふわふわの髪が陽の光に透けて、あたかも星屑のようにきらきら輝くの目に奪われます。夜のとぼりのように黒々とした瞳にはきらめく無数の星が宿り、昼間だというのにアーミアスさんの周囲だけ、美しい満天の星を抱く夜空を彷彿とさせるのです。

この美貌は、この世界の中で恐らく最も星に近いところからいらつしやつたからでしょうか。神々しい美貌は相変わらず……しかし祈つても救つてはくれず、腐敗した聖職者にさえ天罰を与えることのない神をアーミアスさんに対する誉め言葉に使うのは相当無礼でしょうから別の語彙を探さなければなりませんね。ともあれ、アーミアスさんは今日も儂くも美しいのであります。ああ、私たちを導いてくださる天使さま！

「もちろん、もちろん、このかぶとのことは装備品の中で最も気に入っています。これからもそうそうその事実が覆ることはないでしょう。防御力にも優れていますしね。見た目も綺麗ですし。しかしながら……俺がこれを好んで身につけるのは必ずしもそれが理由ではないのです……」

「そうなのですか？」

ガトウーザ兄さんが君主に付き従う騎士さながらに恭しく、アーミアスさんのかぶとを有無を言わせず受け取って装備袋にしまい込み、首を傾げます。お手を煩わせることのないように行動するのは大変によろしいことですね。私も何かできるかアーミアスさんの姿を凝視しましたが最早特にないようで残念です。

もちろん、アーミアスさんはご自分でなんだってやれる方なのでしつかりと見ていなかった私の怠慢です。反省しなくては。

「えー……ううん、なんと云ったら誤解がないのか分かりませんが、その、このかぶとは頭を隠すのにちょうどいいではありませんか」

「はあ……フルフェイスですし、かぶれば頭は隠れますが……」

「ええ。その点が最も気に入っています」

「頭を隠すのが？　なんで？」

「それはもうもちろん、……俺のくだらない自己満足のためですよ」

マティカ少年が押し黙りました。なんとなく聞いてはいけないような雰囲気を感じ取ったのでしよう。最も慈悲深き天使であるアーミアさんの自己満足とは……詳しく聞いてみたいような気もしますが、わざわざ「自己満足」だなんて悪いように取れる言葉を使ってお話してくださったのです、暗に詮索するなど仰っているのです。

私も少々踏み込みすぎてしまったのかもしれませんが、アーミアさんの機嫌を損ねた様子はありませんでした。いつだって愚かな人間の言動を赦すことに慣れていらっしやるからかもしれません。むしろいつも通りの優しい口調はことさら穏やかでした。もちろん皮肉めいた風もなく。

誰よりも眩い美しさをお持ちなのに、アーミアさんは私たちの方を眩しげに眺めておいででした。心の底から私たちを愛してくださっている。それを実感しながら、歓喜の中に後ろめたさを感じません。

だって、私はまだ、ぜんぜんアーミアさんのお役に立っていません。賢者になることも叶わず、アーミアさんを完全に守りきることもできず、アーミアさんの尊いお役目をお助けすることだってこんなに拙いのです。もっと私に力があれば良かったのですが、つけるほかないのです。

「かつては……翼を持っていた頃は、こうしてみなさん人と会話するこ間とさえ出来ませんでしたから、今は十分恵まれています。こちらの姿が見えないというのはとても齒がゆいことでしたよ。そして俺は『それ以上』を望んでいるだけなんです。だからこのかぶとはとてもとても気に入っているのですよ。

……さあ、いつまでも油を売っていても仕方ありませんね。そろそろ行きましようか」

この草原はグビアナより空は広く。遮るものが何もない日の光を浴びて、この世のものではない、神のつくりあげた美しいかんばせが

わずかばかり微笑んで、優しく促しました。

私たちは迂闊にも、私たちをこんなにも愛してくださる天使様の永きの孤独に触れたようで、その罪深さに身震いするしかありませんでした。

「俺たちはしがない旅の者です。族長殿と是非お話がしたいのですが、構いませんか？」

三人の仲間……いや態度からすれば従者と言うべきか……を引き連れた少年がパオの入口付近で集落の人間に話しかけている声が聞こえたので奥に来てもらった。どこぞの格式張った大国でもあるまいし、緊急事態でもない時に礼儀正しい旅の人間と話すことが出来なほどカルバドは狭量な民族ではない。

しかしながら、いざ近くに呼んでみれば何が「しがない旅の者」だ。明らかにただの旅人ではない様子だった。

先頭にいる灰色の髪をした少年をパーティリーダーと考えた時、リーダーの背後に付き従っている男女は大変な手練に見えた。

大きな杖を持った魔法使いらしき短髪の女は一瞬たりとも周囲への警戒を怠らず、もし何者かが一行に危害を加えたならば何かしらの攻撃的な魔法を放ってみせるだろう。それくらいのことには魔法について門外漢でもすぐに分かるほどだった。そのうえ彼女の目つきは酷く冷たく、仲間以外をなんとも思っていない様子ははつきりと分かる。なお、ちらちらとリーダーを見る目は心酔気味。杖を持っていない方の手は常に手遊びのようになると目まぐるしく何か魔術めいた記号を空中に描き、現れ消えていく光る文字は無為に消えているのか、はたまたまにか魔法が静かに進行しているのか。単独でも近寄りがたい女だった。

女と対になるようにリーダーの背後に付き従う男は対照的に不気味だった。彼は大弓を背負い、四人の中では一番軽装である。見た目

だけならばレンジャーだと考えられるが、あのようなレンジャーがいるものか。自然と調和し、動物たちと心を通わせ、大いなる妖精に語り掛ける……そんなレンジャーが真つ当なレンジャーだとしたらこの男は自然の摂理をねじまげ、動物を意のままに操り、妖精すら道具として使役する邪法使いにさえ見える。醸し出す雰囲気だけでも相応なものだったが、男はずつと笑顔を浮かべていた。リーダーを見て心底楽しげに笑い、仲間の女ともう一人の少年をどこか満足気に眺め、時折虚空を見て笑みを深める。狂気すら感じるが……その瞳はどうにも、不釣り合いに理性的だった。

幸いにも、リーダーの少年にぴたりくつついた一番年若い少年はまともそうだった。リーダーと同じように剣を装備し、盾すら持たない左手でリーダーの鎧のインナーを掴みながら怖々と周囲を見回している。しかしながら、明らかに異様な男女の様子は慣れきっているのか何のリアクションもなかった。怯える姿にリーダーは気づいているのかぽんぽんと頭を撫でた。人見知りなのだろうか。少年はこわごと、しかし興味深そうにそこらを眺めていたが、こちらを見るにすつと表情をなくした。

「アーミアスさん、あの女の人がシャルマナさんかなあ？」

「マテイカ、直接聞かなければ無礼ですよ。憶測で物を語るべきではありません」

「うん。こんにちは、不思議な人！ おれはマテイカって言うの！」

マテイカというらしい少年はにこやかにシャルマナに話しかけたが、すぐにはつと我に返ったようにリーダーに譲った。

「ごめんなさいアーミアスさん、アーミアスさんがお話を聞いてからだよ」

「いいえ。謝る必要はありませんとも。マテイカが話すことを遮る権利など俺にありませんからね。」

しかし族長殿にお時間を取らせてしまうのは申し訳ないというもの。手短かに。俺はアーミアスという旅人です。これまで世界中を旅してきました。あなたがカルバドの族長ですか？」

アーミアスと名乗ったリーダーの少年は美しかった。シャルマナ

が人が丹精込めて育て上げられた美しい花束ならば、少年はカルバドの空を彩る満天の星空だった。人ならざる者による最高傑作の造形と言わざるを得ない、その不思議な少年はこちらを優しげに見やり、優美に微笑んだ。

「探し物をしているのです。そしてこれは掛け値なしの警告でもあります……」

身じろぎひとつせずにシャルマナが、よろけるように一歩後ろに後ずさったのをその時はただ不思議に思うのみだった。

84話 演技

なにか、違和感がつのる。しかしそれは不信感ではない。目の前の旅の少年はどこからどう見てもまっとうな人物だろうと思え、虚言で集落を脅かすような不審人物だとは考えないが……何か、別の違和感がある。

どうにもちぐはぐななにかがある。喉まで出かかった違和感が、確かにある。

「俺たちの旅の目的は世界中に散らばった『黄金に光る果実』を求めることです。『黄金の果実』とは……一見すれば美しく輝く美味しそうな果実です。が、それは罠であります。今まで口にしてきた人間や、果実の神々しい外見に縋って願った存在は歪んだ形で願いを叶えられ……膨大な力に体が耐えられず、姿が魔物のように変わり、性格が凶暴化したりするなど、不幸になってしまっています。

例えば人々を善く導きたいと心底願っている敬虔な人間でさえも果実を食べただけで邪悪な意思に取り憑かれ周囲の存在を攻撃したり、人間の手のひらサイズの生き物がたったひと口黄金の果実を口にしただけでドラゴンさながらに姿が巨大化、凶暴化したり……そのように危険なものであります。

良き隣人たちがそうとも知らずに不幸になるのを避けたいのです。ここに黄金の果実があったならば食わず、願わず。どこかで見かけることがあればこれを念頭に置いて近寄らず。俺は危険な黄金の果実を回収することを目的としています。が、それ以前にまずはご自衛願いたく」

美しい少年の言葉は、どこに根拠がなくとも不思議と聞き入りたくなるような、説得力が伴ったもののように思えた。彼は非常に真摯に語ったし、真面目な光を宿した目に曇りなどなかった。

話自体は突飛だ。とはいえ、わざわざそのような虚言を流布して回る意味があるだろうか？ 「黄金の果実」なぞ聞いたことがなかったが、注意喚起ならばまあそうか。回収したいということは……彼の元いた場所にはそれがあつたのだろうか。だが、どちらにせよカルバド

に存在しない以上はあいわかったと返事する以外のことではできまい。

その「黄金の果実」は少年の言葉通りならば高価に見える外見をしているようだが、いくら見た目が良いものでもいつまでも青果を飾っていることなど出来るはずもないし、いくら見た目が良くとも金銭的価値はどうだろうか。少年が見つけた頃には腐り落ちているのが関の山ではないだろうか？

さらに言葉通り口にすれば不幸に見舞われるとなれば……その見た目で周囲を騙す災厄の種、といったところか。

少年たちが「黄金の果実」を集めて利益を得ている集団である可能性も考慮したかったが……いかんせん探し物が「果実」である。日持ちするものではないのにそれを慣れた旅人らしい彼らが不安定なそれを収入源とするだろうか？ こちとら遊牧の民である。生活の不安定さについての不安についてはよくよく身に染みている。不安定さに継るなど、選びたくはない選択だ。

であれば、彼らはそれ以外の理由で警告して回っているのだろう。例えば……その果実を生み出した場所の者である、など。不祥事を揉み消すため、あるいは不祥事を未然に防ぐ為ならばその行動は矛盾も不自然さもない。

人が異様に良い、ということを除けば。しかし、そのような埒外の「善人」を演じているようにも思えなかった。

「なるほど。忠告感謝する。しかしだ、今のところ『黄金の果実』の話は聞いたことがない。もちろんすべてのカルバドの民の見聞きした物を把握しているわけではないから確実とは言えないが……」

「いえ十分です。全員ではないのは重々承知ですが、すでに聞き込みと注意喚起はさせてもらいましたから」

「そうか……して、旅の方」

美貌の少年はこちらから何かを問われるとは思っていないかったのか、不意をつかれたように瞬きした。が、すぐに微笑んで首を傾げる。

ようやく「違和感」の答えを見つけた。

どう見ても彼はずっと年下の子どもに見えたが、何故か遙か年長者を相手にしているような……不思議な感覚がまとわりついているの

だ。小柄な体躯の少年だというのに、彼の目を見てみると妙に緊張する。そのちぐはぐさはどこからきているのか。いくら若くして旅をしているゆえに大人びているといっても限度があるだろう。

一種の貫禄がこちらを射抜く。穏やかで、優しげで、それでいて強いまなざし。

がたん、と後ろで誰かがつまずいたような音がした。ナムジンだろうか。

「なんででしょうか？ 俺にお答えできることならいいのですが」

彼が気遣わしげにこちらを見上げた時だった。

外が妙に騒がしい。人の声が大きい……いや……これは悲鳴だ！

「何事か！」

「族長！ 魔物が入ってきて暴れだしたべ！」

しつかりと魔物よけはしていたはずだが、どこか手薄になっていたのか?! 慌てて外に飛び出すと彼らも一緒に飛び出した。それどころかりーダーの少年は仲間に指示を出そうとしながら、本人もすばやく剣を抜く。

戦いに手慣れている、そう思った。魔物のすみかを潜り抜けてここまで来た旅人にしても、戦い慣れている。三人の護衛はいるが、自分も戦うのか。

少年の正体がますますわからない。

逃げ惑う集落の人間と勇ましい旅人の姿をどこか他人事のように私は眺めていた。思考が停止している、と冷静な私がようやく囁く。そうだ、魔物を倒さなければ。私が出るよりも跡を継ぐ息子に対処させねば……シャルマナは強いが、だからといっていつまでも甘やかしてはいけないだろう。

臆病なナムジンをも優しく見守る彼女は好ましいが、次期族長となるならばナムジンもまた強くならねば。

「あれは……マンドリルです！」

「アーミアスさん、マンドリルはご存知の通りかなり凶暴な魔物です！ このままでは人的被害が！」

「攻撃しますか?!」

「おれはいつでもいけるよ!」

「待ちなさい、今攻撃するのは……流れ弾の方がかえって危険かもしれません! あくまで脅かし、追い払う方向で!」

流れるような指示を聞きつつ、飛び出していく少年の背が小さくなっていく。旅の人間に集落の防衛を任せるわけにはいかない、とようやく私は理性を取り戻した。

同時に、猶予も理解する。あの少年たちは腕がたつようだ。ならば最悪の事態にはならないだろう。であれば息子の成長を促す余裕がある。

「ナムジンよ! あの次期族長としてあの魔物を倒してみせなさい!」

「……ボクが?! そんな! ボクに、魔物を倒すなんて恐ろしいこと、できるわけがない!」

なんと情けないことか。ナムジンは集落の危機だというのに涙目で一目散にテントの奥へ逃げ込んでしまったではないか。しかし息子を叱りつける時間はない。今は魔物をどうにかしなくては。

「まったく……!」

「いいではないか。ほほほ、まだまだナムジンには可愛いところがあるんじやの」

シャルマナは泰然と笑っている。彼女の視線の先では旅人が魔物の元にたどり着き……。

魔物は、あの美しい少年を見るや、慌てたように逃げ出したのだ。

「ほう……?」

シャルマナが少年を見て意味ありげに眉をあげた。

85話 希望的

逃げてったマンドリルを見送って、アーミアスさんはほっと息を吐いた。それを聞いて、メルティーもガトウーザも武器をすぐに下ろして走ってきた。おれは最後まで剣を構えてたけど、もうなんにもなかった。

「逃げてくれて助かりました。仮に手負いとなれば何をするか分かりませんし。あのマンドリルに多勢に無勢を理解する知性があつたことは大変幸運なことですね」

「それもこれもアーミアスさんが素晴らしいからですね！ 平伏します！」

「アーミアスさんの高い実力あるからこそですね！ 祈ります！」

「ええと、俺の戦闘能力についてはどの程度かご存知のはずですが。どうかその、変な動きはその、控えてください」

「変な動きなどしていませんよ。ただ感動の涙が止まらないだけです」

「これは我が信仰心を具現化した、敬虔者の祈りです。日課のようなものです」

「……」

じゃあどうして、あのマンドリルは人間の住んでいるところに入ってきたんだろう？ 逃げれるくらい頭がいいのに、ゼーンぶ敵しかいないところになぜわざわざ来るかな？ 一匹で？ なんのために？

とつても不思議だったけど、どうしてなんて分からなくておれは何も言わなかった。アーミアスさんも何か考えているみたい。あのマンドリル、ぜんぜん攻撃してこなかったもん。

何か欲しいものでもあつたのかな。この集落にしかないおいしいものが欲しかったとか？ わからないや。目的はあつたはずだよ？

「まあとりあえずはよしとしましょう。手分けしてカルバドの集落の方々に怪我がないか確かめましょうか」

「はいー！」

おれはそんなに頭良くないから、考えたってわかるわけないや。大事なことならきつと頭のいい誰かが気づいて教えてくれる。すつかり他人まかせな考えだけど、だってただでさえ頭の良くないおれが頭を使っただって、いっぺんにいろいろ考えることなんてできないから「できること」さえできなくなってしまうだけだもの。おれ以外はみんな、うんと頭がいいんだもの。

考えるよりも、あつちへこつちへ駆けずり回ってケガ人を探すのはおれにも「できること」だから、やらなくっちゃ。

でもすぐにわかった。びつくりして転んじやつた人がいたくらいで集落の人たちはみんな大丈夫だったってこと。それを一番偉い人……さつき話した人……に報告したアーミアスさんのことをすぐに気に入ったみたいだった。

「いやはやあの旅人たちがきたら迅速で素晴らしい対応だ、シャルマナ。そなたはどう思う?」

「言うまでもなく。ほほほ……彼らがこのカルバドの住民であつたらと思うほどよ」

アーミアスさんが天使さまってこと、すぐにわかる人とそうじゃないひとがいるけどこの偉い人はわからないみたいだった。シャルマナさんはどうだろう? なんとなく、わかっているのかもしれない。でもイマイチ、どつちかわからなかった。

シャルマナさんはなんだか「違う」んだ。なんだろう。「何」とは、分からないけれど。きれいな女の人だけど、雨の日の夜みたいに冷たい目の色をしている。まるで教会からはき出される時の箒のチクチクした痛みと、ありついた砂交じりの古いパンの味。

ううん、シャルマナさんがそういうことをする冷たい人だとは思わないけれど、シャルマナさんを見ているとなんでか昔を思い出した。泣き虫、ひとりぼっち、親なし、捨て子。

思い出すだけでマヌケな泣き虫に戻ってしまえそう。おれはアーミアスさんの服の裾をぎゅつとつかんだ。するとぼんぼんと頭を撫でられる。アーミアスさんは優しい。

そのまま外で立ち話もなんだとテントの方にまた案内された。外

国の、お茶？ らしい知らない味の飲み物を出されて、みんな一息つくど偉い人は大きなため息をついた。

「まったく、あなたがたにひきかえ我が息子は。全く嘆かわしい……」
テントの奥の方で頭を抱えてうずくまっていたお兄さんが恐る恐る立ちあがった。黒い髪の毛を後ろで三つ編みにして、帽子をかぶっている。カルバドの他の人たちよりは服が綺麗だなあ。あつ、偉い人の息子だからか。

おれよりはなんこかお兄さんだけど、メルティーやガトウーザよりは年下に見える。アーミアスさんよりは年下だと思う。誰だつてそうだもの。見た目だけなら……同じくらいかも。

「もう魔物はいませんか……？」

「いませんよ。こちらに危害を加えることなく、敵となる相手の数を恐れたのか逃げていきましたから。俺たちは居合わせただけです」

「そう、ですか。じゃあ、ボクはこれで……」

それでどっかに行っちゃった。気まづかったのかな。戦うのが怖いなんてそんなに珍しいことでもないし、それにいきなりのことだつたんだからそんなに怒らないでもいいのにね。外だつたらいつでも覚悟があるけど、ここは普通、安全地帯じゃないか。不意打ちのことにそんなに怒るなんて怖いよ。

なんとなく、シンパシーを感じて、勝手におれが言い訳していた。ちよつと分かる気がしたから。

なんだかこの偉い人はアーミアスさんに何か頼みたそうにしてたけど、メルティーとガトウーザがとっても睨んでいたから出来なかつたみたい。アーミアスさんは優しいから、頼みつて大抵聞いてしまいそうだもんね。誰かが今すぐ危ないとかじゃないければ、なんでもかんでも頼まれたくはないよね。

アーミアスさんにはもうやることあるんだもの。

偉い人のテントから出て、アーミアスさんは周囲を見回した。太陽はまだ頭の上。さつきよりちよつと暑いけど、涼しい空気がさあつと吹いている。

「さて、まだ日が高いですね。みなさんに余力があれば今日のところ

はさらにこの地方を探索したいところですが。……お元気そうですね。

では、何か心当たりはありませんか？」

「はい！ 遊牧民はその名の通り固定の拠点を持たないはず。しかもここまで大きな民族なら狩りのために各地に拠点を作るかと。ここがメインの居住拠点だとすればサブの拠点もあるはずです。そちらには会ってない方もいるでしょうし、追加の聞き込みはいかがでしょうか？」

「見識がありますね、メルティー。そうしますか。先ほどの聞き込みで北の方に別拠点があると小耳にはさみましたね」

「行こう行こう！」

「ええ。」

おや、おかえりなさいサンデイー、あなたの探し物は見つかりましたか？ ……そうですね。じゃあ一緒に行きましょう」

みんなで北へ向かう。おれには見えていない妖精さんもいるけれど。

戦いに夢中になって、おれはすっかりそれまで考えていたことを頭の中からどこかにやった。

何度目の当たりにしても、人間の思考はあんまし理解できない。やっぱりどうしたって天使と人間は感性が違うから仕方ないのか。そもそも「違い」を見せつけられているようで悲しいが……。

俺としては、愛しい子らが他の人間に「臆病」と呼ばれる性質タチでもいいと思うんだが、より長く生き残れそうでお。だが、なぜか一般的に人間は「勇敢」な人間の方を良しとする。「勇敢」な人間とかよ、「臆病」な人間よりすぐ死んじまうが？ 死んじまうくらいなら「臆病」なくらいでいいよな？ これが考え方の違いってやつだ。

人間の考えもわかる。「勇敢」な人間は他の人間を守る場合もある

し、新しい何かを見つけてくることもあるし、「勇敢」な人間がいたからこそ今、世界中に人間がいるんだろうよ。

だから「勇敢」ってのが悪いわけじゃないけどよ。「勇敢」な人間だって同じように可愛いけどよ！ いいじゃないか魔物と戦いたくなくたって。

いや考えても仕方ないか。

てか、ここまで幸運にもサクサク女神の果実を見つけてきたけどよ、どこかで見かけたとかいう噂のひともないってことは今回こそうすうす考えていたみてえにこのだっぴろい草原のどこかに落ちるとかそんなことはねえよな？ カルバドの別の拠点とやらにも黄金の果実の噂ひとつなかったら俺は草原を駆け巡るしかないように思えてくる。先に魔物が拾って食ったらめちやくちや危ないしな……手遅れじゃなかったらいいが。あーやだやだ。考えるだけでおぞましい手間だ。

女神の果実を検知できる魔法でもありやいいのに。確かめるすべがなく辛。見つからないほかの果実もそうなってそうでマジで怖い。普通に海に落ちていて魚が食ったらどうしようか。ぬしさまみたいに運良く見つけれたらいいが、そうはうまくいきそうにない。リツカたん助けて！ 俺、過労で星になっちまう！

前途多難、どう考えてもペーペー天使ひとりに任せる仕事量じゃないだろ。せめてほかの天使にも同じ使命を課して区域を分担させて欲しかった。単純に天使手が足りねえよ、どう考えても圧倒的に足りねえよ。なあ?!

だからこそ、師匠が俺に下った命令を聞いてひっそり手伝ってくれていると信じるぞ。師匠はマジで合理的だから、ひよっこびよ天使にはこの命令がどれだけ荷が重いと分かってオムイ様を見事に説得し、自分も華麗に女神の果実探しに参加してくださいに違いねえぜ。そこらへんの天使とはひと味もふた味も違う素晴らしいハゲだからな！

無理くりポジティブに自分を励ましていると、遠くになにやら人工物が見えてきた。テントっぽいな、あれか。

「あ！ あそこに馬が見える！ 人がいるみたいだね、アーミアスさん！」

「目がいいですねマティカ。もぬけの殻でなくて助かりました。それでは聞き込みと参りましょうか」

せめて誰か、少しくらい情報を持っててくれよ。頼むからさ。

86話 疑惑確信

カルバドの別集落に到着しますと、集落の狩人らしき人間二人に羽交い絞めにされたナムジンさんがいらっしやりました。相当に嫌がっているようで、自分よりも年上の男二人を振り払おうともがいています。

嫌がっているのなら止めた方が良いでしょうね。ですが事情も分からないのに部外者が口を出していいのかどうか。判断付きかねて。私は思わずアーミアスさんを見ました。かぶとを被ったアーミアスさんの表情はうかがえませんでした。

「あの人、確かナムジンさんというカルバド族長の息子ですね。ご自分から魔物と戦う前線近くに来るような性格には見えませんでした……」

「族長の差し金かもしれないかもしれませんよメルティー。……やはりそのようです。あの後、無理やり連れてこられたようですね。おや振り払った。なかなか活きの良いお方だ」

「精霊がいうならそうでしょう。お話を改めて聞いたら良いのですが……あら、出て行ってしまいました。魔物がたくさんいる外に行くとは。アーミアスさん、追いかけますか？」

あれだけ魔物に怯えていたのです、戦いの経験も少なそうでしたし危険でしょう。優しいアーミアスさんならきっと彼を助けるよう言うはずだと思って振り返ると、やはり彼を目で追っているらしいアーミアスさんは走り始めていました。

「ええ。メルティー、目視できる間だけでも彼に害を及ぼしそうな魔物を遠距離から牽制してください。行きましょう」

「分かりました！」

「ガトウーザは彼を害しそうな魔物との戦闘になった場合、初めに狙撃をお願いしますね」

「承りました！」

呼び止めても初対面も同然です。そうアーミアスさんも思われたのでしょうか。声をかけることなく、しかし特別気配を消すこともな

く追いかけていきます。幸か不幸か私たちに行動は気付かれていないようでした。

彼はさらに北へ進んでいき、そのまま橋を渡っていきました。魔物は幸いにも彼を襲おうとはせず、そのまま橋を渡って左の方へ駆けていくところで視界から消えてしまいました。視界を遮るものはあまりないので、そう派手な色の服を着ていらっしやる訳でもありませんし、その足さばきは巧みなものでした。

……実は実力者なのでは？

「足が早い……精霊によるとこの先に洞窟があるようですね。彼はそこに向かっているようです。ただ、目で追えている訳ではありませんが……」

「ナムジンさんは精霊を撒いたのですか？」

「はい。とんでもない人間ですね……」

アーミアスさんがガトウーザの方を見、そしておもむろに、高らかに拍手しました。

「これだから！ 同じ人の理の外にいる者なら分かりませんか？ 人間というのはこれだから最高なんですよサンディ！」

そのかんばせが見えなくても、声色は心底楽しそうでいらっしやいました。

「特定の精霊以外はどうかやら見えないのですが、精霊の皆様方も同意していただけるとはいいではないでしょうか？ ああ人間ってこんなにも素晴らしい、と！ ああ、サンディはどう思います？」

そのまま機嫌良さげに彼ははずんとナムジンさんの消えた方向へ歩いていかれたので、ぽかんと口を開けて呆気に取られていた私たちは、慌てて走って追いかけたのでした。

この麗しの天使さまはいつでも慈悲深く私たちを導いてくださるし、私たち人間のことをこうして心底好きでいらっしやる。私たち人間はいつだって愚かしく、いつだって神の御心に背くことを平気でするような罪深き生き物であります。

しかし、もしも神に背き裏切ることがあったとしても、他の数多の天使さまを裏切ることがあっても、アーミアスさんだけは裏切りたく

ないものですね。だって。あらゆるアーミアスさんへの敬愛を無視しても、人情として好いてくださる相手のことは大事にしたいものではないでしょうか？

その小柄な、しかし誰よりも広い背を追いながら。私はそう誓いつつ。

「……」

青く、淡く、空気に透けて輝く姿は生身じゃねえ。魂だけになったいわゆる幽霊という存在だ。この世に未練を残した生きとし生けるものの影。そこにいたのは女だった。この時代の死者にしてはまだ若かったが、……いや。過ぎたことを嘆いても目の前の魂を慰めることなんてできやしない。死というものは誰にでも平等に訪れる。それが早いか遅いかは俺たち天使にとつては大した違いじゃない。

とはいえ、まだ年若い……つっても彼女の見た目ではなく俺との年齢的な意味で……姿の霊魂を見かけるとやるせない気持ちになるもんだ。

俺たち天使は彼ら彼女らに向き合い、その未練に寄り添い、そつと背中を押さなくてはならない。ある時はただ己の死に気づいてもらうだけでいいし、ある時は少し力を貸して未練を解消するときもある。またある時はただ静かに話を聞く。そして、この大地から旅立っていく姿を、霊魂を見ることを神より赦された天使だけが見守る。

それは俺たちに課せられた使命であり、人間を護ることと同じくらい重要なことだ。

……そういや、前にカラコタ橋ですれ違った少女の幽霊は、あの後天に召されたのかどうか少し気になった。

「アーミアスさん？」

訝しげに、そして心配そうにメルティーが俺に声をかけてきた。

はた目にはいきなり俺が固まったようにしか見えねえよな。心配

かけて悪いが、この女の幽霊と会話できるのは天使だけ。いや、幽霊と同じく人の目には映らない存在である妖精や精霊にも見えるんだろうが、彼らがわざわざその気まぐれな風みみたいな気遣いを見せて人間の幽霊をどうにかしてやろうと思うことはあんなまねえだろ。

事実、いかにも清纯そうな天使どもだって、幽霊の対処に関しては基本的には「上からの命令だから」動くわけで、そして「より多くの星のオーラが貰えるから」って理由でやっているだけにすぎない。……俺だって。人間たちのことは心底好きだし、何より護ってやりたい可愛い存在だが、やっぱり俺はただの天使で、命令に従っているだけなんだよな。

利害の一致ってやつで俺は幸運だ。まあでも、幽霊は多少ほついても死なないが、生きてる人間は死ぬから幽霊を相手にするのが消極的になるのは分からんでもない。俺だって死にそんな人間がいたら幽霊放置するわ。

さて、逃げられたり怯えられたりすることはなさそうだが、繊細な人間の魂を下手に刺激しても仕方がない。どうにかしないと。「未練」はやっぱり、残しちまった者に対してか？

「自分が死んでいるという自覚はなさっているようですね、かつて愛しき人間だった貴女。迷える貴女は……ナムジンさんのお母さまでしようか」

顔立ちが似ているのは間違いない。その雰囲気も。ナムジンがさつき言っていたようにマンドリルのポギーは亡き母と助けたみたいだし、ふたりの友情を眺めに来た幽霊なんて他にいないだろ。

実はナムジンが有能な少年で、周囲を騙し通してヘタレを演じつつ父に取り入った得体のしれない女の正体を暴き、カルバドの将来を案じていたという素晴らしい行動について改めて賛辞を贈りたいところではあるが。

生きている人間と同じように、すでに死んでいる人間だって俺は導きたい。その短くもまばゆい人生を終えてなお、行くべきところへ行けない者を正しく神のおわす場所へ導かなくてはならない。

だからちよつとだけ、ナムジンの方の手伝いをしたいという感情は

そこにおいておいて。

彼女はしばらく困ったような、悲痛な顔をしていたが。

「私はパル。勇敢なるカルバドの族長であるラボルジュの妻にして、あなたの言うようにナムジンの母です。このままではあの子がシャルマナに殺されてしまう。どうか……どうか、ご助力頂けませんか、天使さま」

……死んでたら顔見えなくてもバレんのな、天使つて。まあいい、この場合は話が早いってことで。

「もちろんですよ。守護天使の名においてあなたの未練を晴らしましょう」

「ああありがとう……ここから東の岩山のふもとに、魔物に滅ぼされたカズチャ村という場所があります。そこにはアバキ草という特別な力を持った薬草が生えているのです。それをナムジンに渡してください。あの子なら正しく使えるはず」

「滅んだ村……」

「ええ、そこは。私の故郷でしたの……」

それだけ言い終えて、彼女の姿は消えていた。召されたってわけじゃないだろう。心配でたまらなくてナムジンを追ったのかもしれないねえ。

とりあえず指針は決まったな。幽霊まで警戒しているってことはシャルマナは黒なんだろう……人目につかないところで何かやらかけたのか、それを見ていたのかまではわからないが。

情報共有したら早速向かうか。シャルマナにナムジンが殺されてしまう、なんて物騒な話だ。日が傾き始めた事だし本当なら明日にしたいところだがそうも言っていられねえな。みんなには悪いが闘志はバツチリあるらしい。目をキラキラさせた三人が俺の言葉をいまかいまかと待っている。

そんなに素直でよくここまで無事に育ったな！ 可愛い奴らめ。

87話 鎮魂歌

草原をぬけ、妙に暗い山岳部を分け入り、獣道になりかかっている街道を行く。周囲は魔物の気配こそ濃厚だが、人の気配はとんとなしい。カズチャ村というのは魔物の襲撃で今は亡く、再興していないのはつまり今も魔物の危険が去っていないという証左でもある。

魔物側にどんな思惑があったのか分からないが、せめて村の人間たちの魂が慰められていたらいい、と思う。当時の守護天使は滅びゆく村をどう思っただろう。

状況から推測するに、カズチャ村が滅んだのはナムジンの母パルが嫁いでからだろう。パルはナムジンの母親だからどれだけ多く見積っても二、三十年くらい前の出来事、ということになる。俺の時間感覚が天使然としてズレてなきやな。

つまり、当時の俺もウォル口村の守護天使であり、見習いだった。俺は自分の村でいっぱいいたと周囲に思われていただろうし、自分の担当区域が魔物の毒牙にかかろうとしているとしても……俺が上級天使でも戦力になるのかも分からない見習い天使より師匠のような実力者に助太刀を頼む。

ひよっこに下手に別所の危機なんて伝えて突っ走られたくないし、俺から他の見習いたちに話が漏れて不安が蔓延しても困る。だから、俺が知らなかったのは理にかなっている。
だが。

マジで、当時の天使界に特別な空気はなかった。村ひとつ滅ぼされたってのにもう少し剣呑としていいんじゃないか？ 内々に済ませたのか？ 結果滅んだのか？ カズチャ村の守護天使はどうなった？ ココ最近どこかの守護天使が死んだとか聞いちゃいねえけど。

なんて、今更ほじくり返したってどうにもならないことだが。近年、人間の村落が滅んだなんて……俺が天に遣わされる前じゃねーんだぞ。なんで俺は、知らなかったのか。

「随分、毒沼が増えてきましたね」

「魔物の様相もなんだか草原の方とは違いますね、兄さん」

「カズチャ村は魔物の襲撃で滅んだ村。今も村の内部には魔物が多く潜んでいるでしょうし、魔物よけのなくなった人間の村など格好の根城でしょう。みなさん気を引き締めていきましょう」

「うん、気をつける」

オムイ様は偉大な方だし、師匠は言わずもがなだし、ラフエツト様やほかの上級天使もみんなその役職に恥じない立派な方なのを知っている。

不信心、など。持つはずもねえ。人間に対する感情の強さなんて俺ごときじゃ敵わないくらいあるに違いねえし、人間大好きアピールをしているひよっこ天使に人間の村がひとつ滅んだなんてわざわざ教えていいことなんてねえし、ウォル口村は平和だったし。

ぐるぐる考え込んでも仕方ない。

向かって来る魔物のみを撃破し、そしてようやく。たどり着いた村の入口。生き残りがいたのか、それとも全てが滅んだあとにカルバドの人間がやったのか分からねえが、そこには結界が貼ってあった。

「魔法でこじ開けましようか?」

「叩けば壊せるかもしれません」

「斬ろうか? できるかな」

「ええと」

なんでお前たちはそんなにやる気なんだよ。まずは穩便にだな。

『旅の方。今お開けいたします』

誰かが先走る前にパルが開けてくれた。武器を構えていた物騒な奴らは結界が無くなったのを見て俺の事を見てきたが違い。天使に結界を破る特殊能力なんてねえよ。出来るやつもいるかもしれないねえけど、それは人間と同じで訓練の結果だぞ。

「今のは俺ではなくて、パルさんの力ですよ」

「そうなのですね! 死者の協力まで仰げるとは流石はアーミアスさん!」

「まったくです!」

天使信者どもには曖昧に頷いておき、とりあえず中の気配を伺ってみる。

明らかに魔物がいるな。素人ではないが凄腕って訳でもない俺でもわかるんだから沢山いるんだろう。

「外より警戒した方がいいかもしれないね。それでは皆さん、アバキ草らしきものを見かけたらすぐに報告してください」

「うん！」

どんな見た目なのか想像もつかないが。見たらわかるものであることを祈ろう。

荒れ果てた集落、我が物顔でかつての人間の家を根城にする魔物たち。

俺は成立理由からして人間寄りの存在だから、どうにも悲しくなっちゃまう。襲撃に参加していない二世以降の魔物からしたら襲撃者は俺たちの方なのにな。だが、どれだけの人間が死んだのか想像もつかない以上同情するわけにもいかねえ。向かってくるならば天に送って来世に期待するしかねえ。

家に入った途端こちらに殺意を向けてきた魔物を斬り捨てつつもそう思う。

「まったくキリがありませんね」

「いくら焼き払ってもここを魔物から解放するのは難しそうです……」

「そこまでは望みません。目的を達成すればすぐに離脱しましょう」「アーミアスさん！ こっちからもつと奥に行けるみたい！」

正義感バツチリの兄妹とやる気満々のマテイカ。長い目で見れば時間に余裕がある俺はともかく、幼い人間たちがそんなこと気負わなくてもいいのにな。全部解決したら天の方舟に乗って神の国に行くなんて寝言言ってねえで天使で徒党を組んでここをどうにかしようぜ。……きつと、ナムジン以外にもあの集落にはここの血を引く人間がいるだろうからな。

幸い、ここは魔物の根城になっているとは言ってもボスの存在が束ねているわけではないようで、統率もなければ特別な攻撃を仕掛けてくる気配もない。

なるべくすり抜けるように奥へ奥へ向かい、そして程なくして周囲とは気配の違う横穴を発見した。

「ここが最深部のようですね。どこか不思議な……神聖な気配を感じます」

「魔物もいなそうだね」

とはいえ警戒しない訳にもいかんだろ。剣を構えつつ突入すると、そこには。

『あれ、お兄ちゃんだあれ？』

『おや旅人さんかい？ 魔物の襲撃があつたつてのに訪れるなんて運が悪いね。でもここまで来れば安心だよ』

『そうだべ、ここはアバキ草が護ってくれるからな！』

『おびただしい、折り重なる骨が、』

『怨念はないのに、たくさん、気配が、子どもの骨も！』

『みんな、みんな、ここで死んじやったつてこと？』

俺には骨は見えない。死体の山なんて見えない。ただ、そこにいたのは、そうだ。この規模の集落として平均的な数の人間の幽霊たち。自分の死すら理解出来ず、ここで魔物が過ぎ去るのを待ち続けて死んでしまったたくさん亡霊たち。淡く青く輝く魂たちははつきりとその姿を映し出し、死に気づく気配のなさを示しているかのようだ。「失礼、俺は旅の者なのですが。ここにはアバキ草という神聖なものがあるそうですね。ご利益に与りたく、一度拝んでみたいのですが。それはどちらに？」

『奥にあるよ、お兄さん』

『アバキ草が護ってくれるからな！』

『心配しないで、大丈夫よ。すぐにカルバドが助けてくれる』

『パルがすぐにカルバドを説得してくれるべ』

『カルバドに助けを呼びに行った若いのは無事だといいけど』

『お兄さん、都会の人？ 肌が真っ白くて、日焼けしてなくて、いい

なあ。なんだかお兄さんの傍は落ち着くなあ』

たくさんの幽霊たちが口々に言う。無垢な目で、俺の事を見ている。

三人の生者たちのことに気づきもしないで、まっすぐと俺だけを。きつと本当は理解しているんだろう。だから三人の言葉は耳に入らないし、見えねえし、天使である俺のことを本能的に理解してしまっている。あくまで推測だが、悲しいことに否定できねえ。

「アバキ草は奥にあるそうです」

『なんだ。お兄さんも見ていくべ』

『ちつとくらい触っても平気だからなー!』

彼らの楔になっている、なまってしまっている、アバキ草を摘み取ってしまえば、あるいは。

アバキ草の護りのお陰でここには魔物が入って来れなかった。だが、きつと、助けは来なくて。彼らは苦しんで死んだかもしれないし、アバキ草が慈悲をかけたかもしれないし、もしかしたら、もしかしたら、護りきれなかったこの守護天使がせめて慈悲をかけたかもしれないえ。

そんなものは、後から来た責任のない俺が勝手に言ってるだけだ。どな。

「アーミアスさん、」

「こちらです。着いてきてください」

ピツタリと俺の俺の後ろにくっつけて三人を誘う。きつとこの人間たちは道ずれになんてしないだろうけどな。それでも、きつとここまで死者を目の当りにするのは初めてだろう。

奥にあったのは、明らかな魔力を感じる薬草だった。目のような特徴的な花を咲かせた……不思議なそれ。光も当たらぬこんな場所で不気味な程にしつかりと存在している。

だが、きつと。それは祈りで成立しているのかもしれない。霊体のエネルギーには事欠かんだろう。

それを俺は摘み取る。迷わずに手を伸ばし、根元からブチリともぎ取った。そうしなくてはならなかったからだ。

そうしなくては、ならないからだ。

『てんしさま』

子どものような声を聞いて、俺は振り返りたかったが、そんな資格はない。

『ありがとう。パルによろしくね』

パルも、もはや、葬られたあとだというのに、それも知らない。知れない。こうも長く魂だった死者はもう現世で起きた新しい出来事を理解できないだろう。

だから、きつとこれでよかった。

ひとつずつ消えていく気配を感じる。あるべき場所に召されていく魂たち。ようやく進めるようになった魂たち。

俺たちはリレミトで即座に脱出した。

88話 作戦

「……彼らは、恐らくアバキ草の神秘の力で現世に繋ぎ止められていました。俺が最後の花を摘んだことでカズチャ村の住人たちの魂が召されたのは気配でわかりましたので。彼らをきちんと吊う時間がないことは悔しいですが、今は一刻を争います。このままナムジンと合流しカルバドに戻って、シャルマナの正体を暴かなくてはなりません」

「ええ、感傷に浸るのはあと、ということですね」

気丈な言葉だった。でも、間違いなくこの場でいちばん悲しそうなのはアーミアスさんだった。

こみあげる悲哀が、魔物への憤りが、そして恐らくご自分への怒りを必死に押し殺して、気丈に振舞っておられた。

優しい優しい、この世界で最も慈悲深い天使様。兄と少年と私の道しるべ。ああ、その心が常に穏やかである世界であればいいのに。

「あの地震の日から魔物が活発化し、各地の封印が解け物騒になってきたようですが。それ以前からこのような悲劇が起きていたことを知らなかったなんて、守護天使として恥ずべきことなのです……」

独り言のようにそうごちて、地図を広げ。カルバドの集落よりは北に位置している小さな拠点……アーミアスさんは聞き込みでその場所を知っていたのか、既に地図に書き込まれていた……を指さされた。

「いくら親子に渡って友好関係があるとはいえ、あの若いマンドリルが魔物の身であることには変わりありませんから比較的目立ちにくい狩人のパオの方にいらっしやるはずです。休憩もなく強行突破が続いて大変申し訳ありません。この埋め合わせはこの後必ず」

「いいの！ ぼくたち分かってるから。ね、いこ？ ぼくたち、アーミアスさんが守りながら戦ってくれたから全然元気！ 全然怪我してないし、怪我してもすぐ治してくれるし！」

「そうですとも！ お望みとあらば視界に入った魔物を全て矢で狩り尽くしてみせましょう！ いえいえ、もちろん！ 慈悲深きアーミア

スさんは敵対行動を見せない魔物であれば見逃されるでしょうから、私の大口叩きに過ぎませんけど！」

「どうやら私も含めてみんな励ますことというのが苦手らしく、だけれども。」

「アーミアスさんには意図が伝わっていて、ほんのちよっぴりだけ、優しい顔をしてくれた。」

「なんて頼もしいんでしょう。俺は仲間に使われました」

そして、あとは口も聞かずにみんなで魔物を避けながら走って、走って、急いで、あの悲しい場所から優しい天使様が早く遠ざかれるように走って、無我夢中で進み続けたのでした。

「ああありがとうございます……！」

「確かにお届けいたしました」

小柄な旅人の少年は、歳の頃は自分と同じように見えた。もしかすると年下かもしれない、けれどもその様子からは旅慣れている。だからその重装備具合を見るとどうしてもなかなか頼れそうに思えた。それに三人も仲間を連れてくる。いずれも善良そうで、草原の魔物たちにもものともしない手練で、それはなんて羨ましいことか。

周囲をあざむくためにうつけ者の演技をすることを選んだのは自分だけでも……狙い通り味方の油断を誘うことはできても真に信頼出来る人間を見出すことなく切り捨てた選択肢ともいえるから。いいや、ぼくにはポギーがいる。ひとりぼっちではないから、だからこそやっていられるのだけれど。

「それではこの後はどのようにすれば？」

「？」

「俺にはアバキ草の使い方は分かりません。ですから実行部隊はできませんが、シャルマナの正体を暴いても大人しく集落から去るとは限らないでしょう？ 荒事など何も無いことを願いますが、それはあまりにも樂觀しているとしか思えませんし。なにか作戦があるのなら従います」

「ありがたいお申し出ですが、どうしてそこまでしてくださるうと?」「ある方によりしく頼まりましたので」

「しかし」

頼まれた? 誰に? 考えられるとしたら父に? まさかそんなはずはない。

「まあいいじゃありませんか。使えるものは使っておくべきですし。そうだ、歳上には甘えるものです。それにここまで関わっておいてはいさようならというのも心にしこりが残りますので」

「もう! アーミアスさんのお優しい言葉に甘えるべきですよ! 人生に二度とあるかもしれない幸運なのですから!」

「せっかく手を差し伸べてくださったのですから早く感涙しながら取りなさい!」

「えっと、えっと、これまでもこんな旅だったから、気にしなくていいんだよって言いたい。そういうことだよねアーミアスさん」

「ええその通りです」

すごい勢いで押し切られてしまった。しかもポギーもなんだか彼らの味方についている気がする。

本人たちが乗り気でもこれはカルバドの問題だ。そしてシャルマナは少なくとも大手を振って悪を成したわけでもない。表向きは族長に気に入られた魔法使いの女。それだけでしかないのだから、それでも少しの罪悪感めいた気持ちが付き纏った。だけど、ウジウジするのは演技だけでいい。

「それでは、これからアバキ草を煎じてきますので、族長のテントの付近にいていただけますか。シャルマナは滅多なことではあの付近から離れませんから」

「分かりました」

彼らは頷いて集落の方へ向かう。そうと決まれば急いで用意しなくては。

……そういえば、「歳上には甘えるものです?」誰かから年齢を聞いたのか? それとも見てわかったのか、見た目より歳を重ねられているのか。確かに彼の仲間うちのふたりは見るからに大人だった

けれど、彼らは大袈裟なまでに丁寧ミアスさんに付き従っている。従者というにしても仰々しい。なにか故郷の立場があるのかもしれないなかったし、単純にふたりより歳上なのだから？ まさか、流石にそれはないと思うけれど。彼はどう見たって成長期に差し掛かった少年らしく見えた。

なにせよ、人は見かけによらないものだ、という言葉は心の中にしまい込んだ。

「あの、彼女の目的はなんだと思いますか？ 聞き込みでは前触れもなく現れてそのまま……とのことでしたが」

「さて、俺にはわかりません。例えばあの山の魔物の仲間だということなら恐ろしいことですが、どうやらあそこは特定の実行犯がいたような事件ではなさそうでしたから。今日まであの聖域があつたのがその証拠でしょう。どう考えても魔物にとって危険なものであるのに」

「ただ、群れをなして襲われた。不運にも狙われてしまった。増援はなかったか、間に合わなかったか。そういうことですか？」

「ええ、そして統率したのもせいぜいが魔物の群れのリーダーくらいのものだと推測しますが。その方が恐ろしいですね。明確な首謀者がいる方がよほど悲劇の再現性を減らせると思いませんか？」

……それもこれも彼女をうがった見方なら良いですね」

なるべく主語ナシで話しながらその時を待っていた。何もせず旅の者がたむろしているのは目立つし、四人並んで目に付いたものをスケッチなんてしてみながらよ。なんか……青春っぽくてたまんねえな！

いや、実際は何を書いたっていいわけだし、話し相手のガトウーザなんて話に夢中のあまり鉛筆をぐるぐる回して黒いモヤモヤした球みたいなものを生成しているくらいだが。真っ白な紙を眺めている四人衆にならなければよかったし、まあいいか。

俺も絵心ナシだし、なにか目に付いたものを描こうにも……本当は日々を懸命に生きるカルバドの集落の人間たちの姿を描いてみたいものだが許可なく勝手に描くのもどうかと思うし。ナムジン早く来ねえかなあ。

ペンのおもむくまま動かしていると、なんとなく名状しがたいふにやふにやの線たちがリツカたんの綺麗な目に見えてきた。まずい。リツカたんについて考えるのは俺にとって平常、この世の摂理というか当たり前のペロリズムだが物体で残すのは日記だけで留めたい。じゃねーとバレルリスクがあがつちまう！ 天使とかいう基本目に見えないプライバシー無視野郎に付き纏われ守護されてたとかリツカたん視点では恐怖しかないんだからせめて隠すべきだ。リツカたんの肖像画を人間の巨匠に大金積んで頼み込み、俺しか見えない空間に飾りたいしそれより本人をペロペロしていたい！

なんて考えていると本当にリツカたんを描きそうだ。あわててそこに存在しないヒツジのようなものを描き足して、グリグリと塗り込むと今度は真っ黒のヒツジになっちまう。天使の色彩感覚が怪しまれる前にやめた方がいいかもしんねえ。

グルグル毛玉を塗りつぶし続けるガトウーザ、複雑な魔法陣を熱心に書き込むメルティイ、一生懸命に近くに生えている小さな草花を写生する真面目なマティイカ。誰も景色を見ちやいねえ！

変な一行が怪しまれる前にナムジンたちが姿を現したのは幸運だった。